まんじ

No.111

2009.2.1

まんじ第百一一号　目次

良き師　良き友（三）　和田良信先生 …… 吉田忠雄 … 4
今川風雲録（三） …… 千坂精一 … 7
信じて託す（その五）―米山梅吉の一生― …… 三戸岡道夫 … 14
狩野川のトド（三） …… 堀内永代 … 24
AN ABSENCE OF HUMILITY …… 鍋屋次郎 … 29
我が愛誦歌（六）　―戦後の歌壇逍遥― …… 曽根竣作 … 38
短歌　三十首 …… 曽根竣作 … 44
短　歌　行雲流水（二十二）　近詠二十首 …… 石黒修身 … 48
俳句　羽子板　三十首 …… 勝山道子 … 51
俳　句　鷹の呟き（五） …… 大澤鷹雪 … 55
漢　詩　潮騒録（五十六）《漢詩の流れ45》 …… 鯨游海 … 58
東シナ海の竜王 …… 太田精一 … 62
青春彷徨（三） …… 伊治哲 … 71
狩谷棭斎讃歌（四） …… 新井宏 … 75
司馬雑感十八　近江路から熊野路へ（一） …… 山田嘉久 … 82
桐の花影―吉良側の忠臣蔵余話（二） …… 忠内正之 … 89
文化勲章に輝く赤堀四郎博士の一生（十二） …… 松下魏三 … 94
掌編小説五　体育入門 …… 亜木陽一 … 98
化粧のルーツを訪ねて（五） …… 鈴木守 … 100
還暦からの考古学（十五） …… 中山喬央 … 119
鏡（その7） …… 中山喬央 … 130
青の漂流（六） …… 宅見勝弘 … 137
れんししゅう（恋詩集）しさくのかなしみより　その五 … 松下壽男 … 145
ホメラレモセズ　クニモサレズ（二十） …… 松下壽男 … 146
編集後記 …… 編集子 … 150
表　紙 …… 田寺怜葦 …

良き師良き友（三）

和田良信先生

吉田忠雄

知人の和田良信先生を紹介した。和田先生は「一人ではもったいないから何人か連れてきたらやりましょう」と答えた。そして上述の生徒たちが法玄寺に通うようになった。

法玄寺本堂での授業は楽しいものであった。教養の塊のような和田先生の話は若い私たちには新鮮なものであった。先生は私たちを励まし続けてくださった。

先生のもとに集まったおかげで私たちの友情も保たれた。授業が終わった後、お寺の門のそばで輪になってデカンショ節を歌ったりした。先生の父君の老僧が遠くから黙ってみておられた。先生のお母さんと奥さんがにこにこしてみておられた。

先生の生い立ち

和田良信先生は、大正九年（一九二〇）足利市の浄土宗の名刹法玄寺に生まれた。近所の幼稚園、小学校を経て栃木県立足利中学校に進んだ。そして足利中学校（現足利高等学校）同窓会の初代相談役に任じられている。

白線と短剣

足利中学校卒業後、一年間城北高等補習学校を経て昭和十四年四月に第一高等学校（一高）文科甲類に入学した。一高時代は和田先生にとって記念すべき青春時代であった。一高二年の三学期には総代会議長を務め、いわゆる向陵名士のひとりであった。このときから昭和二十年の太平洋戦争終戦までの様子は先生の書かれた「白線と短剣」にくわしい。

和田先生は昭和一七年四月、東京大学法学部政治学科に入学したが、体調を崩し数カ月休学した。時に太平洋戦争の戦局が変わるときであった。

昭和一八年一二月には学徒動員により横須賀第二海兵団に入団した。昭和一九年一月には海軍経理学校に転じた。昭和一九年九月には松山海軍航空基地の六〇一海軍航空隊に配属になった。ここでの約一年間は終戦間際の時期である。和田先生は、多くの貴重な体験を書き残している。

私は、最近、奇しくも同時代を生きた私と同年生まれの友人千坂精一さんの手記「特攻基地の少年兵」を読んだ。背景は全く同じである。しかし経歴が異なる。どちらも真実である。同年の人が戦争のただ中にあり、生死の間にいたことを知って衝撃を受けた。和田先生は六〇一海軍航空隊であったが、千坂さんは七〇一航空隊であった。

戦後の苦労と活躍

和田先生は終戦後故郷に帰り、また東大に復学した。そして兄の良範さんがフィリッピンから復員してきた。和田一家は春に包まれた。しかし翌年昭和二十一年一月十九日に事態は暗転した。良範さんは、戦犯容疑者としてマニラ軍事法廷へ出頭を命じられたのである。よく一月二十日良範さんは自決した。

その年十一月和田先生はお兄さんの婚約者であった小林佐登さんと結婚式をあげた。昭和二十三年四月、和田先生は法玄寺第二十三世として普山式をあげた。普山式とは新任の住職が初めてその寺に入る儀式である。私たちが和田先生の塾生となったのはそのころではなかったかと思われる。

私たち塾生は当時の先生の悲しみを全く知らずに、法玄寺での塾生活を楽しんだ。先生の話を楽しみ、終わると時にはお寺の境内でデカンショ節を歌ったりして青春を謳歌した。その後は時々新年会を開いたり、お寺にお邪魔したりして旧交を温めた。岩下君とともに御嬢さんの結婚式に呼ばれたりした。

出会い

私は、旧制中学時代家は貧しかったが、学校では良き友に恵まれ楽しい時を過ごした。私は、一時進学を断念したこともあったが、結局進学を志した。紆余曲折があったが、進学したことによって今日がある。

同じクラスの真下君、田部井君、岩下君、稲村君、隣のクラスの村岡君などが親しい友人であった。受験勉強とソフトボールが共通の興味であった。このうちの村岡君から「法玄寺の和田先生が英語を教えてくれるそうだから一緒に行かないか」と誘われた。

のちに和田先生から聞いた話では、次の様な経緯があった。村岡信宏君のお父さんは当時市会議員をしていた。お父さんは同僚市会議員の采沢信光さんに息子の信宏君の英語の家庭教師を紹介するように頼んだ。采沢さんは

恩師の業績を世に残すことにした。

和田先生は私たちが学んだ英語塾を拡大して昭和三十年ころ明照高等補習学校を開校された。同じころ采沢信光さんの方では新しい計画が進んでいた。すなわち、元からあった実践女学校を拡大し、男子部を併設し、さらにはこれを独立させ、幼稚園を併設することである。和田先生は、明照高等補習学校を開設したばかりであり、忙しかったがこのプロジェクトに協力した。新しい幼稚園では園長も引き受けられた。

足利工業大学と足利短期大学

和田先生はそのご足利工業大学の設立にかかわり、采沢信光理事長を助けて、設立にこぎつけた。この間の様子は、和田良信「采澤信光先生　功業の軌跡」に詳しい。大学設立の許可申請、土地の買収、大学の設計、大学建設の業者、教員の整備、カリキュラムなど難問を次々にこなしていった。昭和四十二年には足利工業大学が発足した。昭和五十四年には足利短期大学が設立され、和田先生はある時期この学長も兼任された。

和田先生は、足利工業大学の設立準備委員会の局長、大学と法人の間を取り持つ学監、学長、学校法人の理事長を歴任された。

私は縁あって、足利短期大学と足利工業大学の学長を務めた。そして、平成二十年四月でその務めを終えた。

今川風雲録（二）

千坂精一

範氏の弟貞世（了俊）

将軍足利尊氏に「一人当千」と賞讃された二代範氏のあとは嫡男氏家が継いだのだが、この氏家は生来虚弱だったので、若くして子もないまま病死してしまった。

氏家に嫡子がいればなんのことはないのだが、こういう事態に立ち到ると後継者選定で揉めることになる。

嫡男相続のこの時代、二男以下は仏門に入れるか他家へ養子に出すなどして、相続争いを未然に防いできた。

その嫡男氏家が、継嗣なく病死してしまったのだ。

当主になれなかった先代範氏の弟貞世と仲秋、それに氏家の弟泰範にとって思いもよらぬ好機が到来した。

後継候補者が複数いる場合は、家臣たちがそれぞれの思惑で支援する候補者の許に馳せ参じて担ぎ上げ、互いに競い合って御家騒動にまで発展することがよくある。

だがこのときは、先々代の範國が七十一歳ながらまだ矍鑠としていたし、貞世も仲秋も泰範も駿河を離れていたので家臣団の分裂は起こらず、範國の意志にしたがって建長寺の喝食だった泰範が還俗してあとを継いだ。

貞世と仲秋は京にいて、幕府に出仕していたのだ。

その貞世は、翌貞治五年・正平二十一年（一三六六）十二月に将軍義詮に召し出されると、引付頭人や侍所頭人の要職に就いたり、ある時期には山城守護をも兼ねたりして、八面六臂の大活躍で義詮に忠誠を尽くした。

翌年四月二十六日鎌倉公方足利基氏が二十八歳で病歿したので、義詮は九歳の金王丸（氏満）に継承させた。

病弱だった義詮は弟基氏を喪って気落ちしたのか、その年十一月に十歳の嫡子義滿に政務を譲ると、讃岐国（香川県）の細川頼之に管領を命じて義滿を補佐させた。

前任の斯波義將までは執事役にすぎなかったが、細川

探題館は筑前国（福岡県）博多（福岡市）であった。

九州の豪族たち

九州には肥後国（熊本県）に菊池氏、筑前国（福岡県）に少弐氏、豊後国（大分県）に大友氏、薩摩・大隅国（鹿児島県）に島津氏などが蟠踞していた。

菊池氏は、藤原北家眞楯・冬嗣系の隆家を祖とする。隆家は、氏長者の叔父道長と対立して大宰権帥に左遷され、九州に下向した。

権帥は権に任ずる官であるから正規の役職ではない。菅原道眞がそうであったように、失脚して大宰権帥に左遷されれば、あとは世捨人でおわることになるのだ。

だが、隆家は四十一歳のとき面目を施したのである。寛仁三年（一〇一九）四月七日、中国黒龍江省方面に住む女眞族刀伊が五十数隻の船団で對馬・壱岐に来襲し、壱岐守藤原理忠を殺害して島民多数を掠奪すると、さらに鉾先を九州に向けて迫ってきた。

このとき、貴族出身でありながら勇武の人として知られていた隆家は、軍勢を率いて応戦し、上陸させずに海岸線で撃退したので、一躍武名は京にまで鳴り響いた。

その隆家の孫則隆が、肥後国菊池（熊本県菊池市）に本拠をおいて地名を名告ったのがはじまりである。

当代は則隆から十六代目の武光で、南朝に与していた。

頼之には幕府諸機関を統轄する権限を与えたのである。

この義詮の引退で貞世も退任し、十二月七日に義詮が三十八歳で世を去ると、貞世は出家して了俊と号した。

一年後の應安元年・正平二十三年（一三六八）十二月三十日、義滿は征夷大将軍に任ぜられ三代将軍になった。細川頼之は管領に就任すると、同族斯波高經派の勢力を削減して斯波政策を修正し、治績の向上につとめた。

頼之は、四歳年長の了俊を出色の人物と認めてくれていて、應安四年・建徳二年（一三七一）九州探題に推挙してくれた。同族の澁川義行を罷免しての交代であった。

当時の九州は阿蘇惟時、菊池武光の両強豪に支えられた征西大将軍懐良親王が太宰府にあって南朝方の全盛時代であった。

了俊以前の九州探題一色道猷（範氏）・直氏父子、斯波氏經、澁川義行はいずれも南朝方征西府に圧されず、派遣は悉く失敗していて、幕府は面目を失墜していた。

頼之は、了俊の実力を高く評価していたので、派閥人事だけでなくその成果を密かに期待していたのだった。

剃髪出家した隠遁者にもはや出仕はないものと思い込んでいた了俊にとっては、まさに青天の霹靂であった。

了俊は、ふたたび取り立ててくれた頼之に感謝した。

準備万端整えた了俊は、四十七歳の老骨に鞭打って二月十九日に勇躍京を進発し、九州目指して西下した。

長門からは船で海峡を渡り、新天地の土を踏んだ。

少弐氏は、大友、龍造寺氏とおなじ藤原北家魚名・秀郷系で、鎌倉幕府の御家人鎮西奉行武藤資頼が太宰府の少弐に就任して世襲になったので、官名を名告りにした。

資頼の孫景資は蒙古軍が襲来した文永・弘安の役に大将軍として九州の守護・御家人を指揮し陣頭に立って勇名を馳せたが、弘安八年（一二八五）北條執権と有力御家人のあいだで起こった霜月騒動の余波が全国に拡がり、景資は家督争いで兄經資の軍勢に攻められ自害した。

当代は資頼から八代目の冬資で、北朝に与していた。

少弐氏と同族の大友氏は、六代貞宗が足利尊氏に応じて小弐貞經らと糾合して鎌倉幕府鎮西探題北條英時を斃し、豊後守護に任ぜられた。当代はその子氏時である。

九州六箇国の守護職になり、形式的ではあっても九州探題職をも得て戦国の世に最盛期を築き上げた史上名高い宗麟（義鎮）は、この系の二十一代に当たる。

島津氏は、源頼朝と比企能員の妹丹後局のあいだに生まれた忠久が始祖で、文治二年（一一八六）薩摩・大隅・日向三国にわたる攝関家の日本一といわれる大荘園島津荘の惣地頭職を与えられ、さらに建久八年（一一九七）にその三国の守護職にも任ぜられたが、建仁三年（一二〇三）九月二日に起こった〈比企の乱〉に連坐したとの廉でいちどはその所領と所職を失ったが、まもなく薩摩守護職と島津荘のうち薩摩方惣地頭職に返り咲いた。

当代は忠久から六代目の氏久で大隅守護、その甥の伊久が薩摩守護になっていて、ともに北朝に与していた。

これらの有力豪族たちがたがいに鎬を削り合っているのだが、なかでも抽んでているのが肥後国の菊池氏で、九州一と謳われていた。

剃髪して寂阿と号した十三代武時が、鎌倉幕府滅亡の年元弘三年（一三三三）三月十三日に挙兵して、最後の十六代執権守時の弟鎮西探題北條英時を博多に攻めたが反撃されて敗死したので一時衰態したが、父の挙兵に従っていた嫡子武重がその後勢威を盛り返して南朝方の中心となり、肥後・筑後両国を股に掛けて活躍した。

弟武敏は建武三年・延元元年（一三三六）二月二十九日に太宰府を攻撃のあと、この日筑前国葦屋津（福岡県遠賀郡芦屋町）へ上陸した足利尊氏軍に多々良浜（福岡市）で敗れはしたが、各地に転戦して兄武重に協力した。

くだって貞治六年・正平二十二年（一三六七）七月、武敏の弟十六代武光は少弐冬資が豊前国の抑えにしていた香春岳城（福岡県田川郡香春町採銅所）を攻略した。

了俊が九州探題に着任する四年まえのことである。

室町幕府九州探題

了俊が博多に到着したときは、南朝の征西大将軍伊倉宮懐良親王が太宰府に本営をおいてからすでに十年経っ

ていて、征西府の全盛時代であった。

了俊が着任した年の八月六日に、菊池武光が懐良親王を奉じて大友氏時の高崎城（大分市）を攻囲した。

日本ザルの生息地として知られているその高崎山の攻防戦は、一進一退を繰り返して長期戦になっていた。

了俊は、南朝方の強豪肥後菊池軍団の戦力と武光の采配を観察する好機到来と、十二月に勇躍大友勢救援の軍勢を率いて豊前国門司城（北九州市門司区）に入り、赤坂（同市小倉北区）まで兵をすすめた。

探題軍迫るの報に、菊池武光は五箇月間囲んだ城攻めを打ち切って、翌年正月早々に筑前国太宰府に退いた。

了俊は、南朝方の撲滅は菊池軍団を標的にするのが効果的と考えて、菊池一族を根絶やす策略をめぐらした。

満を持していた了俊は、八月十二日に大軍で太宰府攻めを仕掛けたが、菊池武光はあっさり陣払いすると懐良親王を奉じて筑前国へ退き、神籠石発見遺跡で名高い高良山（久留米市御井町）に立て籠もったので、了俊も黒木城（福岡県八女郡黒木町）まですすんで対峙した。

太宰府を陥とした了俊は九州経略の足掛かりを摑んだ。

その陣中に、細川頼之管領辞任の噂が飛び込んできた。（細川様が替われば、九州探題を罷免されるであろう）

了俊は密かに黒木城を出て博多の探題館に戻った。

その後に届いた詳報は、幕政を左右する豪腕の管領を心好く思わぬ守護大名たちとの反目に嫌気がさした頼之が、職を辞して所領の讃岐国へ帰ろうとしたが、将軍義満に諭されて思い留まったのだ、ということであった。

その報告を聴いて、了俊は愁眉をひらいた。

だが、これで安泰が保証されたわけではなかった。

派閥人事は、領袖が失脚すれば翼下の者も罷免される。

その不安定な立場から脱却するには、誰もが認める実績を重ねて否やを言わせぬ実力者になるほかはない。

了俊は、一日も早く九州全域を席捲して探題の地位を不動のものにしよう、とひそかに臍を固めた。

了俊の奮闘

翌慶安六年・文中二年（一三七三）二月、菊池武光の嫡子武政が従兄の武安らを動員して少貳冬資の居城勢福寺城（佐賀県神埼市神埼町城原）を攻めてきた。

了俊は、ただちに軍勢を催して肥前国（佐賀県）に入り、武政を支持する筑後・肥後両国の南朝軍と対決した。

このとき、肥前国の南朝方松浦是興の一族が一揆を起こして幕府方に寝返ったので南朝軍は総崩れになり、最強の菊池軍団も筑後川で大敗を喫して肥後国へ後退した。

この年十一月十六日、菊池武光が隈府城（菊池市隈府町）で歿した。

菊池氏は、もともと菊之池城（菊池市深川）が本拠地だったのだが、六年まえに武政が城山に隈府城を築いてそこに拠点を移していたのである。

翌年五月二十六日にその武政が三十五歳で歿すると、南朝方諸将はほとんど了俊に靡いたので、征西大将軍懐良親王を奉じて高良山に滞陣していた武政の嫡子武朝は、親王と一族ともども軍団を撤収して菊池へ退いた。

このことによって、了俊は北九州全域を制圧した。

島津氏久、了俊に叛く

北九州地区を席捲した了俊は、間髪を容れず菊池武政歿後の頭領武朝の本拠隈府城を攻略すべく陣触れした。

だが、諸将参陣のなかに少貳冬資のすがたがなかった。

先祖は鎌倉幕府の御家人で鎮西奉行をつとめ、大宰府の次官の家格を誇る冬資は、室町幕府の九州探題を支援こそすれ、配下におかれることを潔しとしなかった。

そんな冬資の自尊心が、参陣を躊躇させたのである。

この冬資の態度を、了俊は南朝方への寝返りととった。

裏切りの芽は素早く摘みとらなければ大事にいたる。

八月二十六日、了俊は冬資を肥後国水島（八代市）に誘き出すとその場で殺害した。享年三十九歳であった。

この了俊の所行に大隅守護島津氏久が激怒した。

氏久は、頼朝の庶子忠久六世の孫であるから、鎌倉御家人の末裔である少貳氏は遠祖源氏の家来筋にあたる。

氏久は、了俊の少貳冬資殺害を黙視できなかった。

氏久は、了俊に反抗して菊池武朝の南朝方に寝返った。

了俊からの報告を受けた幕府は、すぐさま氏久の大隅守護、甥伊久の薩摩守護を罷免して了俊に兼任させると、豊前守護の大内義弘に了俊を支援するよう命じた。

大内氏は朝鮮百濟二十五代聖明王（聖王明穠）の第三子琳聖が製鉄技術をもって渡来したのにはじまる。

周防国多々良浜（防府市）に上陸し、吉敷郡大内縣（山口市）に土着したことから大内を姓にしたようだ。

その後、瀬戸内海の海上権を掌握して繁栄したので、将軍義詮から周防・長門・石見国の守護職を与えられた。

さらに、義弘の代になって豊前国守護職をも獲得した。

翌年、了俊の弟仲秋は大内義弘軍とともに肥後国に攻め入り、臼間野、大水関で菊池武朝軍と激突大勝した。

このことで島津氏久・伊久が降ったので、肥後、薩摩、大隅、日向の国人たちは一揆して了俊と約定を交した。

これによって了俊の九州平定は菊池一族だけになった。

朝鮮高麗国王との折衝

このころ了俊の許に高麗国王の使者が書状を持参し

た。

朝鮮半島にあった高句麗・百済、任那の三国は中国の唐と結んだ新羅に征服され、さらに新羅は唐の勢力を半島から駆逐して全土を統一したが、五十六代九三五年つづいたところで高麗を建国した王建に滅ぼされた。

書状は二十二代辛禑王からの倭寇禁止の要請であった。

〈倭〉は日本国・日本人を指す中国、朝鮮側の呼称であり、〈寇〉は外敵であるから、日本人の海賊をいう。

その倭寇の掠奪を止めさせろという申し入れであった。

倭寇は観応元年・正平五年（一三五〇）にはじまる。

遣唐使船と日宋貿易の発展で緊密になった大陸との経済、文化の交流が、元寇によって中断されてしまった。

だが、海洋で結ばれた太い絆を政治圧力で分断しようとしてもそうはいかず、結果略奪行為が生まれた。

倭寇のなかには中国人やポルトガル人もいたという。

日本人の実態は、国人領主、土豪、地侍、それに農漁民や商人もいて、多彩な階層だったそうである。

地域は『三島の倭寇』といわれ、対馬、壱岐、肥前松浦中心の北九州沿岸と、紀伊、熊野、能島、来島、因島、忽那島など瀬戸内海の海賊衆も参加していたという。

了俊が赴任したこのころが倭寇活動の頂点であった。

倭寇は集団で襲いかかって米・豆などの穀物を略取し、住民を捕虜にして連れ帰っては農作業の使役にした。

なかには甲冑をつけ、馬に乗り、歩卒を従えた軍団さながらの大船団海賊衆もいて、海上で租米を輸送する官船を襲い、さらに上陸して首都開城付近まで侵攻して官庫を焼き打ちにし、沿岸地方の農民を捕えて連れ帰った。

高麗は捕虜送還の代償として、銭貨や綿布を支払った。

対馬の宗氏、壱岐・松浦地方の諸豪族たちは送還捕虜一人につき綿布十疋の支給を受けたというし、大内氏は朝鮮との貿易拡大を意図していたようであった。

辛禑王は、はじめ使節を京に派遣したのだが、朝廷に無礼だと無視され、幕府には九州にまで勢威は及ばぬと躱されてしまったので、直接了俊に訴えてきたのだった。

了俊が辛禑王の要請に応じて僧信弘を交渉の使者に派遣すると、翌年鄭夢周が回答を持ってやってきた。

こうして、九州探題と高麗王との折衝がはじまった。

管領細川頼之排斥される

了俊が九州平定に躍起になっているあいだに、幕府内では細川派と斯波派の対立が徐々に表面化していった。

細川派は富樫、一色、六角、京極、今川、土岐、赤松の諸氏。斯波派は山名、大内、澁川、上杉の諸氏である。

細川頼之が管領に就任した当初から、失脚した前執事斯波義将を支持して頼之の政策に反対する者が多かった。

そのため頼之はまえに述べたようにたびたび隠退しようとしたのだが、そのつど将軍義満に慰留されていた。

頼之は九州探題澁川義行を罷免して了俊を交替させたのをはじめ、斯波派を削減して義将時代の政策を修正し治績をあげていったが、それがかえって将軍の権力を私するものと誤解され、諸将の反発をかってしまったのだ。

康暦元年・天授五年（一三七九）正月、大和興福寺から配下の諸氏が武装蜂起したとの急報が届いた。

管領細川頼之はただちに斯波、吉見、富樫、赤松、京極、六角、土岐氏らの近隣守護たちを鎮圧に向かわせた。

ところが、そのなかから京極、六角、土岐氏らが斯波氏側に寝返り、二月に戦列を離れて帰国してしまった。

怒った将軍義満は、首謀者土岐頼康の討伐と斯波義将の召還を命じたが、逆に義将らに花の御所を取り巻かれて頼之討伐を強迫され、罷免せざるを得なくなった。

細川頼之は出家すると、領国讃岐へ帰り隠棲した。

派閥抗争に敗れた頼之だが、守護十二年の治政は義満を盛り立てて幕府の権威を高めた。その功績は大きい。

（つづく）

信じて託す（その五）

―米山梅吉の一生―

三戸岡道夫

第七章　三井銀行へ入る

梅吉は第二の就職先を探すために、藤田四郎のところを訪れて相談した。藤田四郎は、梅吉がアメリカへ留学する前に東京芝の土居光華塾で学んでいた時の学友であり、また梅吉が「提督ハリス」を出版したとき、その序文を書いてくれた間柄であった。

藤田四郎は梅吉より七歳の年上であったが、東京大学法学部を卒業した後、オーストリアやドイツ各国の公使館の勤務を終えて、このときは農商務省の農政局長の地位についていた。

梅吉にとってラッキーだったことは、この藤田四郎が、当時政界において飛ぶ鳥も落す勢いにあった井上馨侯の女婿になっていたことであった。井上馨は言うまでもなく、政界の伊藤博文、陸軍の山形有朋と並んで、長州閥の三傑と称せられた実力者であった。そして西郷隆盛から、

（井上どんは三井の番頭はんだ）

と揶揄されたと伝えられるように、維新以来、新政府の台所を切り盛りする上で三井家の財力を活用する立場から、三井関連会社の経営に絶大な発言力を持っていた。

この井上馨が愛婿の藤田四郎に頼まれて、梅吉を三井物産社長の益田孝と、三井銀行の中上川彦次郎に紹介してくれたのであるから、まさに鬼に金棒であった。

益田孝も中上川彦次郎も、井上馨の計らいで三井へ入ったのであるから、梅吉にとってこれ以上の紹介者はないといってよかった。

こうして梅吉は井上馨の紹介状を持って、益田孝と中上川彦次郎の前に現われた。そして三井銀行へ入ったのである。時に明治三十年（一八九七）十月二十三日、梅吉が三十歳のときであった。

こうして梅吉は人生にとって一番大きなチャンスを掴んだのである。日本鉄道会社に勤めたのは一年数ヶ月の短期間であったが、井上馨という巨大な紹介によって三井銀行へ入ったことによって、梅吉の人生は軌道に乗ったのである。

梅吉が、今度は三井銀行で落着いて仕事をしようと決心したのは、

（人の世を渡っていくには、一定の職業を持って、精神をその仕事に集中することが大切である。一兎を追っては、一兎も得ることはできない。名誉心などはすてて、忠実に銀行の仕事をやってみよう）

と考えたからだった。三井銀行の初任給は少ない方であったが、しかし賞与金などもあるのであるから、

（原稿を書いて稼ぐなどということはこれからは止め、一生県命に銀行の仕事に取組んでみよう。これまでに銀行に関する本は少しは読んだこともあるので、これからは理論と実践の両面から大いに銀行というものを研究して、専門家になってみよう）

と決心したのである。

こうして梅吉は普通の人よりも少しおそい三十歳という年令で、銀行員としてスタートしたのである。

しかしこれまでの梅吉はアメリカに八年も留学して、天下国家を論じ、その上文筆で世に出る希望を持っていたから、ビジネス関係の勉強は少しもしていなかった。だから当初梅吉は計数に弱く、簿記がわからなかった。貸借対照表の左右両側が同じ金額でなくてはならないということが、理解できないという素人であった。ソロバンは加減しか出来ないので、乗除になると鉛筆で筆算をしたりするので、

（これでよく銀行が勤まるな）

と、梅吉自身が感心するくらいであった。

しかし梅吉には才能があるし、バイタリティもあったので、そんな事務的な仕事はたちまちマスターしてしまった。

加えて梅吉には八年間のアメリカ留学の経験があったので、海外の知識や、広い識見、それにすぐれた文章力があり、そうしたものが、事務のあい間から見え隠れするのだった。それを上司が見逃すはずがなく、

（やはり井上侯が紹介した人物だけのことはある）

と梅吉は頭角を現していくのだった。

梅吉は三井銀行でスピード出世をするのであるが、それは井上馨の紹介だと特別扱いされたということもあったであろうが、基本的には梅吉の能力が高かったからである。

さて、梅吉が盛んに気にしていた給料のことであるが、梅吉の初任給は月給四十円であった。

アメリカ帰りの和洋折衷の生活スタイルを取っていた

梅吉の新婚家庭にとって、この金額は豊かとまではいかなくても、まあまあの水準であった。

この時の三井銀行の俸給体系は、中上川彦次郎が三井銀行大改革のためにやってきた時に作ったもので、左記のようになっていた。

一等席	三百五十円以上
二等席	二百五十円以上
三等席	百八十円以上
四等席	百三十円以上
五等席	九十円以上
六等席	六十円以上
七等席	四十円以上
八等席	二十円以上
九等席	十五円以上
十等席	十円以上

と十階級に分れていた。梅吉は七等席からスタートしたわけである。

最下級の十等席は小学校卒業の者、九等席は中学校・商業学校卒業の者、八等席は専門学校・大学卒業の者の初任給である。

この表はおそらく日本における「サラリーマン給与表」の嚆矢といえるのではないかと思われる。

これを作った中上川彦次郎の考えは、これまでの、（月給は安くして、手当、弁当代、宅料、見舞金の名前で、三井家から恩恵的に支給していたやり方）を止め、その代わりに、（成績本位の昇格、昇進を行う）ことにあったのである。

そのような中にあって、梅吉の入社は大物紹介によるものという点も手伝って、スピード出世であった。そのため入社して九ヵ月後には神戸支店の次席へと昇格し、月給も五十五円となった。

また入社して五年目の明治三十五年には大阪支店の次長となり、月給は百五十円となった。すなわち入社して五年半で七等席から四等席になり、初任給のやく四倍になるのであった。

さて、三井銀行は明治九年（一八七六）七月一日に、日本で最初の私立銀行として、他にさきがけて設立された銀行である。

もちろんそれには前身となる母体があった。それは三井高利が天和三年（一六八三）に開いた「三井両替店」である。三井両替店は当初は「越後屋」（現在の三越）の補助機関として設立されたものであるが、それが飛躍的に発展して、三井の家業である呉服業と肩を並べるまでになった。それは三井両替店が元禄四年（一六九一）に幕府の大阪御金蔵銀御為替御用をつとめるようになったからであった。

明治維新になると新政府は財政機関として、大蔵省の前身となる金穀出納所を設置したが、その御用を、三井、小野、島田の三家に命じた。そして慶応四年（明治元年）（一八六八）の正月、三井は出納所為替御用達となり、同年二月には金穀出納所の改称にともなって会計事務局御為替方に任命された。これと同時に、御為替方三井組を称するようになった。

要するに三井は、江戸幕府から明治政府への政権交代に当って、実質的に大蔵省と、現在の日本銀行に相当する中央銀行の役割の、大部分を引き受けていたわけである。

明治五年になると、「第一国立銀行」が設立された。三井と小野組もともに出資し、発起人となった。しかし明治七年になると、はやくも小野組が公金運用の失敗から倒産して脱落したので、経営の実権は第一国立銀行の頭取である渋沢栄一に握られた。そのため大蔵省の官金取扱いも、第一国立銀行に移行されてしまった。

このような状況の変化の中から、三井も独自の銀行を設立することが必要になり、明治九年に私立銀行として三井銀行が誕生したのである。

三井銀行は設立後、幾多の困難を乗り越え、幾多の問題を解決しながら発展していったが、明治二十三年の不況時と金融不安を背景に、三井銀行も大改革をする必要に迫られ、井上馨が三井銀行へ中上川彦次郎を送りこんだのである。

中上川彦次郎は安政元年（一八五四）生れであるから、梅吉より十四歳の年上である。

豊前国（大分県）中津藩の藩士の子であるが、母親が福沢諭吉の姉に当るため、若い頃から福沢諭吉に非常にかわいがられた。すなわち福沢諭吉の甥にあたるわけである。

そのため慶応義塾に学んだ後、明治七年、二十歳のとき、福沢諭吉に費用を出してもらって、三年間のロンドン留学を行った。この時、たまたま海外財政経済調査を目的にヨーロッパを視察していた井上馨の知遇を得たのである。

そのため中上川彦次郎は日本へ帰ると、さっそく外務卿である井上馨の下で、秘書や、公信局長を務めた。

が更に、福沢諭吉が始めた「時事新報」の社長となり、さらに山陽鉄道会社（神戸と下関の間）の社長をも務めたが、三井銀行の大改革に当り、井上馨に請われて三井銀行へ入ったのである。

中上川彦次郎は三井銀行へ入ると、井上馨と福沢諭吉という超大物をバックアップに、果敢な大改革を行った。

梅吉が三井銀行へ入ったその頃は、日清戦争の後で、日本は小国ながら気を吐き、形だけでも金本位制を採用し、知識階級の支配層が、先進文明国に追いつこうと努力している時であった。

その当時の三井銀行の組織は合名会社で、総長である三井高保（後に社長）の下に、中上川彦次郎（後に専務理事）が快腕を振い、資本金は二百万円が五百万円に増資された段階であった。そして分店、出張所などの小さい店を整理閉鎖し、内部機構を確立していった。

三井銀行が近代的な商業銀行に脱皮するためには、新しい教育を受けた新進の人材を登用して経営体制を整え、営業態勢を変えていかなければと思い、中上川彦次郎は積極的に人材を外部から採用した。それに応じた人々は新聞記者上りや、慶応義塾出身の気鋭の士が多く、梅吉が採用されたのも、ちょうどそのような時だったのである。

その主な人々を採用の年代順に記すと、左のように錚々たる人物であった。

明治二十五年　藤山雷太（三十歳）（長崎県県会議員）（後に、芝浦製作所や王子製紙に関与、大日本製糖を再建、東商会頭）

明治二十六年　小林一三（二十歳）（後に阪急電鉄・宝塚グループの創設者、商工大臣）

明治二十六年　武藤山治（二十七歳）（ジャパン・ガゼット社翻訳記者）（後に鐘淵紡績社長、衆議院議員）

明治二十六年　和田豊治（三十二歳）（日本郵船、後藤象二郎逓信大臣秘書）（後に鐘淵紡績を経て、富士紡績社長）

明治二十七年　藤原銀次郎（二十五歳）（松江日報記者）（後に王子製紙社長、商工大臣）

明治二十七年　鈴木梅四郎（三十二歳）（時事新報記者）（後に王子製紙専務、衆議院議員）

明治二十八年　池田成彬（二十九歳）（時事新報記者）（後に三井グループの総帥、日銀総裁、大蔵兼商工大臣）

明治二十九年　日比翁助（三十五歳）（三越百貨店を創立、近代的デパートの創始者）

明治三十年　米山梅吉（三十歳）（日本鉄道会社）（後に三井信託銀行を創立、日本ロータリークラブの創始者）

このようなメンバーが入社した最後の時期に梅吉が入社したわけであった。三井銀行に入るまでの前歴に新聞記者であった人が多いのが注目される。

梅吉が、入社したのは学友の藤田四郎を通じた井上馨の紹介によるものであったが、しかしこのような状態をみると、梅吉が入社出来たのはたんに井上馨の紹介だけではなく、梅吉が、三井銀行の大改革に必要なる人物であると、その力量を見込まれたからでもあったのである。事実、三井銀行に入ってからの梅吉の活躍は、右の一連の人々の活躍と相まって、着々と実現するのであった。

なおこれらの人々を学歴の点から眺めると、全部が慶

応義塾を出ており、そうでないのは梅吉だけであった。中上川彦次郎は慶応義塾出身であり、また時事新報の社長をやっていたので、その人脈の中からスカウトしたことがわかる。

梅吉は中上川彦次郎によってスカウトされたわけではなかったが、井上馨から紹介されたとき、中上川は、

（これはわたしが求めていた人物だ）

と梅吉の素質を見抜き、梅吉の入社を直ちに認めたのであろう。すなわち梅吉は、中上川によってスカウトされたわけではなかったが、スカウトと同じ人材の中に入り、その活動が始まったのである。

梅吉は後年、このような人たちの活躍ぶりを、次のように回想して語っている。

銀行内には洋装の人と、和服着流しの人とが相半していた。すなわちその経歴において教養において新旧両派が雑然と混ざっていて、営業の方法にも執務の順序にも、いまだ時代に順応すべき一定の標準がなかった。しかも支店長主任者は多くは将来有為の士の書生肌のままに、登庸重要の地位に置かれたるなり。

三井銀行の名物なりし支店長会議は、当時、実に演説討論会場の観あり。これを傍聴せる著者（米山梅吉）の如きをして、その無経験をもってしても必ずしもこれに参加し得ざるべきに非ずを想わしめたり。

このように梅吉は当時を回想し

（このような連中と一緒なら、銀行について無経験な自分でも、十分やっていけそうだと思った）

と語っている。

第八章　欧米視察

（一）

梅吉が入社した頃の三井銀行の資本金は三百万円で、預金高もまだ二、三千万円程度であった。駿河町にあった有名な半洋風の古い本店の建物は、新築のため取りこわされていたので、本店は新右衛門町にある小さな仮営業所を使っていた。

三井銀行に入社して梅吉が最初に配属されたのは、その仮営業所である本店の、貸付係だった。

一般にその頃の銀行は内部に取引窓があり、椅子、テーブル式にはなっていたが、建物は和風であった。銀行員の服装も、本店では洋服の革新派もいたが、地方では和服に角帯が普通であり、支店長や次席などの主要ポストの者が洋服を着ている程度であった。したがってアメリカ帰りの梅吉から見ると日本はまだ古く、一般行員の眼から見ると、梅吉は大変なハイカラな知識人と映ったにちがいなかった。

梅吉が配属されたのは貸付係であったので、札勘定やソロバンができなくてもなんとか事務をこなすことが出来た。しかしペンで日本文字を横書きするのは難しかったし、また利息計算などは、ソロバンでは出来ないので、鉛筆で紙に計算する方法ですませた。

その頃は貸付の金額も、一件が一万円を越えるものは少なく、小切手や手形の流通はまだ少なく、銀行の資力も小さかったので、手形は日本銀行に再割引を求めるのが普通であった。

すると三ヵ月ばかりたった頃、本店営業部長が支店検査のために、大阪支店と神戸支店へ出張することになった。そして梅吉はそのお供を命じられた。

大阪は当時、日本のマンチェスターと言われていた。また、神戸は横浜と覇を争っていた。梅吉はアメリカの大学を卒業して、英文、日本文、ともに達者である。また、弁舌もきわめてさわやかである。大阪と神戸の出張の従者に、梅吉が選ばれるのは当然だったといえよう。

大阪と神戸への出張から帰って、数ヵ月たった頃であった。神戸支店に兵庫庫倉事件という厄介な事件が起きて、人間を入れ変えなくてはならない人事異動が起きた。神戸支店から出す人間の代りに、誰か優秀な人間を本店から送らなくてはならない。その人選をしていた営業部長の目に梅吉がとまり、

（あの米山梅吉しかいないな）

と梅吉の上に白羽の矢が立ったのである。

こうして梅吉は明治三十一年七月に、神戸支店の次席となって転勤し、にわかに忙しくなった。本店の貸付係の勤務はわずか九ヵ月であった。それが神戸支店の次席へ昇格したのである。昇格したために、月給も四十円から五十五円に上った。異例のスピード出世といわねばならない。

すると更に幸運が追っかけてきた。

神戸支店に赴任してまだ一ヵ月ちょっとしかたっていない明治三十一年九月に、本店の秘書課長から、

（欧米銀行の業務調査のため、近く出張を命ぜられるが、差支えはないか）

という問い合わせがきたのである。その海外出張も、十四ヵ月という長期出張だったので、念のために事前の打診があったのである。この命令には営業部長の推薦だけでなく、中上川彦次郎や井上馨の影がその上に落していることも見逃せなかった。本店貸付係での九ヵ月の勤務は、エリートコースを走る梅吉の業務研修期間であったわけである。

そもそも中上川彦次郎が梅吉を採用したのは、井上馨の口ききもさることながら、三井銀行改革の一つの柱である銀行業務の近代化のために、若い人材を集めていた、その中の一人だったのでもある。だから基礎研修が終われば、梅吉の豊かなアメリカ留学の経験を生かして、一日もはやくその方面で働いてほしかったわけである。

だが、この幸運と同時に、もう一つの幸運が梅吉のところに舞いこんできたのだった。

それは梅吉にとって恩師と仰いでいる勝海舟から、ある手紙が届いたのである。その手紙の内容は、

（新内務大臣の芳川顕正がそなたを秘書官に採用するからすぐ上京せよ）

というものであった。それは松隈内閣が組織されたときで、その内閣には榎本武揚がふたたび農商務大臣の椅子を占めているから、その線かもしれなかった。

三十歳を越したばかりの青年に大臣秘書官とは、破格の出世である。かつては政界を夢見てアメリカでは政治学を勉強し、帰国してからは新聞記者として天下国家を論じようとした梅吉である。ましてや尊敬する勝海舟の口ききである。これを断わる手はないだろう。先輩や友人たちも、

（米山、お前、ついにやったね）

と、両手をあげて祝福してくれるであろう。勝先生の口ききであるから、一度任官しておけば、内閣が代っても、また後から機会があるだろう。昔夢見た青雲の志がむらむらとふたたび梅吉の中で頭をもたげ始めたのであった。

しかし梅吉は三井銀行に入って、一年たったばかりである。それも井上馨というすばらしい手蔓で入り、エリートコースを走り始めている。これを止めることはできない。梅吉は、

（欧米銀行業務調査にすべきか、大臣秘書官を選ぶべきか）

と大いに迷った。

しかし考えてみると、三井銀行へ入ることによってやっと生活も安定し、仕事ぶりも認められて欧米視察を命ぜられ、感謝せざるをえない。だから一年足らずの勤務で三井銀行を辞めてしまっては、井上馨へ紹介の労を取ってくれた旧友の藤田四郎へも申し訳が立たない。

それに梅吉は、日本鉄道会社の勤務も一年半ほどで辞めてしまっているから、またせっかくの三井銀行も一年足らずで辞めてしまっては、腰の軽い男、忍耐のない男と世間から見られてしまい、自分の将来にとって得策ではない。

あれこれ考えた末に、ついに梅吉は勝海舟からの大臣秘書官の話は断わり、欧米銀行業務調査に行くことにしたのである。梅吉が三十一歳のときであった。

（二）

この時、いっしょに欧米出張命令を受けたのは、池田成彬と丹幸馬であった。

池田成彬はこの時三十歳と梅吉より一歳年下であったが、慶応義塾の出身で、卒業後アメリカに渡り、ハーバード大学を卒業した。そして梅吉より一年はやく、すなわち明治二十八年十二月に三井銀行に入っていた。例の中上川彦次郎が改革人材集めとして採用していたメンバーの中の一人で、この時池田成彬は足利支店の支配人をしていた。

この欧米視察によってはじめて池田成彬と梅吉の間は、同僚としての友人関係が結ばれたのである。後日、二人は並んで常務取締役に昇進し、協力して三井銀行の経営を担っていくのであった。なお池田成彬はさらにその後日銀総裁や、第一次近衛内閣の大蔵兼商工大臣をも務めるのであったが、梅吉とは生涯の友であり、またよきライバルであった。理性的で寡黙で実践派の池田成彬と、情熱的で雄弁で文筆家の米山梅吉とは、性格的に異なっていたので、互いに長短相補い、助け合って、うまくいったのである。その人世行路の最初の出会いがこの視察旅行だったのである。

丹幸馬はこの海外出張の後、まもなく病気のため死亡したので、梅吉との交友は長くは続かなかった。

なお三井銀行から梅吉たち三人が出張する一年前に、日本銀行では井上準之助と土方久徴の二人がイギリス、ベルギーへ銀行業務勉強のため、二年間の留学に出発していた。そのような情勢もあって三井銀行でも三人の秀才を欧米に派遣することになったのである。

この出張について米山梅吉は、昭和二年に出版した「銀行行余禄」の中で、次のように述べている。

当時、わが国の銀行業務の様式は尚国立銀行創始の制度に則れるままにして、世運の進歩変遷に従い銀行の内外大に改良を要すべきものあるを首肯せしめたり。これより先、日本銀行においても同一の目的を以て、井上準之助、土方久徴の二氏を海外に出張せしめ、三井銀行においては、則ちこの三人の其選に当れるなり。とくに三井銀行はあたかも本店の新築中なりしを以て、行内諸般の設備と共に、業務取扱上の改善を計るに汲々たりしかば、その調査事項の命令書は五十余項目にわたりたり

これにも記されているように欧米視察を命じられた三人の調査事項は、実に五十余の項目にわたっていたのである。その内容は、学問的なことではなく、銀行業務が具体的に、どのように行われているのかと、その実際面に重点が置かれ、主なものを列記すると、次のようであった。

取引台の取付方、
客溜りのあり方、
銀行内の設備、
重役以下支配人の席の位置

銀行内の分課職掌、
各係員の概数および執務の仕方、
預金取引、貸付手続、諸帳簿のこと、
その勘定法、諸収入、支払及び伝票、
信用調査機関
人事のこと、
各銀行団体の団結の仕組、
倉庫の関係、
信託会社の業務
……

などと、細大洩らさず、網羅されていた。

これだけ実地について調査すれば、たとえ素人でも一角の銀行員になれようというものである。それをすでに銀行業の経験ある三人の秀才が研究調査に専念するのであるから、収穫は大いにあったわけである。

なお米山梅吉と池田成彬には、すでに海外の経験があった。しかし二人の勉学の仕方は正反対であった。池田成彬のハーバード大学でのオーソドックスな勉強に対し、梅吉のアメリカ留学は働きながらの実践勉強であった。したがって米吉は商売や社交感覚の勉強などもしていたので、今回の欧米視察において、訪問先銀行での交渉や、調査などに、それが大いに役立った。また、小切手や手形の取扱い、為替や送金などの実務についても、当時の日本ではあまり経験できなかったものが、米吉はアメリカの生活で身につけており、これなども今回の視察には貴重なものであった。

（つづく）

狩野川のトド（3）

堀内永代

（五）

雪子が熱帯産防風樹ガジュマルの樹の下で、不思議な声を聞いたその翌日、即ち昭和十六年（一九四一）十二月八日（月曜日）の朝、日本中がひっくり返るような大事件が勃発した。

沼津我入道の漁師佐藤藤吉は、出漁の準備で忙しかった。沖合に出て漁をする者にとって、気象の変化は重要である。藤吉は、天気予報を聞くために、ラジオを付け放しにしておいた。そのラジオの音声が一瞬途切れた。

（また故障かな・・・）

そう思った時、ラジオのスピーカーから、物凄く早口で、叩きつけるような調子で伝えるアナウンサーの声が流れてきた。

臨時ニュースを申しあげます

臨時ニュースを申しあげます

大本営陸海軍部　十二月八日午前六時発表！

帝国陸海軍は、本八日未明、西太平洋において

アメリカ、イギリス軍と戦闘状態に入れり

臨時ニュースは、繰り返し、繰り返し興奮気味に伝えていた。

大東亜戦争（第二次世界大戦）の始まりである。

「おい！おとみ・・・　今の臨時ニュースを聞いたか、戦争が始まったようだ！　敵はアメリカとイギリス軍だ・・・」

藤吉は、アナウンサーのいつもと違った緊迫した雰囲気に、只ならぬものを感じた。

「お父ちゃん、また新しい戦争が始まったの・・・　いやだねぇ」

とみは眉根を寄せて、臨時ニュースを伝えるラジオにじっと耳を傾けた。

「こりゃぁ、どえらいことになった・・・　大変だ、これから俺たちゃぁどうすればいいんだ・・・」

藤吉は、思わず頭を抱え込んでしまった。

雪子たちは、月曜の登校日であるので、ニュースのことなどお構いなしに、大騒ぎして出掛けて行った。

それから二年が経過した。学校の成績がよかったオボコこと雪子は、小学校の担任教師の熱心な勧めもあって、昭和十八年（一九四三）四月、沼津城南高等女学校に入学した。

一方、戦況は緊迫度を増し、必ずしも我が軍に利あらず、その年の六月、父親の藤吉は、四十四歳になって、遂に補充兵として召集された。

日本軍は、中国、満州、東南アジア、南洋諸島へと戦線を拡大したため、武器弾薬や食糧の補充がつかず、戦況はさらに悪化していった。その結果、制空権はもとより、制海権もほとんど連合国軍に奪われ、海外に兵隊を派遣することができなくなってしまった。そのことが幸いしたか否か藤吉は、外地の戦線に派遣されず、内地において農工兵まがいの兵役に就いていたのである。

それからさらに、二年経った昭和二十年（一九四五）八月のことである。戦況はますます不利となり、海軍工廠のあった沼津の街は、アメリカ空軍B29爆撃機の空爆により、ほぼ壊滅状況になっていた。

そのような状況下であったが、出世魚にちなんで、オボコのニックネームで呼ばれている雪子は、高等女学校の三年生になり、日一日と娘らしさが増してきた。

そして雪子は、両親の期待通りに背丈こそやや小柄であったが、色白で、セーラー服のよく似合う、清純な乙女に成長していた。そのうえ勉強熱心で、学業成績は常にトップクラス、一年生からずーと級長を務め、クラスの人気者であった。

この頃は、戦時下の非常事態に対処するため、総動員令が発令され、女学生も軍需工場に動員され、夏休みになっても校舎を改造した臨時の工場で、飛行機のプロペラなど兵器の生産に従事していた。

（六）

昭和二十（一九四五）年度の一学期が終わって一週間が過ぎた八月六日（月曜日）の朝八時頃、雪子は我入道から渡し船で狩野川を渡り、対岸の蛇松線荷揚げ場に着いた。この日はことのほか暑さが厳しく、空は晴れているにも拘らず、空気がよどんでいるようないやな朝であった。

雪子は千本松原の中を、一人で女学校に向かって歩い

ていた。今朝は、久しくなかった耳鳴りがして、シャンシャンと耳の奥でやかましく騒いでいる。雪子は、

（今日は、久し振りで耳鳴りがして、何かいやな予感がするわ。兵隊さんになったお父さんに変事でもなければよいが・・・）

そんなことを気にしながら、ふと駿河湾の先の西空を見た。そのとき、

《ピカッ・・・》

となにかが光り、あたかも凹面鏡が太陽光線を反射したように、強烈な光が雪子の眼に突き刺さり、網膜を焼き尽くされたような気がした。

続いて直ぐ、右の耳がガーンと鳴り、爆風のような風圧を感じた。雪子は思わず眼を閉じ、防空頭巾をかぶって海岸の松林の中にうずくまった。

一呼吸して雪子は、恐る恐る眼を開け、西方の水平線上のはるか向こうの空を見上げた。すると西の空がだんだん暗くなってきたように思った。不気味さを感じた雪子は、再び目を閉じた。

三十秒ほど経っただろうか、それとも一分間ぐらい経っただろうか、再び眼を開けて西の空を見ると、空が一段と暗くなってきた。やがてピンク色をした大きなキノコ状の雲が、空高く大きく膨らんでいた。

雪子は、朝焼けかと思ったが、何か異様な感じがして再び松の木の根元にうずくまった。

（私の見たピンク色の雲は幻影かしら、それとも錯覚かしら？）

そんなことを考えたときに、西の彼方から、

水を下さい・・・
助けて下さい・・・
お母ちゃん・・・

と息も絶え絶えに、助けを求める少女の声が聞こえたような気がした。

雪子は砂浜にうずくまり、頭にかぶった防空頭巾をしっかり押さえていたが、次第に意識が混濁してきた。

（それからどのくらい時間が経過しただろうか・・・）

雪子は、ハッとわれに返って西の空を仰ぎ見た。先ほどとは雲の形が変わっていた。巨大なキノコ状の雲は、水平線から切り離されて、上空に昇って行き、やがて積乱雲とひとつになって消えていった。

その巨大雲がなくなるまでにどのくらいの時間を要したであろうか、三十分くらい経ったであろうか・・・

西の空には、先ほどのピカッと光って、ドンと鳴ったような痕跡は全くなく、ぎらぎらと照りつける真夏の太陽が、松林の間から鋭く射し込んでいた。

雪子は、その日も校舎を改造した臨時の兵器工場で、

いつも通りに働いた。そして、お昼休みの時間に、友達の堀井由美子に、昨夜からの耳鳴りの不思議な予知現象と、今朝遭遇した幻影の話をした。そして、

「由美子さん、私はネ、近いうちに戦争が終わるのではないかと思うの・・・」

と大胆なことを言い出した。父が陸軍の職業軍人である由美子は、日本は神国であるから、戦争は絶対勝つと信じているので、

「雪子さん、あなたはとんでもないことを言うのね。日本は米英の鬼畜を完全に叩きのめさなければ、戦争は終わらないのよ・・・」

と柳眉を逆立てて雪子に詰め寄ったが、雪子は意外に冷静で、

「だってネ、由美子さん、あんなに物凄いピカドンが、もし私たちの頭の上で炸裂したら、沼津なんて一瞬で燃え尽きてしまうと思うのよ。いや沼津だけではなく、富士山の裾野の町は、全滅してしまうような気がするの・・・　だからピカドンが光らない前に戦争が終わった方が日本のためよ。そうよ、私たちのためよ・・・」

雪子は、今朝見た駿河湾のずーと向こうの、西の空の異常な幻影は、近い将来、現実のものになるのではないかという予感が脳裏を去来した。

「なによ、そのピカドンって・・・　また雪子さんの神がかりなの・・・　冗談ではないわよ、私たちみんなが

こうして一所懸命にお国のために働いているというのに、もう直ぐ戦争が終わるなんてことを言い出して、憲兵の耳にでも入ったら大変よ・・・」

由美子は真剣になって、雪子の口を封じようとするのであった。

しかし、雪子の《戦争が終わるかも・・・》と言った言葉が、瞬く間に同級生の間に広まった。

それだけではない、雪子の言った言葉に尾ひれがついて、遂に、陸軍省から兵器工場に配属されている将校の耳に入ってしまった。

始めのうちは、配属将校も一人の女学生が洩らした寝言みたいな話だと、あまり気にしていなかった。

しかし、この話が、女学校を改造した臨時の兵器工場全体に広がり、職工たちが動揺し始めた。こうなると女学生の寝言だからといって、これを放置できなくなり、配属将校は、学校当局に真相究明を指示してきた。

びっくりした学校当局は、あたふたと職員会議を開き、（雪子は、暑さのために神経がおかしくなり、幻影に惑わされた）

ということにして、カーキ色の国民服を着た、ちょび髭、いが栗頭の校長が、汗を拭き拭き、自分の子供ぐらいの若い配属将校に平謝りに謝って、この日は事無きを得た。

その日も午後五時半に作業終了のベルが鳴り、雪子は

同級生と一緒に帰路についた。
自宅に着いた雪子は、今朝、登校途中で遭遇した不思議なピカドンとキノコ雲を見たことと、幼気ない少女の援けを求める声を聞いたことなどを、繰り返し、繰り返し、母や妹たちに話して聞かせた。
「ねぇ、お母さん、私はネ、夕べから耳鳴りがしていたの・・・ だから近いうちに何か大きな事件があるような気がしてならないのヨ・・・」
雪子は、昨夜から神がかりしたときの状態にあったことを、母親に話しした。
母親のとみも、昨夜、雪子がしきりに右の耳に手を当てていること知っていたので、雪子に神がかりがあったのではないかと、薄々感じていた。しかし、
(もし、雪子の神がかりが、夫藤吉の変事であったらどうしよう・・・)
とそのことが恐ろしくて、とみは、雪子に神のお告げがあったかどうか聞き出せなかったのだった。
一方雪子は、自分の話に母親が乗ってこないので、今度は今朝の出来事を、やや誇張気味に話し出した。
「ねぇ、お母さん。あのピカドンの強烈な光線は何でしょうね。物凄い衝撃だったの。それで、あの時私はネ、ショックで気を失ったらしいの・・・ 気がつくと、身体がカーッとして、肌が燃えて焼け焦げたのかと思うほどだったわ・・・」
母親とみは、雪子の話が、夫藤吉のことに関係なさそうだったから、また雪子の例の神がかりかと、適当に聞き流した。すると雪子が、ショッキングなことを言い出した。
「お父さんは大丈夫かしら・・・」
雪子の一言で、とみはギックとした。
「雪子、お父さんのことって、なにかそれらしきお告げがあったの・・・」
とみは、佐藤家の大黒柱の藤吉に万一のことがあっては大変と、顔を引きつらせるのであった。
「ピカドンはネ、西の方角から見えたの。お父さんは、浜松の三方原で、実戦訓練をしているって、お母さんは言ったでしょ。だから、三方原の飛行場に、大型爆弾でも落ちたら、お父さんが大変だと私は心配しているの・・・」
と雪子なりに父親の身を案じていたのである。
雪子たち女学生は、女学校で先生方から、ときどき戦況や、新しい化学兵器の話を聞かされていたので、少しずつ時局に対する認識を持つようになっていた。
特に浜松地方は、軍需工場も多いし、飛行場もあるから、アメリカ空軍の爆撃が多いのでは、と日頃から思っていたのである。

つづく

AN ABSENCE OF HUMILITY

鍋屋次郎

日曜日の朝、朝食を終わってソファで新聞を見ている夫の顕に、由美は
「ねー、宇宙ってどんどん広がっているんだって。顕、知っていた?」
と声をかけた。顕は新聞を見たまま
「うん、そうらしいね」
「昨日読んだ本に、一光年は九兆四千六百億キロと書いてあって、今、世界最大の望遠鏡、ハッブル望遠鏡と言ったかしら。なんと百二十八億光年まで見えて、それでも宇宙はものすごい早さで膨張している、と書いてあったわ」
「それで?」
顕の目は相変わらず新聞に釘付け。
「それでね、百二十八億光年という距離は、九兆四千六百億キロが百二十八億倍と言うことでしょ。計算なんかできないし、想像もできない距離なの。そしてこの宇宙に、私の記憶違いでなければ一千億個の星があるんだって。ねー顕、計算単位は兆の次は何という単位なの?。」
この声に由美が宇宙を持ち出していることに「なぜ?」と思った顕は
「どうして、突然、宇宙の広さなんて言い出すんだい?」
「顕は理学部数学科出なんだから兆の次の単位はなんて言うの。知ってるんでしょう」
「兆の次は京、つまり十の十六乗だよ」
「その次は」
「十の十八乗が百京」
「まだあるの?」
「十の二十四乗が杼、十の六十四乗が不可思議、十の六十八乗を無量大数と言うんだよ。僕はそれだけしか知らない」
「百二十八億光年って、十の何乗くらいになるの?」
「正確には計算してみないと分からないが、十の二十三

乗くらいかな。いや二十二乗かも知れない」
「さっき顕が言った十の六十八乗なんて思うだけで気が遠くなりそう」
しばらくして、由美は新聞を読み終わった顕に
「ねー、今度日本人で四人ノーベル賞を貰ったでしょう。その中の誰か忘れたけど、原子核とか中性子とか電子とかあって、えーと、この世の中で二つに割ることのできない大きさと言うか、小ささが十のマイナス二十六乗だったかな、マイナス二十三乗だったかな、そんな数字が出ていたのね。と言うことは私たち人間は、大きい方も小さい方も十の二十三乗くらいまでの世界は見ているというか、科学的に分かっているということになるのよね。数字で書くと、十の二乗が百だから、十の二十三乗は一にゼロを二十三書けばいいのよね。小さい方は小数点以下に同じようにゼロを並べればいいのよね」
「兆が十二乗だから、そんなに書いても読めないよ」
「顕、大きい数字の方は見えるわけではないが想像することはできるけど、小さい方、十のマイナス二十三乗というと、一センチメートルの一兆分の一が十のマイナス十二乗でしょ。それだけでも小ささの見当がつかないわ。それがマイナス二十三乗なんて」
「由美、小さい方はどこまでも理論的計算から求められる数字で、人間の五官的感覚で捉えられるものではないよ」
次の土曜日、由美は勤務先保育園の出勤当番ではなかった。顕は週休二日で、毎週土曜日は友人とのゴルフだったが、今日はなにも予定がなかった。
先週の日曜日同様、由美は突然
「ねー、イスラム教って私全然知らないんだけど、こんなに戦闘的な宗教なの？」
と聞いた。
まだ、食卓でコーヒーを飲んでいる顕は怪訝な顔をして
「なんだい、突然に」
「この新聞見て。イラクのことだけど。ジハード、これには聖戦と書いてあるわ。人間の体に時限爆弾を装着して、それも相手に疑われない子どもによ。子どもは天国へ行くことを信じて疑ってないのよね。私たちから見たらこれは変よ。子どもの命を犠牲にして相手を殺すなんて。本来、宗教って平和を求めるものじゃないの」
と言って、持っていた朝刊を顕に差し出した。
顕は新聞の見出しを目に留めて
「日本人には理解できないね」
と言って、飲み干したコーヒーカップを置いて立ち上がり
「エスの散歩に行ってくるよ」

と、庭の犬小屋で待っている三歳になるビーグル犬の朝の散歩に出掛けてしまった。
三十分後に戻ってきた顕に
「ねー顕、キリスト教とイスラム教はどう違うの？　もとは一緒なんでしょ」
「どうして突然そんな質問をするの？」
「うん、私にも分からないんだけど、日本人って命がけの宗教はしないよね。そう考えたら、宗教に命をかける人たちのことを知りたくなったの。なんだか無性に」
「日本人には八百万の神様があって、一神教の世界とは全く違うからね」
「なに？そのヤオヨロズの神様って？」
「そうか、由美の両親はイギリス生活が長く、由美も高校までイギリスだったから知らないのかもね。僕が育った田舎では、氏神様は当然だけど、家の神棚には天照大御神のお札があって、そのほか井戸の神様、竈の神様、山の神様とかいろいろあったよ、本当に八百万あるのかどうかは知らないけど」
「顕、日本の神様のことは後で教えて貰うとして、イスラム教のこと教えてくれない？」
「一寸待って」
と言ってリビングを出て行った。
一冊の本を持って戻ってきた顕は
「僕もね、実はイスラムのことを知りたくなったときがあって、ほら、イスラエルとヨルダンが、パレスチナ解放同盟とか、何度も戦争になりかけて新聞を賑わしたことがあったろ。その時に書店で見つけたイスラム教の本だよ。これを読んだらいいよ」
と由美にその本を渡そうとすると
「顕は読んだんでしょ。教えてよ」
と言って顕を自分の横に座らせた。
「じゃあ、最初から見ていこうか」
と言って、頁を開いた。
「西暦六百十年にムハンマドという人に天使が現れて啓示を与えたのが最初、と書いてあるよ。ムハンマドという人は預言者、つまり神の言葉を預かって人に伝える人になったんだね」
「その前はキリスト教だったの」
「うーん、一寸その辺は分からないけど、ムハンマドがいた地域は偶像崇拝の多神教の世界だったのかも知れない。しかし、現れた天使はジブリールといってキリスト教にでてくるガブリエルのことと書いてあるよ」
「神様が天使を送ったのね。とするとどんな神様なの」
「イスラム教ではアッラーが唯一絶対の神様なんだね。この神様は、過去・現在・未来と永遠に存在する唯一の神様で、万物の創造者と書いてあるよ。そして最後の審判の主宰者だって」

「キリスト教の神様も、始めなく終わりなく、万物の創造者として永遠に存在する唯一絶対の神様なんでしょ。キリスト教にも最後の審判はあるわ。同じじゃないの？」
「うーん。僕にはその辺は分からないな」
「一神教って、その神様以外には他の神様を拝んだり、神様として認めてはいけないのよね」
「それははっきり書いてある」
「キリスト教も？」
「うん、僕の友人の親が亡くなって仏式の葬儀のとき、そこへキリスト教の牧師がやってきた。亡くなったお父さんの学生時代からの友人だったそうだ。やがて焼香のときになって、同じ列の人と立ち上がっても焼香の列に並ばないで会場の外にでていって、やがて戻ってきて席に座ったよ。死者を拝むことは宗教上できないし、仏教の儀式を行うこともできないと言うことで。後刻、喪主である友人に説明があったそうだ。死者を追悼する思いと他宗教儀式を行うこととは違うんだね」
「世の中、それで通るの？　死者を悼んで手を合わせるくらいどうってことないと思うし、それをしないならお葬式に来なければいい」
「由美は標準的日本人なんだね。一神教の世界は違うんだよ。ここに書いてある、読むよ。イスラム教徒は一日五回、夜明け（日の出前）、正午、午後、日没、夜半の五回、メッカの方を向いて礼拝する、と書いてある」
由美はのぞき込んで活字を追っている。頭は続けて
「考えてご覧よ、一日五回の礼拝のときに、アッラーのほかに神はありません、ということを根底として礼拝しているんだよ。それも毎日だよ。他の神様が入る余地はないし、また絶対に認めることはできないだろうね。キリスト教徒も同じだよ。イスラム教徒のように一日何回礼拝しなさい、と言う規則はないけれど、朝夕の祈りや食前の祈りで、常に神様に生かされていることと、守ってくれていることを感謝しているね」
更に頭は続けて
「キリスト教の旧約聖書でイスラエル民族がエジプトから脱出するときは、最初から神様がモーセに指示を出している。それは神様がイスラエル民族の始祖アブラハムとの約束を果たすためだった。そして、その脱出の途中に神様はイスラエルの民が守るべき律法を神と民の契約という形式で出してきた。その典型的なものが十戒だよね。その一番最初に、他の神を拝んではいけないと厳しく言っている」
ここまで頭のいうことを聞いていた由美は、しばらく考えてから
「頭、そうするとイスラム教もキリスト教も、神からの教えというか戒めというか、そのようなものがあって、信徒はそれを守っている訳ね。どうして守るの？」
「それはキリスト教なりイスラム教なりを信ずるからさ」

「なぜ信ずるの？」
しばらく二人はお互いを見つめあって沈黙していた。やがて頭が
「由美の質問の答えはそれぞれの神様が言っている来世を信ずるかどうかにあるね。さっき、イスラム教でもキリスト教でも最後の審判というのがあるといったよね。人間の死後、その最後の審判の日までにどれだけの時間があるか知らないけど、キリスト教ではこの世の終わりの時、といって天地が崩れる時という表現をしているのではないかな」
頭は更に続けて
「その時に審判が行われて、キリスト教では永遠の命が与えられて天国に入ることが許される人と、救われない人、つまり地獄に落とされる人がいる、ということになるのかな。イスラム教でも世の終末というのがあって、その時に天国か煉獄か地獄行きかが審判される。煉獄は有期懲役、地獄は無期懲役の獄舎のようなもので、天国行きか地獄行きかは生前の行いによるらしい」
「頭、一寸待ってよ。そのこの世の終わりの時って今からどれだけ年数が経過してからか知らないけど、今、世界でイスラム教徒が十二億人いるとした場合、平均寿命が七十年とすると、七十年間に十二億人の信徒が死ぬわけでしょ。終末の時まで何千年か何万年あるか知らないけど、最後の審判を受ける死者の数は天文学的人数になるよね」
「神様だから不可能なことはないんだよ。それでも間違いなく審判するんだよ。神様の能力を疑ってはいけないよ」
「疑った訳ではないけど、最後の審判の日って凄いことになるんだなーと思ったわけ」
「由美は来世って信ずるの？」
「わからない。天国とか極楽とか地獄とかが存在するかどうか考えたこともないから」
更に由美は続けて
「頭、話しが替わるけど、聖書にキリスト教の神様の意思がなければ一羽の雀も死ぬことはない、と書いてあると以前言っていたわね」
「言ったよ、それがどうした」
「ということは、人間が偶然と思ったことでも、神様からは必然なの？」
「論理的にはそうなるのかな。信仰書の喩えだから論理に結びつけることは無理だよ」
「そういうことを言うのであれば、聖書は論理的理解はできない、ということ？」
「牧師でもクリスチャンでもない僕にはその辺は分からないね」
「イスラム教の神様も、キリスト教の神様も、天地創造前から存在して、今も未来も永遠に存在する、といった

わね。そして原点が旧約聖書だってことも。とするとキリスト教もイスラム教も同じ神様って言うことになるの？」

「難しい話だね。イスラムはイエス・キリストを神の子として認めていない。人間と神様との直の関係と考えているのかな。キリスト教では、神とイエス・キリストと聖霊を三位一体の神としている。神様と人間の仲を取り持つ人がイエス・キリストなんだ。特にプロテスタントではね。そのようにイエス・キリスト以降のことは大幅に違うけど、旧約聖書が原点だと考えれば同じ神様になるのかな」

「じゃあ聞くけど、何故イスラム世界とキリスト教世界が戦争しているの。同じ神様としたらおかしいじゃないの？」

「大昔の十字軍とかそういった時代はともかくとして、現代はうーん。これはね、宗教戦争ではないと思うよ。千九百四十五年ころイスラエルが二千年ぶりに建国した。それ以前にも中東アラブ諸国の国境を誰が決めたのか、そこに住む民族が関係しないところで線引きをしたらしい。だからクルド人問題など三～四カ国にまたがって問題になっている。イスラエルの領地も、今のイスラエル隣接諸国は認めていないのではないかと思うよ。詳しいことは分からないけど。パレスチナやヨルダンの主張を聞いているとそんな感じだね。イスラム圏アラブ諸国のアメリカ一局集中の世界支配体制への反抗が根底にあるのではないかと思うね。九・一一事件にしても」

「難しい問題ね。また信仰問答に戻るけど、キリスト教もイスラム教も、神様との契約や指示があって、信徒は完全にそれに忠実に従わなければならない、と言うことは理解できた。ところで日本の神様ってそのような契約とか指示とかってあるの？」

「一寸待った。疲れたよ。一休みしよう」

と言って顕は立ち上がって、由美と自分のコーヒーをいれ

「どうして由美は突然に宗教論議をするようになったの、何か気になることがあるの」

と聞くと、由美は

「笑わないで、顕。柄にもない考えなんて」

と言って、顕がいれてくれたコーヒーを一口飲んで

「人間の存在を考えてみたの。宇宙の中の、宇宙的規模で考えた場合の地球は、地球の直径とハッブル望遠鏡で発見したという百二十八億光年の長さと比較した場合、百二十八億光年の長さを一とした場合、地球の大きさは、正確な計算はできないけど、それこそ十のマイナス二十乗か三十乗か、もの凄く小さなものになるんじゃないの。そこに人類がいる。宇宙に一千億個の星があるというのに、どうしてそんなに小さな地球が美しくてしかも人類が住んでいるの？　太陽系の星で生物が生息できるのは

地球だけなんでしょ。不思議ね。太陽と水と空気があるから動植物の生命がある。人間もその一つ。地球は人間が作ったわけではないのに、動植物の生存の調和がとれていて、美しいし、海はあるし。宇宙の中の小さな小さな星である地球に人間を存在させるために、誰かが、うーんと、神様ってことになるのかな、誰かがそのように作ったのではないか、と考えてゆくと、人間も神様の被造物ではないかと思ったりして。人間の脳の働き、諸器管の調和のとれた働きで生命が維持されている。その維持の仕組みはまだまだ解明できていないことが多い。考えてゆくと人間を遥かに超越した何者かの存在を考えざるを得ないのかなって思ってしまったの」

「へー、そんなことを思っていたのか」

「こんなこと誰にも言えないし聴けないじゃないの」

「由美は日本人で良かったよ。イスラム教やキリスト教のような厳しい戒律はないから」

「日本の神様ってそんなに優しいの？」

「先ず日本の神様、神話のもとは日本書記や古事記にあるよ。古事記の信憑性は今いろいろと言われているけどね。

九州宮崎日向の国高千穂の峰に天孫降臨と言って神様が日本に降りてきた。その天照大御神は太陽を司る神様と理解できる記事もある。昔の話はそれくらいにして日本人の信仰は、自然崇拝から生まれてきたものと思うよ。

僕の田舎では、竈には火防（ひぶせ）の神様として秋葉神社のお札が貼られ、井戸の近くには御幣をたてて井戸の神様を拝み、山がご神体であったり、日本全国の神社を歩けば数えられない種類のご神体が神社に祀られているよ」

「イスラム教やキリスト教とは全く違うのね」

「日本人の祖先は、人間が自然に対して無力であること、自然の脅威には抗えないことを、身につけてきたのではないかと思うよ。非常に謙虚な生き方だね。神様は何の戒律も人間に与えていないけど、人間の方がその神様を拝むことにより自然の災害を防ぎ身を守ることができると信じたんだね。それで拝むことをやめるとバチがあたると思って先祖代々その八百万（やおよろず）の神を信仰しているんだね」

顕は続けて

「キリスト教の神様の概念的所在場所は天と言うことになっていて、イスラム教でもきっと同じようなことだと思うよ。そしてそれに祈ってゆく。ところが日本人は神様を呼びだして祈り拝む、と言うことをやっている。例えば地鎮祭では、家やビルを建設する場所で、幕を張り、祭壇を作って地鎮祭を行っている。その式次第では最初の方に降神の儀というのがあって、神主の祈りと共にそこに神が下ってくることになっている。そして式の終わりに昇神の儀というのがあって神様は天に昇ってゆく。これは一見敬っているようで、人間が勝手の時に、勝手

な場所に神様を呼びだして、用事が済めば帰って貰う、と言うことになっている。これはどう見ても人間が神様を使っている、と見られても仕方がないと言うか、キリスト教やイスラム教では全く考えられない神と人間の関係だろうね」

「学校で習ったことだけど、十月を神無月って言うでしょ。十月は神様がいないの？その時は今の地鎮祭などはどうするの？」

「十月は日本全国の神様が出雲大社に集まって会合すると言われているね。だからどこの神社にも神様はいないんだ」

「それって本当？」

「僕は知らないね。神様じゃないから」

「神様と仏教とはどっちが先なの？」

「日本に仏教が伝来してきたのは、今正確には覚えていないけど、六世紀頃だと思ったよ。だから日本では神様が先輩と言うことか」

「人間が死んでも神様として祀られる人もいるのね。日光東照宮や乃木神社等があるね。神様と仏様とどう違うの」

「難しいこと聞くなよ。分からない。しかし、お願い事をする対象の一つとして、人間の死後神様として祀ったんだろうね」

「キリスト教やイスラム教では人間が神様になることをどう思っているの？」

「完全否定だよ。一神教だもの。それと偶像崇拝は全面否定だから、日本の神社のご神体を拝むことも否定されるよ」

「靖国神社はどうなるの？」

「一番難しい質問だね。だけど、戦死した人達が靖国神社では神様で、自分の家が仏教徒であれば仏として仏壇の中に位牌があり、お寺にお墓がある。この宗教的矛盾を見事に受け入れて疑問に思うことなく死者への追悼をしているのは見事だね。靖国神社は日清戦争と日露戦争での戦死者を国家として祀り、天皇陛下が拝礼することにより国民と遺族を納得させるために設けられたものと思っているよ。国策的にはやむを得ない措置だったと言わざるを得ないが、第二次大戦後靖国神社を宗教法人としたのはいただけないね。むしろ、公共的な、宗教色のない戦死者に敬意を表するための追悼施設とすべきだったと思うよ。これは僕の個人的見解だけどね」

「学校で廃仏毀釈運動って言葉を聞いたことがあるんだけど」

「それは明治初年（慶応四年・一八六八）に神仏分離令というのがだされたことをきっかけとして、各地で神道家が寺院や仏像の破棄したり、僧侶の還俗強制が行われた時期があった。これは天皇を頂点として、宗教も神道を国家宗教として日本を統一しようとした、始まったばかりの明治政府の考えだったんだね。しかも天皇を神格化して。」

「頭は日本の八百万（やおよろず）の神様への信仰をどう思うの？」

「素晴らしいと思うよ。何故かというと、イスラム教やキリスト教のように、人間の生き方に宗教的に厳格な規制がない民族が、人間の弱さを自覚して、神様にお願いする。路傍のお地蔵様にお願いする。小さな祠にもお百度参りをする。この謙虚さが、日本人庶民が生きる上に、人倫に反することや社会的に悪とすることをしない、神様からバチが当たるという恐怖を持つ、素晴らしい自己統制が自然にできていたのではないかと思うよ。日本人の道徳の根元だったのではないかな。僕の祖父も、明治三十三年生まれで、朝起きると雨戸を開けて柏手を打って太陽を拝み、座敷の神棚に向かって同じように拝み、その次に仏壇に蝋燭を灯して線香を上げ、両手を合わせて頭を下げ、それが終わって家族揃っての朝食が始まる、と言う生活だった。僕の小さなころはそれをやっていたよ」

「どうして今はしないの？謙虚さがなくなったの？」

「何かに頼るというよりも、何事も自分で解決して安心する、と言う生き方をしているから、お願いもしない。やはり謙虚さに欠けるということか。昔の人と較べると怖さ知らずなのかもしれない」

わが愛誦歌（六）

――戦後の歌壇逍遥――

曽根竣作

このシリーズも今号で第六章を数える。「まんじ」一〇八号～一一〇号の間は、休載したが、一一一号よりまた続けてゆきたい。

思えば、まだまだ採り上げていない秀歌、私にとって忘れ難い作品がいくつも残っているからである。

ひと言に「歌壇」と言っても、その範囲を定義することは極めてむつかしい。最も権威があるとされている“現代歌人協会”（会長は佐々木幸綱氏）に登録されてる可成り名の通ったひと握りの歌人グループを指すのか、更に第二グループとして二名の推薦があれば誰れでも入会できる“日本歌人クラブ”（会長は秋葉四郎氏）をこれに加えるのか、はたまた全国に六百七十社もある“短歌結社”の存在を底辺として包含するのか、誰ひとりとしてこれを明言できる人は居ない。

なお、各有名新聞が週に一度「歌壇」の欄を設けているが、これによれば「歌壇」と言うのは全国で短歌にいそしむ者すべてを対象としているものとも解釈できる。

それ程「歌壇」という名称はあいまいである（俳壇も同じ）。このシリーズに於ては、余り拡大解釈せず、戦後の短歌界の変遷のうねりの中で、それぞれエポックメーキングした、そして短歌を志す人達にとって忘れ難い佳詠を、やや恣意的には流れるが、抄出して解説してみたいと思う。

なるべく作者の重複は避けたいが、あるいは一、二重なることがあるかも知れない。短歌界の流れを窺知する上で止むを得ないときもあるのでご諒承願いたい。

暗渠の渦に花揉まれをり譏らざればつねに冷えびえと

鮮しモスクワ　　塚本邦雄

『装飾楽句』（昭31）の中の一首、時代は現代から遥かに遠く、ここに歌われたモスクワは、今われわれが識るモスクワではない。一種、秘境的な都市、異端の国家の首府、それは誰も容易に窺い知ることのできないトポスとして、当時の日本人の認識の中に浮かんでいたと思わねばならない。

塚本邦雄は、この当時北方の巨大国の暗渠に揉まれる花の上に、ひたすら熱い眼差しを注いでいたともいえる。

この一首は読めば直ぐ分るが、七・七・五・八・八の可成りの破調である。しかしながらその破調が却って歌に重厚さを與え、読んでいて少しも気にならない。そして上句の具象的比喩が巧みに下句とマッチしていることを教えてくれる。

昭和三十年代に最盛期を迎えた前衛短歌運動の中心となったのが塚本邦雄である。戦前のモダニズムを越え、一人称の境涯的、日常的な表白としての短歌に意識的に反逆する方法を貫く。そして美、思想、時代といった主題を導入し、比喩や虚構を多用して独特な韻律を駆使したのである。また諧謔や諷刺も大いなる武器の一つであった。

著名歌は多いが、五つに厳選して挙げておこう。〈革命歌作詞家に凭りかかられてすこしづつ液化してゆくピアノ〉〈日本脱出したし　皇帝ペンギンも皇帝ペンギン飼育係りも〉〈突風に生卵割れ、かつてかく撃ちぬかれたる兵士の眼〉〈固きカラーに擦れし咽喉輪のくれなゐのさらばとは永久に男のことば〉〈すでにして詩歌黄昏くれなゐのかりがねぞわがこころをわたる〉。二首目の“皇帝ペンギン”は昭和天皇のカリカチュアである。

日常の身回りや家族詠などを峻拒したその潔さと基底にある硬質の叙情は、筆者の歌作の上でどれだけ参考になったことか。平成十七年惜しまれつつ没す。

一つかみほど苜蓿うつる水青年の胸は縦に拭くべし　　寺山修司

『血と麦』（昭37）所収の一首。うまごやしはシロツメクサの俗称で、海岸や低湿地を這うあら草であり、肥料や牛馬の飼料として知られる田園的な植物。

そのうまごやしがうつる水は池でもいいが、まず小川であろう。青年はその水に顔を寄せて、顔を洗い、ついでに逞しい胸を拭くのであろうか。

一九六〇年前後の農村を想像してみよう。まだ農業は今ほど商業化していない段階である。それでも都市化は次第に進み、エネルギー革命も進展しつつあったであろう。

つまり寺山修司が東京にいて目に浮かべていたのは幼時から彼を育んだ理想的な日本の田舎なのである。この歌をどう解釈するにしても、苜蓿や水は反東京的な存在

である。

同時に胸板の厚い青年の農夫的風貌は、慢性の腎障害で病弱であった作者の対極にある日本人像であろう。そして表現の上で鮮やかであるのは、下句の「青年の胸は縦に拭くべし」のたった十五音で健康的な浅黒い青年像を連想させる点である。ことばの魔力を思うと共に寺山修司の奇才ぶりが遺憾なく発揮されていると言えよう。

巻間、寺山修司の歌は、時にして著名な詩歌（短歌、俳句を含む）からの剽窃があるとのそしりもあったが、それを越えたレベルで幾多の秀作が見られる。短歌定型にひそむ自己肯定性を誰よりも強く否定し、近代短歌以来の等身大の〈われ〉からかぎりなく自由に解き放たれた〈われ〉をもって歌って見せたのである。彼の作品は、青春性に土俗性（少しも泥くさくない）を加味し今でも多くの愛好者を持っている。

〈雲雀の血すこしにじみしわがシャツに時経てもなおさみしき凱歌〉〈アカハタ売るわれを夏蝶越えゆけり母は故郷の田を打ちている〉〈大工町寺町米町仏町老母買う町あらずやつばめよ〉〈村境の春や錆びたる捨て車輪ふるさとまとめて花いちもんめ〉。虚構の〈われ〉は、生身の〈われ〉の血肉で満たされるという逆説が修司の特質であった。

欧州の帽子の下にひとりごつ殺戮はまことときらびやかなり　佐伯裕子

『春の旋律』（昭60）所収。佐伯裕子が話題になるたびに、東京裁判でA級戦犯として処刑された彼女の祖父・土肥原賢二将軍を嫌でも思い出す。土肥原将軍は、満州事変の前後華北の地で、満洲国建国を画策した人物である。その辞世の歌は〈わが事もすべて了りぬいざさらば　さらばここらではい左様なら〉である。「もう少し名歌であったら…」と佐伯は言っているようだが、民衆あるいは世の中というものに対する将軍のアイロニカルな見方があり、自嘲をこめた低い声が出ていて悠揚たるものがある。

扨て、掲出歌であるが、下句の「殺戮はまことときらびやかなり」の断定は、凄まじい戦慄を覚えさせる感想である。〝きらびやか〟はきらめいて美しいさまであり、殺戮が美しいとは何事かという意見もあろうが、この場合は全くのパラドックスとして受けとりたい。

美しさの裏にある残忍、悲惨、そして修羅を言っており、それが初句の「欧州の帽子」という極めてアバウトな表現設定の下で却って一首を際立たせている。

掲出歌は、「父」という一連の中の一首で、「欧州の帽子」とはヨーロッパ製の帽子のことであるが、何となくヨーロッパ的思考をそのまま頭に被ってひとり言を言っている父親像を連想させる、いや実際に作者は聞きとめたのであろう。

この歌に対して丁度対になるような作品として、〈あかがねの蒙古のラッパ吹き鳴らしわれはアジアの男好めり〉があり、中々に歯切れが良い。〈くびらるる祖父がやさしく抱きくれしわが遥かなる巣鴨プリズン〉〈なお人を恋うるちからの残りいる秋と知るとき葡萄熟れゆく〉〈籠りがちの皇妃が蘭のごと笑まいこの街の空あめの匂いす〉

エッセイ集『影たちの棲む国』では、戦後の輝きの中に取り残された戦犯家族の日常を鋭敏な感性で綴って話題を呼んだ。

シュルレアリズム宣言の年に生れたりき城炎え落つる夜の兵士たりき　玉城　徹

「欅木」（昭47）所収。作者は、大正十三年生まれで、東京帝大（現東京大学）の美術史科を卒業して北原白秋に師事する。

戦中は学徒出陣した戦中派、戦後は都立高校の教員となる。歌壇および戦後派や前衛歌人たちと一線を引いたところで独自の美意識や思想を展開したいはば孤高の歌人である。

シュルレアリズムは超現実主義。第一次世界大戦後にそれより少し前のダダイズムを吸収して、フランスの詩人ブルトン・アラゴンらによって進められた芸術運動である。

そしてブルトンの「シュルレアリズム宣言」が出されたのが一九二四年であり、丁度玉城徹の生年とほぼ符合する。

この運動にはピカソ・ダリ・エルンスト・キリコらの前衛的画家も加わり、いっさいの権威を打破し、人間の根源的自由の獲得を目ざす前世紀前半の最も広範な芸術運動となった。しかしながら、運動が進むにつれて、共産主義・社会主義リアリズムに傾斜してゆき、運動体としては一九三〇代半ばに終熄する。

掲出歌は、こういう風潮を必ずしも肯わず、却ってこれに対する痛烈なアイロニーを表現した一首として受けとりたい。

下句の「城炎え落つる夜の兵士たりき」はシュルレアリズムの凋落を暗示すると共に、これを信奉した者たちに向けた諷刺であって技巧的にも中々深みのある表現である。

玉城徹の作品には、自立した知的抒情と美しさが併存し、短歌を中心とした文筆活動にも思い切りの良い健筆をふるっている。

〈いづこにも貧しき道がよこたはり神の遊びのごとく白梅〉〈夕かぜのさむきひびきにおもふかな伊万里の皿の藍いろの人〉〈冬ばれのひかりの中をひとり行くときに甲冑は鳴りひびきたり〉〈頭とは何ぞと問ふにジャコメッティ端的に応ふ胸の付け根〉。ジャコメッティはス

イスの彫刻家、画家で細長く歪曲された人体によるシュール風の空間構成が特色である。

そのかげに犠牲者あるはわが知れる祝宴に白き海老の肉切る　真鍋美恵子

『玻璃』（昭33）所収。この歌集が現代歌人協会賞を受けたのは、先述の塚本邦雄と同期であった。この二人の取り合わせは、詠風が対極にあるとさえ考えられる点から、ある妥協のうえに成立したのかも知れないが、奇妙に新鮮である。

真鍋美恵子は、明治三十九年生まれ、平成六年に九十歳で没しているが、その歌業は現代にあっても注目に価する。その最大の特徴は、対象の切り取り方が非常にシャープなことである。

妻として母として平穏な家庭生活を送ったが、家族を詠んだ歌はほとんどない。日常の報告を歌に表わしたり、自分の感情をあらわに言葉にすることを作者は周到に避けていたように思われる。何気ない事物に対しても、表層を眺めるのではなく、背後にひそむ様々な表情をさぐり出そうとしている。

掲出歌もその一例である。祝宴に呼ばれて浮き浮きした回りの雰囲気の中で、恐らく洋食のフルコースかなんかであろう、白い海老の肉を切っている。

その時ふっと作者の心に浮かんで来たのは宴の陰のいくつかの暗部である。祝宴には、必ずと言ってよい陰の部分が潜んでいる筈であろう。それを上の句の「そのかげに犠牲者あるはわが知れる」と端的に鋭く表現した。

筆者も何かの宴に呼ばれて席に着くと、必ずこの歌が脳裏をよぎるのである。

また、真鍋美恵子の歌には直喩を効かせた秀歌が多い。直喩とは「ごとく」「ように」などを用いて二つの物を結びつける比喩であり、著名歌に〈八月のまひる音なき刻ありて瀑布のごとくかがやく階段〉がある。真夏の日差しをじんじんと浴びている階段が滝のように見えたと言うのである。この背後に「まひる音なき刻」があって、或る種の説得力に満ちた空間を描き出しており、常人では中々表せない抒情の把握である。他に記憶に残る作品としては、〈目を閉ぢて牝馬ねむれり輝ける腹部の下の底なき冥さ〉〈マヌカンを人かかへくる地下道のタイルの継ぎ目鮮明な夜〉〈いくつかの嘘の交ればにぎはしき夜となる卓に貝の生身食ふ〉などがある。

雨月の夜蜜の暗さとなりにけり野沢凡兆その妻羽紅　高野公彦

『雨月』（昭63）所収。雨月は、名月の夜に雨が降って月が見えないことを言うが、その暗闇のかなたにある見えない満月の存在が、「蜜の暗さ」という表現を生み出していると思われる。実際この歌集の「あとがき」に

作者は、「雨月の夜の闇は、濃密で香ぐはしく、エロティックですらある。私はその闇の底に一対の男と女を想起して歌を作った」とある。一対の男女とは野沢凡兆とその妻の羽紅である。

凡兆は、江戸前期の蕉門の高弟で、向井去来と『猿蓑』を共選したことで知られるが、のち離反し事に座して入獄、晩年は零落したと伝えられる無頼派の人物である。妻も俳人で剃髪して羽紅尼と号した人。羽紅という名がはっとするほど美しくなまめかしいが、二人の数奇な運命の物語を暗示することによって、雨月の夜の闇はますます濃密に香ぐわしいものとなる。

こういう歴史上にいくらかでも足跡のある人間を採り上げて作歌をすることは極めてむつかしい。それは主観がその人物に片寄りすぎて歌が浮いてくることが多いからである。

それがこの場合は、上句の導入の巧みさにより内容、調べともに実によく決まっていることである。個有名詞を二つ入れながら弛みを感じさせないのも技術であろう。

高野公彦は、現在朝日新聞の歌壇の選者を馬場あき子らと共に受持っており、現代歌人協会の常務理事もつとめ、現代短歌を牽引するトップランナーである。

生死あるいは光と闇を見つめる眼差し、そして存在にまつわる根源的な孤独感を細やかにかつ粘り強く表現することで定評がある。

光と影をテーマとした代表歌は次の通り。〈ふかぶかとあげひばり容れ淡青の空は暗きまで光の器〉〈飛込台はなれて空にうかびたるそのたまゆらを暗し裸体は〉〈夜ざくらを見つつ思ほゆ人の世の暗くただ一つある非常口〉〈怠けたく酒が飲みたく遊びたく羊腸とせり五十のこころ〉〈滝、三日月、吊り橋、女体　うばたまの闇にしづかに身をそらすもの〉。

参考文献
現代歌人二五〇人（牧羊社）
現代名歌鑑賞事典（桜楓社）
現代百人一首（朝日文芸文庫）
現代短歌の鑑賞事典（東京堂出版）
現代の短歌（講談社学術文庫）

短歌　三十首

曽根竣作

祖国ありき

あの戦争は何だったのか軍装に滴たりつつ夢に来る戦友

修司忌の海は漆黒霧ながれ身を捧げたる祖国もありき

国旗出す家もあらなく昭和の日ここに双頬青き死者見ゆ

緻密なるプロットに魅かれ読み継げり半藤一利「ノモンハンの夏」

空蝉の世に在りし日のいくばくぞ砂上に残像くきやかにおく

出征せる台北駅頭かはり果て六十余年の時空もどらず

身を凭せ兵舎へ急ぐ鉄橋のはたてひとむら死人花炎ゆ

飽食の世を永らへて兵たりし日日を憶へば異界のごとし

香ゆれて石も汗する精霊会とりどりの墓標ささやき交す

大小の足型ふたすぢ砂丘に一夏の風聞告げて入水す

父の物語

みどり濃き丘に佇む亡き父の顕彰碑豊後の海を見下ろす

亡き父の顕彰碑に並み写したる伯父叔母いとこみな鬼籍なり

セメント会社興して間なく破産せし父の無念をいまにし憶ふ

買収されし工場いまは日セメの佐伯工場として噴煙上げつ

台北へ一旗組とて渡りたる父に曳かれき四歳のとき

若しや父「死の商人」なりしか大陸へ潜行したる旅ぞいくたび
朝に日に父手入れせり明治男の象徴たりしカイゼル髭を
上海の租界を父に連れられてめぐりし十五の春はも杳し
箱膳にひとり酒酌み夕餉する父の独裁それが家風ぞ
父の威に永く隔たりつひにして語り合ふべきとき喪へり

NOMO

ざっくりと野太きNOMOはナイス・ガイ竜巻投法のちも忘れず
むやみには笑はぬ処が好きだったメジャー開拓者遂に退きたり
率直に悔いは残ると明言し老兵のごとく野茂は去りたり
しづもりし一湾照らしさんらんと天の夕顔虚空へ消えつ

つばらかに江の島灯台浮かばせて紫紺の空に尺玉ひらく
鉄骨を高処に架ける鳶の人秋のふか空占めて怡しゐ
浮雲を映して水の平らけし植田にふかき哲理をさがす
侃侃と夕日堕ちゆく海境を流離の雲かひと日を括る
少しづついろ深みゆく蒼穹に日並べて咲く白さるすべり
こころ許しし友らを隔つ光陰に立ち向かふべき刀さへ持たず

短歌

行雲流水（二十二）

石黒修身

近詠二十首

尻屋崎・灯台白く海青し草生の向う寒立馬群れり

大間なる北端の崎は海峡を隔てて指呼に北海道見ゆ

海峡に風吹き荒ぶ竜飛崎波の彼方は松前あたり

連絡船海峡渡る影消えて青函トンネル二十年経つ

「恐山」異界の如き風通い幼き霊の声聞こゆがに

風車からから回る音耳に塞の河原で石ひとつ積む

「キリコ」とう能登に伝わる灯籠が御神灯なるを知る旅に居て

屋台にて物売る人はおしなべて控え目に見ゆ輪島の朝市で

輪島にて買いし汁椀丹念に包みくれたり老いたる塗師は

珍らしき景観なれど「千枚田」土地なき農民の悲哀を想う

うら若き雲水あまた湯に入れり古刹に近き温泉宿で

先達の傘寿祝えば恬淡と余生楽しむ生き様ぞ嘉し

詠まなくて良いのかと妻呼びかけるベランダで見る夕焼の富士

蒼空に朱鷺飛びたてり慈育せし父祖の地佐渡を懐かしみ居り

佐渡島ゆ飛び立ちし朱鷺海隔て越後の里に着きしと聞けり

蒼天に朱鷺は舞うらん慈育せし母なる佐渡の初春(はる)を祝いて

これもまた昭和史裏面と興深く「甘糟正彦」ドキュメント読む

絵巻見て琵琶語り聞く「物語」詳しくはない源氏千年

稀にみる不況と聞けど分限を生きねばならず老いねばならぬ

望蜀にあらねど希(ねが)う残生は平安の世に過ごしたきもの

俳句

羽子板

勝山道子

花ざくろ一枝もちて友見舞う

タラの芽とアザミを揚げた夕餉かな

うぐいすの声背にうけて畑うなう

丹精のつくし料理のほろにがさ

退職で去る君の背に春の風

姑植えし緋梅や天を紅にそめ

紅梅は三寒四温にまとわされ

ナナカマド包みし雪は赤くさえ

寒ついて寺へまいるも妻の役

水仙にしふきをかける瀧を見る

松竹と千両配置で床きまり

鮭一本さばくは婆(ばば)の腕にあり

短日に宵窓半ば拭きのこし

羽子板はまゆ一線でひき立ちぬ

小気味よく目じり上りし小羽子板

仲見世を羽子板で染む人の波

静かさは殊の外なり松の門

箸袋揃えて年始客を待つ

成人はたもと打あふ立ばなし

京都御所御幸御啓小春の日

あえぎつゝ登るスニカーわらび山

桜散る山門仁王は稚児の顔

空池(カラ)に小ぶりに「しようぶ」咲きならぶ

書道吟息のむうちや冬日和

藤村忌かゝわり深き小諸かな

水墨は光と影で秋の景

朝ぎりが裾をかくした八ヶ岳
紅葉を一人占した山小屋は
大佛はさつき陽まぶし伏目なる
生涯の学習一歩秋句会

俳句

鷹の呟き(つぶや)(五)

大澤鷹雪(たかゆき)

手作りの干菓子を得たり炉を開く
初冬や熱帯旅行の後始末
松葉蟹の皿に応酬途絶えけり
アスファルト割る大根の誉れかな

腹見えし冬至南瓜の怒り肩

シャンソンを歌ふ熟女や大楷火

バリトンの寒念仏や京に入る

雪見酒積る話のありにけり

拘置所の塀の日だまり冬菫

船上に阿修羅の化身渡り漁夫

初音聴く蘇州虎丘の斜塔かな

※呉王布差の父闔閭の墓がある

緩むなと箴言めくも雨水かな

世界一成って人出の彼岸かな

目も鼻も猿も痒きか竹の秋

蕗味噌や知る人ぞ知るステーキ屋

大凧や風に恨みの保存会

初雷や桜田門に向ふ者

乾杯に洒落てシャンパン霞草

漢詩

潮騒錄（五十六）

鯨游海

祝吉田忠雄先生受賞火藥學會學術賞
平成二十年六月

千紫萬紅烟火英
金襴傘發亙娥驚
銀河慙愧憬圓舞
雷電恐惶羞直情

押韻・英驚情

〈吉田忠雄先生が火薬学会学術賞を受賞せらるるを祝す〉

千紫万紅　煙火の英
金襴の傘発いて　亙娥を驚かす
銀河は慙愧して　円舞に憬れ
雷電は恐惶して　直情を羞ず

〔注　解〕

烟火＝花火の中国語。煙火、烟花とも書くが本来烟花は「春がすみ」。李白「故人西辭黃鶴樓　烟花三月下揚州」

亙娥＝月の異名。もと弓の名人羿の妻だったが、西王母から貰った不老不死の薬を盗み月に逃れた美人＝嫦娥。

金襴＝金の糸を模様に織り込んだ豪華な絹織物。

銀河＝天の川。銀漢、雲漢、天漢とも。夜空の南北に帯の如く掛かる星の群。漢の字は漢水より。多くは東西に流れる中国の川の中で、この川だけが北から南に流れ長江に注ぐからという。つまり「天上の漢水」の意。

慚愧＝面目の無さを恥じる。恐惶＝恐れ畏まる。

この絶句の前半は、花火の豪華絢爛な姿と驚ろく月を、後半では擬人化して、銀河も雷電も花火に及ばない様を詠んだ。即ち銀河には色と動きが欠け、雷電には音と動きはあるものの直情径行に過ぎるのを羞じるとした。

先生は先に火薬学会学術賞を受賞された斯界の泰斗。

☆星焦がれ月も驚ろく金の傘
かみなりもまた直情を羞ず

祝三戸岡道夫先生傘壽
平成二十年七月

東論孔子至高仁
西說尊翁不朽倫
翼鑠未知垂傘壽
晴書雨唄復褒人

押韻・仁倫人

〈三戸岡道夫先生の傘寿を祝ふ〉

東に　孔子至高の仁を論じ
西に　尊翁不朽の倫を説く
翼鑠として未だ知らず　傘寿に垂とするを
晴れては書り雨には唄ひ　復た人を褒む

〔注　解〕

翼鑠＝老人が元気旺盛な様子。後漢書・馬援伝「帝笑曰翼鑠哉是翁」。翼は「忙しない」鑠は「輝やく」の意。なお国文学者小島憲之博士によれば「この語は特にわが国で誤って使われている。七十歳前後以下の人や婦人には用いないのが本来で、荻生徂徠も間違えて用いた」と云う。転句は論語・述而篇「發憤忘食樂以忘憂不知老之將至也云爾」を聯想して用いた。傘壽は漢語ではなく和語。先生に孔子、尊徳の名著あり。ご趣味はカラオケ。

☆晴れに書き雨に唄ひて人を褒む
尊翁はたまた丘のごとくに

祝沓澤孟先生喜壽
平成二十年五月

祝壽正襟囲孟卿
飛觴醉月擧巒聲
牛蹄洿裏無尺鯉
猶惜雲消社稷名

押韻・卿聲名

〈沓沢孟先生の喜寿を祝ふ〉

寿を祝ひ襟を正して　孟卿を囲み
觴を飛ばし月に酔ひ　蛮声を挙ぐ
「牛蹄洿裏　尺鯉なし」と
なほ惜しむ　社稷の名の雲消せるを

〔注　解〕

正襟＝着物の乱れを直して威儀を正すこと。蘇軾・赤壁賦「正襟危坐」。觴＝盃。李白・春夜宴桃李園序「飛羽觴而醉月」。洿＝溜り水。淮南子「牛蹄之洿　無尺之鯉　塊阜之山　無丈之材」＝大人物も牛の蹄の窪みに溜まる程度の水中では、才能を揮えないことの喩え＝「大魚は小池に棲まず。鶴は枯木に巣を作らず」。

社稷＝社（土地の神）と稷（五穀の神）＝村落共同体や国家の寓意。ここでは会社（合併して名の消えた銀行）。

☆猛将の駈くるに狭き阿修羅の場
ただになつかし名の失せし今

賀己丑春　　平成廿一年元旦

何來成熟繩文魂
誰創研磨萬葉言
學界遲遲牛歩暮
願投一石三嘆論

押韻・魂 言 論

〈己丑の春を賀す〉

何より来たりて成熟せるや　縄文の魂は
誰が創りて研磨せるや　万葉の言は
学界遅々として　牛歩に暮る
願はくは投ぜん　一石三嘆の論を

〔注　解〕

魂＝ここでは精神。縄文文化の心。萬葉言＝古代語の最古の文献は万葉集。三嘆＝幾度も感心して褒めそやす。

〔口語訳〕

列島に成熟した縄文文化は一体何処から齎されたのか。趣きのある万葉言（古代語）は、誰が創り磨き上げたのか。学界の研究は遅々として進歩なく、去年も暮れた。私の新年の願いは、碩学が賞讃して止まない独創的画期的な論文の一石を投じ、世に問うことなのだ。

☆秋津島大和に咲ける万葉語
　いずこに生まれまほろばと為る
　人生惟口腹　人生　ただ口腹のみ
　何礙過流沙　何ぞ礙げん　流沙を過ぐるを

（口語訳）

サマルカンドの街はひっそりしているが、
軒を列ねた家々は何萬戸にも達しよう。
彼らは蒲萄で自前の酒を作る。
巴旦杏の花もみるみるうちに咲いた。
鶏舌（香料）をきかせた肉を腹一杯くらい、
馬の頭ほどもある大きな瓜を切り割ってくらう。
人生はうまいものを食うためにこそあるのだ。
その為には西域の大砂漠を越えて行く事など何でもない。

モンゴル軍の野蛮な圧制下に於いて、民衆の生命財産を保全し、中華文明の伝統を死守した大功労者である。

今世紀の始めに書かれた柯劭忞の「新元史」に云う。「中原の百姓をして、戎狄に践刈さるるに至らざらしめしは、皆夫の人の力なり。伝に謂う所の自ら貶損して以て権を行なう者とは、楚材其れ庶幾か」。

（自ら貶損して以て権を行なう）とは『春秋公羊伝』にある言葉で、世に権力を行使する者のあるべき姿を語ったもの。楚材の生涯はまさにその理想に近い、と最大級の評価をしている。

それにしても我が平成の日本、誰か楚材の如き人物はいないのであろうか。やはり乱世が人を育てるのであろうか。

《漢詩の流れ45》遼・金・元の詩（三）元・耶律楚材

耶律楚材（一一九〇―一二四四）、字は晋卿、号は湛然居士。燕京（北京）の人。

契丹族の名門で遼の東丹王突欲の八世、金の尚書右丞耶律履の子。儒仏、天文、地理、暦法、医卜等の学問に通じ、元の太祖成吉思汗の信任を得、元帝国の建設に大功を立てた名臣。

契丹族の貴族であり乍ら、父履は自分たちを亡ぼした女眞族の金王朝に重臣として仕えた。その子であるが、彼が生まれた時は、遼滅亡後六十八年を経ていた。

楚材の母は稀代の女学者といわれた才媛で、世の中の変転を知り尽くしていたので息子には学問を徹底的に叩き込んだ。祖父も学問があったので「何時、いかなる王朝になろうとも、その力に用いられる人材になるように」と、この名を付けたという。果たして耶律楚材は元王朝きっての逸材として活躍した。陳舜臣の小説にも詳しい。

西域河中十詠之一
寂寞河中府　寂寞たり　河中府
連甍及萬家　甍を連ねて　万家に及ぶ
蒲萄親釀酒　蒲萄もて　親ら酒を醸し
把欖看開花　把欖　看るみる花を開く
飽啖鷄舌肉　あくまで啖う　鶏舌の肉
分飡馬首瓜　分かち飡う　馬首の瓜

東シナ海の竜王

太田精一

（一）

夜来の台風も、日向灘に向けて抜け去った。天文十二年（一五四三）八月二十五日、種子島の門倉岬は、強い日差しを浴びてキラキラ光っていた。

数人の村人が、台風の爪跡を確かめるため海岸に出た。すると、沖合に一艘の巨船が帆柱の折れたまま横たわっている。これまで見たこともない異形の船である。

村人は役人に見たままを告げた。その知らせは、すぐに領主、種子島弾正時堯の下に届けられた。

「まことに変わった形をした舟でございます。帆柱は折れ、黒く塗った船腹は、ところどころ禿げているようですが、山のように大きく、大きな鯨が浜に打ち上げられているように見えます」

時堯は、好奇心に駆られ、その船の視察に西村の浜に出向いた。なるほど奇態な形をしている。しかも、百人も乗れるほどの巨船である。

「どうやらたくさんの人が乗っているようであるな。警戒を怠りなくせよ。上陸を差し止め早々に立ち去るよう申し伝えよ」

時堯が、館に帰った後、数人の乗組員が、小舟に乗って島に上陸してきた。話しかけても言葉はまるで通じない。

双方とも困っていると一人の明人らしき人物が砂の上に何か書いている。島役人に従った村長がそれを見ると漢字が書いてある。そこで村長は、筆談に切り替え、やっと意思が通じた。

「あなた方は、どこから来たのか。何の目的でこの島に上陸したのか」

「われわれは、明の海商である。嵐に遭って帆柱が折れてしまい、漂着した。修理した上で島を去る。それまでの間、水と食糧を供給願いたい」

筆談に当った人物は、五峯と名乗った。この船の船主であるという。

島役人は、五峯の要請を時堯に伝えた。

「船は一艘だけで、遭難して困っているようです。島民に危害を加えることもないと思います」

それを聞いて、時堯は、水と食糧を与え、しばらく沖合での停泊を許すことにした。

小舟を漕ぎ出して、島役人が巨船に乗り込むと、異様な風体をした男が二人乗っていた。容貌も他の船乗りとは違う。鼻梁がやや鉤形に曲がっていて、眼窩が窪んでいる。一人は鳶色、別の一人は青味がかった目の色をしている。鳶色の目をした男の髪は、波を打っていて、亜麻色である。青味がかった目の男は、赤茶けた髪の色をしていた。

その二人は、これまで見たこともないような武器を持っていた。

長さ一メートル足らずの鉄の棒で、中が空洞になっている。根元に木製の台座のようなものが打ちつけてある。持ってみるとずしりと重い。

「これは打ち物にも思えるが、どのように用いるのか」

怪訝な顔をしてその鉄の棒を振ったり、筒先から覗いて見たりした島役人が聞いた。

「これは、ムスケット銃というもので、遠くにあるものを打ち砕くことができる貴重な武器です。お疑いとあれば上陸して試してみましょう」

島役人は、半信半疑で五峯の提案を受け、海岸で実演してみることにした。

上陸した異人は、的を板で作り、五十メートルほど離れたところに立ち、筒先から小さい玉を入れて、縄に火をつけ、引き金を引いた。すると、すさまじい音とともに的の板が割れた。玉は、目にも留まらない速さで飛び出していたのだ。

時堯は、これを聞いてその威力を確かめるため、早速異人を屋敷に呼び寄せ、実演させた。その威力にすっかり取り付かれた時堯は、ムスケット銃（鉄炮）をどうしても手に入れたくなった。

「是非このムスケット銃とやらを購いたい。値は、いくらでもよい」

時堯の命を受けた家臣の篠原小四郎は、五峯と交渉の末、二挺のムスケット銃を手に入れた。代金は、一挺銀百両、現在の金に換算すると二百万円であったという。

時堯は、すぐさまその使い方と火薬の製法を小四郎に学ばせた。また、種子島在住の数人の刀鍛冶を呼び、鉄炮を見せ、同じものを作るように命じたのである。種子島は、砂鉄が産出していたため、鉄工技術は高く、すぐに銃身は作ることができた。ところが、ねじの技術を知らない。そのため、翌年来航したポルトガル人にその製法を学ばなければならなかったのである。

ポルトガル人のもたらした二挺の鉄炮とその後に種子島で作られた国産の鉄炮は、たちどころに日本国中に知れ渡った。時あたかも戦国時代。その需要は、きわめて大きく、大名、武士、商人こぞって入手に努めた。そのため、国産の鉄炮が各地で作られるようになった。

近江では、種子島時堯から、将軍足利義晴に献上された鉄炮が国友鍛冶に貸し与えられ、それを見て鉄炮作りを行っている。

また、紀伊の根来寺の杉の坊は、種子島時堯に頼んで一挺の鉄炮を譲り受け、それから根来衆の鉄炮作りが始まった。さらに堺の商人橘屋又三郎は、種子島で鉄炮の製法を学び、鉄炮又と呼ばれるようになり、日本各地に供給している。こうして日本は、十六世紀末には、世界最大級の鉄炮生産国となったのである。

（二）

五峯は、中国の安徽省に生まれ、幼名を鋐（てい）と言った。智と胆力に優れ、塩の商売で小金を貯め、寧波の東方六横島の双嶼を本拠地とする密貿易の一団に加わった。

明は、貿易を規制し、外国との取引は、役所の許可なくしては出来ない。室町幕府、李氏の朝鮮との貿易についてもこの規制が守られていた。無許可の貿易は、密貿易として取り締まりを受けていたのである。

五峯は、一隻の大船を建造し、役人の取り締まりをかいくぐって、東シナ海をまたにかけた密貿易を行い、次第に財を成した。その頃、インドのゴアに拠点を設けていたポルトガル船が、マラッカ海峡を越えてマカオまで進出し、明との貿易の許可を求めて来た。だが、明は、ポルトガルとの正式貿易を拒み続け、許可を与えない。

そこで、ポルトガル人は、五峯などの密貿易者と手を組むことを考えた。実を取ろうとしたのである。五峯も西洋の珍しい品々を東洋の各地に売り込むため、ポルトガル人を乗せて航海していた。種子島への漂着は、その時起こった出来事であったのだ。

東シナ海での貿易は、常に危険に晒されていた。台風などの自然災害だけではない。海賊が何時襲ってくるか、片時も警戒の目を緩めることは出来ないのである。そこで五峯は、自らの船を武装し、海賊に備えなければならないと考え、水夫（かこ）たちを鍛えた。

夏の暑い日、安南での取引を終え、トンキン湾を航行中に海賊が、島影から二隻の船で襲って来た。いずれも五峯の船より小さい。だが、果断な攻撃が繰り返された。まず火矢を射掛け、火薬を詰めた丸玉を投げ込む。そこで火災を起こさせる。怯んだところを見計らい舷側に鈎をかけ、船を近づける。その船に縄梯子をかけ、よじ登り刀や槍を振りかざして襲って来るのである。

五峯の水夫たちは、よく戦い、襲撃を防ぎ、逆に二隻の海賊船を占拠した。その船には、他の船から奪った高

価な品々が積まれている。水夫たちは、手をこまねいてみているだけでは済まなかった。先を争ってその品々に飛びつき自分のものにしようとしたのである。

五峯は、殺気立った男たちのギラギラと欲望に駆られた目を見ていると、かつて海賊に襲われ、財産を奪われた記憶が蘇って来た。

（どうせこの世は、食うか食われるかの世界だ。襲ってきた海賊の財産を奪って何が悪い。戦に勝てば戦利品として金品を取り上げるのが世の習いだ）

そう思った五峯は、取り押さえた海賊の積荷を一個所に集め、それを自分の手で分配することにした。そうすることによって、彼の船主としての権威と秩序が保たれると考えたのだ。

「戦利品は、後にわしの手から皆に分配する。だから、このわしの許可なく、勝手に自分の物にしてしまうことはまかりならん。また、命乞いをしている賊を殺してはならない。助けて仲間になりたい者は仲間に加え、嫌な者は、次に立ち寄る港で、船から放り出せ。よいな」

五峯の命令は、乗組員全体に徹底した。彼は、もともと商人である。だから腕力や武術に自信があるわけではない。しかし、部下の面倒見がよく、貿易上の利益は、惜しみなく部下に分かち与えていた。そのため、次第に荒くれ男たちの信頼と尊敬を集めるようになったのである。そのころから五峯は、海の仲間の王に値する男だと

して「王直」と呼ばれるようになっていた。

（命の危険を犯すことを恐れなければ、貿易よりも相手の積荷を奪うほうが手っ取り早い）

やがて五峯船は、次第に海賊行為を繰り返すようになり、「五峯王直」は、海賊の頭目として恐れられるようになったのである。

春風に誘われて江南の柳も芽を吹く頃であった。

王直は、温州に停泊するジャンクを襲って東シナ海を北上し、根拠地の舟山群島に帰島した。碇を下ろすと間もなく、島影から倭寇の船団が現れ、王直の船を取り囲んだ。船団は、小舟を操り集団で襲いかかって来る。舷側に縄梯子を架け、船体のいたるところに取り付き、よじ登り甲板に突入する。縄梯子を外し、乗船しようとする半裸の男たちを海に放り込む。それでも、日本刀や青竜刀を振りかざし、雄叫びを上げ、執拗に乗り込んで来た。船内は、日本語、中国語、朝鮮語などの言葉が入り乱れている。

しばし激戦が続いた後、王直の水夫たちは、切りたてられ中国船から奪った財宝を横取りされてしまった。倭寇の一団は、財宝を手にすると死傷した仲間を引き連れ一斉に引き上げた。

倭寇との戦いで、まざまざとその強さを見せ付けられた王直は、東シナ海で海賊として生きて行くには、倭寇

と争うのではなく、その力を利用することが必要であると考えた。

それだけではない。海賊に手を焼いていた明は、沿岸警備を強化し、その根拠地を押さえる作戦に出た。そのため、王直の根拠地舟山群島も危なくなって、新しい根拠地を日本の島に求めているところであったのだ。

そこで彼は、中国大陸に比較的近く、東シナ海に浮かぶ五島列島の福江島に目をつけた。貿易よりも海賊行為に重点を置くようになった王直には、明の海岸を荒らし、すぐ逃げ帰ることの出来る福江の港は最適であったのだ。

五島の領主宇久盛定は、王直が島での海賊行為を行うことなく、島民と平和に暮らし、貿易を盛んにするのであれば、島民にも利益になると判断して、王直の船団の停泊を許した。この頃の五島には、倭寇船の基地があり、王直の船団の中にも五島出身の人たちが数多く加わっていたのである。

だが、福江島には、水が不足していた。そのため王直は、水脈を探って深い井戸を掘り、上部に石を六角に積み上げた中国式の井戸を作った。「六角井戸」と呼ばれ、今日でもその井戸が残っている。また、海神を怖れた王直は、館の近くに小さな祠を建て、航海の安全を祈っている。これを福江の人は、明人同と呼び伝えている。かつては、中国風の朱塗りの祠であったというが、今ではその面影はない。

（二）

福江島に拠点を移した王直は、平戸にたびたび寄港した。平戸は、倭寇で知られた松浦党の本拠地である。それだけではない。貿易港としても急激な発展を遂げつつあったのだ。領主は、松浦隆信である。

隆信は、平戸付近の島々を制圧し、松浦党を統一した。平戸の治安が確保されると明の海商が続々と来港し、密貿易が行われた。生糸、綿布、水銀、陶磁器、銭、書籍、薬剤などを日本にもたらし、日本からは、銀、刀剣、槍、扇、屏風、銅、硫黄などを明に運んでいる。

明は、当時「海禁」と称する鎖国政策を行っており、朝貢船でない外国船の渡来を禁じていた。松浦党は、来港する明の密貿易船と取引するだけで、居ながらにして莫大な利益を得ていたのである。

王直は、平戸に寄港し、松浦党との密貿易を重ねるうちに、隆信との親交を深め、平戸に館を建てる許可を彼に求めた。貿易に関する情報の収集に加えて、船団の水夫の確保を必要としたからである。松浦党の船乗りは、勇敢で戦闘能力が高く、操船術にも長けていた。倭寇の頭目として船団を率いて行くためには、松浦党の力がどうしても必要であったのだ。

「隆信様、明の密貿易取締りもますます厳しくなって参

りました。海域も警戒が厳重となりましたので、明にあるわれらの根拠地も撤収し、福江島に移しました。しかし、貿易をするには、各国の船が集まる平戸に拠点持つ必要があります。そこで、この平戸に館を建てることをお許しいただけませんでしょうか」

隆信は、しばらく目をつぶって王直の申し出の得失を考えた。

（王直を迎え入れ、平戸に住まわせれば、明国から睨まれる。しかし、王直の要求を断れば、友好関係が崩れ、彼の倭寇船に乗っている松浦党の水夫たちにも被害が及ぶことになるかもしれない。また、王直の庇護のもとに行われている東アジア海域での密貿易活動と略奪行為のもたらす利益も捨てがたいものがある）

隆信は、王直の申し出を受け入れることにした。戦国の世にあって、松浦党が生き残るためには、王直との連携が必要であると判断したのだ。

「王直殿、平戸に館を建てることを承知しよう。その代わり松浦党の船が、海上で危難にあった時には、必ず助けてもらいたい」

隆信の許可を得た王直は、平戸瀬戸を見下ろす景勝の地、印山寺に豪壮な館を建てた。反り返った青色の屋根、門扉も柱も朱色に染められた中国風の館である。単なる住居というより、城郭に近いものであった。

安南、シャム、ルソンと東南アジア各地の貿易と略奪の船旅を終え、王直は、平戸の館に帰還した。港は、これまでにない賑わいを見せている。ポルトガル船が、天文十九年（一五五〇）に初めて平戸に来航して以来、西洋の珍奇な産物がもたらされ、貿易港としてますますその評価が高まっていた。

ポルトガルのアジアへの進出は、目を見張るものがあった。平戸だけではない。今度の航海で王直の寄航した東南アジアの大きな港には、ポルトガルやイスパニア船が数多く停泊し、町には教会が建てられ、賛美歌が流れていた。

日本にも、ザビエルが天文一八年（一五四九）来日して以来、キリスト教が広まり、平戸にも教会が出来た。

王直は、ポルトガルやイスパニアの進出に脅威を感じた。

（彼らが、このわしの船よりも大きな船で本格的に日本、明、朝鮮と貿易を開始すれば、太刀打ちできない。また、彼らから積荷を奪い取るにしても、火力に勝る彼らと戦うには、あまりにも犠牲が大きい。領主の松浦隆信もポルトガルとの貿易の拡大には、大きな期待を寄せているようだ。だから、少なくともこの地で彼らと事を構えるのは避けねばならない）

平戸の館に帰っても、王直は気の休まることがなかった。明の役人は、王直討伐軍を組織し、沿岸の警備を固

めている。隆信にも使者を送り、引渡しを要求して来た。
王直は、海賊行為もままならず、密貿易の利益も少なくなり、次第に追い詰められて行った。その不安から逃れるため、酒に溺れ、明の妓女たちの奏でる故郷徽州の歌舞音曲に耽った。だが、そんなことをしても本当の安らぎを得ることは出来なかった。

秋も深まり虫の音もひとしお高く響く頃、王直は、平戸の喜楽楼の遊女を館に呼んだ。それが、遊女潮音との運命的な出会いとなった。彼女の細やかなもてなしに、心を奪われた王直は、喜楽楼から潮音を請出し、家を一軒持たせたのである。

潮音を囲ってから王直は、派手な遊びをやめ、平戸に戻るたびに、館に呼び寄せ、褥を共にした。潮音は、遊女には珍しく金には、恬淡としている。潮音にとっては、夜毎、見知らぬ男に体を任せなくても済み、食べることにも困らない生活を与えてくれるだけで満足であったのだ。その上優しく愛しんでくれる王直に次第に心を寄せ、いつしか彼が平戸に帰る日を待ち焦がれるようになっていた。

王直も、潮音の想いに心を洗われ、殺伐とした世界から訣別し、平穏な暮らしを望むようになったのである。

そんな時、故郷の母親の手紙を携えて浙江省の舟と名乗る男が王直を尋ねて来た。その手紙には、この世を去る前に一目でも王直に会いたいと願う年老いた母の心情が綴られていたのである。

(四)

舟は、母親の手紙と共に浙江省の総督胡宗憲からの書状も携えて来た。それには、王直が帰国してもこれまでの罪は不問に付し、あまつさえ明の正式な貿易許可証を与えるということが書かれている。

(胡宗憲からの書状については、額面通りに受け取ることは出来ない。が、母の手紙は、筆跡から見ても本物に間違いない)

戦いと略奪に疲れ、安らぎを求めていた王直は、母の言葉に心を揺り動かされた。家を出る時に見送ってくれた母の顔が、王直の郷愁を誘ったのだ。

王直は、潮音に帰国の意志を打ち明けた。

「お前には大変世話になった。わしのことをいつも大切に思ってくれて心から感謝している。お前がいてくれたお陰で、心も体も安らぎを得ることが出来た。胡総督は、わしに正式な貿易許可証を与えると言っている。それは、わしを捕える罠かもしれない。だが、密貿易や海賊をこのまま長く続けることは出来ない。明の役人の目を逃れる生活にも疲れた。この機会を逃がしては、永久に正式な貿易商としての地位を得られることはないと思う」

「私のことなら心配しないでください。それよりお母様

に会ってやってください。あなた様もお会いしたいのでしょう。私は、あなた様に何不自由ない暮らしをさせて戴けただけでも幸せでした。その上に、妻のように思ってくれて、どんなことでも隠さずに話してくれたことを嬉しく思います。今まで私には、これほどまでに、優しくいたわってくれた方はいませんでした。あなた様と過ごした時間は、私にとって何よりの宝ものです。晴れて正式な明の貿易商として再びお目にかかれる日を楽しみにしています」

潮音は、王直の手を取り、胸に差し入れた。激しい鼓動をその手に感じさせて、燃える想いを伝えようとしたのである。

「一日帰国したら、再び日本の土を踏むことが出来ないかもしれない。わしを捕らえる罠かもしれないのだ。わしに万一のことがあっても、お前のこれからの暮らし向きが立つように、金は十分用意した。お前を残して、平戸を離れるのはつらく心残りだ。どうしてこんなにお前が愛しいのか。お前と会うまでは、まったく想像も出来なかった」

王直は、潮音の胸に入れた手を首筋に移し、着物を潮音の肩からそっと滑らせた。

それに合わせるかのように潮音は、王直に体をあずけた。

暗く静かな平戸の海に、月の光が射し、波頭がキラキラと光っている。島影に映る漁火が遠ざかり、波間に消えた。潮音には、その火が王直の命の灯火であるかのように思えてならなかった。

これまでの罪を問わず、正式な貿易商としての許可を与えるという胡総督の書状を手にしても、まだ王直には不安が残った。そこで、彼は、明の嘉靖三六年(一五五七)千人の部下を率いる船団を組み、杭州湾に浮かぶ舟山本島の岑港に寄航した。

数日後、胡宗憲総督から許可証を受領するため、数十人の部下を引き連れ中国本土に上陸した。すると物陰に隠れ、待ち構えていた明の軍勢が、王直を取り囲んだ。

「何故われわれの行く手を阻むのか。ここに胡総督様の書状を持っている。明の貿易商として許可を与えると書いてあるので、その許可証を受け取りに行くところだ。そのことは胡総督様もご承知のはずである」

明軍の指揮官は、王直の言葉を無視した。周辺の村民の怨嗟の声が、指揮官を王直捕縛へと走らせたのだ。

「そんな話は聞いていない。日頃わが明国の海域を荒し、略奪、暴行を犯した罪は重い。身に覚えがあろう」

「さては謀られたか。胡総督は、母を利用して自分の名声を上げようとしたのだな。卑劣な男だ」

数千人の軍隊に囲まれた王直は、どうすることも出来なかった。明軍は、王直を捕縛し投獄した。獄中、賄賂を使って助命嘆願を続けたが、許されなかった。

だが、母に会いたいという願いだけはかなえられた。王直の監禁されている獄を訪ねた母は、髭が伸び、やつれた息子から、家を出た時の少年の頃の溌剌とした面影を探り出そうと懸命に王直を見つめるのであった。

「倅や、お前は子供の頃から気の強い子だった。大きな夢を持って船に乗り、海商になった。それまではよかった。だが、お役人の目をくぐって密貿易をし、果ては、海賊になったというではないか。私の命に代えても総督様にお前を助けるようにお願いしてみる。お前が捕まったのは、元はといえば、私がお前に会いたいという手紙を書いたからだ。でも、どうしても許されないのなら。潔く刑に服しておくれ」

「分かった。わしも子供の頃から向う見ずで、母者にはずいぶん心配をかけた。挙句の果てがこの始末だ。身から出た錆だと思えば仕方がない。わしが処刑されても死なないでくれ。せめて母者には、天から授かった命を全うして欲しいのだ。明の沿岸はもとより、日本、朝鮮、蓬莱、ルソン、安南など東シナの海を駆け巡った一生に悔いはない。ただ、母者の言いつけに背き、人様の物を強奪し、戦いの最中であるとはいえ、人を殺めたことに対しては悔いている。今は、その罪で処刑されるなら仕方がないと思うようになった」

王直が母を見たのは、これが最後であった。

母と会った翌年の嘉靖三八年（一五五九）王直は、杭州郊外の六和塔の前に引き据えられた。六和塔は、北宋時代銭塘江の高波を鎮めるために建てられた記念塔である。南に銭塘江が豊かな水をたたえ、ゆったりと流れている。水面が春の光を浴びて輝き、周辺には、緑野が広がっている。

王直は、江南の柔らかな風を受け、静かに目を閉じて座っていた。二年の獄中生活で足は萎え、歩くのもおぼつかない。しかし、すべてを受け入れ、無の境地にあるような爽やかな顔つきであった。

後ろ手に縛られた背中を押され、前かがみにされた。青竜刀の閃光が頭上にきらめいた。激痛が走り、王直は、平戸に残した潮音の悲痛な叫びが聞こえたように思えた。その瞬間息が絶えた。

王直の死後、倭寇の跳梁は、次第に沈静化した。翌年、日本暦の弘治元年（一五六〇）には、桶狭間の戦いによって、織田信長が今川義元を打ち果たし、天下統一への道を歩み始めた。それに呼応するかのように東シナ海は、ポルトガル、イスパニア船の往来が激しくなり、日本、中国、朝鮮を結ぶ南蛮貿易は、最盛期を迎えたのである。

（完）

青春彷徨（三）

転機

伊治哲

ことが起ったのは、九月に入ったある日曜日のことである。

支店のバスツアーで、揖斐川の上流へ落ち鮎狩りに出かけた。川原の石畳の上に筵を敷き、梁で手づかみした鮎を串焼きにして、それを肴に酒盛りをやるという。

鮎のつかみどりなど初めてのことであったし、初秋の空はどこまでも青く澄み渡り、川の流れは清冽であった。久しぶりに仕事を離れての賑わいに、支店の行員は互いに和気藹々、嬉々として戯れ、この催しは大成功のうちに進行するやにみえた。

しかし、遅い夏のギラギラした陽射しを浴びての、昼日中の酒はまわりが早い。宴たけなわ、酒席が乱れ始めた頃、末席に小さくなって雑談に興じていた修平に向かって、突然支店長の怒声が飛んだ。

「舘！　オレの前へ来いっ！」

賑やかな宴席が急にシーンと静まって、皆の目が一斉に修平に注がれた。

修平は一瞬なんのことか戸惑った。ためらうように周囲を見回したが、ただ不穏な沈黙が漂うだけである。

「オレの前へ来い、というのだ！」

支店長が一段と大声を張り上げた。

修平はただならぬ雰囲気に飲み込まれるように、上座であぐらをかく支店長の前にオズオズとにじり寄った。

支店長の眼が修平を睨みつけた。

〈これはなにかあるな〉と思ったとたん

「舘！　お前はアカだろう！　アカだ！　ことごとにオレに盾突く奴はアカだ！」

「・・・・・・・・・」

「返事をせんか！　白状しろ！」
明らかに酒乱気味の支店長のロレツが乱れた。
修平はうつむいたまま、暫くは口をつぐんでいたが、ようやく
「私はアカではありません」
と、小さな声でつぶやくように修平が反応したのと同時だった。
支店長の毛むくじゃらの大きな手が、修平の襟元をわし掴みにした。修平はとっさにその手を振り払おうとするや否や、支店長の右手のひらが修平の頬をしたたかに殴打した。
目から火花が散った。怒り狂った支店長の阿修羅の形相が一瞬目をかすめた。
修平の顔がこわばった。隠忍を重ねてきたつもりの堪忍袋の緒が切れた。
〈支店長と相打ちならやむをえぬ〉
修平は手近にあったこぶし大の川原の石を掴んで逆襲に転じようと睨み合った。
その瞬間である。
「舘君、待てえ！　それはいかん！」
誰かの叫ぶ声が聞こえた。
「支店長に刃向かっても勝ち目はないぞ！　止めろ！」
先輩や同僚たちが口々に叫びながら、一斉に駆け寄ってきて、背後から修平を羽交い絞めにした。修平は瞬く間に取り押さえられてしまった。
吹き出る涙を拭うひまもなく、引きずられるように後ろに引き下がるより仕方がなかった。
酒宴の席は一瞬にして杯盤狼籍の場と化す中で、なおも支店長はところ構わず罵声を浴びせ続けた。
騒ぎを静めようとするかのように、浅瀬の川の流れが一段と瀬音を募らせた。しかし、白けきったバスツアーは中途半端のままで、早々に引き揚げざるをえなくなってしまった。

その夜、銀行の独身寮に帰ってからも、修平の興奮は治まらなかった。入行当初に仕出かした出納違算の折とは異なった憤怒と慙愧の念が胸を覆った。
〈たしかに、未熟者の若気の至りで、修平にも過去数々の非礼がなかったとはいえない。だから、どのように罵倒され、罵詈雑言を浴びせられようとも、甘受するほかはない。
しかし、絶対権力者のように振る舞って、行員の人格無視はおろか、部下に対して暴力を振るうに至っては、たとえ支店長たりとも到底許すことはできない〉
修平は悶々とした一夜を過ごした。
翌月曜日の早朝、修平は支店行員大多数の同意を得て、非常手段に訴えてしまった。法令違反すれすれの、いわば同盟罷業であった。当時現場に居合わせた人たちの名誉のためにも、これ以上の詳細な顛末を告白することには躊躇する。
結果は、遅く出社してきた支店長が全員を前に陳謝し、ようやく一件落着となった。陳謝とはいえ、酒のせいで昨日のことは全く記憶にないという一言で、辛うじて支店長の面目が保たれたのだった。
しかし修平は卑劣な申し開きに憤慨ますます治まらず、これで決着をつけることには到底納得できなかった。といっても、次長や支店長代理、そして先輩、同僚たちの度重なる説得の前に、末端の一行員の立場では、それ以上の手立ては持ち合わせていなかった。ただ、この時のしこりが後々まで消えなかったことはいうまでもない。
もちろんこの一件については、一切口外無用を申し合わせたこともあって、奇跡的に外部に洩れることは殆どなかった。不幸中の幸いであった。

戦後も少し落着きをみせ始め、付け刃とはいえ"自由""民主""人権"などの常套句が盛んに口の端にのぼる昭和二十年代の終わり頃の出来事であった。そんな時代に、未だにこんな世界があったのかと不思議に思われるほどの、ある田舎町の、ある支店での秘められた苦渋の歴史のひとこまであった。

しかし、だからといって、修平がその後も苦痛に喘いでいたというわけではない。仕事そのものは新しい視界が開けるようで興味深かったし、多少なりとも自己研鑽への励みにもなった。また、日常を過ごす独身寮の生活も、将来への夢をかきたてるに充分な自由奔放な環境を失ってはいなかった。
折あらば、この銀行の古い体質を少しでも変えていきたいというひそかな希望をつないでいたからかもしれない。

それまでの一連の苦い体験から、修平は多くのことを学んだ。
一つは、一定の権力に立ち向かうのに、一個人の力だけではなにもできないということだ。ひとり相撲ではなんの効果も生まない。せいぜい川原の小石を握ることぐらいで、所詮は喧嘩にならないということが、身をもって痛いほど分った。
しかしそれでも、組織とか仕事の実態を一番よく知っているのは、社長でもなければ支店長でもない、末端で影のように働いている平社員以外にないという確信をもった。下から上を見上げる方が、より真実を映し出すことができる。上から下を見下ろすと、枝の蔭に隠れて本当の全体像が見えなくなるからだ。組織を動かすには、底辺に視点を置くことが大切だということが分った。

そして、人間という存在は、自然の大地からみれば、こぼれ落ちた“ドングリ”のように、小さな一粒の種にすぎない。どんなに大きな樫の木に育っても、成熟して落ちてしまえば、只の一粒の実にすぎない。形も大きさも似たり寄ったりの“ドングリの背比べ”でしかないのだと、自分に言い聞かせた。

〈独り善がりの気負いを捨て、一粒のドングリになって、底辺を這いずり回るくらいの気持をもたなければ・・・〉

修平はこれを機に百八十度頭を切り替えたのだった。

あれから半世紀の時を経た今、周囲を見回してみると、当時一緒に過ごした人たちは、支店長はもちろん、多くの先輩、同僚たちさえも、もはやこの世にはいない。だからこそ今にして白状できるのかもしれない。

ところが思いもよらないことに、修平があれほど抵抗した支店長にも、背後から修平を制止してくれた同僚や先輩たちに対しても、今となってみれば、なぜか、言い知れぬ悔悟の情を抱かざるをえないのであった。それはいってみれば、なにも判ってはいない若造の思い上がりにすぎなかったのではないかという後悔の念でもあった。

遠い昔の仲間たちへの懐旧の情であるのかもしれない。

時は、日を重ねるにつれて過去の汚辱までも洗い流し、美しい思い出だけを残していくのだろうか。

ともあれ、その後の名古屋支店への転出が、修平にとって大きな転機になったことだけは確かだった。

——つづく

加藤レイコ

狩谷棭斎讃歌（四）

新井宏

（十二）説文解字

妻よし（善）を喪い、二女たか（多加）が生まれた頃には、既に棭斎の『説文解字』の研究が本格化している。文化五年には未定稿の『説文新附字考』を書き終えていたようである。

『説文解字』は略して説文というが、後漢の許慎が永元十二年（一〇〇）に書いた最古の部首別の漢字字典で、漢字の成り立ちを解説し、本義を記している。説文新附字とは、『説文解字』の解説文中には使われているのに、見出しとして掲載されていない四百二文字のことで、棭斎はその内の二百四十九文字について考証した結果を『説文新附字考』として纏めている。

この考証結果は、ほぼ同時期に前後して出た数冊の清の新附字攷に較べて全く遜色がないという。特に、多数の漢碑すなわち金石文を引いて証としているのは棭斎が最初で、近代の考証を先取りしている。同書を発掘した『日本漢字学史』の岡井慎吾は「疑わしきを闕きて私見を騁せず、矜慎を極むる作」と激賞している。

棭斎は説文の研究に当っては、まず『説文検字篇』を作成している。これは江戸時代に作られた唯一の説文の索引で、他の諸字典とのリファレンスが可能になっていて、棭斎自身の研究の必要上から生まれた索引であるが、いわばデータベースの作成である。

私も自分の研究の必要上、鉄や青銅器などの分析値に関する膨大なデータベースを作成している。時間さえあれば、時には研究に直接関係しないようなデータでも収集してコンピュータに入力してきた。おそらくこの種の資料としては、世界でも最も整ったものだと思っている。このデータベースが有るゆえに、着想を得ると直ちに事実関係のチェックが可能であり、着想を膨らませること

が容易で、数々の成果につながった。

だから、梶斎のアプローチが良く判るのである。まず信頼できる基礎データを集め、利用できるように整理する。考えて見れば、梶斎の業績は、そのくり返しであった。梶斎の『説文解字』への取組みは、生涯にわたって続くが、その主目的は自らが高度に利用することにあった。

説文と言えば、梶斎の時代にその研究水準が最高点に到達した。和漢の古典を正確に読むための基礎研究であり、梶斎の他に、研究者としては、松崎慊堂と山梨稲川が良く知られている。慊堂が説文の総合的な研究者とするならば、梶斎はデータベースの作成者、稲川は説文そのものの研究者であった。したがって、研究と言う面から評価すれば、稲川が最も業績を挙げている。

梶斎と慊堂が生涯の親友であったことは、既に述べたが、山梨稲川もまた、ふたりと極めて親しい間柄であった。

山梨稲川は明和八年(一七七一)、静岡県庵原の名主の家に生れた。松崎慊堂と同年で梶斎より四歳年上、荻生徂徠の流れを汲む陰山豊洲に学び、古文辞学から説文の研究に入っている。稲川の研究は、漢字の部首のうち、右側に位置する旁により漢字を分類すると言う独創的なもので、漢代以前の古音に気付いた最初の学者である。日本ならではの研究成果であった。

それには、日本の漢字音には、呉音あり、漢音あり、唐音ありと、各種の発音が残っていたことが幸いした。説文は漢代の発音を示すが、日本に残る漢字音について、呉音、唐音などと比較してルーツを明らかにし得なかった発音、すなわち古音を見つけ出したのである。例えば、台・怡・始などが、説文では異なる発音であるが、古音では全て「タイ」であったというのである。

私も、万葉仮名の「弓」が「国字」とされているが、稲荷山古墳や江田船山古墳の鉄剣に見られることから、そのルーツを探して、朝鮮半島の広開土王碑文に見出したことがある。これも漢字以前の古字なのではないかと思っている。このように、稲川のような研究は、日本や韓国においてのみ可能なのである。

さて、横道に入ったが、山梨稲川は漢詩人としても良く知られている。それは中国清末の碩儒、兪曲園が日本人の漢詩を編集した際に、稲川の詩を六十八首も入れたことでも判る。ちなみに、荻生徂徠は四十三首、新井白石は十四首であった。兪曲園が梶斎を日東第一の学者と評価していたことについては、冒頭に述べた。もっとも漢詩では広瀬旭荘が第一位であった。

駿河に住む稲川と江戸に住む梶斎の関係は、梶斎と慊堂のように何時も共に研鑽する間柄ではなかったが、その出会いなどについて、いくつかエピソードが伝えられている。

梶斎と稲川がお互いに名を識ったのは、慊堂を通してであるが、面識はなかった。

文化十四年(一八一七)頃のことであるが、梶斎が駿河の薩埵峠に遊んだ時に、共に眺望を楽しみ、お酒を酌み交わした往きがかりの人物がいた。駿府の人だと言うので、駿府の稲川という学者を知っているかと問うと、知っていると言う。漢字に詳しいと聞いているが、そうか問えば、然りという。梶斎は会話を楽しみ気持ち良く別れたのであるが、数日後に駿府に稲川を訪れ、そこにくだんの人に再会し、驚き喜び、掌をうって笑ったというのである。

梶斎も慊堂も説文専門研究者の稲川から多くを学んでいる。その一方で、稲川も説文について梶斎にしばしば質問をしている。梶斎のデータベースの優れていた証左であろう。世人は稲川、慊堂、梶斎を称して説文の三絶ともてはやしたと言う。

稲川が亡くなったのは、文政九年(一八二六)である。その時、慊堂が碑文を撰し、梶斎が筆書している。三絶のいわれは、この「山梨稲川の碑」が、慊堂、梶斎に主人公の稲川を加えたことに由来している。碑は静岡駅から徒歩三分の宝泰寺境内にひっそりと建っているが、世に知られていないのが残念である。もっとも、実際の筆は梶斎の愛弟子で名筆家の小島成斎が書いたと言うのが、最近の説である。成斎は日米通商交渉の時、答書を書いたほどの名書家である。

梶斎の説文に関する研究は、晩年に至っても続く。松崎慊堂らと文政十年(一八二七)から始めた説文会である。『慊堂日暦』には、梶斎の和歌「説文を詠ず」

文字のせき　まだ越えやらぬ旅人は
みちのおくをば　いかでしるべき

が書きとめられている。天保四年(一八三三)三月のことであった。昌平坂学問所の学風を諷した作との説もあるが、晩年に至ってからもなお、自戒の意をこめて作った歌のようにも思える。

(十三)　求古楼展観と書誌学

求古楼とは、梶斎の住まいである。書肆出身の梶斎は、もともと蔵書家でもあった。財力の支えもあり、二万巻の蔵書を持っていたというが、それらは量ばかりでなく質にも優れ、求古楼に蔵していた。ついでにいえば、当時の津軽屋は、茶器一万両、書物一万両、有金一万両の身代と称されていたとの伝えがある。

梶斎は、文化十二年(一八一五)から翌年にかけて、求古楼を会場として、市野迷庵、伊澤蘭軒、多紀茝庭、小島宝素、屋代輪池などの愛書家とともに、求古楼展観という書籍閲覧会を十一回ほど開催している。伊澤蘭軒と小島宝素は、それぞれ同名の森鷗外の著によってよく知

られているように医師である。また多紀茝庭も、幕府奥医師多紀桂山の五男の医師で、後に、日本初の漢籍解題目録となる『経籍訪古志』の編纂に深くかかわる。その関係で、医籍なども多いが、足利学校、金沢文庫、昌平坂学問所、掛川藩などの蔵書も披露されている。

参加者の中には、江戸城紅葉山文庫の書物奉行・近藤重蔵守重、号正斎もいたので、かなり便宜を図ってもらったと思われる。巷説によれば、棭斎は、植木屋に扮して江戸城内に入り、紅葉山文庫の曝書を観察したと言うが、独断専行の気質の近藤重蔵であれば、それ以上の便宜を図っていたとしても不思議ではない。

近藤重蔵は、蝦夷地調査、開拓で有名であるが、もともと昌平坂学問所で優秀な成績を収めた秀才で、その生涯には非常に多くの著作を行っている。棭斎より四歳上で、棭斎から借用した大部の『皇清経解』を売り払ってしまったが、それを見つけた棭斎がそっと買い戻しておいたところ、もう一度借用を申し込んだことがあるという。巷説ではあるが、それだけに、ふたりの人柄や間柄が良くあらわれている。なお、近藤重蔵に関する著書としては、金子正義さんが『まんじ』に三十三回にわたって連載した「近藤重蔵・富蔵の生涯と其の時代」（第一部の上が栄光出版より平成十一年に出版されたが、第一部の下は十一回までで未完、構成の膨大さに心打たれる著）がおそらく最も詳しいであろう。

求古楼展観参加者の中に、棭斎の友、松崎慊堂の名が無いが、掛川藩の蔵書も出展されているので、間接的には参加していたのであろう。ただ、蔵書のコレクションには多額の費用がかかり、この頃、掛川藩校教授を退いた慊堂には、ゆとりがなかったのだろうかなどと勘ぐっている。

求古楼展観では、各回十名弱の参加があり、通算すれば数百巻の貴重本の情報交換が行われた。この時、棭斎が出品した南宋版の『史記』は、明治維新後に中国に渡り、現在の『史記』の底本になったことで知られている。南宋版の多いなかに、朝鮮版も目立つ。

書誌学という学問分野がある。書籍を対象とする分類学で、本文の内容はもとより、その来歴、題名、作者、書写・刊行から、装丁、版式にいたるまで、書籍そのものを研究して、資料としての性質を明らかにする学問である。求古楼展観は、いわば日本における最初の本格的な書誌学研究会であり、その故に、棭斎は日本における書誌学の創始者と言われている。

この求古楼展観が、後に、江戸医学館に集った医官、伊澤蘭軒門下の森立之や多紀茝庭らの『経籍訪古志』に結実する。清朝の蔵書目録『書誌解題書』に勝る目録を作りえたのは、日本に多量の貴重書・善本が伝存していたからにほかならないが、棭斎が始めた書誌学のひとつの高まりでもあった。

（十四）隠居

文化十二年（一八一五）末の棭斎誕生日に、棭斎は津軽屋を長男の懐之に譲り隠居する。棭斎四十一歳、懐之十二歳であった。理由は年来の病身となっているが、これは決まり文句であり、より学問に集中したいことが真の理由であった。事実、その後も十六年間に渡って湯島の津軽屋に留まり、懐之を助けており、津軽屋の経営から自由になったわけではなかった。浅草伝法院前の新宅に移ったのは、天保二年（一八三一）である。

隠居した棭斎は、津軽藩から隠居料として百俵十五人扶持を受ける。棭斎が婿養子となって津軽屋を相続した時の待遇が二百俵十五人扶持であったから、隠居としては破格の待遇である。もちろん、懐之は従来通りの二百俵十五人扶持を受け継いでいる。

しかし、よく見ると、ここには事情があった。この頃、津軽藩の財政が厳しく、その二年前の文化十年には、津軽屋から一万九千両の融資を受け、その見返りとして、百俵十五人扶持を津軽屋に加増しているが、その分が、懐之に行かず、棭斎が受けるようになったのである。いずれにしても、津軽屋の身上は、津軽藩の給付に依存していたわけではなく、津軽藩が棭斎に敬意を表していた現れであろう。

棭斎が隠居した時、懐之はまだ十二歳で成人していたわけではなかった。懐之が代々の津軽屋三右衛門を襲名するのは、武士の元服と同じように、十六歳になった文政二年（一八一九）元旦である。それから以降、棭斎は三右衛門は名乗らず、かなり自由な身になる。

『霊異記』『上宮聖徳法王帝説』『古京遺文』『新撰字鏡』の研究が平行して進展する。

（十五）三回目の上方旅行

その現われが、第三回の上方旅行である。市野迷庵、松崎慊堂と連れ立って、江戸を発ったのは文政二年二月二十三日で、帰宅するのが五月二十一日、閏月を挟んでちょうど四ヶ月間の収穫多い旅行であった。

一行はまず駿府に山梨稲川を訪問する。棭斎とは二度目の対面であった。共に、説文などの最高レベルの研究者であり、その意見交換は実り多いものであったに違いない。

続いて隣の掛川に二泊している。掛川は松崎慊堂が身を置く掛川藩の在所、慊堂の弟子達も多く集まったに違いない。しかし『慊堂日暦』は文政六年からの分しか残っていないので詳細は判らない。

名古屋を経て、三月九日には伊勢山田に到着し、伊勢神宮に参詣している。

翌十日は豊宮崎文庫の蔵書閲覧に費やしている。江戸

時代初、慶安元年（一六四八）に作られた豊宮崎文庫は、その頃、多くの学者から書籍の寄贈が相次ぎ、国学研究のセンターでもあった。一行は、幕府儒学のトップ、大学頭林述斎からの紹介状を持参しているが、紹介状などなくとも、既に学者として良く知られていた一行は歓待されたに違いない。

その時の受け入れ側は、外宮権禰宜の足代弘訓である。足代弘訓としては、高名な学者が参宮した際には、この文庫で講演をするのが古例であったので、その慣例を復活させたかったが、謝礼金の問題で実現できなかったことを嘆いている。文庫衆による醵金で支えられていた豊宮崎文庫が、負担を嫌ったらしい。

足代弘訓は桛斎より十歳年下で、三十五歳であった。最初、本居宣長に批判的な荒木田久老に学び、後に本居春庭、本居大平に学んでいるが、みずから語るところによれば、この頃、大分「天狗」になっていた。その事を悟らせたのが、一行であり、とりわけ桛斎だったと言う。真の学者の凄さを知るのも真の学者である。

京都では、旧知の書肆、竹苞楼を訪問している。この時、近所に住む木屋九兵衛の息子が江戸に出奔した事情を聞き、その捜査を伊澤蘭軒に手紙で依頼している。津軽屋の従業員に頼めば済むことでも、親身になって親友に連絡をとっているところが桛斎の温かみだと梅谷文夫も紹介している。

その後、一行は吉野山に遊び、信貴山を経て、奈良に入っている。奈良では、法隆寺、薬師寺、唐招提寺を訪れ、宝物、書画を拝観している。桛斎の代表作となる『古京遺文』の初稿は、旅行に出立する前に既に出来上がっていたが、桛斎にとって、旅行の主目的が新たな金石文の探索と、拓本ではない本物の金石文を観ることにあったのは間違いない。

その意味で、桛斎が最もこだわったのは、薬師寺にある仏足石である。一行は、奈良からいったん京都に戻り、慊堂と迷庵は江戸に戻るが、桛斎だけは、拓本作りの職人をつれて再び尼辻の薬師寺に引き返す。この仏足石の拓本を採るために七日間を費やしたということからも意気込みが判るであろう。

当時、仏足石の下部は土に埋もれていたが、それを掘起して、新たな部分を明らかにし、精緻な拓本を得たという。

みあとつくる　いしのひびきは
あめにいたり　つちさへゆすれ

天平勝宝五年（七五三）の仏足石の拓本を得た謝礼に桛斎は薬師寺に金二百疋（半両）を納めている。

（十六）古京遺文

桛斎は早くから上代金石文に興味を持っていた。二十一歳の時に、既に『那須国造碑』についての佐々十竹、新井白石の考証などを筆録している。佐々十竹（宗淳）は水戸黄門の助さんのモデルとなった水戸藩彰考館総裁である。

その桛斎に、藤貞幹の『好古小録』が大きな影響を与えたのは間違いない。同書は冒頭に「金石」の部を置き、十七篇の金石文についての考察を行っている。貞幹には、いかがわしいところがあったが、着眼点や物を観る確かさでは、極めて鋭いものがあり、本居宣長のように、観念の世界で無から有を生ずるのとは大きな差異があった。

桛斎の『古京遺文』は、平安遷都以前の金石文二十九編について考証したもので、平安初期の金石文三編の考証も付録として加えている。薬師佛造像記、釋迦佛造像記、宇治橋断碑、二天造像記、船首王後墓版、小野朝臣毛人墓版、山名村碑、那須直韋提碑などの金石文についての初稿が成ったのは文政元年（一八一八）である。自序によると、桛斎は畧さに弱かったようである。生来の病と関連していたかも知れない。台湾の故宮博物館や国立博物館、静嘉堂文庫などに写本が多く残り、最終的には、天保三年（一八三二）以降の成立とされている。

もちろん、金石文への関心は清朝考証学の影響であるが、当時の研究が、古事記や六国史などの文献資料に重点があり、金石文などは好事家の道楽とみなされていた中で、いわば現在における考古学的なアプローチをいち早く取り入れ、かつ徹底して考証した点が、桛斎をして金石学の祖とするゆえんである。

『古京遺文』以降、薮田嘉一郎が昭和四十九年に『日本上代金石叢考』を著すまで、類書がまったく現れなかったのも、如何に桛斎の研究が卓越していたかを示すものであろう。薮田は、同書の中で、『古京遺文』について、比倫を絶する名著とし、知識の該博、方法の正確・鋭利、論断の明快・剴切を絶賛している。

そもそも、記録された歴史は、後世に、意図する目的にそって書かれている場合が大部分である。それは、疑いが生ずることがないように、ある意味で体系立っていて、理解し易く表現されている。それに対して、金石文は同時代的であり、断片的な事実を伝えている。近代の歴史学の基本が、史料批判にあることからすれば、記録された歴史に潜む作為をどのようにして取り除いて行くかの過程で、金石文の占める役割がいかに大きいかは、いうまでもないことである。

すなわち、桛斎が金石文の研究に精力を注いだこと自体が、近代的な歴史学のスタートなのである。事実、桛斎は金石文によって、書かれた歴史の虚偽を数多く指摘するのである。

（司馬雑感　十八）

近江路から熊野路へ（一）

山田嘉久

1「近江散歩」をゆく

司馬遼太郎の後半生のライフワークというべき「街道をゆく」シリーズは昭和四六年から始まっている。昭和四六年といえば大阪万博の翌年、私はそのころ大阪近郊に住んでいたが、その第一回が掲載された「週刊朝日」昭和四六年一月一月号「湖西のみち」を今でも鮮明に覚えている。

「「近江」というこのあわあわとした国名を口ずさむだけでもう、私には詩がはじまっているほど、この国が好きである。」が冒頭の文章である。

司馬にとって大好きな「近江」は「街道をゆく」ではその後、一四年後に再び登場してくる。

「街道をゆく二十四（近江散歩）」である。

第一回が（湖西のみち）に対してこの巻は（湖東のみち）をゆく旅となっている。

「近江路は春がいい。しかし車窓から見る湖東平野は、冬こそいい」

「近江という一カ国のうちには、冬国と南国がある」

（なお、「街道を行く」の前駆的作品となった「歴史を紀行する」（昭和四十三年）で既に「滋賀（近江）」は登場している。この章では典型的な近江人として浅井長政、石田三成、蒲生氏郷を取り上げている。）

一　関が原古戦場跡

関が原の「関」とは正確には「不破の関」というのだそうだが、此処で慶長五（一六〇〇）年に行われた合戦ほど、その後の日本史を決定づけた戦いはない。

司馬によると、関が原の地は今でも四百年以上前の大合戦のあった頃とさほど変わっていないという。（随筆「関が原は生きている」）

北国街道、中山道、伊勢街道などが交差するこの狭い

盆地に両軍合わせて二〇万の軍勢が動員されたのも日本史上のみならず世界史上からも稀有のことだった。

しかしその大規模の合戦もたった八時間たらずで東軍（家康）の勝利に終わった。西軍（三成）先鋒の宇喜田秀家隊と東軍の福島正則隊との激突によって始ったこの戦いも、最初は西軍が優勢だったが、午後になって西軍の将小早川秀秋の裏切りによって戦況が一変した。

日本歴史上、秀秋ほど評判の悪い人物はまれだろう。戦後、良心の呵責に耐えられず、毎晩悪夢にうなされ二一歳の若さで狂死したと伝えられている。

明治になって、時の政府によって陸軍大学教官に招聘されたドイツ軍参謀メッケルは、関が原合戦の両軍の配置図をみてこれはどうみても「西軍の勝ち」と判定したと司馬はＮＨＫ「日本史探訪」（昭和四五年放映）で話していたが、今回のツアーの講師Ｗ先生も同様のことを関が原にむかうバスの中で説明していた。

ヒストリカル、イフは禁物だが、もしこのとき西軍が勝っていたらその後の日本史はどう変わっていたであろうか。

小高い三成の陣地跡に登って戦況の模様を講師から聞きながら、そんなことを思っていた。三成が陣した笹尾山は標高一九八メーターということだが、関が原そのものの標高が高いため頂上にはすぐに達した。

前方に家康が陣取った桃配山が見える。

司馬の小説「関が原」（昭和四一年刊）は敗将三成にかなり同情的である。否、三成側から書かれた小説といっていい。徳川時代から現在に至る三成に対する世の定評―奸ねい、邪智の痴れ者―に対する反発であろうか。しかし関が原決戦の後半のくだりになると三成批判が時に厳しくなる。これも三成への思い入れの裏返しだろう。その三成の歴史的役割をどう評価するか。

その思いを司馬はこの小説のエピローグに持ってきている。秀吉の名参謀だった黒田如水が三成の元恋人を訪ねる情景である。不義の家康が栄えていいものか、と問う彼女に如水はこう答えている。

「あの男は成功した」といった。ただ一つのことについてである。あの一挙は、故太閤へのなによりもの馳走になったであろう。」と。

「あの男」とは三成のことである。

江戸時代を通じて「あの男」を語ることはタブーとされたが、その代わり逆に、彼の部下や友人がもてはやされた現象はどうみたらよいだろうか。

家来の島左近、盟友の大谷吉継、そして上杉家家老直江山城守兼続らである。

司馬も「（彼らは）いわば快男子の典型として江戸時代の武士たちに愛され、その逸話が様々の随筆に書かれつづけた」と記している。

その快男子の代表格ともいうべき直江兼続（一五六〇

一六一〇）について、司馬は「秀吉は、陪臣ながらも兼続を愛し、（天下の政治ができるのは、直江兼続と小早川隆景だろぅ）といったことがある」と書いている。

（「関が原」）

また、兼続を有名にしたのが徳川家康に送った「直江状」だった。会津討伐を目論む家康に対して、噂によれば近く会津にいらっしゃるとのこと、その時は国境でお待ちします。万事お相手を仕りましょうとの堂々の挑戦状だった。

伏見城でこの手紙を受けた家康は「一読して、自分はいままでこれほど侮辱されたことがないとつぶやいたほどのすさまじい文章だった」

と司馬は「街道をゆく（羽州街道）」で書いている。

関が原を見た我々はこの後、この戦いに敗れた西軍の薩摩軍が中央突破を試みた際、藩主に代わって自刃した島津豊久の墓にも詣でた。

（なお司馬は随筆「関が原私観」で薩摩軍が、その撤退に当たって堺から船を出してくれた堺の商人今井宗薫の恩義が後世まで忘れられず、太平洋戦争が終わる頃まで島津家では今井家に、その時航海中の食糧としてもらった米二石を毎年贈っていたという逸話を披露している。）

二　国宝彦根城

午後四時頃、合戦が終わると細雨が降ってきたという。

家康はそのまま戦場で仮泊したが、直参の井伊直政には休息を許さず、直ちに近江への進攻を命じた。三成の居城佐和山城を落すためである。

その佐和山城跡は彦根城から指呼の間にある。しかし講師の説明を聞かなければ場所を推定できないほど跡形を残していない。それほど徹底的に破壊された。

そして石垣などは直政の子の代になって築城された彦根城にすべて運び込まれたという。

直政は井伊藩三五万石の藩祖であり、二百数十年後の幕末では大老井伊直弼の登場となる。

その彦根城の見学は私にとっては二回目。最初は昭和三〇年代、初めての大阪勤務の際、桜の満開の頃に訪ねたが、琵琶湖を背景にした風景は今にいたるまでこれほどの桜の絶景を経験したことはない。

丁度、NHK最初の大河ドラマ「花の生涯」が放映されていた頃で、国宝天守閣のほか直弼が若いころ過ごしたという「埋木舎」（国史跡）などを見て回ったが、今回は、前回よりも琵琶湖がより遠くに感じられたのはその後、この湖の埋め立てがあったためであろうか。

それにしても城を囲む二重の塀、本丸、西の丸、二の丸そして天守閣と当時のままの姿を完全に残している城郭は全国でも珍しいのではないか。

この日、泊まったホテルの窓から望める彦根城の威容はさすが国宝にふさわしいものだったが、司馬も宿泊したホテルから城の夜景を眺めて「感動した」と記し、翌朝、散歩がてら登っている。また「維新のとき、太政官令によって多くの城がこぼたれたが、伝承によると明治天皇がこの城を見、その典雅さに感じ入ってぜひ残せということで残された」ことを披露している。

三　姉川古戦場跡

この後、司馬は姉川に向かっているが、私たちもW先生の案内で姉川古戦場跡を見学した。

姉川は琵琶湖に流れ込む最大の河川で湖東平野の北部を流れている。

この姉川を挟んで元亀元（一五七〇）年、織田（尾張）、徳川（三河）連合軍二万九千と浅井（近江）、朝倉（越前）一万八千が戦った。我々は信長が陣を張ったという小高い山に登り、W先生から両布陣の説明を聞く。

先生は私とほぼ同年輩だが、日頃、城めぐりで鍛えられているせいか山登りも得意で軽やかに登ってゆく。我々はフーフー言いながら後を追うのが精一杯の始末だ。

姉川橋の袂に「史跡　姉川古戦場」の標識と両陣営布陣の見取り図が建っていた。

司馬も書いているように両陣営の人数からいえば織田陣営が優勢だが、兵の強弱からいえば近江兵の方が尾張兵より強い。事実、七段構えの織田軍は第五段まで突破されたが、これを救ったのが左翼に陣した徳川軍五千だった。

この合戦場からはるか北西の方向に浅井氏累代の居城である小谷城跡の山が遠望できる。

司馬はこの城跡には行かなかったらしいが（彼は山登りが苦手のようで、たいてい「まあ、ここから拝礼しましょう」となる）、我々は小谷山にも登った。途中まではマイクロバスを利用したが、それから先も大変だった。わずか二〇〇メートルほどの小山だが元来、山城とは下から攻めて来られないように縄張りされている。それだけに山頂に達する道は曲がりくねって狭く、登るにはかなりの体力を必要とする。

ようやく本丸のあった山頂に達したが、その近くに姉川の合戦に敗れて自刃した三代浅井長政（信長の義弟）の粗末な碑があり、一輪の花がさびしげに添えられていた。

先生の話では此処まで訪れる人は少ないという。

四　安土城跡

「近江散歩」では司馬は小谷城跡ではなく、鉄砲鍛冶で名高い国友村を訪れている。

司馬お得意の「鉄砲伝来記」である。そして「天文十三年創業　国友源重郎商店」に寄っているが、この店に

ついては「世界最古の鉄砲火薬店といっていい」と書いている。何しろ天文十三（一五四四）年といえば鉄砲伝来の翌年であるから、たしかに古い。

その後、司馬は信長幻の名城であった安土城跡に登る。

彼が最初にこの山に登ったのは中学生の頃だったようで、そのときの苦しさを今でも覚えているという。そのとき引率の先生から「登ると美しいものが見られるぞ」と追い立てられ、最高所の天主台跡に達すると予期しないことに目の前いっぱいに琵琶湖が広がっていた。

信長がこの城を築いた頃は山というよりも岬であり、城半分は水の上だった。

「近江散歩」でも再度、司馬は登っているが「石段をのぼるつらさは、昔と変わらない。我ながら浅ましいほどに大息をついては休息」と書いている。それに反して八〇歳に近い須田画伯はしなやかな足どりで登っているのに感心している。「体の出来がちがうのである」と。

我々も須田画伯のように元気なW先生に引き連れられて山頂を目指した。登ってすぐの両端に秀吉、利家の陣屋が並ぶ。秀吉邸の方がわずかに大きいのは、この頃にはすでに両者の力関係が逆転していたためだろうとは先生の話。その坂の上に嫡子信忠邸があるが、秀吉邸に比べてかなり狭い。

曲がりくねった道は石段の歩幅が一定せず、かつ左右の高低さが極端に違うのも下からの難攻を意図して、故意に作られたものだろう。

安土城の築城は突貫工事だったそうだが、重い石垣などをどのようにして山頂に引き上げたのだろうと我々は話し合いながら山頂を目指した。

「幻の城」安土城は天正十（一五八二）年にすべて燃えてしまい、石垣を残すのみである。放火したのは城を守備していた明智秀満とも、明智軍退去後に城を占領した信長の次男信雄ともいわれるが真相は闇の中。ただ残された石垣のみが城塞の壮大な規模を今に伝えている。

ようやく山頂に達した司馬だが、中学生のころ感嘆した山頂での琵琶湖の風景はまったく見られなかった。

「こんども、安土城跡の山頂から、淡海の小波だつ青さを見るのを楽しみにして登った。（中略）が、のぼりつめて天守台跡に立つと、見渡すかぎり赤っぽい陸地になっていて、湖などどこにもなかった。やられた、とおもった。」

戦後の琵琶湖の埋め立てのせいである。

ここからは「余談として」戦後の土地造成の話に及ぶ。「秋田県散歩」で八郎潟の埋め立てのおろかさを指摘した論法と同じである。

五　長浜城

「近江散歩」には登場しないが、我々は秀吉の出世城となる長浜城も見学した。

「信長が浅井氏をほろぼしたあと、その旧領である北近江の大半を秀吉に与えたのである。（中略）秀吉はその小谷城にすわってもよかったのだが、小谷の山頂の城に一顧もせずに湖畔に新城を築いたのは、秀吉の卓見と言える。」

「城が商業の中心になるというのは、それ以前にはない考え方であった。」（播磨灘物語）

秀吉の「軍事中心から経済中心」の考え方の出発点となった城であるが、今まで「今浜」といわれたこの地を「長浜」と変えたのは、それ以前、井ノ口を岐阜と変えた信長の真似だろう。

（秀吉は長とか大という字が好きだったようで、後年、大阪に本拠を移したときも、それまで「おさか」と呼ばれたこの地を大坂と書くことを公にした）

またこの城は「功名が辻」の山内一豊も城番と城主を経験している。

しかしその後、彦根城築城のため「一国一城」により、元和元（一六一五）年に廃城となってしまったので、現在の城は昭和になってから新しく建てられたもの。

そのせいか正直いって全く風情を感じられなかった。

城外にある秀吉の像も関白太政大臣の容姿ではつや消し。

せめて木下藤吉郎時代のものにすれば、と皆で話し合ったものだった。

しかし長浜市内は「曳山まつり」の最中でもあって昔の風情を残していた。

「曳山まつり」は長男の誕生を喜んだ秀吉が、領民に砂金を与え、それに応えた領民たちが山車を作り城下を曳き回して祝ったのが発祥といわれる。

市の中央を北国街道が縦断しているので、「街道をゆく4（北国街道とその脇道）」に載っているかと帰宅後、調べたが長浜は載っていなかった。

司馬が歩いた北国街道は長浜より湖北の余呉湖から越前への道である。

六　賤ヶ岳古戦場跡

その余呉湖の近くに「賤ヶ岳古戦場跡」がある。

ここは山頂近くまでケーブルで登ることができる。秀吉が光秀を滅ぼした後、天下統一の第二段階として越前からの柴田勝家を破った古戦場。

秀吉の勝利には勝家側だった盟友前田利家の寝返りが大きかった。

「柴田方が負ければ利家は自滅しなければならない。それよりも「友情と律儀」によってこの場合は兵を退き、秀吉に恩を売っておいたほうが身のためであろうと利家は考えた」（新史太閤記）

また、この戦いは「賤ヶ岳の七本槍」を有名にした。

司馬は、その有名な七本槍の中で最も地味な平野権平

を主人公にして短編「権平五千石」を書いている。
他の同僚六人はいずれも大名に昇進した。例えば加藤清正―肥後熊本の城主で二十五万石（のちに倍に加増され五十四万石）
福島正則―尾張清洲の城主で二十四万石（のち安芸、備後で四十九万八千石）
加藤嘉明―伊予十万石（のち会津四十余万石）
そのほか脇坂安治―淡路洲本三万石（のち播州龍野五万余石）片桐且元―一万石　糟谷貞雄―一万二千石とみな時めいていたが、権平のみ終生五千石でうだつが上がらなかった。
また辛うじて大名になったものの他の五大名と違って「自分をなんの取り柄もない男だと考えている」脇坂安治（通称、甚内）が主役の短編が「貂の皮」である。
甚内は武勇よりも大名行列の槍のさやを貂の皮で飾ったことで有名になった。江戸や東海道すじに住む住民にとって「貂の皮」といえば脇坂氏の代名詞ともなった。
皮肉なことに、徳川の時代に入って他の五大名が次々と没落するのに反して、ウダツの上がらない脇坂家と平野家のみが「徳川時代にも生きのび、維新までつづいた。」
山頂から見下ろす余呉湖が美しかった。

桐の花影
――吉良側の忠臣蔵余話（二）――

忠内正之

（二）黄金堤

吉良町の郷土玩具としてよく知られているものに「吉良の赤馬」がある。
その由来は領国入りした時の義央の気軽で飾らぬ姿を今に写している。
義央は高家として江戸城中で多忙の毎日を送っていたが、時として領地を訪れた。
古くから様々な興亡の歴史を刻みこんで来た吉良の山野も今は平和な静かなたたずまいの中にある。
吉良の領国七ヵ村を支配する陣屋は、三ヵ所あった。岡山、乙川（おとがわ）、宮迫（みやさこ）の陣屋であるがいずれも規模は小さく、領主の入国の際、殿様の地位にふさわしい乗馬を常に用意するわけにはいかなかった。
義央も巡視のため、わざわざ立派な馬は要求しなかった。陣屋の代官が日常使っている駄馬、すなわち赤馬にうちまたがって巡視したのである。人々はその飾らない真実の姿にふれて限りない親しみを覚えたのであろう。吉良の赤馬として今も言い伝えられている所以である。
義央が将来を託していた次男三郎が貞享二年（一六八五）九月、わずか八才で夭折した。既に述する通り止むを得ぬ事情から長男三之助を上杉家に養子にやった後、漸やく生まれた次男に自分の幼名であった三郎と命名しその将来の夢を託していた。日に日に怜悧に育って行く三郎の成長ぶりを楽しみにしていたのに突然希望の芽をつみとられてしまった。義央の悲嘆のほどは如何ばかりであったろうか。
心の大きな痛手を忘れ、また三郎の供養にもなるならばと考え、知行地の領民のために私財を投じようと決意

した。その翌年の貞享三年九月、後世名付けるところの黄金堤を築くのである。

吉良町岡山と瀬戸の間にある狭間は戦国時代まで深い渕になっていた。鎧ヶ渕と言った。詳細は略すが室町時代の古戦場の跡で武者の鎧で埋った程激戦があったらしい。

当時は既に平和な田園地ではあったが、常時洪水を起こし水路もそのたびごとに変るという泥沼地帯だった。時としてこの一帯で発生した洪水が深い渕となっている鎧ヶ渕の狭間を激流となって流れ下り吉良領やそして松平備前守領の一部である田畑や家財を流すのである。

義央はこのことを土地の代官から事情を聞いており渕の上流に築堤して領民の難儀を取り除こうと思いついたのである。

この事業が吉良義央の私財とその領民のみによって行われたとするといささか疑問もあるがともかくその主導権を吉良が持ち、これに隣地領主の松平備前守が何らかの形で支援していたのでは無かろうか。因みに松平氏も吉良氏の先祖の東条吉良氏に使えた大河内氏の子孫であるため、容易に合意を得た。

さて渕の上流に築堤されて困るのは上流側の西尾藩の住民である。これを築かれると洪水で溢れた水のはけ口が西方の矢作川の支流である矢作古川のみとなり自領の水害がひどくなる。

そのため交渉は難航するが、政治力で有位に立つ義央が直接西尾藩主土井兵庫頭利長と相談の結果、極めて厳しい条件、すなわち①一夜にして築堤すること②一度沢壊したら再び築堤しないことなどの条件をのんで築堤が行われた。西尾藩側の領民の反対等を考えての措置であった。

機械力のなかった当時、伝説によるとこの工事には下流の住民たちの老若男女が率先奉仕して一夜で完成させたという。長さ百八十メートル、堤脚の幅四メートル、高さ四メートルの堰堤を築くことは今日でも至難のわざといえるが、昔の人がいかに血みどろ、汗まみれになって築いたか、その努力の跡を語り伝えた伝説であるが、義央の威光によって堤が築かれたのは事実である。

下流の住民は、吉良、松平の別なくそれまで毎年繰り返された洪水の被害を受けることもなく秋の収穫は安定した。湿田も次第に乾田になり、二毛作も可能になった。

築堤以来、毎年秋になると吉良、松平の村々は稲穂の波が黄金色に輝やき、春には麦穂や、菜種の花が田を金色に彩った。菜種からは油が搾られ、灯油で利益を得た。いつの頃からか、人びとはこの豊かな実りをもたらしてくれる堤を黄金堤と呼び、義央の徳を子孫に語り伝える様になった。

現在では黄金堤は桜の名所ともなり、義央が赤馬に跨った銅像が立ち、記念碑が並んで昔日の治績を語り継いでいる。

(三) 富好新田の干拓と塩田

黄金堤を築いた貞享三年（一六八六）、米沢城で上杉綱憲の子春千代が生まれた。これが後の吉良家を継ぐ。その翌年には義央・富子の三女阿久里姫が津軽信房に嫁ぐなど、吉良、上杉家には慶事が続いたが、その頃から妻富子が眼を病み始める。かなり重く名医といわれる医者にいろいろかかり、手当の限りを尽くしたが一向によくならない。

富子はこのまま失明してしまったらと考えただけでも恐ろしさに身がすくむ思いであった。ある夜夢まくらに美しい童女が現われ、「眼の病を早く治したければ甲斐国身延山の七面大明神を祈れ、われは七面天女の使者なり」と告げた。

その啓示に従って身延山に参詣し、十七日間精進潔斎して参籠祈願したところ、さしも頑固だった病が薄紙をはぐ様に快癒していった。

その感謝の気持ちから新田開発を思い立ったのである。

ところで時代は元禄に入りつつあった。豊臣氏が滅んでおよそ七十年が過ぎ、泰平の世が定着し、経済、文化もこの頃を境に飛躍的に開花したのである。

室町時代まで公卿や武家の間に止まっていた高度の文化も、この頃にはすっかり庶民のものになっていたし、経済も元禄時代の前後では倍増の発展を見た。

各藩は新田の開拓や新しい産業の育成を競って進めていた。富好新田も農地の拡大と共に義央が塩田の開発や製塩法の改良など、かねて念願していたものを実現したかったのである。妻富子の願いによるものだけではなかった。

新田の開発は、沿岸湾の遠浅部分を干拓埋立てするもので、元禄元年（一六八八）に着工された。

工事は、「東乙川」の山麓の西側から西方にかけて堤防を延長し、西は「小山田」の南部から堤防を南へ延長し、両堤を統合して海を締め切り、干拓を進めた。三年がかりで締め切りを終えたが、機戒力のなかった時代、どの様な方法で進められたのであろうか。

元禄三年には排水も完了し、いよいよ新田の造成にかかったが、この年の暴風雨のため新堤防は殆んど崩れ、折角締め切った新田造成地も再び海に戻ってしまった。この痛手は極めて大きく、しばらく工事は放棄されたままだった。

この間、養子願を幕府に提出して許可された。元禄三年、上杉家の二男春千代（五才、義央の孫）を養子として鍛治橋邸に迎える。上杉の家臣新貝弥七郎が春千代の付人として仕えることになった。

元禄八年工事は苦労の末再開され二年後の元禄十年十

二月に漸やく竣工したのである。着工してより実に十年の歳月を要している。どれほどの工事費と労力を要したかは記録が無いので不明であるが、四千二百石の吉良氏にとっては極めて重い負担であったであろう。しかしこれによって面積九十町歩（九十ヘクタール）収穫一千石の新田が誕生したのである。

富子夫人の眼病の全快と神佛に感謝する気持ちからこの新田が生れたことに因み、人びとは富好新田と名付けたのである。翌十一年、富子夫人の祈願をかけた身延山久遠時の七面天女の分身を請い受け、これを新田の守護神とした。いま、この七面天女像は富好新田の「七面山眞正寺」の本尊となっている。

蛇足を加えるが、筆者は吉良町富好新田の生まれ、育ちである。眞正寺は現在では新田の略眞中に存在するが、筆者の生家は眞正寺から約三〇〇メートルの近くにある。姓を渡辺と言う。渡辺一族十数軒はいずれも自作農を営み新田内に耕地を有している。吉良家滅亡の時、資料が全く消されているので分別は至難であるが、新田開発時に干拓に従事し完成後耕作権を得て、内陸地区から移住して来たと思われる。因みに干拓を担当した姫陣屋には渡辺姓の代官が二名存在したといわれるからその縁者の末裔の一族かと思われる。現在も渡辺一統は健在である。

富好新田は三百有余年を経て現在も立派な美田の形体を保っている。過去何度かの地震風水害を受けているが、他の地区に比して被害は極く僅少で守り神「七面天女」のお陰と益々強い信仰に守られている。

義央は、九十八町歩の新田のうち十五町歩を塩田にして製塩業を盛んにしようと考えた。吉良の製塩業は富好新田の開発とともに始まったわけではなく、出土する古墳からも製塩壺が発掘されているぐらい古い歴史がある。しかし製塩法は古式入浜とよばれる原始的な方法で規模は小さく、いずれも農家の副業的な家内生産であった。

浅野内匠頭の刃傷の原因について、製塩技術をめぐる吉良と浅野の確執があったという説がある。

当時播州赤穂を中心とする瀬戸内海沿岸では既に合理化された新しい入浜塩田法によって大量の塩を生産していた。なかでも赤穂塩は自国領内ばかりでなく、海路によって江戸や大阪などの遠隔地にまで販路を広げていたのである。

吉良側は赤穂の技術を導入しようとしたが、赤穂では製塩の技術を秘密にしてなかなか教えてくれない。そこでひそかに隠密を送りこんで技術を盗もうとしたが、何人かは発見されて殺され、かろうじて浜子としてもぐりこんだ者が技術を習得して吉良に戻り、ようやく悲願を達した。

このことで吉良が浅野を恨み、浅野も技術を盗まれたことを根にもったのが事件の遠因だとの説があるが、小説の筋書きとしては面白いものの天和二年（一六八二）に仙台藩が塩業技術者の派遣を要請したとき既に赤穂藩はこれに応じている。吉良が入浜塩田法を導入しようと思えば出来たのにそれをしなかったのは、地質や地勢などの自然条件が違っていたからだろう。

筆者の生家も製塩を兼業としていたので少年のころ随分手伝わされたが、製塩業は技術よりむしろ肉体労働だけで成立する一次産業だったと記憶している。

赤穂塩と饗庭塩（吉良荘の塩の代名詞である。）との間に販路の競合があったという説にしても、饗庭塩はニガリの少ない良質な塩で、味噌醤油の醸造家にも愛用され、三河以外の尾張、美濃、北伊勢、信州にまで販路は広がっていたが、大量生産される赤穂塩とは用途も販路もおのずと違っており紛争の原因になったとは考えられないのである。

二十一世紀の現代では塩の大量消費時代となり、日本の製塩業はコスト競争の上からも対抗出来なくなり、安価な輸入塩に依存する状況にある。各地の塩田は殆んど消滅してしまった。

富好新田の塩田も例外でなく宅地化されて学校や住宅となっており、塩焼く煙の立ち登った風景を偲ぶ筆者は今昔の感に堪えない。

吉良海岸の旧塩田跡の一隅に、町立の記念館が建てられており往時殷賑を極めた塩業の盛況ぶりを知ることが出来るのが唯一の救いである。

以上縷々述べて来たが、機械力も技術力も乏しかった時代に、この様な大事業を成し遂げたことは義央の秀れた政治力と閨閥の力がバックにあったとしてもかなりの困難が伴ったことは想像するに難くない。

領民と領地に対する限りない思い遣りと、妻子への深い愛情があってこそ達成出来たのであろう。

矢張り吉良上野介義央は名君であったと断言出来るのである。

文化勲章に輝く

赤堀四郎博士の一生（十二）

松下魏三

二十　生涯の恩人　眞島利行博士

赤堀博士が眞島利行博士と初めて出会ったのは大正十年（一九二一年）の夏、西島勇志智先生の助手として二か月間仙台の東北帝大眞島研究室に内地留学したときであった。

この頃西島先生は有機化学を勉強し直そうとしたばかりの時で、当時東北帝大の眞島博士の研究室は日本の有機化学のメッカといわれ、眞島先生が心血を注いで築いた城と呼ばれていたので、赤堀助手を連れて眞島研究室に内地留学をしたのである。

この内地留学で眞島研究室の雰囲気に触れ、強烈な衝撃を受けて東京に帰ったが、帰京後も眞島研究室に対する憧れにとりつかれていた。

その後生涯の恩師となる眞島博士の人となりについて述べることにする。

眞島利行博士は京都の出身で町医者であった父眞島利民の長男として明治七年十一月十三日に生れた。父は大阪の有名な緒方洪庵の適塾に学ばれ、後に長崎に行き、英国人の医師から西洋医学を学んだといわれている。

眞島利行博士は後に大阪帝国大学の総長に就任されたが、大阪帝大は適塾の流れを汲むといわれているので不思議な縁というべきである。

眞島利行少年はその後上京して第一高等中学校（後の旧制第一高校）から当時大学は東京に一つしかなかった帝国大学理科大学化学科に明治二十九年（一八九六年）に入学した。

眞島は大学で有機化学を勉強したかったが帝大では本格的に有機化学を教える先生がいなかった。そして明治三十二年（一八九九年）に帝大を卒業し、化学科の桜井錠二教授のもとで大学院生となり、さらに助手となったが、研究題目はないまま助教授となった。

東大は当時まだ世界の化学の紹介や輸入機関のようなもので本格的な研究ができる体制ではなかった。

眞島は研究者となるために当時欧米の有名な有機化学の大家であったA・バイヤー（一九〇五年・ノーベル化学賞）やH・E・フィシャー（一九〇二年・ノーベル化学賞）の重要な研究論文を徹底的に読みこなし、研究の着想や研究途上の困難の突破口についての工夫などをほとんど独学で学んだのである。

このような努力の結果、物質の多様性や意外性などを知り、日本の伝統工芸である漆器の塗料である「うるし」に心を惹かれて研究に着手した。

まず眞島は明治三八年（一九〇五年）工業試験所で「うるし」の研究をしていた三山喜三郎氏を訪ねて、研究について協議し、応用方面のことは三山氏・基礎である成分の研究は眞島に任せてほしいと頼み承諾していただいた。

この頃から「うるし」の輪郭のようなものがようやくわかりかかった段階で、「うるし」の構造を決定するまでには多大な困難があった。

東大では長俊一という学生が眞島助教授の指導を希望していたので学生の卒業研究として研究し、「うるし」の乾溜生成物として気体の炭化水素と液体の水に溶けるプレンツカテキン（カテコール誘導体）を得ることができた。この研究により「うるし」の研究がはじまり、明治四〇年（一九〇七年）にドイツの学会誌と東京化学会誌に発表した。

さらにその年には新設の東北帝国大学理科大学の有機化学教官要員として文部省から海外留学を命ぜられ、ドイツ・スイス・イギリスで研究することになった。

留学の二年目の明治四二年には、ドイツのキール大学のC・Dハリエスの研究室で「うるし」の高度減圧蒸留によって「うるし」の成分であるウルシオールの研究をし、基本的なテクニックを学んだ。このテクニックは高度減圧蒸留とオゾン酸化であったが、ここに滞在した終りの頃には常圧接触還元法についても学んだ。

その年には再びチューリッヒに戻り、葉緑素の研究で有名なR・M・ウイルシュテッター（一九一五年・ノーベル化学賞）に師事して常温接触還元法を学び、ウイルシュテッターとともにキノン定量法を開発した。これはウイルシュテッター・眞島法として世界の学会で注目された。

その後眞島は英国に渡り、東大の学生時代、無機化学

を教えていただいたダイバースと再会し、米国を経由して明治四四年（一九一一年）に帰国し、東北帝国大学で有機化学の研究を始めた。

東北帝国大学に赴任した眞島は化学実験室を整備するために万全を期して高圧給水や実験用ガラス工作の技術者の育成も手がけ、かなりの年月をかけ、多くの人々の協力によって多くの仕事を完成していった。

特にウイルシュテッターのもとで学び、身につけた研究手段である常温接触還元法をウルシオールに適用し、六年間にわたり研究を続け、ウルシオールは不飽和側鎖をもつカテコール誘導体の混合物であることがわかった。

これらの研究により眞島は大正二年（一九一三年）に桜井褒章・大正六年（一九一七年）には学士院賞を受賞した。その後昭和六年（一九三一年）に大阪帝国大学が新設され、その創設委員となり、設立後は理学部長として初代総長の長岡半太郎博士と協力し、理学部に新進の学者を集め、その充実発展に努めた。

その後昭和一八年（一九四三年）一月には大阪帝国大学総長に就任し、昭和二十一年（一九四六年）に退官するまで昭和二十年の終戦を挟む、苦難の中で大学の運営に尽力した硬骨の学者であった。

終戦も間近い頃、大阪帝大の臨時評議会の席上で配属将校の陸軍大佐が学生の軍事教練の時間を増やせと強硬に要求したとき、眞島はその大佐に向って「君は軍事訓練のことしか考えていないが、大学というところは軍事訓練だけをやるところではない。」と激しい言葉で拒否した。

当時陸軍大佐といえば平時なら兵士三千人を指揮する連隊長[註2]で、中等学校以上の高等や大学には配属将校がいて、軍事教練や軍事についての講義をしていた。帝国大学となれば学生や教官のお目付役でもあった。

したがって、軍人は絶大な権力を握っていたので軍に反対することは大変危険であった。赤堀四郎博士も教授としてこの評議会に同席し、心の中では眞島先生の勇気に称賛の拍手を送っていたが、眞島先生の身を案じてハラハラし通しであった。幸い何事も起らなかったが、同席した赤堀四郎教授はじめ多くの教授は気の立った軍人の反応にハラハラしながら眞島博士の凛とした姿勢と勇気に驚いたといわれている。

当時の大阪帝大は医学部・理学部・工学部という理科系の学部で構成されており、それぞれの専門の科学知識を修得し、研究する最高学府であったが、戦局が悪化したために配属将校は竹槍で敵を刺殺する訓練を優先させようという衝動的な発言をしたのである。

その後昭和二〇年八月には終戦となったが、戦後の社会の混乱と窮乏が続くなか昭和二一年（一九四六年）には大阪帝大総長を辞任した。

眞島博士はこのような窮乏のなかでも戦争で痛手を受けた日本の科学は必ず復興する。しかも速いスピードで回復すると見ていた。これは眞島博士の天性ともいうべき明るさと芯の強さを示しているのである。

このように常に「希望」という心の支えをもって日本の有機化学の開祖ともいわれる素晴しい研究業績を残すとともに多くの優秀な弟子を育て、教育文化の発展に尽し、産業界への橋渡しにも貢献した大化学者であった。

このような多大な功績により昭和二四年（一九四九年）には文化勲章を受賞した。そして昭和三六年（一九六一年）に米寿を祝った翌年の八月十九日逝去されたのである。

赤堀四郎博士は冒頭に書いたように一九二一年の夏西沢先生の研究助手として東北帝大の眞島研究室に内地留学をしてから東北帝大に入学・大学院と眞島博士の厳しい指導を受け、同大学の講師となり、さらに眞島博士の姪と結婚した。その後海外留学を命ぜられ、帰国後は大阪帝大の助教授・教授を経て、眞島博士が一九六二年に他界されるまで四十年余りにわたり厳しいなかにも温かい指導と薫陶を受けた。

眞島博士の眞理に対する探求心は赤堀博士にも受け継がれ、赤堀にとっては文字通り公私にわたる生涯の恩人であった。

（註1）配属将校
学校配属将校の略（広辞苑による）

（註2）連隊長
連隊の長で、連隊を統率する責任に任ずる者（広辞苑による）

（参考資料）
「わが青春」赤堀四郎
（静岡新聞・一九九〇年一月六日～三月二〇日）
「化学者たちのセレンディピティー」
吉原賢二著（東北大学出版会）

掌編小説5

体育入門

亜木陽一

最近の婆さん、スーパーの荷物が重いので、肩がコリコリ。
買い物にわしがついて行くことにする。
おいしそうな、いいものあるかな、店の中をキョロキョロ。
子供・若者・主婦・年寄り。
数多くの世代が右往左往している。
あたりを見ると、つい年寄りに目がいってしまう。
顔が隠れてしまう程の大きなわら半紙に大きな字で書いたメモを、チラッチラッと見ながら買い物をしているじいさん。
もう少し小さめの白い紙に買う物を書いて、ショッピング・カーを押している老夫婦。
うちの婆さんは、と見ると、手のひらに入ってしまう様な小さなメモを持っている。
買い物がすんで外に出ると、スーパーの横の狭い空地でラジオの体操をしているじいさんがいる。
じいさんは上体を曲げる体操を始めたので、婆さんは先に帰ったが、わしは荷物を持ったまま、もう少し見て行くことにした。
わしは前屈しても指先がいつも下につかないので、婆さんに身体が固い固いと言われている。
じいさんは上体を曲げると、両方の手のひらがピタピタ地面についているではないか。
驚き！
体操が終わるとじいさんは、丁寧にヘルメットをかぶり、隣に止めてあったバイクに、さっとまたがり、若者のように格好良く走り去った。

次の日、わしは久し振りに駅まで行くバスに乗った。
中はすいていてゆっくり坐り、何気なく外の景色を眺めていると、小柄なわしくらいのじいさんが走っている。
よく見ると、昨日スーパーで体操をしていたじいさんではないか。
野球帽をかぶり、ジャージの上下で、バス通りに沿ったガソリン・スタンドの前を走って来た。
バスは停留所近くでノロノロ運転、じいさんは颯爽と走り抜けた。
わしはいろいろなことに挑戦して見たが、体操はまだしてなかった。
ランニングやバイクは無理なので、今年は体操を取り入れよう。
年を取って身体が堅くなると怪我をしやすいので、体操で柔軟性や筋力を少しでもつけていこう。
わしの今年の課題。

祝出版

「報徳の教え」
「韮山に咲く報徳の花」
堀内永人著

静岡新聞社 ｛735円 1,470円

化粧のルーツを訪ねて（五）

第三話　日本の化粧文化史（1）

鈴木　守

はじめに

第一話では歯の化粧、第二話では額の化粧について述べた。第三話では、日本の化粧史を近世から古代以前へ遡ることにする。

近世・江戸時代の化粧の様子は浮世絵に描かれ、川柳にも詠まれている。また、第一話で登場した岩瀬百樹は『歴世女装考』の中で、「およその女性たちは、紅白粉を顔に粧うが、好色のためではなく礼儀である。由緒ある家に仕えている女中は、年をとっても朝夕化粧を施している。賤しい市中の女も不幸があれば、素顔が礼儀であるとし、後家は尼に類することとして化粧しないのが常識である」と江戸末期、一八世紀の化粧について述べていた。

このような資料からみると、化粧風俗は江戸以前の時代まで遡ることは必至であろう。したがって、第三話では近世以前に焦点を当てるが、予め明治以降の化粧史の概要に触れておく。

近代の化粧史では、明治時代初頭に公家のお歯黒と眉化粧が禁止され、この時代は欧米文化の導入期であって、化粧についても舶来品を尊重したハイカラさんの時代であった。明治二三年に"化粧品"という言葉が誕生し、大正時代には欧風化粧の大衆化が進められた。

現代に入り、昭和初期はモボ・モガの時代であり、化粧は一般民衆の間にも広がったが、その後、日中戦争や太平洋戦争中は、「贅沢は敵だ」の標語の下で化粧風習も下火となつた。終戦後は日本経済の復興もあり、平和

憲法の下で世界でも有数な化粧大国となり、化粧品産業は隆盛の時代を迎えたのである。

ところが、二〇〇七年の世界各国の軍事費をみると、平和憲法を制定している日本が米、英、中、仏に次いで、世界五番目の軍事大国になっている。ロシアよりも八〇億ドルも多い軍事費だったとは驚きを越えて呆れかえる次第であるが、それと同時に、平和産業である化粧品業界の翳りを予感させる今日この頃である。

第一節　近世・江戸時代の化粧

わが国の近世は、徳川家康が江戸に開府した一六〇三年から徳川幕府崩壊の一八六八年まで、いわゆる江戸時代である。この時代は裏長屋の内儀さん連中も化粧し、かつまた、字を書ける人も増えたため、数多く書に化粧が記載されていた。したがって、化粧の種類ごとに話を括めることとする。

1　赤化粧

赤化粧は赤く彩る化粧であり、口紅、頬紅、爪紅による化粧がある。

（一）口紅

紅指しの姿態は浮世絵師の心を擽ったのか、喜多川歌麿を始め、勝川春潮、鳥居清峰、歌川国貞らが口紅を塗っている美女を描いている。

川柳も紅の句を詠んでいる。口紅をつけるときは、口を歪めたり開いたり、殿方には見せたくない表情をする。その様子を詠んだのが、「唇に反りを打たせて紅をつけ」の句である。

当時の紅は高価で、猪口に紅を塗り付けて売っていた。紅猪口である。お内儀さんが紅をつけているところへ子供が来て、珍らしげに紅猪口へ指を入れようとする。お内儀さんは慌てて「お弄りでないよ」といいながら猪口に蓋をする。こんな光景を十七文字にしたのが、「お弄りでないと蓋する紅の猪口」である。

井原西鶴は『好色一代女』に「風呂屋の女が口紅用捨なく塗りくり」と記していたが、『好色一代男』には「蓮葉女が口紅粉むさきほど塗りて…」と著していた。かように口紅は口紅粉と書かれたり、ほかに唇紅の表記もあった。口紅化粧を"口けはい"と記した書もみられた。

（二）頬紅

浮世絵や川柳に頬紅は見当たらなかったが、佐山半七丸の『都風俗化粧伝（化粧伝）』など数点の書に記載されていた。平賀源内は那須与一を引き合いにして、「宿

屋の出女の頬紅は真ん丸にて、よっぴき兵と放つべき…」と『風流志道軒』の中で野暮な化粧をからかっていた。頬紅は、つらべにや煙燕脂と表記されることもあった。

（三）爪紅

爪紅を〝つまべに〟と読めば、爪を赤く染める化粧、現代のネイルカラーであるが、〝つまくれない〟といえば鳳仙花の異称である。

爪紅には「爪紅を草に残して春の野辺」の句があり、「締め返す手に爪紅のこぼれ梅」とも詠まれていた。先の句は、百人一首馴染みの「君がため春の野に出でて若菜詰む…」を思い起こさせるが、後の川柳では、酒席で男がこっそりと手を握ると、相方の女性が意味ありげに握り返した、とそんな情景が浮かんでくる。

貝原益軒の『大和本草』に「鳳仙花は別名金鳳花。女児此花を酢漿草の葉を揉み合わせて爪を染む」と記されていた。ところで、熊本と宮崎県境、九州山地の山麓地帯に故郷をもつ数人の方から「子供の頃、鳳仙花で染めた」という証言を得ている。また、韓国帰化人の藤山桃香さんは、「鳳仙花をホウ酸と一緒に潰して爪にのせ包帯で一晩縛って染めた」と子供の頃の体験を語って爪を染めてくれた。したがって、爪紅の風習は過去の物語ではなかった。

話は江戸時代に戻る。『諸家奥女中袖鏡』は、「爪は肉の余りだから爪紅粉で隠し、濃く幅広に塗った爪化粧は化粧ではない」とし、女重宝記には「爪紅は宮女の化粧であって下々の化粧ではない」と記されていた。

だが、先のこぼれ梅の女性には官女の雰囲気はないし、辰巳芸者は足の爪も染めていたといわれているので、爪紅は必ずしも官女の化粧とはいえない。官女の化粧が粋筋に伝播したのであろうか。

（四）赤化粧の色素

口紅と頬紅の色素は、紅、紅粉、紅脂あるいは臈纈と表記されているので、紅花の色素を粉あるいはペーストにして使っていたことが知れる。爪紅には鳳仙花が使われていた。

松尾芭蕉が出羽の国を訪れたとき、紅花が眉刷毛に似ているので、化粧のイメージを重ねて「まゆはきを俤にして紅の花」と『奥の細道』で詠んでいた。紅花は紅藍花、末摘花とも呼ばれ、源氏物語には鼻の頭が赤い妃・末摘花が登場する。

紅花は赤色と黄色の色素を含むので橙色を呈し、これを脂肪に混ぜたものが燕脂である。現代の燕脂は紅花由来のものではない。ラック貝殻虫から採った生エンジであり、胡燕脂ともいう。

ところで、燕脂、生エンジとは別に、エンジ由来の赤色々素コチーニルがある。これらの赤色々素は化学的に異なっているが、エンジの名に所縁があるので混同してしまう。

口紅、頬紅には、無機顔料の丹や朱も使われていたが、爪紅には専ら鳳仙花を使っていた。この色素はタンパク質と結合し易いので、爪の周りに脂を塗ってから施さないと指先まで染着してしまう。

（五）紅の販売と用具類

江戸時代には、すでに紅の販売店があり、紅店、紅粉店、紅粉屋と表記されていた。渓斎英泉の浮世絵には、美女の傍らに笹色紅が点景として描かれていた。ここでいう笹色紅は商品名である。その他の商品名に尼が紅、天が紅、おまんが紅、玉屋紅などがあった。

紅筆、紅皿、紅猪口のような用具類については、『婚礼道具諸器形寸法書』に詳しい。口紅は前出の川柳のように紅猪口からとり出し、薬指を使って塗ったため、薬指を〝紅指し指〟というようになった。

2　白化粧

白化粧は白粉による化粧である。

歌麿や英泉が白粉掃きの女性を描き、川柳は「二つ三つ面を叩いて白くする」や「誘う水にて白粉を後家は溶き」と詠んでいる。後の句は白粉を水で溶いて塗ったことを教えてくれる。『七十一番歌合』に「恋すとや人のみるらむ、おしろいの、きはつくまでに流す涙を」が謳われていたので、白化粧の風習は江戸初期まで遡ることになる。

（一）白粉

『諸家奥女中袖鏡』などには「白粉は祝儀物だから凶事に粧うものではない。真っ白な厚化粧は田舎者の化粧で見苦しい」と白化粧の心得が説かれ、また「化政文化の頃までは化粧も濃かったが、天保の改革で奢侈を禁じられたため、厚化粧で人目に立つのを避けて薄化粧になった」と江戸後期の化粧風俗の変遷を記した書もあった。

新井白石は、「粉はシロキモノ、白粉はハフニと読む。ハフニは白粉の音が訛ったのである」と記し、『毛吹草』に白粉の別名、水かねや唐の土などが見られた。水かねは水銀白粉、唐の土は鉛白粉のことであった。

江戸後期には、顔用と襟用の白粉は別だった。『守貞漫稿』には「京阪では生白粉といい、江戸にて唐の土あるいは〝ぱっちり〟と名付け、襟白粉は顔白粉とは別製である」と記載されていた。

「ぱっちりで跡がひりつく娘の子」という川柳がある。これを真っ当に解釈すれば、初めての化粧で肌を入念に擦ったため、ヒリヒリしたということであろうが、〝ぱっちりと割られる〟には、処女を奪われるの意味がある

ので、この句をこうした意味に受けとる向きもある。川柳子も裏の意味を楽しんで発句したのであろう。

上方では襟足に白粉を厚く塗ることは文政八年（一八二五）頃より始まったとされていたが、それ以前に式亭三馬は「襟白粉はえりつけと呼ぶ」と記しており、さらに古く一八世紀末の江戸では、既に面胡粉や衿つけが使われていたので、襟化粧は関西に先んじて江戸で流行したのであろうか。

（二）白粉の成分

近代から現代にかけて白粉の素材は、亜鉛華からチタン白に変わったが、江戸時代には鉛粉、水銀粉、胡粉、白粉草があった。

鉛粉は鉛白粉、粉、はふに、酸化鉛、唐の土などと記載され、塩基性炭酸鉛で水酸化鉛と炭酸鉛の混成物とされる。通常、鉛白という。『好色一代女』に「夕食過ぎより、姿を作りなし、土白粉をなんべんか塗りくり」と書かれている土白粉は唐の土、すなわち、鉛粉と思われる。

胡粉は現代の辞書に「主に貝殻を焼いて製した白い粉」とあり、「室町時代以降は貝殻を焼いた粉を胡粉といった」という江戸の書もあったが、『本草綱目啓蒙』には「胡粉は鉛粉で、画家が使うゴフンは蛤粉であり、胡粉ではない」とし、『大和本草』では「鉛粉は定粉水粉胡粉という」と記していたので、江戸時代の胡粉は定義された言葉ではなく、前後の脈絡から判断する必要がある。

水銀白粉は伊勢白粉、水銀粉、はらや、水粉、軽粉などと呼ばれ、塩化第一水銀を主成分とした白粉であり、この化合物は甘味があるので甘汞ともいう。

水銀粉は伊勢射和で古くから造られており、梅毒薬や虱駆除の用途もあった。これを伊勢神宮のお札を全国に配り歩いた御師たちが販売したため、伊勢白粉の名が普及した。水粉の名は、『七十一番歌合』に「あちきなや、にふのみ山にほるかねのみづから人に思ひいりぬ」とあり、〝掘る金の水から〟と〝自ら〟を兼ねて詠んでいる。にふは地名の丹生で水銀の産地。水銀をかねの水という。

鉛白粉や水銀白粉は高価なため、裕福な人たちの化粧料であった。貧しい庶民は白粉草で白く塗ったことが記されていた。白粉草はオシロイバナであり、『和漢三才図会』には「この粉を婦人の面に塗ると、光沢が白粉より優れている」とあった。

オシロイバナの別名に夕化粧が有る。この優雅な名から、宵闇に佇むうっすらと化粧した浴衣姿の乙女が瞼に浮かんでくる。オシロイバナの粉は、鉛粉のように被覆力が強くないから、ほんのりと白くつくので、夕化粧に適していたのだろう。

（三）白粉の製造販売

『和漢三才図会』には、「唐の土は慶長元和の頃、堺の銭屋宗安が中国人から造り方を習い、炭屋小西らも造り始め、銭屋白粉、小西白粉と称した」と記されていた。『東海道中膝栗毛』では、京へ上った弥次喜多に京見物させ、「西陣の織元より出、染色の花やぎたるは、堀川の水に清く、釜もとの白粉、川端のふしのこは、雪をあざむき…」と語らせていた。釜もとは白粉の製造元であり、釜で焼いて造ったため、この名がある。

狂歌集『夜光珠』に「夕貌の花をよそおう白粉や志ろしろ見ゆる黄昏の市」と詠まれ、白粉は白粉所で売っており、『国花万葉記』などに京や江戸の白粉所の店名がリストアップされていた。

英泉の絵の寸景に描かれていた仙女香はあちこちで宣伝していた白粉だった。川柳は「何にでもよく面を出す仙女香」と揶揄していた。ほかに、松の雪、白牡丹、おきな香が山東京伝の『玉屋の景物』、鶴屋南北の『お染め久松色読販』に記されていた。かように江戸時代には、白粉の製造、販売のルートが一応整っていた。

3　黒化粧

黒化粧は黒く染める化粧であり、眉化粧、入墨、際化粧および隈取りがある。お歯黒や白髪染めも黒化粧だが、前者は第一話で述べた。後者は毛の化粧へ譲る。

（一）眉化粧

歌川国芳は眉剃りの姿を絵にし、『西山公随筆』には「眉毛を去りて、作り眉をする」とあった。ほかにも『和漢三才図会』、『奥の細道』、『化粧伝』、『好色一代女』、『好色五人女』、『女用訓蒙図彙』、『椿説弓張月』、『俳風柳多留』などに眉化粧が記載されていた。

眉化粧は眉を除くことから始まる。眉の除去を眉落とし、眉剃り、眉抜きと称していた。眉落としには毛抜か剃刀が使われ、剃刀を〝まゆだれ〟ともいっていた。毛抜きに蛤の殻を合わせて用いることもあった。

眉落としは女性の元服の記しで、「元服も二タ剃刀は女なり」の句がある。男子の元服は前髪を一ト剃刀で落とすが、女性は両眉を落とすから二タ剃りである。

眉を落とした後に眉墨で描く。眉墨を黛あるいは墨と表記することもあり、竈や煙突の煤、真菰の炭を用いた。藍や青丹を混ぜた青黛や翠黛もあった。

眉を描く行為は作る、掃く、引く、書くと表現され、古くは眉を〝まみ〟と呼ぶこともあったので、〝ひきまみ〟の表現もあった。

これらの言葉の名詞形、眉掃き、眉引きは眉を描く用具の名称に使われることもあった。例えば、前出の『奥の細道』に詠まれた眉掃きは眉刷毛である。因みに、刷

毛で描くと眉掃き、筆で書けば眉引きと表現したように思われる。ほかに、化粧を済ませた後に白粉がついた眉を払うのに眉払いを使った。

井原西鶴が「眉そりて置墨濃く…」と著しているように、眉化粧した眉を置墨や引き眉と表現し、描かれた眉形には月眉、三日月眉があり、ほかに桂の眉、柳眉、蛾の髭に似ていることから蛾眉、雙蛾の形容もあった。茫々眉は太めの眉形である。因みに、滝沢馬琴の『椿説弓張月』には「月の眉の艶なる、柳の腰のなよやかなる」と月眉が著されていた。

役者は早変わりするため、油を引いてから眉化粧を施し、眉を落としやすくしたという。『俳風柳多留』に「負けこけて女房に眉毛つけさせる」がある。賭博で大負けした男が女房を売り飛ばすのを詠んだ句で、亭主持ちは眉を落とし、商売女はつけていたことが知れる。

(二) 入墨

現代社会でも入墨はあり、刺青や彫物などと記され、若者たちはタットゥシールを貼っている。

捕物帳時代劇では、二の腕の彫物は島帰りの印しとして登場する。火消しややくざが炎を背にした不動明王を彫った図柄を倶梨伽羅紋々と称し、「年老いて笑われ草と思えども、ほらねばならぬ鳶の付合い」と彫った鳶職もいた。遠山金四郎の桜吹雪、一心太助の一心如鏡は時代劇で馴染み深い入墨である。

『守貞漫稿』などに入墨を入墨痣、いれほくろ、ほりものを黥面、文身、雕題、彫青、刳青と記載され、黥面、文身、雕題はそれぞれ、顔、体、額の入墨のことである。本居宣長の『玉勝間』には入墨を"もろとけ"と記載してあった。また、京阪では"いれほくろ"、江戸では"ほりもの"と呼んでいたそうである。

彫物は墨の濃淡、朱を使い、墨と朱で紫色を出した。墨が青く見えるのは、青痣と同様チンダル現象に基づく。『嬉遊笑覧』には「宝暦年間（一七五一～六二）の頃の入ぼくろは簡単な紋様だったが、最近は肌が見えない程に手のこんだ絵を彫るようになった」と記載されていた。西山公は「俗人身にいれふぐろする事、すさまじき事なり」と慨嘆していた。いれふぐろは、いれぼくろの訛った言葉か。『仙台間語』には「蝦夷の女は唇を青く染め」とアイヌの既婚女性が唇に入墨を施していることが記述されていた。

(三) 際化粧

「富士山を額へ書いたいい女」は、富士額の際化粧を詠んだ一句である。際化粧は額の形を整えるために、生えぎわを墨で描く化粧であり、眉化粧同様、置墨と表記することもあった。

際作りは、額や顔の大小、長短、丸顔か角ばった顔。

それぞれに応じて額を整え、際を薄く高根の花に霧がかかっているような感じとか、遠里に時雨ふる雲の際のようにすればよいとされ、濃過ぎる際墨は嫌われた。

『膽大小心録（上田秋成）』の"ひたひつくり"は際化粧のことであり、西鶴は好色シリーズで「額のはえ際は自然とうるはしく…」と往来の美女を品定めし、「硯の墨に額の際をつけ、口紅を光らせ…」と夜鷹の様を記し、さらに野暮くさい女を「額は只丸くきは墨こく…」とくさしていた。

(四) 隈取り化粧

隈取りは、人物の性格や表情を強調する歌舞伎独特の化粧法である。

浄瑠璃の『源平布引滝』は「頬を隈取隠せしは…」と語り、歌舞伎の演目・暫には「氷らぬ水の筋隈は根元金剛家の株、強いが自慢負けぬが得手…」という台詞があった。『暫』の筋隈は二代目団十郎が始めたとされている。

隈取りについて、『楽屋図会拾遺』に「すじくまといふは矢の根五郎、さるくまは朝比奈などの作りなり」と記録してあった。猿隈は猿の顔を模し、額に三本の横線を赤く施した隈取りである。

浮世絵に目の下を赤く隈取った伊達男が描かれている。目弾きあるいは目張りといい、現代のアイラインに相当する化粧である。

4 基礎化粧

現在では基礎化粧品として、スキンケアを目的とする化粧水、乳液、クリームなどがある。この項では、そのほかに現在、医薬部外品とされている美白料や天花粉のような薬用化粧料にも触れる。

(一) 化粧水

江戸時代の書には化粧水の名はみつからなかったが、化粧水入と粧顔水があった。だが、前者は白粉を溶くときに使う水入れ、後者は西欧の化粧水であった。唯一、川柳に「化粧水せめてのことにヘチマ哉」と詠まれていた。しかし、音感からすると、化粧水ではなくて化粧水かも知れない。

読みはともかく、化粧水に該当する商品のブランド名は幾つかあり、『守貞漫稿』に花の露、菊の露と江戸の水が紹介されていた。歌川国輝の絵には、式亭本舗前に江戸の水の看板が掲げられ、川柳に「江戸の水三馬玉川猪の頭」とあったので、江戸の水は明らかに化粧水である。商売熱心な式亭三馬は「このごろはやる江戸の水とやら白粉のよくのる薬を出す内にございませう。私どもの娘なども江戸の水がよいと申して化粧の度につけます

のさ」と『浮世風呂』で宣伝していた。

ところで、川柳に「愛嬌のこぼれる顔へ花の露」があり、別に「若々と紅白粉も菊の露」と詠まれていた。前者は化粧水だが、後者は紅白粉であった。花の露と菊の露は化粧水だけでなく、薬油や髪油、白粉などの商品名にも使われていた。花の露は一六八九年の『江戸総鹿子』などでは化粧油だったが、一七〇九年の『吉原徒然草』以降、一八世紀の花の露の多くは化粧水の商品名であった。菊の露は化粧水、鬢付油や白粉の商品名に使われた。

ヘチマの水、美人水、蘭麝水はいずれも化粧水であり、『大和本草』は「ノバラの花をスイカズラと一緒に酒に浸して化粧水を作った」と紹介していた。なお、一八世紀には蘭引による蒸留法が導入され、『化粧伝』によると、「茨の花を蘭引にかけ、その芳香成分を化粧水に利用した」ことが書き残されていた。

(二) 化粧油

江戸時代には、乳液やクリームのような乳化型の化粧品は一切登場しなかった。また、油といえば後述する髪油が専らであり、髪油に対応する肌油を探しても辞書にさえ出ていない。したがって、油を塗って皮膚を保護する風習は、湿潤性気候の日本では発達しなかったのだろうか。油を塗ったときのギトギトした感触、見た目のテカリは日本人の好みに合わなかったのかも知れない。

それでも、『浮世風呂』に「上方の女中は役者の真似をしたがると見えて化粧下へかほよ香を塗るとさ、かよほ香もすき油のようなものさ」と梳き油を下地オイル替わりに利用することが著されていた。また、前出の花の露は顔に艶をつける化粧油として使われたとする書があり、ほかに香油塗身という文言も見受けられたので、江戸時代にも、髪油や香り油を皮膚に塗る行為が皆無だったわけではない。

(三) 薬用化粧料

江戸時代には、あせもやただれに天花粉を使用していた。『浮世風呂』に「天花粉を混ぜた江戸の水の模造品が出回った」と記してあった。天花粉はカラスウリの根を粉にして使ったので天瓜粉とも表記される。

色白の肌は江戸時代の人たちも貴っとんでいた。キバナトリカブトの根から採る白附子はシミ取りの効果があるとされ、肌洗い粉に処方された。鶯糞は美白のほかにも肌理を細やかにするといわれ、川柳に「鶯の肥取りに出る美しい」とか「鳥の糞顔のはたけのこやしなり」と詠まれ、肥と声、畠と白癬を掛け詞としていた。

『化粧伝』収載の美白料は、鉛粉、軽粉、蛤粉、白檀を卵白で練ったものであり、美白効果のほどは疑わしく、白のイメージを利用した商魂逞しい商品だったようである。また、同書には、ニキビを治す伝とソバカスを治す伝が記載されていた。前者はスベリヒユを煎じたもので、後者は梅干、ユスラウメの枝、浮草とサイカチの練り物である。スベリヒユは母子草の種類とされている。

5 清浄化粧

清浄は単に洗浄することだけでなく、身綺麗にすることである。例えば、江戸の女性の日常生活が『化粧伝』などに「鶏の鳴くころ起きて、口をすすぎ、顔を洗い、髪を結うのが女の身嗜み」とか「朝、鏡に向かって鼻毛を取り去り、耳の垢をとり、歯をよく磨き、楊子で歯の間の滓と舌苔を除くこと」と記されており、男性についても、秦宗巴は『犬枕』で「穢き物は枇杷色の歯と若衆の爪糞、鼻孔から食み出した鼻毛」と述べていた。

そのほかにも手水や入浴がある。入浴は身綺麗にする基本である。春信や歌麿は艶めかしい湯上がり姿を描いており、『浮世風呂』は題名自体が風呂である。

(一) 洗浄料

洗浄料には肌洗い粉、髪洗い粉、手水の粉があった。家康の遺品を記録した『駿府御分物御道具帳之覚』に、しゃぼんがあり、石鹸である。だが、『和漢三才図会』に「無患子を俗に奢斗と云い、果皮を煎じた汁で衣を洗えば垢を落とし、水につけて管で吹けば泡が膨らみ戯れとした」と記述されていたので、江戸初期には、既に外来語のシャボンが使われていたのである。ムクロジの黒い実の表面に白い繊毛があるので「むくろんじ色真っ黒で若白髪」と詠まれている。

洗い粉の素材に糠がある。『浮世風呂』には糠代まで書いてあった。「惣身から乳をしぼり出す糠袋」の句は、糠袋が洗浄料だけでなく乳液代わりになっていたことを教えてくれた。

糠以外にも、ふすま、からこの糟と大角豆の粉が使われていた。『女重宝記』に「手水の粉には、もみち、まちかねよりは小豆の粉、緑豆の粉を使うべし」と豆粉を薦め、『女用訓蒙図彙』に行水用肌洗い粉があり、緑豆、滑石、白附子、ビャクシ、白檀、甘松、竜脳を使用していた。糠、小糠をまちかねともいい、麩は穀粉、もみち、もみじ粉ともいっていた。ササゲは隠元豆。緑豆はエンドウマメのことである。ビャクシはヨロイグサの根を乾燥したもので血止めに使い、前出の白附子はシミ取り剤、白檀、甘松、竜脳は賦香剤である。

汚れを落とすには、界面活性に基づく洗浄力に加えて、粉体による研磨と吸着が備わるのが望ましい。糠や豆粉、ムクロジなどは、サポニンやレシチンなどの界面活性物質を含み、洗浄効果を発揮する。滑石や穀粉は研磨剤であり吸着剤でもある。

化粧が済んだ後、糠や麩を使って手洗いする川柳一題。

「もう客が来てもと糠を一掴み」、「できたての顔でふすまをこぼしに出」。

（二）歯磨き

早朝の内儀さんは忙しい。「歯磨を吐き出しながら納豆よ」である。歯磨きは『夜光珠』や『浮世風呂』などにもみられたが、『女鏡秘伝書』は「歯の養生は朝夕、歯を磨くことであり、食後に楊子を使い、うがいをしなさい。殿の見ているところで磨いてはいけない。夜、恐ろしげな所で磨けば、鬼神も恐れるでしょう」と教えを垂れていた。

江戸時代は歯磨きに楊子を使っていた。歯磨き用の楊子は、今様の妻楊子より長く、木枯らし紋次郎が口にくわえているような長い楊子である。女子用は、お歯黒が落ちないように柔らかい楊の枝、男物は楊の幹で作ったそうである。

歯磨きの風習は、一七世紀頃に富裕層で始まり、一六四三年頃、丁字屋喜左衛門が朝鮮人から製法を伝授され、丁字屋歯磨を作ったのが日本最初の歯磨だといわれている。歯磨を買えない庶民たちは、磨き砂や塩、米糠を使用していた。「消し炭も歯磨ほどは匂う也」と詠まれているように、炭も歯磨きに使われていた。

ところで、遊女たちは嫌なものとして「鮫肌の客と歯を磨かぬ客」を敬遠したそうである。

（三）清浄用具

洗浄に使用する道具に耳盥があった。別に角盥ともいい、左右に耳状の取っ手がついた盥、口漱ぎや手を洗うのに使用した。水こぼし用の水盆と水差し用の半挿も使われていた。

盥は行水にも使われた。「わが尻をいわずたらいを小さがり」は出歯亀が塀の節穴から覗いて、楽しみながら詠んだ句であろう。「花見さと下女軽石で手を洗い」は手洗いに軽石を使ったことを示している。

『女鏡秘伝書』は「爪を切る日は決めて切れといわれるが、爪が長くなったら切ればよい。手と足の爪を一度に切ってはならない」と注意していた。

耳垢の掃除に使う耳掻きが一八四三年の『禁令』に登場した。この禁令は吉原の遊女に対する特例で、笄、簪、耳掻きとも都合、七・八本を許すというものであった。ということは、江戸庶民たちは耳掻きの使用を禁止されていたのだろうか。それとも本数制限だったのだろうか。ティッシュペーパー・畳紙も化粧用品の一つであり、畳紙を記した書もあった。

6　毛髪の化粧

毛髪化粧のうち、洗髪と眉化粧については既に述べた。頭髪化粧には、結髪、整髪、除毛、育毛、染毛などがあり、ひげの化粧も見られた。ほかに『末摘花』のばれ句には、「女房の毛は十六で生えたまま」があり、商売女や妾は手入れしたことを暗示している。

（一）結髪と髪形

江戸時代は結髪史上の黄金時代といわれている。浮世絵には、きらびやかな女髷が数多く描かれている。結髪では、前頭の毛を前髪、頭頂を髷、後頭を髻、側頭を鬢と呼んでいる。

女性の髪形は島田髷を土台にして、文金高島田など多彩である。結髪に際しては、梳き櫛で梳き、梳き毛を加え、髷の下に笄を入れ、簪や指し櫛で形崩れを防ぐ。簪、指し櫛は装飾品でもあった。このような髪形が定着したのは、江戸中期の頃といわれている。

男性の場合、武士は前髪を青々と剃り落として月代とし、頭頂に丁髷を結った。医者や山伏などは総髪、関取衆は髪を頭頂に集めて髻とし、髻は"もとどり"あるいは"もとゆい"の読みもある。髻を銀杏の葉の形に結ったので大銀杏とも呼んでいる。僧侶の髪形は、剃毛してクリクリ坊主にしている。この髪形は坊主頭といわれるように僧侶を標識した化粧の一種である。子供たちは稚児輪と呼ばれる髪形にしていた。

これらの髪や髪形は、『好色一代女』、近松門左衛門の『けいせい反魂香』や『国姓爺合戦』などにも認められ、『西山公随筆』には月代が書かれていた。

（二）整髪料

現代の整髪製品には、チック、ポマード、ヘアオイル、セットローションなどがあり、江戸時代のヘア製品を拾うと、髪油、鬢付け、鬢付け油、練り油、鬢水、水油、膏澤、元結油、梳き油、匂い油、艶出し油があった。

徳川美術館に家康直筆の鬢つけ油の処方書が残されている。この処方には香料が四二%も配合され、蝋と油の比率からすると匂いの強い練り油である。また、「明和（一七六四～七一）の頃の梳き油は貝殻詰めだった」とか「梳油は胡麻油に生蝋を加えた練り油である」などと記載した書があるので、梳き油と練り油はペースト状で、現代のポマードに相当する。

チック様の整髪料もみられた。例えば、伽羅油のように固い油は蝋燭を融かし松脂を加えて作った。ほかにも、唐蝋を練って鬢付けとしたり、晒した漆の実の蝋のように固い油で整髪したといわれているので、これらはポマードより固いチックに相当する。

『禁令』に水油があった。現在のヘアオイルに該当する。水は流動性を意味する。主に髪の艶出しに使われていた。川柳に「下女が髪行灯部屋の匂いがし」と詠まれ、下女は行灯の油をくすねて使ったのであろう。灯油には胡麻油か荏胡麻の油が使われていた。水油の禁令は灯火

用の油が払底したためであろうか。

膏澤については、「古は綿を香油に浸して使用したが、後にはそれを竹筒に蓄えるようになった」と記述され、一七世紀中頃の俳諧集に「竹の筒ふりふられぬる中ハうし髪の油に泪たりそふ」とあったので、膏澤の初めはあぶら綿で、一七世紀頃には竹筒に蓄える水油だったのだろう。いずれにせよ、流動性の香油で髪の艶出しに用いられたようである。

鬢水は美男葛で作った水性整髪料であり、今のセットローションに相当する。美男葛は、さねかずら（実葛、玄及草）ともいい、炭水化物キシログルコネートの接着性を利用した整髪料である。鬢水は、水入れに水をさし、五・六寸に切った美男葛を浸して作る。

そのほか、「伽羅油は正保、慶安の頃に売り出され、それ以前、胡麻油に白檀、丁子などを浸して匂い油と称していた」といわれ、「昔は伽羅の油はなかった。木村重成討死の時、伽羅を胡麻油にて煎じ髪に焚きこんだのが、伽羅油の初めであり、寛永末に花の露という薬油が作られた」という資料もあった。

『女鏡秘伝書』には、「香料を油に混ぜた匂い油」とあり、西鶴は「花の露は匂い油」と記載していた。前出・家康の鬢付けは匂い油でもあった。髪油について三馬は「かほよ香もすき油のような物さ」、京伝は「梅花の油は水油」と述べていた。

髪油は『好色一代男』の花の露を始め、梅花香、伽羅の油、雲井香、白菊などの商品名で、小間物店、鬢付店、油店、花露屋、伽羅油屋、香具所などで販売していた。

確かな資料があるわけではないが、以上のような証拠からみると、鬢付け油と鬢水を併せて鬢付けと呼び、鬢水以外の油性頭髪料を髪油と称していたのではなかろうか。さらに、整髪料を製剤学的に分類すると、水性の鬢水、液体の水油、ペーストと固型の練り油があり、使用目的に応じて、梳き油、匂い油、艶出し油、元結油、鬢付け油と呼称していたのではなかろうか。

（三）その他の頭髪製品

江戸時代にも、白髪染めと毛生え薬があった。

白髪染めについては、狂歌に「白髪染めの黒びんつけハ実盛か、工夫をねったものでこそあれ」があり、練り油に墨を混ぜたことが窺える。また、「俺にハくろ油をくりゃれ、実盛でハないが…」という台詞もあった。両者とも、老将・斎藤実盛の故事に託していた。

白髪染めどころか、『白髪を黒うして光沢を出だす薬の伝』や『白髪を抜きて黒き髪を生ず薬の伝』が『化粧伝』に見られた。前者はザクロの皮を煎じたもの、桑の根を油で煮詰めたものなど。後者はショウガの皮を油で煎じ泥のようにして白髪の抜けたあとに付けるとしてある。この書には『若白髪を治す薬の伝』もあり、「白髪

を抜き去って擂り潰したクルミを毛穴に擦り込めば黒き髪を生じて再び白髪生ぜず」というのである。

『化粧伝』には毛生え薬も登場した。髪はえ薬には、檳榔子、桂心（桂樹皮下の黄色部分）、何首烏（ツルドクダミの根塊）、硫黄、甘草などの処方が数種紹介されていた。かように、老化の象徴である白髪と禿げは昔の人たちも気にしていた。

『楽屋雑談』に見られる油青黛は役者が剃りあとを青々と見せるための月代用の化粧料と思われる。

（四）ひげ

ひげには髭、鬚、髯があり、それぞれ、口ひげ、顎ひげ、頬ひげを表している。ひげを記載した書には、『源平布引瀧』、『好色一代男』、『七十一番歌合』などがあり、頬髭、天神髭、仮髯、かづら髭が紹介されていた。

山東京伝は、「頬ひげは鐘馗髭といって好むが、顎ひげを天神髭といって武家は好まなかった」と記していたが、テレビ映画の黄門様は真っ白の口髭と顎髭をトレードマークにしている。

7　香り化粧ほか

香り化粧、化粧用具ならびに言葉としての用語・化粧について述べる。

（一）香り化粧

前出・家康の鬢つけ油は匂い油でもあり、花香を配合した化粧水・香り水も既に登場した。これらは香り化粧に分類することもできる。江戸の世には、現代のような香水やオーデコロンはなかったので、髪油に香料を混ぜ、それを匂い油として使用していたのだろう。

香り付けを主目的とした化粧料に、香料を袋に入れて身につけたり、物に懸けたりする匂い袋があった。『西鶴帯留』には、匂い玉と記され、『和漢三才図会』には、香毬、佩香と書かれ、匂い玉というは俗称であると著されていた。

前出の“香油塗身”は、仏教用語で身体に香りを施すことを戒めたのであるが、この四字熟語は今風の詞でいえば、ボディフレグランスに相当する。

香には薫衣香がある。香を焚けば衣装や身体に匂いが移り残香を楽しむ事ができるので、香に関する事柄も香り化粧に加えることにした。香に関しては、薫香、薫物、焚物、かけ香、空薫物、ふせ香などの名称のほかに、腕や頭の上で香を焚く山伏の荒業・腕香や頭香も記されていた。

この時代人気があった香料は伽羅、次いで丁子がよく使われ、そのほか龍涎香、沈香、甘松、白檀、肉桂、麝香、樟脳、龍脳などがあり、蘭と麝香を混ぜた蘭麝もみられた。香剤を販売する香具売、香に使用する香爐、香

盆、香箱、香爐箱、薫物壺、香包などがあった。

(二) 化粧用具

化粧用具については、眉化粧の項で、毛抜、剃刀、眉刷毛、筆、眉払いを、清浄化粧の節では、楊子、塩、耳盥、水盆、半挿、軽石、耳掻き、畳紙、ならびに毛髪化粧用の梳き櫛、梳き毛、笄、簪、指し櫛について触れた。香の用具も今述べた通りである。

そのほかに、櫛を収納する櫛箱や櫛笥(くしげ)、元結箱（元結いの時使う毛の収納箱）があり、整髪には鋏が使われ、髪油の容器・油桶も認められた。

浮世絵には、化粧鏡や手鏡に写った美女が描かれており、『駿府御分物御道具帳之覚』にビードロの鏡が記帳されていた。ほかに鏡台や鏡立があり、用具ではないが鏡磨きや鏡磨師も登場した。

(三) 用語の化粧

既述のように“化粧品”の呼び名は、明治以降の詞である。では、江戸時代に“化粧”や“化粧品屋”を何と呼んでいたのだろうか。

「美しく化けるをもって化粧の間」という川柳がある。この化粧は“ケショウ”なのか“ケワイ”なのか。この句の注釈には、「化けると詠んでいるので化生(けしょう)が懸かっている」とあるので、この化粧は“ケショウ”と読むのであろう。

江戸時代には、化粧と表記した書が数多く認められ、ルビや仮名表記では、けしょう、けわひ、けさう、けせうがあった。変わったところでは、化粧を“みじまい”と読み、化粧に“けへけへ”とルビを打ったものもあった。そのほか、紅粧、色をつくる、美容、面粧のような表現もあった。

化粧品屋という呼称はなかったが、一九世紀頃には、小間物屋、紅屋、紅粉屋、白粉屋、白粉所、ふしの粉屋、鬢付屋、油屋、一七世紀代には、伽羅屋、花露屋、伽羅油屋、香具所で化粧品を扱っていた。なお、売薬店の式亭本舗、油見世の江戸桜与七店、紅問屋の玉屋でも化粧品を販売していた。柳屋本舗の創設は一六一五年で、大阪夏の陣の年から現在に至る老舗である。

川柳にも詠まれているように、あちこちでよく宣伝していた仙女香については既に述べた。名女形・瀬川菊之丞の俳名“仙女”を冠した商品名といわれている。現代はPR社会であり、宣伝媒体は多様である。

宣伝について述べると、仙女香以外にも、玉屋は山東京伝に『玉屋の景物』を書かせ、式亭本舗の主人・三馬は自分で戯作物を著し、『浮世風呂』などで商品の宣伝に努めていた。店先の看板や幟を高く掲げる店もあった。

役者は知名度を利用して化粧品を商っていた。岩井半四郎の名に因んだ岩井香があり、初代松本幸四郎は蘭奢

水を売っていた。川柳に「悪方は油見世など思い切り」と悪役の俳優では化粧品販売は無理だと詠んでいる。春信描く“柳屋お藤”は五倍子見世の看板娘であつた。かように、江戸時代にも、美人、文書・絵画、知名度を利用したPRが行われていた、ということは、化粧の大衆化が進んでいたよい証拠である。

第二節　中世の化粧

中世は鎌倉、室町ならびに安土桃山時代である。「鎌倉、室町時代は、公家に変わって武士が実権を握り、質実剛健の気風が尊ばれたため、女性の生活や化粧風俗などを記した文献はあまり見られない」と津田が指摘しているように、この時代の化粧資料は江戸時代に比べて極めて少ない。保元平治の乱から大阪夏の陣に至る間は戦乱の時代だったから、平民の人たちは化粧どころではなかったのだろう。

1　赤化粧

江戸時代の書『武辺噺聞書』に「関ヶ原の合戦の際、若武者が爪臙脂指し」と記されていたので、中世末には、男性にも爪紅の風習があったのだろうか。

室町末期の赤化粧の証拠に、『浅井長政夫人（お市の方）像』が残されていた。手持ちの資料はモノクロ写真だから断定できないが、おちょぼ口が描かれており、紅で象った図のように思われる。

室町時代の書、『廻国雑記』に「顔に塗る紅が谷津より…」と紅が詠まれ、『類聚雑要抄』などに軽粉(かるこ)、紅彩、臙脂、紅粉、面脂口脂筥が記されていた。面脂口脂は頬紅と口紅である。鎌倉時代の『明月記』は紅を脣と書き、『吾妻鏡』と『釈日本紀』に赭(そほ)・赤土があった。

化粧用具では、『狂言集』、『明月記』、『香取宮遷宮用途記』に紅皿があった。

2　白化粧

室町時代には、『運歩色葉集』に白粉と白物が併記されヲシロイと読ませ、鎌倉時代も白物と白粉があった。『増鏡』に、別当通成が化粧したのを「検非違使の別当如きものつくることやある」と年輩者たちがひそひそ話をしていたことが書かれていたので、当時の公家たちは顔を白く粧い、それが身分表示の化粧だったことを窺わせた。

伊勢おしろいは『狂言集』にみられた。猿楽能の台詞「奥方へは伊勢おしろいを手土産に…」である。ほかに、『釈日本紀』に鉛粉、『嫁入記』にたうのつち、『下学集』に牛粉(ごふん)が記されていた。たうのつちは唐の土で、中国か

ら輸入した鉛粉と思われ、牛粉は胡粉。

3　黒化粧

前出『浅井長政夫人像』は芒々眉であり、室町末期の高貴な女性の眉作りを偲ばせる。

室町時代には、「娘九歳の成人式に鹵を染め、眉を抜いて祝った」と『建内記』に記され、『太平記』は「年四十餘リナリケルガ眉作リ金付ケテ」と著していた。

眉抜き、眉作は『太平記』、『吾妻鏡』、『明月記』など、眉墨や黛は『卒都婆小町』、『撰集抄』などに表記され、眉形については『卒都婆小町』に柱の黛、『撰集抄』に柳の黛、『太平記』には眉太、大眉、翠黛、青蛾が記されていた。

徳川美術館に『掃墨物語絵巻』がある。掃墨は眉作りであり、この作品は「ある僧が若い娘のところに通ってくる。ある日、突然の僧の来訪に娘は薄暗い部屋で白粉と黛を取り違えて化粧してしまう。娘の顔を見た僧は驚いて逃げ去ってしまった」という物語を絵巻にしたものである。この物語から眉墨は白粉のように粉だったことが知れる。暗い部屋であわてて化粧すれば、取り違えることは必定である。

入墨、際化粧ならびに隈取りは、中世の書にはみつからなかった。

4　基礎化粧と清浄化粧

化粧水、化粧油、天瓜粉、美白料、ニキビ用品などの資料は見当たらなかった。清浄化粧についても、歯磨きや口すすぎ、糠袋、楊子はみつからなかったが、洗浄用の器が室町・鎌倉期を通じて認められた。『とりかえばや物語』には「頭洗わせ」と洗髪が記され、『類聚雑要抄』には耳決（耳掻き）、鑷子（毛抜き）、鋏、剃刀、畳紙などの衛生用具とともに泔坏が記載されていた。泔は洗髪に用いる米の磨ぎ汁や強飯を蒸した湯などで、坏は壺である。

5　毛髪の化粧

男性の毛髪化粧については、『太平記』に紫髯の老将や稚児輪の少年が記載されていた。月代は「応仁の乱以降、武士が常に兜を着けていたため、額から頭頂にかけて髪を剃ったことによる」といわれているが、応仁の乱以前の『沙石集』に月代と本鳥が記載されていた。

『とりかえばや物語』には、「中納言が男装の女を口説き思いが適って嬉しさのあまり、頭を洗わせ髪を垂れさせて見ると、尼の髪程度にふさふさと肩にまでかかった」という話を著述してあった。当時の尼は坊主頭ではなく、肩にかかる程度に髪を切っていたのだろう。このことも焚かせられれい」という男女の台詞があった。

物語は続けて「薬のしるしにや、御髪も引き伸ぶるように美しげに…」と記述しており、薬というのは育毛料のことであろう。

『古菟玖波集』に「膏澤は香油に浸した油綿」とあり、『香取宮遷宮用途記』に油壺と油綿、『類聚雑要抄』に油と綿が記されていたので、膏澤は髪の艶出しを兼ねた匂い油として使用されていたようである。

整髪用具には、『嫁入記』に髷を結ぶ糸、『類聚雑要抄』に櫛掃、平櫛掻、『吾妻鏡』に櫛、櫛払、『狂言集』に鬢の鏡、『明月記』に櫛と鏡筥があった。『守武千句』には鏡磨き師が東海道の難所・小夜の中山を越えていく様を「鏡とぎ、さよの中山、けふこえて…」と詠んでいた。

6　香り化粧

匂い袋などの化粧料に関する記録は見当たらなかったが、香については、『徒然草』に「夜寒の風に誘われくる空薫物の匂いも身にしむ心地す」と述べられ、『沙石集』にも香の煙がくゆらぐ様子が認められていた。

香、薫物、空薫物、合せだきもの、薫衣香が『明月記』や『太平記』などにみられ、香剤や香具についても、『宇治拾遺物語』などに丁子、麝香、沈香、蘭麝、香爐、香盤、薫物筥が記されていた。『狂言集・花子』に「男内での行は何がおりゃる。女ハテ、頭香なりとも腕香なり

7　用語の化粧

『廻国雑記』は「早くも越ゆる化はひ坂」と記し、嫁入記にも"けはい"があり、一条は『とはずがたり』に「江ノ島で一泊し、鎌倉へ入るために化粧坂をのぼり…」と述べていた。

ほかに、『増鏡』には"けさう"と書かれていた。話自体は平安末期のことだが、平敦盛の化粧を『義経記』と『源平盛衰記』は"薄化粧"、『平家物語』は"うすげしゃう"と記載していた。

参考文献

村沢博人、津田紀代、化粧史文献資料年表、ポーラ文化研究所、一九七九
渡辺信一郎、江戸の化粧―川柳で知る女の文化―、平凡社新書、二〇〇二
世界美術全集21、日本Ⅲ、平凡社、一九五七
橋本澄子、高橋雅夫編、浮世絵に見る江戸の暮らし、河出書房新社、一九八八
渋井清監、太陽浮世絵シリーズ、歌麿、平凡社
一九七五

高橋雅夫校注、佐山半七丸、都風俗化粧伝、東洋文庫、一九八二

徳川美術館名品集1・絵巻、一九九三

司馬遼太郎、街道をゆく42、三浦半島記、朝日新聞社、一九九七

（第三節に続く）

社　告（内規）

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同士の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二

加入者名　まんじ

還暦からの考古学（十五）

三角縁神獣鏡（さんかくぶちしんじゅうきょう）に対する考え方の変化（その9）

中山喬央（たかひろ）

まえおき

このサブタイトルで書き始めて、はや二年が経過いたしましたので、ここで従来述べた事柄のあらましを説明すると共に、現在考えている今後の論述構想を紹介する事と致します。

まんじ102号（平成十八年十一月一日発行）

三角縁神獣鏡の定義、王仲殊の渡来呉工人製作説・樋口隆康の魏鏡説・岡村秀典の漢鏡7期の次に来る魏鏡説と、日本列島における漢鏡2～3期鏡出土遺蹟の紹介。

まんじ103号（平成十九年二月一日発行）

楽浪郡の設置と漢鏡3期の鏡、東夷王の朝貢、素環頭大刀、鏡の分割と伝世（でんせい）、韓鏡の流入、踏み返し鏡と破鏡、舶載文物の広がり。

まんじ104号（平成十九年五月一日発行）

漢鏡4期～6期。金印の時代。破砕と伝世。畿内・濃尾平野及びそれ以東の出土鏡。

まんじ105号（平成十九年八月一日発行）

漢鏡7期の鏡。楽浪郡と日本列島。画文帯神獣鏡・斜縁神獣鏡。三角縁神獣鏡に対する福永伸哉説、及び銘文・鉛同位体比よりの説明。

まんじ106号（平成十九年十一月一日発行）

2004年5月15日付朝日新聞一面記事を批判した、新井宏のまんじ96号「卑弥呼の鏡の焦り」紹介。『椿井大塚山古墳発掘調査報告書』における山崎一雄等記載の「椿井大塚山古墳出土鏡の化学成分と鉛同位体比（改訂）」、富岡謙蔵の『古鏡の研究』における内藤虎次郎の卑弥呼倭姫説、『黒塚古墳調査概報』の河上邦彦の「あとがき」。

まんじ107号（平成二十年二月一日発行）
粉飾決算だった残留脂肪酸分析。粉飾の疑い濃厚な我国鉛同位体比研究。

まんじ108号（平成二十年五月一日発行）
日本列島の地質構造と鉱山地質。日本の地下資源及び鉱山。

まんじ109号（平成二十年八月一日発行）
日本列島の形成。日本列島・朝鮮半島・中国大陸産鉛鉱石の鉛同位体比。

まんじ110号（平成二十年十一月一日発行）
特別号の為。読み切り。
「日本列島にも青銅器時代はあった」と鉛同位体比分析法に基づく独自の考察で、銅製錬開始時期を弥生時代中期まで従来の学説を千年以上遡らせる考えを発表。

以上が今まで述べてきたことの概要ですが、三角縁神獣鏡は、日本列島で検出された銅鏡四千面のうち、五二〇面と、一つの種類としては最多の出土数をかぞえ、その大半が前期古墳から出土するという特色を示す、日本列島古代王権成立に大きなかかわりを持つと考えている遺物ですから、その発生要因の研究は、列島内に留まらず大陸・半島に及び、時期的にも日本列島に本格的な青銅器の導入が始まった、弥生時代の中期頃から考察しなければならないとの考え方で今日まで論を進めて参りました。

その一方で、三角縁神獣鏡の発生を時期別・地域別に明らかにし、原材料供給面及び製作工人・それを必要とし手に入れる事の出来た階層の探求、あるいはどうしてそれを求めたのかという心的要因を考えることは、日本列島古代の階層社会形成につき様々な角度から検討を加えることになり、ひいては日本古代王権誕生の謎に迫る極めて大切な事であると思考します。

今暫くは鉛同位体比法による青銅製品原材料供給地と製品出土地の検討による大陸・半島・列島の交易実態を考察し、その後は三角縁神獣鏡導入の心理的要素である当時の社会の状態、信仰の実態等について考えて見たいと思っております。

今回のテーマ

荒神谷出土青銅製品の鉛同位体比

昭和五九年（一九八四）、島根県斐川町の神庭西谷の斜面中腹から、それまでの日本列島出土銅剣総数を上回

る三五八本の銅剣が出土しました。銅剣は何れも中細形C類に属するもので、四列に刃を起こした状態で整然と並べられていました。

翌昭和六十年（一九八五）には、銅剣出土地からわずか東へ七mの地点で銅鐸六個（菱環鈕銅鐸一個・外縁付鈕式銅鐸五個）と銅矛十六本（中細銅矛二本、中広銅矛十四本）が、同じ埋納坑から見つかりました。

このうち銅剣は三五八本全てが、銅鐸は一号銅鐸といわれている、吊手の断面が二段になり市松文と重弧文の文様を持つ外縁付鈕銅鐸が、何れも国宝に指定されました。

これら青銅製品の鉛同位体比は、馬淵久夫等により、平成三年（一九九一）八月の『保存科学第三十号』に掲載され、「銅剣の大部分は華北の鉛を含むが、朝鮮半島の鉛を含むものが一本あり、また華北の鉛に朝鮮半島の鉛が若干混ざったと考えられるものが少しあるということになる。」（12～13頁）「荒神谷遺跡出土の銅鐸と銅矛は朝鮮系の鉛を含むものが多いことから、銅剣よりも製作時期が若干早いように思われる。」（17頁）と記載されています。

しかし馬淵等による鉛同位体比分析結果の考察は、理論が優先して実際の鉛鉱石の同位体比指数と遊離し、産出鉱山の選定についても、青銅製品出土地との運搬の便、交易に使用される見返り品の選定、当時の社会情勢等に対する考察に欠ける点があると、かねてより考えておりましたので、あくまでも青銅製品鉛同位体比指数に基づく、原料鉱石出土鉱山の選定を先ず行い、次に交易品、彼我の交流の便、当時の社会情勢等について考慮し、最終判断を下した、独自の検討結果を発表します。

荒神谷遺跡出土銅剣の鉛同位体比

A式図関連指数を基にして十七通りに分類し、それぞれの鉛鉱石産出鉱山を検討しました。

207/206—0.8200・208/206—2.0700（以下207/206及び208/206を省略）

銅剣A26が該当し、その鉛同位体比測定結果は、206/204—18.992・207/206—0.8290・208/206—2.0770である（以下206/204・207/206・208/206を省略する）。

これと殆ど一致するのが、何れも朝鮮半島の鉱山である410三宝・京畿道、416第一蓮花・慶尚北道、417第一蓮花・慶尚北道、420第二蓮花・慶尚北道の四つの鉱山出土鉛鉱石の鉛同位体比の平均指数18.997・0.8315・2.0734である。従って使用鉛鉱石は朝鮮半島産ということになる。

0.8500・2.1400

B108が該当する。その鉛同位体比指数は18.156・0.8599・2.1423で、これは53神岡・茂住と429月丘・忠清北道の平均値18.161・0.8611・2.1400とほぼ一致し、朝鮮半島産と日本列島産の鉛鉱石を等分に使用している。

0.8600・2.1400

A2を含めて六本が関係する。それらの指数は206/204が17.997～18.118、207/206が0.8606～0.8655、208/206が2.1411～2.1479と近接しており、これも前に述べた53神岡・茂住と429月丘・忠清北道の指数と符合するので、朝鮮半島産と日本列島産の鉛鉱石双方が使用されていると思われる。

0.8600・2.1500

A1を含めて七本が関係する。それらの指数は17.881～17.966、0.8667～0.8698、2.1508～2.1587である。これに近似する指数は、GJ6太良・秋田の17.711・0.8857・2.1811に57神岡・漆山坑、GJ19対州・長崎、425漆谷・慶尚北道、427将軍・慶尚北道をそれぞれ等分に混合すれば得られるが、問題は206/204・207/206及び208/206の三つの指数がそろっては一致しない事である。

すなわちGJ6太良・秋田と57神岡・漆山坑の平均値は17.945・0.8718・2.1512と17.945と2.1512はOKであるが0.8718が少し外れ、GJ6太良・秋田と427将軍・慶尚北道のそれは18.063・0.8685・2.1459と0.8685は合致するが18.063と2.1459がやや異なる数値を示す事である。

従って現状では日本列島産のみの鉛鉱石使用なのか、日本列島産と朝鮮半島産の鉛鉱石を混合したものを使ったのかは結論を出す事ができないのである。

0.8700・2.1500

A4を含めて十九本が該当する。しかし指数は17.763～17.929・0.8702～0.8747・2.1538～2.1598と近接している。

GJ6太良鉱山・秋田とGJ14神岡・円山、52神岡・円山、54神岡・茂住、56神岡・茂住、58神岡・持壁の四鉱山は、何れの平均値もこの指数の中に入る。従って、この範囲のものは日本列島の鉛鉱石を使用した事になる。ちなみにGJ6太良・秋田と52神岡・円山の平均値は17.906・0.8729・2.1542であり、GJ6太良・秋田と58神岡・持壁の平均値は17.905・0.8738・2.1572である。

17.500・0.8700・2.1600

0.8700・2.1600のグループには全体の約七十%、二四七本が入るので、特別に206/204の数値で四分割して考察する事とした。

この206/204—17.500グループには、A29とD17の二本が入る。この二本は四捨五入するとほぼ17.6・0.88・2.17となるがこの指数にぴったり合うものが見つからない。例えばこれとかなり近いGJ6太良・秋田のそれは17.711・0.8857・2.1811と206/204と208/206の指数が異なるし408ソウル付近・京畿道は17.639・0.8850・22.350とこれは208/206の数値が大きく外れてしまう。又425漆谷・慶尚北道と406富平・京畿道の平均値も17.760・0.8769・2.1707と206/204の数値が違う。今のところは朝鮮半島か日本列島のどこの鉱山のものを使用したのかはっきりとしない。

尚209中国大陸陝西省・丹鳳鉱山の数値は17.622・0.8803・2.1809と208/206の数値が異なっている。

17.600・0.8700・2.1600

ここ17.600グループには一二一本の銅剣が入る。

この数値は前漢鏡で須玖岡本遺跡甕棺墓出土のM60草葉文鏡の鉛同位体比指数17.620・0.8778・2.1631と一致する。

この指数を単体で示す鉛鉱石は管見するところ発表されていないので、合体でそれを示し、尚且つ地理的条件、交易・流通等が可能な鉛鉱石を探してみることとする。

先ずGJ6太良・秋田の17.711・0.8857・2.1811と53神岡・茂住の18.012・0.8656・2.1430の中間点に、A式図関連の207/206・208/206の数値が入ることに気がつく。次にB式図関連206/204の数値を考えてみると17.600より低い数値に『鉱山地質』32の70大井・静岡の17.465、71大井・静岡の17.491がある。

この『鉱山地質』32ではA式図関連の207/206・208/206の数値が発表されていないので確定は出来ないが、この大井鉱山鉛鉱石が入る別子タイプ鉛鉱石では、68・69久根本山・静岡の17.820・17.941、74新宮・愛媛の17.900、79・82大久喜・愛媛の17.983・17.939、86上倉・滋賀の17.862、87・88・柵原(やなはら)・岡山の17.987・17.965等17台の206/204鉛同位体比指数を持つものが多数あり、これらの鉛鉱石が使われていた可能性を考える事ができる。

本項のまとめとしては、GJ6太良・秋田と53神岡・茂住の平均値が17.861・0.8756・2.1620となって、A式図関連の207/206・208/206の数値が一致し、次にB式図関連206/204については、この17.861と70大井・静岡の平均値17.663、或いは68久根本山・静岡の17.820と70大井・静岡17.465の平均値17.642が何れも合致するので、その他の諸条件である地理的要因、交易発生要因、社会情勢、文化の流れ等も勘案して日本列島産の鉛鉱石を使用しているものと思料される。

ちなみにこれに近い指数を示すものとして中国大陸産鉛鉱石では、209丹鳳・陝西省の17.622・0.8803・2.1809

が、朝鮮半島産鉛鉱石では408ソウル付近・京畿道の17.639・0.8850・2.2350があるが、双方ともに三つの指数すべてが一致するのではなく、前述したその他の諸条件を勘案して除外する事とした。

17.700・0.8700・2.1600

この数値には銅剣一一八本が属している。

更に注目すべきことはこのグループの鉛同位体比指数を示すものが弥生時代、日本列島で出土する青銅製品の最大のシェアを持っていることである。

主なものとしては須玖岡本遺跡甕棺墓出土の前漢鏡であるM58星雲文鏡、飯塚市・立岩遺跡出土のM61連孤文「日有喜」銘鏡、および弥生小型仿製鏡である岡山県山陽町用木二号墳出土のM36鏡、同じく岡山県山陽町・便木山八号土坑墓付近出土のM37号鏡等が入る。また三遠式銅鐸の鉛同位体比指数もこの範囲に入っている。

この三遠式銅鐸の鉛同位体比指数は、A式図関連の207/206が0.8755～0.8771、208/206が2.1634～2.1661と何れも近接しており、B式図関連の指数も206/204が17.696～17.746、207/204が15.517～15.546、208/204が38.301～38.414と、こちらもかなりまとまっている。これに最も近いものはGJ6太良・秋田と53茂住・神岡の平均値17.861・0.8756・2.1620でA式図関係の数値が符合する。

一方B式図関連数値は、70大井・静岡の17.465・15.391・37.245を二割、GJ6太良・秋田と53茂住・神岡の平均値17.861・15.639・38.614を八割にして計算すると、17.781・15.589・38.340となり、三遠式銅鐸のB式図関連鉛同位体比指数とニ指数がそろってほぼ一致するので、三遠式銅鐸の地元である70大井・静岡の鉛鉱石も使用されていた可能性がある。

このように弥生時代、日本列島で青銅製品に最も多く使われたこのグループの鉛鉱石は、別子タイプ鉱山の鉛同位体比指数発表により、一層日本列島産の鉛鉱石が使用されていた可能性が高まることとなった。

17.800・0.8700・2.1600

このエリアにはA13を代表に六本の銅剣が入る。GJ6太良・秋田と53茂住・神岡の平均値17.861・0.8756・2.1620と符合し、これらの銅剣は日本列島産の鉛鉱石を使用している。

0.8700・2.1700

B41を含め十三本の銅剣が入っている。206/204は17.624～17.694とやや指数が別れるが、207/206は0.8774～0.8799、208/206は2.1701～2.1723と近接している。

これはGJ6太良・秋田の指数17.711・0.8857・2.1811と44～58神岡鉱山グループの指数18.012～18.185・

0.8568～0.8656・2.1176～2.1430の間に、B式図関連206/204のみは僅かに外れるがA式図関連指数は入る。B式図関連の206/204については、68久根本山鉱山・静岡と70大井鉱山・静岡の中間点指数17.642が示す如く、別子タイプ鉱山鉛鉱石との合金が考えられ、これも日本列島産の鉛鉱石を使用していると思われる。

0.8800・2.1600

A23を筆頭に六本の銅剣が所属している。B式図関連指数206/204は17.584～17.659、A式図関連指数207/206は0.8801～0.8811、208/206は2.1681～2.1699である。B式図関連指数206/204は、『鉱山地質』68久根本山・静岡と70大井・静岡の206/204平均値17.642、及びGJ6太良・秋田、53茂住・神岡の206/204平均指数17.861を等分した17.751に、71大井・静岡の鉛鉱石17.491を五割混合した17.621が206/204指数として一致する。

またA式図関連207/206と208/206の指数は、GJ6太良・秋田の0.8857・2.1811を七割、53茂住・神岡の0.8656・2.1430を三割とした0.8796と2.1696で符合するので、これも日本列島産の鉛鉱石を使用しているということができる。

0.8800・2.1700

A24を始めとして四七本の銅剣が、ここに含まれる。そのうちC103だけは17.396・0.8887・2.1788と他の四六本とはやや違った数値を示し、これだけは403三徳・平安南道の鉛鉱石が三分の二、212香奇・山東省の鉛鉱石を三分の一使用した指数17.344・0.8963・2.1764が近い。その他の四六本は206/204の数値が17.413～17.651と広範囲に亘る一方で、207/206は0.8800～0.8879、208/206は2.1700～2.1785と比較的狭い範囲に入っている。

これらに該当する鉛鉱石は日本列島産のものとしては『鉱山地質』70大井・静岡の17.465、68久根本山・静岡と70大井・静岡の平均値17.642及びGJ6太良・秋田を八割、53茂住・神岡を二割混合したものに、70大井・静岡を等分に混ぜた17.618等が、B式図関連206/204の数値としてある。

又A式図関連の207/206・208/206としては、GJ6太良・秋田を八割、53茂住・神岡を二割とした合金の0.8816・2.1734が合致する。

一方朝鮮半島産の鉛鉱石に目を転ずれば、403三徳・平安南道の鉛鉱石を八割、409三宝・京畿道の鉛鉱石を二割混合したものの指数が17.568・0.8894・2.1773とB式図関連、A式図関連の三つの指数がほぼ一致するので、日本列島産、朝鮮半島産、あるいは双方の合金を使用した等、様々な可能性が考えられる。

0.8800・2.1800

B22銅剣が所属し、その鉛同位体比指数は17.644・0.8838・2.1808である。GJ6太良・秋田17.711・0.8857・2.1811が三指数共近接し、日本列島産の鉛鉱石を使用している。

0.8900・2.1700

A34銅剣の17.294・0.8919・2.1786が該当する。前述のC103銅剣17.396・0.8887・2.1788に指数が近接し、同様に212香奇・山東の鉛鉱石三分の一と、403三徳・平安南道の鉛鉱石三分の二を使用した指数17.344・0.8963・2.1764が近く、山東省と平安南道の鉱山の鉛鉱石を使用した可能性が強い。

0.8900・2.1800

A31を筆頭に六本の銅剣が入り、鉛同位体比はそれぞれ17.193～17.338、0.8907～0.8967、2.1802～2.1882となっていて、一つのグループを形成している。

これと最も近接する指数を示すのは、212香奇・山東の17.002・0.9059・2.2019と403三徳・平安南道の17.516・0.8916・2.1637の平均値、17.259・0.8987と2.1828であり、これら六本の銅剣は何れも中国大陸・山東省の鉛鉱石と、朝鮮半島・平安南道の鉱山の鉛鉱石の合金を使用していた可能性が高い。

0.9000・2.1900

B31銅剣17.051・0.9022・2.1960とC55銅剣16.991・0.9038、2.1960の二本である。何れも212香奇・山東の17.002・0.9059・2.2019と全ての指数が概ね一致し、中国大陸・山東省の香奇鉱山の鉛鉱石が使用されていたと思われる。

0.9100・2.2000

銅剣D35が入る。その鉛同位体比指数は、16.771・0.9128・2.2081である。これは前述の212香奇・山東17.002・0.9059・2.2019と202錦西・遼寧の16.521・0.9256・2.2219の、平均値16.761・0.9157・2.2119が一致し、中国大陸山東省と遼寧省の鉛鉱石の合金が使用されていたことが認められる。

銅製錬

ここで銅製錬方法について簡単に説明します。

銅は人類が取り扱った金属として最古の歴史を持っています。

銅の製錬は先ず土中に穴を掘って炉とした地床炉から始まります。自然銅若しくは酸化鉱を木炭若しくは薪を還元剤兼燃料として製錬して銅を得たことに始まります。その後、銅の需要が高まりますと、銅の主な資源である硫化鉱の製錬が開始されるようになります。

中近東に始まった銅の製錬が中国大陸・朝鮮半島を通じて日本列島に伝わるまでには数千年の歳月を経過していますから、この硫化鉱の製錬方法が当初から中国大陸・朝鮮半島同様日本列島にも入ってきたことは間違いないと思っております。

硫化鉱の製錬の工程では先ず鉱石を製錬できるようにする焙焼が必要です。焙焼とは鉱石が溶融しない程度で高温に鉱石を熱する作業のことをいうのですが、最も普通の現象としては水分が蒸発し、硫黄等が揮発し、更に進んで酸化を起すことを指します。

焙焼の温度は広義の意味では一五〇～一〇〇〇度Cですが重要な限度は約六五〇度C迄です。それは銅鉱が六五〇度C以上になりますと溶解しやすく、その採収率を下げてしまう恐れがあるからです。結局、狭義での焙焼温度は四〇〇度C～六五〇度Cということになります。

日本列島で良く使われている塊鉱の焙焼の一つに露天焼があります。当初は恐らくこの方法だったと思われます。この方法の利点は、鉱石の破砕不要、焼塊は還元溶鉱炉吹に好適、装置は極めて簡単な点ですが、反面有毒ガスがあたりに低く飛散することや、銅が流失したり、時間が長く掛かること等のマイナス面があります。そのため焙焼時期の天候に留意しなければならず、一方、場所の選定では風の方向、強さ、乾燥、排水等様々な事柄に気をつけなければなりません。

但し燃料については硫黄の含有量が高いので全く不要となるケースが大半です。

次にこれを吹いて荒銅とし、更に真吹きして精銅とし銅細工の材料に使用します。これについて『神岡鉱山史』一二一頁には「当時の銅製錬は鉛（鉱石）を焙焼して焼鉛とし、これを鉛吹（素吹）して鈹（硫化銅）をはぎとり、鈹を真吹して荒銅とする。鉛吹のとき床尻銅ができるが、尻銅ができかつそれが多量の鉛ほど良鉛であることは、和佐保の銅鉛山の記録にもみえる。鈹から製出する荒銅を、床尻銅に対して平銅という」と記載しています。

ここでいっている真吹とは、鈹に珪石を加えて、木炭の熱で溶かし、溶けた鈹の表面に低圧の送風を行って酸化する一方で、僅かな銅を含む鍰である銅滓を除去して荒銅をつくり、更にその荒銅をまた真吹し、不純物を除いて精銅とすることです。

また三一三頁では「産物方役所ではさらに、飛州の山出し銅を米・塩と交易し、射水郡横田村に吹所を設置して、吹銅を高岡へ売りさばく計画を立てた。山出し銅は荒銅であるから、真吹し精銅とする事であろう。荒銅のままでは銅細工の材料とはならない。荒銅は、大坂の銅座か江戸の銅座出張所古銅吹所へ送られるはずのものであろうが、幕末にはそのような仕法もゆるんだものとみえる」と記されています。

ここで溶鉱炉について若干述べますと、最古のものは石と粘土で作った方形で後壁に一つの羽口（送風孔）を持つものでした。これが少し進みますと矩形となり、後方に二～三の羽口を備えるようになります。

近世になりますとイギリスでは石炭が非常に豊富でしたから直接石炭を燃料とする反射炉法が生まれ、ドイツでは燃料の石炭を節約するためにコークを用いる溶鉱炉法が盛んになりました。この頃の日本では木炭を燃料とする地床で酸化吹きが始まっておりました。

まとめ

荒神谷遺跡出土の銅剣三五八本の鉛同位体比による鉛鉱石出土鉱山の考察は、とりもなおさず、弥生時代中期における日本列島と中国大陸、朝鮮半島との交流であるとか日本海交易を浮かび上がらせる事となりました。

すなわち原材料の供給鉱山の大半は日本列島の北陸から東北にかけて存在しますが、一部に朝鮮半島及び中国大陸山東半島及び遼寧省の鉱山のものがあり、今から二千四百年以前に相互の交易・交流が行なわれていたことが判明いたしました。これはどのような経路で日本列島に青銅器文化が伝わったのかということについても重要なヒントを与えます。

話はかわりますが、その頃の出雲では弥生前期末に西川津遺跡で玉作りが開始されており、弥生時代中期に入りますと、北陸にいたる各地でも活発に玉作りが行われるようになります。

これらの玉作りの材料である翡翠・瑪瑙・碧玉・緑色凝灰岩であるとか、銅鉱石・鉛鉱石等の識別は岩石に精通した者でなければ難しいという共通点があります。加えて土器の動き、独特の墓である四隅突出墳丘墓の広がり等様々なつながりもあります。

一方朝鮮半島ではこの時期に西南部で碧玉製・緑色凝灰岩製の管玉が多数検出されるようになりますが、未だに半島での原材料供給地が判明せず、加えて玉作り遺跡も殆ど見つかっておりません。従って日本列島から大半の玉製品が供給され、見返りに鉄とか銅の原材料を輸入したという考え方が成立します。

出雲荒神谷出土銅剣は中細形C類に全体が入り、製作年代は弥生中期の中葉から後葉にかけての時期であります。この三五八本の銅剣には他の器種や他の型式が混入しておらず、類似する鉛同位体比を示すものが数多くある所から、同一箇所でほぼ同時に作られた可能性があります。従来これに先行する時期の青銅製品の製造現場としては、中細形銅剣A類の鋳型が姉遺跡（佐賀県）、田能遺跡（兵庫県）で発見されていますが、この中細形銅剣C類の鋳型は見つかっておりません。しかしこのタイプは別名が出雲型銅剣とも呼ばれ、出雲を中心に山陰地方で多く検出されているので、出雲で作られた可能性が高いものです。一方で鉛同位体比から判断される原料鉱石供給地は日本列島産が大多数を占めますが、朝鮮半島産のものもかなりあり、一部には中国大陸産鉱石でのみ作成されたものもありました。

今回は荒神谷出土中細形銅剣に絞ってその原料供給鉱山の考察を試みましたが、その結果浮かび上がってきたことは、弥生時代中期に日本列島産・朝鮮半島産・中国大陸産の自然銅ないし酸化鉱あるいは硫化鉱を、現地で焙焼したもの、或いは更に荒銅に吹いたものを、北九州・安永田（やすながた）遺跡、畿内・東奈良遺跡等に運び、そこで真吹して精銅のインゴットを作り、それを出雲に運んで銅剣の製作が行われたと云う事です。

次号では出雲荒神谷出土の銅鐸・銅矛をはじめとする各種青銅製品の鉛同位体比指数の分析を行い、その結果が物語るものについてお話します。

参考文献

池田謙三　『銅製錬』上巻　寶文館、一九三五年。

小葉田淳『神岡鉱山史』三井金属鉱業、一九七〇年。

佐々木昭・佐藤和郎・G. L. カミング「日本列島の鉱床鉛同位体比」『鉱山地質』第32巻（6）日本鉱山地質学会、一九八二年。

松本岩雄「青銅の神々・神庭荒神谷の青銅器は何を語るか」『古代出雲文化展』島根県教育委員会、一九九七年。

馬淵久夫・平尾良光「鉛同位体比法による漢式鏡の研究」MUSEUM370東京国立博物館美術誌、一九八二年。

馬淵久夫・平尾良光「東アジア鉛鉱石の鉛同位体比」『考古学雑誌』73―2日本考古学会、一九八七年十二月。

馬淵久夫他「島根県荒神谷遺跡出土銅剣・銅鐸・銅矛の化学的調査」『保存科学』第30号東京国立文化財研究所、一九九一年。

鏡（その7）

中山喬央（たかひろ）

まえおき

ここで鏡「その1」から「その6」までの要旨と、今後の執筆構想を説明します。

その1（まんじ104号）
世界中での鏡の始まりと西洋・東洋の違い、日本列島の鏡の起源。古事記のなかの鏡等。

その2（まんじ105号）
中国の鏡
詩経に書かれている鏡。男女の間を取り持つ鏡。宮殿を飾った鏡。

その3（まんじ106号）
中国鏡の精神的な用途。古鏡記。

その4（まんじ107号）
遊仙窟前編。

その5・その6（まんじ108・109号）
遊仙窟後編。

このように中国大陸での鏡を中心に、東洋における鏡に対する考え方を説明してまいりました。

中国では当初「かがみ」として用いられた「監」の字が、水の入った盥に眼を向けている構成をしていますので「水かがみ」を見るという意味を持って登場しやがて「かんがみる・みはる」という意味も持つようになったと考えられ、次いで「金」を加えた「鑑・鑒・鑒」の字が、鏡に映してみる、手本とする、いましめとする、という意味に使われるようになります。「鑑」の字は長く使われますが、やがて「鏡」の字がこれと並行して現れ、後漢時代には同じものを指すようになります。しかしその後、鑑の字は「かんがみる。反省する」と言う意味で用いられる事が多くなり、一方鏡は器物としての「かがみ」を表すのが主たる目的の言葉となっていきます。

このように中国では鏡は様々な意味で使われ、更にその意味するところにより、字が変化していきますが、鏡

のもう一つの起源を持つ、ヨーロッパと中近東ではどうだったのかを今回から取り上げ、それが終わった後、日本列島を含む、極東アジア地方での鏡の果たした役割とか、その意味するところについて今一度考え直して見たいと思っております。

トルコ・エジプト・イラン・地中海沿岸の鏡

鏡に関する出土で最古のものはトルコでの新石器時代の黒曜石製のものですが（鏡その1・129頁）、チャタル・ホユック遺跡出土のものは八千年位前のものだといわれています。一方エジプトでも先王朝時代以前、六千五百年前頃のバダリ遺跡では鏡として使用したと思われる雲母やセレナイト（透明石膏）の磨いた遺物が出土し、特にセレナイトは木材が付着した痕跡のあるものがあり、手鏡のように木枠をはめて使用したのではないかと思われています。

次いでエジプト中王国時代（前二〇三三年～前一七一〇年頃）に、アカシアと黒檀製の柄を持つパピュルスの大きく開いた花の形をした楕円形の扁平な青銅製の鏡があります。

この当時、鏡はミイラの包帯の間に置かれる場合が多く、この鏡は芽吹く緑色の植物と若さのシンボルであるウアジュの小さな円柱イメージを感じさせ、茎はありふれてはいますが明るい色で塗られたアカシアの木で作られ、茎の上には暗色の黒檀が組み合わされています。このウアジュ柱や女性像、ベス神像は、鏡の柄に最もよく用いられたモチーフです。

話は変りますが今から三千年程前のイラン・シアルクB墓地では、女性が埋葬されたほぼ全ての墓地から鏡が出土しており、これは鏡が当時の女性の持物として現代と同じように、メイクをしたり身支度を整えるためのものだったことを表したものだと考えられています。

またイラン北部のガレクティ第Ⅱ号丘第5号墓（イラン鉄器時代Ⅰ～Ⅱ期・紀元前十二世紀～紀元前八世紀）から、表裏とも素面の銅板打ち抜きの青銅鏡が出土しています。白銅質で円形の鏡ですが、矩形の短い鋲を止めるための孔が穿たれた茎を持っています。

そして紀元前三世紀～紀元後三世紀のイラン・パルティア時代の女性像柄付青銅鏡がありますが、この鏡は鏡背の中央に突起が無く、鏡縁に突帯を巡らすイラン系鏡の特徴を受継いでいます。

又この時代のものとして別に、鏡体と柄が一鋳で製作された鏡があります。この鏡は鏡背の中央に突起がありますが、それは孔が無いので鈕ではありません。柄は細長く柄の円盤に近いところに立方体の各角に計八つの丸い突起をつけ、鏡をおいた時、この突起が接するようになっていますが、この立方体を横から見ると中央に縦長

の孔が通っています。背面の中央突起の周りには同心円状の沈線を巡らし、さらに鏡縁にも連孤文状の模様が突帯に付けられています。

更に時代はやや下がりますが、イラン・後期パルティア時代（紀元後一～三世紀）の円形鋳造青銅鏡が、イラン北部ハッサニ・マハレ第四号墓から出土しています。先細りの短い茎を持ちますが鋳痕はありません。鏡縁は丸みを帯びて盛り上がり波文が付けられています。一方中央には円錐形の頂部に僅かな窪みを持つ平坦面のある突起があり、その突起を中心として鋳抜きによる同心円状の装飾が鏡背全体に施されています。

次にイタリア半島では、紀元前八世紀～紀元前一世紀にかけて、今のベニス南岸からボローニャ・フィレンツェ・ローマを含む地域一帯にエトルリアがあり、ギリシャ植民市の影響のもと、豊富な金属資源を利用して青銅鋳造技術を発達させました。鏡も女性の持ち物として副葬されています。鏡背にはギリシャ神話を題材にしたモチーフ（中心思想）の場面を説明するため、登場人物の名前を記した線刻の文様が施されているものが多数あります。

イタリア・エトルリア時代（紀元前四世紀）の鋳造後に図像が線刻された「柄付線刻青銅鏡」を説明します。

当時象牙や木で作られた柄が鏡につけられていたようですが、鏡体に茎が付いているので、ここに柄をつけて使用したことが分ります。鏡面は凸状、縁が僅かに高くなっている鏡背には、向かって左を向く、右手に剣左手に盾を持ち、頭には兜をかぶり、背中に翼の生えた戦士像が描かれています。足元には花のような表現があり、ロープのような衣装を身につけ、靴も履いていて、線刻に白い顔料を充填したものです。重さは、面徑14.7ｃｍ、全長19.6ｃｍに対し131ｇと大変軽く作られています。

今ひとつほぼ同時代・同地域のものを紹介します。

この柄付線刻青銅鏡は、鏡体と柄が一鋳で作られた後、図像が線刻され白い顔料で充填されたもので、鏡背は縁が高く、中央と右の裸の男は剣を持ち、中央と左の男は左手にだけ布を巻いて話をしています。彼等の背後にはドレスをまとった二人の女性が立っていて、人物像の周りには花文が巡り、柄にも花文が刻まれています。人物像の近くにエトルリア語で登場人物名が記され、ギリシャ神話の場面が説明されています。

錫の含まれていない青銅

ここで青銅の成分について考えてみます。

我国では英語のBronze Ageを青銅器時代と訳し、一方、中国大陸・朝鮮半島・日本列島で青銅といいますと、これは銅と錫及び鉛の合金のことを指しますので、青銅といえば全て銅・錫・鉛の合金のことを指すものと錯覚

しているケースを良く見かけます。

英語では青銅のことをbronzeと訳しますが、英語のbronzeは十八世紀以降使用された言葉で、砲金すなわち大砲の金属のことを指しています。英語では十二世紀以前からbrassという現在でも真鍮とか黄銅といったような意味の用いられる言葉がこの意味でも使われていましたが、その後フランス語で青銅を意味するbronzeが発生し、ペルシャ語では銅に由来すると思われるbiriniが使われ、これらが英語のbronzeの語源になったのだと考えられています。

そして中近東とかヨーロッパではbronzeといいますと、必ずしも全てが銅に錫と鉛を加えた合金ではないのです。「ブルガリア・上トラキア平野の青銅器時代研究」『日本考古学協会第74回総会研究発表要旨』では、銅と砒素の合金である"砒素青銅"の存在を明らかにしていますし、砒素はEnargite（硫砒銅鉱）3CU2S・As2S5とかTennatite（砒四面銅鉱）4Cu2S.As2S3にみるように、銅鉱石の中にも存在することがあり、錫抜きでも堅牢性ある銅合金を作ることが可能なのです。ちなみに『銅製錬』45頁には「As—砒素は銅と化合してCu3Asを構成する。この化合物はSolid solution（固溶体）としてある程度まで銅中に溶解する。少量ならば銅を強靭ならしむ美点がある」と記されています。この他Al-BronzeはAl（アルミ）12%以下で抗張力の強大な材料となりますし、Mn-BronzeはMn（マンガン）=0.2～0.8%でSteel（鋼鉄）に匹敵する硬い金属になります。

従ってラピスラズリと共に恐らく銅製錬技術伝来の見返りとして、アフガニスタンから中近東、ヨーロッパ方面にも錫鉱石が輸出されたのでしょうが、今のところ青銅製品の成分分析結果が乏しく、その分布状況が明確になっておりません。今後の研究成果が待たれる所です。

しかし、この方面での青銅製品について考える場合は、どうしてもこれらのことを念頭において判断する必要があります。

ヨーロッパの鏡

ヨーロッパの人々が鏡をどのように考えたのかということの基本は、旧約聖書と新約聖書に求める事が出来ます。

『旧約聖書』（「知恵の書」第七章二六）に「彼女（知恵、賢慮）は永遠の光の輝き、曇りなき鏡である」とあり、蛇は『福音書』（「マタイ伝」第十章十六）に「蛇のように賢く、鳩のように純心であれ」と記され、ミュンヘンのハンス・パルドゥンク・グリーンは擬人化した賢慮を「鏡」、「蛇」と共に描いています。

一五八二年、ラファエル・ミラーミは「ある人々にとって、鏡は真理の象形文字であった。真理が身を隠したままでいることのできぬように、鏡は差し出されるあら

ゆる事物をあらわに見せるからである。他の人々は、逆に、鏡が事物をしばしばそのあるがままの姿とは別様に示すがゆえに、それを虚偽の象徴とみなす」と述べています。

一二六四年、ヴァンサン・ド・ボーヴェの『大いなる鏡』は「自然の鏡」「知恵の鏡」「道徳の鏡」「歴史の鏡」の四つに区分された中世の百科全書ですが、先ほど述べた聖書に繋がる「知恵の鏡」がここに掲載されています。枢要徳[正義、賢慮、節制、剛毅]の一つについての図像表現が、イタリア（ルッカ・デッラ・ロッビア）では、はっきりした形で表されましたが、これがフランスで流行します。ローマの墓（シクストゥス四世とインノケンティウス八世）から、フランス西部・ロアール川下流の都市ナントの墓（ミシェル・コロンブによるフランソワ二世とマルグリット・ド・フォワ）を経て、サン＝ドニ（ルイ七世の墓）にいたるまで、何れも鏡を手にした思慮溢れる女性の姿で表現されています。

正確なヴィジョンの寓意である鏡は、また奥深い考えや真理を注意深く再検討する精神的な用途にも使われました。《reflectere》という言葉は「後方に送り返す」「反射する」から転じて「反省する」、自分で振り返ってみて善悪・是非を考える「省察する」を意味するようになります。

言葉を変えて表現しますと、自分自身に対する認識が、知恵の根底に繋がるということです。古代から人間は自分の顔を自分で観察しようとしてきました。

三世紀のディオ・ゲネス・ラエルティオスが言うところによりますと、古代ギリシャの哲人ソクラテスは、若者達に自分の顔を観察することを勧めましたが、その理由は、彼等が鏡を見ることによって自分達の醜さに気がつけば、徳によってそれを矯正するであろうし、美しければ悪徳から身を守ることによって、その長所を維持しようとするだろうということです。

スペイン生れで、皇帝ネロの師となった、ストア派哲人のセネカ（紀元後二年～六六年）も同じような事を述べています。「美しければ、彼は自分を堕落させるものを避けるだろう。醜ければ、道徳的な美点によって、肉体的短所を埋め合わせしなければならない事を自覚するだろう」と。更に言葉を継いで「若ければ、その若さに見合った勇敢な行動を考え実行すべき時が分るものだ。年老いれば、彼は自分の白髪を辱めるようなことは断念し、その思いを死へと向けるだろう」と。

ユウェナーリス（紀元後四二年～一二三年）は、オソ王が戦に赴くべく軍旗を掲げるよう命じながら、鏡を腕にかかえて、美容の手入れと髭抜きのために用いたことで、鏡に冷静に打ち込んでいた思想家達から柔弱だとそ

しりを受ける事となったと皮肉な調子で話しました。

ローマ帝政時代初期の作家アプレイウス（一二五年頃）は

「哲学者が鏡を持っている？哲学者が鏡を所有しているとは！……白状すれば実は私も鏡を持っているのだが、私にも鏡の前で身を飾る習慣があるということになるのだろうか。とんでもない。人間にとって自分の姿以上に観察に値するものはないということをご存知ないのか。鏡のなかの映像は本人に驚くほど良く似た姿で現れ、又同時に本人のあらゆる仕草に応じて動き、それを眺める者と何時も同年齢で、人生のその都度の様相を帯びているのだから」と言っています。

ウィーン美術史博物館で、ハンス・バルドゥンク・グリーンによって描かれ「人生の三段階」として展示されている「鏡を手にする乙女と死」は、歯の抜けた老婆と幼児と共に女性を描き、彼女の、なお美しさを保ちながらも凸面鏡のなかに最初の皺を発見すると同時に、死神のヴェールがかすかに触れるのを感じさせています。

ヨーロッパの幾つかの国の民間伝承には、分身への信仰から「もう一つの自我が失われる恐れがあるので、夜中に鏡を覗いてはならない。死体を鏡に映してはならない。死者のいる家では鏡に覆いをかけること。割れた鏡を怖れる事。その理由は生者は自分の影の運命に従うからだ―ドイツのロマンティックな物語『ゲノフェーファ』では、魂と炎が鏡の破片から立ち上る場面がある」という言い伝えがあります。

鏡は現実と幻覚が対照的にあり、その境界が分らないので、それは何時も人々を驚嘆させました。

芸術家に鏡が手本として与えられてきたのも当然のことと考えられます。

ローマ帝政初期の作家（一二五年頃）アプレイウスは、その鏡の『弁明』のなかで「似た外観を与える点で造形芸術に優っている点があるとすれば、まさに鏡が巧緻な光沢と創造的な輝きをもっていることだ」と述べています。

一方イタリア・ルネッサンス期の建築家・芸術理論家アルベルティ（一四〇四～一四七二年）は一四三六年、鏡はいったん仕上げた作品を判断するものとして「実物に即してつくられた物は、鏡の判断によって修正される」という見解を示しています。

最後にこの項をイタリア文芸復興期の画家・建築家・彫刻家レオナルド・ダ・ヴィンチ（一四五二年～一五一九年）の、鏡は師匠であるとの言葉をもって閉じます。

「画家の精神は鏡と同じようでなくてはならない。鏡は対象の色に自ら変じ、自分の前にあるものそのままの姿で自分を満たすからである。……平面鏡はその表面に本

物の絵を含むが、平坦なものの上に描かれた完全な絵も、鏡の表面に似ている」

鏡は事物をありのままに再現すると共に、もう一つの世界を召喚する道具として神話時代からヨーロッパの人々を魅了し、その想像力をかきたてて参りました。

次回以降、天の鏡、神の鏡、アルキメデスの鏡、アレクサンドレイアの燈台、ロードス島の巨像、ピュタゴラスの鏡、魔法の鏡、人工の幽霊といった様々なテーマを取り上げながら筆をすすめたいと思っています。

参考文献

池田謙三『銅製鋲』上巻　寶文館、一九三五年。

鈴木まどか訳『古代エジプト展』名古屋市博物館他、二〇〇五年。

宮里修他『服部コレクション　鏡の世界』早稲田大学會津八一記念博物館、二〇〇八年。

ユルギス・バルトルシャイティス著・谷川渥訳『鏡』国書刊行会、一九九四年。

祝出版

「濃・飛」秘史

文覚上人と大威徳寺

―鎌倉幕府創建への道―

相原精次著

彩流社　　2,100円

青の漂流（六）

宅見勝弘

【前号までのあらすじ】

一八六九年（明治二年）五月、蝦夷地（北海道）白老の仙台藩元陣屋の近くのアイヌ集落で、アイヌ人夫婦と仙台藩士が斬殺された。その翌日、択捉島から帰還した支倉兵衛が現場に居合わせ、生き残ったアイヌの碧眼の幼女を保護した。幼女の手には犯人の物と思われる赤い花弁が残されていた。支倉は仙台に戻り、幼女を蒼と名付けて、育てた。成長した蒼は、両親の斬殺方法が生麦事件の殺害と同じ特異な剣術と気付いた。その後、蒼は結婚し、大津へ移った。大津で、ロシア帝国ニコライ皇太子が襲われる姿を目撃した。ニコライの碧眼が鮮血で覆われる姿に、蒼は白老の惨劇を連想した。ニコライ襲撃の犯人が西南戦争の官軍であったことから、白老の犯人が戊辰戦争の官軍ではないか、と連想した。

六　ロマノフ王朝の血脈（続き）

沖守固（おきもりかた）滋賀県知事は、赴任して僅か一週間も経たない内に起きた大津事件の責任を取って、知事を辞任することになった。

沖は翌年一八九二年一月から五年余に亘って和歌山県知事となった。高山京輔と蒼も沖守固に従って、五年間、和歌山市に住んだ。

和歌山市の住所の近くには、陸奥正春が住んでいた。和歌山は正春の故郷であり、支倉との共同事業を高山左京に譲り渡した後、地元に帰っていたのである。陸奥は本名の伊達（だて）姓に戻していた。

当時の第二次伊藤博文内閣の外務大臣・陸奥宗光が本名の伊達姓でなく、伊達家が支配した国の『陸奥』を自

らの名前とした。正春も外相を真似て、伊達を使わず陸奥姓を自称していた。その後、正春は事業に失敗した後、本名の伊達に戻していたのである。

正春は和歌山で鐘捲流抜刀術（居合術）の道場を開き、師範をしていた。

蒼は過去の縁から、正春の道場へ出向くことがあったが、正春の抜き様に右上へ斬り上げる抜刀術の技を見る度に、白老の両親の斬殺を思い出すのであった。

（両親を殺した犯人は、抜刀術の達人に違いないわ）

鹿鳴館の事件で正春が海江田に斬り掛かる印象が強く、蒼は彼に対して完全に疑いを解いた訳ではなかった。しかし、大津事件を目撃して以降は、正春のような旧幕府軍だけでなく、新政府軍にも疑いの目を向けるようになった。

大津事件の犯人・津田三蔵が警備の巡査で、西南戦争の官軍だったということは、白老の事件に直接関係が無い。しかし、碧眼が鮮血に覆われたニコライ皇太子を見て、自分を重ねた時の直感を信じていた。

和歌山は、徳川御三家の紀州藩の土地であることから、幕府軍の仙台藩で育てられた蒼にとって住みやすいものであった。

大津事件の翌年一八九二年三月十三日に和歌山で、蒼夫婦の間に、男の子が生まれて、優輔と名付けられた。優輔の瞳は黒眼であった。碧眼と黒眼との子供は、黒眼の人の先祖に碧眼がいない限り、黒眼になるのであるが、蒼はその知識は持っていなかった。

沖は、和歌山知事の後に一ヶ月だけ大阪府知事を経た後、一八九八年から三年半に亘り愛知県知事となった。高山京輔は、沖の出身の旧鳥取藩主の池田家の元で働くことになり、蒼と優輔と共に鳥取に移り住んだ。

京輔は、その後も旧藩主等の武士とその家族が明治時代を生き残る手助けをする仕事を続けることになる。現在に例えれば、旧武士と子孫を対象とした人材派遣業のような仕事であった。

鳥取藩は戊辰戦争で明治政府軍に就いたのであるが、当時の鳥取藩主池田慶徳は、最後の将軍徳川慶喜の実兄である。

その歴史から、鳥取の地も、賊軍とされた仙台で育てられた蒼にとって過ごしやすい土地であった。

「お義父さんがフィリピンで戦死したそうだ」

鳥取に移って暫くした一八九九年（明治三十二年）七月、蒼夫婦の元に、義父である高山左京の死が伝えられた。

高山左京が米比（アメリカ＝フィリピン）戦争に巻き込まれ、マニラで戦死したということであった。

左京のフィリピンでの戦死が、白老の事件解決の鍵となるのであるが、蒼にはその事実に気付くことはなかった。

日清戦争（一八九四年）と日露戦争（一九〇四年）との間に、日本以外でも世界各地で戦争が勃発していた。

一八九八年（明治三一年）二月に、米西（アメリカ＝スペイン）戦争が勃発したが、戦地となったのは、キューバ・グアム・フィリピンであった。

米西戦争に勝利を得たアメリカはフィリピンをスペインから奪い、自らの植民地とした。

そして、翌年一八九九年一月にアメリカと独立を目指すフィリピンとの間に米比戦争が起った。

当時のフィリピン独立運動は日本と関係があった。フィリピン独立運動の機関紙の発行場所は横浜とされていた（実際はカモフラージュ）。

独立戦争の十年前の一八八八年に、『フィリピン独立の父』と呼ばれるホセ＝リサールは、亡命の際に日本に一ヶ月半ほど滞在していた。左京は、臼井勢似子という女性を通じてリサールと知り合った。その時は、リサールが一ヶ月後にヨーロッパへ亡命したので、フィリピンとの関係は深まらなかった。

リサールから十年後にフィリピン駐日大使マリアナ＝ポンセは、横浜で中国の孫文を通じ、後の首相犬養毅や大隈重信首相たちに独立の支援を求めた。

犬養の働きにより、日本陸軍から武器を調達した。しかし、武器を積んだ三井物産船（布引丸）は七月二十一日に日本人志士数名と共に台風で上海沖において沈没した。

それに先立つ六月十四日に、左京は、原禎陸軍大尉・平山周たち五名と共に長崎からマニラに渡った。そこでアギナルド大統領と会見し、フィリピン独立軍に参加した。

米比戦争には、フィリピン在住者がほとんどであるが、日本人三百人が参戦した。

渡航した左京は、米比戦争の戦火に巻き込まれ、死亡したのであった。

以上が、一緒にフィリピンに渡った五人から左京の遺族に伝えられたことであった。

左京は渡航前に遺言を残しており、死を覚悟の上でのフィリピン行きであった。

明治の作家・山田美妙が、フィリピン初代大統領アギナルドについて『あぎなるど（伝）』を発表しているくらいで、当時の日本人にとって、フィリピンの独立運動は関心があった。

しかし、左京がフィリピンの為に命をかけた理由が蒼には理解できなかった。

左京は既に妻を亡くし、実子は無かったが、京輔を始め十人の養子にも相応の財産が残され、残りの資産は、施設に寄付された。

また、遺言で葬式も墓参りも禁止されていた。

左京の遺骨が持ち帰られたが、出身の薩摩でなく、本人の遺言により沖縄の南西の離島に葬られた。

しかし、京輔たち養子には島の名前も知らされず、蒼も勇の左京の墓参りもすることもできなかった。

蒼は左京が何故、自分達に墓すら知らせなかったのか不思議に思った。

左京のフィリピン戦死と同じく、墓の有る沖縄の離島も、蒼の運命に対する鍵となるが、蒼には想像も付かなかった。

翌年一九〇〇年四月、蒼の家族は愛媛県の宇和島市に移り住んだ。京輔は、旧鳥取藩の池田家から旧宇和島藩の伊達家に紹介され、宇和島で働くことになった。

鳥取藩主池田慶徳は明治維新前の一八六三年（文久二年）に公武合体の建白をしたが、この時に一緒に建白をしたのが、宇和島藩主・伊達宗城である。

池田慶徳と伊達宗城は共に将軍継嗣問題では慶喜を支持し、その後、慶喜から一定の距離を置いて、結果として明治維新の激動の時期を生き延びた。

宇和島は一六一四年（慶長十九年）に伊達政宗の長男秀宗が入封して以来、伊達氏が廃藩置県まで治めた。

蒼は、伊達家と縁が有る土地に住んで、不思議な運命を感じていた。（宇和島市は現在、仙台市と姉妹都市になっている。なお、白老町も仙台市の姉妹都市になる）

一九〇四年（明治三十七年）二月、日露戦争が開戦した。

当時のロシアの皇帝は、大津事件で傷を負ったニコライ二世であった。

戦争当時は、蒼は宇和島で生活していた。

日露戦争は日本の優勢のままポーツマス講和会議により終結した。

日露戦争の際に、ロシア兵捕虜が最も多く収容されたのは愛媛県松山市であった。ロシア兵が日本に投降する際に『マツヤマ』と叫んだほどであった。

日本のロシア兵捕虜に対する扱いは極めて寛大なものであった。ロシア人捕虜が愛媛の町を旅行することもあった。

同じ愛媛でも宇和島と松山とでは距離があったが、ロシア兵捕虜を見る機会があった。

（自分の先祖を遡れば、ロシア兵の先祖と繋がっているのでないかしら）

多くの碧眼のロシア兵を見て、蒼は感じた。

それから、十年が経過して、一九一四（大正三年）六月に第一次世界大戦が勃発した。

その頃、高山京輔は、沖が大津事件の前に長崎県知事をしていた関係で、京輔と蒼は長崎に渡り、旧島原藩主深溝（松平）家などの旧武士階級の子孫を対象とした人材斡旋の仕事をするようになった。

蒼は夫に従い、長崎に移り住んだ。息子の優輔は東京帝国大学に進学していたが、大戦の始まった一九一四年に卒業し、外務省に勤務することになった。

優輔の就職と時期を同じくして、蒼は鹿鳴館での経験から英語が流暢に話せたので、長崎の語学学校で英語を教えることになった。

その語学学校でロシア語の教師をしている安奈という女性と親しくなった。安奈は蒼の息子・優輔と同じ一九八二年三月十三日の誕生日で、二十二歳であった。彼女の母親が日本人であったが、父親はロシア人ということであった。

「日本風に安奈と名乗っていますが、本当の名前はアナスタシアと言います」

安奈は蒼に説明した。

「アナスタシア…　ニコライ二世の第四皇女と同じ名前だわ」

名前だけでなく、安奈はアナスタシア皇女に似ていると、蒼は思った。

アナスタシア皇女の写真を蒼が見たことがあった。安奈はアナスタシア皇女よりも八歳年上になる筈であった安奈が若い頃にはアナスタシア皇女に良く似ていただろうと蒼は思った。

違っているのは、アナスタシアが碧眼金髪と伝え聞いていたが、安奈は黒眼黒髪であった。

蒼と安奈が知り合って四年後の一九一八年（大正七年）七月、安奈は悲しげな口調で蒼に話しかけた。

「ニコライ二世とアナスタシアを含めた家族全員が銃殺されたそうよ」

蒼は安奈が自分と同じ名前のアナスタシア皇女も銃殺されたことに自らを重ねて、同情しているのだと感じた。

第一次大戦が終息に向かう一九一七年（大正六年）ロシア革命が起こり、翌一八年七月にニコライ二世が家族と共に虐殺された。この時のニコライ二世は五十歳で、蒼とほぼ同じ年齢であった。

その後、世界では、アナスタシア皇女が生き延びたと言う噂が出ていた。いわゆるアナスタシア伝説で、後世になりイングリッド・バーグマン主演『追想（原題アナスタシア）』の映画の題材になった噂である。

ニコライ二世の四人の娘の中でも、アナスタシアは特に小柄で、幼げな顔立ちは蒼の目から見ても東洋人のような愛らしさを感じていたのであった。

蒼は安奈と一緒に働くうちに、安奈のことを自分の娘のように感じていた。

「実は、私はロシアのロマノフ朝の王室の血を引いているらしいの」

安奈は蒼に自分の出生の秘密を話し始めた。

それは、一九八一年五月十一日の大津事件でニコライが襲われる前に、長崎に来航したときに始まっていた。

ニコライ皇太子は、五月四日に日本に公式に上陸する前日にジョージ親王と一緒に、長崎郊外の稲佐郷へ訪れ、稲佐お栄（道永えい）の経営する旅館に非公式に宿泊した。

ニコライ皇太子とジョージ親王は、稲佐お栄と芸舞妓お菊と一夜を過ごし、午前四時過ぎに停泊中のロシア艦に戻ったのである。

ニコライは来日前にフランスのピエール・ロティの小説『お菊さん』を読んでおり、女性の名前が、『お菊』ということで偶然に喜んだそうである。

お菊はニコライの相手をしたことで妊娠し、翌年三月に出産した。そこで生まれた女の子が安奈であった。最初はアナスタシアと名付けていたが、日露戦争が開戦してから、安奈と日本風に名乗るようになった。

「どうしてアナスタシアという名前をつけたのかしら」

蒼は疑問に思い、質問した。

安奈はアナスタシアの名前の由来について、ロシア語のキリル文字と英語の文字をノートに書きながら、説明を始めた。

ロシアを英語標記すると、『RUSSIA（Russia）』であるが、ロシア語だと『РОССЙЯ（Россйя）』となる。英語のRがロシア語のP（エル）に、英語のSがロシア語のC（エス）に対応する。

同じようにアナスタシアは英語で『ANASTASIA（Anastasia）』、ロシア語で『AHACTACЙЯ（Анастасйя）』である。英語のNがロシア語ではH（エヌ）に当てられる。その他、英語のVがロシア語ではBになる。

英語標記のASIAはアジアを指す。

ロシア語のAHCTを並び替えると、CHATこれはフランス語で『C（セ）H（アシュ）A（ア）T（テ）（chat）（シャ）』となる。これは、猫を指すが、可愛い女の子も意味する。

（女性名詞の場合は最後の子音を重ねてEを加える）

「つまり、アナスタシアは、文字を並び替えると『アジアの可愛い女の子』となるの」

安奈とその母親が語学に通じているのに蒼は感心した。

ニコライが安奈の母親との会話の中でアナスタシアとう名前が出てきたのではないか、と蒼は考えたのであった。

ニコライは後にイギリス女王の孫娘を妻として向かえ、結婚後は家庭では英語で会話するほどであった。

大津事件当時はロシアとフランスは親密な関係で、一八九四年には露仏同盟が成立するほどであり、ニコライはフランス語にも通じていた。

後に自らの娘にアナスタシアと名付けたくらいなので、ニコライにとって愛着のある名前だったかもしれない、と蒼は思った。

英語とロシア語とのアルファベットの対応関係

英語	⇔	ロシア語
「N」	⇔	「H」（エヌ）
「S」	⇔	「C」（エス）
「R」	⇔	「P」（エル）
「V」	⇔	「B」（ヴェー）

例えば、『ロシア』
英語で『RUSSIA（Russia）』
ロシア語で『РОССЙЯ（Россйя）』
なお、旧『ソ連』を『CCCP』と記すが、『エスエスエスエル』と読む

『アナスタシア』

英語　『ANASTASIA（Anastasia）』

N→H　S→C

ロシア語　『AHACTACЙЯ（Анастасйя）』

『アジア』

『CHAT』（シャ）
フランス語で『猫』、転じて『可愛い女の子』の意味

厳密には、フランス語には男性名詞・女性名詞の区別があり、女性名詞の場合はE（e）を加える（語尾が子音の場合は重ねる）ので、『CHAT』は『CHATTE』になる。

なお、『アジア』のロシア語は『ACЙЯ』でなく、『AЗИЯ』になる。



＜関連する人物＞

沖守固(1841-1912)	大津事件当時の滋賀県知事
陸奥宗光(1844-1897)	日清戦争時の外務大臣
海江田信義(1832-1906)	生麦事件の当事者 貴族院議員
津田三蔵(1855-1891)	大津事件の犯人
ニコライ２世(1868-1918)	ロシア帝国最後の皇帝
稲佐お栄（道永えい）(1860-1927)	長崎ロシア旅館経営
徳川慶徳(1837-1877)	鳥取藩主　徳川慶喜の実兄
ホセ＝リサール（1861-1896）	フィリピン独立運動の指導者
マリアナ＝ポンセ(?-?)	フィリピン駐日大使
孫文(1866-1925)	初代中華民国臨時大総統 辛亥革命の指導者
犬養毅(1855-1932)	第29代内閣総理大臣
大隈重信(1838-1922)	第8・17代内閣総理大臣
伊達宗城(1844 -1858)	最後の宇和島藩主
伊達秀宗(1591-1658)	初代の宇和島藩主 伊達政宗の長男
アナスタシア(1901-1918)	ニコライ２世の第４皇女

＜参考年表＞

1862年9月	（文久2年8月）	生麦事件
1868年1月	（慶應4年1月）	鳥羽・伏見の戦い
1869年5月	（明治2年5月）	五稜郭の戦い（箱館戦争）
1877年2月	（明治10年2月）	西南戦争
1891年4月	（明治24年4月）	ニコライ皇太子長崎来航
1891年5月	（明治24年5月）	大津事件
1894年7月	（明治27年7月）	日清戦争開戦
1894年11月	（明治27年11月）	ニコライ二世 ロシア皇帝即位
1898年2月	（明治31年2月）	米西（アメリカ＝スペイン） 戦争開戦
1899年1月	（明治32年1月）	米比（アメリカ＝フィリピン） 戦争開戦
1904年2月	（明治37年2月）	日露戦争開戦
1905年1月	（明治38年1月）	ロシア第一革命 （血の日曜日事件）
1905年9月	（明治38年9月）	ポーツマス条約 （日露講和条約）
1914年6月	（大正3年6月）	第一次世界大戦開戦
1917年3月	（大正6年3月）	ロシア革命（二月革命） ロマノフ朝滅亡

れんしゅう（恋詩集）しさくのかなしみより その五

松下壽男

時間

じゃあ九時に
―いいです―来るよ
―いいわよ―来ます
とにかく九時に来てみます

鉄さび色の海をながめて
呪文のように
会話をつぶやく
吸殻も夕陽に染まる

港の灯の揺らめきに
時間を潰したたばこを投げる
約束も時間のように確かなものなら

あなたは私の太陽なのに
ただ徒に苛立ちながら
あなたの周りをうろつく私

ホメラレモセズ　クニモサレズ（二十）

松下壽男

二十　別れ

昭和五年、一九三〇年、陸一らの奔走で、村の報徳社は社団法人として認可され、大日本報徳社の仲間入りを果たした。その陰には、貞二による物心両面にわたる推譲があった。身を固め、若衆宿を卒業していった先輩たちの頼もしい働きがあった。

おかげで陸一は事務方に徹することができるのであった。

昭和八年八月の常会では、その年も新嘗祭の日に、小学校を借りて報徳社主催の品評会を催すことになった。米や、野菜、果物、家畜など、思い思いの、およそあらゆる農産品を持ち寄って丹精を評価し合い、農事に関する情報を交換し合うのである。

常会後段の寛いだいもこじの席で、小学生の図画や習字の展示や娘衆の歌や踊りのほかにも、何か趣向がないものかという話題になって、若衆で二宮尊徳の劇をやってみんべということになった。そして当然のことのように陸一に台本書きの仕事が回ってきた。

陸一は、夜話や報徳記を読み返し、話の筋まではできたのだが、せりふを書き始めると筆が進まなかった。吃りで口下手な自分にせりふがかけるわけがなかろうと投げやりになった。彼は、ふと「自分の言葉で話してください」という宮沢先生の言葉を思い出した。こみあげる懐しさと共に夢に目覚めて歩んできた村の報徳社も、いよいよ文化活動に足を踏み入れたことを実感するのであった。

（宮沢先生、羅須地人協会の理想から見て村の報徳社はどうだべ。いったい劇の台本はどうやって書きゃいいだべか・・・）

陸一は、久しぶりに先生と話してみたいと思った。

母親の作ってくれたおはぎを手土産にして、翌日賢治の

元に相談に行った。

建物に羅須地人協会の看板はなかった。玄関先の黒板には、

「下ノ
　畑ニ
　　居リマス
　　賢治」

と、書かれていた。戸口には鍵がかかっていた。陸一は、畑へ下る道を探して辺りを見回した。いちめんの、もやもやとした薄緑色のコスモスの葉の繁みの間に、点々と彼岸花が咲いていた。

門の方から店員風の一団がやってきて、鳥打帽子に手を当てて軽く彼に会釈をすると、鍵を開け始めた。陸一は尋ねてみた。

「宮沢先生は、いらっしゃいますか」

「賢治さんならもういねだ。昨日死んだだよ」

陸一は、立ち竦むしかなかった。おはぎを包んだ風呂敷包みが鈍い音を立てて地面に落ちた。

翌九月二十二日、賢治の葬儀が浄土宗の安浄寺で執り行われた。

陸一も朝から村を出て、寺に向かった。町の名士の長男であり、農学校の教師であった故人の葬儀には、会葬者が引きも切らずに集まってきた。

陸一も農学校時代の級友らと出くわし、懐かしく語り合った。これも宮沢先生の引合せだと思った。

陸一は人波を掻き分けるようにして本堂に近づいて、中から漏れ聞こえる弔辞に耳を傾けた。心の中に先生の人物像を彫り込むようにして、頷きながら聴き入った。

弔辞を通して、陸一は、先生が、学生時代から日蓮宗の熱心な信者であったことを知った。父親と信仰上の対立を重ね、出奔を繰り返すうちに、先生の人柄が培われてきたことを知ったのだった。そのことは人生を通して変わらなかったのかもしれない。先生の教育も、羅須地人協会の活動も、信仰憧れや足掻きと同種のものではなかったかと陸一は思った。

あるいは、それは、質屋という、人の困窮を商売の種にする父親への反発の中から生まれたものかもしれないと陸一は思った。先生は終に家業を継がなかったのだ。そしてこれという仕事をなし遂げないうちに逝くべきところへ逝ってしまった天馬のような人生が、今となっては珠玉のような童話や詩編に凝集しているのであった。

続いての弔辞で、羅須地人協会の活動が思うようにできなくなった後のことがわかった。先生が採石工場の技師として奔走し、農民の相談に応じて無数の肥料設計書を書き上げていたことを知ったのだった。

東北採石工場といえば、石灰岩の岩山を崩して砕き、土質改良用の石灰を製造している所であった。

陸一の体に電撃が走った。まさに陸一が描いていた大

規模な土質改良の構想が、先生の行動の背景にも見えてきたからであった。

しかも先生は無鉄砲にも独力でそれを成し遂げようとしていたのだ。そして病に倒れたのだった。

父母の根源は天地の令命に在りという、まさに天と地の接する所に命を育む土壌があったのだ。先生は、その故郷岩手の土壌を相手に奔走していたのだった。

すると、あの羅須地人協会までが一つの実験室、いや壮大な試験場のように思えてくるのだった。

地圏と気圏の境に位置してその局面に現象する生命を育む土壌の実験、地圏と水圏の境に位置する河岸段丘における耕作の実験、都会と田舎の境に現象する文化の実験、科学が代表する西洋の才と仏教が代表する日本人の魂とが架空する文学の実験、子供の無尽蔵の感性と哲人の無限の理性との重層に現象する普遍の童話の数々、そして総ての要素が浮遊し臨界して明滅の閃光を放つ詩的宇宙、そうだ、それら異質の接する場における交流現象の壮大な実験が繰り広げられる試験場とは、まさに交響的宇宙そのものではなかろうか。

先生はただの田園の人ではなかったのだ。

先生は境界にこそ価値の源泉があると気付いていたのだ。だから、郊外向けの野菜栽培を実験していたのかもしれない。売れなくてもいいから人々の嗜好を調査し、西洋野菜の普及を図っていたのかもしれないのだ。百姓が米に頼らず現金収入を手に入れる方策として。そして百姓が芸術を通して感性を磨き、旨い米、美味しい野菜、美しい花々を育てれば農作物に新しい価値が加わるのだと。

先生は一人の預言者だったのだと陸一は思った。しかも予言は夢に溢れていた。先生も夢の仲人だったのだ。

しかし、当の先生には、境界のどこにも居場所がなかったように陸一には思われた。終生褒らず、境界のどちらにも身を置かず、居心地の悪い中間にいて、敢えて独力で自らの壮大な文化を築こうとしていたように思えた。

そういえば先生は、よく

「ぼくの顔は狐に似ていませんか」

と、語っていた。里と山との境にいて時折人を幻想に誘い込む狐の姿は、先生の生き方のようでもあったと陸一は思った。そして物語の狐のよう先生も孤独な疎外感を感じ続けて生きていたのではなかろうか。

陸一は、声を上げて泣いていた。

翌年、一周忌に当たる日の岩手日報夕刊の「宮沢賢治追悼号」で、陸一は、「雨ニモマケズ」の詩を知った。死後発見されたその賢治の絶唱は、生死をさ迷う枕辺に置かれていた、黒い手帳への走り書きだった。

「雨ニモマケズ
風ニモマケズ
雪ニモ夏ノ暑サニモ　マケヌ　丈夫ナカラダヲ　モチ

欲ハナク
決シテ瞋ラズ
イツモシズカニ　ワラッテヰル
一日ニ玄米四合ト
味噌ト少シノ　野菜ヲタベ
アラユルコトヲ　ジブンヲカンジョウニ入レズニ
ヨクミキキシ　ワカリ
ソシテ　ワスレズ
野原ノ松ノ林ノ蔭ノ
小サナ萱ブキノ小屋ニヰテ
北ニ病気ノコドモアレバ
行ッテ看病シテ　ヤリ
西ニツカレタ母アレバ
行ッテソノ　稲ノ束ヲ　負ヒ
南ニ　死ニサウナ人　アレバ
行ッテ　コハガラナクテモイイ　トイヒ
北ニ　ケンクワヤ　ソショウガ　アレバ
ツマラナイカラ　ヤメロトイヒ
ヒドリノトキハ　ナミダヲナガシ
サムサノナツハ　オロオロアルキ
ミンナニ　デクノボート　ヨバレ
ホメラレモセズ
クニモサレズ
ソウイウモノニ
ワタシハナリタイ」

陸一は、唸ってしまった。「木偶の坊」とは人を罵る蔑称なのに、皆に木偶の坊と呼ばれたいという。そこまで自らを空しくして人に尽くす忘己利他の願いに強く心を打たれた陸一であった。

「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」とは、ひとが報われることで報われるということなのだ。自分が報われることを考えてはならないということだったのだ。そのことが、自分を勘定に入れない生き方を通して賢治が陸一に教えていることなのだと思った。

しかしそれではあまりに寂しいと感じた。救われない、報われないと陸一は感じた。

陸一には、幻に終わった金次郎さんの銅像建設をきっかけにして、形を成した報徳社があった。支えてくれる人々が居た。活気を持ち始めた村があった。

陸一にとってかけがえのない村であった。村にとって無くてはならない陸一だった。

一番よい声で歌い、朗らかによどみなく話す、彼を慕っている娘もいた。両親も先方の両親も周囲の人々も機が熟すのを心待ちにしていた。陸一の心に「烏の北斗七星」の挿し絵が浮かんだ。報われることを待ち望む人々のために自らも報われることを夢見た。そろそろ身を固めようと思った。

陸一は二十八才になっていた。

——完——

編集後記

今回は『日経ビジネス』二〇〇九・一・五新年特大号に掲載された「実利と道徳一兎を追う」を紹介します。この論攷は先ず現在北京大学・日本文化研究所で十年以上進められている「二宮尊徳」研究から始まります。

研究の契機となったのは一九七八年一〇月にパナソニックを訪問した鄧小平と松下幸之助の会話です。松下幸之助はこの会話の十二年前に「道徳なき経済は犯罪であり、経済なき道徳は寝言である」という二宮尊徳の教えを実践すべく『道徳は実利に結びつく』という小冊子を広く無償で配布していました。

一方二宮尊徳は「報徳仕法」と呼ばれる考えで農村復興、藩の財政立て直しに成功しますが、その基本理念は分度・推譲・勤労・至誠です。

分度とは農村復興の為に先ず過去の納税額を遡って調べ、その平均額を算出して以後数年間の税額とすることで、これは適正な利潤のことを指し、次いで、藩と農民はそれぞれの「分度」を超えた利益を社会インフラ整備への投資に回しますが、これを「推譲」と呼びます。更に尊徳は分度を満たし、それを超えるための「勤労」と、推譲を惜しまない、社会への「至誠」を説いたのです。これはトヨタ自動車創業の精神にも引き継がれますし、近江商人である、伊藤忠・日本生命・高島屋・大丸・三越・双日・丸紅・西川産業・ワコール等の企業理念にも入っているものです。

三戸岡さんの発案で、引き続き田寺さんから、今年の干支にちなんだ牛の表情が、とても幸せそうな表紙絵を送っていただきました。言葉は「反芻してこそ知恵になる」でまさに「変」の年にふさわしいものです。（T・N）

まんじ第111号

平成21年2月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　中　山　喬　央（なかやま　たかひろ）
事務局長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）

（事務局）　〒223-0056　横浜市港北区新吉田東五丁目76-35　太田善朗方
TEL・FAX 045（544）5947
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
（印刷製本）　日東印刷株式会社
〒142-0054　東京都品川区西中延2-15-16

表紙の絵について
「反芻してこそ知恵になる」　　田寺怜華（たでられいか）画

まんじ

No.112

2009.5.1

まんじ第百十二号　目次

法隆寺再建の謎（聖徳太子信仰）……隆　恵…4
狩谷棭斎讃歌（五）……新井　宏…8
信じて託す（その六）―米山梅吉の一生―……三戸岡道夫…14
今川風雲録（四）……千坂精一…20
我が愛誦歌（七）―戦後の歌壇逍遥―……曽根竣作…27
短歌　三十首……曽根竣作…33
短歌　行雲流水（二十三）……石黒修身…37
（一）近詠二十首（二）流氷余話　短歌十五首
漢詩　潮騒録（五十七）《漢詩の流れ46》……鯨游海…44
俳句　鷹の呟き（六）……大澤鷹雪…48
鎌倉の詩　二題……太田精一…50

狩野川のトド（四）……堀内永代…52
一水……吉田忠雄…60
青春彷徨（四）出会い……伊治哲…65
「雲」……平山恵敏…71
桐の花影―吉良側の忠臣蔵余話（三）……忠内正之…76
司馬雑感十九　近江路から熊野路へ（二）……山田嘉久…84
化粧のルーツを訪ねて（六）……鈴木守…91
還暦からの考古学（十六）……中山喬央…105
鏡（その8）……中山喬央…116
成人式……勝山道子…123
青の漂流（七）……宅見勝弘…126
れんししゅう（恋詩集）しさくのかなしみより　その六……松下壽男…132
悲しいアメリカ―プログマティズムの研究を通して―その一……松下壽男…133
編集後記……編集子…137
表紙……田寺怜葦

法隆寺再建の謎
――（聖徳太子信仰）――

隆　恵

我が国の歴史上一千年以上の長きに亘って敬愛され続けた人物は、聖徳太子と弘法大師の二人がその双璧であろう。聖徳太子は元を辿れば官製の偶像であり、弘法大師は高野山の修験僧（山伏）製の偶像である。二人に共通するのは、仏の教えを通じて、あまねく人に慈悲の心で接し、如何なる悩みも救ってくれると言うイメージである。

聖徳太子は観音菩薩の生まれ変わりと言う聖徳太子信仰に発展して行く。ものの本に依れば、聖徳太子建立の四天王寺が、平安時代には国家鎮護の最高の寺院である比叡山延暦寺の霊場となり、この観音菩薩の再来像が後の浄土宗や法華宗に吸収され、貴族階級を中心にその信仰が浸透して行き、室町時代以降になると一般庶民にも信仰されるようになったとある。

この聖徳太子信仰の起源は日本書紀の記録にある。その記録によれば、聖徳太子は偉大な政治家であるだけでなく、聖人の徳を持ち、仏教の教えに通じていて寺院の建立にも努めた仏教の擁護者としてある。更に聖徳太子人気の秘密に、没後に故なく一族が殲滅されるという悲劇の主人公と言う、日本人受けする要素も兼ね備える。

（一）ＮＨＫの特別番組「法隆寺の謎」の問題提起

今春のＮＨＫで「法隆寺の謎」が放映され、大変興味深い番組だったので、その趣旨を簡単にご紹介する。

① 聖徳太子が建立したとされる法隆寺は六七〇年に全焼した。創建当初の法隆寺（以下　旧法隆寺）は、場所が現在の法隆寺（以下　新法隆寺）のやや斜め前にあり、その規模はやや小振りであった。全焼の記録は、その寺院跡から出土した瓦の焼け具合から真実と分かった。

② 国宝釈迦三尊像、現在夢殿に安置されている国宝救世観音像、及び国宝玉虫厨子の三体は建立当初の物と判明し、二体の仏像は聖徳太子の等身大を模した物と分かった。身長一八〇センチの大柄で細面の人物だった。

③ 現存の金堂（以下　現金堂）の建立時期は、天井裏の屋根板の年輪の鑑定で、六六七もしくは六六八年建立とほぼ断定できた。

④ 現金堂の釈迦三尊像の隣の基壇に残る安置仏像の痕跡から、建立時からある時期まで救世観音像と玉虫厨子が三体並べて安置されていたと確認できた。二体の移動時期は、現在安置されている仏像の制作年代が鎌倉時代なので、鎌倉時代から現在の仏像の配置となったようだ。

⑤ 現金堂と創建当初の三体が焼失を免れた謎は何か。その謎解きは概ね次の通りであった。

（A）現金堂は、旧法隆寺の焼失の二年前に、そのやや奥地の山を削って新たに建立され、旧法隆寺の全焼前から上記三体を現金堂に安置していた。

（B）全焼後は、焼失を免れた現金堂を中心に数多くの堂舎が増築され、新法隆寺が完成した。

（C）現金堂の建立と全焼後の新法隆寺再建の命令者は時の権力者の天智天皇であった。

（D）天智は、百済再興の軍事作戦の失敗と、その後の唐の倭国侵略への防塁費用などの相次ぐ失政で、豪族たちの不満と怨嗟の声は大きく、これを「聖徳太子の仏の教え」で宥めて国論の統一に役立てようとしたものだ。

以上が番組の趣旨であった。

（二）この時代の政治情勢

この当時の政治状況を、書記の記録によって時系列で簡単に整理してみる。

六六三年　百済再興のための大軍事作戦が白村江の役で敗戦
六六四年　唐使郭務宗が筑紫に半年在留
六六五年　唐使劉徳高が筑紫に来訪
六六七年　近江遷都
六六八年　新法隆寺の現金堂完成
六六九年　唐の将軍郭務宗が二千名余の軍を伴い筑紫に駐留
六七〇年　旧法隆寺全焼
六七一年十一月　再度、郭務宗が二千名余の軍を率いて筑紫に駐留
十二月　天智崩御
六七二年五月　天智崩御を筑紫で勅使から報告を聞いて郭務宗は帰国
五月　壬申の乱勃発

八月　天武即位
六八二年　持統即位
七二〇年　日本書紀完成

この時系列で推理できる事は、白村江の役で大敗してからの天智は、唐の倭国侵略に怯え、九州から大和までの防衛拠点造くりに奔走し、更には敵軍の想定上陸地の難波に近くて危険な飛鳥を捨ててより安全な近江に逃げ、敵軍の唐の筑紫国への占領も現実の問題となってしまう。

六四五年のクーデター（乙巳の変）で実権を握った天智の終生の百済支援戦略は、百済は滅亡するだけでなくその再興を目論んで大国の唐との大決戦に挑むも惨敗し、その度重なる戦費の負担に喘ぐだけでなく、倭国の存亡の危機を招いたのである。

（三）誰が何を狙いに新法隆寺建立（再建）をしたのか

①誰が建立をしたのか

これほどの大規模な寺院の建立は、天皇家でなければ財政上不可能である。即ち、旧法隆寺に隣接して新法隆寺の建立を命じたのは天智天皇である。

そして、現金堂が完成した段階でなぜか旧法隆寺は全焼してしまう。その天智はほぼ一年後には崩御してしまうので、後継の天武と持統がその大半の堂舎建設を命じたのであろう。

②その狙いは何だったのか

NHKの推理（聖徳太子の仏教の教えで国論を統一しようとした）だけでは、根拠が薄弱である。

当時の人たちの約六十年前の昔に活躍した厩戸皇子（聖徳太子）についての意識は、古事記の厩戸についての唯一の記録である「推古女帝の長い治世は、皇太子の厩戸皇子の政治の助けが良かったからと言う事は、お前達若い者も聞いておるよな」に象徴されているように思う。

厩戸の良き政治とは、大国の中国（隋）と度重なる遣隋使派遣と隋の答礼使節の訪倭という平和友好関係の構築により、経済並びに文化の交流で倭国が飛躍的な繁栄を成し遂げた業績を指したのではないか。

それに引き換え天智の行った事は、隋以上に強大な唐と軍事衝突をして大惨敗し、且つ膨大な戦費負担で豪族たちの経済的な破綻を来すだけでなく、更には倭国が史上初めて外国による占領（筑紫）が現実となるなど、建国来の最大の危機の時に新法隆寺の現金堂が完成する。

○倭国隆盛の立役者の厩戸を、天智も明確に尊崇する気持ちである事を豪族たちに周知させ、今後は大国の唐と事を構えるのではなく厩戸と同じく友好関係の構築に路線転換をするというメッセージとする。

○倭国の存亡の危機を脱するべく、厩戸を鎮護国家の正に「救世」主として崇めて、国難の回避を祈願する。救世観音菩薩像の仏像は他に類例を見ないと言うことであり、これが真の理由なのかも知れない。

○謀殺された厩戸の一族取り分け、子孫を根絶やしにされた厩戸の霊を慰め、その怨霊を法隆寺に押し込むためであったとする梅原猛説も今思えば正解である。

書記では六四三年に入鹿が一族を討伐したと入鹿単独説としてあるが、私見は教唆犯も含めて天智（中大兄皇子）主犯説を主張したい。

この三点が大きな狙いであったと思う。

（四）書記編纂者の聖徳太子像の創作の思惑

書記編纂の約五十年前の新法隆寺建立の時には既に、豪族たちに厩戸礼讃（聖徳太子信仰の元型）のイメージが定着していたのである。そうした豪族たちの固定観念を踏まえて、書記の編纂者の持統と藤原不比等は、豪族たちへの迎合と納得性の獲得、また始祖とも言うべき天智の隠された陰謀による悲劇の厩戸一族への鎮魂を、書記の編集方針としたのであろう。要するに、新法隆寺建立という建造物と我が国初の歴史書の記録との整合性を図るべく、書記において最大級の賞賛を冠する「聖徳太子」像の創作を行う事としたのであろう。

書記は、蘇我氏宗家の馬子・蝦夷・入鹿の三代、取り分け天智の眼前の敵であった蝦夷・入鹿親子を最大限の悪しき様に記録する一方、蘇我氏の血を継いでいる厩戸については、冠位十二階や十七条憲法の制定と言った天武朝以降の新政策の一部を既に行ったとする虚飾をはじめとして、最大級の聖人君主像を創作するのである。

蘇我氏系の大王の時代は、用明天皇から推古天皇の約四十年間であるが、書記の記録は淡々と簡潔に述べている。

蘇我氏系大王の時代の全体の文調の中で、聖徳太子の顕彰記録だけは詳細に書かれてあり、如何にも後から追加挿入したかのような違和感があるのも、編纂者のこうした意図が図らずも露出してしまったからと考えられる。

いずれにしても、編纂者の狙い通り、この国史の記録が基になって、長い年月を経て聖徳太子信仰が全国に浸透する事となる。

狩谷棭斎讃歌（五）

新井　宏

（十七）　十七条の憲法

今日では、「聖徳太子がいなかった」ことは歴史学界の常識となっている。国民感情を背景として「聖徳太子がいなかった」ことを否定する書物もあるが、学術問題としてはもはや勝負があったのである。

それは、聖徳太子の業績の全てが、史料批判により、聖徳信仰として後世になって作られたことが明白になったからである。すなわち、推古天皇の甥の廐戸皇子は実在したが、「十七条の憲法」や「三経義疏」を作った聖徳太子はいなかった。

「十七条の憲法」が聖徳太子の真作ではなく、日本書紀の作者の潤色だと初めて指摘したのは棭斎である。そのため、「聖徳太子はいなかった」とする多くの著作で、まず最初に必ずそのことが紹介されている。棭斎が今日知られているのはそれ故とも言えるほどである。しかし、面白いことに棭斎の研究第一人者の梅谷文夫は『狩谷棭斎』の中で、そのことについて一言もふれていない。

棭斎がなぜ「十七条の憲法」は聖徳太子の真作ではないとしたのかについては、文政十二年（一八二九）頃に書いた『文教温古批考』の中で次のように述べている。

憲法を聖徳太子の筆なりとおもえるはたがへり。是は日本紀作者の潤色なるべし。日本紀の内、文章作家の全文を載たるものなければ、十七条も面目ならぬを知るべし。もし憲法を太子の面目とせば、神武天皇の詔をも、当時の作とせんか。

棭斎は、十七条が日本紀の文体に似ていることもその理由として挙げている。

この棭斎の見解を受けて、内容上から偽作説を展開したのが津田左右吉である。その十二条にある「国司国造」が、大化改新の前にあったはずがない等がその主な理由

である。

もちろん、偽作説には強固な反論が相次いだ。しかし、現在では、聖徳太子の実在を示す五つの証拠、すなわち、十七条の憲法、薬師像光背銘文、釈迦像光背銘文、天寿国繍帳、三経義疏のいずれもが後世に書かれたものであることが確定してしまい、もはや新たな証拠が現れないかぎり、聖徳太子の復権は困難なのである。

その中でも、三経義疏のひとつ『勝曼経義疏』が、藤枝晃の研究により、昭和四十年、敦煌から出た『勝曼経義疏本義』とほとんど同一で、中国のものだとわかったことが決定的であった。これらをもとに、更に長屋王の木簡などによる史料の解釈を加えて、大山誠一が自信をもって、聖徳太子非実在論を展開したのが平成十一年のことである。これによって、歴史学界内の常識が一般にも良く知られるようになった。

すなわち、棭斎の日本書紀に対する鑑識眼は時代を先取りしていたのである。これは、現在、古代史分野における最大争点、大化改新の「肯定論」「否定論」を先導する業績でもあった。

ところが、棭斎は「十七条の憲法」の日本書紀潤色を唱えながら、聖徳太子の実在までは疑問視しなかった。もっとも現在の歴史学界でも、聖徳太子の存在は否定しても廐戸皇子の存在を否定しているわけではないので、当然と言えば当然であるが、それは、棭斎が心血を注いで研究した『上宮聖徳法王帝説』の存在があったからである。

『上宮聖徳法王帝説』は法隆寺に伝わった雑多な綴り合せの総称であるが、日本書紀と並んで、聖徳太子の事績を伝える最古の伝記資料である。しかし、『上宮聖徳法王帝説』が初めて世に現れたのは、水戸藩彰考館が『大日本史』のための資料蒐集にあたっていた元禄八年（一六九五）で、その後も一般的には知られていなかった。その存在を広く知らせたのは塙保己一の『群書類従』である。

これを読んだ棭斎は、「其の書を翫味するに、未だ嘗て古事記日本紀を見ざる者の撰する所に似たり。其の古きこと、知るべきなり。……読まざるべからざる奇策なり」と喜ぶのである。それは、日本書紀が聖徳太子の薨去を推古二十九年二月五日としているのに、『上宮聖徳法王帝説』は三十年二月二十二日としており、しかもその忌日が法隆寺金堂の「釈迦如来坐像光背銘」と一致していたことなどによる。

すなわち、棭斎が最も信を置く金石文の「釈迦如来坐像光背銘」と一致する『上宮聖徳法王帝説』は、ここに日本書紀の記事を訂正するに足る資料となったのである。その結果、『上宮聖徳法王帝説』にのみ伝えられている記事も聖徳太子の事績として評価されるようになった。

このような棭斎の研究を引継いで、聖徳太子実在説の頂点を極めたのが、昭和二十六年の家永三郎の『上宮聖

徳法王帝説の研究』である。家永は、ひたすら聖徳伝承を肯定的に認めて、その体系化を行ったのである。だから家永は、椀斎の業績を「何等の先行研究を俟つことなく、一代の努力によりて権威ある註釈を完成し、爾後その地位を凌駕するものの出現を困難ならしめたる点、恰も宣長の古事記伝の古事記におけるが如き地位を有す」と絶賛するのである。

ところが、この『上宮聖徳法王帝説』は、延喜十七年（九一七）以降にできた『聖徳太子伝略』を批判しており、日本書紀よりもはるかに後代に成立したもので、日本書紀を訂正し得る史料などではなかった。すなわち、「聖徳太子はいなかった」とする認識が歴史学界に広まるにつれて、『上宮聖徳法王帝説』の評価も下落するのである。

たとえば、「釈迦如来坐像光背銘」にしても、そこに示された、法興年号、法皇、知識、仏師、などの表現が推古朝のものでは有り得ず、釈迦像とは別に後世になってから、光背が造られたことが明らかになったことがある。椀斎が金石文として信用したものが、後世のものだったのである。また、天寿国繍帳にしても、そこに天皇の用語があり、推古朝の作では有り得ないばかりでなく、用いられた日付も後世の儀鳳暦によるものであることが判ったのである。

それにもかかわらず『上宮聖徳法王帝説』には、古事記や日本書紀よりも古い記事があることで、その価値はいささかも揺るがないと考える学者達がいる。それは、『上宮聖徳法王帝説』がもともと雑多な綴り合せの性格を持ち、最終成立が平安中期に下がるとしても、古い伝承については、後世になって作り出されたとは考えられないとする立場である。

たしかに椀斎が心血を注いだ考証が、「聖徳太子はいなかった」ことぐらいで霧散してしまうものではないであろう。最初に「十七条の憲法」を否定して、聖徳太子の業績に疑いを抱いたのが椀斎である。問題含みであっても『上宮聖徳法王帝説』の価値をお見通しだったとするのが、椀斎ファンの立場であろうか。

（十八）和銅開珎

日本における歴史上の学説をたどって行くとたいていは新井白石か狩谷椀斎に至る。椀斎は「十七条の憲法」が聖徳太子の眞作ではないことを初めて明らかにしたことで今日の歴史学界では評価を受けているが、それはむしろ最近のことで、戦前には公然と述べることがはばかれた学説であった。

それに対して、むしろ良く知られていたのが「和同開珎」を初めて「和銅開寶」と読んだことである。

この「和同開珎」は中国以外で初めて発行された銭であり、日本ばかりでなく中国からも出土することが知られている。通説では日本最古の通貨であるが、最近では飛鳥池遺跡から出土した富本銭の存在によって、最古とは言えないとの説も出ている。しかし、富本銭は実際に通用した銭ではなく、獣勝銭すなわち「まじない銭」であったとする説が有力なので、「和同開珎」はやはり最古の流通銭とは言えるであろう。

さて、この「和同開珎」は江戸時代には、開珍（カイチン）の読みが普及していた。珎は珍の異字だからである。しかし銭の考証家としても有名な椀斎はこれを『皇国泉貨通考』の中で開寶と読んだ。それは「珎」が「寶」から「ウカンムリ」と「貝」を外した省略形であり、「銅」を「同」と略したのと同じだとすることなどによっている。

その後、この開寶説は明治になって、成島柳北の『明治新撰譜』や『古泉鑑識訓蒙』に引継がれ、大正、昭和の主流となり、学校でもそう教えた。だから高齢者なら和銅開寶と覚えているはずである。

しかし、今ではこれを「和同開珍」とする教科書がほとんどである。開珍説が復活したのは、穂井田忠友が、和同は和銅ではなく、中国古典『国語』周語にある「和同」を採用したとする説を出した頃からで、考古学者の山中笑がこれに同調し、考古学的な資料を援用して、開珍としたことが影響している。

もちろん「珎」が「珍」の異字であることなど、いわば常識であり、最近は、これを素直に読もうとするのが流れなのであろうが、『説文解字』の権威である椀斎が、珎が珍の異字であることを知らなかったはずがなく、それを承知の上で「開寶」と読んだのである。だから私は強くこだわっている。

「開珍」説の裏付けとなるものとして、よく引き合いに出されるのが正倉院の古い文書に「国家珎寶」とあることである。ここでは珎が寶であるはずがなく「珍寶」と読むべきだと言うのが根拠であるが、それは珎が珍の異字であることの証明にはなっても、椀斎の説を否定する根拠にはならない。もともと珎は珍なのである。

もうひとつは、平安時代末期の歴史書『日本紀略』に「和銅開珍」と記録されていることである。いわば音を「チン」としていたという証拠である。しかし、これとても珎を珍とする機械的な書き写しであったと考えても不思議ではない。

椀斎が珎を寶と読んだのは、何も字格の省略を論拠にしただけではない。和同開珎の後に続く皇朝十二文銭の全てが寶を用いているし、当時の中国は開元通寶の時代である。寶と読むのが、むしろ素直なのである。

更に、東大寺伎樂面に「天平勝珎」と書かれている例もある。これは年号の「天平勝寶」のことであり、一例とは言っても珎を寶の替わりに用いているのである。

このように、私は開寶説に歩があるように思うが、最

近は「開珍」説を採用するのが主流なのである。したがって、いくら梼斎ファンとは言っても、新たな論拠を見出さなければ、進展はできない。そこで細々ながら、珎の文字にこだわり、それを金石文などに探し続けている。その結果、ふたつほど気になる事例を探し出した。

ひとつは『宋書』の「倭の五王」の二人目の珍を『梁書』では彌と書いている例である。彌は弥であり、字形の似る珎の誤り、すなわち珍であるとするのが、今日の定説であるが、そうだとすると、原書の『宋書』に珍とあったのを『梁書』がわざわざ異字の珎と書こうとしたことになり、不自然である。もしかしたら珍はオリジナルでは彌あるいは弥または珎となっていたのではないか。しかし、そこで留まっていて、珎を寶とする説にはまだ繋がらない。

もうひとつは『広開土王碑文』の中に雜珎城とでていることである。同じ城を雜弥城と記しているところもあるので、珎と確定できないが、これがはたして雜珍城だったのであろうか。その城名の現在地名を探しているが、まだ手ごたえがない。

そんな中で、偶然に、「開寶」説を強力に支える見方が現れた。それは大東文化大学の中国文学者、萩庭勇の書いた「漢語と視点」と言う講演録の中である。しかも、それは「和同開珎」とは全く無関係な『稲荷山古墳の鉄剣を見直す』(学生社)と言う論集の中なのである。

おそらく、萩庭勇は古典中国文学の権威として、「稲荷山鉄剣」の銘文について求められて意見を述べたのであろうが、その講演の冒頭部分からして異例なのである。そのまま引用すると次のようになっている。

二点について申し上げたいと思います。まず一点は、日常恒に思っていること。それからもう一点は当然のことながら、この鉄剣の銘について申し上げたいと思います。

第一点は、日本で最初に鋳造されたお金(銭)の読み方の「不思議」について、感ずることを申し述べたいと思います。……

そして、荻庭は、「開珎」を「開珍」と読むことを痛烈に批判するのである。

この講演の目的が「稲荷山鉄剣」の銘文解釈のためであるのは明白である。それなのに、いわば全く無関係な「和同開珎」の読み方について、強烈に批判することが、極めて唐突である。しかも、講演の流れから言えば、この「開珎」の読み方についての紹介は、中国文の理解を助けるための例として示されているのである。例示である以上、それは中国文学者にとっては共通の基本的な理解であるということである。

その意とするところは、漢字は固有の詞性を持つのでなく、同じ字形であっても、その置かれた位置によって意味が決定されるものであって「異説の興る確率が少なく、異説が勃起しても容易に氷解する」ように理解することが基本であるとして、「現下の考古学の専門家の多くが、依然としてその視点を持ち合わせていない」と批判するのである。

しかし、講演録のせいか、文章が推敲されていなくて、説明に飛躍があり、理解に不安があったので、『まんじ』同人で漢詩人の鯨游海氏に確認を求めたが、氏も秋庭勇の文章は乱れているが、私の理解で良いと言う。氏は『論語』に、次々と斬新な解釈を導入しているが、その壮大な学説のひとつ「君子不器」の不を丕(大の意、不にも同意あり)と同義とすることなども、萩庭勇の言っていることを知るとますます説得力を増す。

そうであれば、まさに萩庭勇が言うように、開元通寶に学んで作成した「和同開珎」をわざわざ「カイチン」と読むことこそがまさしく「珍」なのである。

なお、萩庭勇と同じく大東文化大の中国文献学者で、書家、作家、イラストレーターでもある山口謡司も国宝の『尚書正義』の刻工の名に王珎、王珍、王宝と見えることを論じる中で、「和同開珎の読み方を改めて史学の先生に伺いたい」と言いながら、結論的には開寶説を採っている。

やはり、『説文解字』の権威、狩谷梼斎の読み方が正しかったのだ。後世の学者達が寄ってたかって、解釈を後退させていたわけである。

ついでに言えば、和銅のいわれについても、世の中に誤解があるので正しておきたい。それは私の専門でもある金属考古学に関係しているからである。

和銅という言葉が初出するのは『続日本紀』で、その中には、慶雲五年(七〇八)武蔵国秩父郡から「和銅」が献上されたこと、これを喜び祝って「和銅」と年号を改めたということ、そして銀銭・銅銭が作られたことなどが書かれている。ここで言う和銅とは、自然銅のことであり、精錬せずに銅として使えるもので、秩父の今宮神社には十五キロの塊として残る貴重なものが残る。しかしこの和銅が銭の鋳造に用いられたのではない。

それは、和同開珎銭の鉛同位体比の分析から、長門長登鉱山の銅、すなわち東大寺の大仏と同じ銅が用いられたことは既に明らかにされており、秩父の和銅(自然銅)とは全く関係がないのである。

したがって、和銅は秩父郡から献上された和銅を意味するのではなく、和銅年間に出された銭の意味を示すもので、中国や皇朝十二銭に見られる発行年と同じであり、この点でも梼斎や成島柳北の理解が正しかったのである。

梼斎ファンとしては、一日でも早い和同開寶(わどうかいほう)の復活を願っている。

信じて託す（その六）

―米山梅吉の一生―

三戸岡道夫

第八章　欧米視察

（三）

出発は明治三十一年九月十三日で、飛行機などまだない時代であるから、汽船で横浜から出発した。

その日程を見ると、次のようであった。

明治三十一年九月十三日

汽船ゲーリック号（五～六千トン級）で横浜港を出港した。折から帰朝していた、三井物産ロンドン支店長の渡辺専次郎が帰任するのに、同行したのである。

明治三十一年九月三十日

船はホノルルを経由し、十八日目にアメリカ西海岸のサンフランシスコに到着した。

サンフランシスコは梅吉としては思い出の深い街である。こう早く、ふたたびアメリカの土を踏めるとは感慨無量であり、きっと福音会へも顔を出したにちがいない。

明治三十一年十月一日

サンフランシスコに着くと、一泊して、すぐ翌日十月一日には、東海岸にむかって、大陸横断鉄道にて出発した。

明治三十一年十月五日

シカゴに到着し、銀行を訪問した。二泊して、十月七日にシカゴを出発し、ニューヨークへ向った。

明治三十一年十月八日

ニューヨークへ到着した。そして十二月末まで滞在した。

この間、池田成彬と丹幸馬の二人はパーク・ナショナル銀行へ、梅吉はフィラデルフィアを視察し、少し後れて三人はマーカンタイル・ナショナル銀行へ通勤して、銀行実務を実習し、また調査した。梅吉たち三人はアメリカ銀行の人達と同じ立場に置いてもらって、出発前に指示されていた五十数項目の研究をしたのである。

この他にも三人は数行を視察すると、ニューヨークの銀行調査は、十二月三十日をもって終了した。三人はニューヨークで年を越すと、次の年はフィラデルフィアやボストンなどの数行の銀行や、手形交換所、倉庫などを視察した。この調査対象に倉庫業が入っていたのは、当時は三井銀行が倉庫業を兼業していたからであった。

それが終ると三人はロンドンへ向った。

なおこの間、日本の梅吉の家では、次女の澄子が生れた。

明治三十二年一月二十八日

ニューヨーク港から船で、ロンドンへ向って出港した。

明治三十二年二月四日

イギリスのリバプールへ到着した。ここで一泊すると、すぐロンドンへ移動した。

明治三十二年二月五日

翌日の二月五日にロンドンに着くと、じっくり腰を据えて、五月末まで、約四ヵ月滞在した。

そして、三人は一緒に、パース銀行、ナショナル・プロビンシャル・バンク・オブ・イングランド、ロンドン・アンド・ウエストミンスター銀行などで、四ヵ月ほど、実習と調査に当った。

ロンドンに着いて三人がまずまっ先に訪問したのは、パース銀行のロンバート・ストリート・オフィスの支配人のシヤンドであった。そして三人はこのシヤンドの斡旋によって、ロンドン滞在中に、パース銀行の行員から、何回かの銀行外での特別レクチュアーを受け、事務取扱手続を調べたり、さらに外国為替の事務や、一般事務室の配置、倉庫事業などを調べた。これは当時、ロンドンの銀行では、自分の銀行の行員以外の人が店内に入ることを禁じていたために、特別のはからいをしてくれたのであった。

この便宜を提供してくれたシヤンドは、かつて日本の銀行の創成期に非常な貢献のあった人であった。かつてシヤンドは幕末にパース銀行ロンドン支店副支配

人から、バンキング・コーポレーション・オブ・ロンドン・インデア・アンド・チャイナの横浜支店支配人として日本に来た人間であった。そして明治五年十一月の国立銀行条例制定に伴い、国立銀行の経営指導のための外国人教師として、明治政府に雇い入れられていた。

そして明治十一年三月にロンドンへ帰るまで、日本の大蔵省官僚や国立銀行行員に対して、銀行簿記や業務運営について指導した。その時シャンドの書いた「銀行簿記精法」や「銀行大意」は、その後長く日本の金融界で教科書として使われていたから、梅吉も池田成彬もすでにそれを勉強していたものと思われる。

そうした経緯から、シャンドは三井の中でも、三井八郎右衛門、三野村利左衛門や、第一国立銀行の渋沢栄一と親交があったから、三人はロンドンに着くや、一番目にシャンドを訪れたのであった。

なおこの外にも、ナショナル・プロヴィンシャル・バンク・オブ・イングランドと、ロンドン・エンド・ウエストミンスター・バンクに頼んで、営業場でない事務室を利用して、質疑応答の形式で、銀行の組織や、営業の状態を調べたり、紹介してもらって、手形交換所や英蘭銀行などを見たりした。

明治三十二年五月二十九日

イギリスでの勉強は終了したので、五月二十九日にヨーロッパ大陸での勉強に出発した。

池田成彬はパリに、丹幸馬はベルリンへ、梅吉はブラッセルへと、それぞれの地の有力銀行を訪問し、見学した。

明治三十二年七月六日

三人は七月六日にハンバーグに集合して、三人で同地の銀行を視察し、ついでアムステルダム、ロッテルダム、アントワープなどにおいても、各地の銀行や倉庫会社を調査した。

明治三十二年七月三十日

七月三十日に再びロンドンに帰った。そして、スコットランドの工業地帯を視察して、十月に日本への帰路についた。

明治三十二年十月十七日

ゼノア出港のドイツ郵船のキューニッヒ・アルベルト号（一万トン級）にて、日本への帰路に着いた。

このキューニッヒ・アルベルト号は一万トンという当時では珍らしい巨船だったので、三人は待合わせてこれに乗ったのであるが、関門海峡を通過できるかどうか、心配であったという。

明治三十二年十一月二十三日

十一月二十三日に長崎港に到着した。そして十一月二十七日に、東京に着いた。

昨年九月十三日から、一年と二ヵ月余の、欧米視察の旅であった。

こうして三人の若者が一年二ヵ月以上も一緒に同じ使命を持って、異郷を旅したのであるから、三人の気持はいやが上にも固く結びあったものと思われるが、特に梅吉と池田成彬との組み合せは、絶妙に動いた。

梅吉は池田成彬の一年後輩であるから、訪問先銀行をはじめとして、交通機関とかホテルなどの予約交渉などのアレンジメントや、行く先々でのコンファーメーションなどの諸々の用事は、もっぱら梅吉の役目であった。

しかし梅吉は自費留学というアメリカ留学の時の豊富な経験から、このような用事はお手のものであったので、てきぱきとこなし、二人の呼吸はぴったりと合った。そしてこの二人のコンビが後日の三井銀行の経営を支えていくのであった。

帰国すると早々の明治三十二年十一月二十九日に、梅吉は丹幸馬とともに、本部調査係の勤務を命ぜられた。

(四)

さて、この三人の出張調査の報告は、出張した場所からその都度、三井銀行の本部に送られ、「本部旬報」の付録となって、銀行の中に配布されていた。

しかし日本へ帰国すると、三人は二ヵ月かかって調査内容を、

（三井銀行欧米出張員報告書）

として纏め上げた。

これが印刷されて銀行内に配布されると、たちまち非常な評判を呼んだ。また外部からも購読希望の申入れが殺到した。

そこで明治三十四年四月十六日に、

（合名会社三井銀行欧米出張員報告書）

と題して、菊判三十五字詰め十五行で、アメリカの部が七百十一ページ、イギリスの部が二百八ページ、合計で千十九ページという立派な本が出版された。

その内容は、緻密な観察にもとずいた銀行経営の実務が細大もらさず書かれており、日本人の手によってはじめて先進諸銀行のいろいろな銀行業務の実際が広くまとめられた、この種の報告書の中の白眉といえた。

報告の内容は広汎にわたるが、目についた点を摘記すると、左の如くである。

アメリカでは、
一、信託会社と称しても、実際は銀行業務が主となっており、信託部の方は入口を異にするか、または一隅を占めるだけで、営業は静かであった。
一、安全保管庫の営業が詳細に説明されているが、その頃すでに殆んど現在と同様な仕組になっていた。
一、外国為替は市場としてはまだ大きくなく、普通銀行は外国為替に深入りせず、主に外国銀行が取扱っていた。
一、支払準備操作上、デマンド・ローンの効用を認め、くわしく説いているが、これがコール・マネー制度導入に役立ったわけである。
一、小切手の普及、女子行員の使用、支配人の愛敬のある対応ぶりなどが目についたらしく、細かいことでは数字の計算や現金の数え方などにもふれている。
一、行員の待遇、厚生設備、行内の秩序から、行員間の信義の必要に及んでいる。

イギリスの方も大同小異であるが、
一、元来、日本の銀行は明治初年、イギリス人のシャンド（日本の金融制度創設期の指導者で、経済学者田口卯吉や第一銀行の佐々木勇之助などはその弟子であり、後の総理大臣高橋是清も青年時代そのオフィス・ボーイであった）に銀行の分課や簿記など諸制度を学んで、イギリスに範をとっているので、事務的にはあまり変わったところはなかったようである。
一、手形仲買人や、株式仲買人に対する短期貸付を説明して、コール・ローン取引慣習の詳細にわたり、ここでもアメリカ同様コールの支払準備としての重要性を説いている。

全体を綜合して比較すると、アメリカではまだ内規らしいものもない銀行もあるくらいで、だいたい国内金融が対象であるから、単純で規模も大きくないが、事務的にはなかなか忙しく、したがって改善もされており、進歩的であった。

これに対し、イギリスでは事務上にあまり目立ったものはなかったようであるが、さすがイギリス植民地やヨーロッパ大陸との取引がポンドで結ばれ、金融市場として世界的で大きく、この間にあって普通銀行は、伝統的に中央銀行に頼らない覚悟ができ、独立自衛の方針が確立されていることは印象的であったようである。

この報告書は当時の金融界に非常な影響を与え、銀行業務の近代化に大きな役割を果した。言ってみれば、今日の日本の銀行の実務のあり方は主としてこの報告書によって改善されたといってよく、梅吉たちの欧米視察調査の効果は、たんに三井銀行だけにとどまらなかったのである。

なお、この視察調査については、以上のように報告書としても纏められたが、三井銀行の中では帰国報告会も行われた。その時の模様が次のような記録として残っている。

池田、米山、丹の三逸材が、欧米銀行業の視察を終って帰朝し、有楽町にあった三井集会所で報告会が開かれた。

その時米山梅吉は持前の能弁で、相当長時間話しをした。その時米山は、「アメリカでは銀行業がなかなか盛んで、誰でも一人前の人間（any body）なら、みんな銀行と取引をしている。もし銀行となんの取引もない人間は、それは一人前の資格のない人間（no body）である」と、得意の英語を交えて、巧みに話した。

人々はそれを聞いて、「あれが秀才の見本というものか」と感心して話しあった。

その時の池田成彬は梅吉とは対照的に、極めて訥々とまじめ一方の話し方であった。

この報告書は三井銀行でもいろいろな業務の改善に役立たれたが、建議案となって問題となったものに、
（定期預金を全廃して通知預金とすること）
（東京市内に支店を設ける）

という問題提起があった。

しかし、当時は当座預金にさえ利息をつけていた日本であったから、定期預金の廃止などという提案はもちろん受け入れられず、また東京市内に支店を設置する案も、反対があって実現しなかった。

しかしこのような意見を出した池田、丹、梅吉たち、若い海外調査員の意気込みは大きかったのである。

（つづく）

今川風雲録（四）

千坂精一

了俊、菊池討伐に専念

了俊は細川頼之罷免の噂を聴いても取り合わなかった。

これまでも頼之は将軍義滿とのあいだで辞任、慰留が繰り返されていたので、俄かには信じ難かったのだ。

だが、斯波義将の管領復帰を報らされて愕然とした。

派閥人事であるからには、領袖が失脚すればその翼下にある者たちは一蓮托生で罷免されるに違いなかった。

九州探題として実績を上げていても例外にはならない。

いまここで罷免されれば、九州の北半分を平定した了俊の労苦は後任者の功績のなかに取り込まれてしまう。

なんらかの沙汰あるまでに九州一円を平定してしまえば、幕府も了俊を無下にすることはできなくなるだろう。

了俊は、意を決すると、南朝方の首魁菊池武朝の息の根を止めて九州全域を征服すべく全軍に号令を発した。

まず、弟仲秋に菊池三家老の一人城氏の城村城（山鹿市城）を攻略させておいて合流すると、菊池武朝の本拠隈府城を猛攻してついにこれを陥とした。

この日、別働隊が懐良親王の染土城（菊池市龍門）をも威嚇攻撃して、南朝方に探題軍の勢威を知らしめた。

この探題軍破竹の勢いに、離叛を繰り返していた島津氏久、伊久はもはやこれまでと観念して応じてきた。

だが、島津氏久、伊久はやはり表裏者だった。

四年後には相良前頼らと八代城（八代市松江城町）にいる菊池武朝に通じ、幕府軍の宮内大輔三雄を攻撃して天草に敗走させた。

南北朝合一成る

それからも各地で南朝方残党との小競り合いがつづいたが、五年後の明徳二年、元中八年（一三九一）とつぜん征西将軍良成親王の名で了俊に講和を申し入れてきた。

征西将軍がいつどんな理由でこの南朝二代後村上帝第六皇子の良成親王に替わったのかは定かでないが、時期を推測すれば、おそらく了俊に太宰府を陥とされて筑後国高良山で再挙を図ったころではないかと思われる。

翌明徳三年、元中九年（一三九二）十月二十五日、南北朝の講和が成り、南朝四代後亀山帝が吉野から京へ還って大覚寺に入り、北朝六代後小松帝に神器を譲って六十年つづいた一天二君の対立抗争に終止符がうたれた。

南朝が北朝に降ったのであるから、九州は征西将軍良成親王ではなくて九州探題今川了後が統治者になったのだ。

その手腕を期待されて赴任してから二十一年、九州の幕府方に活力を与えつづけて南朝方豪族の討伐に明け暮れた了俊は、その労苦が実を結んだことで面目を施した。

了俊を九州探題に推挙してくれた細川頼之は、この講和成立半年まえの三月二日に六十四歳で歿していた。

南朝に和議の条件を提示して受託させたのは室町幕府三代将軍足利義滿で、管領は細川頼之の弟頼元であった。

了俊、召還される

講和が成立しても戦闘がすぐ終熄するわけではない。

島津や大友などの大豪族たちは南朝方に与力しただけではなく守護家の命運を賭けて幕府軍と戦ったのだから、了俊が撤退しないかぎり矛を収めようとはしなかった。

さきに島津伊久と南朝方菊池武朝方に寝返った相良前頼は、島津領内で起こった内乱のとき日向国都城（都城市五十町）を守備していて叛乱軍に攻められ敗死した。

このとき、鎮圧に向かった了俊の二男貞兼率いる探題軍は梶山城（宮崎県北諸県郡三股町）を攻略している。

これを契機に幕府は、了俊に島津徹底討伐を命じた。

このころ了俊が折衝をつづけてきていた朝鮮は、約五百年つづいた高麗国が三十四代恭讓王瑤四年、日本では南北朝の講和が成ったその年に李成桂に倒されていた。

その李成桂二年の應永元年（一三九四）、了俊は捕虜六百余人を送還する代償に『大藏經』を要求した。

『大藏經』は經藏・律藏・論藏の三藏と注釈書を網羅した叢書をいう仏教聖典の総称だというから、なにものにも換え難い貴重な文献を交換条件にしたことになる。

この年十二月十七日、足利義滿は征夷大将軍を辞任して、嫡男義持を元服させると四代将軍にした。

そして、義滿自身は太政官最高位の太政大臣になった。

管領は斯波義将がみたび返り咲いていた。

了俊は、翌年七月にも捕虜五百七十余人を送還した。

李成桂は、ふたたび捕虜の大量送還に応じてくれた大様な了俊は、九州の王にちがいないと信じ込んだ。

それというのも、さきの捕虜送還のとき代償に銭貨や品物ではなく『大蔵經』を要求されたことで、李成桂は了俊を只者ではないと駭き寧ろ敬服したようだった。

事実了俊は、晩年多くの著書を遺す文化人であった。

こうして朝鮮国や明国にまで名声を博した了俊であったが、翌八月とつぜん幕府から即刻帰洛を命ぜられた。

まったく予期せぬまさに寝耳に水の事態に眉を顰めた。

了俊は後任の到着を待たずに博多の探題館を出立した。

後任は澁川滿頼で了俊の前任者澁川義行の子であった。

帰洛の途中了俊はあれこれ思い巡らしてみたが、この解任はなんとしても不可解で納得がいかなかった。

(この年齢で幕府の要職に就けるわけでもあるまいし)

九州の地で二十五年、了俊は七十一歳になっていた。

幕府で申し渡された了俊の新任職は、

〈駿河守護〉

であった。

駿河守護はすでに甥の泰範が遠江守護とを兼ねていたので、了俊の駿河守護は事実上名目にすぎなかった。

このころの守護は、軍事、警察権のほかに経済権をも拡大して守護大名に成長しつつあったから、了俊の駿河守護は甥泰範から捨扶持を貰う居候にすぎなかった。

了俊は南朝方の征西府や与力する菊池氏と対決し、併せて独自勢力の少貳、大友、島津氏とも抗争をつづけて幕府方に統一する寸前まで懸命に漕ぎつけたのに、その功績を認めずに左遷するとはなんなのかと不審に思った。

了俊は、かつて大内義弘から、

「大友と三者が合力すれば将軍義滿に対抗できる」

と盟約をすすめられたことがあったが、

「われは将軍への奉公こそ第一と考えている」

そうきっぱり断ったので、謀叛の漏洩を懼れた義弘が、

「九州探題今川了俊に私曲あり」

と管領斯波義將に讒言したのではないかと疑ってみた。

だが、了俊のその臆測は外れていた。

事実はもっと根深く、陰湿きわまりないものであった。

それは、幕府が了俊に疑念を抱いたことに因っていた。

了俊の九州統一はあと島津、大友の討伐を残すところまですすんできていたが、手を焼いた了俊が両者と和解して共同統治になる虞がありはしないかということ。

了俊は賞罰権を与えられて成功したのだが、そのことが将軍に対抗する勢力になり得る危険を孕んでいること。

また、九州の征圧者として朝鮮国と独自に交渉し、明国の使節とも接触していて、独立国扱いされていること。

将軍職はわが子義持に譲ったものの、実権は変わらず握っている義滿がこれらの報告を聴取するうちに、しだいに了俊を危険な存在に思えるようになっていった。

了俊は、幕府が目指す統一政策の功労者であるが、同時に政権転覆の危険分子と考えられてもいたのである。

企業でもそうだが、実力者がいて収益を上げてゆく。

社長は、競争相手より業績を上げてゆくのが頼もしく、

「憂いやつじゃ」

と眼を細める。

そのうちに社内で持て囃しがはじまり、

「会社が好成績を上げているのはあの人のおかげだ」

そんな雰囲気が蔓延してゆく。そうなってくると社長は頼もしい腹心を警戒するようになってゆく。

そして、〈出る釘は打たれる〉お定まりの結果になる。

了俊は、よくあるこの事例に嵌まったのである。

應永の乱

任地駿河へ帰っても名目守護で身のおきどころのない了俊は、相模国まで下って藤澤に住み着いた。

なぜ藤澤を選んだのかは定かでないが、九州探題から守護に左遷され、しかもその守護が名目にすぎないとあっては、とても駿河にはいられなかったのであろう。

藤澤は鎌倉に近く、鎌倉府には公方と関東管領がいた。

ときの鎌倉公方は三代将軍義滿の従弟で一歳年下の氏滿、関東管領は前年山内家の上杉憲方が六十歳で歿して嫡男憲孝が就任したのだが、病弱で適わず半年で隠退したので、いまは同族犬懸家の上杉朝宗に替わっていた。

了俊は、無聊の慰めに鎌倉を遊覧しているうちにいつか鎌倉府に出入りするようになり、公方氏滿に拝謁して親交を深め、肝胆相照らす間柄にまでなっていった。

氏滿は幕府内部から漏れてきた話として、了俊の解任は将軍義滿が明との貿易を独占しようと企んだことから邪魔になって排除したのがその真相だと教えてくれた。

突然の召還は大内義弘の讒言ではなく、義滿の我慾のためだったことを知った了俊は怒り心頭に発した。

了俊に同情した氏滿もじつは義滿に不滿を抱いていた。

室町幕府を開いた足利尊氏は将軍職を嫡男義詮に譲るとき、鎌倉府を設置して末子基氏を鎌倉管領に据えた。

基氏は、兄が将軍で自分が同族斯波、細川、畠山とおなじ配下の管領なのが憤懣遣るかたなく、父尊氏の歿後勝手に鎌倉公方を僭称して東国の将軍であることを示威した。

だが僭称したところで所詮は名目だけのことであって、実質的には将軍家との較差に変わりはなかった。

二代氏満も栄華を誇る将軍家に不満を持ちつづけた。
義満は明徳三年（一三九二）氏満に陸奥・出羽の二国を与えたが、氏満が満足するまでにはいたらなかった。
了俊が藤澤を住処にして三年後の應永五年（一三九八）十一月四日に氏満が四十歳で歿し、二十一歳の嫡男満兼が三代公方になった。氏満は三十一年の在位であった。
翌年、新公方満兼は管領上杉朝宗の意向で陸奥・出羽に新たな統治体制をつくることにして、弟満直を南奥安積（郡山市安積町）に据えて篠川御所とし、もう一人の弟満貞を岩瀬森（須賀川市）に据えて稲村御所とした。
了俊が解任されて三年後、菊池武朝や少貳貞頼らがまたも挙兵して抵抗したが、了俊の後任探題澁川滿頼では抑え切れず、将軍義滿は大内義弘に討伐を命じた。
義弘は、菊池、少貳だけでなく、山名時熙をも駆逐して、九州を平定した。
しかし義弘は京に戻らず、朝鮮百濟王の出身を活用して、朝鮮や中国との貿易を独占しはじめた。
貿易の利益に注目して了俊を解任した義滿にとって、義弘はもはや肅清せねばならぬ存在になっていった。
将軍義滿の厳命で一年後にやむなく腰を上げた義弘は、應永六年（一三九九）十月に大軍を率いて和泉国堺（大阪府堺市）まできたが、そこに留まって動かなかった。
じつはこのとき、大内義弘は鎌倉公方滿兼と同盟して謀叛を企てていたのだ。
関八州と陸奥、出羽十箇国に君臨する鎌倉公方と、周防、長門、石見、豊前、和泉、紀伊六箇国の守護大内義弘が提携して、東と西から幕府を挟撃しようというのだ。
その両者を仲介したのは、ほかならぬ了俊であった。
了俊は大内義弘を誤解していたことをすまなく思っていたし、義弘もまた裏切られた了俊に同情していた。
鎌倉公方家が代々将軍家に不満を抱いていることを知った義弘は、幕府を怨んでいるに違いない了俊を利用しようと考えて謀叛の計画を持ちかけてきたのである。
了俊からの誘いに滿兼は、好機到来と北叟笑んだ。
さっそく、陸奥・出羽を巡視する名目で弟たちの篠川御所や稲村御所に滞在して、諸将動員にとりかかった。
この滿兼の動きは、次の管領に予定されている山内家の上杉憲定から兄の越後守護上杉房方に告げられ、幕府七頭で在京している房方から将軍義滿に報告されていた。
だが義滿は、陸奥・出羽の諸将を予め御教書で抑えておいたので、慌てることはなく、憲定に滿兼の行動を諫めるよう内書で指示した程度で問題にしていなかった。
だが滿兼は憲定の諫止を聴かず、幕府救援の名目で出陣し、武蔵国府の曹洞宗高安寺まで兵をすすめた。
高安寺（府中市片町）は大國魂神社前の旧甲州街道を分倍河原方面へ十分ほど歩いたところにあって、足利高

氏の一字を寺名に用いた足利氏所縁の寺であった。
公方がことあるごとに陣所に利用した鎌倉府の出城的存在の寺で、滿兼の父氏滿が蜂起した平一揆を河越に攻めたときや、南朝に応じて挙兵した小山義政を下野小山に討伐したときいずれもこの高安寺を陣所にしていた。
忠告を無視された憲定は烈火の如く怒り、滿兼廃立を義滿に訴えてその処分を強硬に迫ったので、そこまで考えていない義滿は愕ろき、慌てて宥める始末であった。
いっぽう堺まできて動かぬ大内義弘に対して義滿は、僧絶海中津を派遣して上洛を督促させたが、義弘はこれまで幕府のために尽くしてきた数々の功績をあげて、「にも拘わらず、和泉・紀伊守護職を召し上げて討伐なさるとの噂が頻りゆえ、態々渦中に入る上洛などいたさず、この地に留まって一戦交える所存でござる」
そう開き直ると、
「われはいま、鎌倉殿と申し合わせてご謀叛つかまつる」
鎌倉公方滿兼を奉じて義滿に叛く、と言い放った。
絶海中津は、
「すわ、一大事」
と取って返して義滿に言上した。
義弘は、さっそく軍議をひらいて、
「堺籠城」
に決すると、城塞を築き井楼や矢倉を構えて、五千の兵を籠もらせ、水軍をもって海上を封鎖した。
こうして十一月二十九日〈應永の乱〉ははじまった。
だが所詮衆寡敵せず、攻防戦は僅か一箇月で決着した。
十二月二十一日に堺城が陥落すると、大内義弘はただ一騎で幕府軍に突入して行き、壮烈な戦死を遂げた。
公方滿兼は出兵の機会が得られぬまま鎌倉へ帰った。
義滿は、滿兼を唆したのは了俊であることを突き止めると、翌年正月早々上杉憲定に討伐を命じた。
応戦する兵力を持たぬ了俊は、やむなく降服した。
甥泰範の執り成しによって赦された了俊は、遠江国袋井に隠棲した。このときすでに七十六歳になっていた。

憤懣を筆に託す

〈應永の乱〉の累は今川本家にまでは及ばず、甥泰範の遠江・駿河守護は安堵されて一件落着したのだが、了俊の憤懣遣るかたない思いはおさまらなかった。
それからも憂さを晴らせぬ口惜しい日々がつづいた。
そして、悶々のすえに思いついたのは書くことだった。
思いの丈を筆に託して吐露しようと意を決した。
こうして二年後の應永九年（一四〇二）二月に書き上げたのが『難太平記』で、了俊七十八歳の春であった。
〈難〉は、難文、難問のように〈むずかしい〉と解釈するほか、難詰ともいうから〈なじる〉とも解釈される。
〈なじる〉は、過失や不満の箇所を問い詰め責め立てる

ことだから、『難太平記』は『太平記』を批難、批判している書だということになる。

事実、半分ほどは父範國や兄範氏の活躍が充分に評価されていないことを批難しているし、残りの半分は足利義滿の政道を諫め、その華美な政治生活を批判している。

つまり、この『難太平記』は、今川家歴世の生きざまを系譜的に詳述し、併せて『太平記』の歴史的誤謬を批難して訂正を加えている、といわれている。まさに標題どおり『難太平記』なのである。

それから六年後の應永十五年（一四〇八）五月六日に了俊が怨みつづけた足利義滿が五十一歳で歿すると、その翌年七月二十二日には鎌倉公方足利滿兼が三十二歳で歿して嫡男幸王丸（持氏）が継ぎ、さらに九月二十六日に甥泰範が七十二歳で歿して嫡男範政の時代になった。

應永十九年（一四一二）二月、了俊は弟仲秋に与えるというかたちをとって『置文』（遺言）を書いた。

のちに『今川状』といわれるもので、

一、文道を知らずして武道終に勝利を得ざること。

にはじまる二十三箇条の領主として政治を行う者の心得を書き上げ、各条の解説を加えた教訓書である。

そのほかにも『今川大双紙』など数多くの著作がある。

最晩年の了俊は歌学者として生き、應永二十七年（一四二〇）八月袋井屋敷で九十六歳の天壽を全うした。

墓所は海藏寺（袋井市堀越）にあり、そこが了俊の屋敷跡と伝えられている。

（つづく）

わが愛誦歌（七）

――戦後の歌壇逍遥――

曽根竣作

○帝王の幾代の夢の紫禁城その絶顚に赤旗はためく

太田　青丘

『国歩のなかに』（昭25）所収の一首。紫禁城は、人も知る北京にある明・清の宮殿。元の大都の跡に永楽帝が建設、李自成の乱でほとんど全壊したが、清朝が修復した豪壮華麗な建築物。現在は故宮博物院となっている。

中国の内戦も昭和二十四・五年には終結し、国民党（蒋介石）は台湾に逃げのび、中国共産党が覇権を握ることとなった。従って紫禁城のいただきに青天白日旗に替って中共の赤旗がひるがえっているとして、世の栄枯盛衰を追想しながら創られた作品である。

太田青丘は、東京大学大学院にて中国詩学を研究し、はじめ漢詩の創作から出発した。

戦後、昭和二十五年に第一歌集『国歩のなかに』を刊行したが、それには敗戦後の日本のありのままの現実と、それを慟哭する一日本人の率直な心が衒いなく表現されている。

その憂世、有心の社会詠には、漢詩の気韻と志とを見ることができるが、第一歌集の理念や姿勢の高さは終生変わることがなかった。

作者は、叔父・太田水穂の養嗣子として短歌結社「潮音」を引継ぎ、主宰としてその隆盛に尽力したが、平成八年没。そのあとは夫人の太田絢子氏が中心となり今もなおトップクラスの結社として存続されている。

詠風は、先述したように歴史観的社会詠を得意とし、その中国詩学の蘊蓄を背景として現在と過去、未来の時空が遥々と交錯し対照される中に作品のテーゼを掴んだと言えよう。

〈半島に遂に砲火のとどろく日疼く思ひを丘に抱き来し〉〈荒廃の国土の上にのしかかり秋は限りなし蒼空の澄み〉〈梅雨明けの緑の土手に糸垂るる少年は雲を釣るやも知れぬ〉〈長安の古都をゆきゆき逢ふものか杜甫も仰ぎしそのつばくろめ〉〈谷ひとつ見晴らしにして十日あまりさくら待つ間のわれの白髪〉なども忘れ難い佳什である。

○燈を消せばくらがりふかく祖国ありておんははのごとく泣きゐたまひし　浜田　到

『架橋』（昭44）所収。浜田到は生前に歌集の刊行はなく、昭和四十三年に交通事故死したあと、その才を惜しまれて追悼歌集として詩も含めた『架橋』が発刊されている。

掲出歌は、推定すれば恐らく昭和二十年八月、軍医として山形陸軍軍医学校にて終戦を迎えたときの作品であろう。

燈を消せば真の闇が訪れ、その闇の底で多くの軍人たちが、あるいは死のうと思い、あるいはこの国の将来を思って暗然とし、低い声で語り合いながら、時として涙を拭うこともあったであろうと言う。そして背景として山形盆地周辺の東北の山々がある。祖国が、号泣する母なる旧山河に等置されたとしても何の不思議もない。作者の繊細なる言語感覚と静かな調べの良さが十分生かされており、昨今の軽騒なネオ・ナショナリズムと違った一段奥の深いそして当時の悲傷なるナショナリズムが垣間見えるのである。

大正七年、ロスアンゼルスに生まれた浜田到は十六歳で短歌を作りはじめる。帰国して大学卒業後は鹿児島に在住し内科医としての日々を送った。リルケの詩を愛読し浜田遺太郎の名で詩人としても活躍した。

同人誌「工人」に発表した作品が、名伯楽と言われた中井英夫（月刊誌「短歌」編集長）に認められ、昭和三十年代の短歌界に新風をもたらして注目された。

歌壇的な人間関係を持とうとせず、以前に採り上げた透明感ある作品の多い小中英之と同じように謎めいた歌人という印象がある。

意味の呪縛から言葉を解き放ち、語と語のイメージが繊細に響き合うような抒情的な作品を多く残した。

〈ふとわれの掌さへとり落す如き夕刻に高き架橋をわたりはじめぬ〉〈降り昏むとき汝が矢絣に蒼みさしよせくるものは口にせざりき〉〈百粒の黒蟻をたたく雨を見ぬ暴力がまだうつかしかりし日に〉一首目は夕どきの孤影、二首目は新婚当時の美しい相聞詠、三首目は戦争中の思想への偏見のないアプローチか。

○あの夏の数かぎりなきそしてまたたつた一つの表情をせよ　小野　茂樹

『羊雲離散』（昭43）所収。十代から歌作をはじめ、一九六〇年安保闘争の時代に学生歌人として頭角を現し、早稲田短歌会のリーダーとしても注目された。

戦後の現代短歌の数多くの愛の歌の中でも、掲出歌は屈指の名歌といえよう。

「あの夏」とはたぶん、二人の恋がもっとも激しく燃え上がったときであろう。それにしても「数かぎりなき」と「たつた一つ」は一見矛盾するフレーズと思われるが、彼女が見せたさまざまな表情のうちのもっとも忘れがたい一つの表情と理解するのが自然であろう。

そしてこのように命令形で告げなければならなかったところに、ある夏の二人の間に流れた取り戻しようのない時間の切実さが感じられる。

この歌を、得恋のうたか失恋のうたかなどと詮索するのは野暮というものであろうが、どちらかというと失恋の範疇に属すると考えた方が謎めいて魅力的である。

小野茂樹は、昭和四十五年交通事故により三十四歳の若さで急逝した。清純で青年らしく思い詰めている歌が多いが、当時若者から圧倒的に支持された前衛短歌とはおのずから距離を置き、口語発想の都会的言語センス、豊かな叙情性を、抑制されたリズムによって普遍性を帯びた青春歌として残し、現代短歌を刺戟した功績は大きい。

交通事故死した歌人が二人続いたが故意ではない。書いて行くうちの偶然である。

没後、第二歌集『黄金記憶』が追悼として刊行されたが、新しい時代の愛と青春を歌った陰影のある作品群は忘れられない。

〈五線紙にのりさうだなと聞いてゐる遠い電話に弾むきみの声〉〈わが肩に頬を埋めしひとあれば春は木々濃き峠のごとし〉〈非力のとき誠実といふこと卑し月を過ぎゆく羊歯状の雲〉〈いつしんに木苺の実を食らふとき刻々ととほき東京ほろぶ〉。

○わが未来まだ闘争の匂ひして標的とならん誰と誰と誰　尾崎左永子

『土曜日の歌集』（昭63）所収。自意識の可成り強い作風であるが、ピーンと琴線を張ったような緊張感のある調べが魅力である。

尾崎左永子は、はなやかな文筆家の経歴を持つが歌人としても一流である。この歌集より大分以前の『さるびあ街』（昭32）で、歌壇にデビュー、離婚した女性の自立を芯に据えた作品を発表して注目された。『さるびあ街』には、〈戦争に失ひしもののひとつにてリボンの長き麦藁帽子〉〈冬の苺匙に圧しをり別離よりつづきて永きわが孤りの喪〉などがあり、学生の頃から師事した佐藤佐太郎の「純粋短歌」を踏襲しつつ、都市に生きる昭和三十年代の女性像を拓いて極めて知的であった。

文筆活動に重きを置いた時期を経て、ふたたび歌を作り始め、三・四年に一冊ぐらいの割合で歌集を出版しているが、ゆったりとした古典的な調べの作品も多くなった。

掲出歌は、あっと驚くように戦闘的であるが、人間生きてゆくうちにはこういう感慨を抱くこともあるのではなかろうか。恐らく作者がまだ四十歳前後の頃の作品と見たい。下句の八・八の破調もそれ程気にはならない。

平明な言葉をもって「省略による象徴化」を追求した佐太郎の技法の習得、職場に生きる視野の広さが、現代都市詠の先駆けたらしめたと思われる。

作者は、東京の名門校を出て、ずっと東京で育っているが、〈ふるさとといふべく寂し白昼にガラスの光充つるわが都市〉と詠んだように東京育ちの矜持がずっと歌に通底している。〈石垣に茅花光りて風ありき父ありき東京にわれは育ちき〉〈思ひ出づる夏雲遠し戦に死せりし無残のこりし無惨〉〈遠ざかりゆく戦旗など夕映ゆるさまにか似たりわが青春は〉〈あぶら菜に似る黄の花を踏みしだきわれは天空の下の一点〉。尾崎左永子はあきらかに戦中派である。

○ハンバーガーショップの席を立ち上がるように男を捨ててしまおう　俵　万智

○男というボトルをキープすることの期限が切れて今日は快晴

『サラダ記念日』所収の二首。この歌集の優れて愛唱性の高い恋愛歌群によって、俵万智は恋の歌人というイメージを定着させた。

昭和六十年代のバブル最盛期に、空前絶後と言われるミリオン・セラーを達成したのがこの『サラダ記念日』である。

一般に、歌集を出版したとして、歌壇で上位の歌人でも義理買いを含めてせいぜい四、五千部がいいところである。ところがこの歌集に限って、短歌にいそしんでいない層からも圧倒的な支持があり、一つの社会現象を巻き起こして売れに売れ、歌壇に新風を通した。

現代の口語を短歌という古い詩型に当て嵌めるとき、問題になるのが口語のもつくだくだとした長々しさである。それを工夫して、作者は〝句跨ガリ〟の方法を駆使して平易な誰れにでも分るような調べを作り上げた。

掲出歌の一首目、「立ち上がるように男を」の三・四句の句跨ガリがそれである。また、〈愛人でいいのとうたう歌手がいて言ってくれるじゃないのと思う〉などは一、二句の句跨ガリ、更に四、五句も同じ手法である。

そこのところのちょっとした魔術が、まことにうまく行っているのである。

俵万智のその後の作品を通じて、それを解説する繁文は避けるが、この国における男女間の機微を巧みにすく

い上げ、そして因習的な意味合いへのこだわりを、表現の小気味よさによって切り捨てた解放感は大いに買える。

当時、多少の嫉視も含め毀誉褒貶あい半ばしたようであるが、その後もシングル・マザー（ダンナは不明、秘密の由）として文筆に歌作に充分に活躍されている。〈思い出の一つのようでそのままにしておく麦わら帽子のへこみ〉〈いくつかのやさしい記憶　新宿に「英」という店あってなくなる〉〈年下の男に「おまえ」と呼ばれいてぬるきミルクのような幸せ〉〈四万斗に光の粒をまきながら川面をなでる風の手のひら〉。

○昼ぼたる水にうちこむ弩のむかし長安の大き落日　辺見じゅん

『水祭りの桟橋』（昭56）所収。辺見じゅんは、早稲田大学・仏文学部卒。幼少より折口信夫（号・釈迢空）の弟子であった父角川源義の影響を受け、短歌等の諸文学に親しむ。

この歌集のあとの『闇の祝祭』を読むとよく分るが、作者の基調低音は「父と子」である。その幼年期の一時期における父母の不在が、永遠なる父親憧憬の心情を引きずることになったように思われる。

文筆家としても一流であり、『昭和の遺書』とか『男たちの大和』とかいった代表作で追い詰めてきたのは、父の世代の生きざま、そして戦争観及び父の世代の愛の所在であったに違いない。また他に、『呪われたシルク・ロード』『愛の民話』等の民俗・民話をテーマとした著作も多い。

さて掲出歌、難解である。『水祭りの桟橋』の中の中国詠であるが、殆ど観念的なイメージの歌である。「昼ぼたる」「弩」「大き落日」などに通ずる脈絡をたどってもほとんど答は出ない。それなのにこれらの物象は、一首の中にまとめられた時に何とも言えぬ大らかさを表象し、解らないながらも印象深く忘れがたいのである。

また、落日も「長安」という古都に見た夕陽とし、古代戦乱に使った「弩」の水しぶきを空想して、戦争という事実の虚しさを言いたかったのではなかろうか。辺見じゅんが、ノンフィクション作家として追求してきた男どもの姿がここに窺えると思うのはあながち深読みではなかろう。（長安は黄河支流の渭水盆地にあった古都、現在の西安。前漢・唐などの王朝が栄えた今でいう国際都市であった）

〈ふるさとは車井戸より昏れゆくに故郷くくれとたれかいふなる〉〈遠山にきれぎれの虹つなぎつつわが父の座に雪は降りつむ〉〈馬兵にて夏の焦土に帰り来し父のうたへり大和うるはし〉

参考文献
現代歌人二五〇人（牧羊社）
現代名歌鑑賞事典（桜楓社）
現代百人一首（朝日文芸文庫）
現代短歌の鑑賞事典（東京堂出版）
現代の短歌（講談社学術文庫）
短歌年鑑、平成21年版（角川学芸出版）

祝出版

「関東古墳散歩」
「東北古墳探訪」
相原精次＋三橋浩著

彩流社 ｛ 2,000円
2,800円

短歌　三十首

曽根竣作

凱歌

くり返す〈ボレロ〉の主音耳ふかくわが籐椅子に桐一葉落つ

潮曇る洋に海市のごとく浮く白き巨船の明日を思索す

柘榴の実裂けしが天空に呟けりきのふの嘘は終っておかう

白頭に白線帽をちょいと載せアンチ・エージングか寮歌祭はや

純白のコスモス飾られ冬近し潔かりし二八の日々甦すべく

アナクロと嘲笑はば笑へ戦中に貴なるときを励みしわれら

大太鼓叩いてがなる凱歌なり終はれば熱気さめて寂しも

来年も来られるかなあと仰ぎゐる壇上にひびく「都ぞ弥生」

赤線をいくつか引きてヴァレリーの「虚無」を探して冬に入りゆく

回想の糸を手繰ればぷっつんと切れしところが昭和の焉り

(注) 海市…蜃気楼のこと

白襷

わんわんと椋鳥無数こゑ上げてユリの樹につどふ冬日たそがれ

いづこにて餌を慾るならむ数万羽ざわめきて翔く朝のむく鳥

いっせいに椋鳥の大群とび去りて昼をしづけし駅前広場

昭和史を追ひつつ憶ふ白襷の憂国の士官ら雪上をゆく

昭和維新も夢と終はりて有爲なるいくたりか果つ2・26はや

「誰がために鐘は鳴る」かと叛徒かれら従容として刑につきたり

百舌日和あをき伽藍の光りかへり海よりの風丘吹きわたる

白鳥のひと生は知らず渡り来て神さびし体眠りに入る

渓川をこだま返しにわたりくる翡翠のこゑ水面をすべる

がらんびの岬に佇てば海境をサザンクロスの光芒あはし

蕃社の人

渓谷を辿りて行けばすれちがふ蕃社の人らみな会釈する

網ザックに裸足の若者その上のタロコの勇士ら蘇りくる

ジャングルの物資輸送に奮闘せし高砂義勇兵いまも生くるや

タッキリ渓を渉猟せしも遥かなりガイドの娘の軽やけき脚

高床式住居に案内されたればアンペラのうへ馳走のならぶ

その昔首狩族とも恐れられし人らかと思ふやさしきまなこ

霧社事件とふ反乱ありき首魁たりしモーナ・ルーダオ洞窟に自死

殖民地の日も杳かなり先住民の范氏老いゆく孤島の日暮れ

びろう樹の日陰に坐してまどゐせる蕃社の人らの厚き胸板

谷川は鷺白くとどめ清々たり秋秀麗を過客なるべし

（注）タロコ…台湾・花蓮港より入る先住民居住地

短歌

行雲流水（二十三）

石黒修身

〔一〕近詠二十首

黄葉のはつか殘れる上野杜「フェルメール」観る初冬の午後に

「フェルメール」入場の列に老いし女歌集読みおり「斉藤史」の

光をば紡ぐ匠みかその画面生き生きとして「フェルメール」の

さながらに怒涛の如く押し寄せる社員解雇の暗きニュースは

派遣切り「次の仕事がみつからぬ」頂垂れる男らあまたテレビに

学名は「ニッポニヤ・ニッポン」その朱鷺が滅びずにいま佐渡島に翔ぶ

空の路知っていたのか朱鷺数羽母なる佐渡ゆ越後に着きしと

合評の会が終れば酒組みとコーヒー組とに分れて散りぬ

喜寿を機に解散せんとの提案に賛否交々同期の会は

人の死は避けられぬもの葬りまた欠かせぬものと「おくりびと」見る

たまさかに逢いし人より音信の久しく絶えし友の訃を聞く

流氷の報せを呉れし友亡くば今年はネットで情報を索く

いくつかの想い出があり懐かしき流氷の街をまた訪ねんとす

妻も子も孫らも罹かる花粉症老い吾ひとり平然と居り

喜寿近くゴルフなどもう止めようと妻に言いつつまた出掛けゆく

桃節句山合い寒きゴルフ場バックナインで風花が舞う

声高に抗弁をする党首居りテレビを消して暫く立たず

追及の言葉激しき議員らの傲りを忌みてテレビを消せり

現世に警醒の論説き来たる「加藤周一」逝く夕陽浴びつつ

ローマ史を書き終えて今「海賊」で文明を説く「塩野七生」は

〔二〕流氷余話

筆者は、今年二月中旬の三日間、北海道オホーツク海沿岸の紋別に滞在した。

表向きの目的は、同窓の友人である海氷の研究者、青田昌秋氏が主宰する、第二十四回北方圏国際シンポジウム「オホーツク海流と流氷」への参加であった。

そして本音の目的は、接岸する流氷の観察にあった。

その時点で、流氷は来てなかった。一旦接岸した流氷は、数日前に岸を離れ沖合二十キロメートルに浮遊していると言う。

シンポジウムへの参加もそこそこに、明朝こそは流氷が来るかと期待をふくらませたが、初日は未明に、例のガリンコⅡ号に乗り、流氷のない沿岸を廻るに止まった。

然し、幸いなことに空は晴れ、水平線に昇る真赤な朝陽を見ることが出来たのは、ひとつの収穫であった。

その翌日は、前夜来の気温の低下と吹雪の故で、流氷の接岸が期待されたが、ガリンコⅡ号からの連絡は、「流氷は来ません」であった。

かくして流氷観察の夢ははかなく潰え去った。そして、帰宅した翌日に流氷接岸の報せを聞くことになった。

こゝに滞在中に見聞した、流氷に関するいくつかの"素人的情報"を記そう。

近年温暖化の影響で、流氷の勢力が徐々に劣えていることは周知のとおりだが、その功罪については、研究の進歩とともに、見解が大きく変っている。

「流氷は旅人だけに美しき」と大正時代の俳人今鴎昇は詠んだ。

流氷は浜の人々にとり、とんでもない厄介者、漁師にとっても、白い魔物、漁具は壊されるし、ホタテやツブは潰される。冬になれば、父ちゃんは出稼ぎに行かねばならぬ。これが罪の主因であった。

それが近時は、流氷は波を抑えて塩害を防止し、漂砂を抑え海岸を護る。また、プランクトンを連れてくるので、豊漁に資する等が功の要因であろう。

かくて流氷は"海からの素晴らしい贈り物"となっている。昔は浜で流氷早期退散祈願の神主が、今は早期流氷到来祈願をしている、とのエピソードが象徴的であろう。

前記の青田氏も、"海は母、流氷は友"と訴えている。

次いで話題をもうひとつ。

オホーツク海は、流氷の北半球の南限である。そして、オホーツク海が凍る最大の理由は、シベリアからの厳しい寒気である。

カムチャッカ半島や千島列島などに囲まれ、アムール河の真水が注ぎ込んで凍り流氷となる。

テレビ・マスコミは「アムール河から冬の使者、流氷がやって来ました」と調子良く紹介する。然し観測の結果では、紋別沖等の海水が凍ることから、アムール河の氷が直接流れて来るものだけとは思えない。北海道付近の海水自体が凍っているので、サハリン沖で生まれて海岸沿いに南下した「船来氷」と北海道沖で生まれた「国産氷」が共存しているとの説が有力である。

以上は、前記の青田昌秋氏（北大名誉教授、道立流氷科学センター所長）の著述や談話を参考にした。

その後、三月十三日、青田氏は皇居吹上御所に於て、天皇陛下に、流氷と関係する自然現象等のテーマで御進講申し上げている。

陛下は、熱心に資料の観察と質問をされ、予定の一時間を三十分程超過したとのことであった。

以下に紋別滞在中の感懐を託した短歌十五首を載せる。

ひとたびは岸を埋めにし流氷が忽然と去る風の仕業ぞ

戻り来ぬ流氷を待ち三日間紋別の海は渺渺として

紋別の沖合はるか浮遊せる流氷よ来い北風よ吹け

「ガリンコ」で沖に出(いっ)ればオホーツクの水平線に朝陽が昇る

紋別の港は氷薄くして蒼空高く尾白鷲翔ぶ

流氷は来るかと問えば土地の人異口同音に「風次第」と言う

流氷の時期で漁(いさ)りは出来ずとも紋別の人はおおらかで居る

ギシギシと流氷きしむ幻の音聴く夢は紋別の宿

凍(い)てつきて地吹雪の舞う紋別の街を俯き歩みたる夜

沿岸で傷つきし海豹(あざらし)治療して海へと帰す「トッカリセンター」

海の青その明るさを人々は「オホーツクブルー」と呼びて讃えり

流氷に遭わずに帰りし翌日に接岸の報聞くは口惜し

サロマ湖に入り込みたる流氷は湖面一帯覆うと聞けり

この地から海氷の文化発せんとオホーツクの研究者(ひと)は意気昂くして

流氷の真究めたる科学者の談聞きており盃交わしつつ

漢詩

潮騒錄（五十七）

鯨游海

バラク・オバマは青年の大志を抱いて大統領選に臨み、当初の風聞では圧倒的優位にあった政敵マケインを打ち砕いて勝利した。歴史上初めて非WASPの黒人が東部エリートでアングロサクソンの白人を破った。

人類の理想を実現せんと夢想した彼は拳を揮って民衆に語りかけ遂に東の空に五色に輝やく暁雲をその手中に呼び込んだのだ。

長く激しい党内の代表選に勝ち、さらに現職ブッシュを擁する共和党との激戦も制したが、勝利のキーワードは唯の一言変革で国民は彼に決断と実行有る已と夢を託したのである。

かくなる上は旧来の常套を排し、虻蚊の如き瑣末な雑音を打ち払い強い信念で困難を克服して欲しいものだ。必らずや彼は世の熱望に応え、須らく初志を貫徹し、米国のみならず全世界を覆う閉塞を打破し、新らしい夢と希望を実現してくれるに違いない。

美國新大統領誕生　　平成二十年十一月

青年大志碎風聞
夢想揮拳呼曉雲
變革斷行唯有已
須拝常套拂虻蚊

押韻・聞　雲　蚊

〈米国新大統領誕生す〉

青年の大志　風聞を砕き
夢想拳を揮って　暁雲を呼ぶ
変革の断行　唯有るのみ
須らく常套を排し　虻蚊を払ふべし

〔注　解〕

虻＝あぶ。蠅よりも大きく人や牛の血を吸う。
蚊＝か。小さく動物の血を吸う。虻蚊と熟して「つまらない、瑣末な事」を指す。美國＝米国の現代中国語。

KY　気，漢字

某國宰相不能讀字　　平成二十年十一月

詳細焦眉更踏襲
頻繁誤讀疑文盲
憲政史上未曾有
仄聞近時添假名

押韻・盲　名

〈某国の宰相字を読む能はず〉

詳細焦眉　更には踏襲
頻繁なる誤読　文盲かと疑ふ
憲政史上　未だ曾つて有らず
仄聞す近時　仮名を添へしむと

〔注　解〕

麻生太郎総理大臣の国会演説における誤読例である。詳細を「ようさい」、焦眉を「しゅうび」、踏襲を「ふしゅう」、頻繁を「はんざつ」、未曾有を「みぞうゆう」これで一首ものした所、低迷「ていまい」窮極「しゅうきょく」遂行「ついこう」怪我「かいが」と枚挙にいとまのないことがその後に判ってきた。

驚くべきことだが、残念ながらこれらは事実なのである。怪我を「かいが」と読む人を誰が信頼しよう。

☆詩歌詠めぬ一国の宰猿に似む
文字読めぬ宰何に喩へむ

哀悼文豪早乙女貢先生　　平成廿一年一月

赤誠如雪會津藩
純潔紛櫻尚武門
騒客豈唯紡哀史
青龍白虎五倫魂

押韻・藩　門　魂

〈文豪早乙女貢先生を哀悼す〉

赤誠雪の如き　会津藩
純潔桜かと紛ふ　尚武の門
騒客豈に唯だ　哀史を紡ぐのみならんや
青龍白虎の　五倫の魂に於いてをや

〔注　解〕

直木賞作家の早乙女貢先生が、昨年末突然不帰の客となられた。

会津藩の末裔でハルピンのお生まれ。フランス人の血も曳くとされる大連育ちの国際派。終戦后引き揚げ帰国。戦後は山本周五郎に師事、大作家への道を歩まれた。

「会津藩は、徳川宗家の藩屏として士道に殉じたことが、朝敵の汚名を蒙り、流罪にも似た悲劇をもたらした。その歴史の眞実は、明治藩閥政府によって狡猾に歪曲され、正義は抹殺されて逆賊の烙印を捺されたのである。士道に生きよという庭訓が、敗戦の混乱の中で挫折に耐えさせ、白虎隊の精神が、また柴五郎陸軍大将の苦闘

の支えが私を生かし励ましてくれた」
と語られたのは、平成十三年七月四日、東京会館での「会津士魂の完結を祝う会」の壇上であった。
私は図らずもこのお祝いの会場の一隅に居た。
先生は未だくお元気であられ、その凛々しい和服姿は辺りを払っていた。同郷の私には格別ご親切であられた。
漢詩、漢文への理解も深く、何かと愚生を励まして下さった。そのときに差し上げた拙作七言律詩をご披露しよう。ご一笑の程。

東京會舘拝謁文豪早乙女貢先生奉祝畢生大著會津士魂全二十一巻成就　辛巳申月　（鯨　游海）

行間無涙不能讀　行間涙無くんば　読む能はず
紙背有情更難前　紙背情有りて　更に前み難し
湖上遙聞戎馬喘　湖上遥かに聞く　戎馬の喘ぎ
故山回望砲彈烟　故山回望すれば　砲弾の烟
月融白霧兵彌迫　月は白霧に融け　兵いよいよ迫り
風躍紅蓮城欲燃　風は紅蓮を躍らせて　城燃えんと欲す
非直維新哀哭史　直に維新　哀哭の史にのみ非ざらむ
會津魂可永相傳　会津士魂　永へに伝ふ可し

讀新曲二宮金次郎　　平成二十年十二月

忽聞新曲妙音符
農聖尊翁艱難途
切切嘈嘈無不醉
美聲正是大金吾

押韻・符　途　吾

〈新曲「二宮金次郎」を賛ふ〉
忽ち聞く新曲　妙なる音符
農聖尊翁　艱難の途
切切嘈々　酔はざるは無し
美声正に是れ　大金吾

〔注　解〕

大日本報徳社を始め、報徳研究会（東京）その他関係する方々の努力が実って、この度歌謡「二宮金次郎」が完成し、近くCDその他により広宣される事となった。

作詩―木下龍太郎（故人）
作曲―船村　徹
歌手―大　金吾（キングレコード）

という錚々たる豪華メンバーによる船出である。
報徳運動の末端を担っている積りの愚生としては、多少の感慨を催された。
三戸岡道夫先生に促されて、早速一首をものした。出来や如何ご一笑に供する次第。

なお作曲の船村先生も歌手の大金吾先生も、共に報徳精神旺盛な方々であられる。
起句の「忽ち聞く」は白楽天・琵琶行の書き出し「忽聞水上琵琶聲」を連想。転句「切切嘈嘈」も「大絃嘈嘈如急雨　小絃切切如私語　嘈嘈切切錯雜彈　大珠小珠落玉盤…」より借用したもの。嘈嘈は高く大きな音の形容。

二宮金次郎　　作曲　船村　徹
　　作詞　木下龍太郎

（一）こぼれた籾の　一粒さえも
両手に余る　米になる
鍬をふるって　拓いた土地は
貧しく生きる　人のため
男体おろし　受けて立つ　情　二宮金次郎

（二）自分で蒔いた　菜種の灯火
本なら読める　暗くとも
今日の苦労は　明日のために
心を磨く　糠袋
弟たちの　親代わり　生まれ相模の酒匂川

（三）金蔵建てて　残してみても
持っては行けぬ　あの世まで
借りた恩なら　お礼を添えて
世間に返し　徳を積む
生まれた時も　無一文　仏　二宮金次郎

《漢詩の流れ46》元の詩（四）薩都剌

薩都剌（一三〇八～？）字は天錫、号は直齋。モンゴルの出身で、父祖以来軍人の家系。雁門（山西省代県）に生まる。進士に及第した地方官として転々、晩年は杭州に住んだ。色目人である出自からも中国文学史上、異色の存在である。魯迅がこよなく愛読した詩人といわれる。元は文化不毛の時代と云われるが、絵画では明らかに前代よりレベルは高く、戯曲に於いては黄金時代で現代でも上演されている名作を輩出している。
詩では虞集、楊維楨と共に三大家に数えられる。
「雁門集」を編注した薩竜洸は、末裔という。イギリスの海軍兵学校に留学し近代中国海軍の父薩鎮冰も彼の後裔と自称している。

初致閩（初めて閩に致る）
舊説榕鄉好　旧より説う　榕郷は好しと
來遊鬢已絲　来遊　鬢已に糸あり
片雲山對戸　片雲　山は戸に対し
一雨水平墀　一雨　水は墀に平かなり
綠袖持蕉葉　緑袖は　蕉葉を持ち
丹林壓荔枝　丹林荔枝　圧す
城闉南有市　城闉　南に市有り
燈火夜眠遲　灯火　夜　眠ること遅し

（注）墀とは階段。闉は城門の前に丸く突き出た重門。荔枝は中国南部産の果実。楊貴妃が好んだ。

俳句

鷹の呟き（つぶや）（六）

大澤鷹雪（たかゆき）

迷ひある原則論や青葡萄

観閲の艦の航跡青葉潮

相談はただ一件の清和かな

見ぬふりのできぬ襦袢や衣紋竹

虎が雨男未練は絵にならず

疲れ鵜に感情移入浅からず

焦らしつつ月下美人（注）の咲きにけり

氏素性知れぬも土用鰻かな

彫刻を眞似てはしやぎし裸かな

一族の女の序列盆用意

歴代の啄木鳥籠る神樹かな

秋めくや置きし電話の余韻にも

（注）サボテン科の一品種

鎌倉の詩

二題

太田精一

鎌倉の詩

一.
桜舞い散る　八幡宮
鎌倉祭りの　流鏑馬は
坂東武者の　心意気
命を賭けた　静の舞は
哀れを誘う　恋の舞

二.
なでしこの咲く　夏の海
太刀投げ祈る　義貞の
願いかないし　稲村ヶ崎
夕陽に浮かぶ　江ノ島は
弁財天の　薄化粧

三.
白萩揺れる　宝戒寺
栄華きわめた　北条の
一族果てし　やぐら跡
秋風の立つ　岐れ道
鎌倉宮の　薪能

四.
北鎌倉の　禅の里
建長円覚　五山の矜持
凛然と立つ　雪道に
かすかに漂う　梅の香は
春の萌しか　東慶寺

鎌倉逍遙

一.
春爛漫の　源氏山
霞たなびく　鎌倉に
東国支配の　夢を懸け
白旗揚げた　武士の
思い伝える　花吹雪

二.
明月院を　訪ねれば
雨の雫に　あじさいが
色鮮やかに　咲き誇る
塑像の中の　時頼に
鎌倉幕府の　気概見る

三.
化粧坂の　切通し
昼なお暗い　坂道に
悲運を恨む　武者の声
鬼哭蕭条　秋の風
哀れを誘う　萩の花

四.
露座の大仏　仰ぎ見て
長谷観音に　詣でれば
眼下に光る　冬の海
稲村ヶ崎の　西空に
夕映え染まる　富士の山

狩野川のトド（4）

堀内永代

（七）

雪子は、昭和二十年（一九四五）八月六日（月曜日）の早朝、我入道の自宅から千本松原の中を抜けて、静岡県立沼津城南高等女学校へ向かう途中、駿河湾の水平線上のはるか向こうに、

《ピカ、ドン》

と光った稲光のような幻影を見たので、帰宅後に、そのことを母親のとみに話した。

「ピカ、ドンは、駿河湾のはるか西の方に見えたのネ。お父さんのいる浜松の三方原は、西の方でしょ。だから三方原の飛行場に大型爆弾が落ちたら心配だわ・・・」

親思いの雪子は、父親の安否を気遣ったが、その一方で、反戦的な女学校の英語教師の話を聞いて、

「お母さん、私はね、近いうちに戦争が終わるのではないかと思うのよ・・・」

とも言った。すると、母親のとみも、

「大きな声では言えないが、雪子の予感は案外当たるかもね・・・」

と、ひそかに悪夢のような戦争の終結を願った。

一方、戦況はますます緊迫度を増し、ラジオや新聞の報道が厳しく統制されていた。そのため、天気予報を始め、日本に不利な情報や、国民が知りたい本当の戦況などを、知る手がかりも方法もなかった。

だから雪子には、神様のお告げがなければ、ピカドンが本当に起こったのか、あるいは起こりうるのか、全く解らない。「神のみが知る」ということである。

雪子がピカドンの幻影に遭遇したその夜、母親のとみは、蒸し暑かったせいばかりでなく、藤吉の安否を気遣って、寝付かれない一夜を過ごした。

その翌日も相変わらず猛暑であった。

この頃は物資が不足しているため、新聞は、両面刷りの一枚だけのタブロイド版である。

そのタブロイド版の新聞が、遅く配達されたが、それにはピカドンのような敵機による大空襲のことは、どこにも書いてなかった。

（雪子の幻影はやはり、雪子の取り越し苦労だった）

ととみは胸をなで下ろした。

ところが、真夏の太陽が少し西に傾いた頃、点けっ放しにしてあるラジオから、

臨時ニュースを申しあげます
臨時ニュースを申しあげます
大本営　八月七日十五時三十分発表！
一、昨八月六日広島市は敵B29小数機の攻撃により相当の被害を生じたり
二、敵はこの攻撃に新型爆弾を使用せるものの如きも詳細目下調査中なり

という臨時ニュースが流れてきた。

とみは雪子の数日前からの耳鳴りと、ピカドンの話が、現実だったことがわかり、わが子のことながら、雪子の予言が何か空恐ろしいような、不気味さを感じた。

そして雪子の帰宅を待ちかねた。やがて雪子の姿が見えると、急いで駆け寄り、

「ねぇ雪子、今、ラジオの臨時ニュースで言っていたけど、昨日の朝の八時過ぎに、広島に新型爆弾が落ちて大変のようよ。新型爆弾ってなんでしょうね・・・でも、その新型爆弾が、お父さんのいる浜松に落ちなくてよかったわ・・・」

ととみは大事件が浜松でなかったので、まずは一安心といった顔で雪子に話し掛けるのだった。

雪子は、母親から臨時ニュースの話を聞いて、

（やっぱりね、昨日の朝、千本松原で見たあのピカ、ドンの幻影、それに続く、あの焼け付くような閃光と衝撃、その後の巨大キノコ雲、あれはまさしく神様のお告げの幻影が、現実のものになったのね・・・）

雪子は、久し振りに神様の言葉を預かった興奮に、胸の高まりを感じた。

その翌日（八月八日水曜日）の新聞一面トップに、広島に落とされた新型爆弾についての記事が掲載された。

朝日新聞によれば、

八月六日午前八時過ぎ敵B29小数機が広島市に侵入、少数の爆弾を投下した。これにより市内には相当数の家屋の倒壊と共に各所に火災が発生した。敵はこの攻撃に新型爆弾を使用したもののごとく、この爆弾は落下傘によって降下せられ空中において破裂したもののごとく、その威力に関しては目下調査中であるが、軽視を許されぬものがある・・・

と書かれてあった。が、新型爆弾（ウラン）がどんな内容の爆弾かについては、一言も触れてなかった。それは軍事作戦上の秘密なのか、それとも科学が立ち遅れているのか、我入道の漁師のおかみさんのとみには、全く見当がつかなかった。

この新型爆弾は、アメリカ軍では、

《リトルボーイ》

というニックネームで呼ばれ、B29爆撃機エノラ・ゲイから投下されたのであった。しかしそのようなことは、日本軍は当然何も知らないことであった。

その翌日（八月九日木曜日）の朝日新聞には、トップ記事で、

……敵はこの新型爆弾を使用する事によって戦争の短期終結を急ぐ焦慮振りをいよいよあらわしているものと見るべきである。新型爆弾の炸裂状況は落下傘をつけて地上約五、六百メートルに降下した際、強力なる閃光を発して炸裂、これと共に大爆音を発し強烈な爆風と高熱を伴うもののようである・・・

と書いてあったが、依然として新型爆弾は目下担当係官が研究中ということであった。

その後、広島の市民は、

「ピカリとくる間もなくドンときた」

と表現した。これが、雪子が幻影で見たピカドンである。

雪子は耳鳴りと、幻影で見事に原子爆弾を預言したのであった。

一方、とみも、

「大きな声では言えないが、雪子が幻影を見て預言した近い将来に戦争は終わるということも、案外本当かも知れない」

と戦争の終結を願うのだった。

広島に新型爆弾が投下されて三日後の八月九日に長崎に新型爆弾（プルトニウム）が投下された。この長崎に投下された新型爆弾のエネルギーは、広島に落とされたリトルボーイよりも大きかったが、幸いなことに、長崎の地形が山あり谷川ありと起伏が多かったために、広島に比べて被害がすくなかった。

長崎に投下された新型爆弾の情報は、三日後の八月十二日の新聞に、小さく掲載されただけであった。

朝日新聞は、一面の下の方の欄に、

長崎にも新型爆弾

西部軍管区司令部発表（昭和二十年八月九日十四時四十五分）

一、八月九日午前十一時頃敵大型二機は長崎市に侵入し、新型爆弾

らしきものを使用せり

二、詳細目下調査中なるも被害は比較的僅少なる見込み

と見出しとも八行記事で報道してあるのみだった。

広島に大型爆弾が投下されてから、五日目の八月十四日に初めて

『原子爆弾』

という活字が、小さく書かれていた程度である。

その翌日の昭和二十年八月十五日（水曜日）は、特別に暑さが厳しかった。そんなこともあってか、雪子に限らず誰もがいらいらしていたところへ、早朝からラジオで、

賢き辺りにあっては本日正午から重大発表を行うので、国民は必ずラジオ放送を拝聴するようにされたい

と繰り返し、繰り返し放送していた。

この頃は、電力事情悪化のため、間欠送電の地方もかなりあったが、この時は特別に、全地域に送電されて、全員が天皇陛下の玉音放送を聞くことになった。

雪子たちも、女学校の校舎を改造した、急拵えの軍需工場の中庭に整列して拝聴した。

正午の放送は、まず下村情報局総裁の、天皇陛下自らの勅語朗読である旨の説明があった後、君が代の演奏があり、次いで陛下の朗読が放送された。

しかしこの玉音盤は品質が悪く、ラジオの性能も劣悪であったために雑音が多くて、雪子は陛下の、

堪え難きを堪え、忍び難きを忍び

という玉音のほかは、よく聴き取れなかった。

しかし、そのすぐ後の、内閣府からの補足説明で、戦争が終わるということがなんとなく理解できた。

このラジオ放送は、録音放送であったが、国民は陛下の肉声を初めて聞いて驚愕、恐懼した。

だが日本国民は、この玉音放送のお陰で終戦を迎えて、命拾いしたのである。

正式の戦争終結は、昭和二十年九月二日に、アメリカ軍艦ミズリー号上で行われた降伏文書の調印式の時からであったが、国民は、八月十五日正午の玉音放送を境にして、B29爆撃機や艦載機の襲来もなく、灯火管制の必要もなくなり、国民は等しく戦争の恐怖から解放されたのである。

あの時の解放感は、経験した者しか判らないであろう。

それから一週間後、雪子たちは久しぶりで登校した。

そして沼津城南高等女学校のキャンパスには、若い女学

生の華やいだ歌声が響きわたった。

雪子は、広島や長崎の原子爆弾の被害や、昭和二十年八月十五日（水曜日）の敗戦を、神のお告げで予知したが、これが学校中、いや沼津の街中で評判になった。雪子が女学校三年生、十五歳の時のことであった。

（八）

やがて雪子の家でも、内地配属の父親佐藤藤吉が除隊して、元気な姿で帰ってきた。

このとき藤吉は四十六歳、とみは四十二歳、共にこれからが働き盛りである。とみは、長女の雪子や次女の秋子に手伝わせて、家中でささやかであったが、一家の無事を祝って祝杯を挙げる支度をした。

その夜、久し振りで薄化粧をしたとみは、全身からフェロモンを匂わせ、艶めかしく藤吉にサービスするのであった。

藤吉は、その翌日から兵隊ボケもなく、懸命に働いた。しかし、藤吉の漁師生活は厳しく、敗戦後の物資欠乏の時代であったので、漁船も燃料も不足し、満足な漁師の仕事はできなかった。やむを得ず、戦後に出現した闇市で働くようになった。

闇市での商売は、非合法である。いつ警察に摘発されるかも知れない、危ない商売であった。

漁師の藤吉は、闇屋稼業を始めた頃には、商売の駆け引きなどは皆目判らなかったが、半年ほど続けていると、見よう見真似で商売のコツを覚え、稼ぎもだんだん増えてきて、随分と懐が膨らんできた。

藤吉は、思わぬ儲けがあると有頂天になって、その日の稼ぎの一部を女房のとみに渡し、夕方になると稼ぎのほとんどを胴巻きに入れて、花柳界や飲み屋街で、カストリ焼酎を煽り、大盤振る舞いをして気炎を上げていた。にわか成金になった藤吉が、酒や女に大金を使っても、胴巻きはなかなか空にならなかった。そのくらいの金が藤吉に入ったので、とみも得意気になって、近所のおかみさんたちに、気前よくお裾分けしていた。

戦争が終わって約一年半が経過した。相変わらず藤吉の闇屋稼業は景気がよかった。

雪子は、静岡県立沼津城南高等女学校の四年生になり、卒業する日が一カ月後に迫り、なんとなく慌ただしくなってきた。

そんなある日、雪子は珍しく耳鳴りがした。しかし、この日は卒業試験もあったりして、耳鳴りはほとんど気にならなかった。

雪子は、午後三時を過ぎ、女学校の通用門を出て、急

ぎ足で千本松原の中の小道を家路に向かった。その日は、西風が強かったので、そのときも耳鳴りは全く気付かなかった。

もう一ケ月もすれば、雪子は女学校を卒業であるが、この頃日本の学制は、新制度への切り替え時であり、希望すればもう一年女学校生活を続けられた。しかし雪子は、四人いる妹たちのことを考えて、四年で卒業することに決めていた。

雪子の耳鳴りがしたのは、丁度自分の進路について迷っているときでもあったので、そのことに神経が向いていて、耳鳴りは気付かなかったのだろう。さらに、

（お父さんは、統制物資を非合法手段で商っているが、闇屋なんて何時警察の手入れがあるか判らない。早く止めさせなければ・・・）

と潔癖な雪子は、真剣に考え込んでいた。女学校を出て、千本松原を歩き、狩野川を渡し船で渡った。

それから我入道の漁師町の中まで来ると、家並みに遮られて、風が急に静かになった。すると今まで気にならなかった耳鳴りが、シャンシャンと聞こえてきた。

（アラッ、いやだわ・・・　耳鳴りがする、なんのお告げかしら・・・）

雪子には、今日の耳鳴りがなんの予兆であるのか、見当がつかなかった。その時ふと、

（三月二十四日の卒業式に、いいことでもあるのかしら・・・）

と思った。雪子の学業成績は、女学校四年間を通して常にトップクラスの成績であったので、

（ことによったら、なにか賞でもいただけるかな）

雪子は、とっさに夢みたいなことを望んだ。我入道の自宅に帰ってからも、そんな思いがふつふつと胸の中で膨らみ、思わず笑みがこぼれるのを抑えられなかった。

それから二週間後の昼休みに、雪子は、担任の英語教師尾崎清英に教員室に呼ばれて、

「佐藤さん、おめでとう。予想した通りにあなたが卒業生総代を務めることになりました。早く帰ってご両親を喜ばせてあげなさい。卒業式の当日は、お父さんも、お母さんも、お二人とも卒業式に出席するようにと校長先生からお話がありました」

と告げられた。

雪子は神様のお告げ通り卒業生百五十人を代表して、卒業証書を受け取り、答辞を述べる卒業生の総代を務めることになったのである。

（そうか、この間の耳鳴りは、卒業生総代の予兆だったのだ）

雪子は、卒業生総代の栄誉を担う喜びで胸が高鳴った。

卒業式の二日前に、答辞と卒業証書の受け取り方のリハーサルも行なった。

いよいよ卒業式の当日になった。雪子の一生に一度の晴れ舞台である。ところが午前九時を過ぎても、藤吉もとみも学校に姿を見せなかった。

親友の堀井由美子の両親も、天城の湯ケ島から出席していた。職業軍人だった由美子のお父さんも、無事に戦地から帰還して、今は湯ケ島で家業の温泉旅館を営んでいる。

雪子も時々湯ケ島へ遊びに行って、由美子の両親とも面識があったので、雪子の両親の姿が見えないことを、一緒になって心配してくれた。

午前十時の定刻になっても、遂に、藤吉、とみの二人は女学校に来なかった。

卒業式も順調に進行して、卒業生を代表して雪子が、卒業証書を受け取り、答辞を述べる時刻が迫ってきた。

卒業生の最前列に座っていた雪子は、姿を見せない両親を気遣って、胃がきりきりと痛くなってきた。

来賓席の、

「佐藤藤吉殿」

「佐藤とみ殿」

と記された席札が、雪子には重圧となってきた。

(お父さん、お母さんの馬鹿。なぜ来ないの・・・)

と腹が立った。

そして遂に雪子が、卒業証書を奉戴する時がきた。

司会の先生が、雪子に目配せしてから、

「次に卒業証書の授与を行います。昭和二十二年度卒業生総代佐藤雪子・・・」

と雪子の名前を呼び上げた。

その瞬間、卒業式会場の後方の席から、

「ウウウッ・・・ ヒーッ・・・」

と女性の悲鳴にも似た嗚咽が、シンと静まった講堂の中に響きわたった。嗚咽は、抑えようとすればするほど、固く結んだ唇の間から、ほとばしり出るのだった。

一瞬、会場は驚きの声でざわめいたが、その悲鳴にも似た嗚咽が、雪子の母親とみのものであることが判かると、

「あの人、卒業生総代の佐藤雪子さんのお母さんよ。殆んど女手一つで五人の娘さんを育て上げたのだから、嬉しいのよ、無理ないわ・・・」

と講堂内の冷ややかな侮蔑の眼が、一斉に同情の眼に変わった。

そのとき雪子は、不思議なほど冷静であった。しかし、

(今日の卒業式を一番喜んでいた父が、なぜ来ない?)

雪子には、それがなによりも悲しかった。

そして、藤吉が出席できない理由は、卒業式が終了するまで雪子には知らされなかった。

実はこの日、父親の藤吉は、雪子の晴れ姿を楽しみにしていた。そして雪子が登校した後、嬉しさのあまり、昨日買ったカストリ焼酎を、祝い酒だといってコップで

三杯飲んだのだった。三杯目を飲み終わって、しばらくすると、突然、眼底に激痛が走り、眼を開けていられなくなってしまった。

この焼酎は、メチルアルコールの入った極悪焼酎だったのだ。

とみは大慌てで、藤吉を国立病院に担ぎ込んだが、医師の診断では、失明するだろうということであった。

藤吉もとみも、この変事を直ぐに女学校に連絡しようと思ったが、雪子が動揺することを心配して、卒業式が終了するまでは伏せておくことにした。そして、遅ればせながらとみ一人だけが女学校に駆け付けたという訳である。

とみは、雪子の名前が呼ばれた瞬間、雪子の卒業生総代の栄誉と、藤吉の失明という吉凶二つの出来事が綯い交ぜになり、感情が高まって、思いがけない号泣となったのである。

雪子のあの一か月前の耳鳴りは、卒業生総代の吉兆ではなく、実は父親藤吉の失明の凶兆であったのだ。

雪子は、耳鳴りが、凶事の前兆であることに気付かなかったことを、しきりに悔やんだ。

藤吉が非合法な商売とはいえ、闇市で儲けていたときは、生活費に事欠くことはなかったが、藤吉が失明してからの佐藤家の生活は、たちどころに行き詰まった。

雪子は、卒業式を終えたその翌月から、家計を助けるために、沼津城南高等女学校の同級生青野晴子の父親が経営する、伊豆長岡の温泉旅館駒乃家に、住み込みで働くことになった。

駒乃家の仲居見習いになった雪子は、かつて父親藤吉が、出世魚ボラの幼魚にちなんで付けたニックネーム、

『オボコさん』

の呼び名で働き出したのである。

果たして雪子は、オボコ、スバシリ、イナ、ボラと名前が変わりながら出世し、最後には、ボラの王者、

『トド』

となって、狩野川の激流を機智と魅力で泳ぎ切り、

『女の出世街道』

を駆け上がることができるのであろうか・・・

それとも、波瀾万丈の末、

『トドのつまり』

は奈落の底へ落ち込むのであろうか・・・

現在は、誰もそれを予測できない。

つづく

一水

吉田忠雄

「一水」は足利市にある駅にほど近い居酒屋である。私が平成11年に故郷足利に職を得た時に、甥の吉田豊に教えられた店である。最初のうちは豊と一緒に行ったが、そのうちに一人で行くようになった。

そのあとで、新しい足利の友人小幡洋次郎さんと小幡さんの行きつけの蕎麦屋「志まや」に行くようになったので、「一水」とは一時疎遠になった。しかし気が向くと時々顔を出した。

3年前ころから私は新しい仕事が加わって忙しくなり、小幡さんは本業のホテルの経営は奥さんとお婿さんに任せて、レスリング関係の仕事が忙しくなった。そんなことで「志まや」で小幡さんと飲む機会もほとんどなくなった。再び地の利の良い「一水」に行く回数が増えた。

「一水」は、新しい魚を出すこと、またよい魚があると出してくれること、値段が私にとっては適当であること、何よりも客筋が良くて安心していけることが私を引き付けた。

私は、「一水」では二合徳利1本の日本酒とビール大瓶1本を同時に頼み、気が向いたらどちらも飲むという、節操のない飲み方をする。最近は、ビール大瓶1本を中ジョッキ生ビール1本に変えた。すこしは歳の影響があるかもしれない。

私は魚が好きである。最初のうちは、刺身一品と焼き魚一品を頼んでいた。どちらかというと味のある魚が好きなので、刺身としてはしめサバやアジのたたきなどを多く頼んだ。しかし同じものばかりでは飽きるので、ときには鯛やヒラメの刺身なども頼んだ。

赤身のマグロは、私なりに味がないと思って敬遠していた。しかし、あるとき、隣に座っていた稲葉さんが

「マグロはよく噛むと味が出てきてうまいですよ」と教えてくれた。

たしかに、マグロはよく噛むと味があることがわかった。それからマグロも頼むようになった。マグロの値段は500円だったり、600円だったりする。600円のマグロは上マグロでトロが混じっている。私にとっては赤みマグロよりはトロのほうがうま味があるので、上マグロがあるときマグロを頼むようになった。

あるときには必ず頼むのはホヤである。変わったものが好きな私は、40歳過ぎまでホヤを見たことも食べたこともなかった。爆発実験で仙台に行った折にホヤを食べる機会があった。最初食べた時はホヤ独特の臭みがあり、日本酒がすすんだ後でないと食べられないと思った。それからは、ホヤを見かけると日本酒を飲んで酒がまわってから食べることにした。慣れてくると、最初からホヤを肴に酒を飲むようになった。いまでは、「一水」でホヤがあると必ず注文し、日本酒の肴として食べることにしている。

人間いくらでも贅沢になるものである。数年前に八戸工業大学を見学に訪れた時、昼食を海岸の料理屋に招待された。ここで、とりたてのホヤとウニが出た。ホヤはほとんど臭みがなく、ホヤのうまみだけで、本当にうまかった。

しかし、このような機会は他所では期待できないので、わたしは、「一水」のホヤで満足している。

わたしは、東大の教員時代、学生の実家に招待され外房の九十九里浜で地引網を引いた。たくさんのイワシと小さなサメが捕れた。すぐに造られたイワシの刺身の美味かったこと。こんなうまいイワシには初めて出会った。捕れたてのイワシの塩焼きも食べた。てんぷらも食べた、つみれ汁も頂いた。いずれもうまかった。

ここで食べたイワシの料理は私の今までのイワシの常識を覆した。海の遠い足利市で育った私は、子供のころ普段食べる魚は、目刺しイワシか干したスルメイカであった。目刺しイワシはただ塩辛いだけであった。後年、イワシの刺身、丸焼き、煮魚などを食べる機会が増えたが、外房で食べたイワシに勝るものに会ったことはない。「一水」でも時々イワシが出るが、さすが九十九里浜の捕りたてのイワシに勝るものは出ない。

次の私のお好みはカワハギである。また隣に座っていた稲葉さんが白身の魚の刺身をうまそうに食べていた。私は稲葉さんに「それは何ですか？」と聞いた。「これはカワハギですよ」という答えが返ってきた。「カワハギは肝をワサビにといて、これに刺身をつけて食べるとうまいですよ。」「ただし、体にはあまり良くないようですよ。脂肪が多いですから。」

私はこれを聞いて早速肝付きのカワハギの刺身を注文

して食べた。確かにうまい。カワハギのあるときはかならず頼むようになった。いまのところ肝付きのカワハギが体に良いか悪いかわからない。

稲葉さんは、銀行を停年退職したばかりなので現在60歳ではないかと思う。本人の話によれば、成人病の気があるので脂肪分を遠ざけなければならないのだが、うまいものがあるとつい注文してしまうと、嘆いている。私も同じ気持ちである。

「一水」に行くようになって初めての知り合いは、国正先生である。国正先生は私の前任の足利工業大学の学長である。どうやらカウンターの左端の席が定席である。どちらかというと寡黙な方であるが、お酒はお好きなようである。当時私は同じ学校法人の短期大学の学長をしていたので、法人の所属長会議で同席してお顔は存じ上げていた。それからしばらくして先生は足利工業大学を辞されたので、私はその後をおそった。

つぎに「一水」のマスターに紹介されて知り合ったのは、高橋さんである。高橋さんは兄弟で経営しているタイヤ販売会社の専務である。人柄がよく、マスターをはじめとして常連の客に信頼されている。高橋さんの息子が高校三年生であるのを聞いて、私は高橋さんに足利工業大学に入学させることを勧めた。優秀な息子さんでサッカーが好きな好青年である。足利工業大学を優秀な成績で卒業して、良い会社に勤めている。

高橋さんはときどき私にビールを差し入れてくれる。私は恐縮してお返しをしているが、マスターは「お返しはいらないのではないですか」と忠告してくれる。いずれにしても高橋さんは「一水」における良き友である。

本名松本、通称まっちゃんは皆に好かれている「一水」の常連客である。私とっては同病相哀れむ若き友である。まっちゃんは痛風の経験者で尿酸低下薬ザイロリックの常用者である。わたしもザイロリックの常用者であるが、まだ通風の発作を起こしたことはない。最近尿酸値が上がってきて、ザイロリックの服用量を1日1錠から2錠に上げた。

わたしは、今年の4月に大学の勤めを終えたが、老後の健康のために孫とテニスをやろうと思っていた。そして、4月5日の足利工業大学の花見のときに孫とテニスをした。小学生と思って馬鹿にしていたら、意外とうまい。こちらも真剣になった。すると、ふくらはぎにぴり!と痛みが走り、肉離れを起こしてしまった。

年とってからの怪我は治りが遅い。しばらくびっこを引いていた。いまでも肉離れを起こした左足のふくらはぎは右足のそれより太く、筋肉は硬い。ときどき自分でマッサージしている。

そのご、「一水」で隣に座ったまっちゃんが足首に包帯をしているのを見た。聞けばつまずいて足首をねん挫したのことである。痛いらしい。まっちゃんと私は同病

を起こしやすい運命にあるのかとおもった。わたしは時々足の指をドアや柱の角にぶつけて痛い思いをする。年のせいかと思っていたが、まっちゃんも同様のことがあるらしい。やはり似た性質があるのかと思った。

児玉さんも気の置けない常連客である。顔が足利11代藩主戸田忠武さんと似ている。そんなこともあって親しみを覚え、よく話をするようになったのかもしれない。ちなみに、戸田さんは足利花火大会の審査委員で、年に一回お会いする。気さくな方で、審査員席では隣に座っておられていろいろなお話をする。

児玉さんは、知り合ったときはカウンターの外の席で隣り合ったが、いつの間にかカウンターの内側にいてマスターの手伝いをすることが多くなった。時々お酒やビールを持ってきてくれたり、魚を運んだりしてくれる。戸田の殿様にサービスされているような錯覚を起こし、妙な気もちになることがある。

福内先生は足利日赤病院の院長であった。足利に在任した期間は数年間でそれほど長くはなかったが、時々お会いした。ひとつは足利短期大学の入学式や卒業式の時である。足利日赤病院は足利短期大学の隣にあり、足利短期大学の看護学科の学生の実習病院である。そんな関係もあり、足利日赤病院の院長先生は足利短期大学の入学式と卒業式では挨拶をされる。ありがたいことである。

もう一つは、足利日赤病院の院長さんは足利警察官友の会の会長さんでもある。警察官友の会は会員資格が厳重で会員数は50人であり、入会審査が厳重である。悪い人は会員になれないといわれている。不肖私も警察官友の会の会員に推され、悪い人でないことを保証されている。

足利警察官友の会では、わたしは多くの良き師良き友を得た。時々出てくるオリンピックチャンピオンの小幡洋次郎さん、足利ガス社長で栃木県公安委員をした石川尚志さん、谷二郎先生、元足利日赤病院院長奈良昌治先生などである。奈良先生の後任として、福内先生が足利警察官友の会の会長になられた。

福内先生はスマートなジェントルマンである。慶応大学医学部の教授から前足利日赤病院院長奈良先生の推薦で足利日赤病院の院長に赴任してこられた。外形に似合わず気さくな方で、気兼ねなくお付き合いができた。赴任されてから間もなく「一水」でお会いした。隣のマンションに単身赴任しておられたので近くの飲み屋ということで「一水」に来られたのだと思う。その後数回「一水」でお会いしたが、そのごあまり「一水」では見かけなくなった。そのご福内先生に誘われて足利で一、二を争う料亭で二人で飲んだことがあった。私のほうから頼んで割り勘にしてもらった。

「一水」に顔を見せなくなったのは、お医者さんの仲間たちがもっと高級なところに連れて行ってしまったか

らではないかと、私は思っている。福内先生も今年定年で足利日赤病院を引退され、東京に帰られた。その後のご挨拶状によると、東京信濃町にある奥さまが経営する福内病院で専門の分野を担当される由である。

遠藤さんは、「一水」では店に来る時間が早く、私とカウンターの右端の特等席を争う仲である。正確にはわからないが、商売は自動洗濯機と乾燥機の運営で、「一水」に飲みに来る前に仕事場に行って機械の管理の一仕事をしてくるらしい。そして自転車で「一水」の開店時間5時ちょうどにやってくる。

私と同じ白髪頭で、笑うと笑顔が素晴らしい。しかし時々酒は飲まないでウーロン茶で済ませることがある。なにか健康上の問題があるらしく、ときどき医者に行って診断を受けているらしい。しかし、話をしていると深刻な病気を抱えているとは思えない話しぶりである。

さてここで「一水」の主役であるマスターこと石原さんを紹介しなければならない。石原さんは隣町桐生市に住み、お兄さんは桐生で同じような店を経営しているそうである。おそらく足利の店と同じように、新鮮なうまい魚を安く提供しているのであろう。

足利の「一水」は、マスターと奥さんと娘さんの3人で運営していた。そのうちに娘さんが結婚して手不足になった。そこで常連客であった児玉さんがカウンターの中に入り、手伝うようになった。最近ではさらに板前さんが一人増えた。「一水」は評判がよく、お客が絶えない。8時ころ行くと満員で入れないこともある。

私は年とともに酒に弱くなり、また足利に行くのも週2回と少なくなった。「一水」とも疎遠になりつつある。常連の客も年をとり引退する人も増えるが、その代わり若い新しい客も増えると思う。まじめにやっている「一水」はマスターが引退するまでは繁昌が続くであろう。

青春彷徨(四)

出会い

伊治哲

――それにしてもあの時代、よく働いたものだ。多少の疑問をもちながらも、月末だからといって日曜日にも出勤し、年末だからといっては徹夜でソロバンを弾いた。支店の業績は飛躍的に伸びた。目先の数字に一喜一憂する一人前の(?)銀行員に育っていった。

あれからもう半世紀も経ってしまった――

修平が遠い日の思い出に浸っているうちに、十一月六日、彼女との約束の日がきた。ひょっとすると今日、五十年前を偲ぶ青春回顧の日になるかもしれない。修平は洗い流されていった青春に、もう一度舞い戻るような期待に胸をふくらませた。

夕方から冷たい木枯らしが吹きはじめていた。夕暮どきの六時すこし前、修平は桜木町のガード下で、風を遮るようにしてタバコに火をつけた。年甲斐もない気持の昂ぶりを静めようとしたのだった。

六時ちょうど、指定されたホテルのロビーに立った。高層ビルのホテルにしては意外に狭い。三、四人の客が人待ち顔で、立ったり座ったりしている。修平は一人ひとりの顔をチラッと盗み見して品定めをした。異性との逢瀬というのはこんなものだったのかと、ちょっと照れくさい感覚を覚えた。

と、その中の一人の女性が声をかけてきた。

「どなたかお待ちでしょうか?」

「ハア・・・」

「失礼ですが、舘さんじゃありませんか?」

「アッ、加藤レイコさん、いや、ナガタさんですか?」

「ああよかった。入ってらっしゃった時から気がつい

ていたんです。でもひょっとして人違いだったら・・・と思って。わたし、永田玲子です」

〈やっぱりこの人だ。写真で想像していたとおりの人だった〉

と思いながら、上から下までサッと日を配った。彼女は薄グリーンの品のよいスーツに身を包んでいる。やはり往年の"佳人"だった。

「これは失礼しました。先日電話をいただいた舘修平です。お久しぶりです」

「わたし、分りまして？　思い出してもらえたかしら？　すっかり歳をとって・・・お恥かしいです。それにしても、舘さんはお変わりありませんのねえ」

「いやいや、同じですよ。あの頃から五十年、平等に歳をくっています。私も貴女のお顔はおよそ見当をつけていました。でも、もう少し様子をうかがってからにしようと思って・・・」

まわりの客がそれとなく二人の出会いを見つめているような視線を感じた。

挨拶もそこそこに、二人は申し合わせたようにホテルの中のレストランに足を運んだ。時間が早いのか、客は数えるくらいである。ボーイが気をきかせて、窓際の隅のテーブルに導いた。

"みなとみらい"地区の、いくつもの高層ビルから洩れる窓の光が、無数の真珠を散りばめたように海にきらめいている。

窓から見える港の景色に一瞥を投げただけで、傍らのウエートレスに食事のオーダーもしないうちに、彼女はバッグの中から数枚の写真を取り出した。

「舘さん、これです。この写真を見てください。昭和三三年ごろだったと思います。コーラスグループで知多半島の時志観音へコーラス・ハイクに行きましたよね。その時の写真ですよ。

これが舘さん、これがわたし。ホラ、K君もHさんもいますでしょう。みんな楽しそうに歌っているでしょう」

「本当だ。懐かしい写真ですねえ。この頃は今のようにテレビもないし、テーマパークもなかったけど、自分たちの手で若さを楽しんでいたんだなあ。みんないい顔をしていますよ。でも、写真に写っている一人ひとりの顔は思い出せても名前が出てこない・・・」

「わたしはほとんどの方を覚えています。銀行の小さな診療所がわたしの唯一の職場でしたから。市内だけでなく、郊外の支店からも、いろんな方が診察にいらしたでしょう。病院勤務と違ってみんな友達になりましたわ。お給料がちょっと安かったけど・・・。でも、とっても楽しかった、辛い思いをしたことはありませんでした」

「そうでしたか。あの頃は銀行もまだ苦しいときだったのでしょうね。ところで、今でもこの頃の人たちとお付き合いしています？」

「銀行をやめてからしばらくは、皆でよく集まってお喋りしてましたけど、今はHさんだけ。それも連絡は取り合っているのですが、わたしが名古屋を離れてしまったのでなかなか会えません。他の方たちとも離ればなれになってご縁が切れてしまって・・・。医師のS先生は大分前に亡くなられました。残念ですわ」

「そう。"一期一会""会者定離"・・・全くそのとおりだなあ」

「舘さん、いつも思うんですが、なぜ『ドングリ』コーラスだったんですか？誰いうとなく『ドングリ』の名がついたのでしょうか？　それともわたしたち、ドングリのようだったのでしょうか？」

「なぜだったんでしょう、私も思い出せません・・・。でもいいネーミングでしょう？」

「あの頃、ほとんど毎日、仕事が終ると三々五々会議室に集まって声を合わせましたね。そう、お天気の良い日は、支店の屋上で歌ったこともありました。舘さんがタクトを振って・・・。

そういえば、歌集も用意してもらいましたよ。惜しいことになくしてしまいましたが」

「少しづつ思い出してきました。ピアノがなかったから、たしか調子笛で音程をあわせましたよ。そのうちに輪唱や二部合唱も歌えるようになった。貴女のソプラノが素晴らしかったのを覚えています。歌集はねえ・・・」

と言って、修平はこんな思い出話をした。

〈お金がなかったから手作りの小さな歌集を作った。日曜日になると、自宅で机に向かい、生れたばかりの赤ん坊をあやしながら、ガリ版を切った。五線譜を引いてその上にオタマジャクシを並べていった。下段に歌詞を書いた。銀行に持っていって、仕事の合間に謄写版で印刷する。手間ひまかかったが、それでも薄緑表紙の小さな歌集が出来上がったときは嬉しかった。それをみんなに配ったら、飛び上がって喜んでくれたことを覚えている〉

〈最初のページはテーマソングの「どんぐりころころ、どんぐりこ」、それに「母さんは夜なべして、手袋編んでくれた」（母さんの歌）「静かな静かな里の秋」（里の秋）などだった。「夕やけこやけ」や「月の砂漠」、「みかんの花咲く丘」などの童謡、そして「野ばら」「麦畑」「カチューシャ」など西洋歌曲も選んだ〉

しかし、コーラスを始めたきっかけや『ドングリ』の名前については、「当時盛んだった、関鑑子の『うたごえ運動』に刺激を受けたからだったと思いますよ。そして・・・歌うことは好きでも、合唱となるとみんな"ドングリの背くらべ"だったからかな・・・？」

と言って、修平自身の『ドングリ』に秘めた過去の苦いいきさつには触れなかった。

話が弾んで、彼女は幼い頃の遠い思い出を話し始めた。

〈彼女は満州からの引揚者だった。父の仕事の関係で、小学校二年生の時一家で満州（中国東北部）に渡った。予想もしなかった敗戦のため、三年後に母と妹と三人、着の身着のまま、やっとの思いで日本の土を踏んだが、満州での最初の二年間はそれはそれは恵まれた生活だった。

しかし、“王道楽土”“五族協和”という満州建国の旗印とは裏腹に、本当は日本人が現地の人を牛馬のように酷使していた。今では誰も口を閉ざして語りたがらないが、あの頃の遺恨が、戦後から今に続く反日、抗日につながっているのかもしれない。

わたしたち三人は幸いにも、父が使用人に温情をかけていたおかげで、生死を分ける逃避行のなかで彼らにかくまってもらい、辛うじて難を免れることができた。しかし、その後父はなんの手がかりもないまま、とうとう帰ってこなかった・・・。

国や民族を隔てても、互いに手をとり合って仲良くすることがどんなに大切か、子供心にも痛いほど分った。

“国敗れて山河あり”というが、帰り着いた日本の山河は、戦火で焼けただれたとはいえ、まだまだ緑濃く、美しかった。やっと故郷の山ふところに抱かれることができたと実感したものだ。

しかし戦後の生活は苦しかった。そんななかで、母は女手ひとつでわたしたち二人の娘をなんとか一人前になるまでに育て上げてくれた。

引揚げから十年も経った後銀行に職を得たが、その銀行で、なにもかも忘れて大きな声で懐かしい童謡を合唱できるなんて予想もしなかった。夢を見ているように嬉しかった。みんな満州で母が教えてくれた歌だった。その母も数年前に旅立ってしまったが・・・〉

彼女は目をうるませて、遥か昔を思い返しながら熱っぽく語った。過去の辛い記憶を一気に吐き出してしまいたかったのであろうか。あるいは、コーラスのおかげで、過去の憂いから救われたとでも言いたかったのであろうか。

修平は、自分と同じような年頃なのに、全く未知の世界でそんな苦しい経験をしてきた彼女が、年を経て今ここで自分と一緒にいること自体が、不思議に思えてならなかった。そして、少しでも彼女の心を慰めようと焦ったが、言葉が出てこなかった。

「それは大変な苦労をしたのですね。あなたたち、母と子三人はお父さんが救ってくれたのですねえ。お父さんが帰ってこられなかったのが本当に残念です。でもご両親のおかげで今こうして幸せを掴んでいらっしゃるのだから、きっとご両親も喜んでいらっしゃるのではないでしょうか。そうですよ。きっとそうですよ」

彼女はやっと憂いから覚めたように笑顔を見せた。

「ところで今は・・・？　金沢にお住いですって・・・？」

「二十七歳のとき、やっと夫にめぐり会いました。大学病院の医師でした。金沢に移って漸く教授になり、今は退官して後進の指導に当っています。戦後の苦しみにくらべれば、夢をみているように幸せです。

ただ、北陸は曇りや雨が多くて・・・。晴れマークの東海地方が羨ましいわ。金沢が好きな舘さんには悪いけど・・・」

「うん、たしかにね。弁当忘れても傘忘れるなっていうんだから・・・。

でも、そんな風土が高名な文豪や思想家を生んだのですよ。室生犀星や泉鏡花、徳田秋声、井上靖、それに西田幾太郎や鈴木大拙など数え切れないくらいです。金箔や陶器、漆器、加賀友禅などの伝統工芸、加賀料理や和菓子の繊細な味など、貴女たち金沢の人の生活に染みこんでいるんじゃありません？　私は、やっぱり陰影の濃い金沢の自然が好きだなあ・・・」

修平のすこし堅苦しい話を上の空で聞いているようだった彼女が、急に改まった口調に変った。ちょっと俯きかげんに、口ごもった。

「舘さん、本当はね・・、わたし・・、あの頃・・、舘さんのような男の人に憧れていたんです。外見はちょっと怖いけど、接しているうちになんとなく懐かしさのような温もりがにじみ出て、それにどことなく憂いを湛えている人。そんな人に思えたのです。でも、あの頃、もう奥さんも子供さんもいらっしゃると聞いて、ちょっとがっかりしたわ。今になってこんなことを言ってご免なさい。そんな女がいたということだけ知ってほしかったの。今だから白状できるのかもしれないわね」

彼女はたどたどしくそれだけ言って口をつぐんだ。修平の方が虚を衝かれて驚いた。咄嗟の答えに窮した。

「エッ？　そんなことがあったんですか。私は貴女が考えたほどの人間じゃありませんよ。しかし、もう少し早く知り合っていたら、お互いまた別の人生が拓けたかも知れませんね・・・。いや、冗談はよして、あなたは今最高の幸せを掴んでいるんだから・・・。人生、なにが幸いするか分らないですよね」

修平自信、言っていることが支離滅裂で、なにを言おうとしているのか自分でも分らなかった。

しばらく、沈黙が流れた。

「アラ、もうこんな時間だわ」

彼女は胸のつかえが吹っ切れたように、急にソプラノの高い声をあげた。

話に夢中になって時間の経つのを忘れていた。店内は修平たち二人だけになっていた。

テーブルの上の食事は半分も手をつけていない。二人とも、まだ話したりない気がしたが、後片付けを始めたボーイの様子を見て、渋々腰を上げた。

「今日はお呼び立てしてご迷惑をおかけしました。なんだかわたしばかりがお喋りしたようでご免なさい。次の機会には舘さんのお話を聞かせてください」

「いえいえ、私の平凡な話をしても興味はないでしょう。恥かしいのですが、実は文字どおりの拙著を持ってきましたので、これを貴女に差し上げます。もし帰りの車中で気が向いたら流し読みでもしてください」

修平は、以前に書いた拙いエッセー集を、ちょっとためらいながら手渡して、そう答えた。

「それはどうも有難うございます。早速今晩から読ませてもらいますわ。きっと舘さんのお考えがいっぱい詰まっているのでしょうね。

でも、また金沢へいらっしゃいますよね。今度はぜひ金沢でお会いしましょう。北の海のお魚はおいしいですから」

「それはいいなあ。ぜひ金沢でおいしい魚を食べましょう。そして、兼六園で、昔歌った童謡を二人で歌いましょう」

「アッ、そうです、そうです。童心にもどって、大きな口をあけて・・・夢みたいですわ」

彼女は屈託なく、喜んで応えた。

「それまでお互い元気でね。ではくれぐれも気をつけてお帰りください」

「今日はどうも有難うございました。寒くなりますからお風邪など惹かれませんように・・・」彼女は別れ際にそう言って、名残り惜しそうに小さく手を振った。

〈修平の遠い昔の苦い思い出、彼女の苦難の逃避行、そして淡い恋心・・・人はみな、口に出せない、さ迷える青春の思い出を抱え込んで、今を生きているのだ。忘れようとして忘れられないが、それを乗りこえた時に未来が開けるのだ。『ドングリ』がいつまでも幸せでありますように・・・〉

そして、

〈この歳になって、若い日のことを思い出させてくれる人がいる。こうしてみると、歳をとるのもまんざら悪くはなさそうだ。今日のような、こんな劇的な出会いがあるのだから・・・〉

修平はそう呟いて、コートの襟を立てた。ホテルの外は少し冷えこんでいたが、木枯らしはいつの間にかおさまっていた。

——おわり

（2008. 11. 6. 記）

「雲」

平山恵敏

一、雷雲

昨秋、サブプライムローン・ショックに端を発した米大手証券会社リーマン・ブラザーズの経営破綻が引き金になり、アッという間に世界同時株安になった。米国の諸問題が他国に飛び火したのだが、膨大な不良債権が表面化されると、マグマが一挙に噴出す如く、我々の資産をも襲ったのである。強欲マネーが実態経済を振り回し、グローバル資本主義が国境を事実上消滅させた。

世界経済は大消費国の米国との輸出で潤っていたが、更にこのショック直前には、巨大マネーを有する投機筋により、石油や鉱物資源だけでなく、穀物までが投機の対象にされて高騰したのも、それを規制・監視するシステムが、確立されていなかったにほかならない。

実体経済が金融マネーに振り回されたのである。

低金利政策の国内投資より、高金利を謳う外貨投資に目を奪われるのは致し方なしとしても、多種多様な金融商品に安全弁はない。半年前は、これほどまでに急転直下に、こんな悲惨な事態に陥るとは露知らず、証券会社の甘言に乗ったのが運の憑き、悔やんでも後の祭りである。愚痴の一つもぼやきたくなる。が、為す術がない。

（虎の子の退職金を、超低金利預金で賄っていては目減りする一方。元本保証はないが、高収入を見込める株や外国投資ファンドで、取らぬ狸の皮算用。これが、とんだ見当違いで、投資額は暴落の憂き目に遭う始末。低迷が長引き、景気が回復しなければ行く末どうなるのだろう？）

更に混迷を深めているのは、米ドルが基軸通貨として信用を失いつつあり、世界中を疑心暗鬼に落としめている。日本は現在米国に次ぐ世界第二位の経済大国にのし上がってきたが、資源は外国に依存せざるを得ず、これまで以上に創造と技術力で外国を凌駕するしかない。

米国を筆頭に輸出で外貨を稼ぎ、優良企業を輩出した。だが、輸出依存構造は、不況で減産を余儀なくされる。

従来、高収益を上げていた超優良企業が円高のダブルパンチを受け、赤字に激変した。我が国を震撼させている急激に襲った不況から抜け出す出口は、未だに見えそうにない。

二、暗雲

世界不況の震源地米国は、負の遺産を山積みしたまま、手詰まりのブッシュを退出させた。選挙中から「チェンジ」を錦の御旗にし、人種差別の壁を取り去った若きオバマ大統領を選出した。なりふり構わず、初の黒人大統領を経済危機対応の救世主として、期待を託したのである。格調高く、分かり易く卓越した弁舌に説得力、スピード感ある実行力は、出足は概ね好感を持って見守られている。

しかし、まだ日が浅く、成果が出るまでには時間を要し、未知数の不安は拭えない。多くの難問を打破し、成果に繋がらなければ、一挙に失望に変わる危険性が潜む。

が、米国人の陽気で楽天的な国民性と自らが選んだ大統領に、問題を解決してくれそうな希望と期待を抱かせる。とどのつまり、世界は、米国の負った不始末を、自らが立て直す復活頼みなのである。

閉塞感漂う日本のトップと政権は最悪だ。

決断力に欠け、発言が右顧左眄、器も軽い麻生総理は、国民の大半から総スカンにあっている。長期政権与党にしても、官僚主導の政治は旧態依然としており、税金無駄使いに歯止めが掛らない。堕落した与党に、国民の怒りが沸騰している。

（もう自民党にはほとほと愛想が尽きた。一遍、政権を野党に交代させ、腐敗した汚濁や膿を摘出してもらうしかない。でも、民主党に変わっても、腐敗征伐を断行できるだろうか？文句を言う側から実行する立場になると、これまでの糾弾通り、果たして履行できるだろうか？）というのが国民の大半が抱く疑念だ。

生命を賭して、国民に目を向ける政治家が本当にいなくなった。我が身選挙の当選と、党利党略の政治屋オンパレードである。だからといって政治に無関心を装い、批判ばかりしていても埒があかない。

政治不毛の損失は計り知れない。何らか打つ手はないのか。

それには先ず、我々自身が意識を変えなければいけない。国政・地方自治体の行政に関心を持とう。無策や不正があれば文句を言い、監視の眼を持とう。投票権のある者は必ず選挙に行こう。歴史から伝統文化を学び、先人の知恵を生かそう。特に、テレビ・新聞のメディア業界の影響は甚大であり、良識ある報道は社会の窓となる。

公明正大な情報提供は言わずもがな、政治と行政に今以上に厳しくスポットを当て、政治を質す、国民運動の旗手になってもらいたい。

世直しに情熱を燃やす政治家や行政トップには、惜しみない支援と声援を送ろう。

最近の事例では、公務員改革に孤軍奮闘したが適えられず、志なかばで与党を飛び出した渡辺喜美議員や、大阪府の財政再建に奔走し、僅か一年間にして府民八割以上の支持を得ている橋本徹知事らが健闘しているように思う。若ければ善いというものでないが、民に媚びず真摯に情熱を持って行動する為政者に望みを託したい。

三、乱れ雲

さて、我が身の環境といえば、あと二年余で古希を迎える。「危険水域ですよ、何とかしなさい」メタボリックシンドロームそのものと宣告されたのが二年前のこと。

人間ドックで体重七十四キロ、腹囲九十三センチ、血圧上一六五・下九八、総コレストロール二四二を突きつけられる。不摂生のツケが、体内に邪魔物を宿らせてしまった。

戦後、幼少時の食糧難を経て高度成長経済に伴い飽食の生活習慣は、恥ずかしながら治らない。病気予備軍は他人事と高をくくっていたが、ドクターのイエローカードでやっと目覚める。そこで、一念発起したメニューは、

（一）食事は良く噛み、満腹中枢の脳を働かせ腹八分目に抑える。間食を控え、午後八時以降水分以外は口に物を入れない。

（二）ウオーキングマイレージ協会に入会、日、一万歩を目処に歩行数を記録する。

（三）体脂肪付き体重測定器で毎日計測し、減量成果の推移を確認する。

右記三点を励行した結果、成果を得るが課題も残った。

一年後の計測で体重六キロ減、腹囲六センチ減に改善。しかし、総コレストロール二十二悪化、血圧は以前同様変わらず。痩せたことで腹は少しへこみ、このままウオークさえ続けていれば、健康は大丈夫と決め込む。

昨年七月のドックで、看護士から「一年間よくがんばりましたね！」と褒めて貰い、メタボから完全脱皮しないまでも体型がスリムになったし、

（まあ、このままの調子でいいか）

勝手気ままな判断に、まさか落とし穴が待ち受けていようとは・・・・・・・。

忘れもしない昨年九月十七日の昼食後、しばらく寝そべって本を読み、いつものようにウオークに身を起こそうとした瞬間、突如経験した事のない強烈な目眩に襲わ

れる。しばらく横になっていたが、脂汗がたらたら流れ落ちて吐き気がしてくる。三十分以上経っても治まる気配が無く、

（やばい、ひょっとしたら脳梗塞かも?）

不安がよぎる。女房に「おぉ〜い、ちょっと来てくれぇ〜」か細い声を発して助けを求める。

こんな状態になっていようとは知る由もない女房「用事しているのに何ッ」と渋々二階に上がってくる。

ベッドに蹲り真青に苦痛にゆがむ顔を見て

（これはやばい、何で?）

困惑に変貌。娘も加わり、しばらく様子をのぞき見ていたが、回復の兆しがないので心配になったらしく、意を決し「救急車、呼びますよ」に、「頼む」と恥も外聞も捨てざるを得ないていたらく。

待つこと十分、救急車に娘が同乗、近くの総合病院に運ばれる。点滴注入、血液・血圧（上二〇〇・下一二〇）・CT・心電図の検査を矢継ぎ早に受ける。

小一時間が過ぎ、漸く目眩が治まって落ち着きを取戻した。四日間の入院で、目眩の原因は見当たらず、医師は高血圧に問題があるのでは?で決着。

帰宅後、町内の主治医に顛末を説明したところ、血圧降下剤とコレストロール改善の治療薬の投与となる。

そして半年後の今、目眩は一度も起きず、血圧はほぼ標準値内に治まっており、コレストロールは一六五に改善している。

四、青雲

十二年前、我が家から七キロ程の所に、明石海峡大橋が開通した。架橋新設に連結した、東洋一の垂水ジャンクションも至近距離にある。ジャンクション周辺の整地に際して、運動場や公園が新設され、広大な健康公園には、多目的器具が設置された。市民が憩い、健康を後押しする好環境を提供されても、活用することはなかった。

新年を迎え、先ず健康あっての今後の人生、身体に不具合が発生した昨年を反省し、

『健康な心は健康な体に宿る』と言うが逆も真なり、健康な体が優先ではないのか。

従来のやり方に工夫が必要ではないか――――。

思い付いたのが、公園にある器具の活用方法である。

毎朝八時、仲間数十人と四年前からやっている太極拳を済ませたあと、ウオーキングを兼ね、ウオークマンを聴きながらの公園通いが始まる。今更ウオークマン云々は時代遅れな話だが、五百曲数程内蔵でき、左右イヤーピースからステレオモードで聴ける。

左程関心を示さなかった音楽に、友人からCDを分けてもらって聴くうちに感化され、次第にのめりこんで行った。CDをPCから転送してウオークマンに取り込み、いろんなジャンルの好きな曲を聴く。

屋外で奏でる音楽は、単純に歩くだけの行為に背中を押してくれ、従来に無かった心に潤いを、癒しを醸してくれるようになる。

公園で鉄棒にぶら下がり、背筋と握力を鍛える。

ベンチに仰向けになって腹筋運動を、うつ伏せになり腕立て臥せを、数回分けて行う。筋力の増強はゴルフ好きの私に、加齢と共に飛距離が落ちる歯止めになりはしないか?淡い期待を抱かせてくれる。

メタボ改善の目的で遣りだしたことが、意外な光景を見出す。ベンチで仰向けに寝ころぶと視界には、空に浮かぶ雲が開ける。日頃、空模様を気にするぐらいにしか見ない雲をぼんやり眺めていれば、不思議な空間へいざなってくれるのだ。それも毎日眺めれば、生き物のように絶えず動いていく形が神秘で、ひとつとして同じ形をした雲はない。時折、トンビが気持良さそうに羽を広げ空中遊泳する様と相まって、

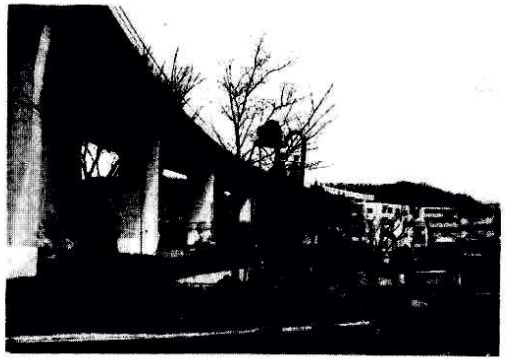
（何と己の見ていた世界の小さかったことよ。こせこせと過して来たのが、惨めでみっともないように思える。雲のように、もっと自然体で悠々と生きろよ!）と。

低く一面に垂れ込める灰色の雲は憂鬱だが、青空を流れてゆく雲は、自由気侭で一点の曇りもない。

雲は、多種多様な姿を見せてくれるので、人の気持を投影する身近な存在でもある。

得てして「雲をつかむような」「暗雲が立ち込める」「雲が晴れる」「雲を霞と逃げる」というように、雲をまるで悪者扱いに使う表現が多い。

人間の営みが如何様に変わり、世間の風向きが好・不況であろうと泰然自若として、雲は、未来永劫不変であり続ける。生ある限り自分もかくありたいものだ。



あじさい公園

桐の花影
——吉良側の忠臣蔵余話（三）——

忠内正之

『桂川籠花入』

（一）はじめに

桂川籠花入（縮めて"桂籠"と言う）は、それが持つ特に秀れた姿形と伝来を有することにより名物と呼ばれる茶道具の一つである。

茶席に使われる茶道具は極めて多種、多様である。それらの中で最も重要とされるものは何と言っても高僧などの墨蹟による、床の間の掛物である。

その掛物をひき立てるのは、花及び花入（花生とも言う）である。花入の種類は金物、陶磁器、木工竹がある。木工竹の花入の中で籠花入は唐物が本命で、格調高いものとされて来た。

桂籠の花入は之に対し和物の出自で、わびた茶の心にかなった親しみのもてる名品と言える。茶道の変遷の流れの中で、わび茶を更に指向し完成させ続けた利休の考案によって見立てられた簡素美の極点である。

桂籠は現在香雪美術館に収蔵されている。以下先づ同美術館の解説を紹介しよう。

千利休（一五二二—九一）が桂川辺でたまたま漁夫の腰にひき下げられた魚籠に興趣を感じて貰い受け、環をつけて花入に仕立てたのである。

その後千家二代少庵、三代宗旦と伝えられ、更に宗旦から愛弟子宗徧がこれを譲り受けた。宗徧は受筒をつくり、箱書きをして愛蔵



桂　籠

したが、話題はこのあとに起った。

即ち折しも赤穂義士の討ち入りが起こり、この花入が吉良上野介の首級の代役を勤めたと言うのである。つまり本物の首はひそかに舟で品川へ送られ、泉岳寺に届けられた。代わりにこの籠が布に包まれて槍にさされ、一行は意気揚々と引き揚げたと言う訳で、底部正面に槍疵のあることがこれを実証している。

利休は少し変形のある特徴に目を付けた訳であるが、更に話題を加えたものであると、坂本周齋（同時代の茶人、宗徧の弟子）は自著「千家中興名物記」に記載している。

以上が香雪美術館の説明である。桂籠は常設展示では無くまた同館は春秋二季の開館であるため、拝観する機会が少ない。

吉良上野介の首級代わりとされた云々という件は巷間の伝説となっており吉良側に立つ筆者としてまた茶道に関心をもつ人間として、到底等閑に出来ない想で一杯である。

（二）千宗旦

日本における茶道の歴史は建久二年（一一九一）中国から「栄西禅師」と言う臨済宗の僧が抹茶をもたらしたのが始まりといわれている。

その後、室町時代には足利将軍の「書院のお茶」があり、「村田珠光」が「わび茶」を創り、次いで「武野紹鷗」が継ぎ、「千利休」が完成した。

室町時代の書院のお茶が装飾的・儀式的なものだったのに対し、戦国の世に利休が確立したのが、精神性を重んじ、余分な要素を徹底的に削ぎ落したわび茶であった。ただし利休の精神性は極めて哲学的で頗る難解でもあった。

そのわび茶にさらに興味深い多くの要素を加え発展させたのが「古田織部」、「小堀遠洲」であった。

また利休の挫折後沈滞していた千家も二代「少庵」、三代「宗旦」の時期には徳川幕府の庇護によって復活し茶道界の中心となった。

一方で幕藩体制の安定と経済の発展につれて町家、商人の台頭も目覚ましく茶道への積極的な参加があって大衆化が進んだ。利休の指向する茶道とはやや違った方向であったかも知れないが大きく発展した。

茶人の師から弟子へ、またその弟子へと系譜はひろがりを見せ、茶道は職業の階層を越えて多くの人達に親しまれていった。

発展する茶道界の中心となったのは矢張り千家である。殊にこの時期千家を復興する原動力となったのは宗旦である。

千宗旦（一五七八―一六五八）は利休の孫で二代目少庵の長男として生まれる。一説に道安の子とも。

十歳で大徳寺に入り「春屋宗園」の許で修業した。帰家して父少庵と共に不審庵を再建し、「千家」の再興を果した。しかし、祖父千利休の末期を考えて一生仕官をしなかった。

このため清貧に甘んじ、わび茶に徹した茶風を確立した。茶禅一味と提唱し「乞食宗旦」の異名をとりながらその茶名は揺るがぬものとなった。余談だが同時代の大名茶人金森宗和はその上品だが華やかな茶風から宗旦に対比して「姫宗和」と呼ばれた。

宗旦は我子三人を夫々「表千家」、「裏千家」、「武者小路千家」と独立、仕官させ千家茶の湯の安泰を計った。

指導した弟子たちも数多く育った。中でも「山田宗徧」、「三宅亡羊」、「松尾宗二」、「藤村庸軒」、「杉木普斉」等は後世に名を残す茶人となった。

「吉良上野介義央」もまた宗旦に弟子入りして茶人としての素養を身につけていたのである。寛文二年父「義冬」と共に初めて上洛した。その頃入門して事後上洛の都度教えを乞うた。従って宗徧とはその頃からの相弟子である。

さて、次に宗徧に移ろう。

（三）山田宗徧

宗旦のすぐれた門人の中でも、最もよく宗旦の偉業を世に伝えたのが「山田宗徧」（一六二七―一七〇八）である。宗徧流「不審庵山田家」は現在「幽々斉宗徧」が十一代を継ぎ盛大である。

初代宗徧の八十年余の永い生涯はこれを三つの時代に区分することが出来る。

第一は、その生誕から京都在住の時代。即ち、京都二本松、眞宗東本願寺派の長徳寺に生まれ、若くして千宗旦の門に入り、茶匠として独立してから宗旦の推薦で三州吉田（現在の豊橋市）の小笠原家に仕官するまでの時代。この間二十九年

第二は、小笠原家の茶頭として仕えた三州吉田の時代。この間四十二年。

第三は、江戸において円熟した茶風を広めた時代。この間十一年。

小笠原家に仕官するまでの京都二十九年間は日々勉学にいそしんだ研鑽の時期である。始め小堀遠州に師事したと言われるが、のち師宗旦のもとで眞摯に仕えた十余年間は宗徧にとって最も価値のある修業の時期であった。

明暦元年（一六五五）宗徧は三州吉田に赴任して小笠原家の茶頭となり三十石五人扶持、百石格としての待遇を与えられた。（なお小笠原流礼式の始祖は当家の本家筋にあたる）

宗徧は「常によく藩侯の意を体して、茶道の弊風を矯め、眞の和敬清寂の大風流を唱えた」と言われ、また「非常な傑人」として藩内の尊敬を集めた。

元禄十年（一六九七）、小笠原長重侯が幕府老中に任ぜられ、武州岩槻への国替えとなった。時に宗徧は七十一歳これを転機として官を辞し、自由な身となり江戸へ下向することになった。

宗徧が江戸へ下ってからも、東海道の各地は三州吉田をはじめとして武家社会、町人社会に"宗徧流の茶"は続き、今日もその流れは済々として生きていると言う。

宗徧は小笠原家茶頭の役職を二世「宗引」に譲って江戸に出た。

七十一歳の高齢ではあったが心身共に壮健であった宗徧は、元禄文化が絢爛と花開いた大江戸の市井の中にあって茶境の完成を遂げたのである。

余談だが、当時流行しつつあった歌舞伎狂言に渋い味わいを添えたのが河東節浄瑠璃であった。その江戸で"歌は河東に茶は宗徧……"と言うはやり言葉があった。宗徧の茶は評判が高く江戸市中に流行したのである。

河東節は「十寸見河東」と言う人が始めた江戸浄瑠璃で、蔵前の札差しの旦那衆らが、こぞって宗徧の茶とともに嗜んだものである。

宗徧は隅田川のほとりの本所二つ目の地に庵を結んだ。そこは両国橋が近く、橋の手前の右側には回向院、左側には深川八幡の広場があり、薬師、長福寺、稲荷神社などが並んでいた。

吉良上野介は刃傷事件以後お役御免を願い出て呉服橋の邸を返上して本所に替地を命ぜられ、元禄十四年八月に移住した。本所松坂町の吉良邸は宗徧の庵の近くだった。

既に述べた通り、上野介は若い頃京洛に上って、千宗旦に茶の教えを受けていた。したがって相弟子の宗徧とは親しかった。更に上野介の領地三州吉良と宗徧が仕官した吉田（豊橋）と近接していたこともあって両者は壮年のころから縁故が深かった。それ故江戸に出てからも、宗徧はしばしば吉良家の茶事の相談に応じていた。

（四）討入日事情

元禄十五年の末頃になると、赤穂浪士の面々は、上野介が屋敷に在宅する日時さえはっきりすればいつなりとも討入り出来る態勢が整っていた。

否、江戸滞在費の窮乏や、相次ぐ脱落者の出現等があってモラールダウンの恐れから最早討入り断行以外ないと切羽詰まった状態になっていたのである。

元禄十五年十二月十四日、本所の吉良屋敷では年納めの茶会が開かれることになった。

茶会ならば亭主の上野介は必らず在宅する筈であり絶好のチャンスがあった。

当日吉良屋敷では予定通り茶会が開かれ夜間に及ぶ饗宴も終わりみな疲れきって寝静まったころ、大名火消を装った四十七人の武装集団が人気のない江戸の町を疾駆していた。

結果は知られる通りであるが、キッカケとなった茶会開催日の貴重な情報はどの様にして大石側にもたらされたのであろうか。

当時、宗偏の門人に「中島五郎作」という京橋三十間堀に店を構える豪商がいた。大石内蔵助はかねてこの人物と昵懇であった。大石は五郎作が吉良家に出入りのある事を知り、上野介の動静について五郎作から何らかの手がかりを得たいと望んでいた。ある日偶然大石はこの五郎作の家で、旧知の京都伏見稲荷の社家「羽倉斎」にめぐり逢った。それは五郎作が自分の家作で羽倉斎の面倒を見ていたからである。

羽倉斎は、のちに国学の四大人に数えられる荷田春満である。

斎は「霊元天皇」の皇子「妙法院宮」に歌道・国学の師として仕え、勅使「大炊御門」大納言に従って江戸へ下向したままにとどまっていたのである。大炊御門家は吉良氏の旧来からの親類でもあった。

五郎作は時として宗偏に従って吉良邸での茶会に拓かれていたし、斎も吉良家に出入して、「義周」や家老の「松原多仲」等に歌や国学の講義など行っていたので二人はともに上野介の身辺には通じていた。

しかし大石はこの二人に自分の本意を打明けることも出来ず、上野介の動静をつかむことは容易ではなかった。大石は一計を案じて、同志のうちで風流人であり、言動も機敏な「大高源五」を選び、京の呉服屋、「脇屋新兵衛」と触れ込み五郎作の斡旋によって宗偏に入門させることに成功した。そして十二月初の茶会は正客の都合により延引されたが、結局十四日に決まったということが判明したのである。一方で用心深い大石は一族の「大石三平」を通じて中島五郎作からも情報を得て確信するに至った。五郎作の情報は斎からもたらされたものである。

十四日の昼時分、新兵衛（源五）はもう一度宗偏の庵居を訪ねたが、すでに宗偏は準備のため吉良邸へ出向いたあとであった。念のため源五は同志の者に吉良邸の門前で見張りさせ、宗偏が門内に入るのを確認したとも言われている。

かくして、その十四日の深夜、雪中での討入りが決行

され、世に謂う"元禄の快挙"（？）が遂げられた。

本懐を果たした義士たちは、あげた上野介の首級を舟で品川泉岳寺へ送り、引上げの道中は吉良邸の水屋（茶室の台所）にあった桂籠を源五が持ち出し、血汐をにじませた白布に包んで槍に刺しかざして、上野介の首級に擬したと伝えられる。上杉家の追討を配慮しての処置であった。

この桂籠が、本稿のテーマとなる花入である。かねて宗旦から宗偏に贈られた利休所持銘"桂川"の名品で、上野介の求めに応じて宗偏が贈り、当夜の茶会に使用したものと言われている。

ここで筆者は一つ疑問を呈したい。それは以下に述べる通り、即ち籠花入は夏中心の道具である。如何に名品と雖も真冬の旧暦十二月に使用されたかどうか疑わしい。茶道では季節性を特に重んずるからである。名品なるが故に格別に希望があって当日の目玉として拝観にのみ供したとすれば理解出来るのであるが。

名品流転の例に洩れず、桂籠はその後宗偏の高弟「坂本周斎」（一六六八―一七四九）の手に亘り、廻り廻って昭和初年朝日新聞社主「村山玄庵」、号"香雪"の所有する処となった。

昭和四十八年香雪美術館が設立され収蔵品となった。以降時折り展示される由である。筆者はまだ実物は拝観出来ないでいるが、もし許されるならば籠に附着しているであろう血液を現代の技術で分析して見たら面白かろうにと言いたいが、「無風流な奴」と蔑まれるのがオチであろう。

（五）追　録

大高源五は石高二十石五人扶持の軽輩ながら赤穂義士中の逸材であり、また俳人「子葉」としても多くの名句を残している。

討入り後の泉岳寺では"山をさく力も折れて松の雪"と書いている。山田宗偏家には、子葉作「無節の茶杓」に"人切れば己れも死なねばならぬなり"と筒書きしたものが残されていると言う。

吉良家の家老職をつとめていた「小林平八郎」は、剣の達人であったが宗偏に茶を学んだ風流の士でもあった。浅野家断絶について、ひそかに同情を寄せ常々上野介に幕府の職を辞して謹慎するよう諫言もし、宗偏とは気心が通じ合っていた。十四日の討入りの夜は奇襲され、剣豪も不覚をとって早々と討たれてしまった。ある作家によると、かねてより浪士等に対し戦意を持たず、自分の刀の刃を潰していたというが穿ち過ぎであろう。

この小林平八郎が愛蔵した歌銘「山桜」の茶入が山田家に現存している。この茶入は古瀬戸金華山窯の広沢手

な上杉家の白金屋敷の富子のもとを山田宗偏が訪れた。義央と富子を結びつけた月下氷人は実は宗偏であった。宗偏への信頼度は極めて厚く、長年吉良家のみならず上杉家にも茶頭として出入りしていたのである。

宗偏は不用意に茶会の情報を洩らしてしまった事を素直に詫びた。富子は今となっては悪意の無かった宗偏を許す気持になっていた。

しかし吉良の様子を探ろうとする大石の意図を承知の上で斎が茶会の情報を教えたのは許せなかった。斎は上杉・吉良両家の庇護のおかげで、江戸での名声をあげるキッカケを得たといっても過言ではなかった。

いつの頃から始まったか不明であるが、毎年討入りの日に宗偏流では"義士茶会"を催していると聞く。これは後の義士の人気に迎合した悪乗りの感を否めない。

形式上の遊びの茶事なら別であるが、宗旦にすべてを許された程の大茶人宗偏と、達人義央の交友には心の底まで理解し合えた深い友情のきずながあった筈である。

現在の宗偏流の面々は流祖宗偏の深い悲しみをもう一度反省してみる必要があると思う。

羽倉斎について次の様な秘話が伝えられてる。(城戸千楯「紙魚室雑記」)より

彼が江戸にあった頃、大石内蔵助とはいたって懇意だったが、また吉良上野介もみずからの門人であった。

そこで大石らの忠心に感じ入った斎は、その討入りを援助するため、吉良邸の詳細な図面を彼等に与えたという。斎は平生この話を口にすることはなく、これは彼が末期に及んでの述懐だった。

斎が死の寸前まで口外しなかったのは、心に咎めるところが多々あったからと推察される。

宗偏が富子を訪ねた翌年の一七〇四年の宝永元年八月富子は死去した。享年六十三歳であった。人生の前半は幸福で順調、後半は不幸の連続であった。その遺骸は渋谷東北寺に葬られた。後に富子の墓は分骨されて米沢の法泉寺にも建てられた。

宗偏は富子没後四年の宝永五年四月、八十二歳で天寿を全うしている。浅草本願寺寺中の願竜寺に葬られたが遺言により墓名の代りに石灯籠を据え、その傍らに遺愛の紅梅一株が移植された。関東大震災に遭って石灯籠は大破したため、墓石に代えたが紅梅はよみがえって春ごとに見事な花をほころばせ、芳しい香りを放って遺徳をしのぶよすがとなったが、ついにこの梅樹も齢尽きて枯死した。

同寺の住持、鷹桐了順翁はその残根の一片をとって山田家に贈った。宗家はこれを珍重して花入を作り、"老竜"と銘した。

老竜の名はこの梅樹の根が老竜のうずくまる姿に似通っていたからと言う。

祝出版

歴史遼乱

三戸岡道夫著

栄光出版社　1,800円

珠玉の歴史エッセイ集

肩衝で、本歌の中興名物「広沢」と同形のものである。茶入は小堀遠州が挽家に「山桜」と書き、遠州はさらに小色紙に次の和歌を書いて茶入の美しさをたたえた。

"もろともにあわれと思へ山桜
花よりほかに知る人もなし"

歌は「行尊」(一〇五五―一一三五)が大和大峰に入山したときの述懐であるが、小林平八郎の心境にも深く通じている。

両者ともに宗偏の同門の士でありながら、運命のいたずらで敵味方に分かれ、ついに"もろともにあわれ"をとどめた、源五、平八郎の二人であった。

吉良家の茶頭「牧野春斎」も宗偏の門人であった。宗偏の推薦で吉良家に奉公していた、茶人であったが討入りの夜、赤穂浪士と奮戦し主君を守って十七歳の命を散らした。春斎はなかなかの茶人で手造りの香合や蓋置きが現存している。

宗偏流三代目宗円が写した「桂籠」、源五の「茶杓」、平八郎の「茶入」三点は平成二〇年十月に開催された、『江戸、東京の茶の湯展』に展観された。筆者は具に拝見したが、當時の茶人達の心情を慮って感慨深いものがあった。

討ち入りから明けて元禄十六年正月、弔問客もまばら

（司馬雑感　十九）

近江路から熊野路へ（二）

山田嘉久

2「奈良散歩」をゆく

司馬遼太郎の最初期の作品に「饅頭伝来記」という短編がある。

まだ本名の「福田定一」名で書いた、彼にとっては「習作」に過ぎない小説だが、文芸評論家向井敏は「作風の上で司馬文学の源流を成している」と評価している。

十四世紀半ば、足利尊氏治世の頃、中国から初めて日本に饅頭を紹介した林浄因の物語だが、そのゆかりの神社が近鉄奈良駅の近くにある「漢国神社」である。

神社の創建は養老元年（七一七）と極めて古いが、貞和五年（一三四九）に来日した林はこの社頭に住居して、日本初となる饅頭を作ったといわれる。

司馬は作品の中で「饅頭とはいっても、現在の、ふかしたメリケン粉に餡を包んだあれではない」として、小豆の餡はまだ出現していないので「恐らく干し柿などの乾燥果をどろどろに煮詰めてメリケン粉に包み油で揚げたようなものではなかったろうか」と推察している。

現在では、この神社は日本唯一の饅頭の神社として、製菓業者の信仰を集めているが、毎年四月には全国の業者が集まって「饅頭祭」を開催しているとのことだった。

一　興福寺

我々はこの漢国神社に詣でたのち、興福寺五重塔近くに集合したが、「奈良散歩」でも司馬は興福寺の歴史について語っている。

法相宗大本山である興福寺は奈良朝以前からもあったが、平城京遷都と共に現在の場所に移ったのが和銅三年（七一〇）というから実に古い。（今年が創建千三百年に当る）

藤原氏の氏寺として平城京遷都にあたって藤原不比等（六五九～七二〇）がまず巨大な中金堂を建てたのに始った、この古寺の寺領は中世、大和盆地一円に及んだという。

現在の奈良のまちの大半は、かっては興福寺の境内で、たとえば司馬の奈良における定宿であり、我々も会食した名門奈良ホテル（創業百年）の地もかっては、この寺の代表的塔頭の庭園だった。

このことは大正始めに出た名著「古寺巡礼」（和辻哲郎著）でも触れられている。

また、司馬は初期の短編「果心居士の幻術」で「それより前、紀州熊野に唐船が漂着し、乗っていた婆羅門僧がそのまま上陸して興福寺に来たという事実があるのだ」と書いて興福寺と大陸の関係を印象づけている。

有名な五重塔も何度か焼けたが、それでも現在の塔は室町時代のものである。

しかし、この伝統を誇る興福寺も明治初年の廃仏毀釈では格好の標的にされた。

多くのこの寺の僧たちは春日大社の神職にさせられ、寺自身も廃寺同然となった。この時期、五重塔はたった二十五円で売りに出されたことまで司馬は披露している。買主の商人は薪にしようとしたが、付近の町家から抗議が出たため、結局、買うのを諦めたという。

この時の興福寺の僧侶達の態度を司馬は非難している。

彼らが真の仏教徒であったなら、例えば戦国期、織田信長に対して抵抗した一向一揆のように、明治の太政官政権に抵抗できたはずである。

それが唯々諾々と、明治初年の暴政に従ってしまった。自ら興福寺を捨ててしまったのが彼らだというのである。

遠い昔、源頼朝が鎌倉幕府を興したとき、「大和守護職」としての興福寺は鎌倉を怖れず、大和一国を「武家不入の地」であると豪語した、あの元気さは何処に行ってしまったのかというのである。

司馬は江戸期、興福寺にとって不幸だったのは、この巨刹を構成していた塔頭子院の主がすべて京の公家（藤原氏）の子であったことを指摘している。廃仏毀釈に際して彼ら総勢二十七人の「なま公家たち」は、一斉に頭髪を蓄えて春日神社の神職となってしまった。

（その後、明治政府は廃仏毀釈の行き過ぎに気づき、明治十五年には逆に「古社寺保存金制度」を実施している。）

境内にある旧食堂跡に建てられたという「国宝館」も見学した。

その名の通り国宝級の文化財が数多く展示公開されている。薬師如来仏頭、阿修羅像、金剛力士像、千手観音像など国宝だけで二十数体を数えた。

かって京都の東寺本堂を見学したときにも、数多くの国宝に圧倒されたが、歴史後進県出身者としては羨望の

念を禁じえなかった。傍らの埼玉から来た知人に「お国には国宝が幾つありますか」と問うたら、その人は即座に答えられなかった。

「千葉県にはそれでも八個の国宝があるが（それも殆どが国立歴史民俗博物館の所蔵だが）、私の記憶では埼玉には一つもないはず」と話しかけると、傍らにいたその知人のお子さん（といっても五十歳台だが）が、「行田市の稲荷山古墳から出土した鉄剣は国宝に指定されたのでは」と急いで答えていたが、自信なさそうだった。

（旅行後、同氏から書状あり、同鉄剣（四六一年）が昭和五三年に発見され、五年後に国宝に指定されている旨の新聞の切り抜きが同封されていた。）

これら「国宝館」の中の国宝のなかでは、阿修羅像が一番好きであると司馬はいう。

「少女とも少年ともみえる清らかな顔に、無垢の困惑ともいうべき神秘的な表情がうかがえる」この像は「私にとって代表的奈良人なのである。」と書いている。

かって記者時代に「美の脇役」を産経紙上に連載し、昭和五十年代には「微光のなかの宇宙―私の美術観」まで出版した司馬ならではの文章である。

三つの顔に六本の腕を持つ（三面六臂）一度見たら忘れられないこの異形の像は天平六年（七三四）、聖武天皇の后であった光明皇后（七〇一～七六〇）が、母の一周忌にあわせてつくらせたという。

たしかに阿修羅像は、インド名を「アスラ」といい、「インドラ」（帝釈天）と闘うインド神話の神像だから仏像界では一個の「脇役」に過ぎない。その証拠に興福寺内の諸像の配置を描いた「興福寺曼荼羅図」（重文）でも、本尊釈迦三尊像の後ろにひっそりと立っている。

それにもかかわらず、見物客の多くが主役の本尊よりも脇役の前に集まっているのを見ると、この像が完全に主役を食うような人気を得ていることが分かる。

他の「八部衆立像」がすべて鎧をつけているのに、阿修羅像だけが武装していないのが、よけい目立つ。それに三面六臂という奇怪な姿なのに素人目にも実に自然で品がある。

この像については哲学者の梅原猛も「三面の顔は、それぞれ日常の顔と、怒りの顔と、笑いの顔を示すのだろうか」（人間の美術4　平城の爛熟）と書いている。

その後、我々は興福寺の南に広がる奈良町を散策した。

元々は奈良の都、平城京の外京として多くの社寺が置かれたことに始ったこの町は、江戸時代には様々な産業（筆、墨、蚊帳、晒、刀等）が発展して、江戸期を代表する商工業都市としての街並みが形成された。

世界遺産である元興寺を中心として、静かな街並みが続いていた。なお「奈良町」とは行政地名ではなく、「都市景観形成地区」としての通称であるようだった。

二　東大寺

司馬が奈良の仏たちのなかで好きなのは、前記興福寺の阿修羅のほか、東大寺戒壇院の広目天だという。

その東大寺戒壇院には広目天のほか持国天、増長天、多聞天の所謂「四天王」（塑像）が安置されている。

天平時代の傑作である。

四天王は仏法の守護神とされ、わが国では既に飛鳥時代から信仰があり、天平時代に最高潮に達したという。

前記和辻哲郎の「古寺巡礼」ではこうなる。

「四天王はその写実と類型化との手腕において実に優れた傑作である。たとえばあの西北隅に立っている広目天の眉をひそめた顔のごとき、きわめて微細な点まで注意の届いた写実で、しかも白熱した意力の緊張を最も純粋化した形に現したものである。」

その天平時代の天平十三年（七四一）に聖武天皇の発願によって建立されたのが東大寺である。この寺の広大な境内には前記戒壇院（戒壇堂）のほか、大仏殿（東大寺金堂）や正倉院、二月堂、三月堂、三昧堂などが配置されている。

司馬は東大寺では二月堂の周辺が特に気に入っていたようで「立ち止まってながめるというより、そこを通り過ぎてゆくときの気分がいい」と書いている。

東大寺は元来は大和の国分寺として建てられたが、毘盧舎那大仏が本尊とされたため、現在は華厳宗の大本山となっている。華厳宗は「南都六宗」の一つだが、奈良仏教はその後に起きた最澄の天台宗や空海の真言宗などの平安仏教によって「置き去りにされた」が、その代わりに「知的な清雅さ」を持ち続けたと司馬はいう。

天平勝宝四年（七五二）に開眼供養された大仏は、その後度々損傷を蒙り、その都度修理されたようだが、案内役の老僧侶の声が小さく、よく聞き取れなかった。

見学後、パンフレットを読むと両手は桃山時代、頭部は江戸時代のものとのこと。また大仏殿も創建以来、再度の兵火に罹って焼失されている。一度は十二世紀の平氏による南都焼き討ちによるもので、このときは源頼朝が復興した。

二度目は戦国時代末期のことで、大仏殿に陣を構えた三好三人衆を松永久秀が攻撃したときに焼け落ちた。このときは織田信長や徳川家康が再建を試みたが、実現に至らなかった。

そこで五代将軍綱吉の時代にようやく再建が成るのだが、規模は当初の約三分の二に縮小されてしまったものの、それでも木造建造物としては世界一の規模を誇っていることはよく知られている。

司馬も出世作「梟の城」では、主人公重蔵が見た東大寺は、松永弾正久秀によって火を放たれ、大仏殿は焼失、大仏はどろどろに焼け爛れていたと書いている。

改めて、南大門の壮大さに驚かされながら東大寺を後

にしたが、「南大門の大きい姿に睥睨の目を見張ったのもこの宵である。（中略）わたくしはあの高い屋根を見上げながら、今さらのように「偉大な門」だと思った」とは前述「古寺巡礼」の中の文章である。

帰宅後、五木寛之著「百寺巡礼」の東大寺の項を読むと、創建当時の東大寺には大仏殿の近くにいずれも百メートル近い東塔と西塔の二つの塔が聳えていたという。今の日本には一つも存在しない七重塔である。

（ちなみに現存する最も高い木造の塔は京都の東寺五重塔で高さは約五十五㍍）

千二百年の昔、こんな巨大な大仏や塔を作る必要があったのだろうか。

歴史的に見ても大宝元年（七〇一）に「大宝律令」が制定され、和銅三年（七一〇）には平城京への遷都がされた直後に当る。また国の歴史書として「古事記」「日本書紀」が書かれたのも八世紀はじめ、「万葉集」が成立されたのも八世紀半ばといわれる。

そんな時期に成立まもない日本の律令政府は「いまや日本という国は唐の属国ではない、と声明し」「律令国家としての独立宣言」する必要があったと五木は書いている。

そして当時の国家権力の象徴として大仏や大塔は建てられたというのである。

現に聖武天皇による大仏発願の詔には「夫れ天下の富を有つ者は朕なり。天下の勢を擁する者は朕なり。この富勢を以て、この尊像を造る」とある。

三　修二会

今回の旅行の目玉は、やはり前夜に参加した東大寺二月堂の「修二会」だった。

毎年三月一日から二週間にわたって行われる奈良の伝統行事で、俗称「お水取り」「お松明」という名で知られる。

今から千二百五十年余り前の天平勝宝四年（七五二）に実忠和尚によって創められたと伝えられている。この年は前記の通り大仏開眼の年でもある。ついでに言えばこの二年後（七五四）には唐僧鑑真が来日、律宗を伝えている。さらに世界史的には唐で安録山ノ乱や楊貴妃殺害の事件もあった頃にあたる。

そのような古代から今日に至るまで、一度も途絶えることもなく続けられているので、二〇〇八年は実に一二五七回を数える。

前記、明治維新の廃仏毀釈で興福寺の僧たちがこぞって興福寺を捨てたときでさえ二月堂では、この行事が行われていた。

「奈良散歩」で司馬は昭和五九年三月一日に参観しているが、最初に参ったのは戦後間もない昭和二十五年三月だという。

丁度、「古い上着よ、さようなら」という流行歌（青い山脈）が流行っていた頃で、この「修二会」など当時、世上では「古い上着」の代表だったと述懐している。すべての価値観が崩壊される中で一つぐらいは古いものが残っても、いいのではないかと密かに思ったと書いている。

司馬の持論である「文明と文化」論を此処でも展開している。

「「文明」は普遍的で便利でかつ合理的なものだが、つねにそれに裏打ちされている「文化」は、どの国あるいはどの集団でも不合理なものであり、逆にいえば不合理でなければ「文化」ではありえないのではないか」と書く司馬は、その不合理な代表がこの「修二会」だというのである。

「練行僧たちは、天平の実忠以来のやりかたを、不合理は承知の上で頑固にまもっている。原種のように強烈な文化意識といってよく、その不合理こそ、ひとを酔わせもする。」

司馬はまた、書く。「どういう変動期にも、深夜、二月堂のせまい床の上を木沓で走り、また跳ね板の上に自分の体を投げて五体投地をやり、あるいは「達鍛」という語意不明の激しい行法では堂内で松明を旋回させてまわりに火の粉をふらせるのである。」

しかし私にとって、この参観はなかなかの苦行だった。

まだ日の明るいうちに二月堂のせまい床の下に集まって日の暮れるのを待つ。人々は次から次へと続き、何時の間にか立錐の余地もない。しかも日が暮れるにつれて三月初旬の冷気が襲う。

待つこと一時間強、七時きっかり、ようやく「お松明」が始まった。つぎつぎと点火された大松明が、登廊を経て二月堂の欄干上に姿を現す。それを見上げる善男善女は飛び散る火の粉を浴びるが、私の立った場所までは遠すぎるために届かなかった。

お松明の数は十本、それに加わる僧（練行衆）は十一名と決まっている。その人名と役割が発表されるのは前年十二月、それから結願の三月十五日まで彼らの荒行が続く。

僧たちは世の人々に代わって、観音菩薩にその罪の許しを乞い、除災招福を祈り、修法を行うのが、この行だと佐藤道子の「東大寺お水取り」（朝日選書）に書いてある。

著者は四〇年来、幾度も体験した修二会聴聞の感動を伝えながら、観音菩薩への願いを伝えている。

ようやく「お松明」が終わると、一般では入れない二月堂の内陣に特に入ることが許された。（ただし女人禁制。男女差の激しいのも、この国の「文化」の特徴か。）

堂内はますます寒く、しかも暗く隣の人の顔さえ定か

ではない。やがて礼堂に置かれた「五体板」に僧侶が両膝、両ひじと頭頂を猛烈に打ち続ける荒行が始った。その音のみが静まり返った堂内に響き渡る。

旧年中に人類が犯した一切の罪を懺悔する二月堂悔会といい、独特の行法だという。

その後も「走りの行法」「水取り」の行事が延々と続くのだが、この日の奈良の最低気温はマイナス二度、厳しい寒さに、私は耐えられず九時過ぎ、途中で退散した。もろもろの行事が終わるのは翌日の三時過ぎなのだそうだ。

この「不合理」な「火と水の儀式」が一年も欠かさず、実に千二百年以上も続いているのである。

司馬は、この二月堂修二会の行法はまさに「兜率天の世界」であると考えている。

「たしかに、東大寺には、兜率天がある。」

と、この紀行文を終わっている。

なお、冒頭の「饅頭伝来記」同様、これも司馬の初期の作品だが、「兜率天の巡礼」なる小品がある。（昭和三十二年、同人誌「近代説話」に掲載）

戦後、大学を追放された主人公が最愛の妻の狂死に会う。衝撃を受けた彼は、その遺伝のルーツを探るうち彼の想念はひろがり、古代の東西文化（五世紀の東ローマ、七世紀の長安そして日本古代の大和）を遍歴巡礼することになる。

極めて宗教性と幻想性に富んだ作品だが、ほぼ同時代に書いた「ペルシャの幻術師」や「戈壁の匈奴」と同様、最近の夢枕獏や京極夏彦などの幻術ものなど比較できないほど、説話構成が緻密で、幻覚美が鮮やかに表現されている。

化粧のルーツを訪ねて（六）

第三話　日本の化粧文化史（2）

鈴木守

第三節　平安時代の化粧

前号では、日本の化粧風習を中世まで遡った。本節は、桓武天皇が平安京に遷都した七九四年から源頼朝が幕府を開いた一一九二年までの平安時代について扱う。

1　赤化粧

平安時代の文書の中に、頬紅と口紅の文字は見当らなかったので、赤化粧に関連する文言を拾うことにする。

頬紅や口紅を『江家次第』や『和漢朗詠集』では面脂口脂、粉（頬丹）と記し、『本朝文粋』は「燕脂を唇に點す」と著していた。また、『久安四年記』には、紅の指し方が書かれ、『今昔物語』に「父母の銭一百を盗んで脂粉を買わんと思き」と書いてあった。したがって、平安の女性も頬紅や口紅を購入して紅化粧を施していたのである。

ほかに、『伊呂波字類抄』に赤點と經粉が記載されていた。赤點、經粉とも紅であり、『類聚倭名抄（倭名抄）』や『文華秀麗集』は紅を閉彌と表記していた。

『栄華物語』や『延喜式』などに紅花でつくった紅や紅粉がみられ、『源氏物語』には紅花の異称・末摘花が登場し、紫式部は「源氏は手づから、紅花を書きつけ…」と末摘花の赤鼻をからかって書いていた。

紅花以外の色材に触れる。爪紅に鳳仙花を使うことは既でに触れた。鳳仙花は平安時代に渡来したといわれている。樋口の書は『枕草子』を引用して「この花弁を潰してワラ筒に包み発酵させて、平安貴族たちは爪を染め

た」と記載していた。

『本朝無題詩』に朱、『宇津保物語』に蘇紡、『東宮切韻』に赭が記されていたが、赤化粧に用いたかどうかは不明である。

2　白化粧

『枕草子』に「袖をおしあててうつぶしゐたり、裳・唐衣にしろきものうつりて、まだらならんかし」、また、「舎人の顔のきぬにあらわれ（地肌が現れ）、まことにくろきに、しろき物いきつかぬ所は雪のむらむら消えのこりたるここちして…」と記していた。『堤中納言物語』や『紫式部日記』にも〝しろきもの〟とあった。

『菅家文章』と『今昔物語』は粉をハフニとし、『類聚名義抄』は「粉、シロキ物、ハフニ」を記載していた。『倭名抄』には「白粉は俗に波布邇、和名で之路岐毛乃」とあり、『伊呂波字類抄』に白粉の異称・粉錫、解錫、白膏がみられた。

その他の顔料として、『延喜式』に「胡粉をモチ米と粟から作る」と記され、津田は『続日本記』記載の伊勢水銀献上の事実から八世紀頃の白粉を示唆している。

また、樋口は「平安時代には宮廷の規模が大きくなり、部屋の中が暗くなったため、赤化粧では目立たないので、白化粧が盛んになった」と述べている。

3　黒化粧

『枕草子』に眉抜き、『文華秀麗集』に眉書きが記され、『源氏物語』は「眉のけざやかになりたるも、美しう清らかなり」と眉を描写し、『源氏物語絵巻』の女性は自然の眉より太めの茫々眉を描いていたので、平安女性の眉作りを偲ぶことができた。

茫々眉のほかに、柳眉、青蛾、蛾眉、眉八字、雙蛾などの眉形が『梁塵秘抄』や『和漢朗詠集』などに認められたが、当時の上流婦人は成人すると眉を落とし、下層の女性は眉をそのままにしていた。古代民謡の『催馬楽』は「御馬草取り飼へ、眉刀自女……」と眉刀自女を七回繰り返して歌った。眉刀自女は眉のあるおばさんを意味し、下々のおばさんである。だが、姫でも『堤中納言物語』の虫めずる姫は「眉さらに抜き給わず、歯ぐろめ汚し」といって化粧しなかったという。

眉の化粧料は、『類聚名義抄』、『倭名抄』などに黛、眉墨、粧黛と記述されていた。眉墨といっても、鍋、釜の煤であり、指に唾つけて眉作りしたようである。

入墨については、平安時代の書では唯一、『類聚名義抄』に黥がみられた。この時代は宮廷文化の時代であり、上流社会を記した書が多かったためか、入墨の記載は少なかった。

4　清浄化粧と基礎化粧

清浄化粧に関しては、『源氏物語』と『枕草子』に洗浄料の泔があり、『延喜式』には手洗い、洗い粉の澡豆（緑豆）と小豆が記録されていた。

洗浄用具では、『枕草子』、『落窪物語』などに半挿と盥があり、『延喜式』は半挿を楾と表記し、爪磨も記していた。『堤中納言物語』には畳紙があった。

しかし、基礎化粧については、平安の書には傍証になるような資料さえ見当らなかったので、当時は、スキンケア対策の主流は清浄だったのであろうか。

5　毛髪の化粧

平安時代の女性は、『源氏物語絵巻』や『小倉百人一首』などにみられるように、床に届きそうな長髪であり、この髪形は平安女性のトレードマークになっている。『源氏物語』には「髪いと長き女」が著され、ほかに髪けずり、御髪上の調度、御櫛の箱、差櫛、唐櫛箱、掻上の箱、うちみだりの箱などが書き連ねてあった。うちみだりの箱は髪などを入れておく箱である。ほかに『堤中納言物語』や『枕草子』などにも結髪用具が記載されていた。櫛では『宇津保物語』に梳櫛が書かれ、『大和物語』の「大櫛を面櫛に指す」は櫛を前髪にさすことを意味していた。『狭衣物語』と『延喜式』に鋏があった。

頭髪化粧料では、『倭名抄』に髪の艶出しの澤と『延喜式』に整髪料の五味子（美男葛）があり、ほかに、斉藤実盛が髪を染めた逸話は、平安末期の白髪染めを示唆している。

髪形や結髪については、『枕草子』に「髪などを結う」と書かれ、『和漢朗詠集』に鬢、雙鬢、『延喜式』に髻結、『続日本記』に髻髪、『宇津保物語』には元結があった。雙鬢は左右に巻き上げて二つの輪を作った髪であり、髻髪はもとどりの髪である。『梁塵秘抄』には、而非鬘（仮髪）も認められた。

江戸時代の書・『年々随筆』に平時忠の月代が記されており、僧侶の髪形については、『西行物語絵巻』の西行を始め、『美術全集』掲載の奈良薬師寺の慈恩大師像など平安の僧侶たちは皆頭を丸めていた。

髭についての記録は少く、『本朝無題詩』に傀儡子女の口髭をみるだけであった。

6　香り化粧

平安時代の女流作家たちは香について筆を割き、『源氏物語』では「いとあまえたる薫物の香を、かえすがえすたきしめ居給へり」と著し、『枕草子』などは空薫物、合薫物、黒方などを認めていた。空薫物は虚薫ともいい、

香炉を人目のつかない所におき、それとなく香りを漂わせる香である。合薫物と黒方は麝香や白檀、沈香、丁字、龍脳などを蜜で練り合わせたものである。

香の用具は『大鏡』や『源氏物語』などに、匂い袋の香嚢、香壷、薫爐が書かれていた。

7　鏡を装身具

『大鏡』は書名自体が鏡であり、櫛笥の鏡、赤く磨いた鏡、葵八花形鏡、古躰の鏡などを著していた。赤く磨いた鏡は銅鏡であろうか。葵八花形鏡は周囲に葵のような八弁の花形紋様のある銅鏡である。『源氏物語』や『延喜式』などにも鏡や鏡台が記載されていた。

髪の装飾品については、『大和物語』に面櫛、『宇津保物語』と『催馬楽』に插櫛、『文華秀麗集』に花簪が記載されていた。

8　用語の化粧

平安時代の事典といわれている『倭名抄』、『伊呂波字類抄』、『類聚名義抄』に目を通したが、化粧についての用語解説はなかった。したがって、他の書から拾うと、『紫式部日記』に「けさうなどのたゆみなく…」、『枕草子』に「化粧じたる顔みなあらわれて…」、『栄花物語』に「紅赤く厳粧ぜさせて…」と著されていた。かように、平安の書では漢字は化粧と厳粧、仮名表記では"けさう"であり、表音は呉音の"けそう"だった。しかし、平安後期の『久安四年記』は「近き代の女房の化粧…」と記載しており、『平家物語』は"けしゃう"と表記していたので、平安後期から漢音の"けしょう"に変わったのかも知れない。なお、"けわい"を記載した書は見つからなかった。

第四節　奈良時代以前の化粧

この節では、奈良（七一〇～七九四）、飛鳥（五九三～）、大和（創始年代不明）の各時代、ならびに文化史でいう古墳（三世紀末～七世紀）、弥生（紀元前後三〇〇年）、縄文（前八〇〇〇～）およびそれ以前の石器時代を扱う。

奈良時代以前の化粧を知る資料として、八世紀に上撰された『古事記（記）』、『風土記』、『日本書紀（紀）』、『万葉集』ならびに中国の書・『魏志倭人伝（倭人伝）』があり、ほかに考古学的資料も実在している。

なお、抜歯習俗と黒歯風習は第一話、正倉院の『鳥毛立女屏風（立女図）』にみられる花鈿と靨鈿については第二話で述べた。

P.304 赤 30行

1　赤化粧

赤化粧については、前出『立女図』の美女には口紅と頬紅が描かれ、『記』推古の条に曇徴がもたらした彩色（朱黛か）および神代下に赭が書かれ、『後漢書』と『倭人伝』に朱丹が記載されていた。また、二三八年に魏王が卑弥呼に鉛丹を下賜したという。

考古学的資料を挙げると、藤ノ木古墳から紅花が出土、高松塚壁画女性の頬と唇から辰砂と思われる水銀が検出された。また、巫女像の埴輪顔面に朱が施され、吉野ヶ里遺跡から顔面を朱で彩った遺体が出土。三内丸山の縄文遺跡には遺骸にベンガラを振りかけた跡があり、さらに石器時代にも化粧の形跡を思わせる赤い人骨が発掘されている。

2　白化粧

秘

『万葉集』に鏡前の粉が詠まれ、『紀』には、持統六年に僧・観成がわが国初の鉛粉製作、雄略の条に鉛花が記録され、鉛花は白粉と解釈されているが、鉛丹とする説もある。江戸時代の書『関秘録』に「白粉は聖徳太子より始まる」と記載されていた。

白化粧を直接証拠づける考古学的資料はまだみていないが、貝殻を焼いた縄文中期の跡が発見され、胡粉作りが示唆されている。白化粧用に胡粉を使っていたか否かは不明である。

3　黒化粧

眉化粧については、『立女図』に蛾眉が描かれ、前出の曇徴の彩色があり、『風土記』には眉引きが記載されていた。『万葉集』に「月立ちてただ三日月の眉根掻き日長く君に逢えるかも」など眉化粧の歌六首がみられた。ほかに、『記・応神』に「眉書き濃に垂れ」、『紀・仲哀』に「處女の睩の如くにし」と記されていた。

入墨は、『紀』では履中と雄略の条に黥と文、『記』の安康と神武の条に黥、『後漢書』、『倭人伝』、『文選』にも黥面文身が記され、『隋書流求伝』には「婦人は手に黥し、虫蛇の文を為す」と記述してあった。

4　基礎化粧と清浄化粧

基礎化粧を示す資料は見当らなかったが、清浄化粧に関しては、「仏教伝来とともに僧職者が澡豆を洗浄に使用した」といわれ、『倭人伝』には澡浴がみられた。また、『記紀神話』は「黄泉から戻ったイザナギが両眼と身を洗い、天照・月読・須佐之男の三神が誕生した」と

語っている。

5　毛髪の化粧

『紀・雄略』に蘭澤が記載され、蘭澤は、おそらく香りのある髪油であろう。『万葉集』には「君なくは何そ身装はむ匣なる黄楊の小梳も取らむと思はず」と櫛と櫛箱が詠まれ、ほかにも黄楊櫛の歌があった。『風土記』や『記』にも櫛が記されていた。

考古学的な証拠としては、縄文後・晩期遺跡から赤や黒の漆を塗った櫛が出土しており、さらに古くは、五千年前頃の福井県吉浜遺跡から漆塗り九本歯の櫛が出土している。

結髪と髭については、『記・神代上』に美豆良、『紀・景行』に椎結、『倭人伝』と『後漢書』には被髪屈紒があり、屈紒は髪を結ぶことである。髭は『記』にイザナギの八拳須と『紀』にスサノオの八握鬚髯が記されていた。

6　香り化粧ほか

香り化粧については、『万葉集』に「香に薫ず」と詠まれ、『紀』の皇極と天智の条には香爐がみられた。東野は「香料名を初めて記載した書は沈香と白檀を記した『紀』天智一〇年の条である」と述べ、樋口は「仏教伝来とともに香料も入って来た」という。

鏡も古い資料があった。「真澄鏡手に取り持ちて朝な朝な見れども君は飽くこともなし」を始め、鏡の歌が『万葉集』に八首あった。『記紀』の神代上に八尺鏡、白銅鏡、『紀』神代下と垂仁の条に鏡作部、宝鏡、日鏡が記載されていた。邦光は「魏王の下賜品に銅鏡があった」と記し、中山は「この鏡は二三九年より前に作られ、考古学的には、二三五年の古墳から出土した鏡が現在、わが国最古」と述べている。

装身具は古墳、弥生、縄文の各時代を通じて認められ、高松塚壁画に描かれた衣装に群青が検出され、キトラ古墳の壁画には朱、青、白、黒の彩色が認められたと報道されており、藤ノ木古墳から金銀でメッキした装身具も発見されている。

弥生から古墳時代前期の古墳や遺跡から、緑石、ガラス、貝殻で作った腕輪、首飾り、勾玉、管玉などが発掘され、縄文早期の遺跡から耳飾り、旧石器時代遺跡から首飾り用の玉が発見されている。

化粧を一括する用語については、奈良時代以前の資料

から見出すことができなかった。上代社会には、化粧を総体的に呼称する習慣がなかったのであろうか。

第五節　まとめ

わが国の化粧のルーツを訪ねて石器時代まで遡った。この探訪記を石器～弥生時代、大和～奈良時代ならびに平安以降に分け、個々の化粧項目ごとに考察を混じえながら括めることにする。

1　石器～弥生時代まで遡る化粧

弥生時代以前までに発祥した化粧について述べる。なお、『倭人伝』と『記紀・神代上下』は弥生時代として扱う。

旧石器時代まで確実に遡ることができたのは、第一話で述べた抜歯習俗であり、ほかに、化粧にまつわる証拠として、首飾りの玉が発掘されているので、美意識の発生を最初に取り上げる。

(一)　美意識の発生

美を演出する化粧の発祥には、美意識の存在が不可欠である。その示標となる装身具については、弥生から前期古墳時代にかけて腕輪、首飾り、勾玉、管玉などが、また、縄文早期の耳飾り、石器時代の首飾りの玉が発掘されているので、古代人たちは、石器時代から美意識を抱いて身を飾っていたことは明らかである。したがって、美的目的の化粧も石器時代から行われていたと推察されるが、未だ具体的な証拠はみていない。

その後、後期古墳時代には、藤ノ木古墳から金銀でメッキした装身具が発見され、高松塚壁画に描かれた衣装は群青で染められ、キトラ古墳の壁画は、朱・青・白・黒に彩色されていたので、装身・装飾の文化が美的目的の化粧を育んだに違いない。

(二)　抜歯風習

現在、世界最古の抜歯例が沖縄港川遺跡（一万八千年前）で発見されているので、抜歯習俗は、石器時代に発祥した化粧である。日本国土では縄文早期・中期の貝塚で認められ、縄文晩期に最盛期を迎えた。弥生時代以降になると衰退の道を辿り、お歯黒風習に置き換えられ、近世に至って滅亡した。

(三)　呪術的な赤化粧

弥生時代中期（紀元前後一〇〇年）の吉野ヶ里遺跡から、顔面に朱が付着したシャーマンと思われる遺体が出土し、これが赤化粧を実証する最古のものであった。そ

の後、魏王が卑弥呼に鉛丹を下賜したといわれており、古墳時代の巫女像の埴輪に赤化粧が施されているので、赤化粧と呪術との関連が示唆される。

また、三内丸山遺跡（五五〇〇～四〇〇〇年前）には、遺骸にベンガラを散布した跡があり、死者の復帰を祈願したと推定されている。石器時代には、赤く染まった人骨が発見されており、「石器時代以来の古代人は赤に対して特別な概念を抱いていた」と示唆されているので、わが国の呪術的な赤化粧は石器時代から始まっていた可能性がある。

（四）髪化粧

五千年前の吉浜遺跡で櫛が発掘されているので、縄文人の髪化粧は確定的である。その後、『倭人伝』に被髪屈紒、『記紀神話』に美豆良がみられた。僧侶の剃髪は仏教公伝（五三八）に伴って入って来たと思われるが、資料的には、飛鳥時代絵画の剃髪が最初であった。

平安時代に入ると、女性の長髪は、この時代のトレードマークであり、匣など髪上の調度品が数多くみられ似非髪もあった。また、平時忠の月代が著されていたので、月代は平安末期には始っていたのであろう。

江戸時代は、花魁の髪にみられるように島田髷を基本にした髪形を結う結髪の黄金時代であった。男性では、丁髷、総髪、大銀杏など髪形が職業を現わしていた。

（五）お歯黒

中国の『山海経（前四世紀）』に黒歯国が記されており、この頃、鉄媒染によるお歯黒が発生したと推定される。この風習が南島から本土に上陸し、大和朝の祖に引き継がれた可能性がある。かような黒歯風習の歴史は第一話で述べた通りである。

（六）身分表示の赤化粧

『紀・神代下』に「海幸が赭を塗って臣従を誓った」と書かれているので、この神話は「大和朝の祖先の時代、おそらく、弥生後期の頃、呪術化粧とは別に、赤土を塗ることによって身分を表示する赤化粧の存在を示唆している」ように思える。

（七）入墨

『倭人伝』に黥面文身が書かれ、『記紀』には、神武の条以降、履中、安康、雄略の条に処刑、部族あるいは職種の標識として入墨が記されていた。平安の書には、黥をクラジと記していた。

江戸時代には、芸術的とさえいえるような入墨も彫られ、島帰りの烙印、火消しややくざの倶梨加羅紋々などがあり、顔・体・額の入墨をそれぞれ、黥面・文身・雕題と呼んでいた。

（八）清浄化粧

『倭人伝』に澡浴、『記紀神話』にイザナギの目鼻の洗浄が記され、仏教伝来により僧侶が澡豆を使用したといわれている。

平安時代以降には、盥や半挿などの洗浄具、爪磨き、耳掻き、毛抜き、畳紙などがみられるようになった。江戸初期になると、シャボンや糠袋が登場した。

（九）鏡

わが国最古の鏡は二三五年の作とされ、『記紀神話』に八尺鏡、白銅鏡があり、『万葉集』に鏡が詠われていた。平安時代以降、鏡台、鏡筥、ビードロの鏡が、それぞれ、『源氏物語』、『明月記』、『駿府御分物御道具帳之覚』に初登場した。

（十）髭

ヒゲには、口ひげ（髭）、顎ひげ（鬚）、頬ひげ（髯）がある。『記紀神話』に八束の髭があったが、その後の資料は少く、平安期の『本朝無題詩』に傀儡子女の口髭があり、戦国時代の武将たちが髭を蓄えていたことは映像で馴染みである。江戸時代、虚像の水戸黄門は真っ白な顎髭だったが、顎ひげを天神髭といって武家は好まなかったという。

3　大和～奈良時代発祥の化粧

大和、飛鳥および奈良時代の文献・資料に初めて登場した化粧について述べる。

（一）眉化粧

大和朝初期、『紀』には仲哀の条に眉引、推古の条に彩色（黛）が書かれていた。『万葉集』には、眉が詠まれ、『立女図』には蛾眉が描かれていた。平安時代に入ると、中国文化の影響を受けて、眉形を柳黛、蛾眉などと表現し、孔雀石を混ぜた青黛がみられ、毛抜きも使われた。平安末期には、男性の眉作りが始まり、明治初頭の禁止令まで公家などの階層表示の化粧として続けられた。また、眉作りは中世の頃には黒歯とともに、成人表示の化粧に分化し、その風習は江戸時代まで維持された。

（二）頭髪化粧料

髪化粧は縄文時代からみられたが、『紀・雄略』に髪油の蘭澤が記され、これは整髪料についての初出の資料であった。澤は飛鳥、奈良時代の資料にはみられなかったが、平安から江戸時代まで引き継がれていた。

平安時代には美男葛で整髪し、江戸時代には、これを鬢水と呼んでいた。江戸期の整髪料には、水性の鬢水、油状の水油、ペースト状の練り油があり、使用目的によ

り鬢付、梳き油、艶出し油、匂い油などの名称が与えられていた。江戸時代、髪油は肌用の油として兼用することもあったので、澤も髪油であるから、中世以前の人たちも澤を肌荒れ防止や顔の艶出しに利用したはずである。したがって、基礎化粧料スキンオイルの歴史は雄略天皇の時代まで遡る可能性がある。

白髪染めは平安末期の斎藤実盛の故実がよく知られており、江戸時代には黒鬢付（くろびんつけ）や黒あぶらがあった。ほかに、毛生え薬は鎌倉および江戸時代の書にみられた。

（三）香り化粧

香料は仏教伝来とともに、恐らく仏前に焚く香が初めてもたらされたのであろう。香料名が初めて登場したのが『紀・天智』の沈香と栴檀であり、ほかに『紀』に香爐、『万葉集』に薫香が残されていた。身体に直接施す化粧料は蘭澤だけであった。

東大寺の蘭奢待にみられるように、古代人にとって香料は貴重品であったが、平安時代には香が盛んに行われ、薫物や薫衣香などが文書にしばしば認められ、沈香、白檀、麝香、丁字などが使われていた。

室町時代には頭香と腕香が現われ、江戸時代には匂い袋を身につけるようになった。香水、オーデコロンは近代以降に輸入された。

（四）鉛花とは

『紀・雄略七年』に鉛花が記されており、鉛花を白粉（鉛白）とする説と鉛丹説がある。著者は初め鉛丹説であったが、現在は鉛白説である。ところで、鉛白説の場合は、わが国最初の白化粧の記録となり、鉛丹説を採用すれば、美的目的の赤化粧の最初となるので、鉛丹説から鉛白説に変わった経緯を述べることにする。

鉛丹説を支持した理由であるが、『紀・持統』に「わが国最初の鉛粉製作」が記載されているので、わが国では、それ以前に鉛白を使用できなかったと考え、また、魏王が卑弥呼に鉛丹を下賜したとされているので、「鉛花は鉛丹なり」と解釈していた。

ところが、江戸時代には、中国渡来の鉛粉を“唐の土”と称していたため、舶来品使用の可能性を考えるようになった。『倭人伝』には中国の白粉が記されているので、事実かどうかは別として、中国から白粉を輸入することは不可能でなかった。例えば、江戸時代の書に「白粉は聖徳太子より始まる」とあり、太子は持統帝以前に中国へ遣隋使を派遣しているので、飛鳥初期には中国の白粉を入手できたはずである。

では、雄略帝の五世紀後半の外交をみると、中国の書に倭の五王入貢が記録されている。五王の最初は讃（仁徳あるいは履中）、最後の武は雄略帝である。したがって、鉛花は中国舶来品の鉛粉と解釈することができる。

鉛白説を支持する更なる理由は、推古帝から持統女帝に至る間は、遣中国使を九回派遣しており、ましてや女帝輩出の時代であったから、使者は女帝や后妃への土産に白粉を持ち返ったであろう。したがって、宮廷の女性たちは、舶来品で白化粧をしていたと推察される。その証拠を挙げると、僧・観成の鉛粉献上を女帝が大変喜んだというのは、鉛粉使用の経験があったからであろう。また、観成はそのニーズを知ればこそ鉛粉の製作に励んだはずである。

かような考察の結果、日本の白化粧最古の資料は『紀・雄略』の鉛花であり、「白化粧の歴史は倭五王の時代、五世紀に始まった」と考えるに至った。

なお、白化粧の歴史については次項で述べる。

（五）白化粧の歴史

白色顔料の鉛粉や水銀粉の使用は、現代社会では禁じられているが、古い時代の白粉には、これらの顔料が盛んに使われていた。ほかに胡粉もあった。

胡粉は縄文中期には焼き貝殻で作られていたが、その用途は不明であり、白化粧の歴史は遥か後になってから始まった。推論だが、白化粧の最初は前項で述べた鉛花であった。その後、飛鳥時代に日本初の鉛粉製作があり、奈良時代には、白粉の資料は散見できる程度で、化粧の主流は赤化粧であった。

平安時代に至ると、「宮廷の規模が大きくなり、部屋の中が薄暗くなったため、赤化粧では目立たなかったので、白化粧が盛んになった」といわれるように、白化粧がやっと日の目をみるようになった。

白粉用顔料の鉛白は、粉、はふに、鉛粉などと呼ばれ、平安時代以降、白化粧の主座を保っていたが、近代に至って鉛中毒が知られ、その座は亜鉛華に奪われ、現在ではチタン白へと変遷した。

水銀粉の最初の記録は、『続日本記（七九七）』に伊勢水銀の名で記されていたが、化粧用かどうか不明である。伊勢水銀は伊勢白粉の名が定着しているように白化粧にも使われていた。平安から江戸時代に至る間には、水粉、はらや、輕粉などと呼ばれた。

胡粉について、『延喜式』に「モチ米と粟で製す」と記され、室町時代以降は「貝殻を焼いた粉を胡粉というようになった」といわれている。江戸時代の『和漢三才図会』に白粉草による白化粧が記載されていた。

（六）美を演出する化粧の成立と発展

1項で述べた弥生時代以前の化粧では、石器時代に美意識の萌芽が窺われたが、美的化粧の片鱗が縄文時代の櫛にみられるのみであり、五世紀に至って初めて『紀・雄略』に「稚媛は蘭澤や鉛花をつけてなくても美しい」と美的化粧を示す一文が登場した。その後の『高松塚』

や『立女図』の女性は、化粧によって美を演出していたので、美的目的の化粧は、大和時代中頃までには成立していたと想定される。

平安から江戸にかけての時代には、時代毎の消長はあったが、眉や髪の化粧とともに、紅・白粉による化粧が中心になって美を演出する化粧が発展の道を歩んだのである。現代社会に入ると、「美しくみせたい」という女性心理のもとで、化粧は美容と不即不離の形で大衆化されるに至った。

(七) 赤化粧と赤色々素

赤色々素については、吉野ヶ里遺跡の遺体や『倭人伝』では朱丹を使用し、卑弥呼は魏王から鉛丹を下賜され、海幸彦は赭を使った。また、高松塚の飛鳥美人の頬と唇から水銀(朱砂)が検出された。かように、飛鳥以前は水銀、鉄、鉛からなる赤色無機顔料を使っていた。有機染料の紅花は六世紀中頃に渡来し、藤ノ木古墳で発見されているが、飛鳥、奈良時代に紅花を化粧に用いたとする資料は未だみていない。

平安時代には面脂口脂の記載があり、脂は燕脂を指すので、紅花を使用したことは確実である。その後、中世、近世を通じて、紅花は赤化粧用色素の主座を保ったが、近代から現代にかけて、紅花使用は少なくなり、タール色素と赤酸化鉄の利用が多くなった。

口紅と頬紅とは別に爪紅があった。爪紅の素材・鳳仙花は平安時代に入って来た。この時代は発酵法で鳳仙花の色素を抽出して爪を染めたそうであるが、江戸時代にはカタバミで溶出した色素で手足の爪を染めた。マニキュアとペディキュアの前身である。

(八) 花鈿と靨鈿

日本の化粧史を著した書の多くは、『立女図』の花鈿と靨鈿に頁を割いているため、天平時代の化粧風俗のような印象を与えている。しかし、中国の絵を模写したと指摘されており、『立女図』以外に花鈿・靨鈿を示す資料が見受けられないので、第二話では、日本の化粧風俗として定着しなかったと推論した。

4 平安時代以降登場の化粧

平安時代から江戸時代までに行われた化粧の多くは、奈良時代以前に既に成立していた。ここでは、平安時代以降に始まった化粧について括める。

(一) 化粧という言葉の歴史

わが国の化粧は、石器時代にその萌芽が認められたが、化粧を統括した用語は、奈良時代以前にはなく、平安期の事典『倭名抄(九二五)』にも記載されていなかった。

"粧"の字は九〇〇年前後の頃、『菅家文草』や『文華秀麗集』に厳粧や粧黛と記されるようになった。一方、紫式部などの女流文士たちは、化粧を"けさう"と仮名表記し、"化粧"と漢字表記した書は『久安四年記(一一四八)』が最初と思われる。

次いで、中世の表記は"化粧"と"けさう"であったが、一三世紀の『とわずがたり』を初出として"けわい"が登場するようになった。"けわい"の語源には諸説があり、化粧坂は妓楼のあったことに由来するという。

江戸時代には、仮名表記で"けしょう・けわい・けさう"と記されていた。他に"美容"、"みじまい"などもあった。

また、化粧品屋という総称はなく、小間物屋、紅屋、白粉所、香具所などで化粧品を扱っていた。なお、現存する柳屋本舗は一六一五年に創設。化粧品という言葉は明治二五年に登場した。

(二) 際化粧と舞台化粧

際化粧は一六六一年の『女郎花物語』に際墨が書かれ、それ以降にも幾つかの書に記されていたが、明治以降にはみられなかった。

舞台化粧の隈取りについては、一六九七年の『暫』が古く、隈取り化粧の最初は、市川団十郎の荒事歌舞伎(一六七七)まで遡る。写楽の役者絵は、目の周りを赤と黒で隈取り、月代を青く見せるために役者が使った油青黛も登場した。

(三) 基礎化粧品

基礎化粧品の御三家・クリーム、乳液、化粧水の名称は、中世以前の文献にはみられず江戸時代にも前二者はなく、化粧水は花の露、菊の露、江戸の水などの商品名で呼ばれ、化粧水としての花の露は一七〇九年の『吉原徒然草』以降にみられた。『都風俗化粧伝』には、蘭引きによる香り水が記されていた。

一九世紀には、髪油を下地オイルとか顔の艶出しに利用し、一八世紀の書には香油塗身と記載されていたので、髪油や香油をスキンケアに利用することもあった。また、糠袋は乳液の機能を果たしていたであろう。

一九世紀初期の『浮世風呂』や『都風俗化粧伝』に、現在の薬用化粧品に相当する天花粉、美白料などが紹介されていた。

(四) 近代以降に導入された化粧品

クリームと乳液は近世以前にはなかった。アルカリ金属の少ないわが国では、乳化技術が育たなかったのであろう。明治二〇年にコールドクリームが発売されたのが初の資料であった。

そのほか、メークアップ品のアイシャドー、ファンデ

ーション、基礎化粧品のパック、医薬部外品のパーマネントウェーブ剤などは、いずれも近代から現代社会に入ってから導入された化粧品である。

参考文献

村沢博人、津田紀代、化粧史文献資料年表、ポーラ文化研究所、一九七九

世界美術全集21、日本Ⅲ、平凡社、一九五七

世界美術全集13、日本Ⅱ、平凡社、一九五七

徳川美術館名品集1・絵巻、一九九三

司馬遼太郎、街道をゆく43・三浦半島記、朝日新聞、一九八二

樋口清之、化粧の文化史、国際商業出版、一九八二

津田紀代、化粧の文化史、日本化学会編、お化粧と化学、大日本図書、一九九三

坂本太郎ら、日本書紀、岩波文庫、一九九四～九六

倉野憲治、古事記、岩波文庫、二〇〇三

邦光史朗、消えた邪馬台国、廣済堂、一九八一

中村明蔵、隼人の古代史、平凡社新書、二〇〇一

村沢博人、顔の化粧史、東書選書、一九九二

佐賀県教育委員会、環濠集落・吉野ヶ里遺跡、吉川弘文館、一九九〇

大塚初重ら、吉野ヶ里遺跡は語る、学生社、一九九二

岡田康博、縄文都市を掘る、NHK出版、一九九七

石田かおり、化粧せずにはいられない人間の歴史、講談社新書、二〇〇〇

阿部芳郎、縄文の暮らしを掘る、岩波新書、二〇〇二

東野治之、正倉院、岩波新書、一九八八

田中琢、佐原真、考古学の散歩道、岩波新書、二〇〇四

埴原和郎編、日本の起源、小学館創造選書、一九八六

吉村武彦、日本社会の誕生、岩波新書、一九九五

朝日新聞日刊〇四年版、五・一（高松塚）、五・二（キトラ古墳）、六・一二（飛鳥美人）

中山喬史、まんじ、一〇二、二〇〇六

白石太一郎、古墳とヤマト政権、文春新書、一九九九

（次号は第四話・古代中国の化粧文化）

還暦からの考古学（十六）

三角縁神獣鏡（さんかくぶちしんじゅうきょう）に対する考え方の変化（その十）

中山喬央（たかひろ）

荒神谷出土銅鐸・銅矛の鉛同位体比

『まんじ百十一号』において荒神谷出土銅剣の鉛同位体比を、鉛鉱石の性質を最も良く表すA式図関連指数を基にして十七通りに分類し、それぞれの鉛鉱石産出鉱山を検討いたしましたが、それに継ぐものとして、銅剣の出土地点から僅か東へ七mの埋納坑から検出された、銅鐸六個（菱環鈕式銅鐸一個・外縁付鈕式銅鐸五個）と銅矛十六本（中細形銅矛二本、中広形銅矛十四本）について同様の分析を行います。

先ず銅鐸ですが、製作時期が銅剣よりも古く、弥生時代前期終末期から弥生時代中期前葉にかけてと考えられています。

銅鐸1

外縁付鈕式に入る非常に個性の強い銅鐸である。目を表現した邪視文（じゃしもん）銅鐸と同じように、鋳型の合わせ目には み出た鰭に複合鋸歯文があり、鐸身の断面形も丸い。吊り手（鈕（ちゅう））は、断面が二段になっており、他の銅鐸に全く見られないものである。更に鐸身の文様も、碁盤編のような市松文様とか、重弧文など、普通の4区袈裟襷（縦横区画帯）文様とは全く違っている。この独自性から国宝に指定されている。

この銅鐸の鉛同位体比指数は、17.905・0.8690・2.1537で、これはGJ6太良・秋田の17.711・0.8857・2.1811と51円山・神岡の18.132・0.8597・2.1252の平均値17.921・0.8727・2.1531が一致し、日本列島産の鉛鉱石を使用していたことは明らかである。

銅鐸2

この銅鐸は4区袈裟襷文銅鐸で、舞（銅鐸の上部、すなわち天井部のこと）の穴が一個で、鐸身の穴が第2横帯に接している。これと同じ特徴を持っているのが3号銅鐸・6号銅鐸で、兄弟銅鐸といわれ、皆、外縁付鈕式銅鐸Ⅱ・1式に入る。すなわち外縁付鈕式銅鐸のなかでは最も古いものである。

この銅鐸の鉛同位体比指数は18.963・0.8283・2.0812で、これは朝鮮半島の418第一蓮花・慶尚北道の18.981・0.8295・2.0627を二倍にしたものと、430豊山金山・忠清南道の19.014・0.8369・2.1152を合算した指数、18.992・0.8319・2.0802と一致するので、この銅鐸は朝鮮半島産の鉛鉱石を使用していたことになる。

銅鐸3

外縁付鈕式銅鐸であるこの銅鐸は、大きさ、文様構成、鋳型に生じたひび割れの状態などから、伝徳島県脇町出土銅鐸と同じ鋳型で製作されたと考えられているものである。

この銅鐸の鉛同位体比指数は、18.493・0.8451・2.1078で、42倉谷・石川の18.456・0.8464・2.1069と一致しており、日本列島産の鉛鉱石を使用している。

銅鐸4

この銅鐸は吊り手の形からⅡ・1（外縁付鈕1）式とされているが、鋳型の合わせ目にはみ出た部分の鰭が無文で、吊り手の斜線文と連続せず、下辺横帯の鋸歯文が下向きというⅠ・2（菱環鈕2）式の要素も備えている。

鉛同位体比指数は19.009・0.8271・2.0749で、411新礼美・江原道の19.210・0.8251・2.0216と、430豊山金山・忠清南道の19.014・0.8369・2.1152の平均値19.112・0.8310・2.0684がかなり近いので、これは朝鮮半島産の鉛鉱石を使用していた可能性が高い。

銅鐸5

この銅鐸は、吊り手に外縁がついておらず、銅鐸側縁の鰭がないで、銅鐸最古段階のⅠ・1（菱環鈕1）式であるとされている。製作時期は弥生前期末から中期前葉で、永年にわたって「鐘」として使われていた事が、銅鐸内面の突帯が磨り減っていることから分る。

鉛同位体比指数は18.954・0.8278・2.0805で、これは418第一蓮花・慶尚北道の18.981・0.8295・2.0627を半分と、409三宝・京畿道と416第一蓮花・慶尚北道を四分の一ずつ合わせた指数18.946・0.8332・2.0796と符合するので、朝鮮半島産の鉛鉱石を使用していたものと考えることができる。

銅鐸6

2・3号銅鐸と同じく外縁が付いており、天井部の舞型持孔の穴が一つで、鐸身型持孔の穴が第2横帯に接していることなどからⅡ・1（外縁付鈕1）式、4区袈裟襷文銅鐸となる。

この銅鐸の鉛同位体比指数は19.869・0.7992・2.0315である。

この指数に最も近い指数は、416第一蓮花・慶尚北道の20.046・0.7931・1.9613と417第一蓮花・慶尚北道の19.479・0.8118・2.0113の平均値19.762・0.8024・1.9863である。

このなかで208/206である2.0315と1.9863が異なるが、次の理由によりこの銅鐸の鉛鉱石は朝鮮半島産のものを使用していると考える。

その理由は、416第一蓮花と417第一蓮花は同じ鉱山であるが両者の指数には隔たりがあることに起因する。このように同一鉱山で指数に隔たりが生じるケースは岐阜県・神岡鉱山、秋田県・太良鉱山でも発生しており、第一蓮花鉱山で場所を変えて鉱石の鉛同位体比指数検出数を増加させれば、適合するものが見つかると判断したからである。

銅鐸の部のまとめ

型式の古い四点は朝鮮半島産鉛鉱石を使用し、相対的に新しい二点は、日本列島産の鉛鉱石を使用した事が明らかになりました。

銅　矛

銅鉾とも書かれます。銅剣と共に弥生時代利器として使われましたが儀器的なものもあります。柄を挿入するための袋穂（中国では銎と呼ばれる）が付いています。

型式は細形銅矛が一番古く、中細形銅矛、中広形銅矛、広形銅矛の順に変化していきます。

神庭荒神谷では十六本出土しています。

銅矛1

長さ69.4cm、重さは980gで出土銅矛中一番短くて軽い。型式は中細形銅矛a類で、時期は弥生時代中期中葉に作られたものである。

銅矛は本来、元部に作られた筒状の穴（袋穂）に長い柄を差し込んで槍のように突き刺す道具であるが、神庭荒神谷出土のものは全て筒状の穴の中に、鋳型の土である中子真土が残されていたので、柄をつける目的が無かったものと考えられる。また刃は鋳造後、研ぎ出してはいるが鋭利ではなく、なかには刃先に平坦面を作ったものさえ見受けられるので、これらは青銅製武器形祭器と見なされている。

銅矛1の鉛同位体比指数は17.772・0.8737・2.1589で、これはGJ6太良・秋田を三分の二、58持壁・神岡を三分の一混合した指数17.840・0.8777・2.1651と符合する。よって日本列島産の鉛鉱石を使用していると考えられる。

銅矛2

ほぼ銅矛1と同じ形態で中細形a類に入る。

鉛同位体比指数は、18.575・0.8431・2.1061で、42倉谷・石川を三分の二、43尾小屋・石川を三分の一使用した指数、18.561・0.8428・2.1019と一致するので、これも日本列島産の鉛鉱石を使用している。

銅矛3

銅矛1・2と比較するとやや長くなり身の幅も広く、中広形銅矛a類に入る。

この鉛同位体比指数は、17.732・0.8758・2.1664と銅矛1に近いが、指数が17.700・0.8700・2.1600のグループは、弥生時代日本列島で出土する青銅製品の最大シェアを占めていて、荒神谷出土銅剣でも三五八本中、一一八本が入っており、銅矛もこの3号以外に6・7・15・16号が入っている。

この3号は、GJ6太良・秋田を三分の二使用し53茂住・神岡を三分の一加えた17.811・0.8790・2.1684が符合し、これも日本列島産の鉛鉱石使用ということになる。

銅矛4

銅矛3よりも更に長く幅も広がり、重さは2160gと出土した銅矛十六本のうちで一番重いものである。型式は中広形銅矛b類である。

この銅矛は、刃部の研磨をする最終段階で、見る角度により光の反射角度が変り、刃部がキラキラと輝くようにと研ぐ方向を変えている。これは「研ぎ分け」と呼ばれるものである。

また部分的に赤色顔料が添付されてる。

この銅矛の鉛同位体比指数は、18.196・0.8558・2.1302と、42倉谷・石川の18.456・0.8464・2.1069と55茂住・神岡の18.024・0.8648・2.1407の中間点に三指数共に入り、それらの平均値18.240・0.8556・2.1238とも一致するので、日本列島産の鉛鉱石を使用していたことは明白である。

銅矛5

中広形銅矛b類に入る。

この銅矛は、袋部の中に入る鋳型の土である、中子真土を支えるピンの跡が、袋部側面に約2mmの円形の痕跡として残っていた。その上、袋部の鋳型の土は残されたままの状態で発掘されている。

この銅矛の鉛同位体比指数は18.960・0.8300・2.0913である。

これと近い指数を持つ鉛鉱石は、その性質を良く表す

A式図関連では、日本列島の43尾小屋・石川の18.772・0.8356・2.0921があり、一方、生成年代を反映するB式図関連では、朝鮮半島の418第一蓮花・慶尚北道の18.981・0.8295・2.0627がある。

この両者の平均値は18.876・0.8325・2.0774となり、206/204と207/206の数値はかなり接近する。第一蓮花鉱山の鉛同位体比指数は場所によりかなり変化するので、指数が符合する鉛鉱石が今後見つかる可能性が高く、この銅矛は日本列島産と朝鮮半島産双方の鉛鉱石を使用して鋳造されたものと考えられる。

銅矛6

中広形銅矛b類に入るものである。

この銅矛に部分的についている赤色顔料は水銀朱であった。

この銅矛の鉛同位体比指数17.791・0.8740・2.1630は荒神谷出土銅剣三五八本の約三分の一が入るグループに属している。

GJ6太良・秋田を三分の二、55茂住・神岡を三分の一混合した17.815・0.8787・2.1676と符合し、日本列島産鉛鉱石を使用しているということになる。

銅矛7

この銅矛には先に銅矛4で述べた刃部の「研ぎ分け」がみられる。更に袋部から四八㎜のところでも鋳型の土である中子真土が詰められており、青銅部分の厚さは僅か一～三mmで、原料を節約して製品を完成させた技術力の高さをうかがい知ることができる。

この型式は6号と同じく中広形銅矛b類であるが、鉛同位体比指数も、6号と極めて良く似た17.768・0.8742・2.1637であり、日本列島産の鉛鉱石使用となる。

銅矛8

中広形銅矛b類である。7号と同様、刃部に「研ぎ分け」が見られる。

この鉛同位体比指数は17.994・0.8667・2.1516で、荒神谷銅剣A1の17.966・0.8676・2.1528と一致する。

これに近似する指数はGJ6太良・秋田の17.711・0.8857・2.1811と57神岡・漆山坑、GJ19対州・長崎、425漆谷・慶尚北道、427将軍・慶尚北道を等分に混合すると得られるが、問題は三つの指数が揃っては一致しないことである。

すなわちGJ6太良・秋田と57神岡・漆山坑の平均値は17.945・0.8718・2.1512と17.945と2.1512は一致するが、0.8718が少し外れ、GJ6太良・秋田と427将軍・慶尚北道のそれは18.063・0.8685・2.1459で、こちらは0.8685は近いが、18.063と2.1459が少し離れてしまう。従って今のところ日本列島産鉛鉱石のみの使用なのか、日本列島

産と朝鮮半島産の鉛鉱石を混合したものを使用したのかは結論が出ないのである。

銅矛9

中広形銅矛b類に入る。これも刃部に「研ぎ分け」が見られる。また次に述べる十号と形状が相似しているので同笵銅矛の可能性があるといわれている。

またこの銅矛は、先端となる鋒部側面が平坦に研磨されている。

指数は17.806・0.8730・2.1651で、GJ6太良・秋田三分の二と53茂住・神岡三分の一を混合した17.811・0.8790・2.1684と一致するので、日本列島産の鉛鉱石使用である。

銅矛10

中広形銅矛b類に入る。これも刃部に「研ぎ分け」があるが、同笵銅矛の可能性があるといわれている9号のような鋒部側面の平坦研磨はない。

その一方でこの銅矛には、鋳造の際の湯周りが悪くて欠けた部分を、後から補う「鋳掛け」の円形の足がかりと言われているものの痕跡が、袋部にあることから、丁寧に補修が行われていたことが分る。

鉛同位体比指数は、同笵銅矛と目されている9号とは異なり18.271．0.8548・2.1297で、同じ坩堝で同時に製作されたものでない事は確かである。

この指数は42倉谷・石川と53茂住・神岡の平均値18.234・0.8560・2.1249と一致し、日本列島産の鉛鉱石使用となる。

銅矛11

これも中広形銅矛b類に入る。

鉛同位体比指数は17.908・0.8701・2.1583と、前述荒神谷銅鐸1号の17.905・0.8690・2.1537と相似するが、こちらはGJ6太良・秋田の17.711・0.8857・2.1811と同じ円山・神岡でも番号違いの52円山・神岡との平均値17.906・0.8729・2.1542の方がより一致する。

日本列島産の鉛鉱石使用である。

銅矛12

中広形銅矛b類である。

指数17.824・0.8721・2.1607は、GJ6太良・秋田を三分の二、44栃洞・神岡を三分の一とした17.867・0.8761・2.1599と一致するので、日本列島産鉛鉱石使用である。

銅矛13

中広形銅矛b類に入る。

この銅矛にも刃部に「研ぎ分け」が見られる。

鉛同位体比指数は17.989・0.8656・2.1451で、これは53茂

住・神岡の18.012・0.8656・2.1430と指数が一致する。従って日本列島の鉛鉱石使用ということになる。

銅矛14

これは中広形銅矛a類である。

鉛同位体比指数は17.877・0.8704・2.1539と銅矛11の17.908・0.8701・2.1583、荒神谷銅剣A22の指数17.883・0.8704・2.1553、荒神谷銅鐸1の17.905・0.8690・2.1537と近似し、GJ6太良・秋田と52円山・神岡の平均指数17.906・0.8729・2.1542と符合するので日本列島産鉛鉱石使用という事になる。

銅矛15

中広形銅矛b類である。この刃部にも「研ぎ分け」が見られる。

鉛同位体比指数は17.727・0.8763・2.1642と銅矛3・6・7及び次に述べる銅矛16と共に、荒神谷出土青銅製品鉛同位体比指数が集中しているグループに入る。

GJ6太良・秋田三分の二と55茂住・神岡三分の一を混合した17.815・0.8787・2.1676と符合し、日本列島産の鉛鉱石使用となる。

銅矛16

中広形銅矛b類に属す。鉛同位体比指数は17.748・0.8755・2.1649で、銅矛15の指数と近似しており、これも日本列島産鉛鉱石使用である。

銅矛の部まとめ

荒神谷銅矛の作成時期は、中細形a類が弥生時代中期中葉で、荒神谷銅鐸よりやや遅く、荒神谷銅剣と、ほぼ同じ時期になります。中広形a類と、中広形b類は、それより少し後の、弥生時代中期後葉にかけて作られたものと考えられます。

作られた場所は、中細形銅矛a類の鋳型が福岡県・大谷遺跡、中広形銅矛b類の鋳型が佐賀県・安永田遺跡から出土しているのに加え、綾杉状の「研ぎ分け」を持つ中広形銅矛は何れも北部九州から出土しており、更にそれらの分布が北部九州に集中しているので、同地域で作成され出雲に搬入されたものと考えることが妥当だと思います。

使用された鉛鉱石は、中広形b類に属し、中子真土を支えるピンの痕跡が明瞭に残っていた5号と、「研ぎ分け」の見られた8号に、朝鮮半島産の鉛鉱石が入っていた可能性がある他は、全て日本列島産の鉛鉱石を使用していました。

また銅矛11・14と荒神谷銅鐸1、と荒神谷銅剣A22の鉛同位体比指数がそれぞれ近接しているのは、それら銅

剣・銅鐸の原鉱石精錬場所、若しくは製作現場が北部九州である可能性を否定できず、一方で同笵の可能性があるといわれていた9号と10号の銅矛の鉛同位体比指数が明確に異なっていたことは、見方を変えれば、異なる場所、異なる時期においても同一のものを作り得る能力を当時の工人が有していた事の証にもなります。

これをもちまして神庭荒神谷出土青銅製品についての鉛同位体比分析に関する考察を終ります。

古代の銅および青銅の構成元素

『保存科学』29号に掲題の項目が掲載されており、『まんじ』111号（鏡その7）で、これに関連する記事を掲載したところでしたので、一文を挿入することといたしました。

表—2「古代の銅および青銅の化学組成」

夜須町峯遺跡（内行花文鏡・弥生時代 BC3—AD3世紀）
銅60.4%、錫24.5%、鉛4.64%、砒素0.33%

武蔵国国分寺跡（銅造仏・古墳時代 AD5—7世紀）
銅88.8%、砒素0.99%、錫0.34%

トルコ・カマン遺跡（青銅製ビン No.8 フリギア期 BC4—6世紀）
銅90.9%、錫6.3%、鉛0.64%、鉄0.25%、砒素0.2%

トルコ・カレホユック遺跡（銅製ビン No3・アッシリア期 BC15世紀）
銅96.6%、砒素0.75%、鉄0.52%

時代を超え、地域が異なっている四つの遺物ですが、トルコ・カマン遺跡出土のビンと日本列島福岡県・夜須町峯遺跡出土の内行花文鏡には、錫が使われており、トルコ・カレホユック遺跡出土のビンと武蔵国国分寺跡出土の銅造仏には砒素が使われるという大きな違いがあります。その上、トルコでは砒素を使用した銅製品の方が早く始まっており、一方日本では錫を使用した青銅製品の方が先んじております。

この論考では、砒素を使用したものを銅製とし、錫を使用したものを青銅製としていますが、『まんじ』111号「鏡その7」のなかの「錫の含まれていない青銅」でも説明いたしましたが、「ブルガリア・上トラキア平野の青銅器時代研究」では、砒素と銅の合金を「砒素青銅」として説明しております。

一方、英語のbronzeは砲金すなわち大砲の金属を指す言葉で、これが現在青銅という意味でも用いられているわけであり、尚且つ金属の専門家の間でもAl-Bronze、Mn-Bronzeというような用語が使われております。

これらを念頭において、必ずしもbronzeすなわち銅・錫と鉛の合金という意味だけでは使われていないということで、対処しなければならないと考えます。

話は変りますが世界で最も早く金属文化が発生した肥沃な三日月地帯の周辺には、銅と鉛の鉱山は沢山ありましたが、錫の鉱山はなく、遠くアフガニスタン・イラン国境地帯で産出された錫鉱石を輸入しなければなりませんでした。

その為当時オリエント一帯では錫をめぐる交易が活発に行われていました。

このように古代オリエントでは、少量で銅を強靭な金属とする砒素を混入した合金銅が出現し、次いで銅に錫と鉛を混合した青銅が現れることとなります。

極東に目を転じますと、今のところ、中国大陸・朝鮮半島では明確な錫鉱石の産出鉱山が見つかっておりません。そこで日本列島の錫鉱山の状況について説明し、これら鉱山の錫鉱石が、当時既に開発されていたのかどうか、あるいは、大陸・半島と列島間において交易に利用された可能性があるのかどうか考察してみたいと思います。

日本列島の錫鉱石

この件につきましては『まんじ』108号「還暦からの考古学」（十三）の「錫石」の項でも簡単にふれました。

この「錫石」は花崗岩類に伴う事が多く、砂錫としても産するものです。これは黒褐色で錫の含有量は79%に達します。今ひとつ「黄錫鉱」は、しばしば黄銅鉱と一緒になっています。錫の含有量は28%ですが、銅の含有量が30%あります。

ここで中国地方の金属鉱床である広島市可部町の可部鉱山と島根県美都町にある都茂鉱山の錫鉱石について説明します。

可部鉱山の錫鉱石は斑銅鉱、閃亜鉛鉱と相互境界を示す黄銅鉱中に認められ、都茂鉱山のそれは斑銅鉱、閃亜鉛鉱、黄銅鉱等と接して晶出しています。

構成比率は次の通りです。

都茂 150—9—1
銅38.57%、鉄9.48%、亜鉛3.91%、錫19.54%、硫黄28.45%。

都茂 150—9—2
銅38.01%、鉄9.74%、亜鉛3.55%、錫19.45%、硫黄27.67%。

可部1
銅38.16%、鉄11.41%、亜鉛3.71%、錫19.38%、硫黄28.63%。

可部—2
銅38.44%、鉄11.24%、亜鉛3.48%、錫19.33%、硫黄28.84%。

一方日本列島内で錫を産出する主要鉱山は次の通りです。

大分県大野郡緒方町
　豊栄鉱山（錫・鉛・亜鉛・硫化鉄）
大分県大野郡緒方町
　蔵内尾平鉱山（鉛・亜鉛・錫）
大分県南海部郡宇目村
　新木浦鉱山（錫）
宮崎県西臼杵郡日の影町
　見立鉱山（錫・硫化鉄・鉛）
鹿児島県鹿児島郡谷山町錫山
　九重鉱山（錫）

文献では『続日本紀』文武天皇二（六九八）年条に、伊予国が白鉛（錫と鉛の混合物）を献じた記載があります。

錫鉱石の国内製錬所
　兵庫県生野（粗錫、精錫）
　広島県竹原（錫、アンチモニー、セレニウム、電解二酸化マンガン）
　愛媛県新居浜（電気金、電気銀、電気鉛、電気錫、パラジウム、セレニウム）
　福岡県東邦金属（モリブデン、金、銀、電気銅、電気鉛、電気錫）
　大分県大分（粗錫）
　大分県新木浦（粗錫）

このように日本列島では中国・四国と九州地方に錫の鉱山が集中して存在しているようです。

話は変りますが、日本列島に入って来た銅製品の鋳造技術は、中国大陸・朝鮮半島のそれに見る如く、先ず銅と錫・鉛の合金である所謂青銅であったことは間違いないものと思われます。

これらのことから、当初より日本列島のこれら錫鉱山が開発され、青銅製品に利用された可能性は高いと考えます。

このことは楽浪郡が成立したBC108年以降、この地方から競って朝貢していることと密接な関係があるのではないかと思われます。朝貢すなわち先進文化である金属加工技術を導入するためには、先方の喜ぶ物を持参しなければならず、それには錫鉱石、或いは荒吹きした錫のインゴットが最高の交易品になったのではないかということです。

その他大陸からもたらされたものとしては、福岡県前原市・三雲遺跡、春日市・須玖遺跡で出土したガラス璧

があり、伝宮崎県串間市出土の玉璧もあります。

終わりに弥生時代中期の製鉄遺跡跡といわれている、宮崎県延岡市祝子の千光寺裏山の「金糞（かなくそ）わんず」の成立理由について考えてみます。

ここは、錫鉱山として紹介した、大分県・宮崎県の四つの鉱山とは何れも地理的に近接した場所にあり、加えて日向の国には有名な西都原古墳群の存在と、当時大陸から搬入された最高の貴重品である玉璧の出土伝承地もありますので、一見地理的には裏側となるこの地方が、錫鉱山の存在により北部九州同様、大陸・半島との重要な交易拠点の地位を占めており、いち早く金属製煉技術の導入が出来たからだと愚考します。

参考文献

浅野五郎『鉱山地質ハンドブック』朝倉書店、一九六二年。
内田哲男・平尾良光「ICP分析法による銅製考古学的資料分析の基礎的研究」『保存科学第29号』東京国立文化財研究所、一九九〇年。
大橋周治『鉄の文明』岩波書店、一九八三年。
添田晶「中国地方の金属鉱床に伴う錫の起源」『鉱山地質』23日本鉱山地質学会、一九七三年。
延岡市史編纂委員会「弥生文化」『延岡市史』上巻延岡市、一九八三年。
松本岩雄「神庭荒神谷の青銅器は何を語るか」『古代出雲文化展』島根県教育委員会、一九九七年。
馬淵久夫・平尾良光「鉛同位体比法による漢式鏡の研究」『MUSEUM』370東京国立博物館、一九八二年。
馬淵久夫・平尾良光「東アジア鉛鉱石の鉛同位体比」『考古学雑誌』73―2、日本考古学会、一九八七年十二月。
馬淵久夫他「島根県荒神谷遺跡出土銅剣・銅鐸・銅矛の化学的調査」『保存科学第30号』東京国立文化財研究所、一九九一年。

鏡（その8）

中山喬央（たかひろ）

天の鏡
あらまし

ダンテは中世と近世の中間的な時代を生き抜いた、イタリア・フィレンツェ出身の詩人で、政治家でもありました。彼の初恋の相手であったベアトリーチェの早逝が、彼の文学に大きな影響を与えたことは有名です。彼は一三〇〇年に市共和国の六統領の一人になりますが、翌年失脚し、以後半生を流浪しながら文学を志し数々の名著を著しています。

代表的な詩編『神曲』は、一三〇七～一三二一年にかけて地獄編・煉獄編・天国編の三部に分かれて作られていますが、その内容は人間の霊魂が罪悪の世界から悔悟と浄化の段階を経て、更に永遠の天国へと向上精進する経路を描いたもので、中世キリスト教世界観の総括であると共に、壮大で新鮮な幻想と、深刻な社会批判をも含んだものとなっています。

その「天国編」第九歌六一～六三に

この天上には玉座と呼ばれる鏡があり
そこに審判者たる神が照り映えています。

と書かれています。

更に、一九四四年に刊行されたH・D・オースティン著の「ダンテと鏡」『イタリア研究』ではダンテの作品中に三十以上、鏡について言及していると数え上げています。

イタリア・ボローニャの北北東に位置する、フェラーラのユダヤ人、ラファエル・ミラーミは、一五八二年

『鏡の科学』の序説「鏡の科学の大いなる有用性」で、次の様に彼の考えた鏡の基本的な要素を列挙しています。

反射光学は高等思考に属する。
賢者は先ず始めに隠秘学と稀少科学、とりわけ映像が対象の像を違った姿で示す鏡の作用を研究する。
反射光学は、人間の知性を粉飾するたんなる思弁（実践と対立する観想・理論）ではない。それは次に述べる分野で役立つものである。

鏡の科学は占星術に有用である。天体、月の暗部、日食や月食、光の投射にかんする様々な問題に答える。
鏡の科学は、自然的現象を、統一的かつ主として思弁的に理解しようとする自然哲学に有用である。空中での虹や暈（かさ）（太陽や月のまわりに見える光の輪）、太陽光線によって生じる熱といった現象を説明する。
鏡の科学は神の哲学に有用である。ダンテのあの偉大な『神曲』にはこうあると「前述の詩」を引用し、更に「神に選ばれた者に現れた多くのヴィジョンは、確かに大いなる神秘という他はないが、ヘブライ語で鏡を指示する言葉と、同じ重みを持つ言葉によって指示されている」
と述べています。

更にミラーミは
このように鏡にはみずから特性、魔術的能力、そして濫用がある。
ピタゴラスの鏡は、夜間でも遠くの物が認められるくらい明るく輝き、技術的工夫もこらされているので、月面に文字が読めると思われるほどであった。
自然の最初の道具である火を作り出すことで、鏡は人間に最大の喜びをもたらした。その発明者は、ギリシャ神話のチタン族の英雄、プロメテウスであった。彼はまたアトラスの兄弟でもあり、天上の火を人間に与えたことにより、ゼウスの怒りを買い、コーカサス山に鎖で繋がれ大鷲に彼の肝臓を食われたが、ヘラクレスによって助けられた。また水と泥から人間を創り、他の獣の持つ全能力を付与した。
彼は炎を地上にもたらして、天の神々の嫉（ねた）みを買い、そのため神々は同じ道具を用いて炎をかきたて続けることになった。
最初の地上の火が、火打ち石によって獲得されたとする通説は誤りである。
といっています。

このように、ミラーミの「鏡の科学の大いなる有用性」は、技術的実験室であると同時に、劇場であるとされた反射光学博物館でもあり、何世紀にもわたって蓄積され

た認識の源泉を含んでいました。

彼の文章は、鏡、その効能、その濫用、その伝説についての隠微稀少科学の様々な分野にわたり、その一つが本章の「天の鏡」と結びつきます。

月は鏡でなく、その表面も滑らかなものではない……ドイツ・ニュルンベルクの北に位置するバンベルクで、ガスパール・ショットが、一六五七年彼の刊行した『自然と人工の普遍魔術』の四四〇頁で、この事実を綿密に証明しなければならないと考えたのは、それとは異なる様々な主張が多くの人々の心にしっかりと根付いていたからです。

昔から鏡と月は直接結び付けられ、両者の関係は学問上の論争を巻き起こしていました。

フランス・リヨンのベルナール・スーシは、一六三六年刊行の『鉱物学あるいは自然哲学宝典』の「恒星の鏡あるいは月の鏡」という章のなかで、著しく目立つこの天体反射鏡のメカニズムはどうなっているのだろうか。その反射光の出所は何だろうか。という問題につき、彼は「月全体に反射能力が広がっている訳ではない。その前面だけが滑らかで煌めいている。裏面はガラスの鏡と同じようにざらざらして暗いはずである。月の上弦や下弦は、月食と同様、光を透さぬ側にあたる。太陽光線が引き留められる、見ることが出来ない部分を示すものである。光り輝く滑らかな表面だけが、銀色の光を放つのだ」と要約しました。

ベルギー・アントワープで一六一三年、『光学、全六巻』を発行したF・アギヨンは、その巻五、命題五六、四一九頁で、宙にぶら下がったこの天体が創り上げられたその方法について次の様に説明しています。

もともとそれは、でこぼこの塊だったが、ちょうど職工が鋳型に流し込んだ金属を細粉で磨いたり、半透明の物質を鉛で覆うように、自然が宇宙塵で磨きをかけたものである。

イタリア・ボローニャのJ・ビアンカーニが、一六二〇年刊行した『宇宙誌』第三部第二論第四章「月の姿について」一五四頁では、月を教会の鐘楼の上に据えられた太陽光を反射する青銅の球体に例え次の様に述べています。

ウェヌス（ビーナス）を表すエジプトの象形文字（ヒエログリフ）は円と逆十字で構成され、金星はそこから名前をとっているが、それは一つの鏡である。一方、月は球凸面鏡を構成して対象の像を縮小するが、夜に姿を見せるのは、縮小された太陽なのである。

円い月のなかに浮かび上がる顔

この問題については、プリニウス（二三～七九年）が、いち早く記述を残しています。彼は、ローマの将軍・官吏・騎兵隊長・属州提督・海軍提督を歴任し、軍事・歴史・読者に感動を与えるよう最も有効な表現方法を研究する修辞学・自然科学を研究し、七九年八月のヴェスヴィオ火山の爆発の際、科学的調査を試みて、現場で有毒ガスの為、窒息死しますが、月に心を奪われ、彼の著書『博物誌』第二巻九で、その神秘性について触れております。

又古代ギリシャの哲学者・著述家であるプルタルコス（四六年頃～一二五年頃）は、主としてソクラテスの弟子、プラトンの唱えた霊魂不滅の主張をした霊肉二元論、すなわち肉体的感覚の対象物である個物は真の実在ではなく、霊魂の目で捕らえられる個物の原型であるイデア（理性的認識の対象となる永遠不変の実在。近世以降、観念あるいは理念の意となる）が真の実在であるとした、プラトン哲学の流れをくんでおりましたが、彼の著書は『円い月に現れる顔についてのプルタルコスの書』として、ドイツの天文学者J・ケプラーにより一六二四年ラテン語に翻訳刊行され、又アミヨによるフランス語訳がパリで『道徳論集』として、一五七二年出版されていま す。そのアミヨの翻訳本の中で、プルタルコスは月のことを次の様に述べています。

輝かしい火にぐるりと
取り囲まれて、上気した乙女の顔が
真ん中に現れたが
その眼は青というよりは緑色に見え
頬はわずかに朱に染まっている。

人間の顔をした円盤が認められたわけですが、これはペルシャの詩人や彩色細密画家とか、西洋中世の民衆版画の中でも見付けることができるものであると、J・バルトルシャィティスが一九五五年パリで刊行した『幻想の中世』一三二頁以下及び図六三で述べています。

又「外の海」「オケアノス（ギリシャ神話で、チタン神族の水の神。世界中の河川の神々の父）の海」あるいは「月の海」については、人の住む大地を取り囲む水の層が、月のなかに認められたものであり、これらについてはP・ランジェアールは一九三五年パリで出版した『プルタルコスの月の円い顔、原典批判』二十頁（九三〇）で次の様に表現しています。

高くせり上がった大波が見える

面と向かった鏡に現れた像のように。

この天体の人間形態的であると同時に水性的なヴィジョンのうちに、すべてが奇妙な表情として見えたわけです。

海洋の映像のなかの女性像を作り上げる基になっている月の暗部とか、「外の海」の影とは、どこから来ているのか。この海は一つに繋がったものだったのだろうかとか、目や唇を縁取る大陸や地峡によって仕切られた数多くの海があるのだろうか。そこでは又入射角と反射角が関係しなかったのだろうかというような疑問について、ランジェアールは反射光学的な幾つかの判断から、次のような仮説をたてました。

凹面鏡（月もその一つである）は、視点の変化無しで、次第に大きくなる一連の像を与える。

折畳式鏡（キルヒャー「ドイツの科学者、一六〇一～一六八〇年。イエズス会士。幻灯の発明者。疾病の原因探求に顕微鏡を応用し、伝染病学説を明確に述べ、また催眠術の実験を記録した最初の人」の装置）は、一つの顔を四重化し、より明瞭な二つの顔がぼんやりした二つの顔の背後に正しい向きで現れる。

プラトンの『ティマイオス』プラトン『全集』X、パリで一九二五刊行、一六三頁、によれば、鏡が一定の高さより上にあがると、対象の映像に少しずつ変化が生じる。

ある人達によれば、月はいたるところ、でこぼこしていて、その、でこぼこが互いに結ばれた映像の網を構成し、それが丁度、鏡同士の戯れのように、我々の目に映る。

更に神秘的な解釈が技術的な分析を補完する。月の顔は魂であり、地球は肉体、太陽は頭脳の知的活動ということになる。知性の影響を受けた魂は、それが包み込みかつ浸透する肉体に、今度は月の映像を刻み込む。その結果、太陽と地球の中間に位置する月は、人間の特徴を帯びて天の啓示として姿を見せるのである。

これがランジェアールの仮説の概要です。

話をもとに戻します。

『円い月に現れる顔についてのプルタルコスの書』は、この題名が表しているように、月の顔は夢でも視覚の混乱でもないものとして、形態学的、かつ光学的な問題を提起していました。

そしてそれは霊魂の不死と輪廻を信じ、霊魂の救いのためにその浄化を説き、世界の根源は数で、一切は偶数と奇数から成立すると考え、特に数学と天文学の進歩に

貢献したピタゴラス学派を含む哲学者達のもとで議論されてきました。

そこでは様々な技術的考察が行なわれましたが、一番最初に問題になったのは、月には反射する金属あるいは装置が存在するかということでした。すなわち、月が対象の姿を送り返すことができるためには、本来反射に適さないのだから、水や乳のように流動的で滑らかな物体を持っていて、そこから蒼白さを一定時間借り受けなければならないという考えと、反射光学的メカニズムを考えるのが妥当かもしれないが、それが十分に力強い効果を生むかどうかは確かではないというものでした。

そして次のように考えました。

水や他の鏡からの反射は、その出発点に近いために強力で、太陽に向かう事も大いに可能である。しかし月からは、太陽が光線を送り込んでいるとしても、そうした光線は距離があるため、はじめから弱くぼんやりしていて消えてしまう。そして凹面鏡は反射光をもとの太陽光よりも強力にして送り返し、それはしばしば炎にまでなる（集光鏡）。反対に凸面鏡や球面鏡の送り返す光は、弱くぼんやりしている。

しかしこの仮説は、次の観察により否認されてしまいます。

もし水と月が我々の視覚に同一の効果を生むのだとすれば、満月の時には、月面に地球や植物や人間や星の像がなければならないだろう。

しかし月が地球世界を映す鏡であるという考え方は、絶えず支持者がありました。

月の暗部についてG・カルダーノは、鉛の一部を失った鏡のように、局所的変化に由来するものだと考えていましたが、その一方で古代人テーゼを呼び起し

それが鏡のように輝く大洋あるいは丸い地球の像であるとみなす者もいる。

と彼の著書『繊細な事柄について』ニュールンベルク、一五五〇年発行一一三頁と、『繊細な事柄と創意について』パリ、一五五六年刊行七八頁で述べております。

ギリシャの諷刺作家であったサモサテのルキアノス（一二五～一九〇年）は、月に上陸した時、幻想の鏡のなかに、彼がそこからやって来たところの宇宙の諸都市と諸民族を見ることができなかっただろうかと、アムステルダムで一七八七年刊行されたサモサテのルキアノス『本当の話』二六頁で触れられています。

又一六一三年ベルギー・アントワープで刊行した『光学、全六巻』巻き五、命題五六、四二〇頁で、F・アギヨンは月の暗部を、暗い谷や森といった陰った場所が星屑で磨かれた遊星に映った映像と解釈しています。彼は地球の幻影はどんな力によっても引き留めることが出来ず、天に飛び立つものであると考えました。

このように未知の海、女の顔の様相を帯びた魂の像、地球の風景の影が、しみのついた天体すなわち月のなかに次から次へと認められたわけですが、また太陽黒点の再生だと考えた者もおりました。

一六〇九年にヴェネツィアで天体望遠鏡を組み立て、太陽の黒点を発見したガリレイ（ガリレオ）は、アリストテレスの自然哲学を否定して、分析と合成との経験的・実証的方法を用いて近代科学方法論の端緒を開きました。彼がコペルニクスの地動説を是認して宗教裁判に付された事は有名です。しかし太陽がその軸上に回転していることを確認できた彼の太陽黒点発見の功績は、シャイナーの『秘密の板のうしろのアペレス、太陽黒点についての三書簡』がローマで一六一三年に刊行され、その三四頁と五一頁によって、シャイナー自身のものであると要求されます。

その根拠は、その輝く面と暗い広がりが、月のしみの中に映っているだろうという理由です。

このように月は、その構造が、球状、凸状、凹状であろうとなかろうと、その材料が、錫、磨かれた金属、鉛で覆われたガラス、水であろうとなかろうと、それが取り込む光景は、海であっても、地球であっても、太陽であったとしても、何時も一つの反射光学装置であると考えられてきました。

次の号では水滴と鏡について考えてみます。

参考文献

ユルギス・バルトルシャイティス著・谷川渥訳『鏡』図書刊行会、一九九四年。

成人式

勝山道子

昭和五十年　早々、高校の国文学の教師である高橋先生から電話があった。

内容は、「教え子だった　村手と云う　青年がこの春稲城市の市議会議員に立候補する。

高校時代は　真面目で　優秀な生徒であった、宜敷く頼む」

と云う事であった。私と高橋先生とは

東京の専門学校で　昭和十五年から昭和十七年まで二年間、専攻と学年は　彼女が国文科　四年、私が家庭科二年で違っていた。私は両親が　北京に居た為　当時　数ある寮の中で最も小さい二十人足らずの寮に入り名古屋の高橋さんも一緒だった。他の寮は五十人以上　収容されていた。小さい寮だけに　科が違っても親しくさせてもらい　卒業後も　東京の私が関西へ行く時通過駅でもある名古屋でお会ひする仲でもあったので交友は続いていた。

四月に　当稲城市での　市長　市議会議員の選挙が行われた。私が選挙執行の立場であった為　村手氏は理解してくれ　挨拶文で、済ませてくれた。

彼は高橋先生の推せんされるだけあって　見るからに好青年であり　新しい感覚で市政の一端を担って下さる事もよしと思っていた。そしてここの土地柄は、地元優先であるが　無事当選し、しかも好成績であった。

当選後も　新住民にもかゝわらず　充分旧住民の意向に応じた活動をしていた。

高橋先生の、当時珍しく、男子校の教師で　国文学と云う倫理的教育を推進している姿を思ひ、あらためて先生に対し　誇りと尊敬を感じた。

議員の任期は四年で　二期目も無事当選し、私も安堵の気持ちでいた。ところが二期目の　終り　つまり　八年近くたった時　私宅に来られ

「折角馴れた処ですが　田舎に帰り　家業を継ぐ為　三

期日は立候補できません　誰か私の代りになって呉れる人がいませんか」と話し、困惑する私を見て「私も頑張って探します」と云う言葉を残して帰って行った。それから一週間後に　再度私宅へ来られて「伊藤と云う女性、三十代、家族構成は　サラリーマンの夫、三才の男児、生まれたばかりの双児の女児の五人家族。公団に住んで居る。何とか頑張って　議員の仕事をやりますと云って引受けてくれました。彼女の力強い詞に安心して、バトンタッチが出来、早速引越しの準備に取りかゝります」と述べて帰って行った私は古い人間だ。思わず「エッ」と云った切り　とっさに了解出来ぬもどかしさ。然し月日のたつのは早く選挙は行なわれ　伊藤女史は実家の母　夫　近所のボランティアに支えられ何と最高点で　市議会議員の　議席を獲得した。私は彼女に会う度に幼い三人の子供は　「気をつけて」と云うのが口ぐせだった。

彼女の政治活動は緻密に調査　研究し、議会でも結構発言　議題提供をし、熱心さが　議会だより等で　報じられていた。私は地域での男女平等参画社会の　移り変りを学びながら、今は男性も　家事　育児　介護など無償の再生産にかゝわるべきだと云う事を思った。育児家事は専業主婦の仕事だとしか考えなかった過去に別れを告げるべく、一九七五年　国連は　女性の地位向上のため国際婦人年を定め行動計画を採択した。

そして十年毎に大会を開く事も決め、先ず　ブラジル、ケニア、北京そしてニューヨークで行っている。一方地域に於ても　男女共生社会をめざさうと助言者　講師を招き　少しづゝ　男尊女卑的な考へが改められ、実生活も変って来た。伊藤女史の子供達も幼稚園　小中学校と成長していった。私は　その頃になって　伊藤議員が専業主婦で　三人の子供を抱え　夫に万が一の事があったときを考へた。

平成三年頃は　男女共生をめざそうと　女性が政治にかゝわることは、日本全体としても少く。世界から「人権後進国」と云われていた時代であったが、自身の自立を考え　先ず夫　実家の母　自分の考えに賛同してくれる　ボランティアの協力で幼い三人の子の安全を守りながら　退任する村手氏の後継者として立ち上った勇気ある彼女、いや　自立を目指した女性として地域の関心は高く企業からの声援もあり　最高点で当選した。

この事実に基づき　私自身いや地域の学習への仲間が増えた　そして学習する間

昭和六十年には男女雇用均等法成立
平成二年　育児法成立
平成五年　女性に対する暴力の撤廃
平成十一年　男女共同参画社会基本法施行
平成十三年　ＤＶ防止法が成立した。

この様に国連の世界行動計画は着実に実行され　日本に於ても　若い　男女に変化をもたらしている。

平成十八年の成人の日　突然に二人の美しい振袖のお嬢さんが我が家にやって来た。

「先生　お陰で二人と一緒に成人式に出席して来ました」母親である伊藤議員のはずんだ声、私は思わずパァウと胸の熱くなるものを感じ、年のせいか涙が出た。

「おめでとう」

長男も就職して、この二人も大学生です。

成人式の姿にまばゆいものを感じる。

社　告（内規）

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同士の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額一、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇－〇－六四五九二一

加入者名　ま　ん　じ

青の漂流（七）

宅見勝弘

【前号までのあらすじ】

一八六九年（明治二年）五月、蝦夷地（北海道）白老の仙台藩元陣屋の近くのアイヌ集落で、アイヌ人夫婦と仙台藩士が斬殺された。その翌日、択捉島から帰還した支倉兵衛が現場に居合わせ、生き残ったアイヌの碧眼の幼女を保護した。幼女の手には犯人の物と思われる赤い花弁が残されていた。支倉は仙台に戻り、幼女を蒼と名付けて、育てた。成長した蒼は、両親の斬殺方法が生麦事件の殺害と同じ特異な剣術と気付いた。その後、蒼は結婚し、大津へ移った。大津で、ロシア帝国ニコライ皇太子が襲われる姿を目撃した。ニコライの碧眼が鮮血で覆われる姿に、蒼は白老の惨劇を連想した。ニコライ襲撃の犯人が西南戦争の官軍であったことから、白老の犯人が戊辰戦争の官軍ではないか、と連想した。その後、舅の高山左京が米比戦争の中、フィリピンで死亡した。蒼は長崎へ移り、安奈という女性と知り合った。安奈はロマノフ王朝の血を引き継いでいるのであった。

七　薩摩・野太刀自顕流

蒼が安奈の出生の秘密を知った後、外務省に勤める息子の優輔を蒼は安奈に紹介した。

優輔と安奈は結婚し、一九一九年（大正八年）十月二十五日、二人の間に男の子が誕生した。男の子は武と名付けられた。

武は両親と同様に黒眼であった。優輔と安奈にはそれぞれ碧眼の遺伝子を受け継いでいる筈であるが、両方の親から同時に碧眼の遺伝子を受け継がないと黒眼になる。

蒼の夫・京輔は、日清・日露戦争の後に負傷で退役した元軍人に仕事を紹介するようになった。長崎を中心に九州一帯で仕事をしていたが、六十五歳で引退した。

そして、京輔は蒼を連れて、出身地の鹿児島市に戻ることになった。

外務省に勤務していた優輔が、フィリピン転勤が決まり、安奈と一緒に赴任することになった。二人の息子である武は、鹿児島で京輔と蒼の夫婦の元で育てられた。

「鹿児島には赤い葵がたくさん咲いているのね」

鹿児島に住むようになって、蒼は仏桑華が多く咲いているのに気付くようになった。

それまで二度、京輔に連れられて、鹿児島に旅行したことがあったが、いずれも冬であって、仏桑華を見る機会が無かった。

白老の惨劇の際に幼児の蒼の掌に握られていた押花の花弁は既に朽ち果てていた。しかし、仙台の義母が写し描いた絵は色褪せず昔のままであり、蒼は絵を持ち続けていた。

「仏桑華の名前よりも『ハイビスカス』という名前の方がよく使われていますわ」

地元の人が仏桑華を指して、蒼に説明した。

その人は詳しいらしく、ハイビスカスは元々、エジプトの美の女神ヒビスに因んだ名前ということも話した。

ハイビスカスが初めて本土へ伝わったのは、慶長年間（一六一〇年頃）に薩摩藩主島津家久が徳川家康に琉球の花として献じたということであった。

蒼は尾形光琳の『仏桑華図』を思い出した。その時、徳川家康が愛でた花と聞いたことも記憶に蘇ってきた。仏桑華が島津家久から家康に送られた事実を、その時に確かめていたら、もっと早く薩摩藩と結び付けていた筈であった。

「ハイビスカスは、ハワイに多く咲いています」

地元の人の話では、ハイビスカスは日本人が移民をしているハワイに多く咲いているということであった。

「薩長の明治政府がハワイへの移民を勧めた影響で、ハワイ移民の出身は、長州の山口県が最も多く、薩摩の鹿児島も多いのですよ」

蒼は、ハワイの話を聞いて、義母の『アメリカの花』という話を思い出した。

「なんでもハワイに最初に移民したのは、戊辰戦争の間だそうです」

戊辰戦争当時、アメリカは南北戦争の影響で関係が薄くなっており、歴史を調べてもハワイ移民の話くらいしか出てこないと支倉兵衛が言っていたことを蒼は思い出した。

（お義母様がアメリカの花と言っていたのは、ハワイの花だったのだわ）

蒼は玉蟲左太夫の『航米日録』を思い浮かべて、航路を辿ってみた。

一八六〇年（万延元年）、義母の叔父である玉蟲左太夫を含む遣米使節団が日米修好通商条約の批准書を交換のため、太平洋を渡りワシントンを訪れた。遣米使節団は渡米の途中でハワイに寄港していた。

玉蟲左太夫自身は当時としては身分が高い訳でなかったので、ハワイ国王カメハメハ四世に直接に会っていないが、使節団の一行は国王に謁見していた。

玉蟲左太夫が採集したのは、アメリカ本土の花でなくハワイの花であった。ハイビスカスは、ハワイの州花である。

一九三二年（昭和七年）五月、海軍の青年将校が首相官邸を襲撃し、犬養毅総理大臣を暗殺するという五・一五事件が起った。

犬養毅は、孫文を通じてフィリピン独立運動を支援していた人物である。

さらに軍国主義の風潮が強くなり、一九三六年（昭和十一年）二月に、二・二六事件が起こった。

二・二六事件では、高橋是清大蔵大臣・斎藤実内大臣（元総理大臣）・渡辺錠太郎陸軍教育総監が青年将校に虐殺された。

高橋是清は、明治維新の際はアメリカ留学中であったが、明治政府には少ない仙台藩の出身であった。

渡辺錠太郎は九歳の娘の目の前で銃弾を浴びたのであった。蒼は、目の前で父親を惨殺された少女に自分自身の姿を重ねて、不憫に思った。

事件で岡田啓介内閣が倒れ、軍部による政治への影響が強まってきた。

軍国主義の風潮が強まる中、武は日本帝国海軍に入隊した。

文部省で学校教育の一環として剣道が採用されるのと同様に、海軍省でも実線のために剣道が採用されていた。

武は、もともと地元の鹿児島に伝わる流派で剣術を習っていたことから、頭角を現した。

一九三八年に武は、鹿児島で開かれる剣道の全国大会に出場することになった。

蒼は、あまり剣道の試合を見ることは無かったが、孫が地元の会場で出場するので、夫の京輔と一緒に試合会場に足を運んだ。

武の初戦の相手は、全国大会に何度も出場し、優勝経験も有る強豪であった。

武は試合が始まると、竹刀を下げ、下段の構えで相手を誘う様子であった。相手は上段に構えたまま、武の様子を見つめていた。

相手が面を打とうと突っ込んできた。武は右に避けた。同時に竹刀は、相手の右胴に打ち込まれた。

武が一本を取ったと蒼は思ったが、主審は一本を告げなかった。

「片手胴だ」

剣術の心得の有る京輔は、解説した。

片手でも一本が認められるが、打ち込みが不充分と判断されると、一本に看做されない。

試合が続行したが、武は再び下段の構えをした。先程と同じように相手が面を狙うと同時に、武は右に避け、相手の右胴を打った。

両手で打ち込んでいたので、今度こそは蒼は一本を告げられるだろうと思った。しかし、主審は少し迷ったようであったが、一本と取らなかった。

「平打ち胴だ。これも斜め下からなので、一本は難しいな」

京輔の説明では、胴への一本は斜め上からの打撃でないと、やはり不充分と看做されるようであった。

蒼は勝負の行方よりも武の剣の動きに、心を奪われた。白老の事件の記憶が蘇ったからである。武が使った剣術が、白老で自分の両親を斬殺した技に少し似ていると思ったからである。

武は下段の構えが通じないのを見て上段に構えなおしたが、一本を続けて二回取られて、敗戦した。

試合が終わって直ぐに武は京輔と蒼の元に駆け寄った。

「右胴を狙いすぎだな。逆胴（相手の左胴）を打てば良かったのに」

京輔は武に諭すように言った。

「真剣勝負だったら、片手でも下からでも勝っていたさ」

負けん気の強い武は弁明した。

蒼は、武が習っている野太刀自顕流の剣術に興味を覚えた。

翌週、蒼は稽古見学ということで、野太刀自顕流道場を初めて訪れた。

道場といっても、屋外であり、下は砂場であった。

道場には、武を含めた五十人位の生徒が練習をしていた。生徒は全員が裸足であった。

生徒が手にしているのは、自然の木をそのまま切っただけの木刀で、生徒の身長に合わせて、立てると胸ぐらいの長さであった。

木刀を上段に構えたままで、十メートルほど疾走した。木刀と同じ枝木を十数本束ねたものが、腰の位置くらいの台に横たえてあった。その束ねた枝木に対して、二十回ほど続けて打ち下ろしていた。

その後に師範の掛け声を合図に、生徒たちは素振りを始めた。生徒が木刀を鞘に収めているような状態から大きく右足を踏み込み、右手だけで斬り上げる動作を繰り返した。

鹿鳴館で、生麦事件のこと持ち出し、伊達（陸奥）正春が海江田信義に対して見せた動作を思い出した。そして、それは両親を斬殺した剣術に違いなかった。

「あの剣術は何というのですか」

蒼は指導者に、剣術について質問した。

「『抜即斬』という技です。野太刀自顕流の独特の剣術です」

その指導者は自ら誇るように力強く答えた。

「抜刀術と比べて、どのように違うのですか」
彼は、高齢の女性が剣術に興味を持ったのが珍しいと感じた様子であった。
「抜刀術では、あくまでも抜刀は相手の攻撃に対する防御になります。抜刀術は、その後の返し技で初めて自分から攻撃をします」
道場の師範は豪快に笑って説明した。
「しかし、抜即斬は抜刀そのものが攻撃になるのです。幕末には新撰組の近藤勇から『薩摩の初太刀をはずせ』と恐れられていたのですよ」
生麦事件の奈良原喜左衛門・海江田信義、桜田門外の変の有村次左衛門（海江田信義の実弟）も野太刀自顕流ということであった。
実戦での使い手は、野太刀自顕流しかいなかった。真剣の場合は刀の重みを考えると、下から上への攻撃はかなりの修練が必要になる。
野太刀自顕流は秘剣として薩摩以外の藩に伝わらなかったのである。幕末で抜即斬のような剣術を使うのは、薩摩藩の人間だけのようであった。
（父と母は『抜即斬』で殺された。犯人は薩摩藩士だったのだわ）

八　沖縄戦『集団自決』

白老の事件の犯人が薩摩藩士であると蒼が気付いてから一年後、一九三七年（昭和十二年）に、日中戦争が勃発した。
この年、優輔は安奈と共にフィリピンから帰国した後、外務省を退職し、那覇市の沖縄県庁に勤務することになった。夫の京輔が病気で亡くなったので、蒼は息子夫婦と一緒に沖縄市に住むことになった。
沖縄市にはハイビスカスの花が鹿児島市よりも多く咲いていた。ハイビスカスは沖縄市の市花になっている。
沖縄ではハイビスカスは『後生花』とも呼ばれ、葬式に使われたり、墓地に植えたりする習慣があった。
三十年前の第四代沖縄県知事の奈良原繁が生麦事件でイギリス人を斬った真犯人でないかという噂があった。
生麦事件について一般には、奈良原喜左衛門がイギリス人に最初に斬り付け、重傷を負わせ、海江田が止めを刺したとされている。しかし、噂では　奈良原喜左衛門でなく、弟の奈良原繁でないか、ということであった。
奈良原繁は一八九二年から十六年に亘って、沖縄県知事に在任し、『琉球王』と言われた。
官選知事として十六年に亘り、沖縄県民に圧制を敷いた奈良原繁に対する不満が噂になったかもしれなかった。



＜関連する人物＞

玉蟲左太夫(1823-1869)	仙台藩佐幕派 遣米使節団
陸奥宗光(1844-1897)	日清戦争時の外務大臣
海江田信義(1832-1906)	生麦事件の当事者 貴族院議員
高橋是清(1854-1936)	第20代内閣総理大臣
犬養毅(1855-1932)	第29代内閣総理大臣
ニコライ２世(1868-1918)	ロシア帝国最後の皇帝
アナスタシア(1901-1918)	ニコライ２世の第４皇女
奈良原喜左衛門(1831-1865)	生麦事件の当事者
奈良原繁(1834-1918)	第４代沖縄県知事 奈良原喜左衛門の弟

＜参考年表＞

1860年（万延元年）	日米修好通商条約批准書交換
1862年９月（文久２年８月）	生麦事件
1891年５月（明治24年５月）	大津事件
1917年３月（大正６年３月）	ロシア革命（二月革命）
1932年５月（昭和７年５月）	五・一五事件
1936年２月（昭和11年２月）	二・二六事件
1937年７月（昭和12年７月）	日中戦争開戦
1939年９月（昭和14年９月）	第二次世界大戦開戦
1941年12月（昭和16年12月）	太平洋戦争開戦
1945年３月（昭和20年３月）	沖縄戦米軍上陸

れんししゅう(恋詩集)しさくのかなしみより その六

松下壽男

車

私の車にあなたは乗らない
小さな車でうしろを走る
せわしなくバックミラーを見る
私が止るとあなたも止まる

この距離の示すもの
向かい合って話していても
あなたはあなたの車に乗って
私の行き先を案じている

よほど信用ないんだね
—あらどうして—と考えて
それからあなたは笑いだした

—そんなことはありません
自分の車で走りたかっただけなのよ—
あなたは私の車に乗ろうとしない

悲しいアメリカ —プラグマティズムの研究を通して—その一

松下壽男

1 現代の常識の哲学プラグマティズム

私たちは、日々考えながら生きています。その意味で私たちは、日常的な哲学者です。では私たちの日常の常識の哲学とは、どのようなものなのでしょうか。

私は、世間一般の現代日本人の常識の背後にある哲学を、プラグマティズムだと考え、その哲学と正対することを試みています。

そしてプラグマティズムとの正対を通して、現代の常識と、私自身が受け継いでいる日本人の伝統的な哲学との関わりについても考えてみたいと思うのです。

2 プラグマティズムを生んだ歴史風土の概観

プラグマティズムとは、アメリカで誕生した哲学思潮です。

新大陸の歴史や風土、とりわけフロンティアの形成や消滅がアメリカの常識を産み、その常識がプラグマティズムを独り歩きさせ、大衆文化の思想的背景になっているのではないかと、私は、考えています。

そこで私は、これから、プラグマティズム流の常識がどのようにして生まれ、姿を変え、広がって来たかを、歴史を追って考えていこうと思います。

そして考察を経た後には、プラグマティズムと真に正対する観点に立ちたいと思うのです。

1620～プロテスタンティズムと信教の自由

アメリカの常識は、勤と倹とで現世利を得ることが神の召命に通じるものとする、キリスト教新教の宗教難民の考え方が出発点でした。その土地は物と心（肉と魂）の対立を個人の良心の信仰によって解決できる新天地でした。同様に様々な宗旨を受け入れて、信教の自由がその植民地の常識になりましたが、道徳性は、宗教の戒律と個人の信仰とによって堅持されていました。

1787平等と民主主義

さらにアメリカは、ヨーロッパの様々な階層の移民を平等に受け入れ、民主主義が常識となりました。それを憲法も保障しました。

1776実証主義とジャーナリズム

旧大陸では教会やアカデミズムのしがらみから解き放たれていなかった実証主義が、ヨーロッパに先がけてアメリカ学問の常識となりました。それは、真実や法則は観察や実験を通して発見されるものだという考え方です。そして実証された法則は、技術に応用されて、広大な原野に文明を開く力を持ちました。新しい法則や技術、その応用の知識が実際に力になるとなれば、誰もが情報を求めます。こうして、教会やアカデミズムよりも、ジャーナリズムが常識を語り、国の独立を左右しました。

1706～1790建国の父フランクリン

そのようなアメリカの常識を体現した、代表的アメリカ人の一人がフランクリンです。フランクリンは科学者であり、ジャーナリストであり、アメリカを独立に導いた政治家でした。

1584～形成されるフロンティア

フロンティアとは、元は国境を意味していました。実際、入植当初は、先住民のインディアンと国境を接していましたし、独立後は、回りをイギリスの領土、さらにその外側をスペインの領土に取り囲まれていたのです。

現在のアメリカの国土は、かつては、イギリス、フランス、スペイン、メキシコ、ロシア、そしてハワイ王国の領土だったのです。

とはいえ、その土地は、ほとんどが原野でした。アメリカは、その原野を、外交と、戦争と、ドルの力で手に入れて、ひたすら開拓してきたのです。

そして開拓された地域と未開拓の地域との境をフロンティアと呼ぶのです。したがってフロンティアは、開発に従って漸西していったのです。

フロンティアの風景は、いつもそこから荒れ地が広がっているのです。そこは文明の果ての辺境とも言えるでしょう。しかし絶えず新たな富を生み出す、約束された土地なのです。そして開拓の夢の膨らむ恵みの土地でもあるのです。とはいえ、これから何が起こるか解らない未知の領域なのです。

だからこそ、人の経験と知識と技術をいつも新たに試そうとする、実験の場でもあるのです。そして理念や権威よりも開拓の実現こそが、人の力の証明なのです。

実際にフロンティアでは、インディアンの村を侵したり、金鉱を発見したり、様々な想定外の出来事が生起するのです。

しかし、フロンティアはやがていつかは消滅するものでしたし、フロンティアが消滅することによって、はじめてアメリカの国土の開拓が完成するのでした。

では、完成したアメリカからフロンティアはなくなるのでしょうか。

アメリカは、完成後も、フロンティア精神を叫び続けてきました。しかもフロンティア政策を推し進めもしてきたのです。

まるで自転車が前へ前へ進まなければ転んでしまうように、アメリカはフロンティアを前へ前へと推し進めていかなければ成り立たないかのようなのです。

1861～1865南北戦争

無尽蔵のフロンティアをもつ若い国アメリカが、行き詰まりの打開のために求めたものは、一言で言えば技術でした。救いやそれに至る善ではなく、対立する現実に打ち勝つ技術でした。

国を挙げて奴隷廃止に踏み切った矢先に、ホイットニーが綿繰り機を発明すると、綿花の生産に綿の栽培が追いつかなくなり、奴隷の数は数倍に増えました。南部諸州は、奴隷制を譲ることができなくなりました。民主主義のために一丸となって独立戦争を戦った移民の国が、利害で国を割ることになったのでした。

同じ常識を持つ者同士の行き詰まりの解決策は競争です。しかも違いを認めあうことのできない者同士の競争は、相手の主体性を奪う戦争に行き着きます。

物と心の問題は、技術で解決できるという考えが常識になっていたアメリカ市民同士の南北戦争は、利害の対立に対する技術力による決着でした。

その戦争は、人道主義者リンカーンの苦悩と悲劇によって美化されているように、奴隷制度の払拭を実現しました。そして再統一をとげたアメリカは、技術力に加えて、解放奴隷という工業労働力を手に入れました。

北部の農村では、戦時下の人手不足と食料増産というジレンマを解決するために機械化の技術を導入しましたが、終戦によって慢性的な生産過剰に陥ります。それは無尽蔵のフロンティアと技術力とが産み出した現象です。

1878パースのプラグマティズム

そのような歴史と風土の中で、アメリカは、独創的な哲

学者を生みます。

人間の考える力は、道具のように使ってこそ価値があり、考えついた真理は、実験してみて初めて意味をもつというアメリカ独自の哲学プラグマティズムの創始者は、パースでした。

彼は、無尽蔵の世界から未知の真理を探り当てたり、自在に表現したりするために、アブダクションという技術や、記号論を創始しました。彼の哲学は、神による救いは求めてはいませんでしたが、連続体の恵みは求めていたのです。私は、そのことに、アメリカの哲学が良識をもっていたことを感じます。

1839~1914 パースの哲学とフロンティアスピリット

アメリカ独自の哲学プラグマティズムの創始者パースの哲学は、知識を、連続体のいわば恵みとしてとらえているように思われます。その恵みとは、個人の主体性が無尽蔵の環境と出会った時の認識でしょう。

またパースによってアブダクションと名づけられた、未知の真理を探り当てる技術は、ただの道具ではなく、個人の主体が環境と正対する状況の認識だったことでしょう。

1908,1946 開拓精神と報徳

その深い認識は、日本の庶民の伝統的な哲学である報徳との親近感を感じさせます。なるほど、それは報徳と共通する開拓精神の仕業でしょう。

その開拓精神は、無尽蔵のフロンティアを前にしたアメリカ人民の常識だったのではないかと思います。それは報徳が、荒れ地を前にした日本の人民の常識だったことと同じでしょう。

実際、内村鑑三の代表的日本人に描かれた二宮尊徳の姿は、アメリカの読者の心を打ちましたし、日系移民はロサンゼルスに金次郎さんの像を立てました。太平洋戦争後GHQのインボーデン中佐は、大日本報徳社を訪問して、金次郎は日本のリンカーンだと絶賛しました。

またアメリカ人民の開拓精神が、フロンティアで結社を形成した例もあるのです。それがグレンジャー運動です。そのフロンティアの農民の主体的な運動に、私は報徳社との共通性を感じています。

1905 プラグマティズムの独り歩き

プラグマティズムは、知識を恵みとする一方で、道具としてもとらえる一面が、パースの意に反して独り歩きしていきました。憤ったパースは、自らの哲学をプラグマティシズムと命名し直しました。パースは、自らのプラグマティズムを勘当したのです。

編集後記

二〇〇九年三月二十二日、NHKは第一チャンネル午前八時二十五分スタートの番組、経済羅針盤で「年輪経営」伊那食品工業・塚越寛会長との対談を放映した。

同氏の経営を広く世の中に紹介したのは、三戸岡さんが二〇〇四年五月、栄光出版社より刊行された『二宮金次郎と十三人の世界人』第十章で、二宮尊徳の教え「遠きをはかる者は富み、近くをはかる者は貧す それ遠きをはかる者は百年のために杉苗を植う まして春まきて秋実る物においておや、故に富有なり 近くをはかる者は、春植えて秋実る物をも尚遠しとして植えず ただ眼前の利に迷うて、まかずして取り、植えずして刈り取ることのみ眼につく、故に貧窮す」を実施している経営者として発表したのが最初である。

この尊徳翁の教えこそは、まさに現在の世界的金融経済崩壊の原因を的確に表していると考える。

次いで堀内さんも、この塚越氏の経営方針を『報徳』二〇〇六年六月・七月号に「報徳仕法と企業経営（五）（六）として掲載し、これと並行して二〇〇六年七月に『会社を経営する目的はなにか』と題して、エッセイ小冊子を配布している。

アナウンサーは「時代がやっと塚越さんのやり方を認めるようになった」と述べ、塚越会長は、前述の遠きをはかる～という二宮尊徳の言葉を手本とし、どういう風に経営していったら企業が永続できるかというのが経営の根幹で、「社員の幸せの総和が会社の価値」だと答えた。（T・N）

まんじ第112号

平成21年5月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　中　山　喬　央（なかやま　たかひろ）
事務局長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）

（事務局）〒223-0056　横浜市港北区新吉田東五丁目76-35　太田善朗方
TEL・FAX 045（544）5947
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
（印刷製本）　日東印刷株式会社
〒142-0054　東京都品川区西中延2-15-16

表紙の絵について
「反芻してこそ知恵になる」　　田寺怜葦（たでられい）画

まんじ

No.113

2009.8.1

まんじ第百十三号　目次

黒いバス……三戸岡道夫…4
天智・天武両帝に愛された額田王……島津隆子…11
誠忠の茶園（一）……太田精一…17
カリカチュア“愛煙・応援歌”……伊治哲…25
今川風雲録（五）……千坂精一…31
古い物・遠い夢　茶掛「慈雲尊者の書」……忠内正之…39
短歌　行雲流水（二十四）……石黒修身…47
　中国東北・北京紀行詠二十五首
　大連そして旅順―清岡卓行と宇田博―
我が愛誦歌（八）―昭和から平成へ―……曽根竣作…56
短歌　三十首……曽根竣作…62
俳句　鷹の呟き（七）……大澤鷹雪…66
俳句　水仙……勝山道子…68
漢詩　潮騒錄（五十八）《漢詩の流れ47》……鯨游海…72
狩谷棭斎讃歌（六）……新井宏…76
掌編小説六　ときめきを越えて……亜木陽一…83
小鉄……吉田忠雄…85
司馬雑感二十　近江路から熊野路へ（三）……山田嘉久…87
化粧のルーツを訪ねて（七）……鈴木守…95
　第四話　古代中国の化粧文化
扉を開けた光の鍵―横浜開港時代を顧みて―……鍋屋次郎…106
文化勲章に輝く赤堀四郎博士の一生（十三）……松下魏三…115
青の漂流（八）……宅見勝弘…117
還暦からの考古学（十七）……中山喬央…124
鏡（その9）……中山喬央…137
れんしゅう（恋詩集）しさくのかなしみより　その七……松下壽男…144
悲しいアメリカ―プログマティズムの研究を通して―その二……松下壽男…145
　編集後記……編集子…150
　表紙……田寺怜葦

黒いバス

三戸岡道夫

（一）

あたりいちめんが妙に白っぽいのである。

晴れた霧の中に迷いこんでしまったような、あるいは曇りガラスの中から外の明るさをうかがっているような、頼りなげに手ごたえのない、ぼっと拡った花曇りの白っぽい明るさ。

公園いちめんに桜の花が咲いていて、白っぽい明るさはその花群の拡りのせいだった。それにしても、どうしてこんなにたくさんの桜が咲いているのだろう。誰も見ていないのに、桜はなぜこんなに一生懸命に咲くのだろう。

彼は花群の方に鼻先をひくひくさせた。しかし桜の花に匂いはない。

するとその花の白い輝きのなかに、黒い点が見えた。

黒いバス。

彼は獲物を見つけた獣のように、それに向ってまっすぐ歩いていった。

しかし、まだバスには誰も乗っていなかった。

彼が黒いバスのことを知ったのは、昨夜のことであった。

世は不景気だというのに、彼の会社の仕事はやたらと忙しく、毎夜、彼が家に帰ってくるのは遅い。しかしどんなに遅くても、彼はシャワーを浴びると、インターネットの前に座るのが習慣になっていた。東亞商事の未来事業開発部という、たえず新しい情報を必要とするセクションで働いている彼にとっては、インターネットで得られる世界の果て、宇宙の彼方の情報は、必要不可欠のものであった。

それに『インターネットおたく』と言われている彼は、彼独自の工夫で、普通の人には得られない情報が手に入

る、特別のインターネット・ルートを設定していたので、

（今夜はどんな情報が入ってくるだろう）

という期待感で、彼の全身はしびれるのだった。

彼は、孤独な触角を夜空の高みにアンテナをのばすように、暗く透明な宇宙のなかに、情報の釣り糸を深々と垂れるのである。すると彼の神経はインターネットの稲妻に乗って、世界の果てを自由自在に飛翔し、宇宙の深く暗い神秘の信号にひそかに触れるのであった。

昨夜も同じようにシャワーを浴び、インターネットにむかって座っていると、突然、画面が紫色の巨大な閃光を発したのである。

（来たな！）

全身が震えた。それは未来事業開発部に所属している彼にとっては、ただならぬ情報であった。

……『時間』を製造する技術が開発され、テストプラントが完成した。その試運転が明日行われる。見学を欲する者は、花咲公園から黒いバスに乗るべし……

「やったあ！」

と彼は口笛のような悲鳴をあげた。

『時間』

それはこの世における最大の商品である。

時間は誰もが欲しがっている。

しかし製造はできない。

時間がない。もっと長い時間がほしい。しかし時間は誰に対しても、一日二十四時間しか与えられていない。大富豪でもホームレスでも、大人でも子供でも、天才でも白痴でも、時間は誰にでも平等である。

これが、これまでの常識だった。だから、

『時間』が製造できたら……、

『時間』が販売できたら……、

というのが、東亞商事の未来事業開発部が長年夢見ていた商品なのであった。

もしも『時間』が製造できる会社が現われたら、莫大な利益と永遠の繁栄が約束されることは、まちがいない。東亞商事がもし、この地球上で最大にして最後の商品を開発することが出来たなら、一瞬にして、日本最大、いや世界最大の企業という、栄光の座に輝くことはまちがいない。すると、この

（時間が製造できる）

という情報である。驚かない方がどうかしている。

彼はまんじりともせずに夜を明かした。

裏木戸の方から聞えてくる牛乳配達の音、新聞が郵便受けに落ちる音、中空でカーカーと鳴く鴉の声に、

（ああ、もう朝だなあ）

と思って眼をあけると、すっかり夜は明けて、窓の外には四月の空が光っていた。

彼のまわりには、寝乱れた蒲団、読みさしの雑誌、机、洋服ダンス、壁にはられたカレンダーなどがひろがっていた。

戸外からは車の音や、朝早い出勤の人々の声が、かん高く聞えてきた。

それはいつも見慣れた現実的な光景であった。そこには、昨夜彼がインターネットを通して触れた、あの宇宙の深い神秘な情報の雰囲気は少しも残っていなかった。そのため彼は、

（昨夜のインターネットの情報は果して本当だったのか）

と、にわかに疑問になってきた。夢だったのではあるまいか。幻だったのではあるまいか。夢幻を本当だと勘違いしたのではあるまいか。

彼はあわててインターネットの前に座り、指先でこまかく昨夜のように操作してみた。

しかし、もちろん何の反応もない。

だが、たとえ嘘にしても、情報はあまりにも魅力的でありすぎた。このまま、見逃がしてしまう手はなかった。

（とにかく行くだけは、行ってみよう）

彼はアパートを出た。

しかし、会社に出勤してから行くのでは間に合わないと思った。そこで彼は歩きながら携帯電話で課長の自宅に電話をした。

課長は洗面中のところだったが電話に出て、

「なんだい、朝早くから、びっくりするじゃないか…」

彼は手短かに『時間製造テストプラン』のことを話し、

「…いまから行って、その黒いバスを探します。このまま、まっすぐ花咲公園へ行かせていただきます……」

「へーっ⁉」

課長は歯ブラシを咽喉につまらせたような声をあげながら、盛んに、うん、うん、と聞いていたが、しかし最後の方になるとすこし馬鹿げた口調に変って、

「君のいつもの誇大妄想ではないのかな。でも、まあ、なにか掴めるかもしれない。とにかく行ってみてくれ」

「黒いバスが見つかり次第、電話します」

かねて花咲公園の名前は聞いていたが、そこへ行くのは始めてだった。それはかなり広い公園で、名前の通り、おびただしい桜の花がちょうど満開で、白っぽく中空にただよっていた。朝の公園は人通りもなく、桜は静まりかえって咲いているので、それはあたかも造花の花群のように見えた。

そして彼が公園の中をあちこち歩いていると、突然、黒いバスが姿を現わしたのである。

だが現実に『黒いバス』が眼の前に現われてみると、それは奇妙なものだった。

黒い乗用車なら見慣れているが、黒いバスなどというものは見たことがない。珍らしいというよりも、はなはだ不気味な感じで、黒装束の忍者がバスの形に化けて、桜の木の下にうずくまっているようにも見えたし、また巨大な昆虫の亡骸のようにも見えた。

彼はバスの前方に廻ってみた。

だが、行先は書いてない。

案内の紙片でも貼ってあるかと、バスを一周してみたが、そうしたものも見あたらなかった。

運転手も車掌もいなければ、客も一人も乗っていない。考えようによっては、これは桜の木の下に捨てられた廃車ではないか。彼が勝手に本物の『黒いバス』と思いこんでいるだけで、すでにどこかで、本物の黒いバスには大勢の人間が集り、案内のパンフレットが全員に配られ、もうすぐ発車しようとしているのかもしれない…。そんな心配が彼の頭をかすめた。

そう思うと急に自分の迂闊さにいたたまれなくなり、彼は本物の黒いバスを探しに公園の中を走りはじめた。しかしそれらしいバスはどこにも見当らなかった。すると、やはりあの黒いバスが、本物のバスということか。

ふたたび彼はもとの場所に戻った。

黒いバスはさっきと同じ姿で停っていたが、違っている点が一つあった。閉っていたドアが、今度は開いていたのである。

彼はバスの中をのぞいてみた。車内の掃除はよく行き届いていて、ほのかな香水の匂いさえした。

しかし人の姿はなかった。

耳をすますとカーラジオの軽い音楽が流れていた。彼がバスを離れている間に、誰かが来たのだろう。運転手だろうか、車掌だろうか。カーラジオは動物の呼吸のように人なつっこい音を立てていて、それを聞いていると、このバスが捨てられた廃車でないという実感が、彼の中に湧いてきた。

彼は心強くなって、バスに乗ってみた。

いつも満員電車に乗り慣れている彼には、全部空席ということは、かえって席の選択にとまどった。

運転手の席のすぐ後に座ってみたが、前すぎて落着きが悪かった。そこで車の中央に席を移し、また思い直して前から三分の一ぐらいの場所に移動すると、そこが一番座り心地がいいようだった。

カーラジオの音楽はたえ間なく流れていたが、しかし人のいないバスの中で、一人ぼっちねんと、そんな音楽を聞いているのも、なにかしらけた気分だった。

彼はバスから降りた。

といって、別にすることがあるわけではない。仕方なく桜の根元に腰をおろし、バスの発車を待つことにした。両腕で膝を抱えていると、ズボンの尻を通して土のしめった感じが、ひんやり伝わってきた。

周囲の明るさから察すると、太陽はだいぶ中天に昇っ

たらしい。らしいというのは、桜の雲が厚く中空を覆っているので、太陽が見えないからだった。しかしその花雲の輝き工合から太陽の方角を推察すると、もうかなりの高さまで昇っていて、人間世界では一日の活動が始っている時間だった。

腕時計を見ると九時十五分前であった。

会社の始業の時間が近づいていた。

彼は、会社の朝の風景を頭に思い浮かべた。会社の入口や廊下には、ひっきりなしに出勤の人間がつめかけ、それぞれの部屋へ足ばやに歩いていく。ぞして彼が所属している未来事業開発部の部屋も、ほぼメンバーが揃っている時刻である。彼と机を並べているSは世界ニュースを一つも逃がすまいと、インターネットの画面に隈なく眼を通しているであろうし、その隣のNはすでにレポートの纏め作業にとりかかって、あわただしく指先を動しているであろう。少し離れた場所のPは、いつものことながら昨夜の麻雀の戦果を大声で話しているにちがいない。

彼も今朝いつものように会社に出勤していれば、同じくインターネットを追っているか、駅で買った新聞や週刊誌のトピックスについて、まわりの人々と喋り散らしているであろう。朝一番の電話もそろそろ鳴りはじめる頃であろう。課長も、もう出勤する頃である。

そろそろ課長へ二度目の電話を入れる必要があると思い、彼は携帯電話のボタンを押した。すると運よく課長が出た。丁度いま出勤したばかりのようであった。

「黒いバスは見つかりました。しかしまだ行先はわかりません。発車時間もわかりません。ええ、運転手も車掌も居ないものですから、聞きようがありません。でも、きっと、そのうち来ると思います。乗客もいまのところは私一人…、でも、発車までには大勢集ることはまちがいありません。それはそうと、私の今日の出張のこと、部長へ話していただけたでしょうか?」

「いや、まだだ。部長はまだ来ていない。来たらすぐ話す」

「お願いします」

「よし、わかった」

しかし、この課長の「よし、わかった」というのが当てにならないのだった。返事だけはいいのだが、テキパキ物事が進んだためしがない。いつも上司の顔色ばかり伺っているから、へっぴり腰になる。その上さらに副部長も、これまた課長に輪をかけたへっぴり腰ときていたから、課長から無事に副部長を通過して、部長のところまで到達するのには、時間がかかるのだった。それに今の電話の様子では、課長があまり『黒いバス』に乗気でないらしいのも、心配だった。

(二)

彼が電話をかけている間に、一人ぐらいは客が集ってくるかと期待していたが、依然として誰もやってこなかった。

彼は所在なげにバスに乗ったり、降りたりしてみたが、落着かない気分だった。

彼はふたたび動物園の猿のような姿勢で地面に腰をおろし、ぼんやり前方を見つづけていた。

彼は会社に帰ってしまおうかと、思いはじめていた。

(あんなインターネットの情報を本気にするなんて、ほんとうに俺は馬鹿か阿呆だ)

だが、では帰ろうかと腰を上げてみると、なんとなく心残りがするのだった。せっかく今まで待ったのにと後髪を引かれる思いで、あと五分、もう十分と、時間をのばしているうちに、十時になってしまった。

桜の根もとに腰を下していたので尻がすっかり湿ってしまい、冷えこみが腰から背中にかけて、這いのぼってきた。新聞も丹念に読んでしまった。煙草も吸いあきて、もうやることはない。

彼はついに会社へ帰る決心をした。腰を上げると、仔犬のように小さく身震いをした。両手で尻を押えると、地面の湿りを吸いとったズボンは、しっとり冷たかった。

だが、その時、一人の男がバスに向ってくるのが眼にとまったのである。彼はびくりとした。帰ろうとした彼の足はブレーキをかけられた。

(ついに人が来た!)

やっぱり自分の考えは正しかった。帰ろうと決心した時になって、やっと人が来た。待っていてよかった。彼の中に、仕事への希望と自信が、急に盛り上ってきた。

歩いてきた男は一直線にバスに向って来た。そして躊躇なくバスに乗ると、前から三列目の席に迷わず腰掛けた。たいした自信だと、彼は感心した。

だが、その顔と背広のバッチを見たとたんに、彼ははっとなった。それは東亞商事とはライバルの南海商事の情報副部長にちがいなかった。

(やっぱり企画力の南海商事といわれるだけあって、こうしたビックニュースにはちゃんとした副部長がやってくるのだ)

と感心した。

南海商事はその情報網の広さ、速さ、企画力の強さ、そして新製品の開発力に定評があり、

(あした仕事振りでなくては激しい企業競争に勝てない)

のだと、同業者の間では垂涎の的となっている会社であった。南海商事は、同業者間の会合とか、ゴルフ大会などの、つまらない会合へはほとんど顔を出さない代りに、研究会とか講演会、実地見学、調査研究会といった

ものには、実にまめに顔を出し、重要なものだと判断すれば副部長クラスが参加するのだった。

『時間の製造と販売』という、これまで誰もが望み、誰もが研究しても絶対に成功しなかった『時間という商品』…、その『時間』を製造する技術が開発され、そのテストプラントの試運転が始まろうとしているのである。

（そのパテントを掴んだ企業が、世界最大のビッグビジネスの座を獲得するのはまちがいない。それなのに我が社ときたら…）

彼のような駆け出し社員が、しかもプライベイトに掴んだ情報で、走り廻っているにすぎないのである。

南海商事では副部長が出掛けてきているというのに、わが社の副部長ときたら、ただ机にむかって書類を丹念に読み、差支えないものだけにハンコを押し、ただただ、部長、社長の方にのみ神経をすり減らしている。どうしてあんな人間で、未来事業開発部の副部長がつとまるのだろう。開発部の副部長といえば、会社の中では最も積極的で、バイタリティに富み、企画力と実行力に富んだ人間でなくてはならない筈なのに……。

彼は南海商事の姿を、うらやましいような、まぶしいような、そして幾分憎悪のこもった眼で見つめた。

（つづく）

天智・天武両帝に愛された額田王（ぬかたのおおきみ）

島津隆子

近江の大津京で中大兄皇子が天智天皇として即位すると、皇太弟となった大海人皇子との間に深刻な対立が芽生え始めた。この時、天智天皇の年齢はとうに五十歳を過ぎていた。

その春、天皇即位の祝賀パーティが琵琶湖畔の高殿で盛大に催されていた。まさに酒宴たけなわな時、突然、大海人皇子の持つ槍が大広間の敷板を刺し貫いたのだ。いかに酒席でのこととはいえ、あまりに無礼な弟大海人の振舞に、天智天皇は剣を抜き払い弟を斬り殺そうとした。

その場は、大化の改新の大功労者で、後の内大臣藤原鎌足こと中臣鎌足（なかとみのかまたり）の取り成しで何とか収まったものの、兄と弟の仲はそれ以後急速に悪化していった。

〔一〕

兄帝と弟皇子の不仲

聖徳太子と力を競い合った蘇我馬子の子で、大臣として政権を恣（ほしいまま）にした蘇我蝦夷（えみし）、またその子で、太子の子孫全滅という暴挙をやってのけた蘇我入鹿を討ち滅ぼしたのは、中大兄皇子（なかのおおえのおうじ）である。皇子は国家的大クーデターである大化の改新を断行したが、姉の斉明天皇亡き後も天皇の位には就かず、二十三年間にわたって皇太子の身分のまま政治を担ってきた。

もちろんそれには実弟の大海人皇子（おおあまのおうじ）の協力があったことはいうまでもない。

ところが、天智七年（六六七）正月のことである。

さらに同じ年の五月。

琵琶湖東方の御料地近江国の浦生野で天皇が催す恒例の薬草採取が行われていた。これには宮中の多くの廷臣や女官も加わっていたが、大海人は兄天皇の後宮である額田王に対して、熱烈な恋の素振りをみせた。額田はそっと大海人の好意を咎めるように、

あかねさす紫野ゆき標野ゆき
野守は見ずや君が袖ふる

狩猟地の野を行きながら、まるで恋の合図でもするかのように自分に向って袖を振る大海人の振舞いが、番人に気取られることを心配しながらも、額田は心のどこかに妖しいときめきを覚えて優しく諭すのだ。

目をひからせている野の番人に、お気をつけて、と。

しかし、大海人は平然と、そして秘密っぽく返歌する。

紫草の匂へる妹を憎くあらば
人妻ゆゑにわれ恋ひめやも

あの紫草のように気高く匂い立つ美しいあなたが、たとえ人妻であっても、そのことで少しでも憎いと思うならば、どうして私は大変な危険まで冒して恋などしかけたりしましょうか。

と詠う大海人の情熱的な思慕の念もわからないわけではない。だが、この一見ロマンチックにみえる三角関係には、もっと深いわけがあるのだ。

はじめ額田は大海人と相思相愛の関係にあった。そして二人の間には十市皇女が生まれている。

もともとは額田の姉である鏡王女が中大兄皇子、つまり天皇の愛人だったのだ。しかし、万葉女流歌人第一といわれる額田の才色兼備が天皇に横恋慕され、大海人の手から離されて、天皇の後宮に入れられたという経緯がある。

これには天皇のかなり強引な手口があったらしく、額田が天皇のいる近江宮に行く折、

見慣れた三輪の山よ、奈良の山々の間に隠れるまで、道の曲り角が重なって見えなくなるまで、しみじみと眺めながら行こうと思うのに。三輪の山にかかる無情の雲よ、お前が隠すべきではないだろうに。

と、故郷の家から見える三輪山を遠望し名残りを惜しみながら、奈良の山々を越え、天皇のいる近江国に向かう情景を描いている。山から離れてゆくことは、つまり大海人から遠ざかってゆくことを意味する。〝三輪山よ〟と呼びかけた心情には愛する男への凝視と惜別がある。

それまでにして天皇の許にきた額田であったが、そこには頼りなく寂しい境涯が待っていた。

天皇は弟大海人から奪い取る形で額田を召抱えながら、近年とみに顧みなくなっていた。国事が多忙を極めたせいもあるだろうが、宮中には額田より身分の高い家柄の皇妃が大勢いたので、額田との間も疎遠になりがちであった。

君待つとわが恋ひをれば我が屋戸の
すだれ動かし秋の風吹く

天皇のお出でをお待ちして恋しく思っておりますのに、ただ秋風が吹いて、私の部屋の簾を動かしてゆくばかりでございます。

額田は秋風にひとり侘しさを紛らわせている。

額田の姉の鏡王女は、かつて天皇の寵愛を自分から奪った妹の額田に対して、

風をだに恋ふるは羨し風をだに
来むとし待たばなにか嘆かむ

風さえ恋しく思うあなたがうらやましい。風さえあなたのように恋人を待ち焦がれているのなら、どうして嘆くことがありましょう。私なんか来る人のあてもないのですから……。

と、慰めている。

もっともこの心優しい女王は、前半生が不幸だった代りに、その後、当代随一の智恵袋と謳われる内大臣藤原鎌足に求婚されている。そして、

たまくしげ覆ふるをやすみ明けてゆかば
君が名はあれどわが名し惜しも

夜が白々と明けてからあなたがお帰りになって、浮名が立つのは、男性のあなたはかまわないでしょうが、女性である私は、嫌でございます。

と、度量の大きい鎌足の胸に甘える、なんともいじらしいまでの女心をみせるのである。

それはともかく、実力伯仲の兄弟間にあって大きな危険を冒してまで天皇はなぜ大海人の愛人を奪ったのだろうか。その疑問に答えるためには額田の二つの面を考えてみなくてはならない。一つ、額田は皇族出ではなく渡来の豪族出身であるということと、二つには非常な才媛であったことである。

当時、このような立場の女性は、正式な后妃として宮中に召されたというよりは、宮廷の重要な行事である宴遊のために必要な存在だったといえるかもしれない。

さらに同じ年の五月。
琵琶湖東方の御料地近江国の浦生野で天皇が催す恒例の薬草採取が行われていた。これには宮中の多くの廷臣や女官も加わっていたが、大海人は兄天皇の後宮である額田王に対して、熱烈な恋の素振りをみせた。額田はそっと大海人の好意を咎めるように、

あかねさす紫野ゆき標野ゆき
野守は見ずや君が袖ふる

狩猟地の野を行きながら、まるで恋の合図でもするかのように自分に向って袖を振る大海人の振舞いが、番人に気取られることを心配しながらも、額田は心のどこかに妖しいときめきを覚えて優しく諭すのだ。
目をひからせている野の番人に、お気をつけて、と。
しかし、大海人は平然と、そして秘密っぽく返歌する。

紫草の匂へる妹を憎くあらば
人妻ゆゑにわれ恋ひめやも

あの紫草のように気高く匂い立つ美しいあなたが、たとえ人妻であっても、そのことで少しでも憎いと思うならば、どうして私は大変な危険まで冒して恋などしかけたりしましょうか。
と詠う大海人の情熱的な思慕の念もわからないわけではない。だが、この一見ロマンチックにみえる三角関係には、もっと深いわけがあるのだ。
はじめ額田は大海人と相思相愛の関係にあった。そして二人の間には十市皇女が生まれている。
もともとは額田の姉である鏡王女が中大兄皇子、つまり天皇の愛人だったのだ。しかし、万葉女流歌人第一といわれる額田の才色兼備が天皇に横恋慕され、大海人の手から離されて、天皇の後宮に入れられたという経緯がある。
これには天皇のかなり強引な手口があったらしく、額田が天皇のいる近江宮に行く折、

見慣れた三輪の山よ、奈良の山々の間に隠れるまで、道の曲り角が重なって見えなくなるまで、しみじみと眺めながら行こうと思うのに。三輪の山にかかる無情の雲よ、お前が隠すべきではないだろうに。

と、故郷の家から見える三輪山を遠望し名残りを惜しみながら、奈良の山々を越え、天皇のいる近江国に向かう情景を描いている。山から離れてゆくことは、つまり大海人から遠ざかってゆくことを意味する。〝三輪山よ〟と呼びかけた心情には愛する男への凝視と惜別がある。

それまでにして天皇の許にきた額田であったが、そこには頼りなく寂しい境涯が待っていた。
天皇は弟大海人から奪い取る形で額田を召抱えながら、近年とみに顧みなくなっていた。国事が多忙を極めたせいもあるだろうが、宮中には額田より身分の高い家柄の皇妃が大勢いたので、額田との間も疎遠になりがちであった。

君待つとわが恋ひをれば我が屋戸の
すだれ動かし秋の風吹く

天皇のお出でをお待ちして恋しく思っておりますのに、ただ秋風が吹いて、私の部屋の簾を動かしてゆくばかりでございます。
額田は秋風にひとり侘しさを紛らわせている。
額田の姉の鏡王女は、かつて天皇の寵愛を自分から奪った妹の額田に対して、

風をだに恋ふるは羨し風をだに
来むとし待たばなにか嘆かむ

風さえ恋しく思うあなたがうらやましい。風さえあなたのように恋人を待ち焦がれているのなら、どうして嘆くことがありましょう。私なんか来る人のあてもないのですから……。
と、慰めている。
もっともこの心優しい女王は、前半生が不幸だった代りに、その後、当代随一の智恵袋と謳われる内大臣藤原鎌足に求婚されている。そして、

たまくしげ覆ふをやすみ明けてゆかば
君が名はあれどわが名し惜しも

夜が白々と明けてからあなたがお帰りになって、浮名が立つのは、男性のあなたはかまわないでしょうが、女性である私は、嫌でございます。
と、度量の大きい鎌足の胸に甘える、なんともいじらしいまでの女心をみせるのである。
それはともかく、実力伯仲の兄弟間にあって大きな危険を冒してまで天皇はなぜ大海人の愛人を奪ったのだろうか。その疑問に答えるためには額田の二つの面を考えてみなくてはならない。一つ、額田は皇族出ではなく渡来の豪族出身であるということと、二つには非常な才媛であったことである。
当時、このような立場の女性は、正式な后妃として宮中に召されたというよりは、宮廷の重要な行事である宴遊のために必要な存在だったといえるかもしれない。

朝廷での度々の宴席では競って詩や歌や漢詩が詠まれた。そんな華やかな雰囲気の中では、額田の美貌もさることながら、高い教養と才能に裏づけられた秀歌を詠むことこそが、天皇が側近く召抱える女性としてふさわしかった。もっと大胆にいうなら、天皇の高度なアクセサリーとして額田が必要だったということになる。

ある時、天皇は内大臣藤原鎌足に命じて、春の山に咲く花の艶と、秋山の木々の葉の色彩との美の優劣を競わせたのであった。額田は次のように詠んで判断した。

冬ごもり　春さりくれば　鳴ざりし　鳥も来鳴きぬ
咲かざらし　花も咲けれど　山を茂み　入りて取らず　草深み　取りも見ず　秋山の　木の葉を見ては紅葉をば　取りてぞ賞ぶ　青きをば　置きてぞ嘆く　そこし恨し　秋山われは

冬が去り春が訪れると、今まで鳴かなかった鳥もやってきて囀り、咲かなかった花も咲き乱れるけれど、春の山は草木が深々と茂り、その花を手に取って見ることができない。

それに比べ、秋の山の木の葉を見ては、紅葉を手に取って鑑賞することができる。そして、春の青い葉を差し置いて、もうすぐ枯れてゆくであろう秋の葉を、しみじみじみ眺め嘆息する。その風情は恨めしいばかりの美しさではありませんか。そこで私は秋の山をよしとします。

というのだ。その時、多くの廷臣や女官たちは競って漢詩や和歌を詠んだことだろう。中でも、額田の和歌は一頭地を抜いていた。満足して得意げな天皇の顔が浮ぶようである。

この時、額田はとうに四十歳を過ぎてはいたが、その存在は宮中での華麗な宴の席を飾り、興を増すためになくてはならない華であった。それゆえにこそ額田の漂うように孤独で寂しい心情がうかがえる。だから天皇は大海人が額田に愛情を持ち続け、額田もまた大海人に慕情を抱いていることを知りながらも、

香具山は畝傍を愛しと　耳成と　相争ひき　神代より　敢くにあるらし　昔も然にあれこそ　うつせみも　嬬を争ふらしき

昔から香具山は男性の山といわれ、畝傍は女性の山といわれた。その香具山は畝傍を愛していたから、やはり畝傍に思いを寄せていた男性の山である耳成と争ったのだ。このようなことは神代の昔からあることであろう。別に不思議はない。まして煩悩多き現身の人の世のことである。一人の妻を争うという愚かさも仕方のないことではないか。

と賢帝の誉れ高い天皇が超然たる態度でいることも頷けるのだが、天皇の真の心配事はもっと他にあった。

天皇の憂慮

天皇がその地位に就かれた時、それを脅かすに足るだけの力ある者は、弟の大海人を除いては誰一人いなかった。その大海人と、額田との関係は、見て見ぬふりをすれば済むことである。そして、次の皇位はこの実力ある大海人に譲ればよいのだ。この時代にあっては、皇室の誰かと結ばない限り、豪族の謀叛など起こりようがない。大海人と兄弟の絆さえしっかり結びついていれば安心である。

天皇は自分の長女と次女の二人の皇女を大海人に嫁がせてやった。明らかな政略結婚である。だが……と天皇は考える。

"果して弟は、そんなことで懐柔されるような男だろうか"と。

大友皇子の存在

天皇には四人の皇子がいたが、その中でも長男の大友皇子が傑出した存在として天皇の目に映じていた。そして大友が成長するにつれ、この皇子に寄せる愛情は限りなく深いものとなっていった。

ある時、大友に面会した唐の使節劉徳高は、

「この皇子、風骨世間の人に似ず。実に此の国の分に非ず」といい、

「皇子博学多通にして、文武の才幹有り」と評したという。また、

「文筆に秀れ、筆を下せば章となり……未だ幾もあらぬに日に新たなり」

と賞賛されたほどである。

宮中の宴会での「宴に侍す」と題した大友の堂々たる気風の漢詩が『懐風藻』に載っている。

皇明日月と光らひ　帝徳天地と載せ給ふ
三才並びに泰昌　万国臣義を表わす

さらに大友の容貌は、「魁岸奇偉　風範弘深　眼中精耀　顧盼煒燁」つまり、偉丈夫で風格は広大深遠、眼は精悍を帯びて輝き、振り返るときの目許が美しく光る　というのだ。

これでは天皇が次の皇位を継ぐにふさわしい人物と、大友に期待するのは無理もない。しかも、天皇即位の時、皇子は二十一歳の立派な青年に成長していた。

しかし、当時の慣例に従えば、天皇に有力な実弟がい

る場合、子どもより先に皇位を継承させることになっているのだ。それに、大友にはまだ不利な点があった。大友の母方は他の皇族に比すと、はるかに低い伊賀の豪族出身の家柄である。大海人の両親は言うまでもなく、天皇と同じく父は舒明天皇、母は皇極天皇である。血統からいえば上位といえる。

そして、大海人と大友の決定的な違いは、経験、力量ともに余りの差があり過ぎることだ。

このように次期天皇の座を巡る暗闘が、表面に現れなかったのは、政界の対応にかけては抜群の円熟をみせる鎌足の力量によるものであった。

しかし、鎌足が生きている間は、それでよかった。

鎌足の死

天智八年（六六九）、すなわち天皇即位の翌年秋、鎌足は病の床に臥した。

天皇は自ら鎌足を病床に見舞い、大海人を使者として、最高位である大織冠（たいしょくかん）と内大臣の位を授けた。同時に藤原という姓を与えたのである。これより藤原氏一門は栄え、鎌足がその元祖ということになる。

だが、その年十月、五十六歳を最後として、一代の政治家鎌足はついに病没した。

鎌足の死を契機として、これより歴史の舞台は急展開を見せてゆくのである。

誠忠の茶園（一）

太田精一

一．幕末の旗本

（一）桜田門外の変

明け方から雪が降り出してきた。薄墨を流したような雲の中を乱舞しながら降りてくる。地上は、見る見る白一色に染まって行った。

安政七年（一八六〇）三月三日。暦は、すでに春であったが、江戸には珍しい大雪である。

大草他喜次郎高重は、前年十二月部屋住みから、大番士入りを仰せつかり、登城の支度をしていた。

その時、玄関から門番が大声で叫ぶ声が聞こえてきた。

「御前様、大変です。今しがた桜田門外で、大老井伊様が、水戸浪士の襲撃を受け、大怪我をなさったそうです」

「それはまことか。で、怪我の様子はどうじゃ」

「へえ、見たわけではございませんが、この界隈じゃあもっぱらの噂で、お命を取られたっていう話もあります」

高重は、小石川鷹匠町の山岡鉄太郎（鉄舟）のもとに、ことの真偽と攘夷派幕臣たちの動きを探らせるため、若党の伝七を走らせた。鉄太郎のまわりには、多くの旗本の子弟や江戸在住の攘夷派の志士たちが集まっている。その連中が関係しているのではないかと思ったからである。高重は、伝七が門を出るとほとんど同時に、城に向かって駆け出した。思わぬ大変事が起き、城内は騒然としている。大番頭（おおばんがしら）も右往左往するばかりであった。

昼が過ぎ、しばらくして雪がやんだ。その頃になると、（二十人近い水戸の浪士が、登城途中の井伊大老の駕籠を襲い、護衛の武士と大乱闘になった。多くの死傷者が出て、井伊大老は、首を討ち取られた。浪士の中には、薩摩藩士も混じっていた）ということが明らかになった。

この事件を機に攘夷論がますます勢いを得て、開国を進める幕府外交の足枷になって行く。

高重は、ひとまず屋敷に引き上げ伝七からの報告を受

けた。

「手前が着いた時には山岡様は、もう城に出向きお屋敷にはいませんでした。お屋敷にいた若侍たちは、それほど悲しんでいないようにお見受けしました。大老が首を打たれ、幕府の権威が堕ちたことは残念だが、これから攘夷をおおっぴらに主張できるようになると、むしろ喜んでいるようでした」

剣客として名高い山岡鉄太郎は、幕臣の中の攘夷論者であり、剣を通じて他藩の藩士や浪士とも交流があった。

(二) 高重、鉄太郎（鉄舟）の出会い

高重が、鉄太郎と知り合ったのは、安政四年の暮れ、北辰一刀流千葉周作道場の玄武館であった。

高重が、早朝稽古を終え、汗を拭いていた時、一人の目鼻立ちの大きい巨漢が入ってきた。その巨漢が、道場で一礼し、竹刀を持って立ち上がると辺りは急に静かになった。すさまじい気迫のもとに突き出される竹刀の先を誰もかわすことができない。立ち会った門弟のことごとくが後ろ向きに倒れて行く。まるで真剣勝負を見るようであった。

高重は、隣に座っている男に問いかけた。

「あのすさまじい突きをする大男は、何者ですか」

「ご存知ないですか。鬼鉄といわれている山岡鉄太郎氏ですよ」

「そうですか。あれが有名な山岡さんですか」

聞きしに勝る鋭い太刀捌きに、高重は、目をそらすことができない。

高重は、鉄太郎の稽古の終わるのを待って近づいた。

「拙者、大草他喜次郎と申します。かねてから貴殿のご高名は、聞き及んでいましたが、お見事な太刀捌き今日始めて拝見仕りました。以後お見知りおきを願わしゅう存じます」

「初めてお目にかかります。山岡鉄太郎です。お恥ずかしいところをお目に掛けました。大草殿といえば、あの鎌倉遠馬でご高名な・・。いやご無礼仕りました。以後ご昵懇に願います」

鉄太郎は、高重が、騎馬や騎射だけでなく剣にも優れていることを一瞬のうちに見抜いた。

鎌倉遠馬とは、安政二年（一八五五）三月二十三日、江戸から相模鎌倉八幡宮まで三十二里をわずか四時間で往復したという記録を打ちたて、江戸市中を沸かせた出来事のことである。その快挙によって高重の名は、広く世間に知れ渡っていた。

高重は、かねてから幕府の弱腰外交に批判的であった。徳川家の祖法を守り、夷狄を退け、朝廷を敬い、御公儀の力によって日本国の統治を存続すべきであると考えていたのだ。鉄太郎も高重と同じ考えで、幕府は率先して攘夷を行うべきであるとしていた。意気投合した二人は

それから急速に交友関係を深めて行くことになるのである。

大草他喜次郎高重（後徳川慶喜の勧めで太起次郎と改める）は、天保六年（一八三五）七月二十三日、五百五十石取りの旗本和田勝正の次男として丹後の大津浜陣屋で生まれた。十三歳のときに騎射の名門大草家の養子となった。

養父大草高克には、男子がなく、禄高三百石取りの譜代旗本としての大草家を絶やしてはならないとし、盟友和田勝正の次男を養子に迎えたのである。屋敷は、上野「不忍の池」付近の旗本侍屋敷の立ち並ぶ一角にある。敷地五百坪、建坪六十坪、玄関、馬小屋、表門、それに裏脇に通用門がついていて、若党四人、下女四人、門番一人を抱えた中堅の旗本である。

生家の和田家は、代々騎射の名手の家柄で、十三代勝忠、十四代勝季と二代続いて「重藤の弓」の所持を許されている。和田家と大草家は、騎射を通じて古くから知己の中であり、そんな縁もあって他喜次郎を養子に迎えることになったのである。

一方、山岡鉄太郎（鉄舟）は、天保七年六月十日（一八三六）江戸で生まれた。三河以来の旗本小野家の分家朝衛門高福（たかよし）の後妻の子である。母は、常陸鹿島神宮の神職塚原石見の二女磯で、先妻の死んだ小野家の後妻として嫁いできた。小野家は、代々武術をもって徳川家に仕える家柄で、母の生家塚原家は卜伝を出した剣の名家である。

鉄太郎が高名な剣客となったのも両親の血筋を引いているからであろう。十一のとき、父が代官として飛騨高山に赴任したため、小野家は一家をあげて高山に引っ越した。しかし、同地で母と父が相次いで他界したため、鉄太郎は残された家族とともに江戸に戻った。

江戸では、北辰一刀流千葉周作の玄武館に入門。そこで、大草高重、坂本龍馬、清河八郎などと知り合ったのである。

(三) 鉄太郎、山岡家へ婿入り

鉄太郎は、剣に加えて他の武術にも興味を持ち、旗本で忍心流の槍の名手山岡紀一郎（静山）道場に入門した。ところが入門して間もなく師である静山が亡くなってしまった。山岡の家には、弟が二人、妹が二人いたが、次男の謙三郎（高橋精一・泥舟）は、すでに母の実家高橋家を継いでいる。弟の信吉は、言語障害があったので、妹に婿を取る必要が生じた。そこで鉄太郎に白羽の矢が立ったというわけである。

だが、鉄太郎の小野家は、禄高も家禄も高橋家よりも高く、彼自身も兄の跡継ぎになることが決まっていた。

どうしても彼を跡継ぎにしたい精一は、鉄太郎の次の弟金五郎に山岡家の意向を伝えるよう頼んだ。

「金五郎さん、鉄さんに山岡家の婿になってもらいたいのだが、無理だろうか。兄の紀一郎がぞっこん惚れ込んでね。（あれほど稽古熱心で、真面目に武術に取り組んで、人間を鍛えようとしている人は江戸広といえどもない）とまで言っているのだ。拙者も、一旦山岡家を出て高橋家に入ってしまった以上、今更また戻るわけにもいかない。無理な相談だと思うが、鉄さんに妹の英子の入り婿になってもらえるようそれとなく聞いてもらえないだろうか。英子もまだ子供だが、鉄さんを慕っているようだしね」

「分かりました。兄に聞いてみます。当方の小野家は、男の兄弟も多いので跡継ぎに困ることはないでしょうから」

金五郎は、折角決まっていた小野家の跡継ぎの地位まで棒に振って、山岡家の婿養子になることはないだろうと思いつつ、鉄太郎にその話を持ちかけた。

だが、話は、金五郎の予想とはまったく違った方向に展開した。

「静山先生が他界される前に、山岡家の跡継ぎに拙者をお望みであったなら、その師恩に報いなければなるまい。幸いに小野家は、跡継ぎの心配はない。英子さんが承知しているのであれば、その話をお受けすると伝えてくれ」

静山先生や精一がそれほどまでに自分を高く評価してくれていることに感激した鉄太郎は、すぐに承諾した。それだけではない。実直で武術しか興味のなかった鉄太郎も、江戸育ちで日増しに女らしくなっていく英子をいとおしく思うようにもなっていたのである。

こうしてすぐに縁談がまとまり安政元年（一八五四）鉄太郎は、精一の義弟となったのである。鉄太郎二十歳、英子十五歳、精一二十五歳であった。

その後、この二人は、実の兄弟以上に互いに助け合い、幕末の動乱期に、徳川の盾となって目覚しい活躍をすることになるのである。

高重と鉄太郎は、安政三年（一八五六）、幕府の設立した講武所で共に師範を務めるようになった。鉄太郎は剣術、高重は、馬術と騎射である。この講武所で、高重は、中條景昭、高橋精一、関口隆吉、成瀬三五郎、落合正中、松岡萬（つもる）など多くの武術師範と親交を深めている。なかでも中條景昭との出会いは、その後の高重の運命を決定づけることになった。

中條金之助景昭は、講武所結成当初から剣術師範として出仕していて、剣豪として知られていた。

文政十年（一八二七）六月十九日江戸六番町で生まれた。高重、鉄太郎より八歳以上年上である。三河以来、三百石取りの旗本の家柄で、父市右衛門、母ますの長子

として生まれている。父は、小姓組頭、祖父は、御書院番を勤め、禄高に役料がついて、裕福であった。

幼少の頃より武芸を志し、心形刀流の伊庭如水軒春秀の門下に入り、頭角を現した。さらに、千葉周作の玄武館で学び剣を磨いている。山岡鉄太郎、坂本龍馬、清河八郎などと同門ではあるが、そのころは、年齢も違いあまり交流はなかったようだ。講武所で剣術を教えるようになって、高重、鉄太郎、精一などとも親交が深まった。

景昭の心形刀流の組立ちは、音に聞こえ、明治になってからも、鉄太郎との立会いを慶喜の前で披露している。文久三年（一八六三）五月「新徴組」の江戸市中取締の支配を命じられ、火中の栗を拾う役割を担うことになるのである。また、幕府旗本攘夷一七人組の一人として、攘夷の実行を迫る建白書を提出している。

旗本攘夷一七人組は、講武所の師範たちを中心に結成された。結成当初は、幕閣に攘夷の決行を促す勢力となったが、時代は尊王開国へと傾き、その流れに抗しきれず、只ひたすら幕臣として徳川家の存続を願って行動した。大政奉還後は、慶喜を護衛する「精鋭隊」を率いて、上野、水戸、駿府と移動している。

二、混迷する幕府

（一）公武合体へ

桜田門外の変直後の三月十八日、万延と改元された。

しかし、この年号は長続きせず。一年足らずで文久に変わっている。

日米通商条約調印と将軍継嗣問題に辣腕を振るった井伊大老暗殺によって、日本各地の尊王攘夷派の武士が勢いづいた。勤皇の志士と名乗る浪士が京で暗躍し都の治安が悪化してきた。

幕府老中安藤信正は、開港・通商条約に関する朝廷の反対をかわし、勤皇派浪士の矛先を和らげるため、孝明天皇の妹和宮の将軍家茂への降嫁を要請した。

孝明天皇は、文久元年十月（一八六一）攘夷の実行と京都の治安を確保するため、和宮を家茂のもとに嫁がせることに同意した。公武合体の推進である。

天皇は、朝廷だけの力では、七百年間続いた武家政権を崩壊させ、貴族政治を復活させることは困難であり、開国を迫る外国の圧力をはね退け攘夷を図るには、幕府の武力が必要であると考えていた。ところが、幕閣は、当時の世界情勢を比較的正確にとらえていた。欧米列強の東洋への進出は著るしく日本の国力では、外国の力に抗し、鎖国を続けることは困難であり、開国政策を逆戻りすることはできないと判断していたのだ。

そこで、幕府は苦肉の策に出た。

攘夷派の意見も取り入れる形で幕府組織を変え、政治総裁を置くことにした。その総裁に、三卿のうちの田安家から出た越前藩主松平春嶽を当てた。また、将軍補佐

役に水戸家の一橋慶喜をつけたのである。慶喜は、英邁の誉れ高く、島津斉彬、徳川斉昭、松平春嶽の推挙を得て、十四代将軍の地位を紀州徳川家の家茂と争ったが、敗れている。

幕府は、孝明天皇の要請に従い、将軍家茂の上洛を図り、京都の治安を回復させるため、浪士の徴募を図ることにした。巷に溢れる浪士を治安部隊として京に送り込み、尊皇攘夷を唱える浪士たちを取り締まろうとした。毒には毒をもって制するという手段に出ようとしたのである。

この浪士徴募は、気骨ある旗本の不評を買った。とくに講武所の教授たちには、徳川家に武をもって奉じてきた旗本をないがしろにして、浪人どもに京都の警護をゆだねるのはおかしいのではないかと反対するものも少なくない。

だが、旗本の多くは、長期間平和な暮らしに慣れ、尚武の気風を失っている。武術を磨くより、公儀の能吏となることを好む風潮となっていたのだ。

(二) 新徴組と清河八郎

文久二年（一八六二）十二月、小石川の伝通院に設けられた浪士徴募所に大勢の応募者が集まった。浪人、郷士、博徒、百姓、町人とさまざまな身分の者たちで、まともな武士は少ない。

幕府は、二三四人の採用を決定し、これに新徴組と名付けた。取扱役に松平主税介、取締役に山岡鉄太郎、松岡萬を当て、幹部は幕臣で固めた。

ところが、この新徴組の創設には、影で清河八郎が深く関わっていたのである。

「王城を守護し、京都の治安を守るためには、幕府の警察力の強化が必要である。そのためには武術に優れた有為の浪士を諸国から募ることが大切である」と清河は、鉄太郎に提言した。鉄太郎とは千葉周作道場の玄武館以来の剣友である。学問もあり博識な清河に魅かれていた鉄太郎は、彼の建言を幕閣に繋いだ。攘夷論者として、江戸の浪士仲間の間では知られていた清河を通じ、鉄太郎は、江戸の在野の勤皇家とも係わりを持つようになっていたのである。

清河八郎は、出羽国田川郡清川村の出身である。この村の斉藤家の長男として天保元年（一八三〇）十月十日に生まれた。斉藤家は、大地主で、酒造業を営み、苗字、帯刀を許されている。本名は元司。清河八郎とは、後からつけた活動家としての名である。

彼は、学問を志し、江戸に出て東條塾に寄宿生として入った。この東條塾の隣が千葉周作の道場玄武館である。就学途中、彼は諸国遍歴の旅に出たが、再び塾に戻っている。その頃から玄武館で剣術修業を積むようになったのである。

文久三年（一八六三）二月一三日将軍家茂は、東海道を通って上洛の途についた。新徴組は、五日前に先発し、中山道を京に向かいすでに到着している。この時は、取扱役が、松平主税介から前駿府奉行鵜殿鳩翁に代っている。

清河は、京都到着後、この新徴組を朝廷の親衛隊とし、攘夷決行の中核隊としようとした。

ところが、それを画策している最中に、武州生麦村で、島津久光の行列の従士が英国人一人を殺害し、二人に傷を負わせるという事件が起こった。いわゆる生麦事件である。英国は、交渉が一向に進展しないことに腹を立て、江戸に軍艦を差し向けると幕府を脅かした。

幕府は、京での清河の計画を察知し、この生麦事件で江戸の治安が悪くなったことを理由に、新徴組を江戸に戻すことに決定した。清河は、やむなく新徴組を取りまとめて江戸に帰ることになった。

しかし、江戸に帰ることを拒んだものが二十人ほどいた。近藤勇、土方歳三の率いる多摩の農民出身の天然理心流の一派と神道無念流斎藤弥九郎道場の師範代芹沢鴨の率いる一派である。

幕府は、江戸に帰った清河の動きを警戒し、新徴組に新しいお目付け役を加えた。取締役に逸見又四郎、取締出役に佐々木只三郎、高久安次郎、広瀬六兵衛、調役に依田哲次郎、永井寅之助、山内八郎、中山修助といずれも武術の達人ばかりである。こうして新規加入のお目付け役を中心に、清河暗殺計画がめぐらされた。

清河が、上之山藩の金子与三郎の家を訪問したとの情報を得たお目付け役の佐々木只三郎、逸見又三郎、中山修助、高久安次郎は、麻布一の橋で、清河の帰りを待ち伏せした。

清河は、金子宅でご馳走になりいささか酔っていた。金子宅を辞したのは、四つ過ぎである。橋を渡りきると、陣笠を被った侍に呼び止められた。

「清河さんですね」

清河が、ふと顔を上げると、四、五人の武士に取り囲まれた。

「そうだが、何か」

相手の顔を覗こうとする瞬間、背後から逸見又四郎が抜き打ちざまに浴びせかけた。

清河は肩を切られ、前のめりになり柄に手を掛けたその時、裂帛の気合と共に正面から切り込んだ佐々木只三郎の大刀が、右首筋を切り裂いた。清河の体は、二、三歩、横に足を運びどうと倒れた。首の付け根から肩口にかけての傷口から鮮血が飛び散った。

文久三年四月一三日蒸し暑い夜であった。

(三) 高重、自宅謹慎

高重は、家茂の上洛に当って、旗本こそが警護の従士

として相応しいと考え、随行を希望していた。だが、その思いはかなえられなかった。それだけではない。かねてから信奉していた慶喜も将軍後見職として、上洛することになったのである。武家の棟梁とその補佐役が、二人とも京に上り、政治の中心が京に移ってしまう。思いあまって、高重は、かねてより旧知の間柄であった次席若年寄村松備中守宅を訪ね、慶喜の上洛を思い留まらせ、家茂の警備には、直参旗本をもって当らせるべきだと建言した。

「旗本は、そもそも神君家康公以来、代々幕府より碌を受け、徳川家のために武をもってお役に立つための家臣たちです。将軍が上洛されるというのに何ゆえあって、氏素性のはっきりしない急ごしらえの新徴組などに将軍家の警護を任せるのでござろうか」

「貴殿の誠忠の志にはほとほと感じ入った。まだ幕臣にも貴殿のような三河武士の心を持ち続けている旗本がいるとは心強い。しかし、新徴組の上様警護はすでに決まったことである」

「決まったことならばいたし方ございません。しかし、何故後見職の一橋慶喜様までが、ご上洛いたさねばならないのか合点が参りません。ここに思い留まるよう嘆願書を認めましたので、ぜひこれを松平春嶽様にご提出いただきとう存じます」

村松備中守は、その嘆願書に目を通した後、おもむろに顔を上げて言った。

「この意見具申を松平春嶽様がお取り上げになることはまずなかろう。受け取られようによっては、お役御免、閉門謹慎のご処分があるやも知れぬ。覚悟の上であろうな」

「もとより覚悟はいたしております」

高重は、毅然として旗本の気骨を示した。

村松備中守は、数日後、政治総裁松平春嶽に建言した。だが、「今回の浪士派遣は、関白鷹司輔熙様の御意向でもある」として受け入れられなかった。

その上に、村松備中守は、職を解かれた。

高重もその責任を取って、病気届けを出し、自宅謹慎をすることになったのである。

（つづく）

カリカチュア

“愛煙・応援歌”

伊治哲

――いささか旧聞に属する上に、紳士淑女諸賢の顰蹙を買うやも知れず、暫時沈思愚考したが、世の大勢に一矢を報いるの念やみ難く、猛反発を覚悟の上で、以下敢えて不謹慎な言辞を弄する。

二〇〇八年一二月二八日　記――

九月の末からタバコをやめた、つまり禁煙を決行したのである。

前の日に、これからの数日間分として、ケント十箱入り一カートンをコンビニで買ったばかりであった。そのあくる日からやめたため、最初の一箱の三本を吸っただけで、未だ丸々手許に残っている。洋服やコートのポケットにはライターが依然入ったままになっている。今にしてみればただ恨めしいばかりである。

灰皿もこれまでと同じように机の上に置いてあるし、手を伸ばせばいつでもタバコが吸える状態になっているのだが、それでもあの日以来一本も口にしていない。我慢くらべか、禁欲の試練に挑んでいるかのようで、自虐趣味のようにさえ思える。

今日で、もう三か月近く禁煙が続いているが、正直にいうと喉から手が出るほどタバコを吸いたい。タバコを一杯口にくわえた夢をみたことさえある。一時は禁断症状のようになって、少し気が短くなったかなと思える時もあったし、タバコが置いてある自室にこもることが少なくなった。部屋に入る時はタバコの在りかを見ないように目をそらせている。自分自身に懲罰を課しているようでもある。どこまで自己抑制が続くか全く自信がない。

もう半世紀以上昔のことだから白状してもよいだろう。私は十七歳、つまり中学五年卒業（旧制）と同時に

タバコを吸うようになった。学生寮で学友に誘われ、いたずら半分に手を染めた。始めはただむせるばかりで旨くもなにもなかったが、なにか大人の仲間入りをしたような気分になって悦に入っていたように思う。その後体調を崩した折に、一時"避煙"したこともあったが、ついに禁煙には至らなかった。とりわけ、このような文章を書いている途中で、さて次のフレーズはどのように書き始めようかと考えるとき、タバコの一服が実にいい発想を与えてくれるのだ。病嵩じて、時には最高一日四十本近く吸ったこともあった。それでも最近は十二、三本にまで減らし、毎日日記帳の隅に記録して意識するようにしてきた。

それなりに喫煙から遠ざかろうと努力してきたのは事実である。しかし、通算七十年にわたって"紫煙"を愛してきたのであるから、とても女房との付き合いの比ではない。したがって、この歳になってまでタバコをやめることはない、他人がなんと言おうと、最後の一人になってもタバコだけは手放さず愛し続けようと、ついこの間まで心に決めていたのだ。

それが何ゆえ急に思い立ったようにタバコをやめる気になったのか。実は自分でもよく分らない。

ただ一つある。それは、喫煙者に対する理不尽ともいえる世の中の圧迫、迫害に我慢できなくなったからだ。

とりわけ、最近議論されている神奈川県の禁煙条例である。松沢知事は、人の集まる場所であれば、病院・学校・公会堂・バスターミナル・公園などは当然のこととして、パチンコ店・バー・クラブ・喫茶店・居酒屋にいたるまで、一切喫煙禁止にするというのだ。全国初の試みという。

さすがに、飲食遊興関連業界の猛反発に遭って、分煙の容認や試行期間の設定など、とりあえずの妥協策を模索しているようであるが、知事は最終的には完全禁煙することに強く固執している。

ところがなんとも歯がゆいのは、業者側が、禁煙による来客数の減少、それに伴う売上の減少という利害関係を論拠に反対を主張していることである。一部業者だけの利害の主張では、国民の健康保護を訴える正論に到底勝ち目がないことは目にみえている。何故、遊興の場にまで一律禁煙を持ち込もうとするのか、喫煙対禁煙についての本質論を議論しないのか、全く不可解といわざるをえない。

タバコを吹かしながら喫煙擁護、禁煙反対を唱えても説得力はない。敢えて禁煙を断行した理由はそこにある。

そもそも酒やタバコは、人間の趣味・嗜好の問題である。いかに健康増進法を拠りどころとするとはいえ、誰が人間の趣味・嗜好を制限する権利をもっているというのだろうか。そんな権限は誰ももってはいない。まして、自分の主義、主張や価値観までも他人に強制する根拠など、どこにもありはしない。

因みに「健康増進法」は小泉内閣時代の二〇〇二年七月に成立した法律であるが、その二五条に、「不特定多数の人が集まる施設の管理者は、受動喫煙を防止するために必要な措置を講ずるよう努めなければならない」と規定している。但し、罰則はなく努力義務にとどめている。

それでも、法制化されたことによって、禁煙派は一挙にこれを大義名分"錦の御旗"として、至るところに「禁煙マーク」のラベルを張り巡らせた。あたかも戦争中の"国民精神総動員本部"が「ほしがりません、勝つまでは」「贅沢は敵だ」などの立看板を繰り出したのとそっくりだ。日本には今、禁煙ファシズムが横行していると言ってもよい。喫煙派はまるで"国賊"であり"非国民"なのである。

なにごとも正か否か、善か悪か、美か醜かの二元論に集約して、一方を絶対悪として封殺しようとする思想は、およそ民主的ではないし、独断専制を許す素地ともなりかねない。

東京駅の山手線や京浜東北線のホーム北端に行ってみるがよい。各ホームにただ一箇所、三坪ばかりの喫煙コーナーがある。

私鉄の駅構内からは、既にすべての喫煙コーナーが取り払われている。JRだから同根のJTに配慮して申しわけ程度のコーナーを置いているのだろうが、これとても世論の趨勢によっていつどうなるか分らない。現にJR東日本では、二〇〇九年四月から首都圏二百一駅のホームにある喫煙所を撤去し全面禁煙にすると発表した。また、新幹線の喫煙車両はつぎつぎに減っていき、JR東日本が運営する区域では既に全車禁煙となっている。

あと幾ばくの余命もない東京駅の喫煙コーナーには、今も黒っぽいスーツを纏ったビジネスマンやウーマンたちが黒山のように群がって、ここを先途とタバコに吸いついている光景が目に入る。しかも、ゆったりとタバコを嗜むという余裕などはない。息もつかせずスパスパと吸い貯めしているという慌ただしさなのだ。それは、この喫煙コーナーを一歩踏み出すと、千代田区の条例などによって、道路も建物も一律に全面禁煙になっているからである。もし路上でもちょっと一服しようものなら、ただちに二千円の過料を取られる仕組みになっている。

喫煙派にとってこれほど希少価値の喫煙コーナーさえも、近く取り払おうというのである。たった三坪のコーナーを取り払うことによって、一体どれほどの健康被害が避けられるのか、私は知らない。だが、愛煙家にとって数少ないオアシスが着実に失われつつあることだけは確かである。

いたるところで紫煙を楽しむ自由をシャットアウトされながら、それでも肩身の狭い思いをして、遠慮がちに、背を丸めてタバコを吸い続けるこの黒っぽい集団を見るにつけ、憐れを通り越して怒りを覚えるのは私だけではないであろう。なぜ彼らは喫煙者に対する差別虐待に抵抗して、紅蓮の狼煙をあげないのか。

昔、キセルでキザミタバコなどという悠長でのんびりした風景はいたるところで見られた。漱石などの近代小説や、文芸作品といわれる映画のなかにも、登場人物のほとんどが悠々とタバコを燻らせる場面があったものだ。そんな風情のなかに、温もりやゆとりを感じ取っていたことを思い出す。戦後も「今日も元気だ、タバコがうまい」などと、健康のバロメーターとさえされた時代があった。

日本人は高度経済成長を経て格段に豊かになり、そのおかげで、極端な清潔主義者、潔癖主義者になった。そのことは文明国家として誠に喜ぶべきことではあるが、逆にいうと、それだけひ弱になり、せせこましくなったともいえる。いまどき"毒をもって毒を制する"などと、もし口にしようものなら時代錯誤も甚だしい蛮行として一笑に付されるであろう。私など、ついこの間までタバコをやめない理由に、そんな愚言を弄していたものだ。それにしても"清濁併せ呑む"くらいのおおらかさと気概がほしいとつくづく思う。

ともあれ、"過ぎたるは及ばざるが如し"である。タバコに関してだけむやみに神経過敏になっている。自分の健康を守ることは大いに結構である。しかし不思議なことに、タバコ以外の健康を害する要因については一向に無頓着なのだ。

例えば車の排気ガスがその典型だ。排気ガスは、密室で直接吸引すれば直ちに死に至るくらい恐ろしい"煙"である。タバコの害どころではない。同時に、地球温暖化が叫ばれて久しいが、対策は遅々として進まない。松沢知事には、CO_2削減のためにも、タバコより先に排気ガスを撒き散らす車の乗り入れを全国に先駆けて禁止することをお勧めする。

ほかにもある。飲食物や化粧品、さらには美容整形などに、健康を害する危険がいっぱい詰まっていても、ラベルや看板に"健康"とか"美容"とかいう美辞麗句が並んでいるだけで、なんの疑いも躊躇いもなく簡単に飛びついてしまう極端な無神経さにはただ呆れるばかりである。

別の例えでいおう。ゴミ収集日の朝の出勤途次、ファッション雑誌から抜け出たようにきれいに着飾った婦人が、臆面もなくナマゴミのポリ袋を置き捨てていき、その後にカラスが突つき回した残骸が道路に散乱するのと

全く変るところはない。

今の世は、その程度の似而非潔癖主義者が溢れているのだ。

もちろん、喫煙者は自らの健康被害について当然自己責任を覚悟しなければならない。そして、いかに愛煙家といえども、タバコを恐れる他の多くの人たちを強いて害することは許されない。公衆の中ではできるだけ他人に迷惑をかけてはならない。禁煙場所では絶対口にしてはならないし、吸殻をポイ捨てしてはならない。これらの最低のマナーを守ることは愛煙家の条件である。喫煙者にはそれだけの厳しい自己規律が課せられる。

しかし、一方で禁煙を求める側にも、愛煙家に対する思いやりがなくてはなるまい。まるでタバコを吸わないことが正義であり、タバコを吸う人は救い難い非文化人であるというような言い方は止めるべきである。四面楚歌の中で敢えてタバコを口にするには、それなりの経緯があるはずである。それらの人に対して、せめて、体に気をつけて嗜んでください、というくらいの思いやりがあってもよいのではないか。世の中、お互いさま、相身互いで成り立っているのだ。

最後に、参考までに喫煙者への応援歌を付け加えておこう。

手元の資料で古い統計だが、二〇〇一年時点での喫煙率は、男性で四五・九%、女性は九%で全体では二四・四%である。今では、もっとその比率が下がっているだろう。ところで、財務省によると、これらの喫煙者が納める直近のタバコ税は、国、地方合わせて年間二兆二千億円（平均一本当り八・七円）になる。つまり、喫煙者は年に二兆円に及ぶタバコ税を納めている、いわば"多額納税者"なのである。いま仮にタバコを全面禁止して、そのかわりに消費税二兆円分（現行五%の消費税は、同じく年十三兆三千億円であるから、約一%弱に相当する）を増税するとしたら、禁煙派は喜んで受け入れるだろうか。多額納税者をただ一方的に白眼視することができるだろうか。

また、これもちょっと古い記事ではあるが、二〇〇三年五月の新聞記事に「肺がんや心臓病は受動喫煙と関係なし」という研究結果が報じられていた。米カリフォルニア大ロサンゼルス校のジェームス・エンストロム氏らが、配偶者がタバコを吸い、自分は全く喫煙しない米国人三万五千五六一人を対象に追跡調査をしたところ、肺がんないし心臓病による死亡とはっきり結びつく結果は得られなかった、と英医学誌に発表したというのである。（二〇〇三年五月一六日・日経新聞）

さらにもうひとつ、二〇〇三年にノーベル物理学賞を

受賞した小柴昌俊博士（八二歳）が、日経新聞の「私の履歴書」に書いた文章の一部を借用する。「旧制一高の入学試験の途中で、タバコを吸いたくなって、試験監督の若い先生に『先生、タバコを吸っていいですか』と言った。そしたら『タバコ、吸うんですか』とか言って灰皿を持ってきてくれた。試験の時にはそんな余裕があったのだ」そして、「大きな声ではいえないが、私は中学一年のときからタバコを始めて、今に至るもずっとゴールデンバット一筋だ」と付言してあった。（二〇〇三年二月七日・日経新聞）

人品卑しからず、明らかに“後期高齢者”と思しい老紳士が、悠然と紫煙の流れを楽しんでいる姿を垣間見ることがある。そのたびに、好感と羨望を未だに禁じえないでいるのは、いかにも未練がましいと思う。“禁煙奴！たゆとう紫煙の成れの果て”などと自嘲しながら、である。

愛煙家よ、悠々、堂々と、紫煙を楽しまれては如何。禁煙など、やろうと思えばいつでもできるのだから・・・。

祝出版

関口隆吉の一生

共著　三戸岡道夫
　　堀内永人

静岡新聞社　1,800円

仁の精神に徹した初代静岡県知事

今川風雲録（五）

千坂精一

保身を図った泰範

将軍足利尊氏から、

「一人当千」

と賞讃された駿河二代範氏が貞治四年、正平二十年（一三六五）に五十歳で歿したあと嫡男氏家が嗣いだが、病弱だったために間もなく死去してしまった。

わが子範氏と孫の氏家を相次いで喪った駿河初代範國は、七十一歳でまだ矍鑠としていたので、急遽建長寺喝食だった三十二歳の二男泰範を還俗させることで落着させた。

さきの了俊は、このとき幕府に仕えていて、翌年二代将軍義詮に召し出されてから頭角を現わしてゆく。

その了俊が、應永六年（一三九九）十一月に和泉国堺で挙兵した大内義弘を鎌倉公方足利氏滿と同盟させた廉で隠棲させられたときは今川本家も危機に直面した。

当主になって三十五年、六十六歳になっていた泰範は、それまで幕府に忠勤を励み義滿の信頼をかち得てきていたので不問に付されて事なきを得たが、それからというもの因縁をつけられぬよう神経を磨り減らしてきた。

そして、つねに世評を気遣い、幕府の覚えめでたきよう保身に終始すること十年、應永十六年（一四〇九）九月二十六日、七十六歳で世を去った。

遠江守護を解任された範政

泰範のあとの駿河今川四代は嫡男範政が嗣いだ。

この世代交代を待っていたかのように、幕府は今川氏の遠江守護を解任して管領斯波義教に任命した。

今川氏と同族の斯波氏は三管領の一家で、越前・尾張守護であったが遠江が加わり、今川氏は駿河一国になってしまったことが、のちに両家の争いの因になる。

範政は、自分が当主になった途端に遠江守護を解任されたのがなんとしても口惜しかったが、幕府の専権であるからには異議を申し立てたりして楯突けば謀叛になる。

七年もまえの大叔父了俊謀叛の責めを負わされるのは腑に落ちず、斯波義教の画策ではないかと疑ってみた。

應永十八年（一四一一）範政は祖父範氏以来の居館を大津城（島田市大草）から駿府城（静岡市）に移した。

駿府は古代律令制時代に国府がおかれたことから、駿河府中を駿府と縮めて呼称されていたのである。

今川氏が本拠にした駿府館は近世の駿府城跡の一画にあったようで、有事の詰の城は背後の賤機山にあった。

このころになると、幕府と鎌倉府の対立は一触即発の危機が高まってきていて、その危機意識から幕府の駿河守護今川範政に対する期待度も高まってきていた。

駿河の東端は鎌倉公方統轄地と境を接していたので、今川氏は代々幕府から鎌倉府の監視と抑えの特殊任務を課せられていたのである。つまり幕府の尖兵であった。

その最初の任務遂行が應永二十三年（一四一六）十月二日に鎌倉府で起こった〈上杉禅秀の乱〉であった。

ことは前年四月二十五日の政所評定で公方持氏が常陸の国人越幡六郎の所領を没収したことからはじまった。

六郎は裁決の不満を管領上杉禅秀（氏憲）に訴えた。

禅秀の再調査では六郎の不届きは瑣細なことだったので処分の撤回を求めたが、持氏が応じないので、（こんな理不尽な政道のもとでは管領職はつとまらない）と憤慨して、五月二日に辞表を提出した。

禅秀は、持氏が困って越幡六郎の所領没収を撤回するだろうと思っていたのだが、持氏は辞表を受理して同族上杉憲基を管領に補任してしまったのでことが拗れた。

じつは、かげで持氏と憲基が結託していたのである。

幕府の管領職は細川、斯波、畠山の同族三家が交代で就任していたように、鎌倉府でも関東管領職は犬懸上杉、山内上杉の両家が交互に就任するのを慣例にしていた。

犬懸家の禅秀の父朝宗のあとは山内家の憲基の父憲定がつとめ、禅秀のあとは憲基にきまっていた。

それを憲基が就任を焦り、持氏は禅秀を嫌っていたことから両者の禅秀排斥の思惑が一致して行動に奔った。

「禅秀解任」

の噂が広まると一族与党の面々が武装して犬懸ヶ谷の禅秀邸に馳せ参じて異様な雰囲気になったので、持氏や憲基も与党集めを急ぎ鎌倉は不穏な空気に包まれた。

だが、浄明寺村の公方邸と大町佐介ヶ谷の憲基邸に集結した人数を併せても禅秀方には遠く及ばなかった。

持氏は、やむなく禅秀に和解を求めて衝突を避けた。

禅秀は関東管領復帰を待ったが、持氏に無視された。

怒った禅秀はついに蹶起して、持氏と憲基を追放した。

鎌倉を逐われた持氏と憲基は片瀬、小田原を経て箱根まで逃れたが、山中で逸れて憲基は越後を目指して伯父の守護上杉房方を頼り、持氏は範政を頼ってきた。

公方が管領に鎌倉府を追われるという前代未聞の出来事に驚駭した範政は、すぐさま幕府に注進した。

幕府から叛乱軍討伐の御教書を受けた範政は十二月二十五日付で関東の諸将に回状を送り、禅秀方国人には、

「所領は他人の拝領地になってしまう」

と脅したので、江戸、豊島、南一揆、南奥篠川御所滿直らは禅秀を見限って幕府方に寝返ってきた。

禅秀方の動揺を看て取った範政は、その虚を衝くべく兵をすすめて晦日には小田原に到達していた。

明けて元旦、禅秀軍が武蔵瀬谷原（横浜市瀬谷区）で南一揆、江戸、豊島軍と合戦して優勢に兵をすすめている隙に、範政は小田原からいっきに鎌倉を目指した。

そして、急拠鎌倉の防衛に帰陣してきた禅秀軍と十日に雪ノ下で合戦となってこれを破り、禅秀の四男實性院快尊法印の雪ノ下御坊に追い詰めて自害させた。

乱を平定した範政は、戦功を賞されて朝廷から副将の綸旨を賜わり、将軍義持からの閏五月七日付御教書は、

「関東の事　早速落居目出度候　今度の忠他に異なるの間　富士下方を宛行所に候」

という褒美の宛行状であった。

このとき範政三十四歳、血気旺んな青年武将であった。

父義滿に疎外された将軍義持

義持はまだ九歳の應永元年（一三九四）十二月十六日に元服させられると、正五位下左馬頭に任ぜられた。

そうしておいて義滿は、征夷大将軍を辞任して義持に譲ると、みずからは国政を総括する最高機関の左大臣、右大臣、大納言など太政官の最高位太政大臣に就任したので、義持は将軍といっても名ばかりで実権はなかった。

そのうえ義滿は八歳下の弟義嗣を溺愛して義持を疎外したので、義持は中途半端な存在になってしまっていた。

どちらも庶子であったが、義持は生母側室藤原慶子から離されて正室日野業子の許で嫡子扱いされて育てられたのだが、義嗣のほうは生母が愛妾の春日局であった。

義滿は、義持以外の七人の子をみな門跡に入れていたから、当然義嗣も出家のはずであったが、寵愛を一身にあつめている春日局の懇願で梶井門跡入室は取り止めになり、父の手許で育てられることになった。

義持が、そんな父に義嗣偏愛の不満を漏らしたことから義滿の顰蹙を買い、ますます遠ざけられていった。

まだ十五歳の少年義持は、淋しさのあまり臨済宗の高僧絶海中津の弟子になって、道詮という法号を受けた。

絶海中津は夢窓疎石に師事した京五山の学僧であった。

こんな話がのこっている。

義持二十三歳、義嗣十五歳の應永十五年（一四〇八）三月八日、義滿は北山第に後小松帝の行幸を仰いだ。

義滿は、このあと五月に流行病で急逝してしまうから、この日は太政大臣としての最後の盛儀であった。

義滿は、あろうことか将軍義持を市中警備につかせておいて、まだ元服前の義嗣を従え四足門に出迎えた。

そして、当日の祝宴においても義持でなく義嗣のほうを陪席させ、廷臣最高位の関白より上席に坐らせて、諸卿列座のまえで自分のつぎに天盃を賜らせたという。

従一位大納言右近衛大将の兄を差し置いて従五位下の義嗣に与えられたこの厚遇は、義滿が密かに、

（後継者は義持でなく義嗣）

と考えている心の現われであったかも知れない。

こうして、父義滿の溺愛の許で育った義嗣が、いつか、

（ひょっとすると、次の将軍は自分なのかも知れない）

そう思い込んでいったのも無理はなかった。

事実、このころ巷間でも、

「太政大臣義滿様のあとを継ぐ将軍は義嗣様なのだろう」

と頻りに取沙汰されていた。

ところが、義滿が急逝すると管領斯波義教の父で室町幕府きっての実力者斯波義将は大方の予想を裏切って義持を将軍に据え置いて、自分も一時管領に返り咲いた。

有無を言わせぬ素早い対応であった。

唖然とさせられた義嗣のほうは憤懣遣るかたなかった。

（兄は仮りで自分が将軍になるに違いない）

そう信じ込み脚光を一身に浴びて得意の絶頂にあった義嗣は、突然奈落の底へ突き落とされた思いであった。

義嗣は斯波義将に裏切られたことから兄将軍義持を深く恨み、それが昂じて打倒を企てるようになっていった。

義嗣は一刻も早く野望を果たそうとして焦り、少数の反幕勢力に積極的に近付いて、後醍醐帝の側近北畠親房の曽孫で南朝方の中心人物であった伊勢国司北畠満雅を煽動してことを構えようとしたが、失敗した。

当時の幕府は開府七十年の安定期にあって、いかに義滿に溺愛された義嗣と雖もつけ入る隙はなかった。

ことが成らず、悶々とした日々を送っていた義嗣は、

—鎌倉で公方と管領が対立した。

噂を耳にすると、

（時機到来）

この好機に便乗して野望を果たそう、と北叟笑んだ。

東国通の側近僧侶の提案は、管領を嗾けるよりも義嗣とおなじ境遇で悶々としている再従兄の足利滿隆を唆して管領を抱き込ませたほうが得策とのことだったので、禅僧を密使に仕立てて鎌倉へ送り、滿隆に、

—同盟謀叛。

を煽動した。

だが、鎌倉の蹶起は今川範政らに鎮圧されて滿隆、禪

秀は自刃し、義嗣のほうも挙兵に失敗してしまった。

義嗣は将軍になれなかったことで拗ね者になってしまい、幕府の宿将たちから見放されていたし、手勢もなかったので謀叛を企てること自体所詮無理な話であった。

僅かに義嗣に好意を寄せる反義持派の守護大名たちや、比叡山と興福寺の僧兵などを当てにしてみたのだが、彼らは慎重で容易に起とうとしなかった。

万策尽きて、断念せざるを得なくなり、謀叛の計画が泡沫と消え去ると、熱病から醒めた義嗣は急に自分の行動が空恐ろしくなってきて、密かに屋敷を出ると高雄山神護寺へ逃れ、髻を切って出家し、遁世を装った。

幕府は、義嗣の逃亡で謀叛の計画を知り、驚愕した。

将軍義持は、ただちに神護寺へ追手を差し向けて義嗣の身柄を拘束すると、父義滿が建立し夢窓國師を開山とした臨済宗相國寺に監禁しておき、近臣の日野持光、山科教高らを捕えて背後関係の調査を急がせた。

そして、鎌倉の叛乱を鎮定した翌應永二十五年（一四一八）一月四日、義持は二十五歳の弟義嗣を誅殺した。

こうして、名実ともに四代将軍になった義持は、自分を疎んじた父義滿の好んだ能楽と鍾愛した世阿彌を遠ざけて、曽祖父尊氏が好んだという田楽に熱中し、また笙の音をこよなく愛して、みずから奏でては無聊を慰めた。

應永九年（一四〇二）に明国から〈日本国王〉の称号を与えられ、継室日野康子も国母に当たる〈准母〉を宣下されたりして位人臣を極めた義滿は精力もまた絶倫で、十八人の妻妾に二十一人の子女をもうけた。

だが、義持は應永十四年（一四〇七）正室日野資康の娘榮子が産んだ嫡男義量一人だけであった。

その義量が十七歳になった應永三十年（一四二三）三月十八日、義持は将軍職を譲ると足利氏歴代の廟所等持院で出家して仏門に入った。まだ三十八歳の若さだった。

在位二十九年だが、十四年は父義滿の傀儡であった。

くじ引将軍の富士遊覧

将軍になった義量はひよわな貴公子だったので、二年後の二月二十七日に十九歳の若さで病歿してしまった。

後継将軍は義持の弟たちから選ぶよりほかなかった。

義嗣がいれば有力候補だったのに早まってしまった。

結局、いずれも仏門に入っている四人の弟、

青蓮院義圓
仁和寺法尊
梶井門跡義承
大覺寺義昭

のうちから選ぶことになった。

管領畠山滿家らの宿老が義持に指名を迫ったが、

「みなで相談して決めよ」

というばかりで意志を示さなかった。

困った管領たちは、義持の信任厚い三寶院滿濟に聴き出すよう依頼したが、それでも義持は指名しなかった。

滿濟はやむなく、

「くじ引きで決めてはいかが」

と提案して義持の承諾を得ると、滿濟がくじをつくり山名時熙が封をして源氏の氏神石清水八幡宮に預けた。

義持が自分の死後に開封せよと命じたからである。

義持が自分の意志で決めようとしなかったのは、四人の弟それぞれを推す三管領、四職ら有力守護の力の均衡を崩したくない事情があることと、鎌倉公方足利持氏が虎視眈々と将軍の座を狙っていることもあって、宿老たちの合議に委ねたほうが安全と考え逃げたのであろう。

そして、義持が四十八歳で歿した應永三十五年（一四二八）一月十八日に管領畠山滿家が石清水八幡宮の神前で引いたくじを諸大名が一堂に会した室町殿に持ち帰り、

「源氏の氏神石清水八幡宮の神慮である」

といって開封し、青蓮院義圓が六代将軍に決定した。

義圓は明徳五年（一三九四）六月十三日、義滿の四男に生まれた。母は義持とおなじ側室藤原慶子である。

十歳のとき、天台宗門跡寺院青蓮院（京都市東山区粟田口）に入れられて義圓と名告り、仏門に入った。

二十六歳で大僧正、天台座主に昇り、准三后宣下を受けて仏法界の重鎮になっていったのである。

後継将軍に決定した義圓は、諸大名に迎えられて中御門萬里小路の中納言日野義資の屋敷に入った。

三月十二日に兄将軍義持の四十九日の法会をおえたのちに還俗して義宣と改め、従五位下左馬頭に叙せられた。

翌年、三十六歳になった義宣は、三月九日に元服した。

そして、三月十五日に参議左近衛中将・征夷大将軍に任ぜられて、正式に足利六代将軍の座についたのである。

このとき、さきに名告った義宣が〈世を忍ぶ〉ときこえて縁起が悪いということでもういちど義教と改めた。

さて、ここで話を鎌倉に移す。

禪秀に鎌倉を逐われた公方持氏は、範政はじめ幕府軍の支援で奪還できたので、いっとき鳴りを潜めていた。

五代将軍義量の歿後幕府が禪秀の遺児や与党たちを赦免したことで反感を抱いたが、先代義持から一字を貰っていることで次期将軍の座に密かな望みをかけていた。

夢にまでみた将軍の座を得る機会を窺って義持の気に入られるように立ちまわり、忠節を尽くす努力をした。

だが、それも虚しくおわり、義持の死後義教が将軍になったことを知ったときは地団駄踏んで悔しがった。

悔しさが昂じて憎悪になり、それが義教に向けられた。

鎌倉公方は新将軍に祝賀の使節を送る慣例になっていたが、持氏は義教を無視して派遣しなかった。

正長二年（一四二九）九月五日に幕府は〈永享〉と改元したが、持氏は改元せず二年後にようやく採用した。

幕府の用いる年号を使用しないということは、明らかに反抗であり、〈謀叛〉といわれても仕方がなかった。

このへんから持氏の敵対行為は表面化してきて、幕府の権限であった鎌倉五山の住持任命を勝手に行ったり、常陸の親幕派国人大掾氏や山入氏討伐をはじめた。

将軍義教は、この持氏の挑発的な振る舞いに激怒した。

義教は、かつて三代将軍義滿が従弟の二代公方氏滿の真意を確かめるために駿河へ下向した先例に倣って、持氏を威嚇しようと考え永享四年（一四三二）九月十日に富士遊覧と称して京を出発し、駿河へ向かった。

十八日に将軍の一行を藤枝で出迎えた範政は、安倍川を越えて駿府館へ案内し、饗を尽くした歓待をした。

将軍義教が鎌倉公方統轄の関東と境を接する駿河まで下向すれば、当然持氏は挨拶にこなければならない。

義教は、

（きたなら殺害、こなければ咎めて攻め滅ぼそう）

と考えて待ったのだが、持氏はやはりこなかった。

富士を眺め、範政の手厚い持て成しに上機嫌だった義教は、持氏の無礼極まる行為に怒り心頭に発した。

このときは諫止されて思いとどまったが、義教が他日を期す覚悟を固めたのを、範政は見逃さなかった。

後継者選びで悶着を起こす

範政は、鎌倉府統轄の関東と境を接する駿河守護として幕府の尖兵に相応しい数々の戦歴を遺した勇将であったが、同時に学問にも造詣の深い知識人でもあった。

先祖がつくった今川文化を継承して子孫に伝えた。

『源氏物語』の書写や校合に業績を遺し、要点を掻い摘まんで述べた『源氏物語提要』という研究書まで著した。

また、和歌も多く遺した文化人大名であった。

ところが、そんな知識人であり常識人であった範政が、どうしたことか後継者問題で悶着を起こしてしまった。

嫡男彦五郎（範忠）ではなく、末子の千代萩丸（範頼）に家督を譲りたいと言い出したのが発端であった。

理由は定かではないが、管領細川持之や侍所頭人山名時熙らの思惑が複雑に絡み合って内訌へ発展したという。

このとき将軍義教は、末子千代萩丸の母は関東管領家一族の扇谷上杉氏定の娘であるから千代萩丸が相続すれば今川氏が関東方になってしまうのではないかと恐れた。

幕府尖兵の役を果たさせるには、なんとしても千代萩丸に家督を渡してはならないと考えて範政を説得した。

その後もあれこれ動きはあったが、ともかく義教の言い分どおり嫡男彦五郎が家督を継ぐことに落ち着いた。

だが、このときの内訌がのちになって表面化することになるのだが、そうとは知るよしもない範政は、永享五年（一四三三）五月二十七日、五十歳で世を去った。

（つづく）

古い物・遠い夢

忠内正之

茶掛「慈雲尊者の書」

永年に亘って茶道具に執心して来た。しかし気に入った品には滅多にお目にかかれない。また、たまたま出合っても懐工合次第でなかなか買えない。伝来は無くても優品は値が高いのである。

今年の初めになって、かねて欲しいと思っていた茶掛けに出合った。少々値が張ったが思い切って買うことにした。茶人ではないが、極めて知徳の高い名僧慈雲尊者の書跡だったからである。

（一）茶掛けとは

茶掛けとは文字通り茶席の床に飾られる掛物である。私見だが茶席の床飾りは元来は神前・佛前飾りを源流にすると思う。

上流階級の茶から、一般人の茶に移る過程で床飾りも変化を見せた。

室町以前の茶では床飾りの掛物は絵画が中心で佛画や、唐物の絵が多く使用された。つまり古典的な茶の形式であった。

時代が下って室町末期の頃では茶道も次第に変化して閑寂の境地を喜ぶ侘茶に移行して珠光・紹鷗・利休が出現した。

この三人の巨匠たちは、禅の修行を茶の修業と同様に重いものと考えた。つまり茶禅一味を実行したのである。結果として、彼等は、茶席の床飾りには、唐絵などに重点をおかず、墨跡を第一にすべきと考えて、常々弟子たちにも強く指導して来た。

（墨跡とは中国からの外来語であり、肉筆一般を指す。ところが、わが国では禅宗ことに臨済宗の僧の筆跡を墨跡と呼ぶ）。

更に時代が下り、茶が一般大衆の間にゆき渡ってくると、茶道そのものが多様な形式をとり、現代の様な変貌を来すこととなる。

現在、茶掛けは、掛ける場所によって二通りに分かれる。すなわち茶席の本床に用いるものと、寄付に用いるものとである。

普通本床に掛けるものは、墨跡・古筆切・懐紙等である。

寄付とは本席への導入場所（待合）であり、本床とやや趣が変わり軽いものが喜ばれる。茶人・武将・学者・歌人などで名の通った人々の筆跡で、書状・詠草・色紙・短冊等である。しかしこの様な原則論は段々とうすれて、茶掛けの品不足もあって混同して用いられる現状にあるが止むを得ない仕義であろう。

ここで昔の大茶人が愛蔵していた、伝来のはっきりした名品を紹介しよう。

この話は小堀遠州流の現在の幹部の方から伺った、掛物にまつわる話である。

「潮音堂」の三文字を横に揮毫した一幅の掛物がある。現在この掛物は山形縣鶴岡市の元伯爵家に伝えられているが、門外不出であり、国の重要文化財である。掛物の筆者は南宋禅林の巨匠無準師範（仏鑑禅師・一一七七―一二四九）である。京都・東福寺の開山である円爾弁円（聖一国師・一二〇二―一二八〇）の南宋における師がこの仏鑑禅師であった。帰朝に際していろいろの額字を師に揮毫してもらって持ち帰ったが、そのうちの一つがこの「潮音堂」であった。したがって古くは東福寺に秘蔵されていた。

ところがその後に東福寺を出て、小堀遠州（一五七九―一六四七）の愛蔵するところとなった。遠州は、利休、織部と續く茶人として有名な人物である。遠州の愛蔵した茶道具の目録「遠州蔵帳」にもこの「潮音堂」が記載されている。その時代の話である。

遠州はある時この書幅を席に掛けて茶会を催した。招かれた客の一人に、酒井家の中興の祖「忠勝」がいた。忠勝はこの幅を見るや欲しくてたまらず、といって「譲ってくれ」と交渉したところで、承知してくれる筈もない。何気なく「買うとしたらいくらぐらいであろうか」と遠州に聞いたところ、遠州は「まず一字が千金でござろう」と答えた。忠勝は中立（茶会の中間休憩時）のどさくさにまぎれてであろうか、この幅をはずして自宅にもち帰ってしまった。そしてすぐさま家臣に千両箱を三つ遠州に届けさせた。というエピソードが伝えられている。遠州という大茶人の愛蔵品だった上に、仔細の面白さも加わって茶掛けとして頗る珍重されている。

江戸初期の千両は現在の一億円にも相当しようか、大した値打ちである。なお遠州流の幹部の方のお話しでは、展示会その他のニーズがあって一時借入を酒井家に申入れしても絶対に応じては貰えぬそうで残念がっていた。四百年越しの報復を今なお懼れているのであろうか。

私も一度拝見したいと願っているのだが、図録の写真で見るばかりである。

（二）慈雲尊者の書

私は、常々形式にとらわれない、侘び茶にふさわしい茶道具を好むと言っているが本音のところは流祖に近い伝来物は、品薄でありまた値が張って手が出せないので負け惜しみを言っているのに過ぎない。

とは言っても埒外品（この表現は不適当かも知れないが）、と雖も満足出来るものは数少く、また相応に値が張るので苦労する。

最近、かねて親しい美術商から「良い茶掛けの出物がある」との連絡を受けた。

早速おっとり刀で訪ねて行って拝見した。この写真が現物である。堂々とした筆運び、雄渾さ、その力強さ、気高さは、身震いする様な感動を受けてしばし言葉も出ない程であった。



慈雲尊者　茶掛け　タテ一二五㎝ヨコ五〇㎝

これが高僧慈雲尊者の墨跡であった。書道界でもまた茶道界でも品格ある書として、珍重されているとの説明であった。

尊者（一七一八―一八〇四）は近世の名僧であり長命でもあったので、書跡は数多く現存しているが、これ程の大幅が埋もれているとは奇蹟に近いと思われる。表装も外箱もボロボロの姿であったと言う。廃寺からの処理ゴミの中から見出されたのでは無いだろうか？

この世界では伝来の無い品の出自は一切問はないのが常識である。要は品物が良ければそれで可とされる。

一目見て之は買わねばと直感し手に入れることにした。伝来は無いが妻も気に入った様である。但し「この品を最後にして、今後道具買いは打ち止めにする」との条件付となった。

（七つさがりの雨と何やらは止むことがない）とか。

（三）慈雲尊者とは

慈雲尊者（一七一八―一八〇四）、諱は「飲光」、字は「慈雲」、雅号に「百不知童子」、「雙龍叟」、「葛城山人」などがある。

享保三年七月大阪中之島高松藩蔵屋敷に、父上月安範、母お幸の第七男として生まれる。十三才、父を失い、遺命により摂州田辺の法楽寺において出家剃髪、十六才のおり、京都に上り、伊藤東涯の門下で儒学詩文を修める。二十一才、大和の野中寺で、秀岩和上より灌頂（佛教の儀礼）を受ける。二十二才で法楽寺住職となり、さらに二十四才より三年間、信州佐久の正安寺に行きその間、大梅禅師のもとで参禅、印可を受ける。二十七才、河内高井田の長栄寺に住し、さらに摂津有馬の桂林寺を兼住する。

四十一才、生駒山中西部の山頂の長尾の滝に草庵を結び、雙龍庵と命名。この庵で「梵学津梁」一千巻の編纂などの数々の著述を残した。この間、しばしば京都で僧・俗の教えにあたる。五十四才、洛西の阿弥陀寺に五年間仮住した。この時「十善戒法語」を作り、時の朝廷周辺の人達に十善戒を授戒した。五十九才、葛城山中高貴寺に隠栖する。

天明六年（六十九才）、高貴寺僧坊が江戸幕府の公認となり、同寺は、正法律護持の眞言律宗の総本山となった。

七十五・六才以降、神道の研鑽を重ね、独自の見解を示すに至り、「葛城雲伝神道」と呼ばれるものとなった。また「十善法語」を簡潔に説き直した「人となる道」をこの高貴寺に残している。

文化元年（八十七才）八月病にかゝり、養生先阿弥陀寺において遷化。遺骸は高貴寺奥之院に埋葬された。遺骸の移動は当時、不可とされていたが、弟子大和郡山城主「柳沢公」の尽力で可能となった。

尊者はわが国佛教史上の高僧群のなかで超宗派的な立場を貫いた点で、一頭地を抜いている。

尊者は全く文字通り多岐にして、多才である。まずは正法律を提唱して戒律復興に勤めた点で、日本仏教史に燦然として芳名を留めている。山岡鉄舟は日本の「小釈迦」と尊称した。

八十七年に及ぶ尊者の生涯において釈尊仏教に還ることを目ざして、さまざまな宗教的実践活動を行った。

なかんずく、正法律の提唱とその日常倫理化は、最たるものである。そのために多くの著作に専念した。

一般に知られるのは五十八才のとき表わした「十善法語」十巻と「人となる道」一巻である。ことに「十善法語」は畢生の著述で加筆を重ねて出版し、十善戒に関する幾多の著作があるのは尊者がいかに正法律の普及に腐

心したかが解る。

さて、尊者が提唱した正法律とは何か。古来、佛教史観によると、正法・像法・末法の三時がある。（一）正法時は釈尊仏教の教・行・証が正しくおこなわれる五百年。（二）像法時は教・行だけがおこなわれ仏像制作、寺院建立のみの一千年。（三）末法時は教のみで、佛教が形骸化した一万年（年数には異説がある）。

正法律は（一）である正法の回復、換言すれば釈尊回帰を強く主張しているのである。

ただし尊者が戒律の遵守をやかましく言ったのは、出家修行者に対してだけである。世俗の人に対してそれを強制しなかった。専ら「人となる道」として十善戒をまもるべきことを教えた。

それは一、不殺生（生きものを殺す勿れ）、二、不偸盗（盗みをする勿れ）、三、不邪淫（男女の道を乱してはならぬ）四、不妄語（いつわりを言ってはならぬ）、五、不綺語（ふざけた言葉を言ってはならぬ）、六、不悪口（悪口を言ってはならぬ）、七、不両舌（仲違いさせるようなことを言ってはならぬ）、八、不貪欲（むさぼってはならぬ）、九、不瞋意（いかってはならぬ）、十、不邪見（人間生存の理法について邪まな見解をいだいてはならぬ）、ということであり慈雲はこれを繰り返し説いた。

出家修行者に対して説くところと世俗信者に対して説くところとは内容を異にしていたにもかかわらず、両者を通ずる、一貫したものは宗教における倫理性の強調ということであった。慈雲以前の佛教では、これこれの陀羅尼（眞言）を唱えればこれこれの現世利益があると説いていたのに、慈雲はむしろ現世利益とは殆ど無関係にひたすら倫理的実践を強調したのである。つまり現代の様な葬式仏教を否定し密教をおし進めたと考えられる。しかし一般の人に対しては精神は説いても決して強制はしなかったのである。

慈雲の学者としての実績も大きい。かれの一生を貫いたものは不断の探究の精神であった。

空海に次ぐといわれるサンスクリット研究では諸々の単なる文字文法から内面的な理解に進んだ。

また慈雲における新しい思想、近代的思惟の特徴とみなし得るものは、道は日常生活において具現されているものであるとの主張である。この点では慈雲は伊藤仁斎（一六二七―一七〇五）・伊東東涯（一六七〇―一七三六）の儒学的思想を受けている。

中世の佛教が、「人であることを嫌う道」であったのと正反対のものとして対立している。今様に言えばヒューマニズムに回帰したとでも言うべきか。

大阪の商人で文化人の木村蒹葭堂（一七三六―一八〇

二）等との交流で外国の情報を得ていた。ナポレオンが出て世界を風靡していたことも知っていたし、フランス文明を評価していた節もある。

かれはすでに地動説を知っていた。従来多くの佛教徒の考えていた須弥山説（古代印度の宇宙説）、を捨てて「金剛般若経」の講義の中で地動説を説いている。

慈雲の著作は千数百巻あると言われている。宗教のみならず、思想、哲学、詩歌、墨跡等において多大の実績を残す事が出来たのは八十七才の高齢を全うできたことによる。

尊者と崇められるに至った慈雲を支えたのは有力な弟子たちであった。彼の心酔者として得度した尼僧達も数人いて彼の生涯を献身的に看取ったと言う。

（四）慈雲の書跡

慈雲尊者は、正法律の護持に徹した眞の佛道者であるから、特に「書」について論じたものは無いが、法話の中や文書の余白などに漏らされた言葉の中に書道観が窺われる。

"文字、禅を離レズ。即チ亦タ何ゾ瑕絶センヤ。不肖、書学ニ拙キモ亦タ其ノ志ハ護法ニ在リ。故ニ、一行タリト雖モ必ズ護法ニ在リ。他ノ善心ヲ開発スルニ在リ。見ン者、請フ、察セヨ"。

右の文は、尊者二十五才頃の「尼衆消息手本」の跋文である。尊者にとって書作は、護法ないしは善心開発の手段であることが明白に示されている。

尊者の遺墨は二百年余後の今日、確認できるだけでも二千点を超えるが、これらはすべて護法説法の化身と言える。それ故に、護法説法への一途な志向が痛烈な呼びかけとなり、その書は説得力のこもった怒涛のごとき迫眞力を呈している。

書作の目的が純一であり鮮明であるだけに、その筆使いは眞剣であり重厚である。書法上の巧拙など形而下のことを意に介さない純粋一途な筆跡は、端的に私たちの心を惹きつけるのである。

右の跋文中「何ゾ瑕絶センヤ」、（うまく書けなくとも反古にはしない）の一句は、尊者の書風形成に重要な役割を演じている。「一回限り」と言う条件が生み出す書相である。人生における「一期一会」にも等しい厳粛な気持をもって一点一画が書かれており、私たちの心をゆさぶるのである。

慈雲の書に対して、同時代人の書として対比されるのは、良寛（一七五八―一八三一）である。二人の書は

夫々、見る人により好みの違いはあろうが評価は極めて高い。二人とも宗教的修業において稀に見る実践者であり、教養においても卓抜した有識者である。

両者共に能書家でもあり禅機に到達した人たちなので、その書はいずれも茶掛けとして珍重されている。

突然、許しを得て、ドライに二人の書の評価を美術名鑑に見る。良寛一、五〇〇万円、慈雲は三五〇万円である。（これは賣買価格というよりは、人気と評価のグレードである。）

書の趣は人によって夫々好きこのみがある、それは書の巧拙を越える評価となる。

情緒の面でロマン的だった良寛と、際立って古典的であった慈雲、両者の書跡から受ける書風の違いが差を生ずるのであろうか。

現存する良寛の書は極めて少なく稀少価値がある。慈雲の書は数多く残っている。この点も格差の理由であろうか。

私は茶の精神により近い慈雲の書の方が好きである。

さて、最後に私の所有物となった茶掛けについて述べたい。

文字は「雲月」の二字。草書体で、タテ一二五cm、ヨコ五〇cmの堂々たる掛物である。

残念乍ら伝来はない。ボロボロの表装で発見された様であるが今は簡単な新表装になっている。紙質は古く、少し汚れもあるが、字と押印ははっきりしている。

署名は無い。慈雲の大幅には殆ど署名が無い様である。別途凡例に出ている印鑑と照合するとキチンと合っている。

正に堂々とした、迫力のある二字である。寺院等に伝来している大幅の書は殆ど作品集に載っている、当然この書は載っていない。将来発表する機会があれば反響を呼ぶかも知れない。だが私は当分秘かに持ち續けていたいと思う。日毎夜毎眺めては精神修養の糧としたい。

「雲月」の二字について

「雲月」の意味は、人によって如何様にも解釈出来るであろうが、禅語として位置づけられているので之に従いたい。出典は「虚堂録」による。

作者の「虚堂智愚」（一一八五―一二六九）は非来朝だが南宋時代の禅僧である。日本の禅僧宗峰妙超（大燈国師・一二八二―一三三七）、一休宗純（一三九四―一四八一）は虚堂禅林の門下として育ち、有名となった。

（虚堂智愚が日本からの留学僧「無象静照」に与えた、偈頌（法語）の一幅がある。"破れ虚堂"の名称で有名。現在重要文化財として東京博物館に収納されている。）

禅語集によると、雲月とは雲と月のことである。虚堂録には

「雲月秋景を愛し、村堂夜扉を開く」。また

「渓山雲月處々風を同じゆうす」。とある。

"どこにも風が吹き渡る様に差別はなく、雲も月も本来みな平等である"。の譬という。

なお雲と月を主題とした先哲の次のような教えも残されている。

雲を妄想煩悩、月を眞如実相としての譬。

「雲晴れて後の光と思うなよ、もとより空に有明の月」

(法然上人)

世俗の権力、名誉、地位、財力等に対して求めることなき心、野心なきことの譬。

「野客は雲を心と爲し高僧は月を性となす」。

(孟浩然)

禅語は奥行き深く、幅広である。勝手な想像・解釈が自由であり、その時々の人の心境により左右されてもよいものと思う。

改めて自分の所有となった大幅を自室に掛けて対峙する。

最初は鬼気迫る程の圧力感を覚えてタジタジとなったがゆっくり眺めて親しむと、穏かさと優しさが感ぜられる様になって来た。慈雲尊者の暖かい人間性が伝わってくるのであろうか。

これから更に慈雲尊者の教えを勉強し、自己研鑽の努力に心掛けて、この掛物を持つにふさわしい人間にならねばと考えている。

何時の日か平常心をもって、この大幅を披露出来る茶会が出来ることを心待ちしている。

参考資料

茶席の禅語大辞典　有馬頼底編　淡交社

慈雲尊者「人と芸術」　三浦康広著　二玄社

眞実の人慈雲尊者　上山春平他著　大法輪閣

特集慈雲尊者　雑誌「墨」　芸術新聞社

茶掛けの書　堀江友彦　東京書籍

虚堂録義解　中島鐵心　森江書店

木村蒹葭堂のサロン　中村眞一郎　新潮社

日本の仏教を知る事典　奈良康明編著　東京書籍

短歌

行雲流水(二十四)

石黒修身

中国東北・北京紀行詠二十五首

二〇〇九年五月、かねてからの念願であった中国東北から北京に至る旅行をした。

有志の学友数人を中心として、知遇を得た旅行社の会長K氏に頼み、マイナーなツアーを組んで貰った。

案内人には、中国承徳の生れで、長春大学の日本語科を出て、妻と共に日本に帰化したG氏を付けて呉れた。

G氏は、日本人より日本人らしい人柄で、楽しく有意義な旅を先導して呉れた。

以下はその際の紀行詠二十五首である。

旧き名の「満州地方」は日本と白系ロシアの痕跡著るく

アカシアの大連を恋い訪ね来て日本人街跡を往き来す

「清岡」の住まいし街はこのあたり崩れし洋館淋しく残る
作家清岡卓行

大連の「正仁街」にはアカシアの並木残りて往時偲ばる

空澄みて薫風通う旅順では柳絮かすかに舞い散るを見き

「二百三高地」に佇てばそのかみの激戦の様彷彿として

「爾霊山」と称し戦死者の慰霊を詠みし将軍偲ぶ

「水師営」この陋屋で両将がまみえたりしか往事瞼に

「北帰行」謳いて青春彷徨いし「宇田博」偲ぶ旅順・瀋陽

「偽」の付く満州国の皇宮で廃帝「溥儀」の怨念察す

満州国その建国と滅亡の虚実を知れり今更にして

「勿忘国恥」と侵略を受けし史跡に記す中国

「六月の雪」と呼ぶとうポプラの棉風に舞い散る長春の街路

ハルビンの夕陽は川面赤く染め「スンガリー」の涯に沈めり

スンガリーは眼下にあり滾滾の流れ幾筋広がりて居り

端午節スンガリー河畔の公園を行き交う人らひきも切らず

ハルビンの「キタイスカヤ」を往き来せり白系ロシアが色濃く残る

河北より望む「燕山」尾根を這う幻の如き長城を見き

「承徳」の避暑山荘は「清帝」の威光を示し壮麗なりき

「紫禁城」この壮大な宮殿に明、清帝の隆盛を識る

「八達嶺」その眺望を吾がものに老躯鞭打ち喘ぎつつ登る

五輪後の北京都心は済済と近代都市の様相著るく

その当時紅衛兵たりしとうガイドは日本語巧みなりき

惨劇の記憶は既に薄れしか二十年経て「天安門」仰ぐ

人権も言論自由も未だしの思い残れり帰国してなお

大連そして旅順

―清岡卓行と宇田博―

石黒修身

(一) はじめに

去る五月、筆者は中国東北を旅行した。旅程も希望通り、スタートは大連・旅順となったが、この地域には、長年にわたり一度は訪ねて見たい願望を抱いていた。

従って、この小文のモチーフは二つある。その一つは、作家清岡卓行が、昭和四十三年に第六十二回芥川賞を受けた、「アカシアの大連」を当時読んだ印象が、今なお薄れることなく、心の片隅に留っていたことである。

もう一つの宇田博は、その原作になる旅順高校の寮歌「北帰行」が、筆者の青春へのノスタルジーとして、今もって残り火のように心から消えていなかったことである。

清岡と宇田、両者を象徴化する「アカシアの大連」と「北帰行」、その所縁の地として大連と旅順、更に足を伸ばして、瀋陽、長春、ハルビンを訪れ、夫々のルーツとなった地域を往き来した感懐を綴った。

多少の文献、記録に頼り乍ら、知り得た限りの余聞、異聞を交えて記したものである。

(二) 清岡卓行 (一九二二―二〇〇六年)

清岡は、両親のもと (父は満鉄の技師であった) 大連に生れ、大連一中を出て旅順高校に入ったが中退し、後に一高を経て東大仏文に進むが、その間に大連に帰省中に終戦となる。

清岡の大連での生活は、出生から進学のための上京までと、終戦から本土に引き揚げるまでの間であった。

その間に最初の妻沢田眞知と出会い結婚し、共に引揚船高砂丸で帰国している。

後年妻との死別が、それまで詩作が主であった彼を小説に向わせた。第一作が「朝の悲しみ」、第二作がこの「アカシアの大連」であった。

これは、大連での生活を写した、彼の自伝的回顧小説である。

清岡は、この小説の書出しで『かつての日本の植民地の中で、おそらく最も美しい都会であったかも知れない大連を、もう一度見たいかと尋ねられたら、彼は長い間ためらったあとで、首を静かに振るだろう。見たくないのではない。見ることが不安なのである。

もし、もう一度あの懐かしい通りの中に立ったら、おろおろして歩くことさえ出来なくなるのではないかと密かに自分を怖れるのだ』と記している。

また、一九九二年二月に日経新聞に連載した、「私の履歴書」の中で次の様に書いている。『私の生れた家は、大広場からほゞ西南へ二キロあまりの伏見台にあった満鉄の社宅で、満鉄中央試験所の近くであった。ただし、その家の記憶は私にはまったくない。というのは、生後半年ほどで、一家が大広場からほゞ東南へ約一・七キロとなる南山麓に新築した住宅に引越したからだ。

私にとっては、この家のすべてが懐かしい。二階建の赤練瓦づくりの家で、緑色の屋根、白く塗られた壁と煙突、赤練瓦のままの塀、池のある庭、石炭の倉庫、家の前の歩道のアカシアの並木、そして家屋内は、床と畳とリノリュームの二種類となっている合計八つの部屋・・・』

こゝで彼は南山麓一帯の少年時代には意識しなかった美しさに驚いたと述べている。

南山麓は、北斜面にあり乍ら、満鉄本社に近かったことから高級住宅が次々に建てられ、一九二〇年代には、大連で一番の高級住宅街となった、と史料にある。この南山麓の住宅街は、今でも僅かに残っている。

あまりにも古くなり荒廃したため、大半が取り壊されたが、高級住宅街の名残りは、ところどころにあると言う。

筆者は、この辺りで下車し、しばし散索したが、清岡の言う住宅街と同じものとの認識は持てなかった。然し、その雰囲気を彷彿とさせ、白い花をたわわに着けた、アカシアの樹が想像以上に大きく繁っているのを随所に見ることが出来た。

ついで、清岡と同時代の作家らが、彼の「大連作品」につき次の様な感想を残している。

安岡章太郎――『元来植民地は醜いものになりがちだ、しかしそのなかで未経験な日本人技師たちが、営々と美しい町として造り上げるのに成功したのが大連であったとすれば、その奇蹟のような都市、ロシアの残した設計図をもとに、初めて広大な更地の上に近代都市の建設にとりかゝった日本の建築家や土木技師・・・』

遠藤周作――清岡と同年代の遠藤は、やはり大連で幼少期を過している。文化大革命の嵐がやっと終った頃、彼は大連を再訪した。

大連は、彼の幼年、少年時代とほとんど変っていなかった。彼の一家が住んでいた小さな家でさえ四・五組の中国人家族が同居していた・・・・。

木崎さと子―大連を詩人のサインの入った街と表現し、『清岡氏の、芸術家のみに許される贅沢な所有にかゝる街・・』

以上が、大連を訪れた際に清岡作品のルーツを見聞した感懐である。

（三）宇田博（一九二二―一九九五年）

旅順では、旧制旅順高校の寮歌（愛唱歌）として伝承されてきた「北帰行」の作者宇田博の、旧満州における足跡を辿ってみたかった。

旅順は今大連市の一部で（正式には旅順口区）、大連中央部から車で一時間位で着く。

旅順高校の建物は、現在海軍施設となっており、撮影が禁じられているため、車窓から瞥見するのみで、その面影は偲ぶべくもなかった。

宇田は、東京で生れたが、父親が奉天の農業大学の学長と建国大学の教授を兼務していた関係で、奉天一中に入った。

同校から旧制一高の受験に失敗し、建国大学予科に入学したが、半年で退学となり、昭和一五年開学したばかりの旅順高校に入り、後述の事情でこれも一年余りで退学となり、奉天の親許に帰る。この間に「北帰行」の生れたルーツがある。

宇田は、その後再び日本に戻り、一高、東大を経て東京放送（TBS）に入り、常務や監査役を歴任している。著書に「大連旅順はいま」、「落陽の市街図―青春への北帰行」が残されている。

宇田は、旅順高校に入学し一年余りで退学処分を受けている。同校には、宇田が期待した自由な校風はなく、軍国主義的校則と教育に徹していた。彼はこれに反発し、自由奔放な学生生活を送り、現地の女学校を出た一つ年上の洋品店の娘「深川定子」との交際を理由に校則違反で退学処分となった。

宇田は、もともと文芸的才能に富み、旅順高校の第一回寮歌「薫風通う春五月」を作っているが、退学し奉天の親許に帰る感懐を詠んだのが「北帰行」である。

宇田との別離を惜んだ学友たちがこの歌の合唱で旅順

を去る彼を送ったという。

彼が別れに際し同級の友人小牧勇蔵（旅順高校卒業後京大工学部卒、小牧建設社長）に送った本「若きゲーテ研究、木村謹治著」の表紙裏に小牧がこの詞を書き記し、それを長く保管していた。これが後日「北帰行」の著作権を証明する有力な決め手となったと聞く。

周知のとおり「北帰行」は寮歌だけのものではなかった。昭和三十六年歌手小林旭により、歌謡曲としてヒットした。

この歌は、戦後、歌声喫茶で作者不詳として流行したものを、日本コロンビアのプロデューサと小林旭により見い出され、レコード化したものと思われる。

事実、筆者も昭和三十年前後の学生時代に、作者不詳の名歌として、不正確な詞、曲のまゝ愛唱していた体験がある。

レコードの大ヒットにより、作者探しが行われ、当時TBSの社員だった宇田が名乗り出て、先述した学友小牧勇蔵の持っていた本の表紙裏に書かれた詞で作者が確定したという。歌詞、曲ともに著作権は消滅しておらずJASRAC管理楽曲である。

小林旭のバージョンは原作とは相当違う部分があるが、宇田はこの歌を晩年に至るまでいたく気に入っていたという記述を見たことがある。

宇田の回顧録の中に、興味をひかれる後日譚がある。彼が旅順高校を退学処分となった原因とされる女性、深川定子は、夫と別れて日本に移り、滋賀県八日市に娘と生活しているのを彼が訪ね、往時の懐旧談をしたという。

定子は、裕福とは見えない生活振りで、宇田の現在についてはひと言も聞かず、可成り現実的な対応だったという。

この中で、彼女は宇田との仲を学校に告げたのは彼女の母であったことを話している。

宇田は、自分が彼女のボーイフレンドどころか、あほうなピエロだったと自覚したと述懐している。

筆者は、青春期の宇田を文芸的才気に富んだ多感で神経質な青白き学生をイメージしていたが、彼の回顧録等を読むと、学生時代の奔放な行動や女性との接触にも現実的なものがあり、彼は才気ある骨太の青年ではなかったかと推察している。

また、清岡卓行につき、宇田は「私たちは同じ旅順高校の一回生である。その頃からすぐれた本物の詩人だった彼は、一学期だけ在学し、夏休みに大連の自分の家に帰ったきりあっさり退学してしまった。学校に愛想をつかしたのだろう」と回想の文中に記している。

(四) おわりに

この小文は、清岡と宇田の作家論でも作品評でもない。冒頭に記したように筆者の青春時代から壮年期に接した二人の作品等のルーツとなったであろう地域を旅したことを奇貨とし、作品と旅の印象を照応しつつ、自分なりのスタイルで綴った雑文である。

従って、捉え方が皮相的、独断的であることは否めない。また事実と相違したり、矛盾する記述があるやも知れず、その点忸怩たるものがある。こゝにエキスキューズを添えて本稿を終りたい。

文中敬称略

参考とした書物等

○清岡卓行・大連小説上下　日本文芸社
○随想集　偶然のめぐみ　清岡卓行　日本経済新聞出版社
○大連旅順はいま　宇田博　六法出版社
○落陽の市街図　宇田博　六法出版社
○旧制高校物語　秦郁彦　文春新書
○その他インターネット情報等

わが愛誦歌（八）

――昭和から平成へ――

曽根竣作

りかえっている無機質の椅子たち、それはまるで襲いかかる天運の前に静かに頭を垂れている人々のようであろうかというのである。特異な感性ですくい上げた悲傷のこころが此処にあると読みたい。

筆者は、竹山広の第二歌集『葉桜の丘』まで読んで、第一歌集と共にその濃密な歌群に驚いたものである。長い療養生活による心身の深い翳り、慎ましい生活詠に見える人間的な優しさ、また諧謔やユーモアに優れた特有なダンディズムなど、人間像の反映した作品世界は大いなる魅力である。

〈くろぐろと水満ち水にうち合へる死者満ちてわがとこしへの川〉〈人に語ることならねども混葬の火中にひらきゆきしてのひら〉〈二万発の核弾頭を積む星のゆふかがやきの中のかなかな〉〈まゐつたと言ひて終りたる

○おほいなる天幕のなか原爆忌前夜の椅子らしづまりかへる　竹山　広

『一脚の椅子』（平・七）所収。昭和二十年八月九日、長崎に原子爆弾が投下されたとき、竹山広は爆心地からわずか一四〇〇メートルを隔てた浦上第一病院に入院中であった。

辛くも一命はとり止めたが、それより原爆症として長い療養生活を余儀なくされる。

昭和五十年に、被爆体験を詠んだ第一歌集『とこしへの川』を刊行、二十五歳での被爆体験を作歌の原点に据えた壮絶な作品群によって、今も「原爆歌人」と呼ばれている。

掲出歌は、被爆時より五十年を経て作られているが、原爆忌前夜の会場の天幕の中で、開始の時を待って静まり、あるいは長期の滞在者として、又永住者として歌った人もあるであろう。中には記憶に残る作品がないではないが、米川千嘉子の『一夏』のように強い印象を残し、民族的な哀しさを感じさせる作品群はめったにない。

アイルランド系アメリカ人がアメリカ社会においてどのように疎外されているのか、それは知らないが、ゲイ（同性愛者）の存在が今なお人類において少数派であることは間違いなかろう。

そのマイノリティの、しかもセックスに係る自己主張を、民族問題で苦しむ国の〝眉〟として表現したところに、掲出歌の深さと微妙な暗喩性があってするどい。

『一夏』の中のアメリカ居住時の作品は、アメリカに留学し研究機関にいた夫とまだ幼い子どもとの生活を背景にしている。その歌がどこか活き活きと二国間の関係を抒情しきっており、案外それは、米川千嘉子がかかえていた内面の問題の喩として、日本人とアメリカ人、日本とアメリカの関係が、とらえられていたにちがいなかったからであろう。

〈〈女は大地〉かかる矜持のつまらなさ昼さくら湯はさやさやと澄み〉〈ゆふぐれのさびしい儀式子を拭けばうす桃色の足裏あらはる〉〈お軽、小春、お初、お半と呼んでみるちひさいちひさい顔の白梅〉〈空爆の映像果ててひっそりと〈戦争鑑賞人〉は立ちたり〉。三首目、いずれも一途な恋を貫いた悲運の女達を詠み、また四首

戦争をながくかかりてわれは終りき〉等々。

大変遅きに失した感はあるが、『竹山広・全歌集』（平成十三年刊行）により、迢空賞・斎藤茂吉短歌文学賞・詩歌文学館賞の三賞を同時受賞するなど話題を呼んだ。筆者ごときローカル歌人の端しくれが言うことでもないが、どうも全国レベルの短歌賞などという類いは持ち回り的匂いがしないでもない。選考過程に於て特別な力学が作用する場合がままあり、選者と被選者の間に持ち合いの体が垣間見えることさえある。その点、竹山広の歌集は遙かにもっと早く認められて然るべきであったであろう。

余談になるが、今年の六月四日に例の「天安門事件」の殺戮から丁度二十年を閲した。

香港、上海辺りで数十万人のデモ隊が繰り出したようであるが、当時竹山広がテレビに流れた北京市民の声を詠んだ一首がある。〈戒厳軍の残忍を語り一語加ふ「日本軍もかくはせざりき」〉。経済成長のかげで、政治の針は止まり、中国の時計は奇妙にゆがんでいる。

○苦しむ国のしづかにふかき眉としてアイリッシュアメリカンゲイの列ゆく　米川千嘉子

『一夏』（平・五）所収。昭和の敗戦よりこのかた、たくさんの人がアメリカへ渡り歌を作った。旅行者とし

目の“戦争鑑賞人”はパレスチナのことであろうか、極めてアイロニックな作品である。

この六月、月刊「短歌」（角川書店、最も権威あり）に、米川千嘉子の三十首詠が出ているが、その中でソマリアの海賊を詠んだ歌二首、〈さくらの日巨船は雲のごとかるをソマリア沖にくろく湧く船〉〈海賊船ロマンでありし世などなく餓うる地よりみつみつと湧く〉。塩野七生著『ローマ亡き後の地中海』によると、日本では海賊の一語しかないが、海の向こうではピラータ（非公認の海賊）とコルサロ（半公認の海賊）があるそうである。

○かなしみは明るさゆゑにきたりけり一本の樹の翳らひにけり　前　登志夫

『子午線の繭』（昭・39）所収。当初、詩人として文学的出発をした前登志夫は、やがて前川佐美雄に師事して歌を作り始めるが、異常噴火のように、「自然の中に再び人間を樹てる」をテーマとして歌作に没頭する。

先祖代々の故郷“吉野”の山中で自らを「山人」と呼び、吉野の歴史と民俗を根底に、自然の精霊のひびきを体現する独自の世界を作り上げていった。

掲出歌は、『子午線の繭』の中の絶唱として著名である。かなしみは何故明るさゆえに来るのか、この一見矛盾したような感性は、下句の翳ふかき一本の樹木のたたずまいで十分収斂された一首である。

この歌の後には、〈夕闇にまぎれて村に近づけば盗賊のごとくわれは華やぐ〉〈暗道のわれの歩みにまつはれる螢ありわれはいかなる河か〉と詠み、故郷回帰が止むを得なかった折の微妙な心理が表現されている。

“盗賊”などという俗にして嫌悪を覚えることばを歌に定着させた技は見事、そしてこの作品のキーワードは「盗賊のごとく」なのである。

また、〈さくら咲くその花影の水に研ぐ夢やはらかし朝の斧は〉〈雪やみし山の夜空に含羞の星よみがへる静けさにゐつ〉〈鳥聰立せし父祖よ、木を伐りし切株に置けば王のみ首〉、やや難解なところはあるが、強靱な韻律と深い感応力をもつ作品は、山と都市、自然と文明など多くの問題を孕みながら、現代を鋭く逆照射しているのである。“鳥聰立”は往時樵の人が山林の木を切ったあと、その切株にそれをさして神に祈った儀式のこと。

前登志夫の歌は一時、土俗的題材を歌にとり入れたエコールの代表のように扱はれ、目指している世界が反都会性を帯びていることは認められるが、そうかといって、余りに安直に民俗学を軸にして裁断して了うのは早計であろう。前述したように強靱な韻律の影には、原初的な生の感情と共にモダニズムの風潮を色濃く感ずるからである。

平成二十年五月、惜しまれつつ病没、各短歌誌の追悼特集が記憶にあたらしい。

○もろともに秋の滑車に汲みあぐるよきことばよき昔の月夜　今野寿美

『星刈り』（昭・58）所収。大学にて中古の物語文学を専攻した今野寿美は、現代第一線の女流のなかで最もたおやかな文体をもつひとりである。

近代以降の短歌は、ありのままの事実とか作者の私的な経歴などからなるべく離れない立場でうたって来たようである。古典の中でも『万葉集』の中の一群のうたは、その角度から読み取られ、近代短歌の糧となった。

これに較べると、『古今集』『新古今集』の歌は、個人的な事実いはば私性を離陸した詠み方であるだけに、中々そのエッセンスは近代短歌の中に入れにくいはずであった。

今野寿美はおそらく、王朝以後の古典女流短歌を巧みに自分のものにした歌人といえよう。この系列は、馬場あき子から始まり前述の米川千嘉子にいたるまで流れてはいるが。

さて、掲出歌は様式性の強い作品であるが、その大意は秋という季節は、日本に住む人々が皆深い井戸の底から、滑車をつかって秋らしいよいことばを汲み上げ、今は失われて了った昔の良夜を共に汲み上げつつ月を愛でているというのである。なお、この一首で特徴的なテクニックとして、四・五句の「よきことばよきむかしの月夜」と句またがりを意識的に使っているところである。

単にあるがままの対象を描写するのではなく、それらの背景をなす時間や空間の奥行にまで目を注ぐところにその特色があり、なによりそれらの対象をたおやかな言い回しによって古典女流風に鮮やかに仕上げる作風。

〈負けたくはなしなけれども樹に登りこの世見おろしたることもなし〉。痛快なうたである。幾重にも屈折を含む調べが象徴するような謂はば纏綿体とも思われる修辞である。

〈三鬼にもきみにも遠き恋ありてしのばゆ夜の桃甘ければ〉（俳人西東三鬼の“中年や遠くみのれる夜の桃”の句よりの連想）〈夏ゆけばいつさい棄てよ忘れよといきなり花になる曼珠沙華〉〈ああ海とまこと海なる方を見る冬のはじめのさねさし相模〉〈知らざれば忘れずと言ふあたはねど忘れず八月十五日昼〉。「さねさし」は相模の枕ことば。

○スバルしずかに梢を渡りつつありと、はろばろと美し　古典力学　永田和宏

『黄金分割』（昭・52）所収。京都大学在学中より短歌に目覚め、高安国世に師事した永田和宏は、現在京都大学教授で細胞生物学を専攻する科学者である。

先行世代の前衛短歌の影響を受けつつ、アララギ系の「塔」で育ち、明晰な抒情性のある青春歌が多い。「まんじ」107号で採り上げた河野裕子はご伴侶であり、夫婦そ

ろって現代の歌壇のトップランナー、そして永田はここ数年前より佐々木幸綱らと共に、朝日新聞の「朝日歌壇」の選者をつとめている。適格なる選と批評は毎週楽しんで読んでいる。

掲出歌、いかにも科学者らしいコスミック的感覚で捉え得た作品、初期の永田和宏の代表作として知られる。スバル星団がゆっくり移動して、天体は人間のすべての営みを超越したところで古典力学の法則通りに、永遠の動きを繰り返している。と言って作者はそれを素直に信じている訳ではない。すでに古典力学は相対性原理によって根底的に覆され、ひとつの美しい仮説にしか過ぎなくなっていることを我々と共に識っている。それでもなお古典力学ははろばろとしたところに美しくそびえていると言うのである。

永田和宏たちの世代は、昭和四、五十年頃の宇宙時代をもっとも素直に、そしてもっとも先端的に受け入れた人たちであろう。

意識と無意識のはざまに掬いとられるような科学者特有の思索性は、時として文系の我々には晦渋の感なきにしもあらずではあるが、口語や比喩、漢語、古典を闊達に取り込んで独特の情感を醸し出す。

〈きみに逢う以前のぼくにあいたくて海へのバスに揺られていたり〉〈岬は雨、と書きやらんかな逢わぬ日々を黒きセーター脱かずに眠る〉のやゝ抑制されながら心にひびく相聞詠、〈敵ばかりわれには見えて壮年と呼ばるる辛きこの夏のひかり〉〈亀眠るうすき瞼のうらがわを渉る乾坤初冬のひかり〉〈ここよりは単線となる夜の駅水盤に黄菖蒲の影うすく射す〉。叙景を詠んでも科学者独特の心のゆらぎ、情感を伴って注目に値する。

○催涙ガス避けんと秘かに持ち来たるレモンが胸で不意に匂えり　道浦母都子

『無援の抒情』（昭・56）所収。一九六〇年の安保闘争、そしてそれに続く全共闘運動は、今や忘却の彼方に去らんとしている。

当時、丁度壮年にさしかかり、企業戦士（？）として寧日なかった私達からすると、その運動も若気の至りから来る一種の麻疹みたいなもので、一過性であろうかと冷めた眼で眺めていたような記憶がある。

しかし、それに参加していた若者たちは、確りしたポリシーを持ち、身を挺して真剣だったのである。

六〇年安保闘争のさなか、その意義と思想を信じて突き進んだ道浦母都子は、歌集『無援の抒情』によって同時代を生きた若者たちの共感を得、歌人としも鮮烈にデビューした。

催涙ガスが発射されたらレモンを搾る。そうすると目の痛みは和らぐ、と学生たちは言い合っていた。そのためのレモンが、デモに急ぐときかスクラムを組もうとしたとき、突然匂ったというのであろう。胸で匂ってくるレモンの香りは、若さと女性性を際立たせる充分なる青春性を代弁していると読みたい。

そのあと、〈君のこと想いて過ぎし独房のひと日をわれの青春とする〉は、拘置所での哀感を詠んだ一首である。

「まんじ」102号のこのシリーズの（一）で採り上げた、同じく全共闘の同士であった岸上大作の〈血と雨にワイシャツ濡れている無援ひとりへの愛うつくしくする〉がタイトル『無援の抒情』におそらく反映している。岸上大作は安保の最中に自殺、失恋のためとされているが真相ははっきりしない。

道浦母都子も、早や六十歳を過ぎたころであるが、引きつづき女流の前線で活躍している。〈生きていれば意志は後から従きくると思いぬ冬の橋渡りつつ〉〈如月の牡蠣打ち割れば定型を持たざるものの肉やわらかし〉〈孝子峠　風吹き峠　紀見峠　故郷紀州へ風抜ける道〉〈望郷を心残りというなかれ秋を来て踏む紀州街道〉。和歌山県生れの作者はご当地を詠んでも歯切れが良い。

追記…これまで、副題を「戦後の歌壇逍遥」としていたが、既に〝戦後〟という言葉は死語化しつつあり、ジャンルも可成り限られて来るので、今号より「昭和から平成へ」と変更いたしました。

参考文献

現代歌人二五〇人（牧羊社）
現代名歌鑑賞事典（桜楓社）
現代百人一首（朝日文芸文庫）
現代短歌の鑑賞事典（東京堂出版）
現代の短歌（講談社学術文庫）
『短歌』平21・6月号（角川学芸出版）

短歌　三十首

曽根竣作

春節

戞戞（かつかつ）と霜ばしら踏む朝の径はやつのぐめる梅花が馨る

二ン月の空より降れる風花の耳にやさしく春待つちまた

浅春の夕日冷たし高齢者講習終へて帰路の街並み

爆竹の音もなつかし春節の陋巷（ろうかう）に見し子らのざわめき

若布垂れ腰越あたり人絶えて夕べはげしく貝寄風（かひよせ）の吹く

かりそめの生にはあらず下萌の青きを踏みて誕日に対（む）く

うすら陽を玻璃にはじきて恩讐の彼方も言はず砂時計立つ

音もなく砂漏の粒子落ちつづくわが残生を削るごとくに

回想は老いのしるしぞをんな坂上りつめたるところ終章

洗ひ立てし根ぶか真白く水に浮く、易水の辺り荊軻（けいか）帰らず

（注）根ぶか…ネギの異称

第三の男

啄木の三倍以上ながらへて落花ひとひらじっと手にのす

ゆたかなる水流に映えおそ咲きの此岸の花の万朶なるかな

霊魂をやどすとぞいふ夜桜のしだるる先に人影うごく

散りゆけば忽ち過去世（かこぜ）の花となるさくら老樹に旋風（つむじ）巻きゐて

菜種梅雨ひねもす止まず仄暗きページに繰りぬ昭和のとびら

ハンガーに掛けし外套わが影とちまたの熄(いき)れ曳きずりて冷ゆ

動くもの一つだに無き霜夜更けガス燈点るハマの裏みち

俊足のラガーK君北に果つぬかるみの中肩組みし日よ

足おそき我を扶けて闘ひし襤褸(らんる)のジャージ棺(ひつぎ)を覆ふ

第三の男のやうな奴でしたいつも会話の外側にゐて

黄　沙

外灯の仄か明るみ遅咲きしさくら一樹のふぶくを照らす

石斧(せきふ)ひとふり幹にくひ込み春更(ふ)けて縄文の月山巓(さんてん)よぎる

たもとほる樹下に残んの花散りて転変の身に季(とき)容赦なし

行く春を遊(すさ)びしならんゆらゆらと水面にふれて花いのちあり

天皇の金婚ことほぐさまと見ゆらんまんの花濠に散り敷く

われら民思ひもつかぬ激務とぞ公務公務をよくぞ堪え来(こ)し

自らの時間(とき)持たれるは何どきか予定表は常びっしりとあり

寿ぐより同情をしも禁じ得ず美(くは)しく老いし皇后陛下

うちひらく翼持たねば夏雲の湧き立つ嶺にこころ遊ばす

霾(つちふ)れる大地はるけく墓標立ち明治の男(を)の子ら魂(たま)返りせよ

俳句

鷹の呟き（七）

大澤鷹雪

清流に根菜磨く秋社かな

脇役のかくあれかしと酢橘かな

灯籠や親子で見入る地獄絵図

虚弱の子家に伏しをり薬掘る

秋霖や笛の音漏るる京の宿

竜胆や亭主清むる躙り口

拍子とる師の叱声や白障子

顔見世や上りてみたき一力亭

海鼠腸や若き仲居の紺絣

香る湯に正座して入る冬至かな

炭焼や山穿ちゆく高速道

俳句

水仙

勝山道子

元旦やテレビにまいる浅草寺
病む我に年賀の束や初しごと
何もかもホワイトなりし初雪で
老いて今冷たき風やぬるむ風
わが先は余生余白と春を待つ
わが余白嬉しきときも冬木立

なか〳〵に心通せず春遠し
繰りごとの多き人つれ桜みる
さい果（はて）の連絡船やすかし百合
後輩に目線そらした夏帽子
初彼岸佛花新らし香けぶる
初ごよみめくりて夢を追ひにける
亡き人の命日多き初暦
松茸の香りたしかな土瓶むし
受賞日の離宮の園は秋高し
老友の逝きてわびしき初時雨

春眠やカーテン越しに残る月

満蒙を語りつゞけた伊那の夏

急傾斜一段華やぐ山桜

春駒の木目込みもある句会かな

水仙にしぶきをかける瀧を見る

残雪の富士にさからう連こ凧

薫風にみじろぎもなき白根凧

秋桜大ゆれ小ゆれ甲斐路かな

病む窓辺しのびよるよな秋桜

披露宴（ヒロウエンめう）夫婦の甘き春に酔ひ

土屏より夏柑さがる萩の町

越前の水平線は寒の闇

枯芙蓉わが老先と立ちむかう

岩小菊去年におとらぬ文化の日

病むわれに暮は静かに流れ去る

年の瀬や来るあてもなき便りまつ

名月はやみ夜一点あつめおり

金婚の夫婦のつどい菊さがり

水墨の寺院遺作に石蕗の花

旭川氷の佛清らかに

漢詩

潮騒錄（五十八）

鯨游海

樂聖船村徹先生讃歌・連作（一）誕生

平成廿一年一月

日光山麓神童誕
一泣虚爲千兩眞
終日殷殷吹喇叭
誰知樂聖鳳雛春

押韻・眞　春

〈樂聖船村徹先生讃歌・連作（一）誕生〉

日光山麓に　神童誕まれ
一泣きの虚もて　千両の眞と為す
終日殷々と　ラッパを吹く
誰か知らむ楽聖の　鳳雛の春を

〔注　解〕

昨年文化功労賞を受賞された作曲家の船村徹（本名福田博郎）先生は、昭和七年（一九三二）栃木県日光市塩屋町船生に生を受けた。戦後、わが国の歌謡文化の旗手として数々の名曲を生み、私達を楽しませてくれている先生のこれ迄の半生を漢詩で綴る。

一泣千両＝欲しい物を嘘泣きしてねだること。父は六人兄弟の末っ子の先生を溺愛し高価な品を惜しみなく買い与えたという。殷殷＝大きな音が轟ろき亘るさま。鳳雛＝鳳凰の雛。将来有望な若者。大人物の幼少時。

〔口語訳〕

日光連山の麓、塩谷郡船生村に神童が誕まれた。
「一泣千両」の悪智恵を働かせ、金色に輝くピカピカのトランペットを父から買って貰った。
彼は嬉しくてたまらず、ひねもす長閑な山野に向かって吹きまくった。
この楽聖の幼児の頃のことは誰も知るまい。

☆我はいまラッパを得たり金ピカの
友もうらやむラッパを得たり

（二）青雲之志

平成廿一年一月

國破春巡世相荒
名勝古蹟救家郷
少年彈奏耽曲想
音樂之途志愈昂

押韻・荒　郷　昂

〈（二）青雲の志〉

国破れ春巡り　世相荒ぶも
名勝古蹟　家郷を救ひたり
少年弾奏しては　曲想に耽り
音楽の途　志いよいよ昂し

〔注　解〕

日光は米軍の配慮により、京都、金沢、倉敷、鎌倉ら諸都市と共に空襲を免れた。勿論世界遺産に登録された名勝名刹のお蔭である。名門金谷ホテルも米軍が接収。

〔口語訳〕

戦争に敗れても四季は巡り、人心は荒んではいたが、ここ日光地方は名勝名刹のお蔭で家郷は護られた。
少年は飽くことなくピアノを弾き、更に曲想も練った。
そして音楽こそわが途と青雲の志が燃え滾るのだった。

☆国破れ人荒ぶともふるさとの
山河のリズム我れを育くむ

（三）上京入學

平成廿一年一月

仰雲負笈上京師
忽得同袍同韻兒
君綴歌詞吾作曲
四時切磋琢磨姿

押韻・師　兒　姿

〈（三）上京入学〉

雲を仰ぎ笈を負ひ　京師に上る
たちまち得たり　同袍同韻の児
君歌詞を綴れ　吾れ曲を作らむ
四時　切磋琢磨する姿

〔注　解〕

笈＝書物を容れる背負い籠。転じて「遠くに出かけ学問をする」喩え。京師＝みやこ。京は大、師は衆の意で多くの人の居る所。同袍＝仲間。袍は綿入れのどてら。一着の袍を共に着るような親しい仲間。同韻＝同じ訛り。

〔口語訳〕

大志を抱き笈を負い上京入学し、国訛りが同じ仲間を得た。作詞家を志す君は詩を書け、私は曲を作ろう。
音楽の勉強に四六時中励み合う二人の姿がみられた。

☆歌詞つづれ吾れ曲付けむ二人して
新しき世の演歌創らむ

憶二千一年九月十一日紐育　　平成十九年九月

天門中斷忽焉崩
噴火高樓百十層
疑是水中泥土舞
人如魚潰焱如鮫

押韻・崩層鮫

〈二千一年九月十一日の紐育を憶う〉

天門中断して　忽焉と崩る
火を噴く高楼　百十層
疑うらくは是れ水中の　泥土の舞ひかと
人は魚の潰ぐるが如く　焱は鮫の如し

〔注　解〕

今秋も復たあの九・一一が巡って来る。テロの脅威は去るどころか、いや増すばかりである。其夜、私はテレビの映像に釘づけになっていた。即報の為か音声は全く入らず、恰も無声映画を見ているようであった。

天門中斷＝李白・望天門山「天門中断して楚江開く碧水東流して北に至って廻る　両岸の青山あい対して出で　弧帆一片日辺より来たる」より。天門とは①天への入口②宮殿の門の意がある。ここでは天門山の二つの峰が屹立している様を、二本の門柱に喩えて懸けた。

拙詩はこれを借りて、紐育マンハッタンに聳える南北相対する貿易センタービルを指す。ビルは百十階だった。

(四)　管鮑之交　　平成廿一年一月

一期一會姓高野
名謂公男詩鬼才
青影紅燈狹斜巷
抱琴糊口與徘徊

押韻・才　徊

〈(四)　管鮑の交〉

一期一会　姓は高野
名は公男と謂ふ　詩の鬼才
青影紅灯　狭斜の巷
琴を抱き口を糊せむと　与に徘徊せり

〔注　解〕

管鮑之交＝非常に親しい交友。春秋時代の管仲と鮑叔牙の交友。若い頃から互に助け合い後管仲は宰相となり、斉国を覇者とした。一期一會＝生涯一度の大切な出逢い。不思議な縁。鬼才＝不思議な程優れた才能を持つ者。狹斜巷＝長安にあった斜めの細く狭い歓楽街。影＝光。

〔口語訳〕

一期一会の姓は高野で名は公男。詩の才能溢れる君と二人で食う為にギター弾きつつ紅灯の街を流して歩いた。

☆琴重し君とさ迷ふ銀座川
霧か涙か指かじかみて

魚潰＝鳥散魚潰。群れを為した小鳥が四方に飛び去り、また群魚が八方に潰げ散るようす。

焱＝炎とほぼ同義であるが、炎は平声、焱は仄声。

鮫＝和名みずち。竜の一種で毒気を吐いて人を害す。

一九八五年、筆者はこのビルを訪れた事がある。当時勤務していた銀行のNY支店が高層階に入居していた。

〔口語訳〕

あの李白が詠んだ天への入口の門の如く聳える南北二棟の高層ビルに、テロリストによる二機の航空機が突入自爆し、黒煙と紅炎に包まれ、忽焉と崩壊した。

火を噴いた高楼は百十階の高さを誇るアメリカ文明の象徴ともいう存在であった。今西欧文明が崩れんとする。

無声のテレビ映像は、恰も水中に巨大な泥岩のかたまりが崩れ、土塊や泥粉がゆらゆらと立ち昇り、舞うが如くであった。

ビルより逃げ惑う人々の姿は、群魚が潰散する如く、また立ち昇る炎は竜に似た怪魚みずちの如く、くねくねと跳ね躍っていた。まさに文明の醜怪といえよう。

☆細腰を抱きて狂ふ黒き竜
紅蓮踊りて高楼を舐む

《漢詩の流れ47》明その①高啓

高啓（一三三六～一三七四）、字は季迪、号は青邱子。明代最も優れた詩人。蘇州の人。

明の太祖の命により「元史」の編纂に従事、才を認められ戸部右侍郎（大蔵次官）に抜擢されたが固辞して帰郷した。その后太祖の好色を諷する詩を詠んだ為、南京で腰斬の刑に処せられ、三十三才で刑死した。

尋胡隠君（胡隠君を尋ぬ）
渡水復渡水　水を渡りまた水を渡る、
看花還看花　花を看また花を看る。
春風江上路　春風江上の路、
不覺致君家　覚えず君が家に至る。

送呂卿（呂卿を送る）
遠汀斜日思悠悠　遠汀斜日思ひ悠々、
花拂離觴柳拂舟　花は離觴を払ひ柳舟を払ふ。
江北江南芳草遍　江北江南芳草遍し、
送君併得送春愁　君を送り併せて春愁を送る。

狩谷棭斎讃歌（六）

新井宏

（十九）四回目の西遊

三回目の西遊からわずか二年後の文政四年（一八二一）三月二十日に、棭斎は長男の懐之と津軽屋の鳶頭源七を伴って、中山道経由で上方へ向った。棭斎四十七歳、懐之十八歳、供の源七は五十代半ばであった。

中山道のルートを採ったのは、上野三碑（山ノ上碑、多胡碑、金井沢碑）を実見するためである。

山ノ上碑は、その中でも最も古い天智十年（六八一）の墓誌で、書体に古い隷書体の特徴が見られる。また、多胡碑は、和銅四年（七一一）に多胡郡が設置された記念碑であるが、力強い六朝風の楷書体で書かれている。文中に「給羊」とあり、羊を方角と見る説、人名と見る説、あるいは、藤貞幹の「給半」とする説などが出ていて、棭斎はその解明を期していた。現在では、多胡を「多くの胡人」と見て、渡来系の人名とする説が有力である。名筆家でもあった棭斎は、上野三碑の書体にも大きな関心を払ったに違いない。

この旅行に長男懐之を同行したのは、棭斎が十六歳で初めて上方旅行をした時の経験を息子に伝えたかったからであろう。棭斎にとっては、三回目の上方旅行で果たせなかった課題を丁寧に拾って行くことが主な目的であった。

四月八日に京都に着いてからは、子息の見聞を広めるために、稲荷祭（十一日、伏見本社への還幸祭）、御蔭祭（十四日、御蔭神社神霊の下鴨神社奉迎）、坂本山王祭（十六日、日吉神社祭礼）、葵祭（十七日、賀茂御祖神社と賀茂別雷神社の例祭）などを見物している。京都はまさに祭りの季節であった。

今回の旅行では、事前に手を廻して、各所で秘蔵の古典籍などの閲覧や影写を行っている。その中に、京の医師、福井榕亭の秘蔵していた『新修本草』巻十五の影写がある。

森鴎外の『伊澤蘭軒』によれば、以前に棭斎が交渉した際には、榕亭はすげない返事をしたが、この度は親しく訪問されて厚遇せざるを得なかったと言う。そして前年のことは「途中の間違い」として謝して、やっと影写の許可を与えている。

棭斎は、福井榕亭の第宅庭園が悪趣味に飾り立てられていて、三日も居たら病気になってしまうと述べている。榕亭は書籍を一切他へ貸し与えないなど、難しい人物だったようで、棭斎も閉口していたようである。そのこともあって、棭斎は類書から事前に『新修本草』巻十五の復元版を準備して臨み、榕亭の所蔵本が、それほど秘密のものではないことを匂わせ、一夜だけの借り出しに成功した。

いわば、榕亭を騙したわけで、そのことが棭斎の人柄を悪くいう時に引用されたようである。しかし、棭斎のお陰で、六五九年に中国で編纂された世界最古の薬学書『新修本草』巻十五は残り世に伝えられたのである。

また棭斎父子は『小野毛人墓誌』を実見するため、御蔭祭の帰路、京都左京区の西明寺山町にある崇道神社を訪ね、埋め戻されていた墓誌を捜索したが、小石などが詰まっていて、諦めている。

毛人は遣隋使の小野妹子の子である。墓誌は今、京都国立博物館にあり、国宝となっている。長さ五八・九センチ、幅五・八センチは、いわゆる唐尺の二尺と二寸であり、計量史に興味を持つ私にとっては格別な想いのあるものである。

葵祭を見物してから、鳶頭の源七は江戸に戻り、棭斎と懐之は奈良に向う。

（二十）茶山との再会

四回目の西遊のひとつのハイライトは、菅茶山との再会である。

菅茶山は、家業の酒造業を営みながら、庶民が平等に教育を受けることで、貧富によって差別されない社会を作ろうとした進歩的な人物である。福山藩の儒官としての知遇も受け、藩校弘道館にも出講した。その私塾は後に茶山から田畑を添えて福山藩に献上されて、郷学として認可され、廉塾と名が改められている。

廉塾の門人には、有名な頼山陽、北条霞亭などがいる。茶山は化政文化期の代表的な漢詩人として全国的にも知られていたので、延べにすれば二千人から三千人の門弟が集まり、山陽道を往来する文人の多くは廉塾を訪ねた。その時、茶山は七十四歳であった。

棭斎の友、伊澤蘭軒は、代々の福山藩士で、藩医、儒官を勤めた関係で、当然、菅茶山を良く知っている。そ

の交際の始まりは、おそらく藩主阿部正精が、藩校弘道館を開いた先代の正倫から封を襲ぎ、茶山を江戸に呼んだ享和三年(一八〇三)であろう。正精は学を好み詩を善くし、蘭軒を友人の如く遇したというから、茶山の江戸出仕は蘭軒の勧めもあったかも知れない。

梅斎が茶山を知ったのは、翌年の文化元年(一八〇四)である。蘭軒と一緒に不忍池畔で校書している様子を画工に描いてもらい、そこに茶山の題詩を求めている。茶山が阿部正精に従い福山へ帰るのが、この年の十月であるから、さほど長い交際ではなかったかも知れない。

茶山が再び江戸に入ったのは、文化十一年(一八一四)五月のことである。それから九ヶ月あまりの滞在中、有名人の茶山は多くの人士と会っている。梅斎もしばしば蘭軒の宅で会い、酒を酌み交わし歓談している。茶山が帰国を控えた文化十二年の二月には、梅斎も、茶山、太田南畝、市野迷庵、久保筑水、石田梧堂らを招き宴を催し、贈り物をしているし、茶山も江戸を発つ日に梅斎を訪れている。

茶山は帰国の途中、大阪から蘭軒に手紙を送っている。『伊澤蘭軒』によれば、茶山が、清水濱臣の歌を書いてもらうように梅斎に頼んでいたが、まだ約束が実行されていないので、遅れた代償に、もっとたくさん書いてもらうように伝えてほしいとの内容である。ふたりの間の親密さを知るエピソードである。

茶山にとって、蘭軒は、江戸の学界の動きを知る貴重な人物であった。しばしば、手紙が交換されているが、当時の事情で、音信が途切れた時など、茶山は返信を待ちわびていたこともしばしばあったようである。

その中のひとつ、茶山の文化十四年(一八一七)夏の書状には、梅斎と共に松崎慊堂のことが出ている。

この年の正月、茶山が梅斎に約束していた「院之荘の古簾」をやっと入手して贈ったことがあった。梅斎がさっそく求古堂に懸けて誇示していたが、誰も関心を示さぬ中で、慊堂ひとりがこれを賛美したと、梅斎が書き送ったらしい。茶山は旧知の慊堂に江戸滞在中に会えなかったことを残念がって、よろしく伝えてほしいと言っている。

それと共に、梅斎が西遊の希望を持っていることを知っていて、自分が墓に入る前にぜひ実現するように伝えてほしいと書き送っている。しかし、二年前の三回目の西遊では、梅斎は福山まで足を伸ばせなかった。

したがって、今度の文政四年五月十九日の福山入りは、梅斎にとっても茶山にとっても待ちに待った再会であった。事実、茶山はその二週間前に、蘭軒あての手紙で、梅斎父子を「心に指を折り」待っているが、まだ来ないので、もしや帰られたのではないかと心配している。

梅斎父子を迎えた茶山は驚喜して七言絶句を作る。

時人久已棄荘樗　時人久已に荘樗を棄て

老去隣翁亦自疎　老ひし隣翁とも亦自ずから疎し
豈意東都千里客　豈に意はん東都千里の客の
穿来蘆葦覓吾廬　蘆葦を穿ち来たり
吾が廬を覓わむとは
(読下し鯨游海)

旧知の友人や江戸の学界の様子、研究の進展状況などの話がつきることは無かった。子の無い茶山は懐之を同行した梅斎を羨ましく思ったに違いない。茶山はこの六年後、八十歳の長寿で他界する。晩年の輝きであった。

父子は宮島を訪れ、帰路は奈良、京都、伊勢などを再訪して、江戸に帰ったのは九月六日であった。その帰路、八月二十九日に駿河の宇都谷峠で、福山に向う北条霞亭に会う。面識は無かったが、持物に津軽屋とでも書いてあったのであろうか、霞亭から声をかけたものと思われる。「宇都山中邂逅刈谷梅斎、立交一臂而別」と題した次のような詩がある。

宇山秋雨客思迷　宇山の秋雨に客思迷へり
邂逅逢君鼷鼠蹊　邂逅君に逢ふ鼷鼠の蹊
空有蔦蘿纏別意　空しく蔦蘿の別意に纏ふ有り
相牽恨不与俱西　相牽くは恨みを俱に西するに与からざると
(読下し鯨游海)

一緒に福山に往けず残念がっている。管茶山の弟子、霞亭は、その二年後に夭逝するが、森鴎外の絶筆となった史伝三部作の最後『北条霞亭』の主人公である。

森鴎外は結局『渋江抽斎』『伊沢蘭軒』『北条霞亭』と描きながら、最も書きたかった『狩谷梅斎』に遡ることができなかった。

(二十一)　朝鮮の丁茶山

ここで、菅茶山とも狩谷梅斎ともまったく関係のない李朝の丁茶山について書く。それはもちろん、菅茶山と号が通じているからだけではない。私は、梅斎と丁茶山の間に実に多くの共通点を見るからである。

まず、丁茶山すなわち丁若鏞は、梅斎より十三年前の一七六二年に生まれ、梅斎の亡くなった翌年の一八三六年に没している。全く同時代の学者である。しかも梅斎が考証学者として、儒学はもとより、歴史、経済から度量衡、言語学に至るまで巾広い分野で活躍したように、丁茶山も朝鮮の実学の集大成者として、儒学研究はもとより、天文学、歴史、地理、数学、政治、社会、経済、医学、そして建築や造船などの工学に至るまで、実に広範囲に活躍している。共に無条件に同時代の大学者なのである。

しかし私にとつては、そんなことよりも、狩谷梅斎も丁茶山も計量史の先達として重要な存在であった。

そもそも私が丁茶山に出会ったのが、朝鮮の尺度に関

連して結負制を調べていた頃だから、二十年近くも前になる。結負制とは朝鮮半島の独特な田制であり、田の良否によって面積単位の基本単位の「結」の広さを変えてしまう制度である。普通なら、田の品位によって、税率を変えるところを、面積そのものを変えてしまうのだから、実に複雑な仕組みであり、それだけに良く解析すれば多くの情報を引き出せる。

茶山は生涯農政改革への意欲を持ち続けていたので、結負制について、実に多くの著作を残している。それが私の計量史研究に役立ったのである。

しかも、梅斎も茶山も共に愛妻家であった。梅斎も十四歳の幼な妻を娶り、津軽屋の娘の恋婿と言われたが、茶山も当時の両班の風習とは言え、十四歳で結婚し、愛妻家として世に知られていた。

ただ梅斎との大きな違いは、梅斎は豪商の出身で政治とは距離があったのに対して、丁茶山が両班の出身で、政争に翻弄された人生を送ったことである。

良く知られているように、李氏朝鮮の歴史は、始めから最後まで、骨肉相争う殺戮で彩られている。

三代の太宗はふたりの異母弟を殺害して、傀儡の定宗を二代に立てたがまもなく自分が即位、四代世宗の子である七代世祖は甥の六代端宗や異母弟ふたりに死薬を与え、九代成宗は十代燕山君の生母すなわち自分の妃に死薬を与え、その燕山君は義母ふたりを斬殺し、祖母を撲殺、さらに異母弟ふたりに死薬を与えた。また十一代中宗もひとりの妃とその子を殺し、十二代仁宗は義母に毒殺され、十三代明宗は異母弟をひとり自決させ、十五代光海君は同母兄に死薬を与え、異母兄を部屋に閉じ込め蒸し殺しにし、さらに十六代仁祖の弟を殺害するなどの凄まじさである。その上光海君は、実父十四代宣祖を毒殺したとさえ疑われている。またその光海君の後継の長男夫婦も自殺して果てているし、十六代仁祖も自分の長男を毒殺し、更に長男の妃とそのふたりの子（自分の孫）を殺してしまっている。十七代孝宗は、仁祖の妃に死薬を与え、十九代粛宗も妃である二十代景宗の生母に死薬を与えた。きわめつけは二十一代英祖がその世継ぎの長男、恩悼世子を米櫃に閉じ込めて、餓死させてしまったことである。

丁茶山の政争に翻弄された人生も、実はこの恩悼世子の餓死事件に始まる。それはまさに茶山の生まれた一七六二年に起きたことであった。

当時、英祖のもとで南人派が権力の中心にいたが、権力回復を狙う老論派が、恩悼世子（荘献世子）の不行跡を捉えて上疏して罪に落とし、餓死させ、南人派を追放してしまった。そのため、丁茶山の父も官職をうばわれ京畿道の馬峴にひきこもる。

しかし、茶山が十四歳で結婚した年に、英祖が亡くなり、こんどは恩悼世子の子の正祖が王位につくと、南人派が復活する。そして茶山も二十二歳の時には科挙に合格し、まもなく正祖のあつい信任を得る。

ところが、当時の南人派の若手の間では、西洋学に対する関心が高まり、国禁の天主教を信仰するものも現れ始めていた。なにしろ、政争の国である。今度は南人派さえも分裂して、攻西派が生じると、天主教への弾圧が激しくなり、王の信任が厚い茶山も遂には左遷されてしまった。

しかし茶山は、正祖の直々のとりなしで間もなく復帰すると、水原城の修築で大きな功績を挙げる。

私は七つある韓国の世界遺産の内で、最も美しいのが水原城だと思っている。正祖が旧勢力を排除して王権確立と政治改革を目指し、遷都を目的として作った城で、西洋や日本の城を参考にして、華麗にしてなおかつ大砲の攻撃に耐えられるようにレンガ積で造られている。

その水原城の築城に当って、設計図を提出し、石材の取扱いのため、西洋に学んだ起重機を活用してわずか二年十ヶ月の短期間に完成させたのが丁茶山なのである。

そして一七九五年には正三位相当の高官の位に上る。もはや誰が見ても次期政権担当の最右翼であった。

そうなると、ますます彼を天主教信者として攻撃する声が高まる。その結果、失脚して地方官となったり、また中央に呼び戻されたりを繰返す時期が続く。

そして、遂に一八〇〇年に正祖が急逝すると、権力の座に返り咲いた老論派による南人派への報復と天主教攻撃のために、今度こそ完全に失脚させられ、全羅南道の康津に流されてしまう。しかもその時の天主教弾圧によって、茶山の二人の兄も拷問で殺されたり流刑になったりし、甥からも犠牲者がでて、秀才一家の丁家は大打撃を受けてしまう。

丁茶山は流刑地の康津（カンジン）で失意の生活を送るが、その地で出合ったのが、白蓮寺の恵蔵禅師であり、茶を勧められ精神の平衡を取り戻し、茶山草堂を建てて、学問に専念するようになった。茶山の号はこの草堂に由来する。

韓国に茶道はなかったと言うが、もし韓国で茶道と言えば、茶山が第一人者であり、近年はその面でも注目されている。

そこにソウルに残された妻からの手紙が届く。嫁入りの時に着たチマを裂いてそこに哀切の情を綴った手紙であった。この話は、今でも韓国の人の心を打つエピソードとして良く知られている。

どうも必要以上に梅斎と無関係な丁茶山に深入りしてしまったかも知れない。しかし、本当に書きたかったのは茶山が梅斎と同じ意味での大学者だったことである。

七十五歳で亡くなった丁茶山は、前述したように、儒学から始まり、天文学、歴史、地理、数学、政治、社会、経済、医学、そして建築や造船などの工学に至るまで、実に五百八巻にも上る膨大な著書を残している。彼の漢

詩集も高い評価を得ていると言うし、更に言えば、はしかと天然痘に関する治療や予防法についても紹介している。それは日本で緒方春朔が、初めて人痘種痘書「種痘必順辨」を著したのに遅れること五年であった。

実学というのは、日本で言えば江戸後期の儒学や国学と同じ立場にある。伝統的な朱子学を批判し、近代的、科学的、合理的な精神を基にして、社会変革を育む性行のものである。

その集大成者である茶山は、実事求是の姿勢で、当時の日本についても研究し、日本で興った古学、荻生徂徠や太宰春台を絶賛している。当時の朝鮮の知識人と言えば、日本を学問水準の低い国と観念的に理解をするのが一般的な中で、茶山はまったく偏見に囚われなかった。

もっとも、事実をしっかりと見さえすれば、当時の江戸は既に世界最大の百万都市だったのに、ソウルは名古屋よりもさびしい二十万弱の都市であったのであるから、朝鮮通信使たちも、日本の水準については、十分に承知していたはずである。その後の西欧人の旅行記を見れば、ほとんど例外なく日本に甘く、朝鮮に厳しい評価を与えているのであるから、通信使だって感じなかった訳が無い。しかし、李朝のエリート達は正しく学ばなかった。

その中で、茶山は朝鮮通信使が持ち帰った書物を精読して、むしろ日本が学問的に朝鮮を凌駕していることを認め、朝鮮の実状を嘆いているのである。しかも、注目すべきことに、その原因について、日本には科挙制度がないことを挙げているのである。

茶山が絶賛した古学とは、朱子学や陽明学のような新しい観念的な儒教を排し、理論よりも事実を重んじ、形式的な道徳よりも自然な人情を尊び、実生活での積極的な活動を重んじる学派であり、実学と共通する点が多々あった。古学が新儒教を排するために古典に依拠しようとしたことも、同じ学者として共感を呼んだに違いない。

ところで、日本が明治維新によって欧米に半周遅れながら、付いて行けたのは、教条的な朱子学を脱し、古学が興り、実証的な考証学や、鎖国下にありながら、蘭学が盛行していて、西洋文化のみならず西洋思想も容易に受け入れる環境を既に持っていたからである。

それに対して、李氏朝鮮は合理性、実証性、実用性を求めた実学を丁茶山とともに葬り去ってしまった。もし、正祖が急逝することがなかったなら、そして茶山が政権の座に付いていたなら、朝鮮は明治維新後の日本に続いていたかも知れないのである。

掌編小説6

ときめきを越えて

亜木陽一

お婆さんは今夜は徹底的に踊ろうと思った。

二十年前、東京の長男の家に行った時、五十歳になったばかりの頃、若者のディスコ大会に参加した。

長男に初めての赤ちゃんが、自分の孫が生まれる。

そう！

婦人からお婆さんになることが決まった。

今までの若さの全てを失うまで踊ろうと思い、十代二十代の若者の中に混じって、長男と一緒に踊った。

何曲か体を動かしていると、あの曲がかかった。

長男が学生の頃大好きで、いつもかけていた曲だ。

お婆さんは燃えた。

七十歳になっても、あの曲でときめいていたい、そう思った。

月日は流れ。

七十歳になったお婆さんは、久し振りに町内の盆踊り大会に誘われて出掛けた。

誘ってくれた友人は踊りの達人。

みんなが目を見張る華麗な踊りっぷり。

一方、お婆さんはもう年だ。

気力に身体がついて行かない。

気合を入れて踊ってみても、すぐに疲れてしまう。

もうダメだと思った、その時、懐かしいあの曲がかかった。

ファイト・モリモリ！

不思議な事に、身体中からバイタリティーが込み上げて来た。

お婆さんは乗った、乗った。

曲に合わせて踊る度に、少しずつ、少しずつ、眼鏡がずり落ちそうになるのを、必死におさえ、荒い呼吸と戦って、踊った。

手足が曲について行くのが精一杯で、眼鏡を直している間がない。

最後は、眼鏡のフレームが鼻の下まで、ずり落ちていた。

大会が終わった後、表彰式があった。

最優秀賞は満場一致で元気印の若者。

お婆さんの友人は技術賞で不満気味。

いつもは、最優秀賞と聞いていたが。

厳しい審査。

残念だなあ。

ところが、アナウンスが今回限り、特別賞が出ます。

"ハッスル賞"にお婆さんの名前が呼ばれた。

本人も会場の人も、発表にびっくり!

盛大な拍手。

お婆さんは二十年前の事を思い出し、ときめきを越えて万感の想いで表彰状を受け取った。

みんなの拍手が段々静かになっていった。

「パン! パン! パン!」

ありったけの音を出して一際高くまだ拍手を続けている人がいる。

お婆さんが音のする方を捜して見ると、拍手の主は、我が家のじいさんだった。

小鉄

吉田忠雄

「小鉄」は足利市にあるホルモン焼き屋である。主人とその弟の幸夫さんがやっている。主人が料理を作り、幸夫さんが配膳と配達を担当している。

私は平成10年に法政大学工学部から足利短期大学に転職した。この短期大学の近くに「小鉄」があった。時々昼飯を食べに行った。野菜が豊富に入っているのでよく塩焼きそばを注文した。味は良かった。

主人は口髭を生やしてやり手のようであった。弟の幸夫さんは、兄貴には頭が上がらないようであった。主人は、料理は上手で何を頼んでも味は良かった。特に「小鉄」のチャーハンは天下一品であった。

小鉄の主人は活発で、「時々乗馬に行きます」と私に話した。時には、店でカーウボーイ・ハットをかぶっていたりする。それは馬に乗る時にかぶるのだそうである。主人は活発ではあるけれど、親切でもある。あるとき帽子ケースを持ち出してきて、「これは親父の形見です。若し合えば先生にあげます」といった。かぶってみると残念ながら私の頭には合わなかった。私は丁重に辞退した。

私の勤務先の足利工業大学の付属高校の大島大和先生によると、大島先生と「小鉄」の主人はスキー仲間だそうである。大島先生はレスリングのコーチとしては超一流の人なので、スキーについてもかなりの技量をもっていると思われる。その人の仲間としてスキーに行くのであるから、「小鉄」の主人のスキーの腕もなかなかのものかもしれない。

私は法政大学での最終講義の折にスライドで足利短期大学の裏山に咲き誇る満開の桜を紹介した。朋友の米田さんが「来年は足利で花見をやりましょう」と提案した。翌年3月末には準備をした。まず足利短期大学の後ろの

織姫山山頂にあるホワイトパレスに行き、ホワイトパレスの前で花見会をやることの了承をとった。次いで「小鉄」に行き、当日の料理の打ち合わせをした。

次いで米田さんと手分けをして参加者に通知した。当日参加したのは、火薬学会の米田さん、東大の越先生、日本化薬（株）の橋爪さん、横浜国大の小川先生、東大の新井先生とその家族、吉田とその家族、吉田豊とその家族、小鉄兄弟、小鉄の主人の友人と多彩であった。織姫山山頂はすべて満開の桜で覆われ、温かい春の陽気で最高の花見を楽しんだ。

そこで「小鉄」のチャーハンが絶品であることを皆が知った。十分に花見を楽しんだあと、山を下った。織姫山の下には私の恩師の和田良信先生が住職をしている法玄寺がある。折角であるので、皆を先生に紹介しようと思って法玄寺を訪ねた。残念ながら良信先生は不在で、奥様が対応してくださった。寺のパンフレットを皆に配り、境内を案内してくださった。法玄寺は由緒ある寺で北条時政の娘で足利義兼夫人の北条時子姫の墓がある。時子姫の悲劇が伝わっている。

法玄寺を見学したあと小鉄に行き2次会をひらいた。有志はそのあと「小鉄」の主人の奥さんがやっているバーに行き3次会を行った。越先生はすっかり「小鉄」の主人と意気投合し、以後足利に来た時は小鉄で2次会を開くのが習慣となった。

今年の足利工業大学「風と光の広場」の花火大会は、天候とほぼ満開の桜に恵まれて、大盛会であった。米田さん、越先生、橋爪さん、新井先生、黒沼夫妻、佐伯夫妻と常連は皆集まった。そして例年の如く「小鉄」で2次会を開いた。

「小鉄」は、私にとっては古い友人を楽しませる足利の拠点である。

（司馬雑感　二十）

近江路から熊野路へ（三）

山田嘉久

3「高野山みち」を歩く

私は若い頃、大阪に延べ八年間も住んでいたにもかかわらず、有名な吉野の千本桜も、ましてや高野山にも一度も登ったことがなかった。そこで退職後にこの方面を、初めて旅行した。

「街道をゆく」シリーズで云えば「⑨高野山みち（昭和五十一年）」、「⑫十津川街道（同五十二年）」そして「⑧熊野、古座街道（同五十年）」である。

新幹線を名古屋で下車、バスに乗り換えて愛知県、三重県を経て奈良県に入る。

まず奈良大野寺のしだれ桜を観る。丁度、開花の真っ盛りで見事だった。帰宅後、NHKでも放映していた。

しかし次の長谷寺ではすでに盛りを過ぎて葉桜がちらほら、さりとて名物のボタンにはまだ早い。この年の春は異常気象で桜の開花が早く、関東以西では三月下旬が桜の最盛期だったようだ。

しかし長谷寺の長い石の登廊を登ってようやく着いた本堂からの眺望は見事だった。

長谷寺は「花の寺」として知られる。

有名な七千株のボタンの花も五木寛之の「百寺巡礼」を読むと、その由来は中国、唐時代の后妃馬頭夫人にあるという。馬のような長い顔を持った夫人が美人になりたくて、日本の長谷観音の霊験あらかたなることを聞いて、毎日長谷寺に向かって祈祷したら、素晴らしい美人になれたというのだ。そのお礼にボタンを数株寺に献納した。

それが今の長谷寺のボタン園の始まりというのだが、少し「現世利益」すぎる話ではある。

バスは五条、橋本を通って高野口へ。

ここから高野山頂上までが「高野山みち」である。

高野山口に入ってすぐに九度山町がある。

関が原の戦いに敗れた真田父子が家康によって配流された場所として知られている。父の昌幸はこの地で老死、子の幸村が豊臣秀頼に招かれて大阪城に入城する。このとき従った家来十六人が講談でいう猿飛佐助、三好清海入道ら真田十勇士だが、十六人の姓は講談の十勇士の姓とは異なっていると司馬は書いている。

なお、司馬の初期の小説「風神の門」は霧隠才蔵を主人公に真田十勇士を描いた長編である。その直前に「梟の城」で直木賞を得た彼はこの長編のほか「飛び加藤」「果心居士の幻術」「伊賀の四鬼」等の幻術短編を書いていたので一時期、彼は五味康祐などと共に忍法作家と云われた。

「関が原」以前の真田父子については司馬はこの直後に旅した「信州佐久平みち」で書いている。私も平成十七年春、真田氏の居城上田城を訪れたが、上田市内は司馬の書いたとおり「六文銭」の旗印が溢れていた。

司馬は子の幸村よりもその父昌幸（一五四七―一六一一）を数等高く買っている。武田信玄に仕えた真田氏はにわかに勢力を伸張させたが、「信玄には多くの武将がいたが、衣鉢をついだと評価できる者は、この昌幸だったかもしれない」とまで評価している。

その昌幸は家康が嫌いだった。

そして二度までも徳川軍を苦しめるのである。

日本の戦史にあって「寡をもって衆に勝つ」例は源義経、楠木正成それに真田昌幸ぐらいのものだろうと記している。

関が原後、長男の信幸は徳川方に組したため大名として残ったが、幕府は地元における真田氏の人気を懸念して松代に移封する。そのため上田は千石氏、松平氏と引き継がれるが「それでもなお現在の上田市は「真田の上田」のつもりであり、仙石時代などの記憶はほとんどなく、松平時代も、無視したい気持ちであるらしい」と現在の市民感情を述べている。

「高野山みち」では司馬はこの後、高野山の末寺真田庵にも寄っているが、我々は高野山に急いだ。

五条付近の車の慢性的渋滞で高野山大門が見えてきたのは既に暮色濃い五時過ぎだった。

それにしてもこの大門は高野山の威厳と権威を象徴するように威風堂々としている。山門を見上げて、すぐ近くの「西南院」に入る。今日の泊まりの宿坊である。

帰宅してから「高野山みち」をひろげたら司馬もこの宿坊に泊まっている。

宿坊だけにもちろん精進料理だが、給仕してくれるのは女性ではなくこの寺の若い僧侶だった。いかにも女性禁制の高野山らしい。意外にも食事の際のアルコールも

OKということだったので日本酒を註文したら、給仕の要領が悪く食後になってから持って来られたには閉口した。

通された部屋は四畳半。茶室のような薄暗い部屋でテレビもなし。春とはいえ山頂で気温が低いのに、備え付けの暖房器も調子が悪いので、布団に包まって直に寝てしまった。

翌朝は早く起きて境内の枯れ山水風の庭を散策。

六時から本堂で住職によるお勤めがあるとのことだったが、信心の極めて薄い私はこれには出席しなかった。

しかしあとで「高野山みち」を読むと西南院の和田住職は真言宗派では最右翼の人らしく（高野山真言宗管長）、司馬もこの人について数ページを割いているのを知って残念なことをしたと後悔した。

高野山の寺院町は東西に長く、西端の我々の泊まった西南院から東端の奥の院まで四キロはある。寺院だけでも百十七もあるという。まさに「山上の宗教都市」である。

中央部に有名な金剛峯寺があり、ここを中心にして下界と遮断された高野山独立国が形成されている。

役場も、郵便局もあり、また高野山大学などもここにある。

空海は弘仁七年（八一六）、高野山開創の上奏をし、これに勅許が降りた。

なぜ空海はこのような山林の地に拠点をおいたのか。

司馬は名著「空海の風景」でこう書いている。

「空海は、天皇にも飽き、京の田舎臭い貴族たちにも飽き、あるいは南部の泥臭い長老たちを相手にしていることにも飽いたであろう」

「高野山みち」には書かれていないが、司馬が兵役に取られる直前、卒業記念に友人数人と吉野付近をハイキングしたことを随筆（「空海の風景」余話）に書いている。

途中、道に迷って明け方ようやく辿りついたのが高野山だった。薄もやの中に忽然と現れた別世界に目を見張ったという。

「天人たちの住むといわれる兜率天の都に出てきて、天人たちと棲んでいるような夢心地になったのです」と司馬は語っている。

我々は、奥の院では専門の僧侶ガイドによって参道を案内されたが、このガイドからは高野山は必ず近い将来、世界遺産になりますと聞かされたが、その通り数年後には熊野三山と共に「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界遺産に登録された。

また平成二十年秋には、奥の院入り口に司馬の文学碑が建てられた。碑文は彼の随筆「高野山管見」の冒頭の文章のようだ。

「高野山は、いうまでもなく平安初期に空海がひらいた」で始まり、「日本国のさまざまな都鄙のなかで、唯一と

いえる異郷ではないか」と結んでいる。

奥の院には信長、信玄など高名な戦国武将から無名の庶民のものまで二十万基を超える墓石、記念碑、慰霊碑が身分や敵味方の区別なく並んでいる。その中でひときは大きいのが二代将軍秀忠の正室お江の方の墓石であるのがおかしかった。この頃ＮＨＫ大河ドラマ「葵三代」でお江の方のカカア天下ぶりが放映されていたからだ。

奥の院の中心に弘法大師御廟。

大師が自ら定めたという入定の地に立つ廟である。

承和二年（八三五）三月二一日、空海死没。享年六二。

高野山では、今日まで、死ではなく入定として伝えられ、空海は奥の院地下の石室に黙然と座っているとされている。

ところで日本の密教は最澄（伝教大師）によって初めて唐から紹介され、空海（弘法大師）によって本格化されたというが、浅学の私にとっては、その天台密教（台密）と真言密教（東密）の違いも理解できない。

尤も「空海の風景」を書いた司馬さえも「真言密教はまことにわかりにくい」と書いているから、私など顕教と密教の違い、純密（東密や台密など体系化されたもの）と雑密（それ以前の断片的なもの）の区別など理解できなくても当然かも知れない。

司馬はその密教のわかりにくさが有名な「真言立川流」を生んだ原因のひとつだという。立川流では男女の性交こそ密教本来の目的である即身成仏の道であると説く。このことはモンゴルやチベットに興きたラマ教も道理は立川流と同じだと説かれると益々わからなくなる。

さらに南朝の後醍醐天皇が、その立川流の熱心な信者だとなると、南北朝の歴史とは立川流と禅宗（北朝では禅宗に凝る天皇が多かった）の闘争という一面があったのだろうか。

高野山の桜はまだ蕾だった。山頂にあるためだろう。

4 「十津川街道」を歩く

おなじ山頂でも、吉野の桜は下千本から中千本にかけては既に盛りを過ぎていた。

これが数日早く満開の時期には更に見事であろうことは容易に想像がついた。人出も多く陽気もいいのですっかり汗をかく。見上げる上千本、奥千本は今が満開のようだが時間の関係でそこまでは上れない。

バスは吉野山から吉野川に沿って十津川に入り、「谷瀬の吊橋」に向かう。

全長五百メートル。鉄線の吊橋としては日本最大のものらしい。司馬は「街道をゆく（十津川街道）」でこの橋の建設に当って十津川郷の人々が公に頼らず一戸あたり三十万円を出し合ったことは、いかにも誇り高い十津

川郷士の子孫らしいと書いている。

「十津川」とは「遠つ川」に由来すると云われるように、この地区は現代に残る秘境で、その面積は一町村としては日本一。村一つで奈良県全体の五分の一を占め、旧東京市内の広さに該当する。したがってその過疎ぶりも日本一である。

バスで通り抜けるのに一時間以上もかかった。

十津川村に入った途端、私にとっては始めての場所なのに「十津川街道」を読んでいたせいか、かって一度来たような錯覚に襲われた。「擬似的体験」というのだろうか。

幕末、京都にあって反幕勢力は長州、薩摩や土佐の脱藩浪士たちだったが、その中に十津川郷士という集団も小勢力ながらも存在し続けたと司馬は書いている。

「十津川街道」も坂本竜馬が暗殺される際、見回り組の凶行者が十津川郷士と偽って竜馬に面会を求める場面から筆をおこしている。

郷士といっても、それは十津川村人の自称に過ぎず、実態は百姓身分である。それが全員、苗字を名乗り帯刀し士装していた。しかも米が獲れないので「御赦免」（年貢を納めなくていい）の恩恵も受けていた。それだけに遠く上代の壬申の乱以来、報国の念が強く御所の衛士としては最適だったという。

誇り高い彼らは藩校ならぬ郷校（文武館、現十津川高校）さえ持っていたが、維新後、全村二千余戸すべてが士族に列せられた。徳川期、九割以上が百姓身分であったのに、もれなく士族になった例は全国でも珍しいという。

その後、この村民の多くは屯田兵として北海道に渡り、北海道にもう一つの十津川村を作りあげた。それが現在「北海道でもっとも富裕な農村」で知られる新十津川村である。

司馬はこの後に書いた「街道をゆく（北海道の諸道）」でもこの地を訪れ、その子孫である明治生まれの五名の古老達から当時の苦労話を聞いている。

司馬はまた土佐脱藩浪士吉村寅太郎が十津川で同志を募って「天誅組」を組織したことにも触れている。

そもそも孝明天皇の大和行幸に呼応して倒幕ののろしを揚げた天誅組だったが、長州派公家追放の政変で事態は一変する。

後ろ盾を失った吉村らが目をつけたのが勤皇の精神が伝統的に強い十津川郷士だったわけだ。

その十津川軍の高取城攻撃を、高取側から喜劇的に描いたのが、司馬の傑作短編「おお、大砲」である。

譜代高取藩には三代将軍家光によって下賜された藩宝があった。その名をブリキトース（ブリキを徹すの意か）といい、大阪冬の陣で大阪城内に打ち込まれた大砲六門。これに戦慄した淀君が屈辱的な講和を敢て結んでしまっ

たことはよく知られている。

爾来、高取藩では徳川二百余年を通じて、このブリキトースを「権現砲」として神格化して、腫れ物に触る如く大事に保管してきた。が、その操作方法については殆どが「口伝」によって歴代伝えられたもので、泰平の世にあっては実践の経験のある者は誰もいなかった。

それが、突然の天誅組の乱に引っ張り出されたわけである。案の定、殆どは不発。ただ一発火を噴いた砲も敵方に耳鳴りの被害を与えたに過ぎなかった。

「それが、封建制というものだった。この制度は人間や身分を数百年間、制度のカンヅメに入れてきただけでなく、大砲までカンヅメにしてきたのである。」

（なお、司馬の初期（昭和三十五年）の短編「庄兵衛稲荷」もこの件を題材にしている。）

その高取城は美濃岩村城や備中松山城とともに「日本三大山城」といわれるが、この城を訪れたときに司馬が書いた

「私は城が好きである。あまり好きなせいか、どの城郭に行ってもむしろ自分はこんなものはきらいだといったような顔を心の中でしてしまうほどに好きである。」（大和、壺坂のみち）

この文章は、最近ＮＨＫで放映された「司馬遼太郎と城を歩く」シリーズで冒頭のナレーションで使われたので有名になった。

十津川街道沿いに「大塔」という地名があった。

多分、「太平記」に出てくる後醍醐天皇の王子の大塔宮護良親王が鎌倉幕府の追捕を避けて逃れこんだ場所だろう。

護良は笠置落城後、奈良の般若寺に身を隠していたが、その後、山伏に身をやつして十津川に逃げ延びた。最後には鎌倉で足利直義の手の者に殺される。

（なお、戦前私は「ダイトウの宮モリナガ親王」と教わったが、戦後は「オウトウの宮モリヨシ親王」が一般的のようだ）

5「熊野、古座街道」を歩く

翌日は熊野速玉神社、熊野那智大社そして熊野本宮大社のいわゆる「熊野三山」を回った。

熊野詣の歴史は古く、十一世紀末、上皇（法皇）を始めとする皇族や貴族の度重なる熊野御幸から始った。上皇たちの参詣は、白河、鳥羽、後白河、後鳥羽の四代の間に九十数回に及んだという。

しかし熊野に向かったのは彼らだけではない。

「蟻の熊野詣」といわれたように、一般庶民も続々と参詣の旅に出た。女性や身体障害者など、他の寺院が忌避した人々にも大きく門戸を開いたことが貴賤を問わず熱狂的な信仰を集めたが、江戸末期に「お伊勢参り」が盛

んになってからは逆に廃れた。

那智大社の同じ敷地内に西国三十三カ所一番札所の青岸渡寺がある。見事な神仏混合である。

本宮大社のわき道に「熊野古道」とあり、数十分間だけその気分を味わった。現在、歴史のロマンと神秘的なムードで人気のハイキングコースという。

熊野古道には海岸周りの「大返路」、途中田辺から陸路に入る「中返路」、そして高野山あたりからの「小返路」の三路があったようだが、司馬は「街道をゆく」では「大返路」の古座川のほとりの「古座街道」を歩いている。

此処で、司馬はこのあたりに昭和初期まで残っていたという若衆組のことをしきりに考えている。

「この若衆組は、日本の古代社会における（南方的要素）ではないか。それは氏族制といったタテ型の関係をかたちづくった（北方的要素）と大きく異なっている。」と書いている。

これが「熊野、古座街道」をゆく主目的だったというのである。

そして同じ「南方的要素」である薩摩藩の郷中組にも触れている。薩摩藩の武家町には町内ごとに「郷中」という自治組織があった。それらのなかで、徳望のあるものが、必ずしも年齢によらずに郷中頭となる。郷中頭というのは、大人からも憚られるほどに勢威のあるもので、西郷隆盛の場合、元服してほどなく郷中頭に推されたが、二十三、四までつとめたことが、この熊野の旅直後に執筆を始めた長編「翔ぶがごとし」に詳しく書かれている。

従って「若衆組」を知るために訪れた「熊野、古座街道」は「翔ぶが如く」を書くための旅であったともいえる。

現にこの紀行文には「私はここ数年、西郷隆盛とその反乱について考えつづけている」とも書いている。

その「翔ぶが如く」では、西郷が西南戦争の末期、絶望的な戦況のなか、山の傾斜を這いのぼっていて「夜這いが如く」といって、敗残の味方を笑わせたことまで紹介している。

司馬によると、平安朝のころ、京都の若い公達が娘をもつ家に忍んでおこなった「夜這い」は若衆制の「典雅な変形」だというのである。

したがって「源氏物語」の性風俗は中国、朝鮮のような儒教社会では決して理解されないだろうとも書いている。

なお後年の長編「菜の花の沖」にも淡路島の若衆組についても豊富な記述がある。

さらに司馬は昭和の二、二六事件にも話が飛躍するのである。青年将校たちは「憂国感情の共有を因子として、若衆組化した」というのだが、どうだろうか。

若衆組そのものの制度は大正期に滅びたが、意識とし

ては昭和の時代まで存在し続けたというのが、司馬の持論のようだ。

このオトナ社会と若者組の関係は、陸軍の将官と青年将校、会社幹部と労働組合、大学当局と体育部につながると指摘するのである。（「菜の花の沖」あとがき）

司馬は更に、この紀行文から十年後に書かれた「この国のかたち」（若衆制）でも持論を展開している。昭和初期、内閣というオトナ制に対して参謀本部が統帥権というミコシをかついで「若衆化」して暴走したのも、若衆文化と無縁ではなかろうと考えている。

更に関東軍参謀が満州事変やノモンハン事件をおこしたのも「若衆文化」を考えると理解しやすいというのである。

（注）歴史家網野善彦も日本列島を「東と西とは異質な社会」ととらえ、東が「同族結合、タテ社会」（家父長制など）であるに対して西は「年齢階梯制、ヨコ社会」（若組制など）と結論づけている。（「日本」とは何か）

司馬も網野説に賛同して、西日本を中心とした若衆宿や妻問の風習も、西日本が多分に南方系の母系社会だからだろうとしている。

「熊野、古座街道」で、司馬たちが川下りをしたときの船頭を勤めた飯田老人は若い頃、オーストラリアで働き、晩年は生まれ故郷で好きな川漁をして暮らしている。その老人の身の上ばなしを聞いて書いたのが小説「木曜島の夜会」である。

飯田老人のような熊野の漁夫たちが明治の始めころから太平洋戦争開始までオーストラリア近郊の木曜島で白蝶貝の採集に当った模様を描いた物語は、彼にとっては、異色の中間小説となっている。

司馬は取材に当ってオーストラリア国立大学の教授などの学説や歴史的背景など様々な考察を加えて、海洋になじむ日本人の特性を探そうとしている。

そしてなぜ死亡率一〇％に及ぶこんな危険な仕事に日本人だけが従事するのかの疑問に、商売よりも技術に魅力を感じるのが「日本人の性（さが）」だと解く熊野人ダイバーの話に納得するのである。

最後の文章が「Japanese is a Japanese」となっているのは印象的だった。哀愁が余韻となって残る小説となっている。

化粧のルーツを訪ねて（七）

第四話　古代中国の化粧文化

鈴木守

はじめに

日本の化粧史は古代まで遡ることができた。また、第二話で述べたように、古代中国には額のポイント化粧・花鈿があった。この化粧が日本に波及したか否かは別として、日本の古代社会は政治的にも文化的にも、大陸の影響を受けていたことは明らかであるから、第四話では、唐以前の古代中国の化粧文化に焦点を当てる。

中国の古代史を日本史と対比させながらみると、北京原人や周口店上洞人はさておいて、縄文中期の頃、黄河文明が始まり、縄文後期に初期王朝、春秋戦国と続き、弥生時代に秦、漢の統一国家が成立したが、倭人の国や大和王朝の頃は、三国、晋、南北朝などの分裂時代であり、その後、隋、唐の統一時代を迎えた。この当時の日本は飛鳥、奈良、平安時代に当たる。

第一節　唐

唐（六一八～九〇七）は、中国史の中で最も繁栄した政権を長期間保っていた。この間に美術、工芸、文芸などの文化が隆盛期を迎え、化粧文化もその一環として普及した。

1・詩に詠まれた化粧

唐の化粧といえば、絶世の美女楊貴妃に思いを馳せる人が多かろう。彼女の化粧は酔粧と呼ばれ、ほんのりと酔ったような赤みを帯びた化粧だったという。

白居易（はくきょい）は「眸（ひとみ）を廻らして一笑すれば百媚を生じ、六宮（りくきゅう）

の粉黛顔色なし、春寒くして浴を賜う華清の池、温泉水滑らかに凝脂を洗う…」と楊貴妃の艶姿を『長恨歌』に詠んでいた。ここには白粉、眉墨および温浴、洗浄がみられる。

そのほかにも、李白、杜甫、杜牧らは、美人の形容に化粧用語の紅妝、脂粉、檀紅、鉛華、蛾眉、月眉、長眉、額黄、翠鈿、斜紅などを詠み込んでいた。脂粉は紅白粉を意味し、鉛華は鉛白と思われる。その他の用語は後述する。

2・化粧法

唐女性の化粧順序は、最初に顔全体に鉛粉を叩いてから頬に臙脂を掃いた。次に眉を描き額に花鈿を貼るかあるいは額黄を塗って口辺に面靨を点じ、こめかみ近くに斜紅を染めて最後に唇脂を施した。鉛粉、臙脂、唇脂、面靨はそれぞれ白粉、頬紅、口紅、靨鈿であり、靨鈿と花鈿は第二話で述べた。聞き慣れない化粧に、額黄と斜紅があった。額黄は額を黄色に塗る化粧、斜紅はこめかみに半月状の赤斑を描く化粧である。

唇脂には主として唇砂が使われ、スティック状の口紅が既に考案されていた。また、無色の唇脂は男性が防乾用に唇に使用し、現代のリップクリームの前身といえる。

3・赤および白化粧

この時代のメークアップは紅白粉による化粧を土台にし、この化粧を紅妝と称していた。紅妝には臙脂と鉛粉を混ぜた檀紅を塗る檀暈妝、粉を掃いた後に臙脂を塗布する桃花妝、ならびに臙脂を塗った上に薄く粉を付ける飛霞妝があった。また、鉛粉だけを塗る白妝もあった。白粉には鉛粉と米粉が使われた。

そのほかに、爪の赤化粧もあった。『紅楼夢』には爪を伸ばす風習が書かれ、紅の守宮や玉箏の紅が詩にみられた。守宮は爪紅の代名詞、玉箏は女性の手指を指す詞であるから、唐代の女性は美の演出に爪を伸ばし、赤く染めていたことを示している。使用した色材が記載されていなかったが、後世の例からすると、鳳仙花あるいはヘンナ（指甲花）と思われる。

4・その他の化粧

この時代、眉作りも重要な化粧であり、多様な眉形が見られた。細く長めの長眉を始め、幅広く描いた闊眉、柳の葉を思わせる柳眉、新月様の月眉、蛾の髭に似た蛾眉などがあった。これらの眉形を描いた『十眉図』が残されている。

また、長安や洛陽附近から出土する土偶にはイラン系の装飾があり、長安の盛り場には、ラピスラズリやインディゴでアイシャドーをした胡姫がいたようである。

第二節　隋から三国の時代

隋（五八一～六一八）、南北朝（四三九～五八九）、晋（二六五～四二〇）、および三国（二二〇～二八〇）の各時代における化粧風俗を述べる。

1・眉化粧

隋以降の眉化粧には、後述する石黛と黛硯に代って螺黛が使われるようになった。螺黛は水を含ませるだけで使用可能な眉墨である。恐らく、顔料を水溶性の高分子物質、例えば糊で固めたものであろう。

隋の煬帝は螺黛をペルシャから購入し、後宮の妃嬪たちに与えたり、長眉の美女を好み高位の女官にとり立てたので、後宮の女たちの間で長眉が流行したという。

南朝の書に「梁の武帝は宮人に白妝の上に青黛眉を描かせた」との記録があり、東晋では長眉が眉形の主流であった。

魏では長眉が尊重されたが、曹操（三二〇没）は「宮人に青黛眉、連頭眉を描かせた」との記載もある。青黛眉は青黛で描いた眉をいい、連頭眉は眉頭が連なった眉形で仙蛾妝とも称した。

2・赤および白化粧

臙脂の表記は南北朝時代から始まった。それ以前は燕支であったが、燕支に豚脂などを加えて使うようになったため、肉月を付けて臙脂と記載し始めたのである。

前出の白妝は梁の武帝が好んだといわれ、南朝の『名君詞』や北朝の『木蘭詩』に紅妝が記されている。

西晋の『古今注』に「紅花は西方に産し、現地ではこれで染めたものを燕支といい、粉を紅花で染め、これを燕支粉と呼び顔に彩りを与える」と記されていた。ここでいう紅花の産地、西方とは甘粛省焉支山麓地域とされており、燕支の語源を暗示している。

また、『抱朴子』には、「鉛粉は鉛丹より作る」と記されていた。恐らく、鉛丹（酸化鉛）を酢酸処理して塩基性酢酸鉛とした後に、加熱しながら二酸化炭素を吹き込んで鉛白（塩基性炭酸鉛）を合成したはずである。この製法が朝鮮に伝わり、高麗僧・観成が日本最初の鉛粉を作ったのであろう。

なお、『倭人伝』には「倭人は中国の白粉のように朱丹を塗る」とあったので、三国時代の中国には既に白粉が存在していたのである。

3・額黄と斜紅の由来

南北朝時代に仏教が伝来し、女性たちは金箔の仏像にあやかって額を黄色に染め始めた。この化粧を額黄と称

したが、北方の婦人たちは仏妝と呼んでいた。

斜紅は三国時代に始まった。『妝楼記』には、「魏帝の寵妃が顔に怪我を負い、治癒後も傷痕が残ったが、なお帝の寵愛を受けたため、宮女たちは彼女の傷痕を真似て、紅で顔に血痕を描いた。この化粧を曉霞妝といい、流布して斜紅になった」と著している。

4・その他の化粧

隋代の墳墓から銀製の指套が出土した。指套は爪の保護に使われ始めたが、唐代に爪を伸ばして彩色する風習が始まり、明、清の代には装飾目的で指套を嵌めるようになった。現代のネイル・スカルプチャーである。

美術全集を繰っていると、剃髪姿と男性の化粧図に目が止まった。剃髪姿は仏教伝来直後・六世紀前半の僧侶像と羅漢像であり、中国で最も古い剃髪像であった。また、男性の化粧図は東晉の『女子箴図巻』に描かれており、この時代には、上流階級の男性に化粧風習が伝播していたのだろう。

第三節　漢および秦

漢は後漢（二五～二二〇）と前漢（前二〇二～八）に別れ、その間に王莽の新（八～二五）があった。漢の前は秦（前二二一～前二〇六）の時代である。

1・眉化粧

後漢書には、「城中では広眉が好まれたが、地方では額半分程の眉をしていた」ことと「桓帝期（一四六～一六七）の婦女子は愁眉を描いた」ことが記されている。愁眉は泣く様に似ているために、つけられた名称である。

ほかに、江蘇省の後漢墓から黛硯が出土している。

前漢の書『釈名・釈首飾』には、「眉を除去した後に黛で描く」記されており、日本の眉化粧の原形を思わせる。黛硯と石黛はそれぞれ、江西省と広西省の漢墓から出土している。これらは眉化粧に用いる硯と墨である。

前漢初期には長眉が流行し、馬王堆出土の帛画や木俑には長眉が描かれている。他方、武帝（前一五六～前八七）は八字眉を好み、湖北省前漢墓出土の木俑は八字眉であった。

特殊だが赤い眉化粧もあった。新朝後半、王莽の治政に反発する徒党が各地で蜂起した。その一つに赤眉党があった。王莽の政府軍が暴行略奪を常としていたので、政府軍と区別するために眉を赤く染めて赤眉を徒党の標識とし、中国古代史にその名を残したのである。

2・赤化粧

前出『釈首飾』は靨鈿と唇脂に触れていた。靨鈿の起源について、「顔に丹を点ずるを的といい、的を示すは后妃が月経になると、帝の来臨を受けられないことの標

識として点じ、これが民間に伝承して靨鈿と呼ばれるようになった」という。また、「唇脂は丹で作る」とあり、口紅は唇砂で作られた。ほかに、長沙や楊州の漢墓から唇脂の実物が出土しているので、口紅風習は遅くても漢代には始まっていたことは確実である。

第四節　春秋戦国および初期王朝時代

春秋（前七七〇～前四〇三）および戦国時代（～前二二一）以前の初期王朝時代は、最初の王朝、夏、次いで殷（商）、周（西周）、春秋時代と続いている。夏については実在が確定していないが、中国古代史の研究者たちは、前一七世紀頃の二里頭文化と夏を重ねて考えているので、夏も初期王朝に加えることにした。中国史書における歴年を記すと、夏（前二〇五～）、殷（前一七六六～）、周（前一一二二～前七七〇）である。

1・白および赤化粧

初期王朝時代の資料では、白粉は周の文王の時、初めて作られたとか、殷王紂が作ったと『博物誌』にあり、『墨子』によれば夏の禹王が作らせたという。周建国の基盤をつくった文王と炮烙の刑を行った紂（前一一四〇頃）は同時代であり、禹は治水に努めた初代夏王（前二二〇五）である。春秋戦国時代には、『戦国策』に「鄭の女は白粉を使う」と著し、『楚辞』にも白粉が記されていた。鄭は春秋時代の国である。

赤化粧については、紂の妃・妲己は燕から紅花を取り寄せて化粧したといわれ、『十八史略』には、伝説の帝王・堯の実子に丹朱の名が記されている。燕は北京界隈ではなく、前出の焉支山界隈であろう。

2・その他の化粧

春秋戦国時代には、『戦国策』に黒黛、『楚辞』に眉墨黒、施芳澤と記され、『詩経』に蛾眉がみられたので、この時代には蛾眉を作り、香油で香りや艶を与える風習が存在していたことが窺える。ほかに、戦国時代の墓から指套が出土し、弓矢を射るときの爪の保護に嵌めたそうである。また、前五世紀・句践の頃に越では、龍の入墨を施す風習があり、戦国時代には鏡が広範囲に使われていたといわれている。

なお、時代は不明だが、黄土地帯の古代中国人は、保護色として黄土を塗り、黄衣を着たという。黄色は中国の色、神聖な色であり、五帝の一人、黄帝の名にもみられる。

3・化粧風習を暗示する傍証

化粧の存在を示唆する資料に触れる。

周の頃、貴族の男子は二〇歳で成人となり冠礼が行わ

れ、女子は一五歳で笄礼を行なって成人の標識とした。周初期には周礼が定められ、去勢の刑と歌舞の制度も設けられた。歌舞は装飾を伴うのが常である。なお、鏡の紋様および石墓画に西王母の簪姿が刻まれていた。

殷代には、シャーマンが現れ卜占を行い、甲骨文字が生まれた。この頃、青銅のほかに金や鉛が使われ、金の腕輪や耳飾りが発見されている。夏や殷の頃、釉薬に鉛粉や錫粉、黄粉が使われていた。

かように、初期王朝の頃には、化粧を示唆する装飾や宗教があり、彩色顔料も使われていたので、酒池肉杯で名を馳せた夏王・桀の美貌の寵妃・妹喜も化粧をしなかったはずがない。酒池肉杯の情況をイメージすると、歌舞音曲が流れ、脂粉の香りが満ち溢れている。その中で、身を飾り化粧を凝らした妹喜が桀と淫楽を貪っている。そんな光景が目に浮かんでくる。

第五節　考古学的資料

1・化粧風習の直接的な証拠

中国・石器時代における化粧の存在を直接証明する資料として、整髪用の櫛、装飾品の髪飾り、鏡だけでなく、抜歯遺体も出土している。

(一)　髪飾りと櫛

周代の遺跡から骨笄、銅梳が、殷墟などから弁髪の俑、笄を指した児童の絵、笄で冠を止めた男性像のほかに、金製の笄や玉製の梳などが出土し、二里頭文化（前一七世紀以降）、新石器時代の龍山文化（前二五〇〇～前一八〇〇）や仰韶文化（前四八〇〇～前四〇〇〇）などの石笄や梳などが発掘されている。

(二)　抜歯風俗

黄河下流から山東半島を経て淮河に至る地域に大汶口文化（前四〇〇〇頃）が開け、この文化の遺跡から抜歯遺体がかなり広範囲に発掘された。この遺跡の住民は、成人になるための儀式として男十四～十六歳、女十六～十七歳で抜歯したとされている。

(三)　鏡

周、殷の時代は青銅時代であり、数多くの青銅鏡が出土しているが、新石器時代晩期（前十七・八世紀）の銅鏡が現在、最も古いものとされている。

2・化粧風習の傍証となる資料

装飾品と楽器は美意識発生の傍証となり、釉薬や木炭は彩色化粧の顔料でもある。また、花鈿のように宗教起源の化粧もあるので、呪術や宗教も間接的な資料としてピックアップする。

(一)　装飾品と楽器

新石器時代の遺跡から耳に孔を穿って耳環を付けた人物像を始め、耳輪、指輪、腕輪が発掘されている。さらに古く、一八〇〇〇年前の周口店上洞人も牙や石珠、骨管の首飾りを装着した形跡が残っている。

楽器については、周代の鐘、銅鑼、鈴、鼓などがあり、仰韶文化と河姆渡遺跡（前五〇〇〇～前四〇〇〇）では、オカリナ、非李崗（前六〇〇〇～前五〇〇〇）から骨製の縦笛が出土している。

(二)　釉薬と顔料

龍山や仰韶文化などで作られた黒陶や彩陶には、黒、青、赤、白などの釉薬が使われていたので、これらの釉薬を化粧用顔料に使用した可能性もある。

中国における人類の歴史は、北京原人（六〇万～五〇万前）、藍田人（七〇万前頃）、元謀人（一七〇万前）まで遡り、北京原人は火を使用したという。火使用によって得られる黒色顔料の木炭は、人類の手によって作られた最初の化学物質である。

(三)　宗教の萌芽

龍山文化の頃にはシャーマニズム、仰韶文化ではトーテミズムの気配がみられ、後期旧石器時代の上洞人は、遺体周辺に赤い粉末を散布したといわれ、宗教の萌芽を思わされる。

第六節　まとめ

古代中国の化粧資料を漁ってきたが、最初の化粧がどんなもので、いつから始まったか不明である。例えば、北京原人は火の使用で木炭を入手したはずであるが、化粧に用いた証拠はない。また、周口店上洞人は遺体に赤い粉末を散布し、装飾品を装着していたので、宗教の萌芽や美意識の発生が暗示されるものの、化粧を証明する証拠はなかった。新石器時代には、釉薬を使用したが、それを化粧に使ったという資料はなかった。

とはいうものの、化粧に直接関係しない資料でも、中国の石器時代に化粧風習が存在したという雰囲気を与えてくれた。事実、新石器時代には櫛と髪飾り、抜歯風習および鏡が実在していたので、この時代には化粧が始まっていたことを確定できた。以下、それぞれの化粧ごとに歩んだ歴史をまとめる。

1・髪化粧

中国における化粧風習の資料で最も古かったのが、前四八〇〇～前四〇〇〇年の仰韶文化の髪飾りであり、龍山文化の櫛、笄、簪が続いた。髪飾りは装飾品とはいえ、整髪せずに用いることはないので、髪化粧の立派な証拠品といえる。櫛や髪飾りは、夏から周の時代の出土品にあり、髪の艶出しに使う澤は、春秋戦国時代と漢代の資料に記載され、髪化粧の歴史は途絶えることなく、現代まで続いている。

無髪の髪化粧・僧侶の剃髪は、美術全集に六世紀前半

の僧侶や羅漢像が収められていた。

2・歯の化粧

前四〇〇〇年頃の大汶口文化圏に成人表示を目的とした抜歯風習があった。この文化圏は黄海から東シナ海に面した臨海地帯であり、第一話で述べたように、抜歯は海洋民族の風習とされていることと一致している。なお、抜歯例は一八〇〇〇年前の沖縄で認められているので、浙江省や江蘇省の沿岸部に抜歯遺体が眠っている可能性がある。

抜歯以外の歯の化粧については、明眸皓歯が中国由来の四字熟語であるから、歯磨きの風習があるはずだが、その資料は得ていない。また、黒歯習慣についての情報も今のところ見聞していない。

3・鏡

青銅器時代の鏡は数多く知られているが、現在、最古の鏡は新石器時代晩期の銅鏡とされている。ところで、前記の髪化粧は鏡発生以前から行われていた。仰韶文化の頃の人たちは、恐らく水鏡に映して髪を梳き髪飾りを着けたのであろう。更に古く、鏡も櫛もなかった上洞人は水面に姿を映して指櫛で髪を梳き、装飾品をつけて身繕いしたのだろうと想像しながら一句、「池面に姿映して髪を撫で」。

4・赤化粧

赤化粧の資料は、前一一四〇年頃の妲己が初出であり、彼女は美を演出する目的で化粧したことは確実である。

妲己が使った紅花とは別に、赤色顔料の歴史を辿ると、上洞人が遺体に赤色粉末を撒いた跡がある。遺体や墓所に赤粉を散布する風習は広く認められ、日本の三内丸山遺跡に見られた。古代人たちは、日、火、血の色である赤に神秘を感じ、死者の復活とか除災を願ったかも知れない。また、日本には石器時代の赤い人骨が見つかっているので、周口店の赤粉散布が呪術的な赤化粧へ波及した可能性もあろう。

新石器時代に至ると、仰韶の彩陶に赤色顔料が使われていた。陶器を彩ることは美意識に基づくものであるから、美的な赤化粧が始まっていた可能性を想起させる。後述する黒および白化粧についても同様である。

伝説の帝王・堯の実子に丹朱の名があった。彼の名の存在は、丹および朱の名詞が初期王朝以前に存在していたことを示す。したがって、『十八史略』記載の堯の歴年から算定すると、丹と朱の名称は、前二三〇〇年頃、龍山文化の時代には既に定着していたことになる。

妲己後、秦まで赤化粧の資料は途絶えていた。漢代には唇脂を辰砂で作ると記載され、漢墓から唇脂が出土している。資料的には口紅の初登場である。

西晋の時、燕支の名が現われ、南北朝では臙脂と表記

されるようになった。唐の資料では臙脂を頬に使い、頬紅を臙脂と称し、口紅は唇脂と呼ばれ辰砂が使われた。また、紅白粉による化粧を紅妝と称し、紅と白粉の使い方で檀暈妝、桃花妝、飛霞妝に分け、無色の唇脂は防乾用に使われていた。

先に、燕支の産地を参考文献の記載に則って甘粛省焉支としたが、後漢および現代の中国地図には甘粛省にその名はなく、トルファンの西、ボステン湖畔に焉耆の地名があった。"耆"から老冠を省き肉月を付すと"脂"であるから、焉支より焉耆に魅力を感じる。

5・白化粧

前出の製陶文化はさておいて、白粉については、前二二〇〇年頃「夏王禹が作らせた」という記録が最も古かったが、周の文王説や殷の紂王説もあるので、遅くても前一千年頃には、白化粧が始まっていたのであろう。

その後、春秋戦国時代の鄭と楚で白粉を使用しており、魏代では『倭人伝』に白粉が記載されていた。晋代の書には「鉛粉は鉛丹より作る」と記され、唐代には白粉を紅に混ぜた紅妝があり、現代でも京劇にその面影を窺うことができる。紅を使わずに白粉だけの化粧を白妝と称し、米粉も白粉として使われた。

6・黄化粧

日本の化粧史には黄化粧は登場しなかったが、黄土地帯の古代中国人は、保護色として黄土を塗ったという。黄は中国の色、神聖な色であり、五帝の一人に黄帝の名もみられるので、呪術や権力の匂いを感じさせるが、それらを暗示させる黄化粧の記述はない。

遥か後世になり、南北朝時代に仏教が伝来すると、女性たちは金箔の仏像にあやかって顔を黄に染め始めた。これを額黄と呼び、遼・宋の頃まで残存した。

7・黒化粧

黒化粧には眉化粧と入墨がある。黒化粧を思わせる資料としては、北京原人の火の使用による炭と龍山文化の黒い釉薬があったが、後世の資料との間に時代的な隔たりがあるので、参考資料の範囲に止めておく。

眉化粧に関する初出の資料は、春秋戦国時代の鄭や楚の女性が黛を使用したという記録であり、秦の長眉がそれに続く。漢代の書に「眉を落としてから眉作りした」と記され、日本の眉化粧の原点を思わせた。また、漢墓から石黛と黛硯が出土している。

黒化粧ではないが、新朝後半に王莽に造反した赤眉は王莽軍と区別するために、眉を赤く塗って中国史に登場した。隋代にはペルシャ製の螺黛が現われ、以降の眉作りには螺黛が使われるようになった。

後漢以降、東晋、南朝、隋、それぞれの時代に流行した眉形がみられ、唐代の眉形をまとめた『十眉図』が残されている。『長恨歌』には粉黛が詠まれていた。

入墨については、戦国時代の越にその風習があったが、その後、宋末期の『水滸伝』に登場する豪傑たちが背中に文、あるいは額に処刑の金印が彫られているのをみるのみであった。

8・香り化粧と爪の化粧

香り化粧に関する記述は戦国時代の芳澤と漢代の香しい脂粉しか見当たらなかった。しかし、中国において芳香を漂わせる化粧がなかったとは思えない。日本古代で使われていた香料は全て中国由来の名称であることを思えば殊更である。

爪の化粧については、戦国時代の墓から爪を保護する目的の指套が出土し、隋墓からも発掘された。唐代に至ると、爪も美容の対象となり、爪を伸ばして彩色する風習が始まった。やがて明、清の時代には、装飾目的の指套を嵌めるようになった。

9・その他の化粧

身体の一部を欠損させる化粧に蹠足と去勢がある。纏足については本誌一一〇号で述べた。去勢については、これまでに触れていなかったので簡述する。

去勢の初めは刑罰であり、前一世紀に周礼の宮刑として始められた。後には去勢されたものを後宮に奉仕する役人に任用するようになり、宦官の制度が始まった。この時点で、去勢は刑罰目的から階層表示へ転化した。宦官は職務上、帝と接する機会が多く、ついには後漢の鄭衆のような権力者が現れ、政治を壟断するようになり、その代表として水滸伝の悪役・高求の名を挙げることができる。だが、宦官でも明の鄭和のような英雄もいたことを付け加えておく。

『立女図』にみられる靨鈿の起源は、前漢の頃、生理休暇届のような目的で后妃が標識を印したことから始まったという。この印を的といい、民間に伝播して面靨と呼ばれるようになったが、靨鈿の名称がいつ始まったかは不明である。

斜紅は魏の宮廷で始まった暁霞妝が民間に流布した化粧であるが、元以降の斜紅はみていない。そのほか、東晉の『女子箴図巻』には男性の化粧が描かれ、『長恨歌』に温浴が詠まれていた。唐・長安の盛り場には、アイシャドーを施した胡姫がいた。

なお、花鈿については本誌一〇九号で述べた。また、基礎化粧や洗浄化粧に関する資料は入手できなかったので割愛する。

参考文献

周汛、高春明、中国歴代婦女妝飾、三聯書店、上海学林出版、一九八八

後藤基巳ら、新十八史略、河出書房新社、一九九五

岡田英弘監、絵で見る中国の歴史第一巻、原書房、一九九五

貝塚茂樹、伊藤道治、古代中国、講談社学術文庫、二〇〇〇

中山喬央、まんじ、一〇五号、二〇〇七

(第五話に続く)

祝出版

日本で一番不況に強い男

瀧澤　中著

中経出版　1,200円

二宮尊徳の成功実学に学べ

扉を開けた光の鍵

——横浜開港時代を顧みて——

鍋屋次郎

日本人は僅かにいたが、同時期の世界情勢と開国を迫る列強諸国の、特にアメリカ・イギリス圏の言語を知るものは皆無の状況であった。

そのような日本に、安政六年（一八五九）十月十一日に一アメリカ人夫妻が神奈川に上陸した。その名前は、ジェームス・カーチス・ヘップバーン。夫人はクララ。彼は良く響く声で自分の名を「ヘバーン」と発音していたので、日本人は彼を「ヘボン」と呼んだ。

彼は日本の土を踏んでから八年掛かって、二万七百七十二語の和英辞典「和英語林集成」を編集・印刷発行した。彼の日本滞在経費は、当初アメリカの派遣ミッションから一部が支払われていたようであるが、殆どは彼自身がニューヨークで診療所を開いていたときの蓄えから賄っていたといわれる。

（一）扉を開けた人

安政五年（一八五八）六月十九日、攘夷の嵐が吹き荒れる中で、幕府はアメリカと日米修好通商条約を締結し神奈川の開港は翌年七月四日と定められた。

この直後、六月二十四日、安政の大獄が始まる。徳川斉昭　謹慎、徳川慶喜　登城停止、翌年四月には、鷹司政通・近衛忠熙　謹慎蟄居、水戸藩家老　安藤帯刀　拘禁、また十月には吉田松陰の処刑など、日本の国内情勢は幕府が攘夷の嵐を鎮めるのに躍起となっていたが、京、大阪を中心に嵐は吹き荒れていた。

二百五十年にわたる鎖国を続けた日本。長崎出島のオランダ商館と一部のオランダ人から西欧文明はかすかに入ってくるのみで、オランダ語を蘭学として学んでいた

この辞書の編纂・発行は日本が閉ざしていた西欧への扉を開け、西欧との距離は一挙に縮まり、それまでごく一部の学者が蘭学しか学んだことのない日本が、きわめて短期間に西欧文化を吸収して、日本の近代化を進めることができた。

その頃の日本は日米修好通商条約締結の安政五年から明治元年（一八六八）までの十年間は言わば内戦状態であった。それから西南戦争が終わる明治十年（一八七七）年末までの十年間は、廃藩置県・廃刀令など西欧に倣う社会体制作りへの十年であり、国家として西欧文化吸収の積極的具体策を行える状態ではなかった。

明治六年（一八七三）まではキリスト教禁教中であり、外国人が攘夷論に固まる浪士から命を狙われる時代に、ヘボンは七年間「日本語彙」の収集を行って、慶応二年（一八六六）十月上海に渡り辞書を印刷、慶応三年（一八六七）四月、印刷を終えて日本で発行した。

この和英・英和辞典ができたからこそ、西欧文化を、また世界情勢をまったく知らなかった日本人が、西欧の精神文化——思想——を取り入れることができた。この辞典こそが、閉ざされていた西欧と日本の扉を一挙に開けた「光の鍵」であった。この「光」は日本人を世界に向けて開眼、それも日本人の心の目を大きく開かせるものであった。

ヘボンは、一切無償で、この「光」を日本国と日本人に提供した。

これから、ヘボンの人となりと、「和英語林集成」編集発行までの労苦について考察することとする。

（二）ヘボンの略歴

本名はジェイムス・カーチス・ヘップバーンというが、日本ではヘボンと親しまれているため、本稿ではヘボンで統一する。

彼の略歴は次の通り。

一八一五年三月十三日生　両親は敬虔なキリスト教徒。
一八三一年—一八三二年
　この間のプリンストン大学での古典の学びが辞書編纂に役に立った。
一八三五年に文学修士の学位を贈られる。
一八三六年　ペンシルヴァニア大学で医学を学び、医学博士の学位を得る。
一八三八年　ペンシルヴァニア州ノリスタウンで医師開業
一八四〇年十月二十七日　結婚。ペンシルヴァニア州ノ

リスタウン・アカデミーで教師をしていたクラリッサ・リート（クララと呼ぶ）。二人は東洋宣教を決意する。

一八四〇年―一八四六年　宣教医として中国・極東に赴いた時代。ボストンを発ってバタビアへ。その後シンガポール、マカオ、アモイで過ごす。夫人が健康を害したため、一旦帰国した。

一八四六年三月一五日　約五年の東洋伝道を終わりニューヨークに戻る。

一八四六年―一八五九年　ニューヨークでの開業時代。この十三年間はニューヨークで医師を開業、名医とうたわれ順調な時を過ごすが、三人の子どもを猩紅熱や赤痢で天国に送った。

ニューヨークの新聞紙上でタウンゼント・ハリスが日本幕府を説得、日本が西洋文化とキリスト教に対して門戸を開く条約を締結し、横浜、長崎、函館に外国人居留地ができるとの情報を得て、夫妻は再び東洋宣教への情熱をかき立てられ、一八五九年（安政六年）四月二十四日、帆船サンチョ・パンザ号でニューヨークを出帆した。

一八五九年―一八九二年　日本で過ごした三十三年間。教師・医師・辞書編纂者・聖書翻訳者として大活躍。

一八九二年―一九一一年　ニュージャーシー州で晩年を過ごす

勲三等旭日賞　受賞

一九〇五年三月十三日、明治天皇は、在日中のヘボンの日本に対する精神面、教育面への貢献に報いるため、帰国してアメリカ在住のヘボンに対して、勲三等旭日賞を贈った。

（二）語彙収集と辞書編纂への信念

一八五九年十一月十八日に横浜に到着後、当時、オランダ領事の馬小屋として使われていた古い寺、成仏寺に旧友S・R・ブラウン博士夫妻と住んだ。

日常生活のため、日本人男子四人を召使いに雇った。雇用条件は食事持参、給与は一人一ヶ月二ドルであった。

ヘボンの外国でのキリスト教宣教についての考えは、その国の文字で聖書を印刷し、その国の言葉でキリスト教を語ることができなければ、宣教はあり得ない。また、そうしなければならない、という固い信念があった。

そのため彼は日本への船中で日本語を勉強し、世界で最初に出版された、プロシア人宣教師　カール・F・A・ギュツラフ（一八〇三～一八五一）訳の日本語訳聖書「約翰福音之伝」（ヨハネによる福音書・・新約聖書内）を読んでいた。

しかし、この訳本は、漂流漁民（注①）を日本語教師として作られたもので、すべてカタカナ書きであり、その漁民がキリスト教について全く知識がないから、訳そのものが適切な訳になっていない。

参考までに、その聖書訳と現在の口語訳聖書と比較してみる。

◇ギュツラフ訳日本語聖書

ヨアンネスノタヨリヨロコビ
ハジマリニ　カシコイモノゴザル、コノカシコイモノゴクラクトモニゴザル、コノカシコイモノハゴクラク。
ハジマリニ、コノカシコイモノ　ゴクラクトモニゴザル。

◇現代の口語訳聖書（新共同訳）

ヨハネによる福音書
初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。

漁民は「神は天国にあり、言は神と同じ」などと聞かされて、言を「カシコイモノ」と訳し、彼の仏教知識から神のいる天国は「ゴクラク」と表現したものと思われる。

（注①）一八三二年、愛知県小野浦の漁船が遠州灘で遭難。黒潮に流され乗組員十四名のうち三名が北米に漂着。ロンドンを経由してマカオにたどり着く。三名の名は、岩吉、久吉、乙吉　であり、マカオに滞在していたギュツラフがこの三人を保護して自宅に引き取り、彼等三人を日本語教師として新約聖書の「ヨハネによる福音書」「ヨハネの第一、第二、第三の手紙」を翻訳して、一八三七年にシンガポールで出版した世界で最初の日本語訳聖書である。

ヘボンは日本への船中でこの聖書を読みながら、日本到着後の日本語彙収集のため「コレハナンデスカ」という言葉を覚えたと言われている。

ヘボンは日本到着後、住まいとして宛われた神奈川の成仏寺を改修して住居としたが、やがて近くの宋興寺を借りて診療所を開設し、眼科中心に診療活動も行った。しかし、キリスト教禁教中であり、監視の目も厳しく、攘夷の志士たちの外国人殺害もあって、奉行所からの再三の勧告もあり、三年を経過した文久二年（一八六二）十二月も押し迫ってから安全な居留地三十九番に移転した。

ヘボンはどのようにして日本語彙を収集したのであろ

うか。

まず、日常接する日本人は雇った四人の召使いである。また、診療所に治療にやってくる農・漁民と町人であり、物珍しさからヘボンを見に遠くからやってくる見物人であった。

ヘボンは片っ端から「コレハナンデスカ」を連発して語彙を収集したに違いない。

考えられることは収集した語彙の全てが正式文章に記録できる「標準語」ではなかったと思われる。例えば、農民が治療代の代わりに、お礼として大根を持参した場合

ヘボン　「コレハナンデスカ」
農民　「デエコン」です

という会話があったとすると　ヘボンは大根を「デエコン」と記録する。

ヘボンは幕府から依頼されて九名の日本人武士の教育を任されていたことから、例えば武士の従者が野菜をヘボン邸に持ってきたとする。そのとき、ヘボンの「コレハナンデスカ」の問いに、武士が大根を「ダイコン」と答えた場合、先の「デエコン」と訳が二種類になってしまい、おそらくこのような「訳語の修正」作業もかなりあったものと想像される。

「和英語林集成」初版の集録語数は二万七百七十二語（更に巻末に英和語彙が一万三十語ついている）あり、一人でこれだけの語彙を集録する作業は言語に絶する労苦があったのではなかろうか。

完成までにヘボン来日後八年を要したことは、校正、印刷、製本期間などを考えても、「コレハナンデスカ」から始まる集録作業は七年以上要したものと思われる。

最初のうちは語彙の集録数ははかどったものと思われるが、後半は新しい集録は当然少なくなったのではなかろうか。仮に七年間毎日集録作業をしたと考えると、二万七百七十二語の集録には、一日も休むことなく毎日八～九の語彙を集録し続けなければならないこととなる。加えて、辞書に編纂するには言葉の定義付けと分類が必要になる。

ヘボンがこの想像に絶する作業を続け得たことについて、後に印刷のため上海に向かったヘボンの書簡の中に次のように記されている。

「七年間単語を収集し、それらを分類定義し、日本語の文法上の原則や慣用句に慣れるように努め、それは極めて骨が折れる仕事でした。・・・・・辞書編集こそ聖書翻訳の正しい出発点と申せましょう。日本語の十分な知識なくしては聖書を翻訳する十分な資格に欠けるところが多いからです」（高谷道男著　ヘボン　一一四頁）

とあり、ここに辞書編纂こそがキリスト教日本宣教の出発点であるというヘボンの信念が、筆舌を越える労苦を

支える全てであったと確信する。

ここに、日本語の文法上の原則や慣用句、という言葉が出てくるが、これらはそれなりの知識を持った日本人の協力が必要である。

それには、岸田吟香（注②）が元治元年（一八六四）から慶応三年（一八六七）上海での印刷終了までの四年間、ヘボンの辞書編纂に協力した。

横浜開港資料館にヘボンの「和英語林集成」原本とそれの複製が現在も保存されている。幾つかの「訳語」をコピーしてきたので一部を紹介する。

慈悲	Pity. Compassion.
貧苦	Poor and distressed.
不思議	Strange. Wonderful. Surprising.

これらの訳を見ると、現在の英和辞典の訳とまったく変わらない訳であり、その質の高さに驚く。

（注②）岡山県津山藩出身　嘉永三年（一八五〇）十七歳で江戸に出て津山藩儒昌谷精渓に入門し漢学を学び、やがて秋田藩邸・水戸藩邸にも出講するまでに頭角を現す。

元治元年（一八六四）三十一歳のとき、目を患い、ヘボンの診療所で治療を受ける。これが縁で、ヘボンが編集中の「和英語林集成」の編集を手伝い、かたわら英語を学ぶ。上海での印刷にも同行し、校正作業を行った。岸田吟香の協力により、ヘボンが集録した語彙の「日本語表現」が、適正かつ統一的な表現になったと考える。

（四）「和英語林集成」の印刷・製本・発行

「和英語林集成」の編集を終えたヘボンは、当時の日本には印刷製本技術がないため、印刷を上海のキリスト教長老派出版部の印刷所美華書院で行うため、慶応二年（一八六六）十月十八日上海に向かって横浜を出帆した。慶応三年（一八六七）、上海での印刷製本が終わり、日本で辞書の初版を発売した。辞書の印刷費、運送費に多額を要し、自分の旅費を賄うのが精一杯であった。辞書の値段は上昇し、販売業者と何冊も持っていた人たちを経て、明治三年（一八七〇）にはある書店で一冊三十二ドルであったが、その後増刷した普及版で一冊六十二ドルまで値が上がった。

辞書は明治五年（一八七二）に再版、明治九年（一八八六）に三版（注③）を発行した。このころになると英語を学ぶ者が数千人に上り、宣教師の数もおびただしく増加していたので発行部数は多く相応の利益も上がり、一部を横浜指路教会と明治学院に寄付した。

(注③) 横浜開港資料館に、同一語の初版・再版・三版を対比記録した辞書があり、版を重ねるにしたがって訳語が充実していることが分かる。

(五) 聖書の翻訳作業

この辞書の出現により、宣教師を派遣したミッションの所在地アメリカと日本が繋がった効果は計り知れないほど大きい。

日米修好通商条約締結後、北米を中心として多くのキリスト教宣教師が来日した。主な人たちを列挙すれば左の通りである。

安政六年（一八五九）十一月　J・Cヘボン
S・R・ブラウン
万延元年（一八六〇）四月　ジョージ・スミス
文久元年（一八六一）　J・H・バラ夫妻
明治二年（一八六九）　M・Eキダー
明治四年（一八七一）六月二十五日　M・Pプライン
L・Hピアソン
J・Nクロスビー
明治六年（一八七三）二月七日　N・ブラウン
明治十二年（一八七九）十二月六日　A・A・ベンネット
明治十三年（一八八〇）十月　O・ハジス

日本でのキリスト教解禁の日迄に聖書を翻訳しておくことの必要性を痛感していたヘボン達来日宣教師は、この「和英語林集成」の出版を期に、明治五年（一八七二）九月、プロテスタント宣教師達がヘボン邸に集まり、聖書翻訳事業に着手することを決め、翌明治六年（一八七三）のキリスト教解禁を機に、明治七年（一八七四）S・Rブラウン、ヘボン達が翻訳常置委員会を設置した。その後、多くの宣教師の協力を得て、明治十二年（一八七九）十一月三日に新訳聖書全巻の翻訳を完了し、翌年四月に出版した。

ヘボン達翻訳委員は、翻訳に当たり、高い教育を受けている人にしか理解できない擬古文体と、一般の人も分かる日常語との中間的文体を用いることを決めた。知識階級を満足させると同時に、一般の人々にも理解できる易しさをも兼ね備える中庸を得た文体とし、スタイルは文語体を用いた。日本人の協力者は、奥野昌綱（注④）、高橋五郎、三輪偽方、松山高吉等であった。（前掲「ヘボン」一四八頁）

ヘボンは後日の出版祝賀会席上において、奥野について「聖書の翻訳がこのようにできるほど日本語に通暁している米人宣教師はいない。日本人の協力者がいたからこそ今日を迎えることができた」、と絶賛している。

(注④) 奥野昌綱は文政六年（一八二三）生まれ。東京昌平橋学問所にて褒詞を受け、嘉永二年（一八四九）から明治元年（一八六八）まで東叡山輪寺に奉仕し、明治四年（一八七一）ヘボンなどに就きキリスト教を学び、明治五年（一八七二）七月、ブラウン博士より洗礼を受ける。その後晩年に至るまで多くの教会を牧会した。

これら聖書は我が国で印刷・出版された木版刷りの和綴じ装丁である。

その版下は奥野昌綱が書いたと伝えられている。美しい文字で書かれた奥野昌綱の版下による、ヘボン、ブラウンの木版刷りの版木と聖書は、東京銀座の日本聖書協会の図書館で見ることができる。

明治二十年（一八八七）年、ついに旧約聖書全巻の翻訳が完了した。ここに新旧約聖書全巻の日本語聖書が完成したのである。（注⑤）

(注⑤) 新旧約聖書の日本語版の頁数は、現在の日本聖書協会新共同訳聖書で、新約聖書が四百八十頁、旧約聖書が一千五百二頁（除く続編）であることから、新旧約聖書全巻の翻訳がいかに大変であったかをご理解いただきたい。

明治二十一年（一八八八）二月三日、東京築地居留地内の、首都圏最大のプロテスタント教会、新栄教会で開かれた聖書翻訳完成祝賀会は関係者で立錐の余地もなかった。

講談の上には日本語と英語の聖書が並びおかれ、ヘボンは翻訳常置委員会が聖書の原点であるヘブライ語にいかに忠実に訳したかを語った。

(六) 現代に生きる宣教師達の教育事業

日米修好通商条約締結後から明治初期に来日した宣教師によって行われた、数人の生徒数からスタートした教育事業の日本の教育界への貢献度は極めて高い。特に女子教育において顕著である。明治四年（一八七一）またはそれ以前に極めて小規模でスタートして、幾多の変遷を経て現存するいくつかの学校を紹介する。

横浜に来た宣教師達のミッションは全てプロテスタント系であることから、

関東学院
明治学院
捜真女学校
横浜英和女学院
横浜共立学園

フェリス女学校などがある。

（七）最後に

今年は横浜開港百五十年にあたり、市をあげていろいろな催しが行われている。

去る一月二十八日から四月十九日まで、横浜開港資料館を会場として「横浜開港と宣教師―翻訳聖書の誕生―」展が行われた。

そこには、「和英語林集成」初版本（一八六七）はじめ、幾多のヘボン書簡、宣教師達が私的に翻訳した聖書・讃美歌、ギュツラフ訳の聖書「約翰福音之伝」（新教出版社複製出版）、ヘボンの写真など百点以上の展示があり、江戸末から明治初年にかけてのキリスト教宣教を見ることができた。

横浜プロテスタント史研究会（筆者も会員）から昨年九月「横浜開港と宣教師たち――伝道とミッション・スクール」（横浜有隣堂発行）が出版され、宣教師が無償で、資金と教育の場所に苦労しながら、少人数から女子教育をスタートしたことが紹介されている。

以前からヘボンには惹かれるものがあり、横浜開港百五十年にあたって、自分なりにまとめてみようと思い立ったが、調べれば調べるほどヘボンの偉大さに胸を打たれる。

ヘボンはキリスト教宣教の手段として「和英辞典」編纂を己の使命としたものであるが、それを遙かに越えて、日本国と日本人に与えた「光の鍵」は大きく偉大であった。

参考・引用文献

ヘボン・・同時代人の見た・・　W・E・グリフス著　（株）教文館

ヘボン　高谷道男著　吉川弘文館

横浜開港と宣教師たち　横浜プロテスタント史研究会編　（株）有隣堂

横浜キリスト教文化史　横浜プロテスタント史研究会編　（株）有隣堂

ヘボンの生涯と日本語　望月洋子著　新潮選書

横浜開港時代の人々　紀田順一郎著　神奈川新聞社

日本史年表　歴史学研究会編　岩波書店

文化勲章に輝く

赤堀四郎博士の一生（十三）

松下魏三

二十一　窮乏のなかで優れた研究成果

終戦直後は物資が極端に不足していたので、赤堀博士と弟子たちは町の料理屋のごみ箱に捨てられていたカニやエビの殻をもらってきて、殻の中にあるキチン[註]という物質を塩酸で分解して甘い糖をつくろうと考えた。

数多くの実験をしてみたが分解してできた糖は甘みのないものであった。

今まで多くの実験に失敗しても研究の方法や過程を徹底して究明し、その原因をつきとめてきた赤堀博士は最終的には大発見につなげていく名人であったから、さらに研究を続け、殻の成分であるアセチルグルコサミンという糖から遺伝子の本体であり、遺伝子情報の担い手であるDNAと呼ばれるデオキシリボースを合成する新しい方法を発見し、その後一九五三年（昭和二十八年）には東京大学応用微生物研究所の教授を兼任することになり、一九五八年まで微生物を使ってタンパク質の合成の研究という重大な研究へと進展していった。

また、他の研究グループは戦時中使いきれなかった爆薬のピクリン酸や航空機用のジュラルミンなどの軍需用の物資の利用について研究しようと考えた。

そのなかで戦争末期に特攻用の飛行機につけるロケットエンジンの燃料に使った硫酸ヒドラジンという物質があまっていたので、これを使ってタンパク質の構造研究を進めようとした。

この硫酸ヒドラジンは水を加えると爆発的に分解し、

アンモニアを発生する強い酸化物質であるから、これを使ってタンパク質を分解し、アミノ酸の配列を調べ、タンパク質の構造を解明した「ヒドラジン分解法」を発見し、国際生化学会で発表し、画期的な方法として世界的に注目された。

この発見により赤堀博士は一九五五年（昭和三〇年）日本学士院賞を受賞した。

これらの研究は「タンパク質を構成するアミノ酸の結合状態に関する研究」で、赤堀四郎の名を世界の生化学会にいっそう有名にした偉大な研究であった。

（註）キチン
昆虫や甲殻類（エビ・カニなど）の外殻のなかに含まれるアセチルグルコサミンから成る多糖類

青の漂流（八）

宅見勝弘

八　沖縄戦『集団自決』（続き）

【前号までのあらすじ】

一八六九年（明治二年）、蝦夷地（北海道）白老の仙台藩元陣屋の近くのアイヌ集落で、アイヌ人夫婦と仙台藩士が斬殺された。その翌日、択捉島から帰還した支倉兵衛が現場に居合わせ、生き残ったアイヌの碧眼の幼女を保護した。幼女の手には犯人の物と思われる赤い花弁が残されていた。支倉は仙台に戻り、幼女を蒼と名付けて、育てた。成長した蒼は、両親の斬殺方法が生麦事件の殺害と同じ特異な剣術と気付いた。その後、蒼は結婚し、大津へ移った。大津で、ロシア帝国ニコライ皇太子が襲われる姿を目撃した。ニコライの碧眼が鮮血で覆われる姿に、蒼は白老の惨劇を連想した。ニコライ襲撃の犯人が西南戦争の官軍であったことから、白老の犯人が戊辰戦争の官軍ではないか、と連想した。その後、舅の高山左京が米比戦争の中、フィリピンで死亡した。蒼は長崎へ移り、安奈という女性と知り合った。安奈はロマノフ王朝の血を引き継いでいた。鹿児島へ移った蒼は、白老の花弁がハイビスカスとも呼ばれ、琉球の花・ハワイの花であることを知った。また、殺害の剣術が、野太刀自顕流の抜即斬であることを知ったのであった。その後、蒼は息子夫婦とともに沖縄に住むことになった。

蒼と優輔・安奈夫婦の三人が沖縄に移り住んで四年後の一九四一年（昭和十六年）十二月に、日本は真珠湾攻撃により第二次世界大戦に参戦した。

蒼の孫・武は帝国海軍の一人として従軍した。

武は出征前に鹿児島から沖縄に来て、蒼と優輔・安奈夫婦に会った。

国のために戦うと言った武は、優輔が外務省時代に居たフィリピンに出征することになった。武は軍人らしく勇ましくなっていた。

出征前の武は、鹿児島に美也子という女性と結婚の約束をしていることを明かした。戦争が激しくなっているので、武は美也子と入籍だけを済ませて、戦場へ向ったのであった。

美也子は妊娠しており、十月に子供が生まれる予定で

あった。

一九四四年（昭和十九年）十月二十五日、武のいる海軍の部隊は、フィリピンのレイテ島に出征した。

レイテ島は初めて特攻作戦が採用された戦場であった。武は神風（かみかぜ）特別攻撃隊の一員として、レイテ島沖のアメリカ艦船に自ら操縦する飛行機で体当たりして、戦死した。その日は武の二十五歳の誕生日であった。

新婦の美也子は、武の戦死が伝えられる前に鹿児島で男の子を出産した。武が戦死した日と同じ十月二十五日生まれであった。子供は昭と名付けられたが、昭の瞳も黒眼であった。

蒼と優輔・安奈夫婦は武の死亡を悲しんだが、悲しみに沈んでいる場合ではなかった。自分達の住んでいる沖縄へアメリカ軍が上陸するということで、自らの命が危機に瀕していたのである。

一九四四年（昭和十九年）十月にレイテ沖海戦で日本軍が敗北して、アメリカ軍の沖縄上陸が近づいてきた。沖縄戦は一九四五年（昭和二十年）三月二十六日に始まり、戦闘は六月二十三日まで続くのであった。

その前の四月一日にアメリカ軍は、沖縄本島の中西部で上陸を開始した。読谷村と嘉手納町の飛行場を占領し、四月五日までには中部の東海岸までを占領した。日本軍は沖縄本島を南北に分断される形になった。

四月三日には、沖縄中部に位置する越来村（ごえく）（現沖縄市）にもアメリカ軍による爆撃が始まっていた。蒼と安奈は他の住民と共に『ガマ』に逃げ込んだ。この時、優輔は那覇市の県庁に居て、蒼と安奈とは別行動になっていた。

ガマとは沖縄独特の鍾乳洞であり、アメリカ軍の爆撃に対する防空壕として使われていた。沖縄本島中部に在る越来村のガマは小さく、避難場所として不充分であった。

ガマに避難したのは百名ほどであったが、蒼のような年配の者や子供が多く、母親に抱えられた乳児も居た。

「食料も水も無い。このままでは何人かはガマを出て行かなければ、全員が飢え死にする」

ガマの中では食料も飲料水も不足していた。

「私達は民間人だ。せめて投降の方法でも教えて下さい」

地元の小学校の校長先生が兵士に依頼していた。

「『生きて虜囚の辱を受けず』というのは、兵士も民間人も同じだ」

当時の国際法でも捕虜になるのは軍人だけで、民間人は保護されることになっていた。保護されるとしても、住民も捕虜になるのは恥辱であると教えられていた。住民に対して投降の方法も教えなかった。

小学生になったくらいの女の子がビラを持っていた。ガマに入る前に拾ったということだった。

『沖縄の人民へ！』で始まるビラは、米軍が民間人に投降を呼びかけるもので、安全を約束していた。

兵士は女の子からビラを取り上げた。

「こんなビラを信じるな」

彼は、簡単に眼を通すと、破り捨てた。

「鬼畜米英に捕まれば、獣のように扱われて残酷に殺されるんだ。中国では民間人も軍人も関係が無かった。民間人といっても日本軍と見たら襲ってきたし、日本軍も民間人には容赦なかった」

六十歳過ぎの男性が怒鳴った。彼は日中戦争に従軍し、年齢のため退役して沖縄へ戻ってきた元軍人ということだった。

「米軍に殺されるよりは、日本軍の手によって死んだ方がいい」

「馬鹿な事を言うのでない」

兵士が諭すように言った。

「投降したからといって、殺されるとは限らないと思いますわ」

蒼も落ち着かせようとして発言した。

蒼は愛媛県に居た時、日露戦争の捕虜の待遇を思い出した。日露戦争が続いているにも関わらず、捕虜達は観光で温泉旅行に行っていた。日露戦争当時でも投降した者に対しては寛大な処置をしている。

アメリカ兵に捕まれば、なぶり殺しにされるといった噂が広まっていくことに蒼は危惧を覚えていた。

日露戦争で戦場に行ったわけでもない蒼の言葉は、実際に日中戦争で従軍した退役軍人には説得力は無かった。

ガマの中の殺伐とした雰囲気は変わらなかった。

「兵士さん。それでは私達が米兵に捕まりそうになったら、その前に皆で自殺します。その為の手榴弾を分けて下さい」

校長は軍人に懇願した。

「成人一人に手榴弾を一つずつ渡しておく。あくまで米軍に攻められた時に反撃するためのものだ」

軍人が手榴弾を手渡した。

「助からないと思ったら、これで天皇陛下万歳を叫んで、死ぬんだ」

一人の老人が呟いた。

人々は現地の沖縄の言葉で不安そうに囁いていた。

「現地語を使うと間諜と看做すという、軍の方針が出ている。方言は使わないで欲しい」

軍人が住人に命令をした。間諜とはスパイのことである。

沖縄の言葉を使っただけで、間諜というのは酷い、と蒼は心の中で思った。

「間諜というのなら、この二人は鬼畜米英の手先ではないのか」

先ほどの退役軍人が言い出した。空爆で冷静さを失っ

ている様子であった。
「こんな碧い眼は鬼畜米英にしかいない」
彼は蒼の瞳を指差して怒鳴った。蒼の瞳は年齢と共に、殆ど黒眼と見えるくらいに色素が沈着していたが、生来の碧眼であることを見付けたのであった。
退役軍人の顔は白老で自分を襲った武士と同じような形相をしているように、蒼は感じた。
（碧眼は災いを招くのだろうか）
先ほどの捕虜についての意見の違いが反感を生んだようであった。
安奈が蒼とその男性の間に割って入り、仲裁しようとした。
「この女は黒眼だが、顔容は米英そのものでないか」
彼は安奈を指差して、叫んだ。安奈が仲裁に入ったことが逆効果になった。安奈は黒髪黒眼であったが、欧米人の容姿をしていた。
ガマの中はパニック状態に陥っていた。アメリカ兵に捕まり残酷に殺されるか、このまま隠れて飢え死にするような死に直面して、正常な神経は失われていた。
「私達がこのガマから出て行けば、混乱は収まると思います」
蒼は提案して、安奈に同意を求めた。
「一キロほど南に、ここより小さいガマが在ります。二人であれば隠れる頃ができます」
安奈も兵士に向かって言った。
「もし、米兵に捕まったら、どうする。俺達の隠れ場所が知られるぞ」
彼は尚も不審そうな眼を向けた。
「その時は偽の隠れ場所を伝えます」
安奈が咄嗟に答えた。
「彼女達が間諜だとしても、反間として使えば良いではないか。殺す等と言うのではない。仮に捕まっても偽情報を流すのであれば、凌ぐことができる」
反間というのは二重スパイのことである。詭弁のようであったが、結果的に蒼たちが救われることになった。
兵士の言葉に退役軍人は黙り込んだ。
「このガマから出るのは危険だが、食料も水も少なくなって、どうしようもない」
兵士は申し訳なさそうに言った。
実際にいつ砲弾が降り注ぐが分らない外へ出るのは、ほとんど自殺行為に近かった。
蒼と安奈は追い立てられるようにしてガマを出た。二人は南へと向かって歩き出した。ガマに逃げ遅れた人の死体が散乱しており、中には二人が見知った死体もあった。
「米軍機だわ」
前方の遠くの雲間を安奈が指差すと、数機の戦闘機が飛来するのが、蒼にも見えた。

越来村に隣接する読谷村の方角では、アメリカ軍の爆撃が暴風雨のように見えていた。そして、暴風雨は蒼の居る越来村の方へ近付いてきた。
木々の間に身を隠した二人を少し逸れるように、砲撃の嵐が通り過ぎて行った。二人が歩いていた場所が住民が避難するような場所でなかったのが、結果的に標的から外れたのかもしれなかった。
暫くすると、後方から激しい爆発音が聞こえてきた。最初はアメリカ軍が空襲をしてきたのかと蒼は思った。
蒼が振り返ると、彼女達が今までにいたガマがあったと思われる場所が爆発していて、噴煙を上げていた。
爆撃では無く、ガマの中に隠れていた人が手榴弾を爆発させ、集団自決を図ったようであった。
「兵士が住民達に強制して集団自決させたのかしら」
安奈は独り言のように言った。
「兵士は、自分達が守るので自決を止める様に言っていたわ」
蒼が答えたが、軍人による強制があったかのか、二人には分からなかった。
「敵機が近付いてきたので、もう助からないと思ったのかもしれないわ」
多数の米軍機を見て狼狽した人が、自暴自棄になり集団自決を図った可能性が有った。
「私達が未だガマに残っていたら、一緒に死んでいたかもしれないわ」
もし、彼女達が抜け出さなければ、一緒に爆死したかもしれなかった。その意味では、追い出されたことで、命を繋げたことになった。
また米軍機が上空を飛来すると、ビラが舞い落ちてきた。
蒼はビラを拾い上げた。『生命を助けるビラ』と日本語で書かれていた。
ガマで女の子が拾ったビラとは別のものであった。
アメリカ軍は沖縄用に十二種類のビラを作成していたのであった。
蒼は安奈に言い聞かせるように読み上げた。
『一、此のビラに書いてある方法通りにする人はアメリカ軍が必ず救けます。二、そして国際法によって良い取扱ひ、食物、着物、煙草、手当等を与えます。』
アメリカ軍は爆撃と平行して、ビラの他にも日本語新聞などをばら撒き、心理作戦を展開していた。
民間人の上に砲弾を打ち続けながら、一方で投降を呼びかけるビラを撒いているのは、何となく愚弄されているように、蒼は感じた。
それでも、蒼と安奈はビラを持ったまま、彷徨うように南のガマへ向けて歩いていった。
防空壕の爆発から、さらに二時間ほどが経過した。

「フリーズ（動くな）」

突然、アメリカ軍の兵士が現れ、二人に銃口を向けた。その兵士は、蒼の碧眼と安奈の容姿を見ると、銃口を下げた。そのアメリカ軍の兵士は白人で碧眼であった。

蒼は自分の碧眼が自分達の命を救ったような気がした。

二人はアメリカ兵にビラを渡した。アメリカ兵は英語で、二人に付いて来る様に命令した。蒼と安奈が流暢な英語で答えたことに、アメリカ兵は警戒心を解いたようであった。

アメリカ兵に捕まれば殺される、と日本兵に言われていたが、二人とも逃げる意志を持っていなかった。

アメリカ軍の捕虜になるよりも、日本兵と行動を共にした方が、生き残る可能性が低いと思っていた。

二人は一緒にトラックの荷台に乗せられ、アメリカ軍が設営した民間人収容所に送られた。男性は褌一枚の裸にさせられていた。

蒼と安奈は英語が話せたので、収容所ではアメリカ兵の雑役をさせられることになった。

四ヶ月して、日本がポツダム宣言を受諾した後、二人とも無事に開放された。

那覇市に行っていた優輔とは、再開することは無かった。空襲に遭い、死亡したものと思われた。

沖縄戦争による全死者数は二十万人とも言われており、その約半数が沖縄の住民であった。

九　与那国島（よなぐにじま）・百年目の真相

第二次世界大戦が終わってから、二十二年が経過した。

一九六七年（昭和四十二年）になり、蒼は百歳の誕生日を家族の皆から祝ってもらった。

もともとアイヌの孤児なので、正確な誕生日は分からない。しかし、便宜的に明治の元号に合わせて、年齢を数えていた。

明治が続いていると明治百年になるので、紀寿（百寿）を祝ったのである。

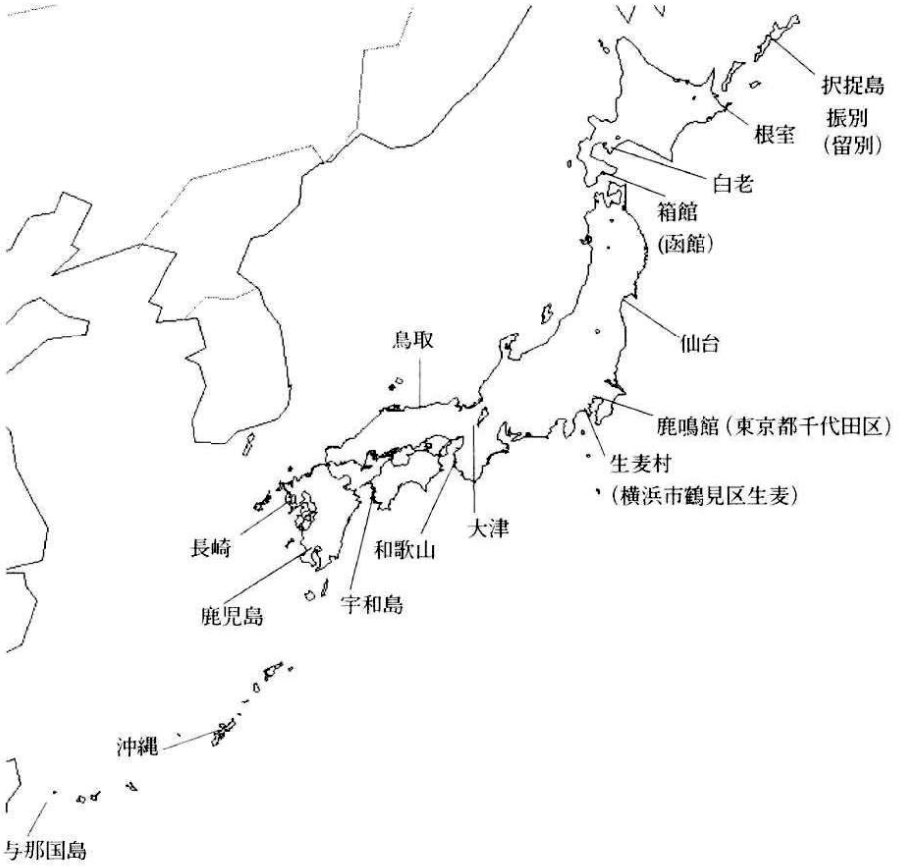
「沖縄は長寿の土地なので、蒼さんも此処の環境が合っているでしょう」

沖縄は百歳以上の人口が全国で最も多い県である。百歳以上の人が近隣に居たのであった。

沖縄が日本に返還されるのは、この五年後の一九七二年である。当時はアメリカの統治下であった。アメリカ軍の下の琉球政府で、日本政府と別個の行政組織であった。一九六三年から十年間は、裁判も陪審制度が採られていた。

沖縄で初めて琉球政府の長を住民選挙で選ぶことが決まる一九六八年は翌年のことであった。

当時の沖縄は、通貨が米国ドルであった。本土と沖縄との渡航にはパスポートが必要で入国審査もあった。



＜関連する人物＞

玉蟲左太夫(1823-1869)	仙台藩佐幕派　遣米使節団
陸奥宗光(1844-1897)	日清戦争時の外務大臣
海江田信義(1832-1906)	生麦事件の当事者 貴族院議員
高橋是清(1854-1936)	第20代内閣総理大臣
犬養毅(1855-1932)	第29代内閣総理大臣
ニコライ2世(1868-1918)	ロシア帝国最後の皇帝
アナスタシア(1901-1918)	ニコライ2世の第4皇女
奈良原喜左衛門(1831-1865)	生麦事件の当事者
奈良原繁(1834-1918)	第4代沖縄県知事 奈良原喜左衛門の弟

＜参考年表＞

1860年（万延元年）	日米修好通商条約批准書交換
1862年9月（文久2年8月）	生麦事件
1891年5月（明治24年5月）	大津事件
1917年3月（大正6年3月）	ロシア革命（二月革命）
1932年5月（昭和7年5月）	五・一五事件
1936年2月（昭和11年2月）	二・二六事件
1937年7月（昭和12年7月）	日中戦争開戦
1939年9月（昭和14年9月）	第二次世界大戦開戦
1941年12月（昭和16年12月）	太平洋戦争開戦
1945年3月（昭和20年3月）	沖縄戦米軍上陸
1945年8月（昭和20年8月）	太平洋戦争終戦
1972年5月（昭和47年5月）	沖縄返還
1991年12月（平成3年12月）	ソビエト連邦崩壊

『青の漂流』は後1回（か2回）で連載を終了し、次に『金銀妖眼』という短編ミステリーを予定しています。

還暦からの考古学（十七）

三角縁神獣鏡（さんかくぶちしんじゅうきょう）に対する考え方の変化（その十一）

中山喬央（たかひろ）

中国大陸の銅

銅鉱の地質

中国における銅鉱の地質は①岩漿（マグマ）分泌による鉱床②接触鉱床③溶液沈澱による鉱床と④水成岩鉱床の四種類に大別されます。

岩漿分泌による鉱床には、塩基性の岩石と、酸性かまたはアルカリ性酸性両性の岩石があります。前者は雲南貴州両省の境界地帯にある二畳紀地層の銅鉱で、後者は河北、江西、福建、浙江各省に散在します。しかし何れも小規模なものです。

接触鉱床には花崗岩接触帯、正長岩または閃長岩接触帯、輝長岩接触帯のものがあります。花崗岩接触帯の分布がやや広いのですが、これも大して重要なものではありません。

溶液沈澱による鉱床は広範囲にわたり、重要な存在です。

晶質片岩との置換沈積によるもの、石灰岩との置換沈積によるものと、砂岩及び泥板岩との置換沈積によるものとの三種類があります。

水成岩鉱床は、単に地質学上の研究価値があるだけのものです。雲南貴州両省では三畳系の砂岩か、二畳系及び三畳系の岩層の上に堆積し、若干の孔雀岩を含んでおります。

銅鉱の分布

中国における銅鉱は埋蔵量と比べますと、分布地域が広大です。

このなかで銅鉱が集中しているのは雲南、貴州、四川の三省です。

雲南地区の銅埋蔵量は一〇〇万トン以上と考えられていますが、会沢、巧家、永勝、易門等に銅鉱が存在し、特に著名な鉱山として、南会沢県・東川銅山があります。

雲南省について埋蔵量が豊富なのは貴州省、四川省の両省で、何れも一〇万トン以上が見込まれています。銅鉱としては貴州省の大定、威寧、四川省の彭県、会理、西昌、越雋、栄経、天全等が有名です。

この他著名な銅山としては、吉林省の盤石、延吉、遼寧省の本渓、復県、安東、山西省の聞喜、垣曲、湖北省の大冶、陽新、竹山、隕県、安徽省の銅官山等があり、更に湖北、江西、山東、河北、浙江、福建、陝西、内蒙古、チベット、寧夏の各省、各自治区にも銅鉱の埋蔵が見られます。

錫鉱の分布

中国はマラヤ、インドネシア、ボリビアに次ぐ世界有数の錫の産出国です。

中国における錫鉱の分布は東南地区すなわち雲南、広西、湖南、江西、広東の四省一自治区に限定されています。

主要産地は雲南省の箇旧で年産一万トン以上の錫を産出し、採掘は元代に始まったといわれています。

次いで広西自治区の富川、賀県、鐘山、恭城、南丹、河地、全県等が著名で、年間三五〇〇トン以上に達しております。

この他、江西省の大余、広東省の紫金、恵陽、化県、陵水、揭陽、電白、東莞、雪渓、湖南省の江華、臨武、常寧、柳県等があります。

鉛鉱の分布

鉛と亜鉛と銀は、同一地層から産出します。

中国の鉛鉱でも必ず亜鉛と銀と一緒になっています。ただ地質が同じでないため、鉛と銀、亜鉛の比率が若干異なります。

中国の鉛には①太古変質岩に産出するもの②石灰岩に生じるものと③火成岩に出るものとがあります。

太古変質岩鉛鉱

河北省、山西省の太古変質岩鉛鉱は、銀の割合が高く、鉛及び亜鉛の産出は少量です。河南省の盧氏県、山東省の膠州、河北省の興和県のものも同様に銀の割合が高く、遼寧省の蓋平県及び隆化県の鉛鉱も同様な傾向を示しています。

石灰岩鉛鉱

中国の主要な鉛鉱はみな石灰岩層から産出されます。代表的な鉱山は、湖南省常寧県の水口山と、雲南省東川県の鉱山廠です。しかしこれらは亜鉛鉱の比率が鉛鉱を

上回っています。

その他湖北省の興山県、湖南省の叙浦県、臨湘県、彬県、汝城県、四川省の会理県及び河北省の活県、張北県、豊鎮県、遼寧省の桓仁県で産出します。

火成岩鉛鉱

浙江省の臨海県、湯渓県、永嘉県、福建省の寧徳県、永泰県、びん侯県、光沢県及び遼寧省桓仁県の鉛鉱がこれに属します。

二里頭遺跡

『中国大百科全書・考古学』一一八頁には次の様に紹介されています。

「二里頭文化の標識遺跡である。河南省偃師県二里頭村南に位置し、北に洛河を臨んでいる。

放射性炭素年代によれば二里頭文化の年代は、BC1900～1500年である。遺跡の面積は3平方K米、二里頭文化の上層には、商代二里岡期（鄭州商代遺跡と同時期）の文化層と漢代の文化層があり、下層には廟底溝二期文化と仰韶文化の堆積がある。ただし二里頭文化以外の遺構と遺物は全てとても少ない。

二里頭文化の遺跡として検出されたものは、宮殿建築の基礎と、工房遺構、一般住居、陶器窯、貯蔵穴、墓等である～」（筆者訳）

二里頭遺跡出土銅器鉛同位体比分析結果

次に同遺跡出土銅製品のうち十三点について鉛同位体比の分析をした結果が報告されておりますので、お知らせします。

先ず時期区分として、夏の時代から商時代の早期までの五段階とします。其の一方で銅、錫、鉛の含有比率により純銅、銅と錫、銅、錫、鉛の三つに区分します。

純銅は銅の比率が九四％以上で、錫と鉛はそれぞれ二％以下のものを指します。銅と錫は、銅が八〇％～九〇％台、錫は四・一％～十五・四％、鉛が一％台のものです。銅と錫、そして鉛を加えたものは、銅が六二・八％～九〇・四％、錫が五・〇％～十三・九％、鉛が四・六％～二六・七％のものです。

純銅製品は六点、銅と錫の合金が三点、銅と錫・鉛の合金が四点、合計十三点です。

期別に鉛同位体比により鉱石の産出鉱山を考えてみる事にします。鉛同位体比指数は参考文献『保存科学第38号』105頁の図7化学組成と鉛同位体比との関係という鉛同位体比の成分を表すとされているA式図から算出されたものです。

Ⅱ期の純銅製品は三点です。207/206が0.84、208/206

が2.07のものは、419朝鮮半島慶尚北道・第二蓮花鉱山の0.8359と2.0777が近似値を示しております。次に0.85と2.10のものは、218浙江省・五部鉱山と222江西省・漂塘鉱山の平均値0.8468と2.1002が近く、0.86と2.11のものは、210甘粛省・鄧家山鉱山の0.8658、2.1169が符合します。

Ⅱ期の銅と錫製品一点について説明します。0.92、2.22でこれは202遼寧省・錦西鉱山の0.9256、2.2219と一致します。

次にⅢ期の製品二点について述べます。純銅の0.86、2.11はⅡ期の純銅に数値が等しいものがありますが、同様に210甘粛省・鄧家山鉱山の数値と符合します。一方銅と錫の方は、0.89、2.16で、こちらは217江蘇省・棲霞山鉱山の0.8903、2.1687が一致します。

Ⅳ期は七点です。先ず純銅製品が二点あります。

一点は0.92と2.20を示しますが、これは202遼寧省・錦西鉱山の0.9256と2.2219か、それと213山東省・香寄鉱山の0.8909、2.1890の平均値、0.9082と2.2054が最も近く、今一つの0.85、2.10はⅡ期の純銅製品にも同数値のものがありましたが、同様218浙江省・五部鉱山と、222江西省・漂塘鉱山の平均値、0.8468と2.1002が最も近い指数となります。

銅と錫製品の合金の指数は、0.92と2.21で、これは202遼寧省・錦西鉱山の0.9256、2.2219が最も近いものとなります。

最後に銅と錫及び鉛の合金である所謂青銅製品は四点を数えますが、0.89、2.16のものは、217江蘇省・棲霞山鉱山の0.8903、2.1687と符合し、0.92、2.20のものは、純銅製品で同じ指数のものがありましたが、同様202遼寧省・錦西鉱山の0.9256と2.2219か、それと213山東省・香寄鉱山産出鉱石の合計指数、0.9082と2.2054が最も近いものです。また0.92、2.21の指数を持つものは銅と錫の合金にもありましたが、これは同様に202遼寧省・錦西鉱山の0.9256、2.2219が最近接値となります。最後は0.94、2.25の製品ですが、これに最も近いものは、202遼寧省・錦西鉱山の鉱石を三分の二、204遼寧省・柴河鉱山の鉱石を三分の一混合した指数、0.9489、2.2419ということになります。

このように二里頭遺跡出土の銅製品は、時期毎に合金の比率が変化を示し、純銅から銅、錫の合金、そして銅、錫、鉛の所謂青銅製品へと変化をしていくようです。その一方で、銅鉱石の供給鉱山は遼寧省を中心に、東は朝鮮半島、西は甘粛省、南は山東、江蘇、浙江、江西と一部を除いて中国大陸東北部への集中傾向が見られるようです。

泉屋博古館所蔵、中国古代青銅器の鉛同位体比

次に商時代（二里頭後期、紀元前十七～殷墟期、紀元前十一世紀）西周時代（前十一世紀～前七七一年）春秋時代（前七七一年～前四五三年）戦国時代（前四五三年～前二二一年）の中国青銅製品の鉛同位体比により、開発されていた鉱山を検討してみます。

商中期（二里岡期、前十六～前十四世紀）

●測定番号 HS033 平底爵（爵：酒器。三足で深い筒形の身をもち、口に柱が付く）
206pb/204pb 22.454、207pb/206pb 0.7183、208pb/206pb 1.9227
（以下 206pb/204pb、207pb/206pb、208pb/206pb を省略）
これと最も近い指数はバイカル湖付近の 21.918、0.7342、1.9169である。

●測定番号 HS034 古式觚（觚：酒器。口がラッパ状に大きく開き「八」字状にふんばる高い圏足をもつ）
15.332、0.9883、2.2996
これは 204遼寧省・柴河鉱山の 15.300、0.9957、2.2820が近い。

商後期（殷墟期、前十四～前十一世紀中頃）

●測定番号 HS002 亀文尊の底部より破片（尊：酒器。口がラッパ状に大きく開き、高い圏足を持つ器）
18.547、0.8442、2.0845
これは 222江西省・漂塘鉱山の 18.694、0.8421、2.0894と 223湖南省・水口山鉱山の 18.412、0.8496、2.0989の平均値である 18.553、0.8458、2.0941が符合する。

●測定番号 HS003 亀文尊の口縁裏・外側錆
23.426、0.7004、1.8903
バイカル湖付近の 21.918、0.7342、1.9169が最も近い指数である。

●測定番号 HS004 亀文尊の内側錆
23.387、0.7010、1.8911
これは前述の測定番号 HS003と指数が極めて近く、これもバイカル湖付近の鉱山が最も接近した指数となる。

●測定番号 HS005 亀文尊の内側錆
21.543、0.7483、1.9572
これはバイカル湖付近の鉱石に 236雲南省・会沢鉱山の 21.003、0.7571、1.9696を等分に混合した 21.460、0.7456、1.9432が、かなり近い。何れにしても測定番号 HS005の三つの指数が全てバイカル湖周辺と 236雲南省・会沢鉱山両者の指数の中に入るので、南と北の双方の鉱山の鉛が使用されていたと考えたい。

●測定番号 HS006 亀文尊の口縁部錆
23.412、0.7006、1.8906
GJ—2北海道・広尾の 21.755、0.7313、18.808とバイカル湖付近の 21.918、0.7342、19.169の数値が最も近いが三つの指数は何れも符合せず、測定番号 HS003、HS004と共に鉱石の産出鉱山を決めることはできない。しかし他の製品にバイカル湖周辺の鉱山と符合する物があるので、該地の鉱山の鉱石で、未測定のものを使用した可能性が高い。おそらくそれらは中国中原の穀物とか工業製品を交易する見返り品としてもたらされたものであろう。

●測定番号 HS025—1 兕觥（兕觥：酒器。横断面が楕円形で口の一端に大きな注口があり、反対側に把手がついた器）
22.039、0.7281、1.9137
これはバイカル湖付近の 21.918、0.7342、1.9169が符合する。

●測定番号 HS025—2 兕觥
21.993、0.7294、1.9161
これもバイカル湖付近の 21.918、0.7342、1.9169が符合する。

●測定番号 HS030 鴟鴞卣（卣：酒器。胴が強く張り横断面が楕形をした蓋付きの壺に大きな提梁が付いた器）
22.170、0.7252、1.9129
これもバイカル湖付近の 21.918、0.7342、1.9169が近い。

●測定番号 HS031 鴟鴞卣
21.838、0.7335、1.9221
これもバイカル湖付近の 21.918、0.7342、1.9169が近い。

●測定番号 HS035 亜丙爵（爵：酒器。三足で深い筒形の身をもち口に柱が付く）
18.500、0.8457、2.0926
これは 225湖南省・水口山鉱山の 18.493、0.8473、2.0937と指数が一致する。

●測定番号 HS036 宰こ角（角：酒器。三足で深い筒形の身をもつ）
16.376、0.9866、2.2975
これに最も近いのは、204遼寧省・柴河鉱山の 15.300、0.9957、2.2820と 401咸鏡北道・検徳鉱山の 15.387、0.9889、2.2660である。しかし何れも 206/204の数値が異なる。但し遼寧省にも朝鮮半島にも 206/204の数値が 17.0台で、混合すれば近づけることのできる鉱山があるので、これは中国東北地方から朝鮮半島にかけての鉱山の鉱石を使用したものと考えることができる。

●測定番号 HS037 癸觶の蓋（觶：酒器。頚と胴の境界に段がなく、頚がややすぼまり腹部が丸く膨らんだ形の器）
20.920、0.7604、1.9727
バイカル湖周辺の 21.918、0.7342、1.9169と 414慶

尚北道・第一蓮花鉱山の19.324′ 0.8172′ 2.0271を等分に合金した20.621′ 0.7757′ 19.720と′ 同じくバイカル湖周辺と416慶尚北道・第一蓮花鉱山との平均値20.982′ 0.7636′ 1.9391が最も近く、バイカル湖周辺の鉱石と、朝鮮半島の鉱石の合金を使用した可能性が高い。

●測定番号HS041癸觶の本体圏足

21.719′ 0.7373′ 1.9273

これはバイカル湖周辺の21.918′ 0.7342′ 1.9169が指数としてかなり近い。

●測定番号HS045鳳柱斝（斝：酒器。口下から腹下部に大きな把手がついた三足の器）

23.175′ 0.7068′ 1.8769

206/204はバイカル湖付近の数値21.918が中国大陸、朝鮮半島、日本列島の鉱石測定値のなかでは最も高く、207/206はGJ—2北海道・広尾鉱山の0.7313が最低、208/206は同じくGJ—2北海道・広尾鉱山の1.8808が最低である。HS045の三つの指数は何れも既存の測定値外の数値を示しており、特に206/204の数値が乖離している。しかし他の青銅製品鉛同位体比指数から総合的に判断すればこれはバイカル湖周辺の未測定鉱山の鉱石が使われていると考えることができる。

●測定番号HS063犧首方尊

22.143′ 0.7253′ 1.9101

これはバイカル湖周辺の21.918′ 0.7342′ 1.9169がかなり近い。

●測定番号HS064筒形卣

21.985′ 0.7294′ 1.9155

これはバイカル湖周辺の21.918′ 0.7342′ 1.9169と符合する。

●測定番号HS066ほう形卣

21.873′ 0.7326′ 1.9201

これもバイカル湖周辺の21.918′ 0.7342′ 1.9169と符合する。

●測定番号HS069斜格乳文簋（簋：食器。身の深い圏足付丸鉢で穀物を盛る器）

21.876′ 0.7328′ 1.9210

これもバイカル湖周辺の21.918′ 0.7342′ 1.9169と符合する。

●測定番号HS071有肩尊

22.245′ 0.7298′ 1.9829

これもバイカル湖周辺の21.918′ 0.7342′ 1.9169が最も近いが、206/204の数値が若干離れており、同地域における未測定鉱山の鉱石も使用していると考えられる。

商末周初時代（紀元前十一世紀中頃）

●測定番号HS048斜格乳文簋

18.644′ 0.8400′ 2.0799

222江西省・漂塘鉱山の18.694′ 0.8421′ 2.0894と228湖南省・宝山鉱山の18.614′ 0.8442′ 2.0945′ 及び422慶尚北道・第二蓮花鉱山の18.893′ 0.8330′ 2.0635の三つの鉱石を等分に合金した18.733′ 0.8397′ 2.0824が符合するので、中国大陸と朝鮮半島双方の鉱石が使用された可能性が高い。

●測定番号HS068饕餮文円鼎（鼎：食器。耳が二つ付いた三本足の鍋で、肉や骨を煮てスープをつくり温めるための器。周代においては身分により所持できる個数が定められ、支配権など権力を象徴する道具として重視された）

18.413′ 0.8482′ 2.0947

これは224湖南省・水口山鉱山の18.504′ 0.8481′ 2.0960が符合し、特に207/206の数値が一致している。

西周早期（紀元前十一世紀～十世紀）

●測定番号HS007刺けん鼎

17.708′ 0.8787′ 2.1514

これは201遼寧省・青城子鉱山の17.836′ 0.8745′ 3.1384と403朝鮮半島平安南道・三徳鉱山の17.516′ 0.8916′ 2.1637の平均値′ 17.676′ 0.8830′ 2.1510が符合する。特に208/206の数値が一致している。

●測定番号HS026象文兕觥

21.421′ 0.7471′ 1.9427

これはバイカル湖周辺の21.918′ 0.7342′ 1.9169と236雲南省・会沢鉱山の21.003′ 0.7571′ 1.9696の平均値′ 21.460′ 0.7456′ 1.9432が符合し、特に208/206の数値が一致する。

●測定番号HS027兕觥

17.947′ 0.8695′ 2.1213

215河南省・桐柏鉱山の17.934′ 0.8662′ 2.1278が符合する。

●測定番号HS028方彝（方彝：酒器。圏足を持った直方箱状の身に、大きな屋根形の蓋がついた器）

18.323′ 0.8543′ 2.1074

230貴州省・菜園子鉱山の18.408′ 0.8547′ 2.1103が符合する。特に207/206の数値が一致している。

●測定番号HS047戻侯旨鼎

17.482′ 0.8887′ 2.1662

217江蘇省・棲霞山鉱山の17.440′ 0.8903′ 2.1687が符合する。

●測定番号HS049白簋の圏足

21.595′ 0.7409′ 1.9312

バイカル湖周辺の割合を二′ 236雲南省・会沢鉱山を一とした21.613′ 0.7418′ 1.9344と符合する。

●測定番号HS053父丁罍（罍：酒器。頸が短く強く肩が

張り、底に向かってすぼまった胴をもつ大型器)

17.438′ 0.8900′ 2.1682

217江蘇省・棲霞山鉱山の17.440′ 0.8903′ 2.1687と三指数共一致し、当該鉱山の鉱石が使用されたことは間違いないものと思われる。

●測定番号HS067 日癸罍

19.830′ 0.7960′ 2.0259

これはバイカル湖周辺の鉱山の鉱石と201遼寧省・青城子鉱山の鉱石を等分に混合した19.877′ 0.8043′ 2.0276が符合する。

西周早期末時代(紀元前十世紀初頭)

●測定番号HS070 井白甗(甗・食器。鬲の上に一対の把手付の甑をのせた穀物などを蒸す為の器)

18.063′ 0.8636′ 2.1253

これは211甘粛省・鄧家山鉱山の18.059′ 0.8662′ 2.1184が符合する。特に206/204の数値が一致する。

西周初期時代(紀元前十世紀)

●測定番号HS008 見卣の破片

18.103′ 0.8603′ 2.1143

これは211甘粛省・鄧家山鉱山の鉱石を三分の二と214山東省・福山鉱山の鉱石を三分の一混合した18.133′ 0.8616′ 2.1150が符合する。

●測定番号HS010 見卣の台

17.788′ 0.8719′ 2.1365

これは201遼寧省・青城子鉱山の17.836′ 0.8745′ 2.1384が符合する。

●測定番号HS011 見卣の提梁

17.911′ 0.8690′ 2.1284

これは201遼寧省・青城子鉱山と211甘粛省・鄧家山鉱山の平均値17.947′ 0.8703′ 2.1284が符合する。特に208/206の数値は完全に一致している。

●測定番号HS032 虎食人卣

21.588′ 0.7405′ 1.9326

これは測定番号HS049と同様、バイカル湖周辺の鉱石を三分の二、236雲南省・会沢鉱山の鉱石を三分の一混合した21.613′ 0.7418′ 1.9344が符合する。

●測定番号HS043 鬲父乙盉の本体内側(盉・酒器。丸腹に円筒状注口のある蓋付の器)

18.504′ 0.8451′ 2.1044

これは224湖南省・水口山鉱山の18.504′ 0.8481′ 2.0960が符合する。特に206/204の数値が完全に一致している。

西周中期時代(紀元前九世紀)

●測定番号HS051 競卣

18.206′ 0.8571′ 2.1145

これは210甘粛省・鄧家山鉱山と218浙江省・五部鉱山の平均値18.220′ 0.8587′ 2.1139が符合する。

●測定番号HS029 鳳文尊

18.555′ 0.8461′ 2.0959

これは226湖南省・東坡鉱山の18.567′ 0.8458′ 2.0938と符合する。特に207/206の指数が一致している。

西周晩期時代(紀元前九～八世紀)

●測定番号HS024—1 己侯鐘(鐘・楽器。横断面がラグビーボール形で、下部両端が鋭く尖った吊鐘)

18.336′ 0.8512′ 2.0987

これは214山東省・福山鉱山の鉱石を三分の二、219浙江省・五部鉱山の鉱石を三分の一混合した18.323′ 0.8521′ 2.1094が符合する。207/206は近いが、208/206は少し離れる。

●測定番号HS024—2 己侯鐘

18.327′ 0.8509′ 2.0981

これは214山東省・福山鉱山の鉱石を二、218浙江省・五部鉱山の鉱石を一とした18.316′ 0.8522′ 2.1091が符合する。これも208/206が少し離れている。

●測定番号HS024—3 己侯鐘

18.310′ 0.8512′ 2.0986

これも214山東省・福山鉱山を三分の二、218浙江省・五部鉱山を三分の一とした18.316′ 0.8522′ 2.1091が符合する。これも同様208/206が少し離れている。

●測定番号HS046 戯伯鬲(鬲・食器。三足が袋状になった器)

18.049′ 0.8645′ 2.1276

これは210甘粛省・鄧家山鉱山の18.053′ 0.8658′ 2.1169が符合する。これも208/206が少し離れている。

西周晩期～春秋初期時代(紀元前八世紀)

●測定番号HS058 楚公か鐘(小)

18.478′ 0.8495′ 2.1033

これは225湖南省・水口山鉱山の18.493′ 0.8473′ 2.0937が符合する。

●測定番号HS059 楚公か鐘(中)

18.128′ 0.8624′ 2.1224

これは211甘粛省・鄧家山鉱山の18.059′ 0.8662′ 2.1184が符合する。

●測定番号HS060 楚公か鐘(大)

18.040′ 0.8642′ 2.1283

これは211甘粛省・鄧家山鉱山の鉱石と′215河南省・桐柏鉱山の鉱石を等分に混合した17.996′ 0.8662′ 2.1231

が符合する。

戦国初期時代（紀元前五世紀）

●測定番号 HS012 ひょう氏編鐘第1器

17.695、0.8825、2.1658

これは209陝西省・丹鳳鉱山の17.622、0.8803、2.1809がかなり近い。ただし208/206の数値が若干離れており、2.16台の指数を持つ江蘇省の鉱山の鉱石が混合されている可能性が高い。

●測定番号 HS013 編鐘第2器

17.686、0.8825、2.1658

これは第1器と同じ坩堝で溶融した鉱石を使用したものと考えられる。従って209陝西省・丹鳳鉱山の鉱石に、江蘇省の鉱山の鉱石を混合したものと思われる。

●測定番号 HS014 編鐘第3器

17.495、0.8903、2.1744

これは217江蘇省・棲霞山鉱山の鉱石17.440、0.8903、2.1687を三分の二と、213山東省・香寄鉱山の鉱石17.444、0.8909、2.1890を三分の一混合した17.441、0.8905、2.1754と符合する。特に207/206が一致している。

●測定番号 HS015 編鐘第4器

17.337、0.8973、2.1826

これは201遼寧省・青城子鉱山の鉱石を三分の一と、212山東省・香寄鉱山の鉱石を三分の二とした17.280、0.8954、2.1807と符合する。

●測定番号 HS016 編鐘第5器

17.303、0.8975、2.1832

これも第4器と同じく、212を三分の二、201を三分の一とした指数と符合する。

●測定番号 HS017 編鐘第6器

17.499、0.8902、2.1740

これは第3器と同じ坩堝で溶融した鉱石で鋳造されたものである。従って217を三分の二、213を三分の一とした鉱石を使用している。

●測定番号 HS018 編鐘第7器

17.499、0.8902、2.1743

これも第3器・第6器と同じ坩堝で溶融した鉱石で鋳造している。従って217江蘇省・棲霞山鉱山の鉱石を三分の二、213山東省・香寄鉱山の鉱石を三分の一とした鉱石を使用しているものと考えられる。

●測定番号 HS019 編鐘第8器

16.779、0.9191、2.2066

これは202遼寧省・錦西鉱山の鉱石と212山東省・香寄鉱山の鉱石を等分に混合した16.761、0.9157、2.2119が符合する。

●測定番号 HS020 編鐘第9器

16.726、0.9218、2.2099

これも前述の202と212の鉱石を等分に混合した16.761、0.9157、2.2119が符合する。

●測定番号 HS021 編鐘第10器

16.736、0.9209、2.2080

これも同様202と212の鉱石を等分に混合した16.761、0.9157、2.2119が符合する。

●測定番号 HS022 編鐘第11器

16.834、0.9166、2.2039

これも同様202と212を等分に混合した16.761、0.9157、2.2119が符合する。

●測定番号 HS023 編鐘第12器

16.740、0.9215、2.2093

これも同様202と212を等分に混合した16.761、0.9157、2.2119が符合する。

●測定番号 HS061 者とう鐘（小）

18.100、0.8619、2.1198

これは211甘粛省・鄧家山鉱山の鉱石18.059、0.8662、2.1184が符合する。

●測定番号 HS062 者とう鐘（小）

18.012、0.8678、2.1275

これは215河南省・桐柏鉱山の17.934、0.8662、2.1278が符合する。特に208/206の数値が一致している。

古墳時代（日本）

●測定番号 HS057 斜格子文馬鐸

18.288、0.8567、2.1215

これは42石川県・倉谷鉱山の鉱石18.456、0.8464、2.1069と、53神岡・茂住鉱山の18.012、0.8656、2.1430を等分に混合した18.234、0.8560、2.1249が符合する。

まとめ

中国大陸で商中期～晩期にかけて出土した銅製品、二十一点の分析結果は、バイカル湖周辺の鉱石を使用したものが圧倒的に多く、全体の八割に及んでいます。これに加えて遼寧省とか朝鮮半島の鉱石も使用されております。先に述べた、これに先立つ時代の二里頭遺跡での銅鉱石供給鉱山も遼寧省を中心に中国大陸東北部への集中傾向があり、この時代迄の中国中原の青銅器文化の鉱石供給が、北方地帯との交易により充足されていたことが分ります。

その他江西省・湖南省・雲南省の鉱石も一部使用されていた様です。

次に商末周初～西周早期～西周早期末の時代について考察を進めます。

この時期に該当するものは十一点ありますが、バイカル湖周辺のものが減少し、新たに河南省をはじめ江蘇省・貴州省・甘粛省の鉱石が使用され、中国大陸各地で

鉱山開発が行われた様子が覗えます。

西周初期～中期～晩期～春秋初期にかけては、十四点の製品を点検しましたが、バイカル湖周辺のものが、西周初期で全く姿を消し、又朝鮮半島のものも見られなくなっております。その一方で、主体を成すのが、甘粛省・湖南省・浙江省・山東省であり、これに遼寧省が続きます。

最後に戦国時代初期の十四点に付、分析結果を述べます。山東省が最多で全て他省の鉱石との混合ですが十点を数えます。次に遼寧省の七点、江蘇省の五点が続きます。その他陝西省・甘粛省・河南省産の鉱石が使用されています。

これに対し日本列島の古墳から出土した測定番号HS057の斜格子文馬鐸は、42石川県・倉谷鉱山と53神岡・茂住鉱山の鉱石の平均値が符合しております。更に交易というものが、彼我のメリットにより成立するという必須条件、すなわち中国中原から穀物や工業製品を購入する見返りとして各種の鉱石を周辺地区が供給していたという検討結果を考えれば、はるばる海を渡って当時日本列島よりはるかに工業化が進んでいた中国大陸から恒常的に銅鉱石のインゴット等が列島にもたらされたというような事は到底考える事が出来ません。

古墳時代の日本列島内においては銅鉱山の開発が行われ、独自の青銅器文化が形成されていたと考えるのが至当であると考えます。

参考文献

高浜秀・早川泰弘・平尾良光「中国北方系民族の青銅器」『古代東アジア青銅の流通』鶴山堂、二〇〇一年。

中国経済研究所『中国資源要覧』官報通信社、一九八二年。

早川泰弘・平尾良光・金正耀・鄭光「ICP—AES/MSによる中国二里頭遺跡出土青銅器の多元素分析」『保存化学』第38号東京国立文化財研究所、一九九八年。

樋口隆康『泉屋博古・中国古銅器編』泉屋博古館、二〇〇七年。

平尾良光・鈴木浩子・早川泰弘・佐々木祐治「泉屋博古館が所蔵する中国古代青銅器の鉛同位体比」『泉屋博古館紀要第十五巻』泉屋博古館、一九九八年。

馬淵久夫・平尾良光「東アジア鉛鉱石の鉛同位体比—青銅器との関連を中心に—」『考古学雑誌』73—2日本考古学会、一九八七年。

馬淵久夫・平尾良光「鉛同位体比法による漢式鏡の研究」『MUSEUM』370東京国立博物館美術誌、一九八二年。

鏡（その9）

中山喬央（たかひろ）

水滴と鏡

太陽は月だけでなく水滴にも映るので、月と同じように水滴も鏡だとヨーロッパ人は考え、更にそれを虹が発生することに結びつけました。

古代ギリシャの哲学者でプラトンの弟子だったアリストテレス（前三八四年～前三二二年）は虹の発生を次の様に述べています。……それら水滴（鏡）は小さいので、太陽の色は映しても形は映さない。その上、それらは無数に絶え間なく落ちて、すべて同じ色を呈するので、数多くの離れ離れになった像ではなく、長くつながったただ一つの像として見えるのである。

前四世紀末頃ギリシャ哲学の一派となるストア学派が起こります。

この学派は神を超越的な存在とせず、世界宇宙に普遍的に内在し、意識は高度に組織された物質（脳髄）の所産であり、認識は客観的実在の脳髄による反映とする、汎神論的唯物論の立場をとります。

すなわち宇宙理性としてのロゴスが世界に遍在し、一切はこのロゴス（神）の摂理としての必然性に従って生起するものだとします。

道徳の本質・規範についての哲学的考察である道徳説としては、平等博愛的な世界主義で、自然に従って理性にのみ基いて生き、欲情に心を乱されず環境に支配されず、思慮的に行動し、泰然自若たる心境によってのみ、人は真の幸福を得る事ができるとする考えです。

このストア学派の後期に属する哲人セネカ・エピクテトス（二年～六六年）は、スペイン生まれで皇帝ネロの師となりましたが、不興を蒙って隠退し自決します。彼は多才の人でギリシャ悲劇を範とする悲劇九編の他、多数の著作があり、虹とか雲と鏡の関係について数多くの

見解を述べております。

雲ひとつない晴れた日に水をいっぱいにたたえた一千ほどの水槽を地面に置いてみるといい。それらすべてが太陽の像を見せてくれるだろう。木の葉の一枚一枚に水滴を置いてみれば、水滴と同じ数だけの像が得られるだろう。

またセネカは前述のアリストテレスの主張に言及しながら、虹の出現を太陽像を損なう鏡の欠陥によって説明します。しかしそこでは鏡は雨でなく、ある種の形を持った雲で、それは小さな水滴で構成されているものではなかったようです。何故ならば、そこにははっきりした多数の光点、すなわち一つの銀河が見えなかったからです。

鏡を互いにつなぎ合わせても、映像は一つにならず、それぞれがその映し出す対象の似姿を自らのうちに閉じ込める。沢山の小さな鏡から構成された鏡が手に入る。それを一人の人間に差し出せば、そこには多数の人間が示される。各々の部分がその人間の映像を持つからだ。……一人の人間を多数の人間ですっかり置き換えながら、鏡はこの群集を融合したものとしてではなく、見合った数だけの人物像に分かれたものとして提示する。

雲もまた反射光学装置となり得るものでした。知られざる学者パリウムのアルテミドロスは、ある雛型に関して、その固有の映像を反射させるために、鏡をどのように並べなければならないかを説明しています。

一つのガラス球を二つに分けて凹面鏡をつくり、その中心の外に身を置きなさい。そうすると、あなたの側にある、あらゆる形象は逆さまになり、鏡よりもあなたの近くにあるように見えるだろう。……球形の窪んだ雲を見ても同じである。

これについては、トルコ西南海岸沖に位置するロードス島のストア派哲学者ポセイドニオス（前一三〇年～前五〇年頃）も、次のように書いています。

球の一部によってつくられた円形凹面鏡のように、姿を現す雲の中に虹は出現する。

セネカは、水滴の無秩序な集積よりも、正確なメカニズムを有する、幾何学の証明する、この雲の鏡という最終的な解決を、古代ギリシャの哲学者で、無数の元素（種子）の混合によって万物が生まれると説き、最初の

混沌状態から秩序ある世界を創造した原動力としてヌース（精神）を考えた、アナクサゴラス（前五〇〇年頃～前四二八年頃）と共に採択します。

鏡は対象全体を変化なしに表象するわけではなく、周知のように凸面鏡は対象を収縮させ、凹面鏡は対象を膨張させる。この結果、月面に反射した太陽は小さく見え、窪んだ雲の中では恐ろしく大きくなる。天地間に架けられた橋（虹）がどんなに物質的に見えても、それは束の間の光の帯の中を魔法のように昇っていく。

そこにこそ鏡の特性がある。映像が生じ、また消える為には、対象を提示し、それを排除するだけで事足りる。それゆえ、この雲の中に固有の実体があるわけでも、虹が物体であるわけでもない。それは一つの虚構であり、現実なき似姿である。

これらの似姿は、風の吹くままに広がるこうしたおぼろなスクリーンの形によって変化する。凹型の雲が太陽を巨大なギリシャ神話の虹の神であるアイリスにしてしまうとすれば、平らな雲はそれが部厚く滑らかであれば、太陽をそれ自身に似せて増殖させる。それは二重の、ときには三重の太陽となる。

幾人かの著者によれば、この種の幻影が生み出されるたびに、ひとつは太陽の像になり、もう一つは暈（日のかさ）となる。これは太陽の像である。

ここでまた光学的実験が問題になります。

多数の鏡を、お互いに見えるように並べると、すべての鏡が同じ像で満たされる。ひとつだけが直接に対象そのものの像であり、他はこの像の再生である。他の幻影の幻影として太陽は白っぽく、月に似るのである。そこで問題になっていたのは、明らかに氷の結晶によって形成された雲の中に現れる幻日、すなわち地平線に平行な円に沿って太陽を通る幾つかの点に光が集中して作られるところの見せかけの太陽である。

インゴルシュタートのアカデミーのシャイナーによって一六三〇年に初めてそうしたものとして記述された、この気象現象は、想像力を掻き立てずにはおきませんでした。

D・H・メンゼルとE・Hティヴスが一九七七年ニューヨークで刊行した『UFOの謎』の二三頁以下でも、人はそこに前六世紀ユダ王国の預言者、バビロンで捕囚の民へ、エルサレム神殿中心の民族再興の預言を与え、後にユダヤ教の父と呼ばれたエゼキエルが、四人のケル

ビム（九天使の第二位で知識を司る天使）の側に見た、天の四つの車輪の説明を求めております。

こうした気がかりな現象は、幾人かの著作家達によって観察され言及されています。ローマの詩人ウェルギリウス（前七〇年～前十九年）は叙事詩『アエネーイス』のなかに、ギリシャの古伝説で、カルタゴを築いて君臨した女王ディドーが、天に燦然と輝く二つの太陽と同時に二つのテーバイの町を見たことを記載しております。

又セネカと同時代を生きた『博物誌』の著者で、ヴェスヴィオ火山爆発の際、科学的調査を試みて有毒ガスの為に窒息死したプリニウス（二三年～七九年）は、『博物誌』第二巻三一で、幽霊のような大気現象を指摘し次の様に述べています。

ときとして同時に複数の太陽がみえることがある。……我々の父祖は、マキウスとポストミウスの執政時に、またマルキウスとポルキウスのもとで、三つの太陽を見た。我々の世紀は、またクラウディウスの治世下にこの現象を目撃した。……ファヌスとデメトリウスの執政時にはまた三つの月が見られた。人々はそれらを夜の太陽と呼んだ。

こうした気象現象の出現は、怪物の誕生と同様に、一般に素晴らしい前兆、あるいは恐るべき前兆と考えられていました。

ライプチヒで一九一〇年に刊行されたティトゥス・リウィウス著『ユリウス・オブセクェンティウスの不思議の書』には、紀元前二〇四年にはトリノとジェノヴァの中間に位置するアルバで真赤に染まった麦の穂と二つの太陽が、一八一年にはイタリア北部ピエモンテ・ロンバルディア地方のガリアで、三つの太陽と三つの月が、ローマでは一七二年にサトゥルヌスの神殿を狙う、天空で矢をつがえた弓と、同時に輝く三つの太陽が、一二〇年には双頭の子供と、三つの太陽が目撃されたと記されています。

セネカの重く滑らかな雲は金属的であるとした、イタリア、ルネサンス期の医者・数学者・自然哲学者カルダーノ（一五〇一年～一五七六年）は、複数の太陽について記述しながら、それらのうちのどれが本物なのか見分けることが出来なかったと告白し、更に日蝕のさいに鏡の中に見える太陽が、時には船の形になると述べています。

またオブセクェンティウスとリュコステネスはこうした天の船は一七〇年に姿を現したとしています。

一方フランス人ボエステュオーは、現代になってカルダーノがヴェネツィアで見た三つの太陽というような事

実報道には満足せず、その自然的発生原因を次の様に説明します。

雨を降らさんばかりの部厚い雲が太陽の近くにあるとき、ちょうど褐色の光沢のある鋼鉄に刻印するように、太陽はその像を雲に刻印する。……

雲の鏡は輝く天体だけではなく、自分の前に姿を見せるものなら何でも映し出すと考えたのは、一五二九年ケルンで『隠微哲学』を刊行したコルネリウス・アグリッパです。彼は物体同士の作用に関するプラトン説の証拠と説明をそこに見ています。

南の風が吹くと大気が切れ切れの雲に凝結して、そのなかに城や山や馬や人などの、ずっと遠くの姿が鏡のように映し出されるのが見えるが、雲が行ってしまうと、そうした姿は消えてしまう。……

古代ギリシャの喜劇作者、アリストファネス（前四四五年頃～前三八五年頃）は、彼が著した『雲』の中で、ソクラテスがストレプシアデスへの説明として次の様に述べています。

ソクラテス　これまでお前は空を眺めてケンタウロス（ギリシャ神話で、上半身は人、下半身は馬の怪物）に似た雲とか、豹、狼、牛に似た雲とかを見たことがなかったかね。

ストレプシアデス　そりゃ、神にかけてありますよ。いったい、それがどうしたっていうんです。

ソクラテス　雲はなろうと思うものになんでもなることができるということだ。だから、クセノパントスの息子みたいな、髪の長い毛むくじゃらの野卑な男を見ると、その気違いじみた情欲をからかって、たちまちケンタウロスの姿になったりするわけだ。

ストレプシアデス　それじゃ公金泥棒なんかを見たら、なにになるんです。

ソクラテス　そいつの本性を暴露するために、狼になる。

ストレプシアデス　してみると、昨日クレオニュモスみたいな、盾を捨てて逃げたこの上ない臆病野郎を見たからってわけなんですね、雲が鹿になったのは。

ソクラテス　そしていまクレイステネス（前六世紀末のアテナイの政治家。部族制度の改革を行い、アテナイ民主政治の基礎をつくった）を見たもんだから、ご覧の通り、女

になったというわけだ。

テュアナのアポロニオス（一世紀）も、こうした奇妙な形に驚かされますが、それはシェイクスピアに強い影響を与え『ハムレット』（一六〇一年頃作）第二場の終りで次のセリフとして表現されます。

ハムレット　ほら、まるでらくだみたいなあの雲が見えるか。
ポローニアス　なるほど、らくだそっくりでござりまするな。
ハムレット　いたちのように見えるな。
ポローニアス　さよう、背中がいたちのようでござりまするな。
ハムレット　それとも鯨のようかな。
ポローニアス　まったく鯨のようですな。

ロジャー・ベイコン（一二八〇年以前）は彼が著した『人為の力と自然の力に付いて』のなかで、この現象を、工学から考えることで、自然と想像力との現象か、それとも人為的なものなのかという問題に迫ろうとしました。

ひとつのものが多数のものに、一人の人間が一個の軍隊に見えるようにしたり、また多数の太陽と多数の月を出現させたりすることができるような装置や鏡を組み立てることができる。

セッターラとキルヒャーの反射光学器械も同様の娯楽を提供していました。

ロジャー・ベイコンは、教皇ニコラウス三世（一二七七年～一二八〇年）の前で、自分にかけられた魔術の嫌疑を晴らす為に『人為と自然の驚くべき力について』という著作を発表しますが、この書物のフランス語訳が一五五七年フランス・リヨンで刊行されます。その二一頁には次の様に記されています。

自然それ自身がときとして水蒸気をとり集めて、同時に天に二つの太陽あるいは二つの月が、あるいはプリニウスが報告しているように、三つの太陽さえもが、見えるようにすることがある。

ひとつのものが無限に増えて見えることもある。何故ならいったんそれが其のあり方を逸脱すると、もう限界がないからだ。……こういうわけで、敵の町の上空に多数の星や人間を出現させて大きな恐怖を喚び起し、恐怖に駆られて住民達が四散するように仕向ける事もできるわけだ。

このようにヨーロッパの人達は、月、虹、雲、太陽と鏡の関係から、大気の鏡としての蜃気楼を考えるようになります。

この発想の原点は反射装置としての鏡であり、これにはヨーロッパにおけるガラス製鏡の開発が大きくかかわっていると思いますので、それについて次回述べることといたします。

参考文献

ユルギス・バルトルシャイティス著・谷川渥訳『鏡』図書刊行会、一九九四年。

社　告（内規）

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同士の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二一

加入者名　まんじ

れんししゅう(恋詩集)しさくのかなしみより その七

松下壽男

食後

あなたはよっぽど強情だ
—強情なのはあなたの方よ
勝手に計画しておいて—
でもそれは

あなたのための計画だとは
いいきれないで雲を見る
ゆうべの私は
あなたより幸せだったにちがいない

じゃあ明日は—強引ね—
水銀灯の陰影に
ふるえるような承諾だった

—ご馳走様わたしはこのまま帰ります—
横顔にほほえみをたたえて
幸せにまで強情を張らせる人

悲しいアメリカ —プラグマティズムの研究を通して—その二

松下壽男

1905プラグマティズムの独り歩き

プラグマティズムは、知識を恵みとする一方で、道具としてもとらえる一面が、パースの意に反して独り歩きしていきました。憤ったパースは、自らの哲学をプラグマティシズムと命名し直しました。パースは、自らのプラグマティズムを勘当したのです。

1907ジェームズのプラグマティズム

プラグマティズムを創設したのはパースですが、世に広めたのはジェームズだと言われています。

社会的には合衆国沿岸測量部の技師に過ぎなかったパースに対して、ジェームズはハーバード大学の教授でした。アメリカとヨーロッパの間を行き来し、ジェームズ・ランゲ説という世界的な学説を打ち立てた心理学者でもあり、哲学者でもありました。

パースは、自らの哲学を、プラグマティシズムという名前に命名し直しましたが、世の中に広まっていったのは、当然、プラグマティズムでした。

ジェームズのプラグマティズムは実用主義です。真理を実際の効果によって判定しようと考えます。そして人の行動に効果をもたらすものが真理と判定されるのです。したがって、真理とは道具的です。

こうなると、真理が、道具的な方法や技術と同列になるために、方法や技術が、真理に置き換えられる恐れがあります。端的に言えば、結果が全てなのです。歴史や、伝統や、理念は、二の次三の次です。

この真理観は、フロンティアをもつアメリカの常識にたやすく受け入れられました。事実プラグマティズムを背景にした、マスコミュニケーションの情報やマスプロ

ダクションの工業の発達が人々に何の疑いもなく受け入れられ、それを受け入れた人々の生活を画一化し、大衆社会の形成を促していきました。

3　現代の常識の歴史的背景

1898意識の流れと大衆文化

ジェームズの弟のヘンリー・ジェームズは、兄の心理学のテーマと同じ「意識の流れ」を「ねじの回転」などの小説に表現した文豪でした。

観念の、行動に対する効果を大切にすると、プラグマティズムになるのですが、感覚や観念の、美的鑑賞に対する効果を大切にすると、現代芸術の扉を開く「意識の流れ」や印象主義になるのでしょう。それら、表現の必然性より鑑賞における効果を重視する印象主義は、個人的体験に働きかけながら流行を産み大衆文化を形成していきます。

価値があるから流行するのか、それとも流行するから価値があるのかは、もはや問題にもせずに、流行が個人の価値観を左右するのが大衆文化です。

私は、その大衆文化こそが、アメリカの最大の産物であり輸出品だと考えます。

1894アメリカンドリームとアメリカの資本主義

アメリカは、工業生産力世界一を誇る巨大な資本主義国となりました。その発展は、マルクスの資本論のシナリオとは異なる要素を持っていたように思います。

ヨーロッパとは異なる歴史風土も大きな要素だと考えられますが、人民が夢を持ち続けることができた点が重要だと思います。いわゆるアメリカンドリームです。それによって人民は、疎外されることなく生きることができるのです。

そのアメリカンドリームが形を成したものが大衆文化だと言えるかもしれません。

そしてアメリカンドリームは、フロンティアが誘っていたのです。

1890～アメリカ国土のフロンティアの消滅

一平方マイル（約二・五平方キロ）当たり一八人の人口密度の境界線がフロンティアでした。農家は独立無援の状態です。その農家を結びつけようという運動がグレンジャー運動でした。地域ごとの支部活動が主体の運動は、農産物の移出を左右する鉄道会社への法的規制を求めて大同団結をし、グレンジャー法という法律を成立させました。

しかしその後フロンティアの消滅と機を一にして、運動自体は歴史の舞台から姿を消していきます。

アメリカ国土のフロンティアの消滅は二十世紀を目の前にした出来事でした。

1909大衆社会の形成

グレンジャー運動から明らかのように、自給自足の時期を経て、余剰が生じ始めると、フロンティアの経済も、鉄道会社という独占的な大資本に支配されていくのでした。農民は、そこで自営農を続けながらも、巨大な経済機構に呑み込まれざるを得なかったのです。そして自営農も都市住民と同様に巨大な経済機構の中で大衆社会を形成していくことになるのです。

大衆社会は法律や契約によって意識的に画一的に編制された管理社会や統制社会ではなく、個人の内面的な判断が知らず知らずに画一的な行いを示す社会なのです。常識を共有し、主体的に生きている市民社会なのに、その常識が知らず知らずに個人を画一化する社会なのです。

その画一化は、むしろ国内の自由な移動によってもたらされました。T型フォードの大量生産は、自動車を消費財にしたのです。また自由な購買を誘う大量の宣伝もありました。そして宣伝を媒介するマスコミュニケーションが発達します。こうしてプラグマティズム流の常識が、自由な市民を画一化するのです。

アメリカ社会には市民社会から疎外された労働者もいました。解放奴隷の黒人や、やってきたばかりの移民がそうでした。

アメリカは、イギリス植民地以来の伝統文化に沿いながらも、多様性に対して寛容でした。そこでは、疎外された人々の文化は、サブカルチャーを形成することができました。

そして疎外されていないアメリカ人民が置かれた大衆化の状況も、目に見えないところで自らの心を疎外していたのです。

疎外された人々のサブカルチャーは、大衆文化の状況に置かれた人々に共感を与えます。こうして、ブルース、そしてジャズ、やがてロックなど、ヨーロッパ文化とアフリカ文化の中間文化であるアメリカの大衆音楽が生まれます。

それは、大衆文化の創造的な一面ですが、創造された音楽は、流行の波に乗って大衆化するのです。

1917新たなフロンティアを外国に求めて

国土のフロンティアが消滅したアメリカは、目を国外に向け始めます。開拓時代守り続けてきた、対ヨーロッパ不干渉のモンロー主義を撤回しました。

アメリカは、すでに新たなフロンティアとして外国に市場を求め、第一次大戦では、世界の工場の役目を果たしました。しかしドイツの無制限潜水艦作戦によって販

路が断たれそうになると参戦もし、戦勝国となり、国際連盟の設立に尽力しました。

しかしアメリカの期待したヨーロッパ市場は、大戦によって疲弊していました。アメリカは農業だけでなく工業も生産過剰となり、産業を育ててきた株式投機という技術も破綻しました。それまで、フロンティアの存在によって保証されていたアメリカのプラグマティズム流の常識は、国内外で行き詰まり、アメリカンドリームは潰え、まさにパニックに陥りました。

1929第二のフロンティアを大衆に求めて

ニューヨークから始まった世界恐慌は、アメリカにとってこれまでにない試練でした。そこで、アメリカは、国内の大衆の購買力に新たなフロンティアを求めていきました。そのためには人民の心をフロンティア（耕すべき荒れ地、沃野との交流域）にしなければなりません。そしていよいよプラグマティズム流の常識は、物心二元論の大衆化をもたらしていきました。

4　現代の常識と物心二元論

1637～物心二元論の流れ

物心二元論は、古代ギリシアの哲学者プラトン以来、西洋哲学の問題でした。キリスト教も、神による肉と魂の救済でした。ルネサンスは、肉体と精神を持った人間性の回復運動でした。その二元論を、結果的に科学や技術の基礎に位置づけたのが、デカルトでした。

彼は、絶対的な真理を見つけるために、世の中の全てを疑ってみました。そして疑っている自分の存在は疑えないと気付いたのでした。有名な「我思うゆえに我在り」という原理の悟りです。

我とは、言い換えれば意識です。意識する自分であり、心です。それに対して意識されるものは、物です。そして自分の体も意識の対象だから、物にちがいないと考えました。人とは、意識が操縦する機械なのです。

次に彼は、意識によって正しさを保証された原理に従い、演繹的な三段論法によって世界をとらえ直していきます。正しさが保証されている原理と方法に従えば、世界を正しくとらえることができると考えたのです。が、その正しさが保証されている原理とは数学や科学の原理なのです。

見方を変えれば、デカルトの二元論は、世界観を、科学や技術のために作り直したのだとも言えるのです。

我々が知覚し、働き掛ける対象はすべて物であり、科学技術の扱う問題であり、科学技術の方法に照らして実証されたものは真理なのです。

デカルトの用意した現象世界は、もはや、人が、全てをためらうことなく物として扱い、切り刻み、作り変え、打ち壊し、何度でも実験を繰り返すことのできる物質世界となっていたのでした。

とはいえ、それは結果的にそうなったのだと言う話で、デカルト自身は、物と心の二つの世界がぴたりと歩調を合わせて進んでいけるのは神の恵みとしか考えられないから、二元論は神の存在の証明だと考えていたということです。

デカルトは、それまで宗教のもとで曖昧だった、物と心と神の、それぞれの領域を、人間の知性によって、主知主義的に分類しただけなのかも知れません。

とはいえ、意識の対象はすべて物であり、科学技術の扱う問題であるという常識はフランスのデカルトの遺産です。

1620～経験論の流れ

イギリス人で、デカルトとともに近世哲学の祖と言われるベーコンは、経験論を唱えました。そしてイギリスで、経験論は、独自の深まりを見せました。

デカルトは、意識すなわち心を連続体ととらえましたが、経験論は意識を個々の観念や印象に分解します。そして、ニュートンの万有引力の法則と同じように、観念や印象の力学として世界をとらえていきます。

その哲学を推し進めたヒュームらは、独我論にいたります。他人や物の存在は、自分の心の中の出来事に過ぎないという考え方です。

デカルトのように独我の意識の正しさが保証されているとは考えませんし、神の領域を認めてもいません。独我論の風景とは、物や人物が自由にうごめく現象の世界です。

とはいえ、ヒュームは、独我論に至りながらも、すぐに常識の世界に立ち戻ります。時に独我論に陥ることも常識であるといいながら、独我論から抜け出て常識的な生活を送ることの正しさを主張します。

ヒュームが独我論よりも、常識の正しさを主張する背景には、経験というものが個人を離れて存在し、経験の繰り返しによる習慣というものが、普遍的に正しい常識を形成すると考えているからです。

私はその主張に、日本の報徳との親近性を感じています。

編集後記

最近愛媛県新居浜市にある別子銅山記念館を訪ねる機会があり、文殊院の肖像画と共に、住友家の家訓である「商売だけではなく、まず人間としてすべてにおいて誠心誠意、心を込めて行わなければならない～」という一文に触れることができた。

ここで思い出したのが三戸岡さんと鯨さん共著で栄光出版社から刊行した『道徳イノベーション二宮金次郎の教え』48頁の「遠くをはかる者は富む」であった。

遠くをはかる者は富み、近くをはかる者は貧す。
それ遠くをはかる者は百年のために杉苗を植う。
まして春まいて秋実る物においておや。故に富あり。
近くをはかる者は、春植えて秋実る物をも、なお遠しとして植えず。ただ眼前の利に迷うて、まかずして取り、植えずして刈り取ることのみ眼につく、故に貧窮す。

これに今春報徳学園から送っていただいた「報徳一日一訓」の十四（人ためは　善事なり　「人のため」を道と申す）どこか人のために生きることなしに、人間本来の道はない。—これが二宮尊徳が七十年の生涯を通じてつかみとった人生哲学である。

を重ね合わせると住友家の家訓と見事に符合する。

現在の金融経済の破綻と低迷は、すべて利のみを追求したところにある。隣人に仕えるという大義名分をもたない企業が永続できないことは明白になった。

愛媛県立新居浜南高等学校情報科学部が作成した『別子銅山近代化産業遺産ふれあいめぐりあいガイドブック』には、廃校となった四阪島小学校に設置され現在も残っている二宮金次郎像が掲載されている。

（T・N）

まんじ第113号

平成21年8月1日発行（非売）

発 行 人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編 集 長　中　山　喬　央（なかやま　たかひろ）
事務局長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）

（事務局）　〒223-0056　横浜市港北区新吉田東五丁目76-35　太田善朗方
TEL・FAX 045（544）5947
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
（印刷製本）　日東印刷株式会社
〒142-0054　東京都品川区西中延2-15-16

表紙の絵について
「反芻してこそ知恵になる」　　田寺怜葦（たでられい）画

まんじ

No.114

2009.11.1

まんじ第百十四号　目次

畏友　故花房秀三郎君の足跡を偲ぶ……伊治　哲…4
小説　家康と凧狂いの右近……堀内永人…14
　―遠州菊川の義人　中条右近太夫物語―（1）
今川風雲録（六）……千坂精一…21
誠忠の茶園（二）……太田精一…28
天智・天武両帝に愛された額田王（二）……島津隆子…41
黒いバス（下）……三戸岡道夫…47
古い物・遠い夢　唐津の茶陶……忠内正之…65
パパ　やったね！……鍋屋次郎…70
我が愛誦歌（九）―昭和から平成へ―……曽根竣作…82
短歌　三十首……曽根竣作…88
短　歌　行雲流水（二十五）近詠二十首……石黒修身…92
漢　詩　潮騒録（五十九）《漢詩の流れ48》……鯨游海…95
メキシコ花火見物日記……吉田忠雄…100
掌編小説7　一日だけのミュージシャン……亜木陽一…104
四十四年目の挨拶……勝山道子…106
司馬雑感二十一「台湾紀行」をゆく……山田嘉久…109
狩谷棭斎讃歌（七）……新井宏…118
化粧のルーツを訪ねて（八・九）……鈴木守…127
　第五話　古代インドの化粧文化
　第六話　古代ヨーロッパの化粧文化
還暦からの考古学（十八）……中山喬央…141
鏡（その10）……中山喬央…155
文化勲章に輝く赤堀四郎博士の一生（十四）……松下魏三…162
青の漂流（九）……宅見勝弘…165
れんしゅう（恋詩集）しさくのかなしみより　その八……松下壽男…172
悲しいアメリカ―プログマティズムの研究を通して―その三……松下壽男…173
　編集後記……編集子…179
　表　紙……田寺怜葦

畏友、故花房秀三郎君の足跡を偲ぶ

伊治　哲

“星の生徒”（註1）のなかで一段と光輝いた巨星が、長い尾を引いて遥か彼方に消え去っていった。

友人としての私自身や、ともに所属する大幼会（註2）にとってはいうまでもないが、より広く日本いや世界の科学界にとって大きな希望の星であった花房秀三郎君が、今年の三月一五日卒然として彼岸へ旅立ってしまった。七十九歳であった。生者必滅、会者定離とはいえ、その足跡があまりにも偉大であっただけに、惜しみて余りあり、未だに信じきれないでいる。

「彼は分子腫瘍学で最も大きな貢献をした人」と、英科学誌「ネイチャー」が四月九日号でいち早く彼の業績を称えた。

一九六一年、彼は米国カリフォルニア大学（バークレイ）ウィルス研究所研究員として渡米し、以来一貫してウィルスによる細胞のがん化の問題に取り組んできた。ロックフェラー大学教授に就任後の一九七七年に至り、がんの原因となる遺伝子は正常なニワトリの体細胞の遺伝子と殆ど同じものであって、それがウィルスの一部に取り入れられてがんウィルスが生まれるということを初めて発見した。つまり、がんウィルスががんを起こす原因は、われわれの体の中に存在する正常な遺伝子によるのであって、特別なウィルスだけがもつ遺伝子ではない。本来は正常細胞の中で重要な働きをもつ遺伝子の変化したものであり、それによって正常な細胞とは異なるタンパク質がつくられ、がんの原因となることを実証したのである。

がんの発生する仕組みを遺伝子の視点から解明し、複雑で泥沼とまでいわれたがん研究の分野で、「がんは遺伝子の病気」であることを初めて世界に知らしめたのである。

彼の偉大な功績に対して、一九八二年に、ノーベル賞と並び称せられる米医学賞「ラスカー賞」を日本人として初めて受賞した。さらに八四年に朝日賞、八五年に米国科学アカデミー会員、八六年に米国癌学会クルー賞等数多くの受賞に続き、八九年にはノーベル医学生理学賞の有力候補となった。

日本では、九一年に文化功労者、九五年に文化勲章の栄に輝いた。他の多くの受賞者が夫々優に古稀を超えている中で、彼は未だ六十歳代半ば、豊かな黒髪をたくわえて写っていた報道写真を思い出す。二〇〇〇年には日本学士院会員に列せられるとともに、本年三月一五日、逝去の日をもって従三位に叙せられ、永遠にその遺徳が偲ばれるところとなった。

彼は、まさにがん遺伝子研究のパイオニア、そしてリーダーとして、この分野の学問の発展と臨床治療への応用の進展に大きな貢献を果たしたのである。

最後まで献身的な看病を尽くされた恵美子夫人によれば、彼の命を奪った病因は多発性筋炎と肝臓癌であった。先に共同研究者であった先妻を癌で亡くし、自らも自分の畢生の研究テーマであった癌で命を閉じたのである。運命の皮肉というべきか、こればかりは天の配剤に異を唱えざるをえない。時代は異なるが、かつての“野口英世”にも擬すべく、その名は永久に留められるべきであろう。

この偉大な功績に対して、一九八二年に、ノーベル賞と並び称せられる米医学賞「ラスカー賞」を日本人として初めて受賞した。さらに八四年に朝日賞、八五年に米国科学アカデミー会員、八六年に米国癌学会クルー賞等数多くの受賞に続き、八九年にはノーベル医学生理学賞の有力候補となった。

日本では、九一年に文化功労者、九五年に文化勲章の栄に輝いた。他の多くの受賞者が夫々優に古稀を超えている中で、彼は未だ六十歳代半ば、豊かな黒髪をたくわえて写っていた報道写真を思い出す。二〇〇〇年には日本学士院会員に列せられるとともに、本年三月一五日、逝去の日をもって従三位に叙せられ、永遠にその遺徳が偲ばれるところとなった。

彼の没後、恵美子夫人から丁重な手紙をいただいた。「二つの大きな病に二人で戦って参りましたが、遂に力尽きてしまいました。もう少し永く生きていてほしかったと悔やまれてなりませんが、これも寿命と諦めざるをえません。主人の分もこれからしっかりと生きていこうと思っております」とあった。心中察するにあまりあり、ただただ心からの哀悼の祈りを捧げるばかりである。

彼は戦後一九五三年、大阪大学理学部化学科を卒業し、引き続き同大学微生物研究所で助手としてウィルス学の基礎を習得し、六〇年、理学博士号を取得した。彼のその後の思考と研究の変遷について、彼自身の手記や彼の紹介文の中から拾い上げてみたい。ただし、極めて専門性の高い分野であるだけに、門外漢の私には理解不能、消化不良の部分が多いことを予めお許しいただきたい。以下、「私」とあるは彼、「花房秀三郎」自身のことである。

――阪大理学部化学科は三十人のクラスで、午前中は学科の授業、午後は実験という毎日を過した。優秀な学生がたくさんいて、実験しながらたたかわす議論から、自分の幼稚さを知るとともに、科学的、論理的な考

え方を学んだ。

酵素タンパク質の構造や働きに興味をもち、生化学で有名な赤堀四郎先生（註3）の研究室に入った。先生は、元来は有機化学が専門だったが、当時はまだ異端とされていたタンパク質の研究に取り組み、生命の起源まで探究を進めておられた。その姿から、視野を広くもち、いろんなことに興味をもつというサイエンスの基本を学んだ。

そんな折りも折り、結核にかかってしまい入院を余儀なくされた。しかし今から考えると、ゆっくり本を読み考える時間がもてたことは却ってよかったと思う。科学の展望についての本を読み、サイエンスとは何かを考え、ものの本質、原則的な論理や法則を新しく見つけなければならないと思うにいたった。そうすると、自分のやっている有機化学は大部分がテクノロジーの世界であって、そこにはものの本質に関わるような大きなチャレンジが少ないように思えた。

あれこれ読み漁った本の中で、ルリア（註4）の本に「生物の本質は増殖にあり、増殖しうる最小単位はウィルスにある」と書かれていた。直感的にウィルスに対する魅力を感じ、その構造と機能を明らかにして生物の本質に迫る仕事をしたいと思うようになった。

赤堀先生も分野を変えることに賛成していただき、五八年に微生物研究所の釜洞醇太郎先生のもとに移った。

ただ日本では、未だ医学的見地からの病原体としてのウィルス研究が大勢を占めていた。私のウィルスへの興味は、生物の生物たるゆえん、自己増殖が一番単純な形で提示されていることであったので、とにかくウィルスを用いて生物理解のための研究をしようと考え、化学科のクラスメートであり妻でもあった照子と一緒に研究を始めた。

最初に面白い現象を見つけたのは照子だった。培養細胞にウィルスを感染させると、ウィルス感染で変性した細胞が透明な斑点（プラーク）となるのだが、ワクチニアを熱処理すると、不活性化してプラークを作らなくなる。そこに、ワクチニアより小さいプラークを近縁のウィルスに混ぜると、再び大きいプラークを作る。つまり、生き返るのだ。おもしろい。早速「ネイチャー」に投稿したのだが、オーストラリアのF・フェンナーと全く同じ内容の論文の同時発表になった。フェンナーは天然痘ウィルスの遺伝学で世界的に有名な大御所だったし、こちらはウィルスについてはまったくの駆け出しだ。しかし、負けてはいられない。激しい競争の中で毎日新しい疑問に直面し、その都度猛烈にウィルスの勉強をするという大変だけれど充実した足固めの時代だった。

ウィルスの勉強をするうちに、がんウィルスについての大きな発見に出合った。

がんについては、昔から、遺伝、ウィルス、化学物質などさまざまな原因説があったが、解明にはほど遠く泥沼といわれていた。一九五八年になって、ハワード・テミンとハリー・ルービンがラウス肉腫ウィルス（註5）を培養したニワトリ細胞に感染させ、小さながんをつくることに成功した。これは大変衝撃的だった。それまではがんを定量的につくらせるなど夢のようなことだったがそれが可能であることが示されたからだ。再びがんウィルス説が浮上した。

その頃たまたま知人の推薦で、六一年に渡米、カリフォルニア大学バークレイ校ウィルス研究所研究員として、ルービンのところで勉強できることになった。幸運としか言いようがない。大きな転機であった。

着任早々、ルービンの師で、著名なダルベッコが主催したシンポジウムで、日本でのウィルス研究について話すように言われ、ウィルス研究最前線の人たちに知られることになり、研究環境は素晴らしいものになった。これもまさに幸運という以外にない。

アメリカでは、医学部以外の多くの研究者たちがウィルス研究で重要な成果を挙げている時代で、煮え繰り返る鍋のような、興奮の坩堝とでもいえる環境の真っ只中にあった。

その後、幸いにも七三年にロックフェラー大学教授に就任し、さらに先進的な研究に没頭した。七七年に至って、遂に細胞の遺伝子が組換えを起こしてウィルスに取り囲まれ、がんを作るという推論を実証し、ロックフェラーの雑誌に発表し大きな反響を得た。がんを作る遺伝子が細胞にもともとあることが明らかになったのだから、がん研究の様相は一変した。それまでは、がん細胞と正常細胞を比較するといっても、何を調べればよいか分らなかったのだが、正常細胞のどの遺伝子が変異したかを調べるという方法が見つかったのだ。その後、大規模に推し進められたヒトゲノム計画（註6）は、ここに出発点がある。大きな発見とは、それでいろいろなことが説明できるもの、今まで分らなかったことが一挙に分ってくる、それが本物だということだろう。

この研究によって、私は同様の研究で成果を挙げたビショップ、バーマス（註7）の二人とともに、八二年ラスカー賞（ノーベル賞への道といわれる、生物学、医学研究に与えられるアメリカの由緒ある賞）を受賞した。ビショップとバーマスは、ウィルスのDNAと細胞のDNAが対を作ることを示したのだが、この実験だけでは本当に証明したとはいえない。でも大筋では非常に綺麗な研究結果だった。八九年のノーベル賞は、ビショップとバーマスの二人が受賞した。彼らは、私にとっては強力な競争相手だったが、研究に関しては良き話し相手であり、良き友達である――

少々長い引用になったが、もう少し続けたい。彼が九八年にロックフェラー大学名誉教授の称号をもって帰国するに当って言い残した、科学者としての生き方を記しておきたいからだ。彼は言う。

――私の研究は、細胞ががん化する仕組みの解明であったといえるが、その研究の各段階でいつも何が大事かということを考えてきた。自分の頭で考える。人と同じことはやりたくない。

分らないことに悩み、新しい原理を見つけていくのがサイエンス。そのためには、現状を知って、突き詰めてものを考えていく。そうすると、案外パーンとあれっと思うような事が出てくる。そのためには相当考えなければだめ。考えることに尽きる。

新しい側面が少しずつ解明されて、ある時ようやく全貌がわかってくるのであって、それまでは雲の中だ。だから、見つけた現象を自分のもっている知識全部で説明できるかどうか、説明できないとすると、どこに問題があるのか。それを一つ一つ明らかにすることが基本だ。そうやって全然予想せぬことが見つかったときは、本当に興奮するものだ。そういう経験こそ科学に携わる者の醍醐味といえるものだろう。

とにかく私は色々な点で幸運だった。研究する環境、偉大な教師、良き同僚、研究室を支えてくれた多くの若い人たち、そして大学の同期生に囲まれてここまで歩んでこられた。とりわけ、微生物研究所で仕事をはじめてからニューヨークで亡くなるまで終始研究の喜びと苦しみを分かち合った妻照子には深く感謝している。――

彼は、一九九八年に帰国したが、請われて大阪バイオサイエンス研究所所長となり、アメリカでの経験を日本で役立てるべく、若い人たちが思い切り研究ができる環境づくりに努めた。二〇〇五年に名誉所長に退いてからも、引き続いて後進の育成と研究環境の整備に心血を注いだ。

Dr・ハナフサを慕って、国内外の研究者から共同研究のプロポーズを寄せてきたといわれるから、学者として、また教育者として優れていただけでなく、いかに人間を惹きつける魅力を持った人柄であったかをうかがうことができる。

実は今から六五年前の昭和一九年春、私は大阪陸軍幼年学校入校と同時に、この畏友と寝台を並べる“戦友”となった。起床から就寝まで常時起居行動を共にして、お互いに助け合い協力する、文字どおり一心同体の友を“戦友”といった。当時弱冠十四歳、紅顔の美少年とはいえ、彼は既に頭脳、心身ともに一頭地を抜いていた。将来大科学者になろうとは知る由もなかったが、一種近寄

り難い威厳とともに、時に洩らす笑顔の中に大きな包容力と人間的な温もりを感じとった。幼いなりに将校生徒としての人間形成の上で身近な彼から学んだものは大きかった。

彼は後にこう述懐している。「戦争のさなか、通常なら勤労動員などで勉強らしい勉強も出来なかった時代に、幼年学校の教育は、特に理科の授業などきちんとしていた。戦争中の子供だから、陸軍の参謀になろうと思っていた」と。“栴檀は双葉より芳し”、年少にして既に自らの理想の未来像を堅持していたのである。

戦後は、私などとは住む世界が天と地ほどに隔たり、親しく交わることもないまま数十年を経過した。彼の帰国後、大幼会や二訓会（註8）で文化勲章受賞を祝い、帰国歓迎祝賀会を幾たびももったが、ただ遠くから仰ぎ見るばかりで、親しく言葉を交わすこともできなかった。

二〇〇五年になって、たまたま私の拙著「これだけは言っておきたい――現代の日本へ」を出版するに当り、表紙の〈帯〉に読者への推薦文を掲載する必要が生じた。私はすぐに花房君を想起した。しかし、素人の拙いエッセイ集に、文化勲章の推薦文では余りにも大きすぎるし、彼に迷惑だと思い暫く躊躇した。とはいえ、その昔生死を分けた戦友ではないか、当って砕けろ・・と、恐る恐る懇請の手紙を書いた。

杞憂であった。彼は「喜んで引き受ける」という“早速ゲラ刷りを送り、改めての返答を待った。彼はこんな推薦文案を送ってきてくれた。

「著者は、若き日同じ学窓に学んだ盟友です。六〇年経って、歩んだ道は異なりますが、世を憂える著者の一言一句に共鳴するところが多々あります・・・」、そして、「表紙の著者名の字の大きさに対して、推薦者〈花房〉の字が大きすぎる。小さくしてくれ」さらに「私のことを先生と呼ぶな。オレ、キサマで呼び合った戦友の仲じゃないか」と注文をつけてきた。私は、広い世界を見据えている彼の目が、これほど小さな心の機微まで見透かしている心配りに、胸が震えるほど感動し、感謝した。

それから四年経った今年、直接会って改めて推薦文のお礼を言いたいし、最近体調優れぬと聞いていたのでその見舞いもしたいと思い、急に思い立って断りもなしに芦屋の自宅を訪ねた。三月八日、日曜日の昼過ぎであった。

玄関に出てこられた奥様の憔悴ぶりに驚いた。「実はこの二ヶ月ほど前から病気が進行し、危険な状態が続いている。二日間だけ許しを得て帰宅したが、激痛に苦しんでいる」「今小康状態で眠っているが、折角来てもらったのだから、様子だけでも見てやってほしい」という奥様の言葉に甘え、寝室の入り口から彼に会わせてもらった。もちろん目を合わせることも口を利くこともできなかったが、一日も早い回復とこれまでのお礼を込めて

一礼し辞去したのであった。

願い空しく、彼はその一週間後、三月一五日に亡くなったのである。

「誰かに主人の病変を聞いて来られたのですか」という奥様の問いかけのとおり、偶然とはいえ、それは余りにも不思議な最後の出会いであり、別れとなった。

前に述べたように、八二年にラスカー賞を共同受賞したバーマス、ビショップ両氏は、八九年にノーベル賞も受賞した。両氏がガン遺伝子を発見したのが七六年、これに先立って花房君が正常細胞にもがんを起こしうる遺伝子が備わっていることを突き止めたが、追試に追試を重ねた結果、発表が一年遅れた。

研究者の間では、「花房が決定打を放った」というのが半ば常識になっていたが、ノーベル賞発表に「花房」の名前はなかった。

弟子の一人、名古屋大学の浜口道成総長は「最初の段階で発表していたら・・」と質問したところ、彼は「論文掲載は彼らの方が早かった。ノーベル賞は当然だ」と淡々と語った。しかし一方で「実証したのは私だ」と強い自負心をみせたという。

また、彼の薫陶を受けた渋谷正史東京大学名誉教授は「目先の論文や賞といった業績主義とは無縁。純粋にサイエンティストだった」と振り返る。

「競争相手より少し遅くなることはどうでもいい。正しい答えを出す方が大切だ」と、弟子たちにも同じ実験を何十回と繰り返させ、さらに別の方法で確認し、論文も何度も書き直させたという。

丁寧な仕事の積み重ねで、研究者仲間やライバルからの信頼は絶大であった。「学会発表の場で、著名な米研究者が、花房教授のがん遺伝子のDNA配列の読み取り結果を見て、自分たちの発表資料を急遽書き直したという印象的な出来事があった」と、弟子の菅野純夫東京大学教授が語っている。

この追悼文を書き始めて間もなく、七月九日にいたって、「財団法人大阪バイオサイエンス研究所」「大阪大学微生物研究所」「門下生一同」の主催による「お別れの会」が、大阪大学銀杏会館で厳粛に執り行われた。同期の戦友とともに私もその末席を汚した。会場正面の祭壇には、天皇陛下ご下賜のご供花、従三位叙位の詔書が、純白の百合の花とともに、少しはにかんだような彼の遺影を囲んでいた。

彼の先輩、同僚、教え子に当る第一線の大学教授たち科学者がかわるがわる追悼の辞を述べた。それは、生涯をとおして揺らぐことのなかった学問への信念と情熱、そして、それに裏打ちされた輝かしい業績に対する賛辞であった。またなによりも参会者の感動を誘ったのは、

固い信念を内心に包み込んだ温容さであり、また謙虚な彼の人柄であった。

漏れ聞いたエピソードを二、三記しておこう。

一九七三年に彼はロックフェラー大学の教授に就任したが、それはむしろ三顧の礼をもって招聘されたといってよい。世界的な頭脳が集まるといわれるロックフェラー大学は、彼のために最も広い研究室を用意したのだった。しかも、花房研究室は学内で一番人気のある研究室で、常に若い研究員で溢れていたといわれる。花房研究室の研究員たちは、彼を「サブロー」の愛称で呼び、OBたちも含めて"花房ファミリー"とよばれる結束の固さを誇っているが、それは、在籍したころの家族のようなぬくもりが絆としていつまでも残るからにほかならないと聞いた。

前掲した浜口道成名古屋大学総長は、ロックフェラー大学で花房研究室に三年間在籍したに過ぎないが、「花房先生に出会って、彼がいわゆるメンターというか、お師匠さんになっています。生き方や価値観もすごく影響を受けました。その生き方には今でもあこがれをもっています。研究者としての原点は、あのニューヨークの三年間の生活にあるように思います」と心酔している。(名古屋大学全学同窓会誌09年8月号のインタビュー記事)

またややくだけるが、一九八二年にアメリカで最高の医学賞といわれるラスカー賞を受けたときは、彼も彼の秘書も「ラスカー」という名前すら知らなかった。ラスカー賞の受賞を知らせる電話に「アラスカに知り合いはいません」と返事をしたという笑い話が残るほどの恬淡振りであったという。

このような彼の隠れた一面を物語る逸話を聞いて、幼年学校時代の幼い彼がそのまま生き残っているような錯覚にみまわれたのはいうまでもない。

さらに私の心が震えたのは、お別れの会の最後に挨拶に立った恵美子夫人の言葉であった。夫人は「私にとって主人は、子どものように無邪気な人でした」という一言でお礼の言葉を結んだ。万感こもるこの一言に、私は思わず目頭が熱くなるのをこらえ切れなかった。

医学研究第一線の厳しい競争社会に身をおいて鎬を削ってきた花房秀三郎君は、後に続く研究者のために、次のような言葉を遺している。

「何をどう研究するかは全く自由ですから、面白い問題ほど競走も激しくなります。勝負に勝ちたいのは誰も同じですが、研究が充実したものであれば、たとえ先を越されても、独自のやり方で問題の解決に貢献することが少なくありません。大きな目で見れば競争によって進歩が早められるわけです。しかし、競争といっても、科

学者は本来お互いに助け合うという基盤に立っての話ですから、互いに競争していても、アイデアを分かち合い、共同で研究することもしばしばあるのです」

――花房君、私は不明にも文化勲章の次はノーベル賞だと信じきっていた。しかし今、君の足跡を辿って、君が科学者として最も大切にしたものは何であったかを改めて教えられた。それは、自信と謙譲の“ノーブレス・オブリージ”精神であったのだ。最後の最後まで“戦友”の絆を結んでくれ、その上に君の真の生き様を見せてくれたことに、心からの敬愛と哀惜の念を捧げる。好漢、天にあって、科学の進むべき真の道に啓示を与えたまえ――

合掌

註1 “星の生徒”・・・昭和九年（一九三四）一月から一二月まで「少年倶楽部」に連載され、当時の軍国少年の血を沸かせた小説で、陸軍幼年学校生徒のことを“星の生徒”といい、その生活が細微にわたって描かれた。著者は山中峰太郎（1885～1966）。因みに山中峰太郎は、明治一八年大阪生まれ、三二年大阪陸軍幼年学校に入校、陸軍士官学校卒業（一九期）、近衛聯隊に勤務、四三年陸大に合格するも、何故か二ヵ年で退学した。以後、中国革命に参画、第三革命には孫文の参謀役となる。後年、文筆生活に入り、「敵中横断三百里」「亜細亜の曙」「大東の鉄人」「実録アジアの曙」ほか多数がある。

註2 大幼会・・・旧大阪陸軍幼年学校の卒業生・終戦時の在校生・生徒監・学校付武官・助教・文官教官より成る同窓会。現在遺族を含め約800名が加入。年二回機関紙「楠蔭」を発行し、二年に一度大阪と東京で交互に総会を開催している。

幼年学校は、全国で仙台、東京、名古屋、大阪、広島、熊本と、旧鎮台の置かれた箇所に、合計六校が設置された。終戦後廃校となったあと、それぞれに同窓組織をもち、連携機関として六幼会をもっている。

註3 赤堀四郎先生・・・「まんじ」の同人「松下魏三先生」が、過去一三回に亘って「文化勲章に輝く赤堀四郎の一生」を執筆されている。花房秀三郎君は、大阪

大学で奇しくも偉大な科学者赤堀四郎先生の門下生であった。

註4 ルリア（1912～1981）・・・イタリアのちアメリカに移籍。分子遺伝学者。一九六九年ノーベル生理医学賞受賞。細菌とファージの遺伝学の基礎を築いた。

註5 ラウス肉腫ウィルス・・・ペイトン・ラウス（1878～1970）――アメリカの病理学者、一九六六年ノーベル生理医学賞を受賞――が一九一一年に、ニワトリのがん細胞をすりつぶした濾過液を正常なニワトリに注射して、がんを起こすことに成功、濾過液中のウィルスは「ラウス肉腫ウィルス」と名づけられた。

註6 ヒトゲノム計画・・・人の性染色体やその遺伝子の構成を明らかにする解読計画。

註7 ビショップ（1936～）、バーマス（1938～）・・・ともにアメリカの微生物・免疫学者。一九八九年に揃ってノーベル賞受賞。

註8 二訓会・・・旧大阪陸軍幼年学校・第四八期第二訓育班のクラス会のこと。訓育班は通常の学校のクラスのことで、一訓育班約五〇名。五寝室に分かれて起居し、学習室は通しの大部屋に学習机を並べた。一訓育班を半数づつ二学班に分け、大阪の場合はそれぞれフランス語班、ロシア語班であった。

引用資料・・・主として、花房秀三郎「講演録」、大阪バイオサイエンス研究所発行の「新所長の紹介」（一九九八年一〇月一日発行）、同研究所が去る七月九日の「お別れの会」に配布した「追悼文」、および逝去後、日本経済新聞はじめ各紙に掲載された「追想録」「悼む」記事から引用した。

（二〇〇九・八・二一・記）

小説 家康と凧狂いの右近

―遠州菊川の義人 中条右近太夫物語―（1）

堀内永人

（一）

遠州三方ヶ原は、静岡県浜松市の北部地区、天竜川渓谷の西側に広がる台地である。

元亀三年（一五七二）十二月二十二日の薄暮、一頭の騎馬が、昨夜から降り積もった雪を跳ね飛ばし、三方ヶ原の台地を、矢のように西方へ駆けて行った。

この日、渺々とした三方ヶ原の台地には、霙を雑じえた遠州名物の空っ風が、音を立てて吹き荒れていた。

三方ヶ原の松林の間から、凄まじい形相で駆け抜けたその騎馬兵を見た農民は、死神が通り抜けたと思った。

三年前に居城を岡崎城から浜松城（旧名曳馬城）に移した徳川家康は、この日一万一千の兵を率いて、甲斐の武田信玄、勝頼父子の二万七千の精鋭を、三方ヶ原に迎えて死闘を演じた。

いわゆる「三方ヶ原の戦い」である。

片や武田信玄は、甲府の躑躅ヶ崎を出陣して、十二月十九日には遠州二俣城を攻め落とし、その余勢を駆って家康が籠城する浜松城向かって兵を進めた。

しかし信玄は、先を急ぐため作戦を変更して、家康が籠城する浜松城を横目に睨み、三方ヶ原から浜名湖の北の姫街道を通り、三河に向かった。

これを知った家康は、籠城を進言する家臣たちを抑えて、信玄の本隊の背後から武田軍に一撃を加えようと、野戦に打って出たのである。

しかし、兵力に大差のある家康軍は、無残にも信玄麾下山県昌景の赤備えの騎馬隊に一蹴されて、命からがら浜松城へ逃げ帰った。

その時家康は、恐怖のあまり、無意識のうちに馬上にて脱糞したとも伝えられている。

家康の生涯において、たった一度の敗戦がこの三方ヶ原の戦いである。

浜松城に逃げ帰った家康は、敗走してくる家臣たちを収容するため、すべての城門を大きく開き、ある限りの松明を燃して、城門を明々と照らした。

世にいう「空城計」である。

一方、家康を追撃してきた武田方の山県昌景は、

―かがり火に照らし出された城門を見て、家康が空城と見せかけて、攻め込んでくる敵軍を、一気にせん滅する空城の計略を用いたと思い、兵をまとめて、遠巻きに浜松城を包囲する作戦をとった―

と、後世の歴史には、そのように記されている。が、史実はそうではなかった。

武田軍に大敗して気が動顛した家康は、迫りくる敵軍を間直に見て、

（わが武運も、はやこれまで）

と三方原の南西の地、浜松城から北へ二キロほどの「犀ケ崖」の崖下にて、自決することを覚悟した。

その時、つき従う十数名の家臣の中から、夏目吉信（夏目漱石の祖先）が進み出て、

「殿、お待ち下され……まだ敗戦が決まったわけではありません。九死に一生を得る譬えもございます。ここは私が、殿の身代わりになって、武田軍を食い止めましょう。殿はその間にここを脱出して、後日を期して下さい」

と家康の身代わりを申し出た。

しかし、家臣思いの三十一歳の家康は、家臣の命と引き換えに、自らが助かることを潔しとせず、脱出を躊躇していた。

その間にも、山県勢の放つ矢弾が、家康の周囲に矢継ぎ早に打ち込まれてきた。

吉信は、さらに語気を強めて、

「殿、何をぐずぐずしておられます。もはや一刻の猶予もなりません。鎧兜をお脱ぎになり、それなる足軽の胴着を身に付けて、すぐに立ち退き下され」

と急き立てた。

家康は、吉信の忠諫に心を打たれ、

「あい解った。吉信の言うとおり、ここはひとまずそちに任せて、予は捲土重来を期すことにしよう。吉信、相済まぬ……」

と恥を忍んで足軽風情に身をやつし、落武者となって再起を図ることになったのである。

吉信は、家康の脱出を見届けると、家康が脱いだ甲冑を身にまとい、愛馬を駆って、

「我こそは徳川家康なり！　我が首級欲しくば、いざ掛かって参れ！」

と大音声を上げて、山県勢の真っただ中に、馬を乗り入れた。

山県勢の将兵は、家康の首級を取って「一番手柄」を挙げようと、夏目吉信目がけて殺到した。

敵兵の目が、吉信に向いたその間に、足軽に身を変えした家康は、供も連れずにただ一人、犀ケ崖から三方ヶ原の松林を駆け抜けて、浜名湖方面に落ちていった。

巻頭の、三方ヶ原台地のシーンは、この危機を脱するときの家康の姿であった。

犀ケ崖の危機を脱した家康は、佐鳴湖の北を通り、約八キロの暗闇を一気に駆けた。

そして午後八時頃、浜名湖畔に近い遠州浜名郡雄踏村（現在の浜松市西区雄踏町）の地侍、釈家に助力を求めて駆け込んだ。

―実はこのとき、夏目吉信の他に、もう一人、家康の影武者がいたのである。

家康が犀ケ崖から雄踏村に落ち延びた頃、この影武者は、旗本成瀬正成ら数騎と共に浜松城に逃げ込み、家康になり済まして作戦の指揮をとったのである。

しかし、歴史上には、その影武者の名は、残っていない。

影武者は、あくまでも影の存在であり、後日、家康本人が浜松城に帰ってきた時には、誰にも気づかれることなく、城から姿を消していた。

それが影武者というものである―

一方家康は、かねてより、万が一、浜松城が敵に攻め落とされて、城からの脱出を余儀なくされた場合の隠れ場所を、決めていたのである。

家康は、浜名湖に近い、有力な地侍、釈藤兵衛と秘密裡に、隠れ家の約束を交わしていたのであった。

いまその約束が、効を奏せんとしているのである。

暗闇の中、釈家の庭先に辿り着いた家康の身体は、綿のように疲労困憊していた。

「もーし、お頼み申す」

家康は、暗闇の中、辺りを憚って、釈家のくぐり戸を遠慮がちに叩いて、小声で助けを求めた。

しばらくすると、

（ガタゴト）

と音がして、母屋のくぐり戸がわずかに開き、屋内から、

「なんのご用でしょうか……」

と若い女性の声がした。

家康は、いざるようにくぐり戸に近づき、その家人を見て、

（はっ）

と驚いた。

囲炉裏火のかすかな光に照らされた、その女性の横顔は、

（どきっ）

とするほど美しかった。

家康は、囲炉裏火に照らされた屋内を、そっと窺い、

「夜分に申し訳ない。釈家のあるじ殿はご在宅か。しばし休息させてもらいたい」

と、声を抑えて頼んだ。

するとその女性は、微かにほほ笑み、

（家康には微笑んだように見えた）

わずかに頭を下げると、

（ガタゴト）

と、いま開けたばかりのくぐり戸を閉めて、奥に引っ込んでしまった。

（しまった、来るのではなかったか……。落ち目の私を匿ってくれるような、もの好きは、この世の中にはいないのだ）

―戦国時代の地侍や土豪には、日和見主義者が多かった。釈家とて、同じ穴の狢だ―

家康は、一瞬、地侍の釈家を頼った判断の甘さを、悔やみ、くぐり戸の前にへたり込んでしまった。

（これからどうしたものか……。もはや頼るところもないし）

家康は、途方に暮れた。

そのとき家康の頭の中に、六歳のときから今川義元の人質になって、岡崎から駿府（現在の静岡）へ送られ、それから幸せとは無縁の日々を送って今日に至った二十五年間のことごとが、走馬燈のように脳裏に浮かんで消えた。

家康は、一瞬幻想の世界をさ迷い、ハッと我に返った。

さきほどの女性が去ってから、七、八分も経過しただろうか。再び、ガタゴトと音を立ててくぐり戸が開き、今度は、五十台の夫婦が姿を見せた。

この家の主釈藤兵衛と妻女のふみである。

そして、ふみの後ろに隠れるように、先ほどの女性（その名は釈よし）が従っていた。

藤兵衛は、くぐり戸の外にたたずむ、中背で小太りの雑兵姿の家康を、星明かりに透かしてじっと見ていたが、その人物が家康だと知ると、慌てて戸外に出た。

「やや、これはお城のお館様ではございませんか。そのようなお姿で如何なされましたか……　さあさあ、中へお入りくだされ」

と、家康の手を取らんばかりに、家の中に招じ入れた。

「面目ない、釈どの。予が兵法未熟のため、三方ヶ原で武田に敗北した。そのうえ、退路を断たれて城に帰ることもできず、こうして落ち延びてきたのだ。武田の落武者狩りが終わるまで、しばらくここで匿ってもらえないか。お頼み申す。この通りだ……」

と家康は、炉辺の上がり框に両手をつき、深々と頭を下げて頼むのだった。驚いた藤兵衛は、

「お館様、お手をお上げなされよ。なんで私めに頭をお下げになりますのじゃ。勝敗は時の運。お気を強くお持

ちなされよ……。さぁ、こちらにお上がり下され」
と家康を囲炉裏に招き、大束の粗朶（木の小枝）を掴んで、囲炉裏の中へ投げ込んだ。
囲炉裏の火は、勢いよく燃え上がって、家康の顔を明々と照らした。
家康の顔は、朝からの戦闘で、疲れ切ってどす黒く汚れ、身に付けているモノも泥まみれであった。
やがて自在鉤に吊るされた鉄瓶の湯が、
（しんしん）
と音をたてて沸いてきた。
藤兵衛は、熱い湯を大振りの茶碗に汲んで、
「お館様、まず白湯を一杯飲んで、お身体を温め下され。そのうちに雑炊が炊けてきましょうに」
と言ってもてなす一方、これから家康を、どのように匿うか、その方法を、あれこれと思案した。
こうして家康は、ひとまず、雄踏村の釈家に身を寄せることになったが、決して安心していられる訳ではなかった。
浜松城を包囲した武田の重臣山県昌景は、城門を全開して、無防備状態をさらけだした徳川側の守りに、不審を抱いた。
（これはなにか、策略があるな……）
と思い、城攻めを強行せずに、浜松城を兵糧攻めにする、長期戦の構えをとった。

しかしその一方で、家康が城外のどこかに潜伏しているのではないか、とも疑っていたのである。
もし家康が浜松から落ち延びたとするならば、それはどこか
—浜松城の南は遠州灘の海浜で、隠れるところはない。
北と東は、武田軍の征圧下にある。
残るは浜松城の西方、浜名湖周辺であろう—
そう判断した昌景は、五千の部下の中から家康探索隊十班を編成した。
そして昌景は、家康探索隊に、
「蟻の這い出る隙もないように、片端の家からしらみつぶしに調べて、家康を探し出せ。目残しのないように、ぬかるな……」
と命じた。
一方、引佐郡雄踏村の釈家に匿われた家康は、その翌日から、釈家の家人を装って、浜松城へ帰城できるチャンスを窺った。
しかし、武田軍の探索の手が厳しく、釈家から一歩も外に出ることができなかった。
家康は、釈家の当主藤兵衛の計らいで、釈家の掛り人（世話を受けている人）、釈よしと仮の夫婦になって、敵の探索から逃れることになった。

よしは、家康が三方ヶ原から逃れて、雄踏村の釈家に辿り着いたときに、くぐり戸のところで、最初に会った女性である。
よしは、今から四年前の十八歳のとき、縁あって、遠州の突端、御前崎岬からほど近い城東郡嶺田村からここ引佐郡雄踏村の釈家の長男重蔵に嫁いで来た。
よしの夫、釈重蔵は、今から二年前、家康に従って織田信長の浅井、朝倉攻めに参戦し、討ち死にしていたのである。
この戦死した重蔵とよしの間には、今年数えで二歳になる「松吉」という男の子があった。
よしは、重蔵が二年前に近江へ出陣するときに、すでに松吉を身ごもっていたのである。
しかし、重蔵は、松吉が誕生する前に戦死していたので、松吉は、生まれたときから、父親の顔を知らなかった。
そんな経緯があったので、家康は、二歳になる松吉の仮の父親ということにして、釈家の居候になったのである。

家康が釈家に匿われてから、三日後の昼下がり（午後二時頃）、遂に武田軍の家康探索隊が、釈家に現れた。
この日は、三方ヶ原の戦いがあった日とは打って変わって、風もなく、小春日和を思わすような、暖かな日であった。
家康は、釈家の奥座敷の縁側で、松吉の相手をしながら、武具を繕っていた。
探索隊の頭とおぼしい髭武者が、目ざとく家康の姿を見つけ、
「怪しげな奴……おまえは何者か？」
と誰何した。すると、縁側で無心に遊んでいた二歳の松吉が、髭武者たちの剣幕におびえて、
「おとう、こわいよ」
と言って、急いで家康の背中に隠れて、髭武者の顔をこわごわと見つめていた。
物事の正否を理解できない幼い松吉は、母親から家康を父親だと教えられていたので、自然のうちに、
（おとう……）
という言葉が口から出たのであった。
髭武者は、それでもなお胡散臭い目つきで、家康の顔を見ていたが、
「おまえは、まことにこの家の者か。名は何と申す？」
と問いただしてきた。
家康は、松吉の父親になりきって、
「おれは重蔵と申す。釈重蔵でござる」
と答えると、さらに髭武者は、
「百姓か？　ならば手を見せろ……」
と言って、家康の掌を調べようとした。

―掌を見れば、武術の修業をした武士と、鍬を持って農作業に明け暮れる農民とは、ひと目で分かるのである―

家康は内心、

（しまった、もう駄目だ）

と観念して目を閉じた。するとそのとき、

「おまえさま、誰か来ているのかえ？」

と、家康の仮の妻女となったよしが、家の奥から声を掛けてきた。

髭武者は、家康の手を調べることを止めて、よしの声がする方を見た。

よしが奥から縁側に姿を見せると、髭武者は、改めて家康とよし、松吉の三人を見くらべて、

「その方どもは、間違いなく夫婦であるな」

と念押しし、蟹が念仏を唱えるように、何やらぶつぶつ言いながら、手下の雑兵に目くばせすると、馬に乗って引き上げて行った。

天の助けか、幼子の松吉が、家康に向って、

「おとう……」

と言って慕い寄り、よしがタイミングよく、

「おまえさま……」

と、家康に声を掛けたため、窮地を脱することができたのであった。家康は、

「よし、松吉、助かった。その方らのお蔭で、予は命長らえることができた。このことは終世忘れはしない。ありがたや……」

と感謝の言葉を述べながら、松吉を膝に載せて、頬擦りするのであった。

松吉は、家康の無精ひげが痛かったのか、家康の腕の中でイヤイヤをしたが、家康の膝の上が、よほど居心地よいのか、

「キャッキャ……」

といって、甘えていた。

家康は、よほど嬉しかったのであろう。

「松吉、そちは母と共に予を救ってくれた命の恩人だ。これからは、松吉を改めて『右近』と名乗るがよい。右近は貴人を護る役所の名称で、誉れ高き名である。姓は『中条』がよかろう。松吉、よいな、『中条右近』と名乗れよ」

と家康は、頑是ない松吉の将来に期待して、そう命名したのである。

―この物語でも、以後「釈松吉」を、『中条右近』と呼ぶことにする―

つづく

今川風雲録（六）

千坂精一

後継の悶着

家督を継ぐことになった彦五郎は、名を範忠と改めた。

だが、弟千代萩丸を選んだ父範政に同調した国人たちとの内訌は燻りつづけて、ついに火の手が上がった。

それは、父の葬儀をおえた範忠が駿府館に入って国政を執りはじめて間もないころであった。

三浦、進藤、狩野、富士大宮司、興津らの国人たちが範忠の新守護就任に反対して叛乱を起こしたのである。

範忠派の岡部、朝比奈、矢部らの諸将が防戦から攻勢に転じて、最後の砦になった狩野氏の居城安倍城（静岡市葵区内牧）の出城で安倍川上流の河内川との合流点にある湯島城（静岡市葵区油島）を陥とし鎮定した。

永享の乱

四代公方持氏は叛逆心旺盛で幕府と軋轢を繰り返した。

そのたびに関東管領上杉憲實が幕府に謝罪しては持氏を戒めるのだが、持氏はそんな憲實が鬱陶しくなり、両者のあいだは次第に険悪な状態になっていった。

佐竹、小栗、宇都宮などの諸豪族はそんな持氏を見限り、中小武士たちも上野、武蔵一揆などを結成して持氏に反抗していったので幕府もこの機に乗じて豪族たちのなかに〈京都御扶持衆〉を設定して持氏を挑発した。

将軍義教が富士遊覧と称して駿河まで下って持氏を威嚇したとき懸命に諫止した三寶院滿濟が永享七年（一四三五）六月十三日に五十八歳で世を去ると、義教は誰憚ることなく鎌倉府打倒を叫ぶようになっていった。

そのころの鎌倉は、公方持氏と関東管領上杉憲實のあいだの亀裂がますます深刻な状態になってきていた。

永享十年（一四三八）六月の持氏嫡男賢王丸元服のとき、持氏は将軍の偏諱を受ける仕来りを無視して、源義家が石清水八幡宮で元服した故事に則り鶴岡八幡宮で義久と名告らせたことに異議を申し立てた憲實を烈火の如く怒って上意討ちにしようとした。

憲實は難を避けて、上野平井（藤岡市）へ帰国した。

持氏は宅間上杉憲直、一色直兼らに憲實討伐を命じ、みずからも武蔵高安寺（府中市片町）に出陣した。

この公方と管領の対立に因る関東武士たちの動揺を鎌倉府攻撃の好機とみた将軍義教は、八月十五日の石清水八幡宮での放生会を征討軍結成日と定め、境内に勢揃いさせたところでみずから祭儀を指揮する上卿をつとめた。

祭儀のあと幕府軍は、鎌倉目指して進撃を開始した。

このとき義教はみずからも出陣しようとしたが、管領細川持之らに諫止されてやむなく思いとどまった。

これより半月まえに、範忠は管領細川持之から、

「関東管領上杉憲實に合力して、公方持氏を討つべし」

との将軍義教の出兵指示を受けていた。

範忠は、ただちに諸将を駿府城に集めて伝達すると、

「関東と境を接するわれらは幕府軍の尖兵である」

ことを全軍に認識させて士気を鼓舞するよう命じた。

範忠は逸早く相模に侵攻し、遅れて甲斐や信濃の諸将も参陣したが、容易に雌雄を決するにはいたらなかった。

戦局が動いたのは上杉持房を主将とする越前浅倉孝景、美濃土岐持益らの幕府大軍が加わってからである。

幕府軍が早川尻で上杉範直らを破ると、千葉胤直が寝返り、留守将三浦時高が謀叛して鎌倉を焼き払った。

この幕府軍の助勢を得た上杉憲實は、平井城を出て武蔵分倍河原（府中市）まで出張って布陣すると、公方側についていた諸将がつぎつぎに投降してきた。

範忠は、今川軍を率いて鎌倉へ攻め込み、持氏と篠川御所足利滿直を二階堂の永安寺に追い込み幽閉した。

さらに範忠は、金澤稱名寺に持氏近臣の上杉憲直と一色直兼を攻めて自害させたので宅間上杉家は衰微した。

憲實は、持氏をその稱名寺に移して出家させると、幕府に恭順の意を伝えて持氏の助命と嫡男義久の公方家相続を嘆願して主家の存続を希ったが、許されなかった。

憲實はなおも将軍義教に懇願をつづけたが、持氏を庇護することは一味同類であるとの嫌疑をかけられるに及んで、憲實はやむなく意を決せざるを得なくなった。

翌十一年正月、将軍義教は憲實に最後通告してきた。

憲實はもはやこれまでと、二月十日上杉持朝と千葉胤直に永安寺を攻撃させて、持氏と叔父滿直を自害させると、二月十八日に嫡男義久を鎌倉報國寺で自害させた。

幕命とはいえ自責の念にかられた憲實は、関東管領職を弟清方に譲って出家すると、伊豆國清寺に隠棲した。

範忠は、幕府軍の尖兵として鎌倉府を打倒して公方持氏を自害に追い込んだ功績を挙げはしたが、出家隠棲した管領上杉憲實の心中を慮ると後味が悪かった。

結城合戦

公方持氏は斃したものの、遺子春王丸、安王丸、永壽王丸を取り逃がしてしまった幕府軍は、躍起になって探索をつづけたのだがその行方は杳として知れなかった。

鎌倉を脱出した三人のうち、春王丸と安王丸は結城、里見、小山、宇都宮ら北関東の豪族たちに迎えられて、平將門を討伐した田原藤太こと藤原秀郷の後裔結城氏朝の下總結城城（茨城県結城市）に匿われていた。

氏朝は持氏自害一年後の永享十二年（一四四〇）三月十五日、春王丸、安王丸を擁して弔合戦の狼煙を挙げた。

それは五百ほどの軍勢にすぎなかったが、しかし鎌倉公方遺子の名で御内書を発給すれば諸豪族が馳せ参じて大きな動乱に発展するやも知れなかった。

隠棲していた憲實は、公方持氏と嫡男義久を斃した報復を恐れて、関東管領に据えた弟清方に討伐を命じた。

清方は、深谷城（深谷市）の廳鼻和上杉憲信と白井城（渋川市）の家宰長尾景仲に出陣を命じた。

両将は苦林（坂戸市）と入間川（狭山市）を陣所にして武蔵や上野の国人たちが参集してくるのを待った。

苦林と入間川はどちらも鎌倉街道沿いにあった。

合流した両軍は利根川を渡って下總に入ったが、途中氏朝与党の抵抗に遭って遅々としてすすまなかった。

管領軍より早く持氏の遺臣や下野の小山廣朝、宇都宮伊豫守、桃井憲義、那須資重、上野の岩松持國らが氏朝に加担すべく結城城に駆け付けて守りを固めていた。

彼らはいずれも分家で、この頃は鎌倉時代に分割相続で分立した一族が惣領の統制のもとに集結した在地領主の同族結合形態である惣領制が解体していて同族争いが起こり、戦国乱世の様相を呈しはじめていた。

嫡男単独相続制定着に移行してゆく端境期にあった。

ともあれ結城討伐を手古摺っている管領軍の不甲斐なさに業を煮やした将軍義教は、範忠と遠江の斯波持種に助勢を命ずると、併せて関東の諸将にも動員令を発した。

範忠は幕府尖兵としての役目を果たすべく、また斯波勢に後れをとってはならじと勇躍駿府城を出陣した。

相模、武蔵を通過して利根川を渡った今川軍は、結城与党の抵抗を切り抜けて下總結城城に迫った。

このころ、隠棲していた上杉憲實も大軍を率いて下野小山（栃木県小山市）まで出陣してきていた。

堅固な結城城は半年攻めても陥ちないので、攻囲軍は犠牲の出る攻城戦を諦めて、兵糧攻めの策に出た。

籠城軍は討って出ることなく、攻城軍も攻撃しないとあっては休戦状態のままその年は暮れてしまった。

二月に嘉吉と改元される永享十三年（一四四一）元旦、突如として包囲軍が攻撃を仕掛けて戦端が開かれた。

そして、四月十六日――。ついに結城城は陥落した。

結城氏朝と嫡男持朝は戦死。

持氏の遺子春王丸と安王丸は、捕えられて京へ護送される途中美濃の垂井（岐阜県不破郡垂井町）で斬られた。

もう一人、信濃岩村田（佐久市）の大井持光の許に潜んでいた永壽王丸も探し出されて殺されるところであったが、幼児ゆえに不憫に思った管領細川持之の計らいで、美濃守護土岐持益に預けられた。

この永壽王丸が、のちの古河公方足利成氏である。

範忠は、この合戦の功績を称賛されて、将軍義教から、「今川天下一苗字」の恩賞を受けた。

つまり、〈今川〉は足利将軍家が重きを置く苗字であるから嫡流家以外名告ってはならぬということである。

これにより庶流家は居住する地名に名告りを変えた。

たとえば、範忠の弟で父範政が後継者に希んだあの千代萩丸（範頼）の子範滿は〈小鹿〉に、了俊（貞世）の系は〈堀越〉〈賴名〉にそれぞれ苗字を変えた。

このとき同時に範忠は、〈室町幕府副将軍〉に補されたという話があるが、室町幕府に副将軍制はないから幕閣に一目置かれる存在になったということであろう。

嘉吉の乱

結城合戦から一年後の嘉吉元年（一四四一）六月、こんどは将軍義教自身が誘殺される大事件が起こった。

陰気な義教は異常なほど神経質で、独裁者にありがちな気に入らぬと発作的に怒鳴り散らす癇癪持ちであった。

永享のはじめ、大和で土一揆が起こり南北の豪族が対立したとき、幕府は北の筒井を援けて武力干渉した。

南の越智、箸尾らは後南朝の残党と連動したり、将軍義教の弟大覺寺義昭を担いだりして抵抗をつづけた。

弟の謀叛を怒った義教は、みずから出陣しようとしたが諸将に諫止されたので、幕府軍を一挙に増強して細川持常、武田信榮、一色義貫、土岐持賴らを派遣した。

二年後に越智、箸尾を斃して反幕軍を鎮圧したが、一色と土岐は義教に疑念を抱かれ陣中で殺されてしまった。

専制を強化する義教の所業は留まる所を知らず、小貳嘉賴を赦して九州の諸将に大友親著・持直らを討たせたり、大和の陣の功労者赤松義雅の所領を没収すると、ついで畠山持國の家督を罷めさせて弟持永に継がせたりするなどの勝手気儘な振る舞いに、加賀守護富樫教家などは義教の怒りに触れると逸早く京を出奔してしまった。

こうして、侍所の有力守護たちをつぎつぎに取潰したり介入したりして弾圧をつづける義教は脅威だった。

播磨、備前、美作守護の赤松滿祐は義教に侍所長官に登用されていたが、ちかごろの疎隔が無気味であった。

つぎは自分が粛清されるのではないかと不安になっているところへ、領国召し上げの噂がながれてきた。

恐怖の滿祐は、座して待つより義教暗殺を企てた。

そして、嘉吉元年六月二十四日、滿祐の嫡男教康は結城合戦勝利の祝賀という口実を設けて、自邸に将軍義教をはじめ幕閣の人たちを招待して実行に移した。

宴酣になって猿楽能が催され、音阿彌が鵜羽を舞っているそのとき刺客が乱入してきて義教の首を討ち、山名熙貴を斬殺し、細川持春、大内持世に重傷を負わせたが、管領細川持之、侍所山名持豐（宗全）は難を逃れた。

将軍が斬殺されるという未曽有の大事が出来したのに、幕府はすぐに赤松父子を討伐しようとはしなかった。

冷酷無比の独裁者だった義教は忌み嫌われ幕閣でも持て余していたので、自業自得と嘲笑されていたのだった。

管領細川持之は、謀叛人討伐より次期将軍を決めるのが先決と考えた。義教のときくじに外れた仁和寺法尊と梶井門跡義承の二人が担ぎ出されての再燃をおそれた。

持之は素早く義教の嫡男で八歳の千也茶丸を後継者に定めると、朝廷から赤松父子追討の綸旨を受けさせた。

いっぽう赤松滿祐は、天下取りを狙ったのではなく将軍義教弑逆が目的であったから、成功するとさっさと本拠の播磨坂本城（姫路市）へ引き揚げ、幕府追討軍を迎え撃つ準備をととのえて玉砕を覚悟した。

山名持豐率いる追討軍は八月十九日に坂本城を攻撃、敗れた赤松軍は城ノ山城（たつの市）へ退いたが防戦むなしく九月十日落城、滿祐は自害し、教康は伊勢に逃れたが二十九日に北畠教具に討たれて叛乱は鎮定された。

この将軍義教誘殺の報らせが駿府館に届いたとき、範忠はただちに軍勢を率いて上洛しようとはしなかった。

範忠は、侍所家赤松滿祐の蹶起が鎌倉公方残党との連携かも知れぬと疑った。結城合戦で敗れた公方支持派の動きが気になって迂闊に上洛はできなかったのである。

その後赤松父子が誅伐されたとの報らせが届き、関東のことは杞憂に過ぎなかったので範忠は安堵した。

六代将軍義教と日野重子の嫡男に生まれた千也茶丸は、赤松父子が討伐された翌年九歳で名を義勝とあらため管領細川持之の推挙で七代将軍になったが、翌年赤痢に罹り薬石の効なくわずか十歳で死去してしまった。

幕府は僧籍に入るはずの八歳の弟三春に家督を継がせることにして後花園帝から義成の名を賜わったが、征夷大将軍任命は六年後でそのあいだ将軍は空位であった。

古河公方足利成氏

文安六年（一四四九）四月二十九日、十四歳になった義成は征夷大将軍に任じられて八代将軍の座に就いた。

この義成が十八歳のとき名を義政とあらためて應仁の乱

のあと銀閣寺を造営して東山文化の花を咲かせる。

幕府は将軍空位がつづくあいだに管領が細川持之から畠山持國に代わり、さらに細川勝元に代わるという混乱がつづいたが、東國のほうも鎌倉公方と関東管領が空位になってしまっていて統治者不在状態になっていた。

幕府は隠棲した上杉憲實に再三復帰を要請したが頑なに応ぜず、後花園帝の綸旨をも固辞して翻意しなかった。

憲實は、いかに暴君だったとはいえ幕命によりやむなく主君を鎌倉永安寺に追い込んで自害させたことが自責の念に堪えず、下野の足利学校を修造して『五經註疎』を寄付したり、校規三箇条を定めたりしたのを最後にして以後は世捨人に徹することを希んだのであろう。

憲實は、管領ゆえに公方持氏との対立を余儀なくされたその心労から息子には継がせまいと図って嫡男を早くから僧籍に入れておいたので、弟清方が管領になったのだが、結城から凱旋の途中突然死してしまった。

公方・管領の空席を懸念する清方の二男房定はじめ関東の諸将たちは、前公方持氏の遺子永壽王丸を擁立した。

幕府宿老たちはそれが持氏の末子であることで躊躇したが、ほかに適任者はなく二年後にようやく認可した。

公方持氏が自害してから十年後の寶徳元年（一四四九）九月九日、十六歳で元服した永壽王丸は名を成氏とあらためて五代公方となり鎌倉淨明寺村の屋敷に入った。

管領上杉憲忠も十七歳だから少年政権の誕生である。

憲實は、持氏に叛いた謝罪の行脚だといって修行者姿に草鞋履きで隠棲先から西国目指して旅立って行った。

公方も管領も少年なので政務は家臣たちが執行した。

管領の山内上杉家は家宰の長尾景仲、扇谷上杉家も当主顯房が若年なので家宰の太田資清（道眞）が代行した。

いっぽう公方成氏の周辺には当然ながら永享の乱や結城合戦で公方を支持した関東の豪族たちが集まった。

里見、結城、小山、宇都宮、千葉らの諸氏である。

この敵対した両者が鎌倉府に出仕して顔を付き合わせたのであるから、平穏で推移するはずはなかった。

駿府館の範忠も、自害した持氏の子の成氏が公方、追い詰めた憲實の子の憲忠が管領では争乱の因になると推測して、いつでも鎮圧できる態勢を整えて待機した。

その予感は的中して公方派が管領派を挑発しつづけた。

その挑発に乗って管領軍五百騎が成氏御所を襲った。

だが成氏は、動向を察知して前夜江ノ島へ脱出した。

機先を制したつもりが空振りに終わった管領軍は、由比ケ濱で公方軍と戦ったが多勢に無勢で抗し難く、扇谷上杉家の所領相模糟屋荘（神奈川県伊勢原市）へ退いた。

この敗報に管領憲忠、扇谷上杉持朝・顯房父子は鎌倉を出て相模七澤要害（神奈川県厚木市）へ籠もった。

公方側の勝利で戦いは終わったが、幕府が仲介に入っても両者の蟠りは解けず、江ノ島の成氏も七澤要害の憲忠も鎌倉へ帰らず相手方の出方を窺い睨み合っていた。

さきに帰還したのは公方成氏のほうで、八月四日西御門の屋敷に入ると、憲忠も十一月に帰邸した。

だが、これで双方和解したわけではなかった。公方派豪族たちの管領派所領横領事件が相次いで起こった。

このころ幕府では畠山持國と細川勝元の政権争いがつづいていて十年のあいだに畠山・細川と管領が代わり、享徳元年（一四五二）十一月にふたたび細川勝元が管領を奪取して以後十二年間長期政権がつづくなかで翌年六月十八歳になった将軍義成が名を義政と改めた。

この管領交代が鎌倉府に政変を起こさせる因になった。

細川勝元は幕府に反抗を繰り返す鎌倉公方家を苦々しく思っていたので、成氏に対して強圧的な態度をとった。

それを成氏は、憲忠がそうさせていると看て取った。

誤解のまま成氏は享徳三年（一四五四）十二月二十七日、憲忠主従二十二名を西御門邸に呼び寄せて誘殺した。

この弱冠二十二歳の上杉一族の頭領憲忠の横死を契機にして、公方成氏と上杉一族との全面対決になってゆく。

翌享徳四年正月、山内家家宰長尾景仲は憲忠の弟十七歳の房顯を奉じて上野平井城（群馬県藤岡市）で態勢を整えると、扇谷上杉持朝嫡男顯房と犬懸上杉禪秀二男憲秋を大将に据え上野と武蔵の一揆勢を率いて南下した。

いっぽう成氏は、武蔵府中に北上して高安寺を陣所にした。ここは歴代の公方が陣屋にしたところであった。

二十一日、両軍は分倍河原で激突して立川のあたりまで広がる激戦となったが、上杉方が破れ上杉顯房、憲秋の両将とも負傷して自害したので長尾景仲は軍勢をまとめて常陸の小栗城（茨城県築西市）へ退いた。

幕府ではこの関東の動乱の報告を受けると、管領細川勝元は偶々上洛していた今川範忠に成氏追討を命じた。

範忠は、ただちに供勢を率いて帰国すると、駿府城に待機していた軍勢を整えて勇躍関東へ出陣した。

幕府は、越後守護上杉房定にも成氏討伐を命じた。

閏四月成氏軍は小栗城を攻撃、上杉房顯、長尾景仲は下野天明（栃木県佐野市）に退いたので成氏も下野小山城（小山市）に入って両軍の睨み合いがつづいた。

範忠率いる今川軍は六月十六日に鎌倉へ到着すると、防衛軍を一蹴して御所をはじめ谷七郷を悉く焼払ってしまったので、鎌倉を奪われた成氏はやむなく鎌倉府御料所下總下河邊荘古河（茨城県古河市）に御座所を移したので、以後は〈古河公方〉と称されることになる。

このあと範忠は、帰国の途中で俄かの病に罹り突然身罷ってしまったのだが、史書はその詳細を伝えていない。

（つづく）

誠忠の茶園（二）

太田精一

師範格の旗本たちは、外国御用掛小笠原長行と直接交渉に当った川路聖謨を非難した。

「薩摩藩士がエゲレス人を切ったからといって何の不都合がござろう。そもそも大名行列を馬に乗ったまま見物するなど無礼千万である。エゲレス人が、日本の習わしを知らなかったために起こった不幸な事件でござった。ただ、いきなり切り殺す必要があったかどうか。もし、払うとしても賠償金ではなく、見舞金程度に留め、それも薩摩に支払わせるべきである。何故幕府が払わなければならないのか理解に苦しむ。なあ、大草殿」

中條景昭は、大草高重に同意を求めた。

「賠償金を支払うとしても薩摩が払うべきで、とりあえず幕府は立て替えただけではあるまいか。外国との交渉の窓口は、幕府が一手に引き受けるということにしなければならないからだ。日本の大名行列についての慣わしを知らなかったとはいえ、非はエゲレス側にある。日本

三、攘夷の蹉跌

(一) 生麦事件の代償

生麦事件は、内憂外患に苦しむ幕府に、さらに大きな課題を突きつけることになった。島津久光の行列の従士が武州生麦村で英国人を殺傷したこの事件は、責任の所在を巡って幕府と島津藩との対立が生まれた。

それだけではない。交渉の過程を通じて、幕府の権威失墜を国の内外に露呈することになったのである。

英国代理公使ニールは、幕府に殺害者の引渡しと十万ポンドの賠償金を要求した。ニールは、この賠償金を支払わなければ、英国艦隊を横浜港に入港させ、武力行使も辞さないと幕府を脅したのだ。

幕府は、この圧力に屈して、十万ポンドを支払った。

攘夷論者は、この措置を幕府の弱腰外交と批判している。

幕臣の中からも批判の声が上がった。ことに講武所の

にいる以上、日本の慣習に従うべきであろう。賠償金などという名目では、払わないほうが良い」

高重は、責任の所在と外交の一元化についての見解を述べた。

「エゲレスは、どうもそれだけでは済ませたくないようじゃ。薩摩にも賠償金の支払いと犯人の差出しを要求して軍艦を鹿児島に派遣するという噂がある。エゲレスは、弱いと見れば脅しをかけて金をむしり取ろうとしているのだ」

景昭はいまいましそうに言った。

生麦事件に対する幕府の対応は、朝廷の耳にも達した。幕府の弱腰外交を非難する声が朝廷内にも高まり、孝明天皇は、攘夷決行の日を具体的に示すよう上洛中の家茂に要求した。家茂は、苦し紛れにその日を文久三年（一八六三）五月十日と回答したのである。

しかし、欧米諸国と通商条約を結んでしまった幕府には、攘夷の決行などできるはずがない。切羽詰まった幕府は、外国御用掛小笠原長行を通じて、英、仏両国に横浜港閉鎖の交渉をした。が、歯牙にもかけられなかった。

英国は、十万ポンドの賠償金を幕府に支払わせるだけでは満足しなかった。薩摩に対しても、犯人の処刑と賠償金二万五千ポンドの要求を突きつけたのである。薩摩は、これを拒否した。

ニールは、外交交渉では解決できないと判断し、実力行使に出た。

六月二十二日、キューバ提督率いる英国軍艦七隻が、鹿児島湾に入港、薩摩との砲撃戦が開始された。薩英戦争である。戦闘は、激烈をきわめ、英国軍艦も損傷し、死傷者を出している。薩摩側の損害も大きく、砲台が破壊され、民家にも被害が及んだ。

この戦いによって英国は、薩摩の実力を見直し、薩摩は、攘夷が困難であることを悟った。それから英国と薩摩は、急速に接近することになるのである。

一方、長州は、幕府の約束した攘夷決行の文久三年五月十日に、関門海峡を航行する米国商船を砲撃。同月二十三日には、フランス軍艦、その三日後には、オランダ軍艦を砲撃した。フランス、オランダ軍艦は、横浜港に回港し、直ちに長州の暴挙を幕府に抗議した。

ところが、幕府は、強硬に攘夷を主張する長州の暴走を止めることができなかった。

幕府の対応に不満を募らせたイギリス、アメリカ、フランス、オランダの四国は、翌年の元治元年（一八六四）八月、艦船十七隻の連合艦隊を組織し、報復のため長州へ出撃、陸戦隊を上陸させて砲台を占拠した。長州は、惨敗し、停戦を要求して、関門海峡の自由航行を認めたのである。

攘夷決行のため、長州が、外国船を砲撃した直後の文

久三年八月京都で政変が起こっている。攘夷派の少壮公卿と結びついた長州が、薩摩と会津によって京都を追われたのである。京都における政治的発言力を失った長州は、元治元年七月、藩兵を率いて京都に攻め上ったが、会津、桑名、薩摩軍によって敗退した。いわゆる禁門（蛤御門）の変である。

幕府は、禁門の変の直後、天皇に長州追討令を要請。直ちに九州、四国、中国の大名二一藩に出兵を命じ、一一月一八日に総攻撃を開始することに決定した。だが、長州は、幕府に謝罪し降伏したため、攻撃を免れた。

禁門の変、下関戦争と相次いで敗れた長州は、内部紛争が起き、これまでの尊皇攘夷から勤皇倒幕へと藩論が大きく傾いて行った。

（二）高橋、山岡の蟄居

幕府は、新徴組を江戸に帰還させ、文久三年四月、清河を殺害したものの、二〇〇人を超す浪士たちの取扱に苦慮した。ほっておけば何をするか分からない撃剣集団である。

幕府は、懐柔策に出た。それぞれに屋敷を与え、手当を出して、庄内藩お預りとし、江戸市中取締りに当らせることにしたのである。

高橋精一と山岡鉄太郎は、文久三年二月、将軍家茂警護と新徴組監督のために京に上っている。精一は、京で

鵜殿鳩翁（うどのきゅうおう）に変わり新徴組取扱となり、鉄太郎は、取締役となった。そのことが後に、二人にとって、災いとなるのである。

二人は、新徴組を引き連れて江戸に帰還した。

帰還後「新徴組を攘夷決行のための朝廷の親衛隊にしようとする清河の意図を見抜けなかった」として責めを負い、蟄居を命ぜられたのである。

また、速見又四郎、佐々木只三郎をはじめ京で出役を仰せ付けられた幕臣たちも監督不行届の咎で、免職となっている。

精一、鉄太郎の蟄居の噂は、城中を駆け巡り、両人が幕府への反逆を企てたとまで広がってしまった。

「大変だ。御老中水野様のお声がかりで、奥州相馬、越後の新発田藩が、二千の兵を率いて討手に来るという噂がある。どうやら反逆の疑いをかけられているらしい。逃げたほうがいい」

精一の門弟井戸金平が馬に乗って駆けつけて来た。夜明けも近い。外はひんやりとした空気に包まれている。松岡萬（つもる）ほか数名の門弟が、続々と集まって来た。逃げるべきか、戦うべきか、はたまた切腹すべきか議論が分かれた。

「お主たちの拙者を心配してくれる気持ちは有難い。だが、二千の討手が来ればどうあがいても勝ち目はない。幕閣に対する反逆の気持ちなどまったくないのだから、きちっと申し開きをする。それでも分かって貰えなければ切腹するまでさ。なあ鉄さん。そうしようじゃないか」

精一は、鉄太郎の顔を覗きこんで言った。

「すまない。清河の件では、兄上を巻き込むことになってしまった。何もやましいことはないから逃げることはない。だが、無実の罪に問われることは残念だ。申し開きが聞き入れられなければ、武士らしく切腹するよ。覚悟はできている」

鉄太郎はそう言って、にっこり笑った。

しばらくすると、幕閣内でも精一、鉄太郎を擁護する声が上がり、伝通院に集まった兵は、やがて引き上げて行った。

落葉も消え、霜の降りる季節となった。鷹匠町の庭の草花も枯れ、土が白く盛り上がっている。

反逆者という罪は、免れたものの、鉄太郎は尊皇攘夷浪士を擁護。精一は、鉄太郎の言動を放任していたとして、蟄居よりさらに罪の重い永久閉門を言い渡された。

鉄太郎と精一は、鷹匠町の屋敷から出ることができなくなってしまったのである。だが、夜になると門人、友人が入れ替わり立ち代り裏門からやってきた。道場で槍の稽古をする者、居間で時局談話をする者など普段と変わることはなかった。

慶喜の上洛に異を唱えて、謹慎中の大草高重も、ときどき暗くなってから鷹匠町の鉄太郎の家とすぐ隣にある精一の家を訪ねている。

門人たちとの稽古や来客者たちとの世間話を通じて交流を深めるためである。その間に高重は、次第に攘夷の実現が困難であることを感じるようになっていた。

それを裏づけるかのような報せが薩摩からもたらされた。薩摩が、英国艦隊の砲撃を受け、かろうじて撃退したものの、城下に大きな被害が及んだという報せである。

（黒船のすさまじい砲撃に対して、お台場にある砲台程度では、とても防ぎきれるものではない）

外国の軍事力が、予想をはるかに上回る強力なものであることに、高重は、気づき始めていた。

十一月初旬の冷え冷えした夜、高重は、謹慎の身であるにもかかわらず、そっと家を抜け出し鉄太郎の家を訪ねた。先客がいる。松岡萬（つもる）である。鉄太郎と攘夷の実施の是非について論じていた。高重は、すぐさまその議論に加わり、日頃思っていたことを率直に語った。

「山岡さん。松岡さん。拙者は、一日も早く攘夷を実行したいと思っている。だが、今、それを決行しても成就するだろうか。仮に、黒船の一隻や二隻焼討し、奪い取ったところで、本国から続々と新手の黒船を送り込まれれば防ぎきれるものではない。異国船は、新式の大砲や鉄砲を持っていて、弾も豊富で、遠くに飛ばすことができる。弓でまともに戦っても勝ち目は薄い。夜陰にまぎ

れて射こむなら何とか対抗できるかも知れないが、それには熟練した射手を相当数揃えなければならない」

「確かに大草さんの言うとおりだ。だが、攘夷は、帝のご意志であるからその臣下としての徳川家は万難を排しても実行しなければならない。武器は劣るが、接近戦に持ち込めば、鍛錬を積んだ大勢の武士を抱えるわが方に分があると思う」

鉄太郎の言葉についで松岡も強硬論を唱えた。

「幕府が国を閉ざしたのは、家光公以来である。それから外国船の来航は、長崎だけとし、平和を保ってきた。あえて外国と戦をする必要はないが、国を開かなければ、武力に訴えてでも開かせるという強圧的な態度が気に入らん。幕府、朝廷が一丸となって事に当れば、攘夷も不可能ではない。幕閣にその気概がなければ駄目だ。まずは、将軍家が先頭に立ち、諸侯に攘夷の必要を説いていただかなければなるまい」

四、五日後の十一月十五日、酉の下刻。精一は、道場へ出て一人槍の稽古をしていた。そこに鉄太郎が現れた。茶を振舞うため、彼を居間に通した。すると外から半鐘の音が聞こえている。

精一と鉄太郎は、雨戸を開けてみた。城の方角が赤々と燃え、火花が飛び散っている。すわ一大事。精一は、閉門中であったが、すぐに白無垢を着て、その上に火事装束をまとい、登城の支度をした。

精一は、馬に跨り、鉄太郎は、槍を抱え、門を出ようとした。すると、松岡萬が血相を変えて長巻を持って現れ、精一の行動に加わった。精一の騎馬の両脇を鉄太郎と萬が固めて、炎上中の江戸城に駆けつけたのである。

二の丸は、焼け落ちたが、夜明け近くなって鎮火した。精一と鉄太郎の忠勤振りは周りの人の心を打った。老中では、謹慎を破ってまで登城した二人の行為の是非をめぐって議論が分かれた。

二人は、鎮火後、切腹を覚悟で自宅に閉じこもり沙汰を待った。もともと幕府への反逆心などなく濡れ衣である。そのことを熟知している友人、門弟たちは、老中酒井雅楽頭（うたのかみ）に二人の忠誠心がいかに厚いかを弁じた。その訴えが叶えられ、閉門を解くという御沙汰が下った。晴れて疑いが解かれたのだ。

その後、精一と鉄太郎は、徳川家の存続、慶喜の警護、大政奉還後の名誉回復のために心血を注ぐことになるのである。

（三）尊王攘夷派の凋落

文久、元治、慶応、明治へと移る幕末の動乱は、歴史上日本が、最も激しく揺れ動いた時代である。

そのわずか七年足らずの間に、鎌倉以来八百年近く続いた武家政権が倒壊し、王政復古の名の下に、西欧式絶

対君主制度を取り入れた藩閥政治が、生まれている。

文久三年（一八六三）の薩英戦争によって、英国の武力の強大さを目の当たりにした薩摩は、攘夷が困難であることに気づき、開国、倒幕へと藩論が傾いて行った。

その翌年の元治元年（文久四年二月二十日元治と改元）は、攘夷派のとった組織的な活動の最後の年となった。三月には、水戸藩の武田耕雲斎、藤田小四郎たちが、尊皇攘夷を旗印に、筑波山で挙兵し失敗した。さらに六月には、長州を主力とする京での尊皇攘夷派の浪士の掃討が行われた。

新撰組による池田屋事件がその最たるものである。この事件によって、近藤、土方率いる新撰組が一躍有名となった。半面、勤皇の志士からは、深い恨みを買うことになるのである。池田屋事件は、攘夷派の公家を京から追放した文久三年八月一八日の政変と並んで、京での長州の政治勢力を一掃することになった。

失地回復を図るため、長州は、軍を京に向けた。会津、薩摩を主力とする親幕府軍と元治元年（一八六四）七月に蛤御門で戦い、大敗を喫した。

窮地に立った長州に、さらに追い討ちをかけるように、英、仏、米、蘭の四国連合艦隊が、下関の砲台を占拠した。

幕府は、長州征討を決定し、西国二十一藩に兵の動員命令を下した。

幕府内でも長州征討の気運は、高まっている。

だが、講武所の高橋精一、山岡鉄太郎、中條景昭、大草高重などの幹部たちは、長州征討には、懐疑的であった。

「夷荻が国を狙っているようなときに、内輪もめでもあるまい。まずは幕閣が、各藩に命じて、国防建白書を差し出させ、沿岸警備を怠りなくさせることが肝要である。長州には、責任者の処罰を厳格に行うよう命じ、若い藩士たちの暴走を防ぐ手立てを提出させればそれで良い」

精一は、長州討伐に反対して、そう語った。

「おいたわしいのは、家茂公だ。お若いのに総大将として出陣しなければならない。講武所のわれらは、付き従って行くべきであろうが、今、この時期に江戸を空っぽにしては、江戸の治安が守れない。外国にも、つけいる隙を与えることになる」

景昭は、家茂の若さと江戸の治安を心配した。

「ところで、京では、新徴組にいた多摩の天然理心流の近藤一派が、会津候お預けとなり、新撰組と名乗って、ずいぶん暴れているらしい。池田屋では、見事な働きをしたと評判が高い。これからどんな動きをするであろうか。注目しているところだ。鉄さんはどう思うね」

精一は、池田屋事件で有名を馳せた新撰組が、傾きかけた幕府の支えになることができるのか、聞いて見たかった。

「そうさね。隊長の近藤は、よく知っている。実直な男だ。多摩の百姓の出で、武士になりたがっていた。それも直参旗本だ。今は、会津藩お預けとなっているが、手柄を立てて、やがては旗本にしてくれと言ってくるだろう。幕府の力が衰えたこの時期にあって、幕臣がだらしないから余計に目立つ。これからも幕府のために働き、注目されることになると思うよ」

鉄太郎は、新徴組に応募してきた近藤勇の精悍な顔を思い浮かべながら語った。

「確かにそうかもしれない。だが、われわれ幕臣にとっては、百姓上がりの連中に功名をさらわれるのは、なんとも情けない。そのためにも講武所をもっと隆盛にしなくてはならない」

高重は、講武所を充実することによって旗本の名に恥じない誠忠の士を養成し、難局に当るべきだとの考えを示した。

四、最後の将軍

(一) 長州征討の失敗

長州征討は、幕府内の反対論を抱えたまま強行された。元治元年七月、将軍後見役の徳川慶喜は、孝明天皇に謁見した。天皇は、公武合体によって、難局を切り抜けることを考えていた。勤皇を唱えながら、京の治安を乱す長州の浪士たちを快く思っていなかったのだ。むしろ京にいる将軍後見役兼禁裏守護総督の慶喜に大きな期待を寄せていたのである。

その頃、景昭、高重などの攘夷一七人組は、江戸にいた。長州を憎悪する声は、江戸の町に広がり、外桜田にある長州の上屋敷と麻布の中屋敷が、多数の鳶と町火消しの手で破壊され、取り壊されている。

高重は、それを聞いて上屋敷に駆けつけた。屋敷は、すでに取り壊され、大勢の見物人で賑わっている。

「長州が憎いとはいえ、将軍家のお膝元で、町人が暴動まがいのことをするのは捨て置けぬ」

高重はそう言って、しばらく壊れた屋敷跡に立って、石を投げつける町人を制止していた。

長州征討には、家茂自ら出馬するはずであった。だが、十月になって長州は、恭順の意を示し、謝罪した。幕府は、それを受けて、征討を取り止めたのである。

ところが、その後長州では、高杉晋作、桂小五郎を中心とする反幕勢力が、藩内の主導権を握った。彼等は、徹底抗戦の構えを見せ、幕府に反旗を翻したのだ。それを知った幕府は、慶応元年（一八六五）四月、（元治二年四月七日、慶応へと改元）第二次長州征討を布告し、五月には家茂自ら江戸城を出発、上洛した。その後、拠点を大坂に定め、大坂城に入城している。

長州征討には莫大な戦費を必要としたため、一年余りの準備期間をかけている。幕府は、江戸、大坂の豪商、

社寺に献金を命じ、兵糧その他の軍需物資を大量に買い集めた。そのため諸物価が著しく高騰し、庶民の暮らしは悪化するばかりであった。

その頃、幕政改革があり、兵制もヨーロッパ式を取り入れることになった。

旗本を集めて西洋風の銃隊を編成、奥詰銃隊としている。これによって、講武所の教授方である中條景昭、高橋精一は、任を解かれ、大草高重の「騎射指南役」も廃止された。刀槍、弓による日本古来の戦法では、鉄砲や大砲を中心とする近代戦には、太刀打ちできないことを幕閣も気付いたからである。

「騎射指南役」の廃止に対して異議を唱える上申書を配下の幕臣が提出した。だが、取り入れられなかった。高重も配下の幕臣が幕府の方針に反して、上申書を提出したことに責任を感じ、自宅謹慎した。その間に御役御免となっている。

攘夷一七人組は、幕府方針によってほとんどが御役御免となったが、結束はさらに強まり、江戸城明け渡し後、慶喜の親衛隊として動乱の時代を駆け抜けることになるのである。

慶応二年、幕府は、大軍をもって長州を取り囲んだ。しかし、旧式の装備で戦意の希薄な諸藩を統率し、戦場の士気を高める能力に欠けていた。連戦連敗となったのである。その上、幕府及び各藩の征長準備期間中に、薩長同盟が成立している。そのため薩摩は参戦しなかった。そのことも諸藩の士気に大きな影響を与えることになったのである。

幕府にとっての不幸はそれだけではなかった。大坂城内で十四代将軍家茂が突然病床に伏せ、七月十七日、不帰の人となってしまったのである。家茂の突然の死は、幕府軍に衝撃が走り、長州征討は中止された。

十五代将軍は徳川慶喜と決まった。慶喜以外に幕府の命運を託すことのできる人物はいなかったのだ。慶喜は、水戸に蟄居している間に多くのことを学んだ。水戸は、光圀以来、伝統的に尊王意識が高く、父の斉昭は、尊王攘夷論の草分け的存在であった。慶喜もその影響を受けて育ったのである。

だが、蟄居中に日本を取り巻く国際環境は、大きく変貌した。諸外国の開国への圧力は強まり、その実力を目の当たりにしたことによって慶喜は、攘夷がもはや困難であることを実感していたのである。

（尊王の思想を変えないで朝廷と幕府の間をいかに調整し、この難局を切り抜けるか）

山積する問題を抱えて、慶応二年（一八六六）十二月五日、慶喜は、将軍職を継いだ。その直後、相次いで幕府の屋台骨を揺さぶる事件が起きた。

孝明天皇の崩御と薩長同盟の成立である。

慶喜が将軍となったその月の二十五日、公武合体を推進した孝明天皇が崩御され、幕府は、強力な後ろ盾を失ってしまった。

（幕府の政治、経済、軍事力は、侮りがたく、薩摩、長州などの雄藩の力だけでは、日本の統治はできない。幕府が率先して行動を起こさなければ、攘夷など無理だ）

そう孝明天皇は、感じていたに違いない。その孝明天皇の崩御は、幕府にとって、大きな支柱を失うことになったのである。

さらに、薩長同盟の成立は、幕府の権威を失墜させた。反幕勢力を勢いづかせ、西南諸藩の幕府離反を誘うことになったのだ。蛤御門で敵味方に分かれ、激しい戦いをした薩摩と長州がまさか手を取り合い、西南諸藩を糾合し、立ち向かって来ようとは、幕府には、思いも寄らなかった。この二つの変事は、幕府にとって大きな誤算となったのである。

（二）大政奉還

慶応三年（一八六七）一月九日、明治天皇が即位した。長州征討の失敗は幕府の威信を大きく傷つけることになった。幕府は、もはや日本を独力で統治する能力を失っていた。

兵庫開港の期限が迫っている。

慶喜は、薩摩の島津久光、宇和島の伊達宗城、越前の松平春嶽、土佐の山内容堂を呼んで議論を尽くし、政局の打開を図った。一月十九日、慶喜は、これら諸侯の意見を入れ、孝明天皇の国葬を理由に、ついに長州征討軍の解散を決断した。小倉城の陥落も、この決断を促す要因となった。天皇の大葬儀は、同月二十七日に行われた。

懸案の兵庫開港問題は、再三朝廷の却下を受けたが、粘り強く説得工作を行い解決した。すでに歴史の歯車は、開国へと回り出していたのである。兵庫開港と長州からの撤退、この二つの問題を解決し、何とか体面を維持しながら幕府は、命脈を保って十月を迎えた。しかし、それも薩摩、長州、土佐など西国雄藩の政治勢力に、膝を屈する時が来た。

慶応三年十月十四日、徳川慶喜は、朝廷に大政奉還を願い出た。就任後わずか一年足らずの将軍職であった。二百六十五年間続いた徳川幕府も終焉を迎えたのである。だが、国政を朝廷に返還したとはいえ、幕府の政治組織はそのまま残っている。大政奉還によって、国政がどのように変って行くのか誰も予想できなかった。

慶喜は、大政奉還後、有力大名による合議政体が出現したとしても、その主導権は、幕府が握ることになると読んでいた。

長期政権によって、行き詰まった幕府の官僚組織では、

この難局を切り抜けることは困難である。だからといって朝廷や薩長だけでは、国の運営はできない。天皇の名のもとに雄藩の力を結集することによって、倒幕運動を抑え、徳川家主導のもとに新しい政体を築き、政権の維持を図ることができると考えていたのである。

ともあれ、大政奉還は、幕府はもとより、朝廷、諸大名を巻き込んだ政治的大混乱を生むことになった。世情は騒然とし、物価は高騰。京や江戸の治安は悪化し、各地で農民一揆も起こっている。

そんな時、大政奉還の発案者である土佐の浪士坂本龍馬が殺害された。惨事は、十一月十五日夜、京都河原町の醤油屋近江屋新助の二階で起こった。同じ土佐出身の中岡慎太郎も共に惨殺されている。誰が暗殺命令を下したか。また、実行犯は誰であったか。すぐには分からなかった。

後世になって、佐々木只三郎、今井信郎など幕府見廻組の犯行であることが、ほぼ明らかにされている。今井信郎が、後に自分たちが殺害したと自供しているのだ。が、誰の命令であったか、現在でも、解き明かされていない。

大政奉還は、武力による倒幕を図ろうとする薩長や岩倉具視などの公家グループにとっては、都合の悪いものであった。彼等は、慶喜が大政奉還を願い出た日に、天皇から倒幕の密勅を受けている。大政奉還後の青写真が

できないうちに幕府から政治的主導権を奪うため、朝廷に働きかけ、慶応三年十二月九日、王政復古の大号令を発せしめた。それにより、倒幕の気運を一挙に高めたのである。

その結果、親幕派の皇族、公家などは失脚、幕府の京都における出先機関は廃止された。

それだけでは終らなかった。慶喜には、官位の辞退を勧告し、領地返上を命ずることが小御所会議で決定された。

これに激怒した会津、桑名の両藩を中心とする幕府軍は、鳥羽伏見で薩長軍と戦い、惨敗した。勢いに乗った薩長軍は、江戸に向かって進撃を開始し、戊辰戦争へと戦火が広がって行くのである。

鳥羽伏見の戦いで幕軍敗北との報は、江戸の町を混乱に陥れた。薩摩藩士を名乗る浪士が、強奪を繰り返し、江戸の町人に被害を与えていたのだ。

山岡鉄太郎、松岡萬、中條景昭、大草高重など江戸の治安を任されていた旧講武所の面々は、暴徒を鎮圧し、治安の回復に努めた。

鳥羽伏見での敗戦を大坂城で聞いた慶喜は、薩長軍が、「錦の御旗」を立て官軍となったことを知った。慶喜は将軍として、出馬を促す幕臣や親藩の声を無視するわけにはいかなかい。

だが、水戸出身で、尊王思想の薫陶を受けた慶喜は

こうして慶喜は、明治元年（一八六八）一月六日真夜中、天保山沖に停泊する幕府軍艦開陽丸に乗り込み、大坂から脱出した。暗い海の中を走る開陽丸は、波浪に揉まれ、大きく揺れている。それは、あたかも徳川家の前途を暗示するようであった。

（三）慶喜江戸城退去

十二日明け方、慶喜は、品川沖から小舟に乗り移り、浜御殿に到着した。しばらく休息後、西大手門外下乗橋に出て、城内に入った。勝安房守（海舟）が迎えに出ている。

その夜、城中で大評定が行われた。

「薩長軍は、あくまでも私兵であって、官軍ではない。錦旗は、朝廷を脅して作らせたものである」

こうした認識では、全員異論はない。

だが、薩長軍に対する徳川家の対応を巡っては、恭順派と主戦派に分かれて激しい議論が戦わされた。

「たとえ朝廷を脅して作った錦旗であろうと、それを掲げる以上、官軍を意味する御旗となる。それだけ薩長の朝廷工作が幕府より巧みであったということだ。京での朝廷取り込み合戦に敗れたのだ。第一、慶喜公は、ひたすら恭順しているではないか。大将がいなくては戦にならない」

恭順派は、慶喜の意向に従った行動を取るべきであると主張した。それに対し、主戦派は、

「薩長軍が私兵である以上、錦旗は、形式に過ぎない。勝てばやがて朝廷も味方につき官軍となる。幕府には十分戦えるだけの陸軍と海軍を備えている。それにフランスも全面的に後押しすると言っているのだから、負けるはずはない」

と反論した。

老中小笠原壱岐守は、大坂から慶喜に随行する途中の慶喜の言動からその真意が分かっていた。

家臣団の意見を「恭順」で取りまとめるため、大久保越中守忠寛（一翁）と計って勝安房守を海軍奉行に復職させた。勝は、すぐに陸軍総裁にも補され大権を任された。彼は、城内の主戦派を巧みに説得し、幕臣の多くを恭順に導いた。

だが、奥羽二十三藩の重役たちは、主戦論を主張、奥羽列藩同盟を形成し、薩長軍との一戦も辞さない構えを見せている。

代表格の庄内藩家老松平権十郎が、勝を訪れ、徳川家の決起を促した。

「徳川家に対する至誠は、誠に有難く思います。だが、この日本で戦を起こすことは、外国につけ入る隙を与えることになりますぞ。今は、幕府だとか薩長だとか言っている場合ではござらん。政権を朝廷にお返しした以上、朝廷を中心とした新政府を造らねばなりません。そのためには、今は恭順しかないのです」

勝は、奥羽列藩同盟の自重を促し、徳川家としては、あくまでも恭順を貫くことを言明した。

正月も過ぎた寒い日、中條景昭は、大草高重を深川のとある料亭に呼び出した。夕闇が迫る頃で、灯りがちらほら点き始めている。高重が、女将の案内で中に入ると、奥の部屋に景昭が榊原健吉と共に待っていた。

榊原は、直心影流の達人として、幕臣の間でも広く知られている。

景昭は、真剣な眼差しで高重を見て、おもむろに口を開いた。

「大草殿、貴殿をわざわざ呼び出したのは他でもない。実は、大久保越中守様が拙者に、江戸城内での主戦派が暴発して上様に危害を加えることのないよう、武芸の達人たちを集めて親衛隊を結成して欲しいとのことである。そのための人選を一任された。こうして榊原さんにも立ち会ってもらったのだが、貴殿にも手助けを願いたいのだ。貴殿の人柄と腕を徳川家のために役立ててもらいたい。一肌、脱いではもらえないだろうか。ここにいる榊原さんもそう願っている」

「中條さんもご承知のとおり、拙者は、騎射にかけては自信はあるが、剣、槍については、それほどではありません。さりながら、あなたの頼みとあっては、お引き受

けしないわけには参りません。拙者もかねてから、徳川家譜代の旗本として、主家が危急存亡のこの時、何かお役に立ちたいと思っていたところでした。そんな折に、結構なお申し出をいただき、微力ながら一命を賭してお役目を果たす所存ですので、お仲間にお加えくだされ」

高重は、景昭の要請に応え、即座に引き受けた。まるで自分の考えを代弁してくれているように思えたのだ。それに、心ならずも朝敵とされた慶喜の心情が、痛いほど分かった。今ここで、慶喜の一命を守ることは、徳川家の存続を守ることになる。譜代の家臣として、当然のご奉公であると思ったのである。

景昭は、熱い眼差しを、高重に向け、両手を差し伸べた。

「即座にお引き受けいただき、かたじけない。武芸については、心配には及ばぬ。貴殿の腕前は、拙者がよく存じている。それに何よりも貴殿のその誠忠の志しと人望を役立ててもらいたいのだ」

中條景昭、大草高重たちは、高橋精一、山岡鉄太郎、関口隆吉、松岡萬などを加え、早速人選に取りかかった。七十名の隊士がすぐ集まった。幕臣最強の撃剣集団が形成され、「精鋭隊」と命名された。頭は、中條景昭、頭取には大草高重が就任した。景昭は、俸禄千石格、御役金八百両、高重は、俸米二百俵と御役金五百両が加給されることになった。

慶喜は、二月半ばの霧の深い早朝、江戸城を退去した。上野東叡山大慈院に引きこもり謹慎を続けるためである。

警護には、精鋭隊が当った。城門を出て、しばらくすると慶喜は、駕籠の外に出て、城を振り返った。主をなくした城は、朝霧にかすんで漂っているようである。慶喜の頬に一筋の涙が光っている。景昭、高重など精鋭隊の面々は、膝を折り、城に向かって手を合わせた。

（つづく）

天智・天武両帝に愛された額田王（ぬかたのおおきみ）（二）

島津隆子

〔二〕

急いだ内閣改造

天智十年（六七一）正月、天智天皇は近江令官制による一大内閣改造を断行した。太政大臣大友皇子を首班として、左大臣蘇我赤兄臣（そがのあかえのおみ）、右大臣中臣金連（なかとみのかねのむらじ）、後の大納言に相当する御史大夫（きしのたいふ）に蘇我果安臣（そがはたやすのおみ）、巨勢人臣（こせのひとおみ）、紀大人臣（きのうしのおみ）という顔ぶれである。

これは全く新しい意図のもとに成立した内閣であり、明らかに大友皇子を中心とする政権を不動のものにしようという狙いが露骨に示されていた。

大化の改新以前の保守的な旧氏族である蘇我氏の起用からは、進取の気性に富む大海人皇子との対抗意識がみてとれる。その他、中臣・巨勢・紀の各氏にしても旧い閨閥に属する氏族である。

これまでは天皇大権の実質的な執行官であり、朝廷最高の官職である太政大臣の役割は、大海人がやってきたのだ。しかし、ここにおいて政界での大海人の存在は完全に有名無実と化してしまったといえよう。

だが、結末は意外に早くやってきた。

内閣改造を断行して、これからわが世の春を謳歌しようとした矢先、天皇が病に倒れた。あるいは天皇が自分の死期の近いことを予期して、この新体制の人事を急いだのかもしれない。

八月に病床の人となって以来、秋になっても天皇の病は一向によくならない。大海人に比べ、あらゆる点で未熟な大友のことが心配で、天皇は病の床でしきりに煩悶の日々を重ねた。自分の衰えてゆく体力を感じるにつけ、

大海人の存在がますます巨大に映じられてしかたがなかった。

十月十七日、天皇はついに大海人に対する最後の決心を固めて、病床に呼びつけた。召喚の使者になったのは、かねて大海人に心を寄せていた蘇我臣安麻呂である。

安麻呂が大海人にそっと耳打ちをする。

「お言葉には充分ご用心なされませ」

大海人は安麻呂にきらりと光る一瞥を注ぐと、病室に入っていった。

大海人をみて身を起す素振りをする天皇を制し、大海人は素早く病床の枕元に跪くと、声をかけた。

「ご容態はいかがでございますか」

「もはや起き上がることも叶わぬ。予の病気は重く、とうてい再起は望めまい。ついては弟のお前に天皇の座を譲りたい」

突然の天皇の申し出に大海人は息を呑んだが、さすが冷静に受け答えた。

「私などが政治の表に出る幕ではありませぬ。ご辞退いたします。私は器ではございませぬ」

「何を申す。予の命はもう長くはない。これは本心からの願いであるぞ」

兄帝の言葉に大海人は警戒の色を深める。

「私は兄上の病気平癒のため、仏門に入りたいと考えます。それに国家安寧のためにも出家修業して、身を修めるのが最善と思われます」

この大海人の言葉に天皇は鋭く切り込む、

「ならば国家安寧のためにはどうすればよいか」

「皇位は皇后の倭姫に、実際の政治は大友皇子を皇太子に立て、お任せになられるのがよいと考えます」

大海人の巧みな返答であった。

(天皇の関心は大友皇子と自分が敵対関係にいることにある。その皇子を天皇に推挙せずに、皇后を推したことは、自分が天皇に対し全く謀叛の意志のないことを告げたことになる。その安泰な天皇の下で大友皇子が好きなように政治を行えばよい。そして自分は天皇である兄と、国家の安泰を祈るために出家する)

これほど明確な答えがまたとあろうか。天皇はこのきっぱりとした大海人の意思表示を一応肯定せざるをえなかった。

古代政治史の動向を左右する、天皇と皇太子、兄と弟の息詰まる演技で繰り広げた一幕劇であった。

しかし、こんな言葉ぐらいで容易に弟を信用する兄帝でないことを大海人は百も承知である。天皇の恐ろしさは決定的行動を迫られた時の、氷のような苛酷さにある。あくまでも冷徹非情な策略は、どこに罠をしかけてくるかわからない。いつ大海人の隙を衝いて謀叛容疑で逮捕・処刑されないともかぎらないのだ。

大海人は急がなければならなかった。

大海人、剃髪し吉野山へ

天皇の許を辞した大海人は間髪を入れず宮中内裏の仏殿に駆け込み、髪を下ろした。そして、身を翻すと自分の館にある武器のことごとくを宮中に収め、反逆の意志のないことを表明した。

この電光石火の早業の前には、さすがの天皇も即刻逮捕の命令を下す理由を見失い、手をこまねいて見ているより他なかった。

そして、その一瞬の間隙をついて、翌早暁、わずかな従者を従えた大海人は大津京を発ち、疾風のように山深い吉野へ向った。

ただ大海人にとって心残りなのは、愛する額田に一言の別れの言葉も告げられないことであった。しかし、折からの氷雨まじりの降雪の中、険しい山道を強行して、たった一日でめざす吉野の山奥に到着したのである。

これで　天皇に追撃の機会を与えぬばかりか、宮廷の人々の同情を集めるのに十分な、見事な行動といえた。

大海人を吉野に逃したことを、宮中のある人は、

「まるで虎に翼をつけて放ったにひとしい」

と評した。情勢はそれほどに緊迫していたのだ。

陰暦の十月十九日はもう真冬であった。大海人の一行は枯葉の舞う山野を急ぎに急いだのである。

有馬皇子の死

その昔、異母兄弟の古人皇子は中大兄皇子、つまり現天皇に二心のないことを明らかにするため、今の大海人と同様、出家して吉野に隠遁したが、それでも天皇の追撃の手はゆるまず、殲滅されているのだ。

大海人の母親である皇極天皇の弟で、先の帝であった孝徳天皇のたった一人の遺児有馬皇子もまた天皇によって殺された。

死の床に臥す孝徳帝を挟み、有馬皇子と中大兄皇子つまり天智天皇は時々冷たい視線を交わしあっている。瀕死の身とはいえ、孝徳帝の中大兄皇子をみつめる目には、憎悪が宿っている。叔父である孝徳帝は晩年になると、中大兄皇子にことごとく政治の実権を奪われた上、皇后までもが孝徳帝を見捨てて中大兄皇子に靡いてしまったのだ。他の群臣はいうまでもない。

帝はたった一人後に遺される有馬皇子に何かを語りかけようとしながら、他界されてしまった。

こうして、有力な帝位後継の二人の皇子である中大兄皇子と有馬皇子は、深刻な対立関係に入ってゆくのだ。

大化改新を断行したほどの巨腕の持ち主である中大兄皇子の強引な政策は、豪族や民衆の反感を買っていた。従って、人々の目は自然と有馬皇子に向けられはじめている。

「父帝の意志を継ぎ、あなたが政治をお執りなさい」

人々の囁きが有馬皇子の耳朶に聞こえる。
（父帝の無念さ、皇后の裏切り、今こそそうした恨みを晴らすべき時かもしれない）
だが、そんな野望をもって、非常手段の謀叛に出るには、この十八歳の青年皇子は余りに感傷的で、憂愁に過ぎた。加えて、中大兄皇子に比べ、自身が全くの孤独な存在であることも熟知していた。
有馬皇子は煩悶の日々を送るうち、しだいに暗鬱な青年になり、狂気を装うまでになった。
ある時、有馬皇子を訪ねてきた蘇我赤兄が切り出す。
「中大兄皇子の政治は行詰っております。あなたがここで反抗の挙に出られたなら、天下万民ことごとく、お味方につくのは必定でございます」
この言葉に有馬皇子は珍しく喜色を浮べ、大きく頷く。しかし、これこそが中大兄皇子の放つ罠であった。赤兄はその足で中大兄皇子に告げたのだ。
「有馬皇子に謀叛の意志がございます」と。
即刻、有馬皇子は逮捕され、中大兄皇子の静養先である紀州湯の崎温泉へ護送された。そこでは厳しい訊問が待っていた。
「何ゆえ反逆を企てたのか」
中大兄皇子の質問に、有馬皇子は静かに答えた。
「私は何も知りません。ただ、天と赤兄のみがご存知でしょう」

湯の崎温泉地から送還される途中、有間皇子は藤白の坂で絞り首の刑に処せられた。その時の歌は、

磐代の浜松が枝を引き結び
ま幸くあらばまた還りみむ

天皇の留守中に疑いをかけられ呼び出されて、紀伊海岸の磐代を通る時に詠んで、松の木の枝に結んだものだ。疑いが晴れて、無事にまたこの松の所に帰ってこられますように、という願いがこめられている。だが、その願いを結んだ松の木まで来ることなく、皇子は若い生涯を虚しく閉じた。

大海人は兄天皇の冷酷なまでの追及の仕方を知っている。少しでも皇位に執着する素振りを見せたが最後、とことん討ち滅ぼされてしまうのだ。その手にかかって処刑されたものの数はどのぐらいになるのか。
大海人はそんな思いにかられながら、その日は一日中歩き続け、翌日も雪まじりの氷雨が降る中を、竜門山系の峠を越え、さらに奥へ奥へと分け入った。
大海人の超人的な行動力に、さしもの天皇もつけ入る隙がなかった。それに天皇自身の病も日に日に悪化している。この上は、大友皇子をしっかりと政権の座に君臨させる方策を考えなければならない。

壬申の乱

十一月二十三日、天皇の命によって、内裏西殿に於いて、蘇我氏以下五人の重臣が大友皇子を立てて結束を乱さないという誓約式が行われた。しかし、それでもまだあきたらない天皇は、二十九日にも天皇の面前で同様の誓いの儀式を行わせた。
そして十二月三日、雪がさんさんと降りしきる中、大化改新という偉業を胸に抱いて、天皇は崩御したのである。

さて、近江朝廷の主に納まった大友皇子であったが、朝廷内では吉野方の大海人に好意を寄せる者も少なくなかった。大友の内心は穏やかではなく、吉野を取巻く道という道には、蟻の這い出る隙間もない警備体制が布かれた。
翌、壬申の年（六七二）五月、吉野方、つまり大海人方に衝撃的な重大情報が届いた。近江朝廷方、つまり大友方が美濃と尾張の農夫を徴用し、武装させているというのだ。さらに、吉野方に運ぶ食糧の道が遮断されているという。吉野方にとってはまさに緊急事態である。
六月二十二日、近江朝廷方の先手を打って村国連男依ら美濃出身の者を東国に急行させた大海人は、兵を集めること、美濃と近江を結ぶ街道の要所である"不破の関"を抑えることを命じた。

大海人の挙兵である。
こうして近江宮にいる大友に対して兵を挙げた。古代における天皇家の戦であり、いわゆる"壬申の乱"と呼ばれるものだ。
六月二十四日、大海人は吉野方の一行を引き連れて吉野の山を出発した。近江朝廷方の厳重な警備網を巧みにかわして、女子供も交えての強行軍であった。隠密にしかも俊足果敢に進み、夜には伊賀、大和の国境に達した。
そして、伊賀の山野を南から北へ横断し、翌、早朝、伊賀の北端"柘植"に着いた。
ここで近江の大津宮を脱出してきた高市皇子の一行と落ち合う。高市皇子には前もって密使を送り、挙兵のことは報せてあった。十九歳の皇子は大海人の長男で、勇将の誉れが高く、父大海人からの信頼も篤かった。
一行はその日のうちに伊賀から伊勢に入った。
二十六日には大海人のもう一人の皇子で、やはり近江宮を脱出してきた大津皇子一行と合流した。才能あるこの皇子はその後、その才能ゆえに妬まれ、謀叛の疑いをかけられてわずか二十四歳で逝った。
そこへ村国連男依から、美濃での兵力動員が成ったこと、"不破の関"を占拠したとの吉報が入った。
ここで大海人は吉野軍の戦闘指揮官に高市皇子を任命。反撃に転じるのである。
二十七日には、尾張の国守が一万余の大軍を率いて吉

野軍に合流した。前に近江朝廷方が美濃、尾張の農夫を徴用していた兵力がこれであり、吉野方に先手を打たれて寝返ったのである。

二十九日、大和国の中心地飛鳥古京が急襲攻撃を受けて、大和全域が吉野方の軍門に下った。近江朝廷の足許に火がついたのだ。美濃、伊勢にいる、大海人の主力軍と決戦するどころではない。

とにもかくにも大和を朝廷方に奪還することが先決である。これはかなり以前から近江の朝廷を出てしまった大和の大伴吹負（ふけい）が、やがて挙兵し、必ず勝利することを信じて、同じ大和の有力豪族や漢氏（あやし）と気脈を通じていて、近江軍を一挙に蹴散らしたものである。

はじめ武器も持たず主従わずかな一族郎党だけの、落魄の身であった大海人に対して、圧倒的軍事力を誇っていた近江朝廷は一体なにをしていたのだろうか。

黒いバス（下）

三戸岡道夫

それはおそらく赤鼻が勤めている会社に対する信頼感が原因なのであろう。『時間テストプラン見学のバスに乗れ』という会社の命令に対する絶対的な信頼、その信頼感から生まれる自信を、赤鼻は身体から発散させていた。

人はさらに、一人、二人と集って、次々にバスに乗りこんできた。

次に来たのは女性だった。

女性といっても六十歳に近い年令。小肥りの身体をすばらしい着物で包み、指には大きいサファイの指輪が光っていた。しかし外見は上流階級の奥様ふうなのだが、中味はどうみても下町のおばさん、という感じであった。この外見と中味のちぐはぐな女性は、いったい何者なのであろうか。そして、どうしてこの黒いバスに乗りこんできたのだろうかと、彼の好奇心はにわかにかき立てられた。

人が集るのにも潮時というものがあるらしい。彼が花

（二）

人は、一人、二人、三人と集ってきた。

彼は誰かに声をかけようとした。しかし最初に来た男はあまりに若すぎた。せいぜい二十歳ぐらいにしか見えない。若すぎて、彼のプライドが許さなかった。二番目に来たのはその逆で、声をかけるのになんとなく気がひける、五十がらみの恰幅のいい中小企業の社長だった。

その点、三番目にきた男は気さくそうだった。年恰好も彼と同じの三十歳前後に見えるのが、親近感を呼んだ。酒が強いのか、血色のよい顔に鼻が赤く光っていた。

その赤鼻がバスに乗ってきて、彼に、

「このバス、時間テストプラント見学のバスですね」

「ええ…、たしかに、その筈ですが…」

彼の返事はあいまいだったが、赤鼻はそんな返事には頓着なく、自信に満ちた態度で窓際にどすんと座った。

咲公園に一番乗りしてから、最初の人（あの南海商事の副部長）が現われるまでにはずいぶん時間がかかったが、しかし次の一人が現われると、もうその後は、まるで桜の花陰で待機でもしていたかのように人々が次々と現われ、バスの中にはもう二十名ぐらい集っていた。

女性はサファイヤの奥様が一人で、ほかはすべて男であった。年令は三十台、四十台が多く、中には二十台の若者や五十過ぎの年配者も混っていた。職業も大企業の開発部員、技術者、研究所の人間、中小企業の経営者と、さまざまであった。

そうしたバスの中を見まわしていると、彼は、

（バスはそろそろ出発するのではないか）

と心配になってきた。もう課長は、彼の出張申請の手続きをすませてくれたであろうか…、確認する必要がある。彼は携帯電話のボタンを押した。運よく課長にすぐつながった。

「もうだいぶ人が集まりました。かれこれ二十人ぐらい…、そろそろ発車も近いと思います。私も乗っていきますが、よろしいですね」

「よろしいですね…と言われても、困るなあ、私一人で決めるわけにもいかないし…」

「というと、部長への申請はまだなのですか…？」

「いや、今やっているところだが…」

その課長の困惑した口調は、まだやっていない証拠だった。口先だけで、ちっとも事を進めない課長に、彼はあらためて腹が立ってきた。そもそも考えてみれば、この黒いバスへの参加自体、当然、課長自身が率先してやるべき仕事ではないのか。現に南海商事では情報副部長が乗りこんできている。

（課長、この仕事は本来あなたの仕事なのですよ）

と、彼は電話口でそう叫んでやりたかった。彼は神経がいらだって、全身がむづがゆくなってきた。

「課長、とにかくはやくお願いします。バスはいつ発車するかわからないのです。『時間の製造』、『時間の販売』、そのパテントをわが社が握る、そして一挙に綜合商社のトップに躍り出る…、そのためには…」

「よし、よし、君の基本論はよくわかったよ。ところでね、その黒いバスの行先はどこなのか、まだわからんのかね」

「わかりません。しかし南海商事の情報副部長さえ乗りこんでいるのですし、行先にまちがいはないと思います」

なにを今頃言っているのかと、彼の方は全身の血が逆流しそうになってくるのだが、課長の方はあくまで冷静で、

「ところでね、君、そのバスには参加費が要るんだろう…？」

「エッ！」

虚を突かれた思いで、彼はとび上りそうになった。

（冗談じゃない。バスが発車するかしないかの瀬戸際に、金がかかるの、かからないの、そんな問題がどうして今必要なのだ…）

思ってもいなかった課長の質問に、彼はすぐには返事が出来なかった。

「……」

「ええ…？　君、どうなんだい…？」

だまっている彼を、課長の言葉が追いかけてくる。しかし課長に面とむかって『そんな小さなこと、どうでもいいじゃありませんか』と言うわけにもいかず、

「……」

「そうだろう、情報が重大であればあるほど、値段は高い。そんな貴重な情報が無料で得られるはずがないではないか。よく調べてくれ。予算の目途がつかなければ、部長への申請も出しようがないよ。もっとも君がプライベイトに払うというのなら、話は別だがね…」

なんという厭味だ。しかし一万円や二万円というのなら話は別だが、もしも何十万円もという参加費ということになると…、いや、ひょっとしたら何百万円にもなるかもしれない。もしそうだったら大変だ。そんな大金が自己負担…、彼はにわかに心配になってきた。

「うっかりしておりました。すぐ調べて報告いたします」

「ああ、そうしてくれ。情報、情報とさわぐのもいいけどね、まるでピクニックに行くみたいな調子では駄目だよ。もっと足許を一歩一歩ふみ固めて…」

（四）

さて、参加費がいくらだなんて、誰に聞いたらいいだろう。

こんなことが聞けるのは、あの赤鼻ぐらいしかいないだろう。人が好さそうで、適当におせっかいやき…、彼に恥をかかせないで教えてくれるだろう。

赤鼻は窓際の席に腰掛けて、新聞を読んでいた。彼は近寄って、

「このバスの乗車賃、いくらなんですか」

「……？」

赤鼻は、どうして今頃そんな質問が出るのか不思議だといった顔つきで、

「一千万円ですよ。知らなかったんですか」

「えっ！」

彼はびっくりして叫び、しばらくしてまた、

「一千万円！」

悲鳴とも溜息ともつかぬ声をあげた。いくら画期的な『時間の製造』だといっても、一千万円は高価すぎる。

「どうしたんですか？」

赤鼻は彼の顔を覗きこむように言った。
彼は何か言おうとしたが、
「うっ、うつっ、うつっ…」
と声がつまって、適当な言葉が出ない。目茶目茶に自分の頭を両手でひっぱたき、バスの中をわめきながらかけずり廻りたい気分だった。赤鼻は彼の顔を不思議そうに眺め、
「お金を忘れたのですか、それとも落した…？　でも、身元がしっかりしていれば、後払いでもいいことになっていますよ」
なぐさめ顔にそう言った。
だが、赤鼻のそんななぐさめが何になろう。彼にはまだ出張の承認すら、会社からおりていないのである。彼はふたたび携帯電話を取り出すと、
「課長、わかりました。参加費は一千万円で…」
「やっぱり私が言った通りじゃないか」
「おっしゃる通りで…、でも、情報が本当だとしたら、安いものです」
この時を外したら、もうオーケーをとるチャンスはないと、彼は一気にそう言った。しかし返ってきたのは課長の怒声。
「馬鹿も休み休み言え！　どこへ行くのかもわからぬバスに一千万円も払えるか！　高い、高すぎる。ベラ棒に高い…！」
「でも、南海商事では情報副部長が来ているのですよ。北海商事だって、それに西海物産も…、商社は全部来ております。あとで悔いても、取り返しがつきませんよ。このチャンスを絶対逃すべきではありません。課長、一千万円は絶対投資すべきです」
「いかん、高い、高すぎる…！」
課長はヒステリックに叫んだ。小心な課長は、怒り出すと始末におえなかった。彼は少し言いすぎたかなと思ったが、仕方がない。
『…高い、…高すぎる…！』
携帯電話から伝わってくる声は、まさに彼が恐れていた方向に課長の感情が暴走し始めたことを裏書きしていた。
「…君は仕事のきびしさがわかっちゃいないから、そんな呑気なことを言っているが、商社の薄い口銭で一千万円儲けるのが、どのくらい大変なのか、わかっているのかね…」
課長の声が興奮で震えている。最悪の事態だ。もう少し冷静に話せないものかと思う。しかし、なんとか課長の感情を冷却しなくてはならない。こんな時には黙っているに限る。彼はしばらく口をつぐんだ。すると今度は課長の方が気にしだして、
「…おい、どうした…」
すこし興奮を押えた声で話しかけてきた。

「はあ…、別に…、どおってことは…」
彼はわざと言葉をにごして、小声で言った。そして、しばらく間をおいてから、
「課長、仕方がありません。やめましょうか…？」
一言、一言、はっきり区切って、そう言った。
「……」
やめましょうか、と言われると、今度は課長の方が困ってくる。課長は、
「うっ…」
と声をつまらせた。不確実な情報に一千万円も…、高い…、リスキーだ…、とわめいてはみたが、万が一情報が本当であったとしたら、その情報を取り逃がした責任を、課長は追究される危険がある。困惑した課長の顔が眼に見えるようだった。
「とにかく部長に相談してみよう…」
興奮のやや冷めた声で課長はそう言い、
「……とにかく、もう少し様子を見てくれないか。それにしても、行先もわからないのに一千万円は高いなあ…、とにかく判断がきびしいな…」
もうすこし様子を見ろと言ったって、様子を見て事態が進展するわけではない。いつもこれだから厭になってしまうと、彼は両肩をガクンと落した。

(五)

部長や副部長の顔色を見ながらしか物の言えない課長、自分の責任になりそうなことは絶対イエスと言わない臆病な副部長、そして決断力の鈍い部長…、彼の上に三重にのしかかっている上司のことを思うと、一千万円なんてとても無理だなと絶望的になってくる。
そんなあわれな彼の姿を、赤鼻は同情的な眼で見て、
「はやく私の横にお座りなさいよ」
「ありがとう。でも、わたしは座ってなんかいられないんですよ」
「そろそろ座らないと、席がなくなりますよ。だいぶ混んできましたからね」
「でも、まだ会社の方からオーケーが出ないものですから…」
彼は赤鼻の方をなんとなく、救いを求めるような眼で見た。赤鼻は、
「何回も電話で連絡、大変ですね。でも、とにかく行ってしまうことですよ。行ってしまえば、会社の方だって駄目だとは言わないでしょう。大丈夫ですよ」
「いや、それが駄目なんです。まず参加費が出ないのです。許可なしで出張したりすれば、うちの会社は費用をいっさい出してくれません。一千万円もする参加費、

個人ではとても負担できませんしね。それにもっと困るのは、許可のない出張は職場放棄ということで、すぐ馘首になるのです」

「へえ…!?」

いまどき驚いた、と言わんばかりの顔で、赤鼻は眼を見はり、

「組合はないのですか、おたくの会社…」

「あることは、ありますよ。だが御用組合で、なんの役にも立ちません」

「でも、そうした場合の緊急の行動、急ぐ場合には仕方がないじゃありませんか…」

「でも、うちの会社は駄目なんです。会社のためだと思ってやったら、馘首ではね、たまりませんよ。だから誰だって、そんな危いことはやりません。そうまでして仕事をしなくたって、給料はもらえるんですから…」

「情報部や開発部なんてのは一瞬を争う場合が多いのに…、それでは仕事にならないでしょう」

「なりませんね。たとえがんじがらめでも、決断力があって、どんどん決めてくれれば、それでもいいんですがね、ところが『石橋を叩いても渡らないのが東亜商事さんだ』と、お客さんから悪口を言われて、いつも私たちはくやしがるんです」

赤鼻は彼に同情し、うなずきながら、

「でも、そんなこと、われわれサラリーマンにとってはお互いさまですよ。私の場合は、たまたま社長の息子がインターネット気狂いで、その息子がニュースをキャッチしたものですから、社長命令がすぐ出たようなものですが、こんなこと滅多にあることではありません。偶然です」

一生懸命なぐさめてくれるのだが、そんなことでは彼の気分は一向に治らず、

「おなじ商社でも南海商事などではね…」

バスの中のライバルに視線を送りながら、

「あの会社では、誰が情報をキャッチしようと、実に機敏に反応しますね。部長がキャッチした情報だからよく動く、平社員の情報だから軽視されるということがない。傍から見ていて羨やましいですね。それに情報処理がはやい。たとえばこの黒いバスでもね、テストプラントを見て帰ってきて、あの情報副部長が『いい』と言ったら、右から左へすぐ決っちゃうんでしょう。だから商品にするのが圧倒的にはやい。かないませんよ…。そこへくるとわが社ときたら、まず私のような平社員がレポートをまとめ、課長から部長、部長から役員会へと提出する。だが役員会へ提出したって、ハンコがべたべた押されて戻ってくるだけで、いいのか、悪いのか、さっぱりわからない。そこでもう一度課長のところへ持っていって、『どんなんでしょうか…』と聞くのだが、要領をえない。『ハンコが押してあるから、いいということなんだろう。まあ、よく検討してみるんだな』とくるのが関の山。そうこうしているうちに時間ばかりがすぎて、気がついた時には、敵さんが開発商品第一号を発売しているという工合…」

こうしたことは会社に突然変異でも起きない限り、今後も変わることはないであろう。突然社長が死ぬとか、いや、たとえ社長が死んでも、あの優柔不断な部長や副部長、課長たちが居るかぎり、駄目であろう。彼はなんだか今日の花曇りの空のように、白々しくて空しい気持ちになってきた。

その時であった。彼の眼にパッと華やかな色彩が飛びこんできた。

それはさっきのサファイヤの奥様が、二人の方に近づいてきたのである。そして化粧と強い香水の匂いをまき散らしながら、

「あのう…、おトイレは…、どちらに…」

と、生な生ましい質問を発した。上品をよそおって着飾った着物の中で、彼女の動物的な肢体が生理的現象を訴えているのを二人は感じ取って、思いもよらぬ質問に、

「えっ、トイレ…?」

と奇声を発したが、同時に心の中では「なんでそんこと俺たちに聞くんだよ」いう抵抗感がうごめいた。しかし彼がさきほど公園の中を歩いていたとき、たしかトイレは花曇りの下の生垣の奥にあったはずである。そこで彼がその方角を指さすと、彼女はバスを降りて、その方角へちょこちょこと走っていった。

やがて生理現象の処理を終えて、彼女は晴れやかな顔で戻ってくると、

「ありがとうございました。それにしても、このバス、なかなか発車しそうで、しませんわねえ。どうなっているんでざましょ。そろそろお昼になってしまいますわ。のんびりしておりますこと…」

彼女は街の発明家であり、同時に実業家でもあった。すでに数種のパテントがあり、だまっていても年間数億万円のパテント料が入ってくるということであった。

とりわけ彼女のヒット商品は、女性用の『オルガパンティ』であった。女性のパンティは、トイレでその都度おろさなくてはならない。それは女性のパンティが男性のパンツのように、前が割れていないからである。不便である。それなら割れ目を作ればいい…。しかし、その割れ目が平常も開きぱなしでは工合が悪いのである。そこで彼女が発明したのが、平常は割れ目はないのだが、トイレにしゃがむと自然に割れ目が出来、終って立ち上ると自然に割れ目が消えてなくなるという、劃期的なマジックパンティであった。そして、これを『オルガパンティ』と名づけて某繊維メーカーとタイアップして売り出すと、それは爆発的に売れて、そのため彼女はあっという間に億万長者にのし上ってしまったのであった。

毎年、数億円というパテント料をぬくぬくと吸収している小肥りで色白の身体を、彼はあらためてまじまじと眺めた。その錦紗の着物の下で、むちっとした腰や腹がオルガパンティに包まれて汗ばみ息づいているさまや、つい先ほど彼女がトイレの中で不恰好にしゃがんで、オルガパンティの割れ目から女性自身が覗いていたことを想像すると、彼の身体は軽く身震いした。

彼女はオルガパンティを発明するまでは、夫と二人で中華料理店をやっていた。しかし金が出来るとさっさと店をたたんで、会社を設立した。夫が社長で、彼女が専務取締役。会社はいわば『なんでも屋』で、土地の売買から、オルガパンティの情報の販売まで、儲かりそうな仕事ならなんでもやっていた。

「とにかく大きい会社はお金もうけには、向きませんわね…」

と、彼女は自分の体験から自信たっぷりにそう言った。

「…その点、私のような個人企業はようございますわよ。自分一人が判断すればいいんですから、はやい。なんでもあっという間に決めてしまいますわ。商売はスピードが肝要。大会社のようにもたもたしてチャンスを逃がすようなことは、絶対いたしませんわ。今はスピードの時代、どんどん決断して、どんどん儲ける、これが私の人生哲学…。今までで一番儲けた仕事といえば、そうですわねえ、東日本電鉄のときかしら…」

彼女は何回話しても、それを話すのがたのしみらしく、反芻するように話しはじめた。

数年前のこと、A県に三万坪ほどの土地の売物が出た。調べてみると、そこには東日本電鉄の延長計画があり、当然東日本電鉄からも買いが入った。しかし大企業というものは動作が鈍い。土地買収担当者が申請書を書いてあっちこっちハンコをもらいに歩いているうちに、彼女はすばやく手付金を打って契約を結んでしまい、東日本電鉄で社長の決裁がおりた時には、すでに土地は彼女の名義に変ってしまっていた。彼女はその一部を東日本電鉄へ鉄道延長用として倍近い値段で売りつけ、残った土地は鉄道が延長されたために住宅地として開発され、びっくりするほど儲かった。これこそ大企業の鈍重な組織のおかげ様々だと、彼女は酔ったように話した。女にしては意志の強そうな太い眉毛と、鰓の張った顎の線は、もし彼女が大企業の社長になったとしても、見事に経営手腕を発揮するであろうと想像された。

「そういうわけで、情報はどんなものにでも興味深々ですのよ。『時間製造プラント』を女だてらに…、なんてお思いになるかもしれませんけれど、私には私なりの勝算がございますのよ…」

サファイヤの光る指先でハンカチを取り出し、鼻の頭の大粒の汗をたたきながら、

「…私はね、『時間』といいましても、『時間』そのものは売りませんのよ。私が売りたいのは『時間を売るシステム』。簡単に言えば、『パッケージ』ですわね。容器。その方が頭脳的で、効力的ではございませんこと。これからは頭脳プレーでいかなくちゃ…、そう、そう、その『パッケージ』なんですけど、もう二十種類ほども考案しておりますのよ。ねえ、皆さん、もしも皆さんの会社で『時間』をお売りになるんだったら、ぜひ私の考案した『パッケージ』をお使いあそばせよ」

最後の方は急にあそばせ言葉になり、しなを作って、彼と赤鼻の方を、流し目で見るのだった。

彼も『時間』というものは、いったいどんなパッケージで売り出したら一番効果的だろうかと、いろいろ想像をめぐらせてみた。

『時間』の罐詰を作って店頭に並べて売る方法は…、月並だなあ…。

生ビールのようにタンクから計り売りの方法はどうだろう…。

そんなことをするくらいなら、いっそガソリンスタンドのように、「時間貯蔵タンク」にメーターを備えつけたらどうだろう…。

それとも「時間の自動販売機という方法は……？

あるいは電話の配線を使って『時間』を各家庭に配達したらどうだろう。その上、NTTとタイアップして、電話料金といっしょに『時間代金』も、銀行の口座振替えで集金するようにすれば、なお効率的だな…。

などと、あれこれ思いめぐらしているうちに、不意に、ああ、俺にはまだそんなことを考えている暇なんかないんだ…、

俺にはまだバスに乗る出張許可さえおりていないのだ…、

それなのに『時間』をどうしたらよく売れるかなんて、そんなことが何の足しになる…。

空想に翼をひろげている間はたのしいが、急に現実に引き戻されると、狭い箱に閉じこめられたようなみじめな気持になった。そんな時いつも彼の心をよ切るのは、

（ああ、俺はどうしてこんな会社へ就職してしまったのだろう）

という軽い後悔の念であった。

もし眼の前のサファイヤの奥様から、月給を二倍にしてやるから来いと言われたら、俺はすぐにでも転職してしまうだろう

（二八）

バスの乗客は着実にふえつづけ、誰もが発車の時間に全神経を集中させていた。

サファイヤの奥様も話が一段落すると、ハンカチで鼻の先を気ぜわしく煽ぎながら、自分の席に戻って座った。

彼はふたたび会社へ電話を入れた。
だが課長も副部長も会議中とかで、デスクにいなかった。部長は…？　これも来客で席にいないという。まるで仕事にならない…、のんきすぎるにも程がある…、再び腹が立ってきた。しかし相手がいないのでは、どうしようもない。彼は興奮気味の声を辛うじて押えながら、電話口に出てくれた男に、
「私の出張申請書はあがっているでしょうか…？」
と聞いてみた。
「ええ、いま副部長の机の上にのっていますがね」
「副部長のハンコは？」
「まだです。ただ申請書が机にのっているだけです」
「のっているだけ…？」
「ええ、そのまま」
彼は、ひっそりした窓際の副部長の机を頭に描いた。その上に見放されたようにのっている申請書。彼はまるで自分が副部長の机の上で、無視されつづけながら、横たわっている思いにかられた。それはいらだたしさを通りこして、情なくなってきた。もしかしたら出張は駄目なのかもしれない…。悲観的な予感さえ頭をもたげてくる。
「それでは副部長が戻りましたら、はやく決裁するように頼んでくれませんか。とにかく急ぐんです。もう、あまり待てないのです…」
「会議はもうじき終ると思いますよ。あと十分ぐらいで…」
「お願いします。ほんとうに、もうあまり待てないんです。また十分ぐらいしたら電話しますから…」
電話をしている間にバスが発車してしまわないだろうか…、電話の度にこの不安にかられるのだった。
その時、彼の心臓はドキリと波打った。
見ると前方に、バスにむかって歩いてくる運転手の姿が見えたからであった。
（とうとう運転手が来てしまった）
彼はあわてた。
（発車だ！どうしよう！）
彼はうろたえ、緊張し、全身が棒のように固くなった。
見ると運転手は両手で看板を持っていた。
（リモートコントロール・バス）
と書いてあった。だが、運転手は彼が恐れていたように、すぐ運転するために来たのではなかった。とりあえず看板を運んできただけのようであった。運転手はだまって看板を、バスの乗車口に立てかけただけだった。
彼の爆発しそうな心臓はやっと落着いた。
乗客の一人がたまりかねて、
「このバス、いったい、いつ発車するの？」
と聞いた。だが運転手は落着いたもので、
「さあ、リモートコントロール・バスですから、私にはわかりません。センターのコンピューターが動き出せば、自然にバスは発車するようになっています」
そのまま運転手はいま来た道を引き返すと、桜の花群の中へ消えていってしまった。
しかし、運転手の出現で、バスの中は、発車寸前の期待にみちた雰囲気で活気づき始めた。「リモートコントロール・バス」の掲示板が、急にバスの中のムードを高めたことは否めない。どこか見えない場所にあるコンピューターのボタンがカチリと音をたてれば、バスはそのまま滑るように発車する仕掛けになっているのである。
彼は腕時計を見た。さっきの電話からもう十分以上はたっている。もう会議は終っているにちがいない。
ふたたび彼は会社へ電話を入れた。もうこれが最後の電話だ！…と、心の中で叫びながら。
しかし、まだ会議は終っていなかった。
だが、もうこれ以上待てないと、強引に電話を課長につないでもらった。だが会議中の電話なので、課長の声は不気嫌で、
「私の方も困っているんだよ。副部長がうんと言わないのでね…」
向うから先手を打ってきた。
彼は、副部長の机の上に放置されたままになっている出張申請書を、ふたたび想像した。
「副部長はなんと言うのですか？」
「一千万円も出すバスに乗って、それだけのメリットがあるかどうか疑問だ、というんだね」
「課長、もうバスは発車するんです。そんな基本論を議論している段階ではありません」
副部長という人間は、水のような人間だった。まったく自分の意見というものを持っていない。いつもひっそりと座っていた。そして自分に責任が及んできそうなものが近寄ってくると、それを、ぬめっとした蒼白い肌が敏感に感じとって、めったなことではハンコを押さないのだった。だからこみ入った書類は次から次へと手許に溜まり、仕事がダムのように堰きとめられていた。この黒いバスについても、なんとかして手を触れまいとする副部長の顔が、彼の頭に浮かんできた。
「副部長がだめなら、直接部長に話をつけてくれませんか。このまま待っていますから…」
最後の彼の言葉は少し凄んだ口調になった。
会議はどうやら終ったようである。
課長はついに追いつめられて、副部長のところへ出掛けていった。そして詰め寄るようにして、やっとハンコを押させるのに成功したのである。
しかし、もうひとつ難関があった。部長である。部長も一度ぐらいの説明で、簡単にハンコを押すような人間ではなかった。やはり、
（本当かどうかわからんバスに、一千万円も出せるか

ね）

という基本論のむし返しで、

「でも、部長、バスはもうすぐ発車するらしいんです…、電話を切らないで返事を待っているものですから…」

すると部長は額にすさまじい縦皺を寄せて、

『待たせておけばいい！』

と怒鳴った。

「…ね、といった工合だから、もうちょっと待ってくれないかな。部長はもう少し様子を見ろと言うのだよ」

彼は頭へ血が脈打ってかけのぼってくるのが、はっきりわかった。

「様子を見るって、どう見るんです。これ以上見るものなんて、何もありませんよ。もう最後のチャンスです。課長、これ以上…」

彼の唇は震えた。

「まあ、そう怒るなよ。部長がそう言っているのだから、仕方がないじゃないか。私だって一生懸命やっているんだよ、な、そう困らせないでくれよ」

課長から、困らせないでくれと言われると、彼の方も困ってしまって、

「別に困らせているわけではありませんが…」

と言葉をつまらせてしまった。

もうどうしていいのか、わからない。彼の頭は混乱してきた。しかし課長の努力もいちおう認めないわけにはいかないな、などと考えていると、

「ではまた電話をかけてくれないか…」

彼がそれに答える暇も与えず、

「ね、すまないがそうしてくれ、頼む、すこし冷却期間をおかないと…」

課長の方からすばやく電話を切った。

彼は半分泣き顔になって携帯電話を切った。

いったい、どうなっているのだろう。なにも自分の利益のためにやっているのではない。好き好んでやっているのでもない。会社のためである、会社のためと思えばこそ、身をけずる思いで駆けずり廻っているのに…、それなのに…、そう思うと情なくなって、涙があふれてきた。

バスの中の人数はかなりふえて、座席はほぼ埋ってしまっていた。補助椅子に腰掛けたり、立ったまま新聞を読んでいる者もいた。

彼は少しやけくそな気持になった。もしバスが発車したら、もう発車した時のことだ。出張が許可になろうが、なるまいが、どうでもいい、このまま乗って行ってしまおう。

すると、そう覚悟を決めた彼を、不意に、

（トイレに行きたい）

という尿意が襲ってきたのである。それは爆発的な衝動で、我慢することが出来なかった。

しかしバスはリモートコントロールなのだから、コントロール室のコンピューターが動き出せば、いつバスは走り出すのかわからない。トイレなどへ行っている暇はない。

しかし彼の下半身は爆発寸前である。

彼はやにわに立ち上ると、自分でもわけのわからない奇声をあげて、バスの外にとび出した。そして矢のようにトイレにむかって走った。

だがその時、突然、予期しないことが起った。彼がトイレから出てきた瞬間に、急にバスが走り出したのである。

「しまった！」

彼はすっ頓狂な声をあげて、

「待ってくれ…！乗せてくれ…！」

全身で悲鳴をあげながらバスを追いかけた。足がもつれて、ころびそうになった。夢の中で走っているようだった。頭ばかりが前へ出て、足が少しも前へ出ない。下半身に骨がないようだった。

しかしバスは五十メートルばかり走っただけで、すぐ止ってしまった。正式の発車ではない。発車のテストだったらしい。

彼は呼吸を荒らし、全身汗まみれになって、やっとバスに追い着いた。バスの窓から乗客がいっせいに首を出し、捨て犬を見つめるように、その彼を眺めていた。

（七）

風もないのに、にわかに桜の花が散り出した。

あちらでキラッ、こちらでキラッと、光の切片のように舞い落ちていたのが、あっという間におびただしい桜の花が、際限もなく地面をめがけ降りはじめた。あたかも低く垂れこめた雨雲がこれ以上自分の重みに堪えかねて、雨となって降りしきるように、桜の花群もその重さに堪えかねて、どっと梢から散りかかってきたのにちがいなかった。

その散り工合のあまりのおびただしさは、桜がなにか空中の狂気を恐れて、散り急いでいるのではないかと思われた。

たちまち視界は花吹雪で白一色と化し、バスの黒い車体も白い花弁で覆われはじめた。このままバスが動かなければ、バスも短時間のうちに花弁の下に埋ってしまうだろう。

花弁の雪はなにか不吉な予兆を彼に感じさせた。不安の断片が花弁となって、空中から舞いおり、バスの上に降りかかっているのではないか…。

バスはもう満員である。

バスはいつ走り出すのかわからない。もうバスに乗っていないのは、彼一人だけだった。はやく乗らないと間に合わない。彼はバスのステップに足をかけた。

しかし、彼はまだバスに乗れないのだった。彼にはまだ会社から出張申請の許可がおりていないからである。もし彼がバスに乗って、突然バスが発車してしまえば、彼は無許可で出張したことになり、下手をすれば馘首である。もし馘首にならないとしても、一千万円の会費は自分で負担しなくてはならない。

はやく乗りたいのだが、乗ることができない。

彼は支離滅裂な気持でおろおろと、桜の花弁をけ散らしながら、犬のようにバスの周囲を走りまわった。

その時、降りしきる花吹雪の中から、不意に湧いたように一人の女性が現われた。白い洋服に白い帽子をかぶり、手袋まで白かったので、あたかも雪女郎を思わせたが、それはバスガイドだった。片手に、

××県××郡××町『時間製造テスト
プラント』見学バス

と書いた紙を持っていた。

運転手はバスに乗らないが、バスガイドは乗るらしい。彼は××町という東北の山の中の小さな町を頭に描いた。バスガイドがその紙をバスのフロントガラスに貼りつけた瞬間、いよいよバスが発車するという現実感で、彼の全身は凍りついたようになった。

彼の指ははじきとばされたように、携帯電話のボタンをたたいた。そして電話に出た女性に、

「課長を！」

と、叱りつけるように叫んだ。

しかし課長はなかなか出なかった。電話機を通して、開発部のざわめきが潮騒のように聞えてくる。しばらくすると、そのざわめきを背景に断片的な声が…、

『…居ない、と言ってくれないか…』

課長の声だ！

居留守を使っているな…。

彼はカッとなった。

『そんなことできませんよ。彼、もう、ぎりぎりで、かみつきそうな声ですよ』

『仕方がないな、じゃあ、出るか…』

気の進まない課長の声。しかし暫くは沈黙…。課長は呼吸をととのえているらしい。やがて、

「はい、私だ…」

と、無理に元気をかきたてた課長の声。

「課長ですか、もう、バス、発車するのですが…」

「困ったなあ、まだ申請書、部長の机の上にのったままなんだよ…」

「部長はその後どうなんです？」

「部長も自分だけでは判断しかねる、担当常務に相談してみると言っているんだよ。ところが常務は外出、午後にならないと帰ってこない、だからそれまでは駄目…」

「冗談じゃありませんよ」

彼は課長の言葉をさえぎった。

「バスはもうすぐ発車するんです。どうして午後まで待っていられるんです」

「それで困っているんだ…」

「困っているのはこっちです。いったい、どうすればいいんですか？」

彼は悲鳴のように叫んだ。

「理屈はもうどうでもいいのです。イエスか、ノーか、それだけ言ってください」

「イエスか、ノー…？」

課長は首を絞められた鶏のような声を出した。

「イエスか、ノーか、と言ったって…、そんなの困った…」

「困った、困った、と言ったって、問題は解決しませんよ。部長の返事をはやくもらってください」

そこで話はプツリと切れた。切れたといっても、電話が切れたのではない。電話の相手が、突然真空状態になったという感じなのである。課長は受話器を置いたまま、どこかへ行ってしまったらしい。部長のところへ話をつけに行ったのなら有難いのだが…。

彼は携帯電話を耳にしたまま、じっと待った。バスは大丈夫だろうか、満員になって発車してしまわないだろうか。彼は腕時計を見た。秒針が猛烈なスピードで動いているように感じられた。時計よ、ゆっくり廻れ…。

課長はなかなか電話に戻ってこなかった。

『この電話かかっているのかしら？』

『あら、課長さんが使っているらしいわよ…』

机の上に放置された受話器を、奇妙な動物でも見るように取囲んでいる女子社員たちの声が、携帯電話の奥で耳鳴りのように聞えた。

彼はこのまま電話を待っているのが不安になった。課長はどこかに逃げてしまったのではなかろうか。いったん電話を切って、もう一度かけ直してみた方がよくはないか…。そう思った時、洞窟の奥から返ってくる谺のような声が聞えてきた。

「えっ…？　オーケーなんですか？」

興奮のあまり彼は大声で聞き返した。

「オーケーだ」

「オーケー…？　たしかにオーケーですね。どうもありがとうございました」

彼はくらくらするような気持で、電話を切った。

彼は興奮で泣き出しそうになりながら、バスを見上げた。もう何も考えることはない。ただ、バスに乗ってしまえばいいのだ。

しかし、時はすでに遅く、バスはもう満員だった。彼が課長と長電話している間に、最後の人々が大勢押し寄せ、バスは満員というよりも、超満員であった。バスに乗りきれない人々が、バスから溢れて、外にはみ出していた。

発車寸前のわずかな時間に、最後の人々がワッと押しかけてきたのにちがいない。バスの中には、ソーセージの中味のように人間がぎっしりと詰まり、さらにしがみついてでも乗ろうとする人々のために、ドアが閉まらない状態だった。バスのステップには、身体を半分無理やりにドアの中へと押しこんでいる人が二人、さらにその外側に片手と片足だけで辛うじてバスにつかまり、なんとかバスに乗りこもうとしている人間が、はみ出した内臓のようにぶら下っていた。

「発車しま—す、危険ですからおやめください」

バスガイドが必死に叫び、もみくちゃになりながら、ドアを内側から閉めようとした。

しかしステップの三人の男は眼をむき、なんとかしてバスの中へもぐり込もうと形相すさまじく、全身を弓なりにして押しまくったから、バスガイドが『おやめください』と、柔らかにドアを引っぱったぐらいでは、男たちをバスから振い落すことはできなかった。三人の男はドアが閉らないように、協力してドアを外側から押さえ、ヨイショ、ヨイショと声をかけながら、じりじり、じりじりと、バスの中へ侵入していった。

彼はパンク寸前のバスを唖然と見た。事態はすでに絶望的であった。しかし彼もあきらめるわけにはいかなかった。彼は、

「乗せてください！お願いします！」

バスの入口にむかって突進した。

彼の眼の前では、三人の男が殺される寸前のいも虫のように、身をよじってもがいている。彼はその三人に体当りをくらわせ、男達の隙間に首を突っこもうとした。だが、ものの見事に人間の壁ではじき返されただけだった。

「危いですから…、おやめください！」

バスガイドの金切声。

「やめろって…、つっこんだものが途中でやめられるものかい。親の死に目に逢えなくたって…」

ぶら下った男の中の一人が真赤な顔で、すっ頓狂な声をあげたので、バスの中は爆笑した。

「そうだ、そうだ、その意気、頑張れ！」

バスの人いきれの中から、まぜ返す声がした。すると一番奥の方から、

「あら、そんなに押しちゃ、イヤン、わたし、痛くって…」

卑猥な男の声に、また爆笑。

彼はやにわにドアにしがみつき、全身の力で男達の体を押した。彼は弓なりに身を反らせて伸びあがり、救いを求めるようにバスの奥を覗いた。しかし、すし詰めのバスの中では、赤鼻もサファイヤの奥さまも、姿が見えなかった。

するとその時、窓の一つがあいて、赤鼻が首を出し、

心配そうに彼の方を眺めているのが眼に入った。

彼はステップからとび下りると、藁でもつかむ気持で駆け寄り、窓の下から両手を上に伸して、

「たのむ、乗せてくれ！」

赤鼻は窓から彼の両手をつかんで、引っぱり上げてくれた。しかしバスのボディはつるつる滑り、彼の両足はいたずらにバスの横腹でバタバタするだけで、とても窓からバスの中によじ登ることは出来なかった。

彼はあきらめると、ふたたびバスの入口へ走り、ドアに手をかけて、ステップに片足ものせた。

その時、

「ピーッ、ピーッ、ピーッ…」

コンピューターから出るリモートコントロールの発信音が、バスガイドの背後で静かに鳴った。発車をコンピューターが指示しているのだった。

「発車いたします。最後の方は、手をお放しください！」

バスガイドはキンキン声でそう言うと、強くドアを引いて閉めた。

彼はバスから振り落された。

眼の前でドアは無情に閉められ、半開きの隙間から三人の男達の尻や背中や足をはみ出させたまま、バスは走り出した。

「あ、あ、あーッあ、あー…」

彼は絶望とも恐怖ともつかぬ奇妙な声をあげると、最後の力を振りしぼってドアの片隅に取りすがり、バスといっしょに走った。

しかし、バスのスピードにはついていけなかった。

あっというまに彼の足はもつれ、バスから抛り出されたように地面にたたきつけられた。

バスはそのまま走り去った。

地面から起き上ると、彼はしばらくバスの後姿を眺めていた。

バスは地面の落花を四方に散らしながら走り、やがてその影は黒い点となり、桜の花群の彼方に消えてしまった。

……彼はすこしぼんやりしていた。

彼はいま自分のしていることの意味が充分理解できない感じだった。

彼は桜の梢を見上げた。

花びらが、花の雲から湧き出るように散りつづけている。

そのひっそりとした花吹雪の中に、彼はただ一人立っていた。

今朝、一番最初に黒いバスへ来たのは彼だった。だから、乗ろうと思えば、どの席にも自由に座れた。彼ほど完全にバスに乗れて、彼ほど確実に座ることのできる者

は、他には居ないはずだった。
ところがその彼が最後にバスから振り落されて、こうしてポツンと残っている…。
俺はいったい何のために朝一番にこの公園へやってきたのだろう…？
何のために、何回も会社へ電話したのであろうか…？
花曇りの空はいぜんとして明るかった。

彼はふたたび桜の梢を見上げた。
重ねあわせた桜の枝々には、花群が白く、ぼーっと、とぼけたように咲いていた。
腕時計を見た。
十二時三十分を指していた。急いで帰れば、午後の勤務には間にあうだろう。
（駅の近くでラーメンでも食べていこうかな）
彼は国電の駅へむかって、とぼとぼと歩きはじめた。
（終り）

古い物・遠い夢

忠内正之

唐津の茶陶

（一）飲茶から茶の湯へ

本来「薬」として中国から伝わった飲茶の習慣が、茶の湯という風雅の道に発展したのは日本においてである。その発展の時期は、南北朝から室町時代にかけてと戦国時代という、戦乱期であった。

南北朝時代は闘茶といって、茶を呑み比べ産地を当てるというゲームが流行した。バサラ大名と言われる佐々木道誉の派手な茶寄せ合いは有名である。また佛教の修業としての僧院の茶、宮廷での絵合わせ、貝合せ、連歌などの寄合いが開かれる際の喫茶の習慣等が流行した。

室町時代に入って、一休禅師、村田珠光らによって、茶の湯の基礎が作られる。それは「ばらさ茶」と呼ばれる闘茶の風狂心を残し、禅の精神を加えたものだった。

応仁の乱（一四六七）に始まる戦国時代、堺の商人武野紹鷗が之を引き継ぎ、弟子の千利休が更に深め、遊芸から精神性を伴う芸道へと高めた。これが町人衆にも爆発的なブームを呼んだ。

情報伝達の手段が少ない時代、茶会は貴重な情報交換の場であり豪商たちは茶室をもち、しきりに茶会を開いた。そうした中から今井宗久、津田宗久、千利休等の有力な茶人が輩出した。

今井宗久は、武器商人、津田宗久は貿易商人で鉄砲製造業者であった。彼等政商が信長や秀吉の全国統一を背後から支えたことは、明らかである。彼等は茶の湯を通じて権力者と手を組み、莫大な利益をあげて、経済を牛耳った。

したがって、茶会がしばしばなまぐさい密談の場と化すのも当然であった。茶の湯の政治的な効用を知っていた信長は、茶会を政治の場とし、認可のない者の茶会を

禁じた。このことにより、茶の湯は、一つの権威の象徴となり、身分のある武将のたしなみとも見なされるようになるのである。

また信長、秀吉は名物狩りに執心し、天下の名器を収集し功臣への恩賞として与えた。茶器の値段はつり上がり、一国一城の知行に値する程の争奪戦になる場合もあった。

こうしたなまぐさい煩悩の世界をひきずる反面、茶の湯が戦国武将の精神修養の場となったことも確かである。

戦場で開かれる陣中茶会では明日の運命を知れぬ武将たちが一服の茶に平常心を求めた。一服の喫茶は、血に汚れた心身を鎮める儀式だったとも言える。

「一期一会」という利休の教えは、戦国の世の茶会、特に生死の境にある陣中茶会から生まれた、実践的な言葉だったに違いない。

戦国の世が終わりを告げるのは、大阪夏の陣（一六一五）の後である。これを「元和偃武」という。茶の湯は益々隆盛を見るが政治と茶の湯は切り離された。利休や織部が命を賭けたような厳しさは消え、趣味として広く楽しまれるようになる。

争乱の世の中で茶の湯は育ち、深まり、輝き、そして変っていったのだった。

茶陶、茶器もまた権力者と命運を共にした、侘びの「利休好み」から、ひようげて力強い「織部好み」、きれいさびの「遠州好み」、へと時流にのって移ろいを見せる。

権力者と主な茶の湯師範

足利義政（1404―1473）―村田珠光（1423―1502）
織田信長（1534―1582）―武野紹鷗（1502―1555）
豊臣秀吉（1536―1598）―千利休（1522―1591）
徳川秀忠（1579―1632）―古田織部（1544―1615）
徳川家光（1604―1651）―小堀遠州（1579―1647）
徳川家綱（1641―1680）―片桐石州（1605―1673）

「茶の湯」という形を整え始めるのは室町時代で、道具類は唐物を飾った書院飾りであった。そこで行われたのが書院の茶である。この唐物中心の茶の湯から侘び茶を確立させていったのが村田珠光、武野紹鷗、そして千利休へと連なる系譜である。

紹鷗の弟子であった千利休は、その侘び茶の精神を受け継ぎつつ、道具を見立てるだけでなく楽茶碗など、みずからが目指す茶の湯のための、新しい道具を考案した。それは茶室や点前などにも及び、「草庵の茶」を作り出した。

利休に續く茶人は織部焼で知られる古田織部で、利休

の好みと対照的な歪みのある型破りの道具を好み、美濃や唐津で、織部好と称される茶陶が焼かれた。

織部の弟子である小堀遠州の美意識は「綺麗さび」といわれ、丹波や高取などで焼かれた瀟洒な茶入や水指を好み、祥瑞や古染付などがもてはやされる時代の流れを作った。

更に安定した江戸時代になると優美な野々村仁清（明暦―寛文頃、生没年不詳）等によって色絵陶器が出現した。京焼である。

（二）茶碗の変遷

茶の湯においては、様々な道具が使われて来た。中でも茶入は一國一城にも代るものとしてその評価を高めていたのであるが、世の中が平和になると茶入がその政治的役割をもたなくなると共に、茶碗が最も人気の高い茶道具となったのである。

茶の湯を楽しむ者にとって、茶碗という言葉のひびきは、なんとも魅力的なものである。一席の茶会でのハイライトは、亭主側から点て出された一碗のお茶を、お客が一口すするその瞬間である。このとき両の手に抱かれている茶碗、それは亭主とお客との心のふれあいの大切な場となるのである。

時代の移り代りと、茶の湯の発展によって茶道具の中心となった茶碗もまた大きく変化をしていった。

当初喫茶の始まりとともに使われたのは青磁や天目などの「唐物茶碗」であり、侘び茶が興る室町時代後期から「高麗茶碗」が加わる。和物茶碗は、室町時代から唐物を手本とした天目が瀬戸や美濃で焼かれていたが、桃山時代には楽茶碗が生まれ、美濃、唐津でも、茶の湯の発展と需要の増加に対応して、多様な茶碗が焼かれる様になった。

唐物 ← 珠光青磁茶碗／曜変天目茶碗
高麗 ← 大井戸茶碗／粉引茶碗（三島）
和物 ← 楽茶碗／瀬戸・美濃・九洲窯（唐津他）

室町末期から高麗茶碗が唐物に代って流行し始めた。このことは、武野紹鷗、千利休など侘茶を完成に導いた茶人たちが現れ、茶の湯が書院から草庵に移行して行った趨勢と関わりがある。

天正時代の茶人、山上宗二（一五四四―九〇）の記述に「唐物茶碗スタリ当世ハ高麗茶碗、瀬戸茶碗、今焼ノ

茶碗迄也」と書かれている。

天目中心の唐物に変って次第に主流を占めた高麗茶碗は井戸、三島、呉器などで次々と名物としてその名を高め、各大名や茶匠は争って、これを求めたのである。

一方、天正（一五七三―九二）ごろから日本国内でも既に唐物写しを作っていた、瀬戸から美濃に移った茶陶の主力が、瀬戸黒、黄瀬戸、志野、織部の名碗を次々と生み出した。その中には明らかに利休好みや織部好みと見られるものがある。指導や注文に応じて作られたのであろう。

同じく天正の中ごろからは、それこそ抹茶専用の、しかもすべてその機能が抹茶を呑むために充たされている楽茶碗が、利休の意匠、長次郎（楽初代）の作で誕生するのである。

その他、信楽、唐津、備前などの古窯でも抹茶茶碗が作られるようになったのである。

利休没後、茶陶に大きな変革をもたらしたのが秀吉の朝鮮出兵である。戦争の方は大失敗で、このため豊臣政権は命運を縮めた様なものであるが、こと茶陶に関するかぎりではこれほど収穫の大きかった戦争は他になかったのである。

即ち各地に転戦した武将がそれぞれに高麗茶碗を探して持ち帰ったばかりでなく、かの地の陶工を連れ帰り、さっそく自国で製陶を始めさせたのである。

ここに国焼が各地に没興し、がぜん日本の陶磁器、いわゆる和物の種類と内容をすこぶる充実せしめたのである。その代表が萩であり、また、唐津、高取、上野、薩摩などいずれも大きくその影響を受けたのである。

江戸時代に入ると、これらの国焼がそれぞれ独自の発展をとげるとともに寛永期（一六二四―四四）には小堀遠州が各地の国焼に指導注文を行い、すぐれた作品を残す結果となった。遠州の場合は単に国内ばかりでなく、国外へも注文を発し、中国から祥瑞、朝鮮から御本と相ついで作品がもたらされて、その洗練された造形が高く評価された。

国焼の隆盛と併行して各地の大名が自藩内に窯を築き、いわゆる御庭焼が始められた。

他方、長次郎を祖とした楽家も、二代目常慶のころから民間に賣り出すことを業とし、千家を中心に多くの茶人の愛好するところとなり代々受け継がれて今日に至っている。

また楽家とは別に、本阿弥光悦の焼いた楽茶碗は、その名声と技量で抜群の人気を得ており、真作が少ないだけに今もって貴重な存在であり光悦作の茶碗のうち二つが国宝、重文に指定されている。

楽とともに京都で独自の発展をとげたものに京焼がある。初め粟田口あたりで単色のものが焼かれていたが寛永年間に野々村仁清が出て以来色絵や金彩ものの陶器に

すぐれた作品が出きるようになり、優秀な後継者たちが輩出して今日まで作陶が續けられて来た。

仁清作の豪華な色絵の茶壺は、国宝で熱海のＭＯＡ美術館に常設されて、訪れる人々の目を和ませている。

次は本題の唐津焼に移りたい。

（續）

祝 日本文芸アカデミー賞 受賞

二宮金次郎の一生

三戸岡道夫著

栄光出版社　1,900円

今こそ伝えたい 勤勉で誠実な生き方

パパ　やったね！

鍋屋次郎

特別養護老人ホーム「なごみの園」は、横浜市北部の緑に囲まれた静かな丘の上に建っている。施設建物の周りの散歩道と正面入口通路の両側には、背の低い生垣と花壇が並び、見る人に清々しさを感じさせている。

松井信之、六十三歳、六年前銀行を退職、現在は印刷会社に勤務、経理・総務を担当している。二年前の四月、福祉専門学校の特別専攻科二年制通信コースを受講、今年三月の卒業前に十日間の施設実習が課せられている。今日がその初日。全くの未経験の世界であるだけに、不安を感じながら緊張して『なごみの園』に入って行った。

朝九時、夜勤との引き継ぎを終えた後のミーティング。二階フロアチーフの三上は

「皆さん、お早うございます。今日から十日間、この『なごみの園』で介護サービス実習をする松井さんを紹介します。青葉福祉専門学院の特別専攻科二年制通信コースを受講して、卒業前の実習に来ています。実習は十日間ですが、会社のお休みが続けて取れませんので、一ヶ月に二～四回程度来ることになります。皆さん、宜しくお願いします」

と松井を紹介した。

「お早うございます。松井信之と言います。施設のことは全くの未経験で何も分かりません。宜しくお願いします」

と挨拶が終わると、三上は集まっている二階フロアの職員七名を紹介した。

朝礼が終わって、三上は松井に施設内を案内しながら

「この二階には六十人入所しています。認知症の程度が比較的軽く、移動と食事がなんとか自立している方がこの階にいます。車椅子移動の方は自立に入っています。三階には認知症の程度が重く、移動や食事など日常生活のほとんどについて介助が必要な方が四十人います。二階の居室はこのホールの東・南・西側と三方にあって、居室の種類は四人部屋、二人部屋、個室と三種類あります」

などと説明しながら施設内を一巡した。二階の職員控室に戻ってから

「松井さん、今日は十時から二十人が入浴します。松井さんは入浴が済んだ方々にドライヤーを掛けてください。終わった方をテーブルのところまでお連れして、お茶を差し上げてください。十一時半くらいから昼食の配膳が始まります。そうしたらお部屋にいる方々をテーブルに案内してください。ドライヤーをする場所と器具は山下が教えます」

と松井の午前中の仕事を指示した。

「はい、分かりました」

と返事をして、若い介護職員山下君子と一緒一に雑品庫に行き、そこでドライヤーと椅子を渡された。

「終わったらここに戻しておいてくださいね。それからあの窓の下の明るい場所でドライヤーをしてください」

と場所を指差して、山下は自分の持ち場に戻って行った。

松井は若い頃から額から頭頂にかけて禿げ上がっていて髪の毛は少なく、ドライヤーは一度も使ったことがない。少ない頭髪は洗髪の後も二～三回タオルで拭くだけで乾いてしまう。ドライヤーの使い方を考えているうちに介護テキストの文章が頭に浮かんだ。

『シャワー介助するときは、まず温度を自分の手足で確かめて、それから相手の足先に少量を掛けて反応を確かめ、足からそっと背中、胸と少量ずつ掛けてゆく』

『会話は楽しい話題を選ぶこと』

最初の人は車椅子利用者だった。浴室前から連れてきて車輪にストッパーを掛け、室内履きに書いてある名前を確認して

「幸田さん、お風呂はいかがでしたか？」

と声をかけて、髪を片手で浮き上がらせながら、髪の中に温風を送り込んだ。

十一時半までに全員終了した。やや中腰の作業は疲れた。困ったことは、ドライヤーが終わって食堂のテーブルまで連れて行くのはいいが、一人ひとりの湯飲茶碗がどれか分からない。幸いパートに来ている中年の女性が

「幸田さんの湯飲みはこれ」

と言った具合に教えてくれて助かった。

入所者の昼食が終わる頃、職員は『お薬』を、袋に書いてある名前と顔の一致を確認しながら声を出して

「幸田さん、はい、お薬」
と渡した後、飲み込むまで目で確認している。その様子を立ったまま眺めていた松井は肩をポンと叩かれた。振り向くと老婦人が
「あんた、いつ入ったの？　ご挨拶がないね」
と言って松井を見つめている。作業用の濃紺のトレーナー上下を着て、介護用の室内履きを履いて頭は禿げ上がっている自分は、入所者と間違われるのも致し方ないなと思って苦笑していると、幸田さんが老婦人に
「あんた、この人は今日から来たボランティアさんよ」
と言ってくれた。老婦人は返事をするでもなく無表情のまま、後ろを向いて杖をつきながら自室へ戻っていった。

午後四時三十分、松井は実習日誌にその日の作業内容と感想を記入して三上に提出した。三上は
「松井さん、今日はお疲れさま。松井さんは銀行にお勤めだったのですね。全く別の世界の体験はいかがでしたか」
と言いながら実習日誌に目を通し、コメントを記載し終わって、再び
「何かお気づきのことはありましたか」
と松井に尋ねた。
「気づくどころか、若い皆さんの働きぶりに感心しました。食事中に眠ってしまいそうな方に、三上さんは寄り添って声をかけながら介助なさっているし、職員の皆さんはお薬を差し上げるとき名前と顔を確認して、服用が終わるまでキチンと目で追っている。机上では学べないことを沢山学びました」

松井がバスと地下鉄を乗り継いで帰宅したのが午後六時半。妻の由美は笑顔で
「お帰りなさい。どう？　初めての経験は？　疲れたでしょう」
と言ってから、直ぐ思い出したように
「そうそう、栗木地区包括支援センターの草村さんから電話があって、絵画教室でご一緒の塚本さんのことで相談したいから、今夜七時半頃でいいかと言うので、どうぞお越し下さいと言ったけど」
「分かった。じゃ、早く夕飯を済まそう。話は変わるが、施設の若い人たちは立派だったよ。仕事振りは勿論のこと、お年寄りへの対応が謙虚で、やってあげると言う態度や言葉使いは全くなかったね」
由美はニコニコしながら頷いていた。

七時半を少し廻ったとき草村がやってきて
「今日お伺いしたのは塚本さんのことです。二ヶ月前奥様が施設に入所した後、八十五歳になる塚本さんは一人

で生活していますが、絵画教室でご一緒の婦人達の話ですと、塚本さんは食事と着替えが十分できていないのではないかと言っています。と言うのが、先週、絵画教室の帰りに数人で喫茶店に入ったそうです。そのとき、塚本さんのお菓子の召し上がり方が尋常でなかったこと、それと塚本さんから漂ってくる臭いなどから、私のところに話がありました。本来、立場上は職務柄私がお伺いして、困っていることがあればお聞きしてお手伝いすることがベストですが、ご承知のように塚本さんは心を開いてくれません。最近はケアマネージャーの西条さんやご近所の方も玄関にも入れて貰えなくて、ヘルパーの柳さんも何か言うと『余計なことは言うな、俺の言うことだけやってくれ』と言われるそうです。そこで塚本さんが親しくしている松井さんに塚本さんの様子を見てきて頂きたいのです。そのお願いに来ました」
「そうですか。分かりました。介護支援にはそれを受け入れる人にその気があるかないかが重要ですから、余分なお節介と思われればそれまでですし。何はともあれお伺いしてみましょう」
松井の言葉が終わるのを待って、草村は
「そうそう、塚本さんの両隣では火の始末を心配しています。台所か浴室か、何かあったのかも知れませんね」
と言ってお茶を口にした。
それから絵画の話になって、草村と松井夫妻の三人は時の経つのを忘れていた。
草村が帰ってから、由美は
「パパ、引き受けてしまって大丈夫なの？　塚本さんは難しい方よ。頑固で評判よ」
「周りが困っているということは、本人がそれ以上に困っているということではないかな。兎に角、一度行ってくるよ」

次の土曜日、松井は昼食時間を避けて、午後三時に塚本さん宅を訪ねた。近くのコンビニで桜餅を三個買って手土産にした。
門には鍵が掛かっていなかったのでそのまま入って、敷石を伝って玄関に行くと扉は開いたままだった。
「こんにちは。ごめんください」
と言うと、奥から
「誰？　何の用？」
と大きな声が返ってきた。
「絵でご一緒の松井です。通りかかったので、一緒に桜餅を食べようと思ってお邪魔しました」
「あー松井さん。桜餅？　いいねー。どうぞ上がってください」
の声に、松井は玄関から上がって応接間の横を通って声のする台所へ入ると、塚本は食事をしている。
「今お昼ご飯ですか？」

と言うと、塚本は口に含んでいるものを飲み込んでから
「お昼ご飯を食べたかどうか忘れてしまったのでね。直ぐ行きますから、あちらの応接間で待っていてください」
と言って、初めて目を合わせた。
食卓の上を見ると、副食はコンビニから買ってきて蓋を開けたままの状態の、小魚の佃煮と煮た野菜詰め合わせの二種類。

松井は応接間のソファに座った。描きかけの頁を開いた画帳がテレビの前に立て掛けてある。暫く待っても塚本が来ないので台所に見に行った。瞬間、目を見張った。ガスがついたガスコンロの上に、中学生が理科の実験で使うようなフラスコが乗っていて、その中では湯が沸騰している。松井は思わず大きな声で
「塚本さん、危ないですよ。フラスコが割れますよ」
「いつもやっているから大丈夫。松井さんも子どもの頃、フラスコの下からランプで液体を温めた実験をしたでしょう」
と驚いている松井を見て嬉しそうな笑顔を見せた。絵画教室では見せたことのないあどけない無邪気な笑顔だ。やがてガスを消してフラスコの首に布巾を巻いて持ち上げ、沸騰した湯を薬缶の湯の出口から薬缶の中に注いでいる。注ぎ終わると薬缶を持ち上げ、空いている片手で急須の蓋をとつて湯を入れ、急須から湯飲みに入れて
「どうぞ」
と、呆気にとられている松井に渡した。
松井は湯飲みを受け取って傍らの椅子に座った。コンビニの包みを開いて桜餅を出し
「塚本さん、一緒に食べませんか」
とテーブルの上に置くと、待っていたかのように塚本の手が伸びて、アッという間に二つ食べてしまった。驚いた松井は
「塚本さん、僕も一つ頂きますよ」
と言って口に運びながら塚本を見ると『僕に呉れたのではないの？　あんたも食べるの？』と言いたそうに松井を見つめていた。
松井は
「ご飯や洗濯はどうしているのですか」
と聞くと
「ご飯は自動炊飯器、洗濯は洗濯機がやってくれる。副食は全てコンビニ。不自由なし」
と言ってから塚本は一方的にしゃべり始めた。最初は体調のことで高齢化から血液の循環が悪くなって、手足の先が冷たくなるなどと話しているうちに突然軍隊の話しに飛んで、弾薬も食料も尽きてジャングルを彷復して九死に一生を得た話が延々と続いた。松井は頷くだけで

口を挟むタイミングがなく、時計を見ると既に二時間を経過している。ようやく話を遮るような形で
「何かお手伝いすることありますか」
と聞くと
「何もないよ。一人は気楽。うるさい女房もいないし」
と言って、全く話しに乗ってこない。

塚本さんの家を出ると、婦人が二人立っている。松井を見て
「塚本さんのご親戚の方ですか」
と聞くので
「絵画教室で塚本さんとご一緒している松井と言います。同じ町内に住んでいます」
二人は顔を見合わせた後、頷き合って
「塚本さんのことで少し話を聞いてくれますか」
と言うので、そのまま立ち話で話を聞いた。二人の話は
「塚本さんは夜と昼と取り違えることが多いようです。一週間くらい前の真夜中に大声がするので心配になって訪ねて行くと、ガスに薬缶を掛けたまま忘れて、お湯は蒸発、薬缶は黒こげ。火事寸前の状態でした。お湯を沸かそうとしてガスをつけてそのまま台所で眠ってしまったらしいのです。それからは両隣の私たちと裏手の家は、塚本さんの台所が見えるところの雨戸を一枚開けて寝ています。熱や煙の感知警報機はついていません。一日置きにヘルパーさんが来てお掃除と洗濯をして帰りますが、お米の減り方が異常だと言っていました。アメリカにいるという息子さんに帰ってきて頂いて、塚本さんをどこか施設に入れて貰うわけにはいかないでしょうか。危なくて安心して住んでいられません」
松井も、今見たばかりの状況から考えて
「それはご心配ですね。栗木地区包括支援センターの所長さんにお話しして、アメリカにいる息子さんに連絡とってみましょう」
と言って別れた。

帰宅すると、既に夕食準備を終えた由美が
「遅かったわね。こんなに長時間お邪魔してご迷惑ではなかったの？」
「塚本さんは寂しかったのだろう。一人でしゃべり出し腰を上げることができなかった。帰りに両隣のご婦人につかまって話を聞かされた。こちらのペースでは行かないよ。在宅支援ボランティアは、時間と心にゆとりがないとできないね。今日つくづく思ったよ」
と答えて夕刊に目を通した。

その夜、松井は寝付かれなかった。フラスコで湯を湧かし、それを薬缶の湯の出口から注いでいる塚本の姿と

嬉しそうな笑顔。そのとき塚本は中学生の世界に戻っていたのだろうか。またご近所の方々の心配。独居老人が認知症になって、それがだんだん進んで行ったときの恐ろしさ。地域の助け合いによる共生社会実現の必要性を痛感した。

特別養護老人ホーム『なごみの園』での実習は既に五回目を迎えていた。

松井は実習日誌の今日の目標欄に『どの様な仕事をしていても、入所者とのコミュニケーションをできるだけ多くとるように努力する』と記載して指導職員の三上に提出した。

三上は

「松井さん、素晴らしいことに気がつきましたね。これは大切なことで、職員でも忙しいとつい忘れてしまいます。そうですね、今日は入所者皆さんとよくお話をしながら、十一時頃まで爪切りをお願いしましょう。今日は他の専門学校から実習生が来ていますから、松井さんは東の部屋から、彼には西の部屋からやって貰うようにしましょう」

と指示した。

爪切りと下に敷く紙を持って東側の部屋に行く途中、松井はテキストを思いだし、会話には『家のこと、プライバシーのこと、宗教のこと、政治のことはこちらから話題にしない』ことを自分に言い聞かせた。

実習二回目のとき爪切りを指示されたが、そのときは居室に入っても、多くの入所者から『あんた誰？顔を見たことがない』と言わんばかりの表情で相手にされなかった。爪を切らせてくれた人は少なかった。がっかりした松井はその状況を三上に報告したとき

「ボランティアさんでも職員でも、入所者一人ひとりと心の通い合いがないとそうなってしまいます。いい経験をしましたね」

と慰めてくれた。

ところが今日は違った。殆どの入所者が

「足からお願い。靴下を脱がせて」

から始まって、両手の爪を切り終わると

「有り難う」

と笑顔でお礼を言ってくれた。嬉しくなり細心の注意を払って爪を切りながら、いろいろな経験話を聴くことができた。

個室にいる三枝トメさん。左半身麻痺で起床後は寝るまで車椅子生活。左手は常に握りしめた状態になっている。

車椅子の車輪のストッパーを下ろし、右手から切り始めた。握りしめている左手の指を一本ずつ開いてゆくと、爪は伸びていた。三枝さんに声掛けしながら一本ずつ指

を伸ばして爪を切り始めて最後の一本、小指のところで三枝さんの

「グッ」

という声。顔を痛そうにしかめている。驚いて小指の先端を見ると赤く筋がついて血が滲んでいる。爪切りで挟んでしまった。

「しまった！」

と、救急箱のある物品庫に走り、救急箱からガーゼとティッシュペーパーを取り出して引き返した。幸い、血の滲みはティッシュペーパーで拭くだけで治まった。

松井はその日、昼食後と帰りに三枝トメさんを訪ね、挟んだ傷口を見せて貰い謝罪した。

午後は洗面台の清掃、音楽療法の手伝い、お茶だし、オヤツの支度と片付けなどを行った。実習日誌提出時に、三枝トメさんのことを三上に口頭で報告し謝罪した。

その日の夕食後、娘の幸子が

「パパ、このところ、朝でもお風呂の後でも、パパの使った後の洗面台、水滴一つなく綺麗になっているね。お母さんとも話したけど、何か心境の変化でもあった？今までパパの使った後の洗面台は水滴だらけで、拭き取ってから使っていたの」

と言い終わったところへ、妻が

「施設実習で気がついたのでしょ」

とズバリ言って笑顔で幸子に頷いていた。

実習では、朝食後と昼食後に入所者が使った後の洗面台を、松井は水滴一つ付いていないように拭いていた。与えられた仕事であった。自宅では実習初日の入浴後から実行していた。

塚本さんの一人息子一郎が一ヶ月の休暇を取ってロスアンゼルスから帰国した。栗木地区包括支援センターで草村と松井から父親の状況を聞いて、二週間父親と一緒に過ごした後に松井のところに報告に来た。

「父を母と同じ老人施設にお願いすることにしました。施設も受け入れを了解してくれました。ご近所の皆様にもお詫びしてきました。問題はどうやって父を納得させるかです。昨夜も父は『俺はここで生活している。何も他人に迷惑など掛けていない。施設に入る必要はない』と頑張っていますので」

と報告した。

それから一週間後の夜、塚本一郎が再びやってきた。元気がなく、疲れている様子が一目で分かる。妻の由美が不安そうに座敷に通した。

「今日、母を見舞いに行こう、と言って父を連れて相模湖にある施設に行って来ました。午前中、母を見舞った後に父と昼食に行き、大好きな鰻丼を食べて母の個室に

戻り、三人で団らん中に私だけ抜け出して、父を施設に残したまま・・・置き去りにして来ました。施設側の了解をとった上のことですが」

一郎の言葉は声になっていない。嗚咽の中からようやく聞き取れる。松井は一瞬声が出なかった。由美はエプロンで顔を覆っている。松井はこの選択肢しかなかったと思い

「一郎さん、辛いでしょう。これも致し方ないこと。お父さんもいつか分かってくれる筈。貴方が今日、施設を出てからのお父さんの様子は聞きましたか」

「はい。帰宅して直ぐ電話しました。もしも父が荒れていたらどうしよう、と思って。施設の職員は父の様子を『自分に宛われた個室で、私が事前に送り届けておいた着替えや画帳、絵具、筆、家族の写真を見て悟った様子だ、静かにしている』と言っていました。それを聞いてホッとしました」

松井夫妻も言葉が見つからない。一郎は

「ロスに戻る前にもう一度行こうかと思いましたが、父のことを考えると今回はこのままロスに戻って、落ち着いた様子を確認してからできるだけ早く行こうと思っています」

塚本一郎が帰ってから、松井と由美は、置き去りにされた父と、置き去りにした息子の二人の心の中を思うと言葉がなかった。一郎の依頼で、施設からの国内緊急連絡先を松井宅としたことが、ほんの少しであるが松井夫妻の心を軽くしていた。

施設実習の最終日の朝、由美はおにぎりとポットを松井に渡しながら

「今日は最終日ね。よく頑張りました」

と言うと、娘の幸子が

「パパ、今日の実習が終わったら、ママと二人でご褒美あげるね。楽しみにしていてね」

と言って、出掛ける松井に手を振った。

施設の正面入口の両側に、季節の花を植えたプランターが並んでいる。その美しい草花が、実習最終日の自分を迎えてくれているように感じた。

「お早うございます」

いつものように大きな明るい声で挨拶して控室に入って行くと

「松井さん、お早うございます。今日でご卒業ですね」

と、明るい声が飛んできた。

「有り難う」

と振り向くと、山下君子が小さく右手を振っている。笑顔が可愛かった。

席にいる三上から

「今日で最後ですね。入所されている皆さんにご挨拶もしたいでしょう。前回の爪切りから一ヶ月経っていますから、今日も爪切りしますか」

と指示を受け、今日来ている専門学校生の木下と居室の東西に別れた。順番に切り進んで丁度真ん中当たりで木下と出会い、終わったことを確認して戻ろうとしたとき、食堂の片隅から三枝トメが右腕一本で車椅子を操作して、松井めがけてやってきた。

「松井さんに爪を切って貰いたいの」

と、たどたどしい口調で訴えた。驚いた松井は木下に目配せして、三枝トメの個室まで車椅子を押していった。

部屋に入って手足の爪を切り終わると

「有り難うございました」

といいながら笑顔で会釈した。

『松井さんに爪を切って貰いたい』という言葉と、今の『有り難うございました』の言葉の中に、終始無言であった三枝トメの松井へのこころ配りを察したとき、松井は言葉が出なかった。黙って深々と頭を下げ、車椅子の後ろから両肩に手を置いて

「お元気で」

とだけ言って部屋を出た。

認知症の三枝さん、面会に来る娘さんの顔もときどき分からなくなるといわれている。松井は爪切りで指を挟んだ後、実習の都度三枝さんのところに行って、既に完治した指を確認しながら詫びていた。

その松井の態度に、『私は大丈夫だからそんなに心配しなくていいのよ』ということを何らかの形で松井に伝えたかったに違いない。若い専門学校実習生に爪を切らせないで、わざわざ部屋の外にいて松井を待っていた。

認知症の病を負っている、いないに関係なく、このこころ配りは真似ができない。三枝さんはこの機会の来ることを考えていたのであろうか。それとも咄嗟に考えたのだろうか。松井は介護支援する立場として、個人の尊厳への対応について、どの様な書籍、どの様な講義よりも、貴重なことを教えられた思いがした。

その日の午後四時、施設長室に呼ばれた。指導担当の三上もいた。

「施設長の安部です。ご苦労さまでした。お疲れになったでしょう」

と微笑みながら松井を見て

「青葉福祉専門学院の院長さんからお聞きしたのですが、松井さんは都市銀行の支店長さんだったそうですね。立派に現役生活を終えた方が、熱心に介護実習に励まれ、それも見本にしたいような素晴らしい態度でした。施設としても貴方のような方を受け入れたことを光栄に思っています。ところで、どの様な動機で、福祉のお勉強を

なさるようになったのですか。お差し支えなかったらお聞かせいただけませんか」

「いや、そんなにお褒めいただくと恥ずかしいです。むしろ職員の方の足手まといになっていたのではないかと心配しています。勉強の動機ですか。私は高度経済成長期には文字通り企業戦士でした。銀行業績の向上を追うのみで、福祉のことは何も考えませんでした。あと二年で第二の職場も定年になります。定年後の生活に、何をしようと決めてはいませんが、これから迎える超高齢社会には、福祉の理論修得と実戦経験が必要と何となく感じて学び始めた次第です。学び終えて、皆様のおかげで一回り成長したような気がします」

「さすがですね。学ばれたことをこれからの社会の中で活かしてご活躍下さい。実習日誌には私も特別にコメントを書かしていただきました」

と松井の労をねぎらい、激励して、実習日誌を自ら松井に渡した。

帰宅しても暫くの間、この研修の中で素晴らしい教訓をプレゼントしてくれた三枝トメさんのこと、認知症患者への持つべき対応姿勢などが松井の脳裏から離れなかった。

入浴と食事が済んで、由美が問いかけた。

「パパ、卒業式はいつなの？」

「今月三十一日だよ。明日は学校へ行って実習日誌を提出してから会社に行くよ。午前中の半日休暇がとってあるから」

「お勉強したことをこれからどう活かすの」

「これからの超高齢社会は高齢者を支える若い人口が少ないから、元気な高齢者が支援を求める高齢者のお手伝いをする必要がでてくる。塚本さんも地域の皆さんと好きな絵を描いて、自宅で暮らしたかったのではないかと思うよ。僕も六十五歳で定年だから、定年になったらボランティアグループを作って、高齢者や障害を負う方々の在宅支援をして、地域で高齢者や障害を負う方々との共生の実現を図りたいね。まず地域で仲間を作ることだよ。ただ、年金だけで生活がやっていけるかどうかの問題があるけどね」

「そうね。だけど活動するのにはパパの健康が第一よ。気をつけてね」

暫くして自分の書斎（といっても結婚して独立した息子が使っていた部屋であるが）に入ると、机の上に

『パパ、やったね！　二年間のお勉強、お疲れさま。卒業式はまだだけど、今日お祝いあげる。

パパが聴きたいと言っていたウインナ・ワルツ、時間

を作ってゆっくりと楽しんでね。

大好きなパパへ

由美・幸子』

と書かれたメッセージカードと一緒に、赤いリボンが掛けられた、ヨハン・シュトラウスの「ウインナ・ワルツ」のCDが置かれていた。

（完）

わが愛誦歌（九）

――昭和から平成へ――

曽根竣作

○おそらくは知らるるなけむ一兵の生きの有様まつぶさに遂げむ（『山西省』）

という信念からである。そして掲出歌のような常人では体験できない修羅場をも潜らざるを得なかったのであろう。

戦争の傷痕を宮柊二ほど深く負った歌人は少ないであろう。製作年代からいえば第三歌集にあたる『山西省』は、現代日本の生んだ戦争文学の傑作であり、そして戦後の宮柊二のめざましい作品活動の中にも戦場体験の影は長く揺曳している。

もともとは、北原白秋門下として出発しているが、白秋的ロマンチシズムに飽き足らず、しだいに故郷越後の厳しい風土に根ざした資質によって重心の低いリアリズムへと転換してゆく。

○ひきよせて寄り添ふごとく刺ししかば声も立てなくくづをれて伏す　宮　柊二

『山西省』（昭・24）所収。白兵戦における凄絶なる一瞬をとらえて、リアリティー横溢の一首である。白兵戦とは、白刃や銃剣を持って敵の陣地に肉薄攻撃をかけるやり方で、日本陸軍が最も得意とした旧態然としたゲリラ戦法である。泥沼の支那事変に突入した日本軍がこれを多用し、宮柊二も止むなくこれに捲きこまれた歳月があった。

宮柊二は、昭和十四年すでに三十歳近い年齢で、現役兵（二十歳の壮丁）でなく応召兵として中国戦線に投入された。当時は、余程下級士官が払底していたと見え、応召兵の宮柊二にも幹部候補生を受験しないかと、何度もひつこく慫慂があったが、彼はきっぱりと断っている。

昭和二十八年に、今では大結社に育った「コスモス」を創刊して歌壇をリードし、社会と個人の問題を厳しく見据える一方で、人間的な情感の滲む作風で多くの読者に愛された。

昭和六十一年惜しまれて他界されたが、結社「コスモス」は俳誌の「ホトトギス」ほどではないにしても、今でもご夫人の宮英子氏が中心となり引続き大結社として存続している。〈あたらしく冬きたりけり鞭のごと幹ひびき合ひ竹群はあり〉〈つらなめて雁ゆきにけりそのこゑのはろばろしさに心は揺ぐ〉〈耳を切りしヴァン・ゴッホを思ひ孤独を思ひ戦争と個人をおもひて眠らず〉なども膾炙した著名歌である。

○自動扉と思ひてしづかに待つ我を押しのけし人が手もて開きつ　安立　スハル

『この梅生ずべし』（昭・39）所収。昭和十四年に作歌を始め、北原白秋の「多磨」に入会するが、「多磨」解散後、前述の宮柊二創刊の「コスモス」に参加し、事実上宮柊二の門下生となる。

兎に角、ずばりと本音のところを言ってのける歌人である。

○馬鹿げたる考へがぐんぐん大きくなりキャベツなどが大きくなりゆくに似る

正に大破調にして散文的レトリックであるが、この一首が彼女を異端の女流として一躍有名にした。

うたは、感情の露わな流出を抑制するところを余韻などと称して貴ぶ風潮があるが、安立スハルは思い切って歯切れの良い作品を残した点が評価されたのか、現代短歌の数々の辞典には必ず名を列ねている。

しかも彼女は、第一歌集『この梅生ずべし』を出したきりで、ひっそりと岡山に住み清潔な歌をつくりつづけて行った。こういう存在の女流歌人もいるのだということが何がなし心に温もりを覚えさせるものがある。

掲出歌は、ちょっとしたありがちな錯覚を取り上げており、自動扉のつもりでドアの前に立っていた自分を、ぼんやり者だと思いながらも是認したいような気持にもなっているのである。この一首は、そういうありふれた錯覚を、これ以上簡潔には言えないというぎりぎりの表現で言ってしまっており、ひいては現代文明と個との対比まで敷衍する深読みもできそうな感じもするのである。

第一歌集以降の作品より挙げてみると、〈家一つ建つと見るまにはや住める人がさえざえと秋の灯洩らす〉〈見たかりし山葵の花に見入りけりわが波羅葦僧もここらあたりか〉〈長年のうちに短くなりし分われは食みしやこの擂粉木を〉〈立ち憩ふ輓馬のまなこ覗きみればとてもかなはぬやさしさを持つ〉〈飲食の湯気立つなかにおもふかなさもあらばあれ拙を守らん〉が良歌として記

憶に残っている。平成十八年没。「拙」…つたないこと、自分のことをへりくだっていう語。

○鶴の首夕焼けておりどこよりもさびしきものと来し
動物園　伊藤　一彦

『瞑鳥記』（昭・49）所収。動物園の歌というものは、斉藤茂吉の『赤光』以来、近代短歌には系譜が出来るほどある。筆者も以前歌ができない時は、動物園に行って見ろとよく先輩に言われたものである。

伊藤一彦のこの鶴も、不思議に心に残る鶴である。この他に鶴について何首か詠んでいるが、〈鶴を見に行きし男のかへりきてただ黒かりしとくぐもりゐたり〉も、恐らく丹頂鶴であろうか、自分を「男」として客観的に報告している口調が面白い。

昭和四十一年、伊藤一彦は学園闘争の敗北後、間もない早稲田大学を卒業して故郷宮崎に帰った。第一歌集の『瞑鳥記』は、その前年から四十七年までの間に、伊藤が激情を鎮めるようにして詠った作品を収めている。青春の憂愁が、きらめく感性と清冽なリリシズムを伴って形象化されデビュー作として注目された。

第二歌集『月語抄』（昭・52）になると、専ら自己の内面を見つめて詠う趣となり、内省の思いは抽象化されがちであるが、時には独語めいて表現の末消化なものも散見された。

しかしながら、その後の作歌活動はきっちりと故郷宮崎に根を下ろして着実な成果を遂げつつある。故郷の自然と人々の濃厚なる息づきの中に自らの生を確かめる作品は、声高な思想や先鋭な方法意識とは自ずから距離を置いている。派手さはないが、じっくり読むと一首々々滋味掬すべき味わいがあり、ううんと唸らせるものはなくとも、九州の南端に一方の旗手としての伊藤一彦の存在を再確認しておきたいのである。

〈長きながき吐息のごとくきこえくる夜のあり寒の日向灘の潮〉〈眼のくらむまでの炎昼あゆみきて火を放ちたき廃船に遭ふ〉〈緘黙の少年とゐて見上げたり空いつにても処女地と思ふ〉〈東京に捨てて来にけるわが傘は捨てて続けをらむ大東京を〉〈雪隠す雪もたちまち隠さるるふぶく蔵王の真白の宇宙〉〈くれなゐの鹿のロースの冷えてゐる霊蔵の庫にゆふべ近づく〉。

○死を囲むやうにランプの火を囲みヘブライ暦は秋にはじまる　小島　ゆかり

『ヘブライ暦』（平・8）所収。ヘブライとは、他民族がイスラエルの民を呼ぶのに用いる名称である。日常語としてのヘブライ語は一時衰退するが、一九四八年のイスラエル建国とともに現代ヘブライ語として復活し、公用語に採用されている。そして「ヘブライ暦」の新年は十月という。

黒いターバンを巻いた長衣の男たちが、どんよりと死を囲むようにランプの火を囲み、何ごとかつぶやいているシーン、想像しただけでそのエキゾチシズムに何か慄然とさせられるものがある。

この作品は、小島ゆかりが医師であるご夫君とアメリカに在住（二年間）した折のうたであろう。その後、ご夫君は研究のため、アメリカに残られ、作者はこちらで子育てと養父の介護に尽くされ、又一方で仕事に就かれるという八面六臂の日常を消化しつつ何冊か歌集を世に問うておられ、立派である。

小島ゆかりは、現在若手女流として最も人気のある歌人である。人気の理由の一つに平明にして親しみやすい詠風がある。日常の何気ない素材が秘めている哀しみや歓びや切なさを鮮やかに引き出し、さりげない修辞でもって読む者の心にまっすぐに届けようとする。

遠く北原白秋を師とする小島は、白秋のもっていた言葉の音楽性をよく受け継ぎ、そこにソフトランディングに女の情念を重ねる。

何より難解な作品が全く無いのも嬉しいことであり、読後なぜか心の清涼感さえ覚えるのである。好きなうたを三つ四つ挙げてみよう。〈まだ暗き暁まへをあさがほはしづかに紺の泉を展く〉〈団栗はまあるい実だよ樫の実は帽子があるよ大事なことだよ〉〈アメリカで聴くジョン・レノン海のごとし民族はさびしい船である〉〈一人でも一羽でもよく　春を待つこころに白い灯台がある〉〈ハイウェイの左右に街は見えながら時間よつねに真後ろへ過ぐ〉〈遠くまで今日よく晴れてマジシャンのやうに大きなハンカチをもつ〉。

○なほ言へとうながす眼にむかひあふ二つプランを言ひ終へしいま　篠　弘

『昨日の絵』（昭・59）所収。初出は「まひる野」（昭・32）である。歌集では、「編集会議」十一首の冒頭にあり、まだ若く大学を出て編集者になりたての頃の作品で、編集企画会議の緊迫感を、先輩にしごかれつつある場面に焦点を絞って表現している。

出席者たちの全員の沈黙、数秒の静寂、作者に集中する視線、それらをくっきりと描き出しているところがこの一首の特色である。

篠弘は、大手出版社に勤務し、百科事典の編纂に心血を注いで来た経歴を持つ。折しも百科事典ブームの潮流にのり、そのブームを推進してきた自分の仕事に対する自負を、直接に、さわやかにいくつもの作品に残している。

○ラルースのことばを愛す〝わたくしはあらゆる風に載りて種蒔く〟
「ラルース」は、フランスの百科事典専門の出版社の創始者で、その筋では最も著名な人物である。その言葉を

とって自身の自負と決意を確かめたものと思われる。

篠弘は、意識して職場の歌、職業の歌を作ってきているが、はっきりとした具体性の中に一抹の憂愁とロマンを秘め、中々に手応えがある。〈企画練るほかなきわれに目守られてコピーの罫を黒蟻はしる〉〈黄の雲の沈めば風のはひりきて潔らかなりし編集室か〉〈ゆふぐれの編集室に微熱出でデモを見てきしわが舌渇く〉など。

現在、「現代短歌協会」（もっとも権威あり）の会長を勤める他、現在の歌壇の論客としても活躍中、『近代短歌論争史』は明治大正編と昭和編の二巻、そして『現代短歌史』は三巻から成る大著である。

〈浮遊してゆくばかりなるさびしさに昼の休みを古書店にゐつ〉〈はるかなるタワーに赤き月うつり少しづつことばずれゆく通話〉〈あひともに盛りを過ぎむねぎらへる賛辞は訣れのことばと思ふ〉

因みに、百科事典業界は近年斜陽、と言うよりも大手出版社でこれを編纂出版しているところは殆んど無い。僅かに昨年「平凡社」が、三十四巻を二八三・五〇〇円で出版されたようだが、その売れ行きは不明。やはりインターネットやCDロムの影響であろう。

○爆薬がわが手にあらば真昼この都市は静けく来たらんわれに　花山多佳子

『樹の下の椅子』（昭・53）所収。一九六〇年の安保闘争の世代は、岸上大作と清原日出夫を生み出したが、六八、九年の学園闘争は道浦母都子（「まんじ113号」に記述）とともに、この歌集の花山多佳子によって鋭く表現されたと言ってよい。

この歌の爆薬は、彼女の手の上にまだない。もしその爆薬が手の上に乗れば、この都市は今の騒がしく惨めな、そして猥雑な表情を一変して、静寂に満ちた存在感を持って自分にやって来るであろう、という歌意である。作者は同志社大学に学んだから、この都市はひょっとすると京都かも知れない。いや、大学の寮生活中に、加藤登紀子の亡き夫藤本氏（同志社大学の上級生）にオルグに誘われたというから京都にちがいない。一般に典雅と優美がウリの京都に対して何故一見物騒なテロリスト的感情を持つのか。

花山の世代は、ノン・ポリ以外はたしかに火炎瓶闘争世代である。そして、あらゆる世の権威や良識に対して針ねずみのように針を立ててみるのである。従って掲出歌における爆薬は、何ら現実味を帯びたものではなく、反社会性の牙の象徴に過ぎない。「真昼この」以下の句跨がりを利用した推論の詩句も中々に美しい。

花山多佳子が、わが尊敬する大御所である歌人玉城徹の娘であることを差し引いても、従来の短歌的詠嘆や女性的情念のコードからはなれて、乾いたそして前向きに明るい感性は大いに魅力がある。

○リチャード三世のふりして寄れる父の掌が肩を把みぬ顔を歪めて　陰険、残忍の典型であるリチャード三世にカリカチュアして父を詠み、また

○しかたなく洗面器に水を張りている今日もむごたらしき青天なれば　のような青天呪詛も、或る種の青年心理としてごく素直に頷けるところがある。

〈子守唄うたい終りて立ちしとき一生は半ば過ぎしと思いき〉〈誰かうしろになみだぐみつつ佇つごとし夕ぐれが桜のいろになるころ〉〈紙ヒコーキが日に日に紙にもどりゆく乾ける落葉だまりの上に〉。

参考文献

現代歌人二五〇人（牧羊社）
現代名歌鑑賞事典（桜楓社）
現代百人一首（朝日文芸文庫）
現代短歌の鑑賞事典（東京堂出版）
現代の短歌（講談社学術文庫）
歌の架橋、久々湊盈子のインタビュー集（砂子屋書房）

短歌　三十首

曽根竣作

月夜茸

脱皮せし胴つやめきて八月の忿怒の岸を蛇わたりゆく

籬越え二つからまるしじみ蝶かぎろふ庭に立夏を誘く

解体場白きアームの唸りつつ弩のごとく土塊を投ぐ

毀たれて跡形もなき更地見れど元住みし人の思ひ浮かばず

何処を見てゐるのか判らぬサングラス鬢のほつれ毛風に吹かれて

うなかぶし小手毬白く垣越えてサーフィン族の女男過ぐる昼

末黒野の果にひとすぢ噴煙のたなびきて阿蘇の牛のどかなり

大型バスいち人の我乗せしのみ阿蘇連山を縫ひて走りつ

分け入れば暗夜しらじら発光し月夜茸わが謀叛をさそふ

花ふぶき散り敷く吉野〈盗賊〉と称しし前登志夫逝きてひととせ

ごきぶり嘆

す走りて油虫消えし机の下の闇に怒りのゴキジェット噴く

百メートル九秒を切る疾走ぞウサイン・ボルトも顔色あらず

小さきは子供と思へどさにあらずごきぶりの種類数十とか言ふ

明け方は恐らく骸となり転ぶごきぶりのひと生肯ふべきや

生けるもの殺ししうしろめたさあり夜更けの納戸に少しビクつく

棲みついてゐるのか飼ってゐるのかな寝しな「お休み」と廊を横切る

蜚蠊のいっ匹や二匹何ならむむかし虱を飼ひしこの身ぞ

伝染病を媒介するとて忌み嫌ふが油虫が清しく啼いたらどうか

歌材にはふさはしくなき昆虫なれど偶には詠ってやらうぢゃないか

このところ出没しげき油虫よわが家の沈没未しとしやう

日照雨

石畳に堕ちし尾羽根はぬばたまの闇のかけらか群鴉啼くとき

いつよりか右手中指ギクシャクと伸び難くこれ弾ね指と知る

整骨院に通へど治らぬバネ指は自が性に似しか相当頑固

「トシですね」予期せし医師のひと言を背にふり切って炎暑の街へ

朝まだきパキッと折れし老眼鏡、けふも巨人は負けるであらう

巨人負けああと言ひて背を伸ばし「陽はまた昇る」と独り呟く

大輪の百合シェルブール匂ひ立ちテレビ疲れのまどろみ包む

「あの騒音何か」と聞きし異国びとつくつく法師啼けるテラスに

ワイパーは日照雨弾きて遠空にけふの括りの茜雲とぶ

佐世保より訃報いたりぬつひにして十指を欠きし白線帽の寮友

短歌

行雲流水（二十五）

石黒修身

近詠二十首

さながらに姉妹の島ぞ北端に手を携える利尻・礼文は

晴れた日はサハリン見ゆる最北のストコン岬は風が鳴り鳴る

サロベツの濕原に咲く原生の草花たちの勁さを愛でん

久びさに訪ねし佐渡の街並みは過疎を写して寂び返りおり

この頃は朱鷺の話題で賑わえど過疎に悩める父祖の地佐渡は

富良野では「風のガーデン」巡りたり倉本ドラマの余情がそよぐ

ラベンダー観る人びとを「花びと」と称えて招くファームのあり

童心に帰り乗りたる「カシオペア」札幌―上野は睡夢のうちに

故郷はかくも変れり愛郷の古い話はほどほどにせな

「いでずんば乃公」幾人名乗り出て政局とみに混迷増せり

ポピュリズムこの憂うべき風潮は国の行方を過またんとす

老い母を「ホームに棄てし」と詠みし人その心根をはかるもつらし

身めぐりの人逝くたびに己が身の終(つい)をはかりて心ゆらげり

孫ら連れ動物園(ズーラシヤ)巡る終点は「オカピー」という珍獣の舎

独り居の姉訪えば老い吾にまず嗽せよ手をば洗えと

まがごとの多き芸能界に愛らしく一期励みしマドンナは逝く

紫烟をばくゆらすポーズいま何処に嫌煙の世を男らは嘆く

盂蘭盆に棚経の僧忙しく早やばや辞せり蝉しぐれ背に

風媒の径か芙蓉は吾が街の家ごとの庭に花咲かせおり

夕べには紅色となる酔芙蓉ひと夜の酔いを恥らうごとく

漢詩

潮騒録（五十九）

鯨游海

樂聖船村徹先生讃歌・連作（五）苦節修業秋　平成廿一年二月

漸知美酒又多情
相啖飛泡復五更
合作演歌已千曲
如何未聞巷流行

押韻・情 更 行

〈樂聖船村徹先生讃歌・連作（五）苦節修業の秋〉

漸やく知る　美酒も又多情なるを
あひ啖ひ泡を飛ばして　復た五更
合作の演歌　已に千曲なるに
如何せん未だ聞かざる　巷に流行するを

〔注　解〕

五更＝夜を五等分した五番目で、午前四～五時頃の暁暗を指す。「復」は昨日も一昨日もと云うニュアンス。
啖＝むさぼり喰い且つ呑む。泡は麦酒と口角の両意を含んでいる。作品が一向に認められない苦悩の青春。

☆今宵また巷に聞かず吾がメロディー
酒痕虚しき五線譜を追ふ

（六）別離一本杉　平成廿一年二月

突如席巻調非凡
題別離之一本杉
春日八郎聲朗朗
滂沱我涙濕青衫

押韻・凡 杉 衫

〈（六）別れの一本杉〉

突如席巻す　調ぞ非凡なる

題や「別れの一本杉」
春日八郎　声朗々
滂沱たる我が涙　青衫を湿ほせり

〔注　解〕

席巻＝席は「むしろ」。蓆、莚とも書く。蓆が巻かれるような強風の凄い勢いで攻める意。この曲がヒットしたのである。初めての大ヒットに二人は酔いしれたが…。

滂沱＝雨や涙が激しく下るさま。

青衫＝青い単衣。粗衣の形容。今風に云えば「安物の青い背広」。白樂天・琵琶行「座中泣下誰最多　江州司馬青衫濕」とある。

☆一本の杉に託せしわが想ひ
声朗々と草木ゆるがす

（七）痛恨鎮魂歌

平成廿一年二月

昨夜九州風靡渦
今朝痛恨鎮魂歌
水魚交友昇天報
高野公男我大河

押韻・渦歌河

〈（七）痛恨の鎮魂歌〉
昨夜九州を　風靡せし渦
今朝痛恨の　鎮魂歌
水魚の交友　昇天の報せ
高野公男は　我が大河なるに

〔注　解〕

好事魔多しとはこのことであろうか。無二の親友である作詞家、高野公男が、かねてより病んでいた肺結核に倒れたのである。当時はストレプトマイシンのような劇的に利く薬も未だ手に入らなかった。

九州＝全国。往時の中国は九つの州から成っていた。

水魚交友＝水魚の交り。親しい交友を云う。「魚が水を得たように」の表現もこの語から来たと思われる。三國・蜀志「孤之有孔明　猶魚之有水　願勿復言」。なお漢詩漢文の世界では友情が主題となることが多く、この種の語は多い。管鮑の交り、刎頸の交り。また水魚の恩、水魚の契ともいう。

ここでは自分を魚に擬し、高野公男を魚が最も活躍出来る水＝大河に喩えてその死を悼んだのである。

☆我れ置きて何ぞ旅立ちぬ楽の友
水無き魚の哀れ留めむ

（八）酒與涙與作曲

平成廿一年二月

綠酒紅燈悲不銷
千行落涙轉凄寥
如狂一向五線譜
名曲何多膾炙調

押韻・銷寥調

〈（八）酒と涙と作曲と〉
緑酒紅灯　悲みは銷へず
千行の落涙　うたた凄寥たり
狂へる如く一たび五線譜に　向かへば
名曲何ぞ多かる　膾炙の調べの

〔注　解〕

緑酒＝緑は単なる美称で美酒のこと。緑色の酒ではない。銷へず、は金属が溶ける意なので「とけず」でも可。千行は涙が両目から平行して流れるのでこう表現した。

庾信・寄王琳「玉關道路遠　金陵信使疏　獨下千行淚　開君萬里書」。

轉＝うたた。ますますの意。凄寥＝ものすごくて寥しいさま。膾炙＝膾は生まの肉、炙は炙り肉。何れも美味の代表で人気のあるさま＝人口に膾炙する。

☆苦き酒涙に濡るる五線譜に
狂へる如く音符刻みぬ

代嘉創業二十年社長

平成二十一年四月

今祝創業二十年
茫茫如夢憶纏綿
滿堂笑貌盡吾寶
陶醉非杯是吉緣

押韻・年綿緣

〈創業二十年を嘉する社長に代りて〉
今祝ふ　創業二十年
茫々として夢の如く　憶ひは纏綿たり
満堂の笑貌は　尽く吾が宝なれば
陶酔するは杯に非ずして　是の吉縁なり

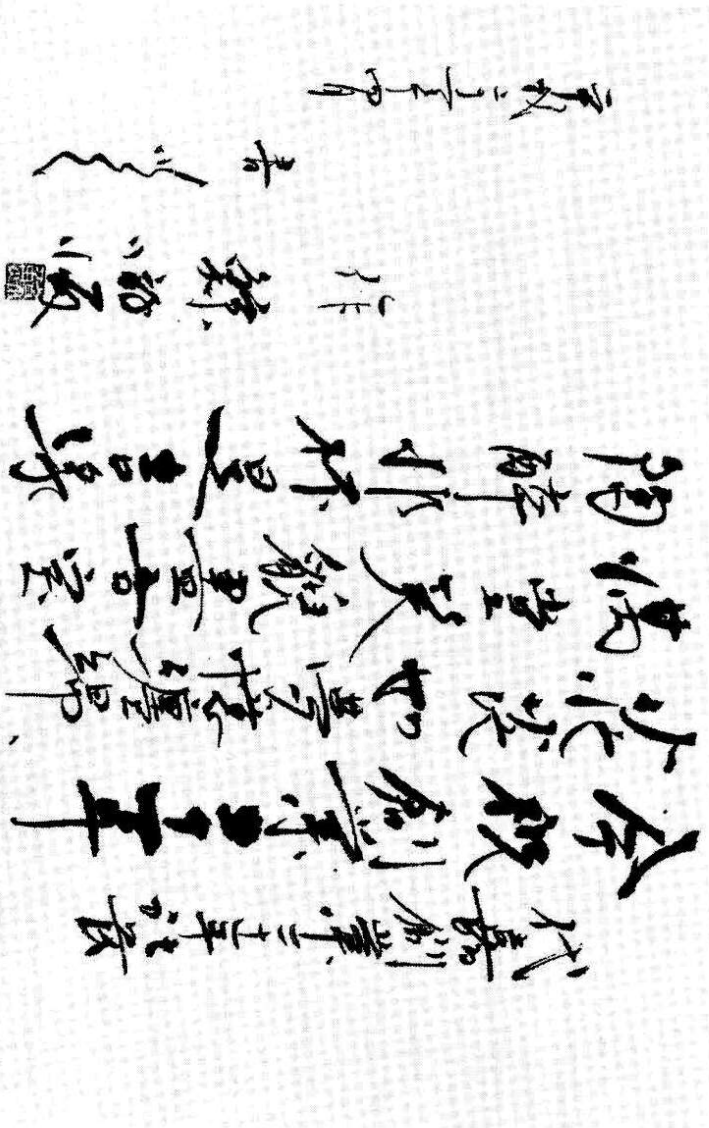
〔注　解〕

纏綿＝まとわりついて離れない。ここでは種々の憶いが、忘れ難く離れ難く心に浮かんでくる様子。

笑貌＝笑顔。陶酔＝うっとり酔う。うっとりとした境地に浸るさま。孟子・離婁「恭儉豈可以聲音笑貌爲哉」

私の勤務する伸和㈱が創業二十周年を迎え全社員参加の祝宴を開いた。人との縁を大切にする報徳精神旺盛なる米山督則社長の胸中を忖度して詠んだ詩。

☆今祝ふ夢まぼろしの二十年
溢るる笑顔みな吾が宝



(詩)鯨游海　(書)田寺芳山人

《漢詩の流れ48》明その②高啓(2)

梅の清らかな姿をたたえた詩。九首の一。

梅　花

瓊姿只合在瑤臺　瓊姿　只だ合に瑤台に在るべし、
誰向江南處處栽　誰か江南に向かって処々に栽えしか。
雪滿山中高士臥　雪は山中に満ちて　高士臥し、
月明林下美人來　月は林下に明らかに　美人来たる。
寒依疎影蕭蕭竹　寒に疎影に依るは　蕭々たる竹、
春掩殘香漠漠苔　春に残香を掩うは　漠々たる苔。
自去何郎無好詠　何郎の去りて自り好詠なく、
東風愁寂幾回開　東風に愁寂として幾回か開きし。

瓊＝赤色の美玉。瑤臺＝玉の台＝仙人の居所。

山中高士＝後漢の袁安の故事。林下美人＝隋の趙師雄の故事。何郎＝六朝梁の詩人何遜のこと。この人も梅花を愛した逸話で有名。

(口語訳) 貴方の紅玉の如き姿は瑤台にこそ在るべきだ。それを一体誰が江南に持って来て各地に栽えたのだろう。雪に埋もれた山中に起伏す高潔の士か、或は月明に林の下をそぞろ歩きする美女を想わせるその姿。

寒い時はそのまばらな影に、さやさやとそよぐ竹が寄り添ってくれ、春には残香を敷きつめた苔が掩っている。何遜が居なくなって以来、梅を詠じた好い詩は無く、春風の中に寂しくも幾回花を咲かせたことであろう。

メキシコ花火見物日記

吉田忠雄

はじめに

平成21年4月20日から24日まで、私はメキシコのプエルト・バジャルタで開かれた第11回国際花火学会に参加し、メキシコの花火をつぶさに見る機会を得た。

メキシコは、カトリック教国であり、全国に約3300の教区がある。各教区で年一回は花火が揚げられ、それ以外の日でも花火があげられる。

メキシコで生産される花火の3割はメキシコの伝統仕掛け花火カスティーロであり、7割はおもちゃ花火である。

4月17日（金）

私たち同行3名は夕方成田空港をアメリカン・エアラインで飛び立ち、ダラス経由で同日夜10時ころメキシコのプエルト・バジャルタ空港に着いた。ホテル差し回しの車でビル・バジャルタ・バイ・カンテ・デ・ゾルにチェックインした。空腹だったのでまだ開いていた屋台の店でメキシコの郷土料理タコスを食べて寝た。タコスは、小麦粉を水でといたものを鉄板上で直径10センチメートルほどにのばして焼き、その上に肉と野菜を炒めた物をのせて、二つ折りにしてくるんだ食べ物である。メキシコ料理には、3種のトウガラシがつく。特に緑色のトウガラシが辛い。

4月18日（土）

私たちは朝9時に集合し、ホテルの食堂で朝食をとった。ホテルの食堂は南国リゾート風の海浜に面していた。食事はバイキング方式でメキシコ料理と西洋料理と果物を十分に食べた。まず学会会場となるシェラトン・ブーゲンビリア・ホテルまで歩き、15分でいけることを確かめた。

次いで、プエルト・バジャルタ旧市街まで足を延ばした。途中まで国道沿いに歩き、旧市街入口のマレコンからは海岸沿いの遊歩道をとった。海浜には砂芸術を作っている人たちがいた。

プエルト・バジャルタ旧市街は石畳みの観光地である。日差しが強く、日向は熱いので、日陰を選んで歩いた。朝食を食べ過ぎたので昼飯は抜いた。夕食はまだ様子がわからないので目についたイタリアレストランで済ませた。

4月19日（日）

朝食はホテルのレストランでとり、それから海岸を散歩して、海岸の景色の写真を撮った。夕方シェラトンホテルで学会参加の受け付けをしてから、ホテルの海浜レストランでリセプションに参加した。ホテルの裏の海浜では花火打ち揚げの準備が進んでいた。その後歓迎のバンド演奏がメキシコ音楽を奏で、歓迎花火が打ち上げられ、最後に仕掛け花火に点火された。

4月20日（月）

学会会場に行く。学会初日。学会会場に行く。メキシコの伝統くす玉ピニャータが演壇に置いてある。これは学会では福引の札を入れ、かき混ぜて福引の当選者を選ぶのに用いられた。花火関係の商品展示会場を見学した。われわれにとって珍しい展示品は、メキシコの伝統花火カスティーロの模型であった。このあと何回かカスティーロの実物を見ることになる。

夕方、シェラトンホテル前のバイスボル競技場でカスティーロを中心とした花火ショーが行われた。

4月21日（火）

この日は昼休みに昼のカスティーロ・ショーが行われた（写真1）。旗の付いた火車、外側が燃え落ちて中からハトや看板が現れる大車、途中で地上から噴き出す盛大な花吹雪、空中に発射される模型のヘリコプターなど私たち日本人にとっては珍しく、楽しい昼のカスティーロの多くの演出を見ることができた。模型ヘリコプターはかなり大きく、ぶつかったらけがをするのではないかと思ったが、見物人は喜んで落ちてくるヘリコプターを追いかけていた。

夜はホテルからバスで20分ほどのところにあるエル・ピティラル競技場で夜の大カスティーロ・ショーが行われた（写真2）。明るいうちに現地に付き、まず点火前のカスティーロを見学した。夜のカスティーロが昼のそれと違うところは、固定の枠仕掛けが加わることである。昼では固定の枠仕掛けは燃えても映えないが、夜は明るく浮き上がるからである。合間におもちゃの熱気球が揚

げられ、見物者を楽しませた。

夜のカスティーロは、回転する火車と固定枠仕掛けから構成されている。それぞれ途中で色や形が変わる。火車には垂直に回るものと水平に回るものがある。仕掛け花火カスティーロが終わりに近づくと日本のナイアガラの滝の場合と同じように裏打ちのスターマインが揚がった。

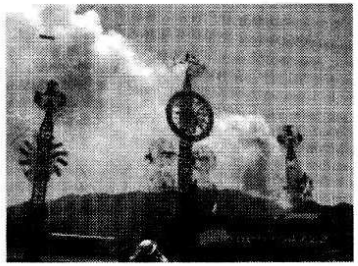


写真1 点火された昼のカスティーロ

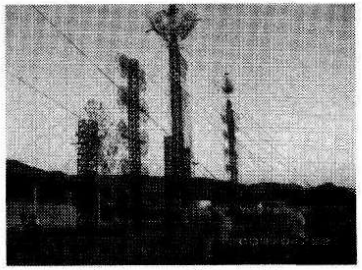


写真2 点火前の夜のカスティーロ

4月22日（水）

午後からラ・パロマに有料観光に出かける。ラ・パロマは小さな村で、牧場があり、劇場付きのレストランがある。ラ・パロマの村に着くとまずメキシコのサボテン酒テキーラがふるまわれ、ランチをとりながら歓迎行事を見物した。カーウボーイが投げ縄の技を被露し、楽隊が音楽を演奏した。またメキシコの伝統くす玉「ピニャータ」割りが行われた。日本のスイカ割りとムードが似ている。その後で、あとの行事で踊りを被露する踊り手と楽隊が紹介された。私たちは楽隊の先導で村道を行進し、観光レストランに入り、小休止した。相席でデンマークから来たウオーカーさん親子と同じテーブルに座った。明るい友好的な親子で一緒に楽しい時を過ごした（写真3）。ここで行われた余興の中には、花火を仕掛けたやぐらに牛の模型をのせ、これを担いで走りまわるものがあった。メキシコはスペイン系であるから、スペインの闘牛と関係があるのかも知れない。



写真3 友好的なウオーカーさん親子と

4月23日（木）

同行の細谷君と伊東先生が研究発表を行った。好評であった。夕方、ホテルの前のフットボール・グラウンドで花火見物を行い、各種カスティーロを楽しんだ。

4月24日（金）

ウエスティンホテルで閉会祝賀ディナー。

4月25日（土）

バジャルタ湾の南国風秘境ラ・カレタ観光。

4月27日（月）

帰国。新型インフルエンザ騒ぎが待っていた。

掌編小説7

一日だけのミュージシャン

亜木陽一

キラッキラッキラッ。
春の日が近い、眩しいくらいの日の光で目が覚めた。
もうすぐ昼だというのに、今までずっと眠っていた。
私鉄沿線の小さなアパートに住んでいる。
ラジオをつけると、知らない音楽が流れている。
いつもの番組を聴き逃してしまった。
何の目的も持たず、毎日会社でコンピュータの仕事に浸っている。
久し振りの休日だった。
昼食のパンでも買って、眠気覚ましに散歩でも。
家の近くに中規模な自然公園がある。
公園に沿って外側から歩いていると、
「ドミソド、ドミソド」
アレ！
オヤ？
エエッ！
ハーモニカと思われる音にひかれ、興味を持ち、公園の中に入る。
春を待つ桜並木。
さまざまな花木。
芽吹いたばかりの春の花。
「ドミソド、ドミソド」
気になる音は、外から聞こえるよりはるかに大きい。
小さな池に掛けられた橋を渡る。
長髪にまだあどけない顔をした男の子がいた。
ハーモニカを吹いている。
彼が思い切り大きな音を出していた。
時々太陽の光が地上まで降りて来る。

緑の葉がキラッキラッ。
「ドレミドソ、ドミソレド」
何を吹いているのかわからない。
それでも彼は練習を続ける。
「ドレミソド、ドシソミド」
近くのベンチにおじいさんとお婆さんがお揃いのニットのセーターを着て坐っている。
僕も隣のベンチに腰掛けた。
「おじいさん、冬と言っても暖いですね。眠くなりませんか？」
「これで一週間。まだやっている。こんな強烈な音ならば、どんな眠気の人でも目を覚ますものです。でも、お婆さん、始めの頃よりは、だいぶうまくなりました。眠くなるよりはまだましです」
「おじいさん〝好きこそ物の上手なれ〟というのでしょうか？」
「お婆さん、〝下手の横好き〟という諺もあるのですよ」
二人は頷いて、顔を見合わせた。
「ドレミソシドー、ドシソミレドー」
「おや、おばあさん、高い音が綺麗になったねェ」
「ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ド、ドドドシー」
吸う音もよくなって来た。
「ド～レ～ミ～ファ～ソ～ラ～シ～ド～、ド～シ～ラ・ラ・ラ・シ・ド～」
澄んだいい音が出て来た。
「ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ドー」
「ド～シ～ラ～ソ～ファ～ミ～レ～ド～～」
演奏が終わった。
僕達三人は一斉に拍手をした。
若い男はこちらを見て、ちょっと恥ずかしそうに丁寧に頭を下げた。
再び太陽の光で、大きな花木の葉が、キラッキラッキラッ。
帰りの小路（こみち）では、沈丁花の回りで子供達が無邪気に遊んでいた。
服を着せられたダックスフンドを連れた三十代くらいのカップルが何かコンサートの話をしながら、歩いていた。
通り過ぎた犬は、何もわからないまま、シッポばかり振っていた。
何か目的を持ってみよう。
若い男のハーモニカ。
一日だけのミュージシャン。
新しい希望が生まれる。
眠っていた何かが目覚めようとしている。
キラッキラッキラッ。

四十四年目の挨拶

勝山道子

昭和二十三年　永い戦争の時代が終りやっと平和の落着を見せた年　私は千葉県から縁あって　当時東京と云っても南多摩郡稲城村　と云ひ人口一万人足らずの農村に嫁した。

夫はサラリーマン義父は私の嫁す前に急逝し義母と三人の暮しであった。田圃は小作に出し残りの二反つまり田圃一反畠一反　私と義母三ちゃん農業と云われ女が主体になってやる事であった　私は千葉へ疎開しそこで広い荒地を　昭和十八年の終り頃から開墾を始め弟三人も学業の間に手伝ひ　私も休日は勿論勤めの間も手伝っていたので農業に関してはあまり苦にならず義母が庭の草とり収穫の　大豆　小豆　ゴマにいたるまで始末してくれあまり姑、嫁の事も考へなかった　然し夏になると折角きれいにとった後も　一週間もしない内茫々まさに草との戦であった。

田圃の方は　耕運機で耕してもらい用水を　張り　田植は近くの人達の処へ手伝に行かない我か家は一反の田圃なので　夫と義母私の　三人でも一日で植え終え　後草とり　ヒエ抜水まわりが私の仕事で　当時企業に勤める夫は残業　々々でとても我か家の零細農業には手は出せず　従って姑と二人　稲刈り　足踏み脱穀とまさに身を粉にして働いた。

我か家から三百米はなれた処に多摩川が流れその河原に朝早くから　夜まで河原は「砂利ふるい」と云って　砂利と砂をふるいで分ける作業をする人達で一っぱいだった。

空襲で焼け野ヶ原になった東京の復興のビルの建築に使われる為であった。

そして砂利トラと云ひその仕分けした　砂　石の大小をトラックに積んで運ぶトラックが土手に並ぶ　程であった　聞けば　砂利は　多摩川丈でなく　この辺は何処でも採掘すれば　出て　二十年近くも掘ってボートの競艇

場が出来たと云う　やかて禁止令が出る程であった。こうして日本中働いている事に私は何か空しく想ひ浮かべていた　その折六十才に　近い初老の方が　私の畠の前で　菜の花　ゲンゲの咲いている畠にむかいキャンパスを　建てもう一週間も絵を書いている。戦後も十年近く経ち子供も二人　こんな事ばかりしてはと思っている時あの絵を書く姿を見てもっと人間らしい　何かを考へねばと思った。

当時学校教育も　ＰＴＡと称し　教師も父母も子供と共に学ぶと変りつゝあった。

昭和三十三年には　稲城町になり　文部省の推進する第一回の婦人学級が開設され　私も早速参加し　勉強する意欲にもえた。而し農作業は続く　たしか四月田植の準備もあり　一生けんめい草刈りをしていた。前方の用水近くに　四五人小学生位の男の子がエビガニでも取っているのか声が聞える　私はその方向へむかって刈っていた　ところが突然

「ワァー助けて」

私かおどろいて立ち上ったら　目の前の大きな肥溜めに子供の両手　何もわからず思わず手をつかまへて引き上げた。

「ワーッ」

子供は泣きさけんだ　まさに糞だらけ　私は手をひっぱり二〇〇メートル近い我か家の　風呂場へ連れ込み　風呂のある処に暖かい湯を頭からザーザかける　子供は又一段と大声で泣く　その声に姑が出て来て

「くさい」「どうした」

「肥溜に落ちた」と私の言葉に　烈火の如く

「用水も外ポンプもあるのに！」

ポンプは汲めば波む程つめたい。固形石けんの時代　又風呂桶は据置で下はコンクリートで排水はよいのだが姑の怒は続く

「家は何処」幸隣の部落　全くよく泣く。何とか洗って着せたりして外へ出たが外の子は　居ない。仕方ないのでしやくる子供の手を引きその家まで行く。農家で誰もいないが戸は明いている。「もう何処へも行かないの」

その子置いて家へ帰り風呂場の掃除　一週間は鼻についた。姑の小言は続いたがそ話題も途切れた。

昭和四十六年に町は市となり　都市計画が施行され　区画整理と称し畠、田の眞中に都道が縦断し　用水　肥溜も　無くなりまわりが都市化して来た。

この時代以前の農家は　畠　田の肥料は重に人糞で　牛車　手押車に空の桶へ蓋をのせ汲取式の便所のある家庭にこの辺から出かけそれを大きいものは六畳位の広さ深さ二メートルもあり小さいのは一、二畳位あり蓋をしないので表面が乾き、まるで地面と同じ平な形となる為事故のおきることがある。肥溜と云う。

この様な変化に地形も変ったが　残りの畑の作業は変ら

ず　私の最もエネルギーを出した四十年来　二人の娘も結婚し安心した直後に停年直後の夫の急逝、姑の他界を見送った。
その後も精一っぱい生き抜いた　早くも　平成十七年四月二十二日　私にとって忘れ得ぬ日となった。
実は専門学校時代同じ寮で生活した台湾からの　留学生だった　林氏月宮（家事科卒）と名古屋からの高橋秋子（国文科卒）の二人が十年ぶり位で揃って私宅に来てくれると云う。
アメリカに移住した林氏さんは名古屋博を見学する為高橋さんが成田まで迎えに行き　不便な私宅へ寄って呉れたのだ。
三人で昼食をとり話題はアメリカ　そして　名古屋へ行く為名残り惜しく別れた。二人が帰られた後何か私が調子が変な気になった時娘が「あら顔色が悪くおかしい」とそれこそ救急車を呼び　早速入院となった。医師の診断脳梗塞となった　右半身不随と云われた途端涙が溢れ「私は障害者　片輪になった　何の罰か」とめどなく涙が流れ　生きる希望もなくなった。
思わず担当の医師に「私は何の罰でこの様になったのか」と泣いて訴えたところが医師は五月の連休にもか、わらず　休まれる事なく診察に来て下さった。その厚意に感謝しつ、も遂弱根をはいたその折医師は「罰が当ったと云わない来週からリハビリを始めるが　皆患者は一生けんめい貴女もリハビリをして杖で歩いて帰れる　皆頑張っているので　悲しい事は考へないで　つまりバチか当った等、外の人に失礼　リハビリをがんばる様」私は目が覚めた。病気で治療をして少しでもよくなり……と考へを変えリハビリに通ひ始め会場に行きびっくりした。
五十人位私の様な人々　両手を支へ　歩行　寝て体操階段の上下　自転車をこぐ　実に様々の訓練を一生けんめい　始めは車椅子の私も一ヶ月経つと廊下の手すりを持ち杖で歩ける様になり入院以来体を動かせる様になった。その折退院と云う事を　看護婦からつげられた　不安はあったが明日と云われ身の廻りを片付けていたら再び来られ薬剤師長が薬の説明に来られます」
「え」やがて二ヶ月も経ち退院で又薬でも変るのかと勝手に想像していた。
そこへ薬袋下げた身長一八〇センチもある立派な男性が立っていきなり
「私は四十四年前肥溜に落ちた時助けて頂いた　勝山さんに御礼に来ました。私も五十才になります。この病院の薬剤師として働いております。あの時は六才でした。命の恩人です　有難うございました。」そして薬の退院後の飲用分を置いて彼は深々と頭を下げて帰って行った。
四十四年前の事　走馬灯は逆まわりし私は　不思議にあの時の事が鮮明に浮かんできた。私もい、事をしたのだ元気を出さう。

（司馬雑感　二十一）
「台湾紀行」をゆく

山田嘉久

一　司馬遼太郎と李登輝

作家司馬遼太郎は「政治家という人種」をあまり好まなかったようだ。
（逆に、政治家の方はその演説や原稿の中に、やたらに「司馬語録」を使いたがるが）
そのため司馬は生涯、どの政治家とも一定の距離を置いていたが、唯一の例外が台湾の李登輝元総統だろう。
両者は大正十二年生まれの同年輩（学歴年では李が一級上だが）、しかも共に軍隊経験があった。司馬が戦車隊小隊長の陸軍少尉であったことはよく知られているが、李も戦争中は日本人として取り扱われ、陸軍高射砲学校の見習士官だった。昭和二十年三月十日の東京大空襲の時には、自ら高射砲を操作して、B29を迎え撃ったという。
このように世代を共有していた李登輝への共感、また台湾への踏み込んだ同情から、司馬自ら云うように「台湾に凝って」二度も渡台しているが、その二回は李に会うためだった。
したがって「台湾紀行」は他の「街道をゆく」シリーズの司馬としては異例なほどに政治色の強い読み物となっている。
特に李登輝との対談は当然、中国側を刺激した。その後、数ヶ国語に翻訳されて、アジア各国でも大きな反響を呼んだ。とりわけ、対談のテーマが「台湾人に生まれた悲哀」であれば、尚更だった。
いうなればこの「台湾紀行」は、故郷を失った人々への愛惜をこめた物語ということも出来る。
そして、司馬は「（この対談を）たれよりも、大陸中国のひとたちに読んでもらいたいと思っている」と挑戦的に書いている。
一方、日本でも「司馬遼太郎は晩節を汚した」との意

見も一部にはあったが、
「国家とはなにか。
というより、その起源論を頭におきつつ台湾のことを考えたい。これほど魅力的な一典型はないのである。」
という、通常の紀行文では考えられない重々しい言葉で始る「台湾紀行」を今、改めて読み直してみると、この「化外の地」（台湾のこと）をかって日本が侵したようなことを、今後どの国もしてはならないと断定し、さらに最近の問題になった「チベット問題」にまで踏み込んでいるのには驚く。

二　八田与一のこと

恥ずかしいことながら、私は「台湾紀行」を読むまで「八田与一」なる人物を知らなかった。
私だけではなく日本人の多くがそうだろう。
しかし台湾人は違う。彼らにとって八田与一は歴代の台湾総督―桂太郎、乃木希典、児玉源太郎（児玉の下で民政長官となった後藤新平や、その後藤が招聘した新渡戸稲造も含めて）の誰よりも台湾にとって大恩人であることを知っている。
司馬も「台湾紀行」の中で二十数ページを費やして八田のことを語っている。
我々も彼によって開発された広大な嘉南平原の灌漑用水を車窓に見ながら、現地の旅行社がわざわざ用意してくれた「八田与一物語」のビデオを見て、事前知識を得た。
八田与一　明治十九年（一八八六）、石川県花園村（現金沢市）に生まれた。四高を経て明治四十三年（一九一〇）、東京帝国大学土木科卒業後、台湾総督府内務局土木課に就職。当初は嘉義市、台南市、高雄市などの上下水道の整備を担当したが、二十八歳のとき当時着工中であった桃園大圳の水利工事を一任され、これを見事に成功させた。
大正七年（一九一八）、与一は嘉義、台南両市にまたがる広大な嘉南平野を調査、この地域は灌漑設備が不十分のため常に旱魃の危険にさらされていた「不毛の大地」であったが、与一は民政長官下村海南の一任を取り、ダム建設に着手した。この時の彼の素晴らしさは、彼自身は国家公務員の立場を進んで捨て、新たに受益者が結成した「嘉南大圳組合」の組合付き技師となったことである。（司馬に云わせれば「法学部出世主義からいえば、田舎落ちになった」ことになる。）
この工事には大正九年（一九二〇）から昭和五年（一九三〇）まで一〇年を要したが、遂に当時、東洋一のダム（烏山頭ダム）が完成した。（下村海南により「珊瑚潭」の美称が与えられている。）
その後、与一は台湾総督府に復帰し、勅任技師として台湾の種々の産業計画の策定に従事したが、太平洋戦争

さなかの昭和十七年（一九四二）、調査のためフイリッピンに向かう途中、アメリカの潜水艦に撃沈され死亡した。また戦争に負けた直後の昭和二十年九月、与一の妻外与樹も彼の後を追って烏山頭ダムの取水口に投身自殺した。
我々はまず与一が作った広大な烏山頭ダム（現在はこのあたり一帯は公園となっている）を散策して、園内にある彼の墓や銅像にも詣で、彼を顕彰する記念館も見学した。彼の銅像はダム完成後の昭和六年（一九三一）に作られたようだが、彼自身の要望により作業衣の姿でダムを見つめている。
このことが却って我々の共感を呼ぶ。「嘉南の農民が、この銅像の前を通る時、誰とはなしに手を合わせて拝む姿を見られるようになった」と司馬も書いている。
そして終戦の翌年（一九四六年）には地元農民の手によって八田夫妻の墓もダムのほとりに建てられた。
今でも、彼の命日である五月八日には毎年、慰霊祭が行われるという。
（今年の慰霊祭には現職の馬英九総統も参列したと新聞各紙は報じた。）
与一が顕彰される背景には彼の業績もさることながら、土木作業員の労働環境に尽力したこと、危険な現場にも進んで足を踏み入れたことなどが挙げられる。園内の隅にある「殉工碑」は工事の犠牲者のために彼が建てた。
また墓域内には古風な一〇トン機関車が置かれていた。与一が工事指揮のため乗ったのかと思っていたが、これは労働者用のもので、彼自身は常に無蓋貨車の砂利の上に乗っていたという。彼の人柄を伝えるエピソードである。
なお現在の台湾では中学生用教科書にも与一の業績は詳しく紹介されているようだし、李登輝総統（当時）が平成一六年（二〇〇四）末に訪日した際には、わざわざ与一の故郷金沢を訪問している。その際、彼は「台湾に寄与した日本人を挙げるとすれば、八田技師が一番に挙げられるでしょう」と語っている。

三　知本温泉にて

今回の旅行の目玉である「烏山頭」めぐりは三日目のことだったが、我々は台湾に着いてまず向かったのは、台東近くの温泉地「知本温泉」だった。司馬も二回目の台湾行きで訪れているが、台北―高雄―台東まで鉄道を乗り継いで、そこからマイクロバスで行ったようだ。
我々は台北から台東までは国内航空で飛んだが、台北の国際桃園空港から市内の国内線松山空港までは一時間ほどもかかった。しかも台湾領の金門島からの引き返し

国内線は予定よりも一時間も遅れた。漸く着いたこの便からは満席の人々を吐き出していたが、台湾から中国本土への往復は金門島から中国領廈門に渡るのが一番安上がりのルートだとは、今回の現地ガイド林さんから聞いた。

その林さんにフライトを待つ間、空港のロビーで聞いてみた。

「林さんは司馬遼太郎を知っていますか」

「勿論」と鞄の中からネットで調べたらしい司馬関連の多くの資料を見せてくれた。

この林さんは昭和一ケタ生まれで、小学校四年までは日本の教育を受けたとのことだった。そのためか今もって猛烈な「大和魂」の持ち主で、バスの中でやたらに軍歌を歌いだすには閉口した。

「台湾紀行」でも司馬のガイド役は蔡焜燦(さいこんさん)氏という昭和元年生まれの会社社長だが、戦争中は志願して陸軍少年飛行兵になっただけに、空港で司馬に初対面の時には軍隊式敬礼で迎えて、「司馬少尉」を慌てさせている。

「その後、会うたびに挙手の礼をした。私も答礼せざるをえなかった。通りかかった人は、なんと思ったろう」

司馬はすぐに彼を「老台北(らおたいぺい)」と綽名した。

今回、我々を案内した林さんも老台北と似ていなくもない。旅行中、このようなかっての「日本領土時代」を懐かしむ老人が多いのには驚いた。本島人にとって一九四七年の二・二八事件以降の蒋介石の圧制がいかに酷かったことかを物語っている。

司馬も「犬（日本人）が去って豚が来た。犬は小うるさいが、家の番はできる。豚はただ食って寝るだけだ」という当時の台湾人の悪口を紹介している。

大戦後、中国国内で共産党に敗れ、台湾に逃げた蒋介石軍（外省人）は食事の代金は踏み倒すは、家屋に入って略奪するは、婦女暴行はするは、横暴の限りを尽くした。

が、国民党の官憲は全く取り締まらなかった。そこで業を煮やした群集は一九四七年（昭和二二）抗議と暴動を起こす。

これに対して国民党軍は大弾圧と殺戮を行った。

このとき敷かれた戒厳令はその後一九八七年まで続けられた。

日本人に対する考え方が、同じ日本の植民地であった韓国と、こうも違うのはなぜだろうと旅行中、ずっと考えていた。

韓国が曲がりながらも李氏朝鮮として五百年続いた独立国であったのに対して、台湾は十七世紀のオランダ植民統治時代を経て、これを駆逐した鄭成功の時代、さらには清朝統治時代が二百年も続いたが、清朝は一貫して台湾を「化外(けがい)の地」（「皇帝の支配外の地」「中華文明に属さない地」）としてさほど重要視しなかった。

幕末の日本で有名なタウンゼント、ハリスはその台湾が清国に属しているのは島の西半分だけだと知り、早くアメリカは台湾の東半分を買収すべきとの主張をしたと司馬は書いているが、この一件をもってしても、十九世紀での台湾の法的位置がよくわかる。

明治初期、多数の宮古島住民が台湾先住民（パイワン族）に殺された事件に当って、明治新政府が敢て、豊臣秀吉以来約二八〇年ぶりの海外出兵に踏み切ったのも、時の清国政府が事件の場所が皇帝の感化が及んだ「熟蕃」ではなく「化外」の「生蕃」だから問題がないと認識した結果だった。

このあたりの事情は、司馬が昭和四十年代後半に書いた長編「翔ぶが如く」に詳しい。

一八九四年の日清戦争の結果、下関条約によって台湾は清朝から日本に割譲され、日本の統治時代が五〇年続く。そして第二次大戦に敗れた日本がサンフランシスコ講和条約や日華平和条約において台湾の領有権を放棄したものの、肝心の台湾の所属が明記されないことが、今日の混乱を招いたとも言われる。

我々が台湾南部を南北に走る中央山脈の麓にある温泉地知本にたどり着いたのは日がとっぷり暮れた頃だった。司馬によれば「知本」とはピュア族の地名を漢字化したものだという。

かって戦争中、日本一の高山として有名になった新高山（現在は玉山三、九九七m）はこの山脈の北側にある。小学生の頃、富士山が日本一の高山でなくなったことを知って、一寸残念な気分になったことを思い出した。

我々の今晩の泊りは知本ロイヤルホテルだが、暗闇の中に突如現れたホテルの大看板が「老爺大飯店」とあったので、台湾人（中国人）は漢字の当て字の名人だと感心した。司馬も「暗い山道をたどってのぼるうちに、山中に一大飯店があった。」と書いているので、あるいは同じホテルだったかもしれない。

知本は一九一七年に先住民によって発見されて以来、台湾を代表する温泉地となったが、戸外には日本式の露天風呂まであった。

遅い夕食をとった後、ホテルのロビーで少数民族（アミ族）の踊りがあったが、少数民族の好きな司馬もこれを鑑賞している。

そして得意の少数民族論が続く。台東付近の住民の約半分は先住民だという。

この地区は十九世紀までは先住民の天地だったが、漢民族は彼らのことを「蕃」と呼んだ。そして漢民族の文化になじんだ者を「熟蕃」、なじまない者を「生蕃」と区別したことは前述の通りだが、台湾の日本時代でもこの呼び名が踏襲された。しかしやがて「高砂族」というようになり、更に戦後は「高山族」と呼ばれるようにな

と呼んだという伝承から、この島の別称Formosa（中国語では美麗島）が誕生した。

その頃のフォルモサはまさに「無主の地」だった。

我々が最後の日に訪れた淡水付近はスペインが占拠していたし、嘉義県あたりは福建省の海賊鄭芝龍（鄭成功の父）が暴れていた。

その後のオランダ植民統治時代もわずか三八年しか続かなかった。

大陸では明王朝から異民族王朝である清が替わる頃で、ここで明王朝を援けるべく立ち上がったのが鄭成功（一六二四―六二）だった。彼は福建省から二万五千の兵を率いて台南に上陸、たやすくオランダを降伏させた。一六六二年のことである。

一六五三年、オランダ人によって建造された赤嵌楼は別名紅毛楼と呼ばれるが、城内にはそのオランダ人を屈服させる鄭の大きな銅像が建っていた。

父が中国人、平戸の武士の娘を母に持つ鄭成功は、日本では近松門左衛門の「国性爺合戦」で知られているが、また今でも中国人にも尊敬されている。

司馬はこの本では鄭成功について「中国第一等の好漢」と記しているが、別の「街道をゆく」（中国、閩のみち）では「鄭成功は父に似るより母に似ていた。かれは清軍の陣営にいる父の再三の招諭を断わり、一介の書生の身から戒服を着、父の配下をひきい、戦いを展開した。」

った。

現在でも彼らは若い人はともかく、部族間では言葉が通じないので、いまなお共通の言葉として日本語が使われているとは驚きだった。

司馬はこの地球上で日本語が「国際公用語」である唯一の例であると書いている。

四　台南にて

二日目は台東名物の釈迦糖（シュガーアップル）を試食などしながらバスで西海岸へ移動、台湾第二の都市高雄付近を観光したのち、三日目には台南市に入った。

十七世紀から十九世紀にかけて台湾の中心地であった台南市にはオランダや鄭成功の史跡を多く残していた。

市内の名所の「赤嵌楼（せっかんろう）」や「安平古堡」はいずれもオランダ人が作った。

「安平古堡」はオランダ名では「ゼーランジャ城」であり、城塁のそばの掲示板には漢字で「熱蘭遮城」と書いてあった。建てられたのは一六二四年。日本では将軍家光の治世の初期であり、長崎に「出島」が出来た時代に当る。

それより以前、ヨーロッパ船として始めて台湾に到達したのが、大航海時代のポルトガルであり、彼らは緑に覆われた台湾島に感動して「Iiha Formosa（麗しの島）と書いている。

鹿港は台湾西岸の中間に位置する古い港町である。

清の統治時代には天然の良港として商業の中心地として栄えた。一七八四年には鹿港と中国（福建省）との間に航路も開かれ、当時台湾第二の都市となり、首都ともなった。

その中心にある媽祖（まそ）を祭った鹿港天后宮は線香の煙が絶えないほどの賑わいを見せたという。日本でいえば、お伊勢参りに当る寺町である。

だが、二十世紀に入って開かれた台湾を南北に貫く基幹鉄道からは外れてしまったことなどから、今では辺鄙な小都会に没落してしまっている。しかしそれだけに町のあちこちに往時繁栄を極めた昔の面影を色濃くとどめていた。

五　新幹線で台北へ

台中からは平成十九年一月に開通したばかりの台湾新幹線で台北に向かった。台湾の人々には「高鉄」の名で親しまれているそうだが、台北と高雄（左営）間三四五キロを一時間半で走る。途中の台中からは五十分、時速三百キロの旅を楽しんだ。日本の技術を導入したせいか、車両の外観は日本の新幹線に似ている。

乗車に当ってパスポートの提示を求められたのは、六五歳以上は半額料金のためだった。

台北ではまず故宮博物院。

此処も昨年リニューアルされ、三階は新石器時代―銅器時代―漢時代、二階は宋、元時代―清時代と中国五千年を楽しむことができるが、不思議なことに「台湾紀行」では、この世界的に有名な博物館について、司馬は一言も触れていない。

我々は、この日の朝早く、市内の「忠烈祠」で英霊を守る衛兵の交替儀式を見学したが、日本の護国神社みたいなものだろう。豪華な大殿は数年前に見学した中国本土の紫禁城太和殿とそっくりだった。

「台湾民主記念館」は蒋介石のメモリアルパーク。白い壁には大きく「青天白日」の文字。彼の生存年数と同じ八十九段の階段を昇った二階のホールには巨大なブロンズ製の坐像に圧倒される。

両脇に直立不動の衛兵が立っているのは、なにか白々しい。坐像の上の「百二十二」の数字は今年が生誕百二十二年だそうな。

同じく蒋介石の官邸だった「士林官邸」は日本統治時代には台湾総督の官邸でもあった。今では蒋介石夫人の宋美齢が育てたという薔薇園となっている。

夕かたには世界一高い建物の一〇一タワー（高さ五百八m）の地上八十九階の展望台（高さ三八二m）に登っ

躊躇しているようだった。檳榔は噛んでいると弱い覚醒作用があるようで、神経は興奮状態になるという。そしてなによりも彼が説明を渋ったのは、檳榔売りには売春行為が伴っていることのようだった。確かに「檳榔店」には必ず若い女性の姿があった。

そこで政府による「檳榔」を規制する動きがあるようだが、生産農家にとっては檳榔樹は「金のなる木」で台湾第四位の農産物であるという。

なお司馬は「台湾紀行」のほか「閩(びん)のみち」でも檳榔のことを書いている。昔、福建省あたりでは舟（ジャンクか？）を作るにあたって鉄クギの代わりに檳榔樹のひげ製のナワで各部分を縛ったことを紹介している。

檳榔に限らず、台湾のすべての文化が対岸の福建省と密接な関係があったことを示している。

台湾が「福建省台湾県」といわれる所以でもある。

延泊した最終日にはこのツアーのリーダー格であるK氏の案内で台北の郊外にある淡水を見て廻った。同行の、台湾出張数十回を誇るH氏が時折サポートした。

淡水は台北市内を流れる大河淡水河の河口に広がる港町で、台湾の歴史を知るには格好の場所だった。

一七世紀にスペイン人によって建てられた「紅毛城」を始め、その後のオランダ、清朝、そして日本に統治された歴史を持ち、それぞれの時代の面影を残す建物が点

たが、生憎の雨天のため全くの視界不良。

台北での初日は全く「お上りさんの一日」だった。

台北に限らず、台湾各地で見る看板は正真正銘の漢字（繁体字）で書かれている。略字は全く見られない。お陰で忘れかけている漢字を思い出してくれたが、戦後、常用漢字に親しんだ日本人には読めない漢字も数多くある。

その点、毛沢東文字（簡体字）で統一されている略字万能の中国本土とは対照的である。

（数年前、西安博物館を見学した際、「汉」（「漢」の略字）の字を日本人観光客が誰も読めないのを中国人ガイドが得意げに説明しているのを見て、馬鹿らしくなったことを思い出した。二割にも満たない中国人民の識字率を少しでも上げようとした毛沢東政策が、こんなヘンテコな漢字を生んでしまった。そのためか最近の中国では公然と簡体字廃止論が叫ばれているという。）

街中に溢れる看板のなか、特に「檳榔(びんろう)」と書かれた看板やそれを売る店が多かった。司馬も「台湾紀行」の中で「檳榔」「檳榔樹」について触れている。

（なお、同人鈴木守氏は「まんじ」一〇八号「化粧のルーツを訪ねて」で司馬の文章を引用して檳榔を説明している。）

私もガイドの林さんに檳榔について聞いたが、説明を

在しており異国情緒たっぷりの史跡を巡った。紅毛城に隣接の洋館は一九七二年まではイギリス領事館に使用されていたが、その後、台湾に返還され第一級古跡に指定されている。

市内の繁華街には、それら史跡と全く対照的な猥雑な雑貨店や食べ物屋が軒を連ねている。その軒先の狭い道を、台湾名物の小型バイクが我が者顔に擦れ違う。まさに台湾を縮図にしたような街だった。

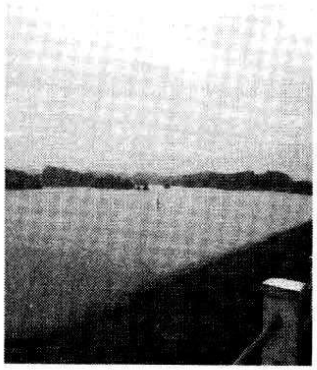
帰途、台北市内の有名な迪化街も散策した。十九世紀末から繁栄した当時の建築を残すストリート。台湾名産のカラスミやフカヒレなどの乾物、茶葉、菓子などの問屋が並び、此処でもバイクや小型車がせわしく行き交っていた。

台湾最後の夕食は、今までのホテルでの豪華な食事とは全く対照的な、市内の小料理店での台湾家庭料理だった。これは同行のY氏が十数年前、台湾からの女子留学生の日本での保証人ともなり、ホームステイさせたのが縁で、今でも親戚付き合いしている「台湾三人娘」の発案によるものであった。

今ではそれぞれ立派な台湾でのキャリアウーマンに成長した彼女らが、我々の食卓に花を添えてくれた。それが我々の台湾での印象をより強くした。

それにしても、台北滞在中、数回、地下鉄を利用したが、その都度必ず乗客から席を譲られた。ラッシュのときにもそうだったのには驚いたが、日本では殆ど見慣れない体験に却って戸惑った。古くから根付いた儒教のせいかもしれないと、皆で話し合ったものだが、此処にも古きよき習慣が残っていることを実感した。

このことも台湾への好印象となった。



（八田与一の開発した東洋一の「烏山頭ダム」）

狩谷棭斎讃歌（七）

新井　宏

（二十二）和名類聚抄箋注

棭斎の代表作『和名類聚抄箋注』の初稿執筆に取り掛かったのは、文政五年（一八二二）正月である。寛政十二年に校読を開始してから二十二年の歳月が過ぎ去っていた。

『和名類聚抄』は承平年間（九三一～九三八年）に、源順が編纂した漢和辞典であるが、内容的には日本初の百科事典ともいうべきもので、漢語を「類聚」して万葉仮名で和語の読みをつけていて、日本語の語源を知るに必須の書である。棭斎の箋注によって、我が国の古語の意味が定まったのは数え切れない。現代に至っても、諸説ある語義の紹介のほとんど全てにまず棭斎の名が出てくる。

この『和名類聚抄』には、十巻本と二十巻本が伝わっていたが、原本は既に失われていた。しかも、百科事典としての性質上、常に時代に合うように更新されたため、写本には挿入や異説が極めて多かった。源順の原本を正確に復元することは、日本の古代を研究するに必要欠くべからざる作業であった。

ここで棭斎の素晴らしい研究姿勢が遺憾なく発揮される。通常なら、校訂者が正しいと信ずる内容に修正するのが当時の慣わしであった。しかし、棭斎は十巻本七種と二十巻本四種を徹底検証して、二十巻本にあって十巻本にない職官や国郡の記述から、十巻本原撰説を唱え、この十巻本について、書写の誤りや書写者の意識的あるいは無意識的な改変は正したけれど、内容の過誤については、類書を校閲しながらも、箋注を施すに留めたのである。誤りの中には、諸本の錯誤もあろうが、源順が原本を作成した際の誤りもあり得るからである。

貴重な古典は、その内容のみが研究対象となるわけではない。意図せざる目的のために、重要な情報源となる場合がある。棭斎の研究態度は、まさに近代の文献学の認識そのものであり、その意味では、契沖の『万葉代匠記』、本居宣長の『古事記伝』を凌駕して近世注釈の最高峰に位置するものであった。

『和名類聚抄箋注』は、翌文政六年（一八二三）に、いったん初稿が完成するが、文政七年には、早くも再稿に取り掛かっている。再稿の完成は、大病を患うなどの事情もあり、文政十年になった。ところが、棭斎はその再稿にも満足しなかった。時期は明らかではないが、三稿を纏め上げて、死の直前には出版の段取りを整えていた。

しかし、おそらく津軽屋の経済的な事情、すなわち津軽藩に対する金十二万七五六九両の巨額債権を放棄したことによる困窮のために、見本刷まで行っていながら、出版は取りやめとなってしまった。この時に終稿を整理して、棭斎の没後も浄書などに従ったのが、渋江抽斎である。森鷗外の小説『渋江抽斎』では、そのことに触れていないが、抽斎のこの整理が後に役立った。

結局、『和名類聚抄箋注』が、棭斎の薫陶を受けた最後の弟子、森立之（たつゆき）（枳園（きえん））によって内閣印刷局から出版されるのは、棭斎没後四十八年たった明治十六年（一八八三）である。渋江抽斎は文化五年生まれ、森立之も文化七年生まれで、共に医学を伊澤蘭軒に学び、儒学等を棭斎から学んでいる。森立之は『傷寒論』を書き明治の考証医家の第一人者になった。渋江抽斎は森鷗外の名作史伝小説で世に残った。

『和名類聚抄箋注』には本文に十倍する箋注が付いた。百科事典であるから当然ではあるが、天文・気象・神霊・水・土石の項目から、人間・家族、体、病気、武芸・武具、住居・道路、船・車、金銀・玉石、布、衣類、食物、器・皿、燈火、日用品、鳥、獣一般、牛・馬、爬虫類・両生類、魚類・海棲動物、虫類、稲・穀物、野菜、果物、草木に至るまで、膨大な記事について、本文、箋注部分ともに万葉仮名を含めて全て漢字で書かれており、余程の知識がないと読むことができない。

私も、研究者が引用している部分を拾い読みするのが精一杯であるが、ある水生生物の学者が魚貝類の和名の歴史を調べていて、現代の学者は、和名類聚抄に言及することはあっても、箋注を精読している様子がなく、棭斎が有力な新説を提示しているにもかかわらず、専門辞書類にもほとんど採用していないと嘆いていた。それは、棭斎を無視しているというより、難解さによるらしい。

確かに、わずか「一字」の校異にさえ、稿本、写本を徹底比較検討するだけでなく、中国の原典にまで当り、原典と一致しているからと言って、それを正とするのでなく、後世に誰かが訂正した可能性まで論じているのであるから、本文に十倍する箋注となったのも無理が無い。そこに示された膨大な古文献からの引用の方が実用的な

価値が高いと言われているほどなのである。

なお、椛斎は二十巻本を原撰ではないとしたが、その成立はかなり古いと考え、歳時、楽曲、薬名、官職、国郡、殿舎の六部門についても箋注をつくり本編十巻の付録とした。その中には、澤田吾一が名著『奈良朝時代民政経済の数的な研究』で活用した諸国の郷名や田積もある。そこに記載された郷名が、出雲風土記、豊後風土記、播磨風土記などの古い記録とほぼ一致していることから、奈良時代の人口や耕地面積を初めて算出したものである。澤田吾一は椛斎の『本朝度量権衡攷』からも多くを学んでいる。

ところで、百科事典といえば、普通は新しい版に価値がある。しかし、論文や著書を書く時、役に立つのが旧版である。同時代にどのように理解されていたか、最も簡単に参照できるのが百科事典だからである。旧版の百科事典など、置き場所に困るが、時を経た百科事典は研究書として貴重なのであるから、図書館は留意してほしい。

似ているものに、会社役職員録がある。

（二十三）　慊堂日暦

椛斎が『和名類聚抄箋注』に着手した翌年の文政六年（一八二三）四月から、松崎慊堂の『慊堂日暦』が始まる。

いや正確には全二十四冊の内、第一冊と第二冊を欠くから、本来は文政初年頃から書き始められた日暦であるが、この頃から椛斎との交流が正確に参照できる。

椛斎の生涯の友、松崎慊堂については既に書いたが、この『慊堂日暦』（東洋文庫より山田琢訳注によって六巻として出版されている）が、江戸後期の歴史研究に裨益したことは計り知れない。社会の事件、見聞の記事、諸説の覚書、交友記事や人物録、その他には、家計簿的な備忘録までが丹念に書きとめられている。後世に伝える意図がなく、ただ徹底して書き綴った性質のもので、慊堂の人柄が良く現れている。

この『慊堂日暦』に登場する人物は、新聞記事のように実に多彩である。しかし、その中で一貫して最も多く登場するのが椛斎なのである。例えば、『慊堂日暦』の始まる文政六年四月十四日には「晴。椛斎を訪い、語ること終日。夜帰る」とあり、平均すると月に一、二回は必ず登場している。最も多く登場した文政九年などは年に五十回以上も椛斎の名を見る。

時には「余と椛斎の交わりは銅臭に近しと知る」とか「余（慊堂）が翁（椛斎）に於けるは、翁の有るところは、余は必ずしも有らず、翁の無きところは、必ずしも無からず、有無通共し、洵（まこと）に心に逆うことなきなり」などと椛斎との仲を吐露している。

社会的な事件としては、天保八年（一八三七）二月十九日に大阪で起きた大塩平八郎の乱についても、十日後には正確に記載しているし、蕃社の獄については、既に述べたように、慊堂自身が渡辺崋山の助命に奔走した様子を随所に記している。

また、氏名と簡単な覚書を付した人物録が多彩である。大塩平八郎については、短いメモながらも、事件の十年前に二回も記されている。それだけ気になる人物だったのであろう。慊堂が天保十年（一八三九）八月末から箱根に遊んだ時には「小林専次郎。上総の人、自ら言う、まさにアウステウリン国に入りて覇王にならんとすと」などとあり驚く。この記事の少し前に、高野長英の夢物語に続いて、続夢物語、続々夢物語が出ていた様子が記されていることから見ると、尚歯会の関係者であろうか。

同じく箱根滞在中に、二宮金次郎について次のように記している。やや長文であるが、簡潔なメモであり、現在でもそのまま使えそうなので原文で示す。

二宮金次郎。小田原在柏山村の人、小にして小田原の家士に仕え、その主の貧しき者をして大いに富ましむ。邦君は遂に命じて仕籍に入らしめ、格録は代官に比す。その富をなすの法は、己を節すること百度、余すところを以て人に施す。人に施す法は、貸すを以て名となす。借りる者は必ず諭すに立産の道を以てし、三令五申してこれをして必ずその説を奉じて易えること能わざらしめて、しかる後に貸す。その人は産立ちてしかる後にその借りるところを償う。その償うところを以て、またこれを別人の窮する者に貸すにまた前法のごとくす。毎に云う、人は積貯を以て子孫に遺すべからず、ただこれを他人に施す、すなわちこれ子孫のための地なりと。

天保十年は、天保の大飢饉の後で、二宮金次郎は烏山藩を救済し、下館領の復興に取り掛かるなど諸藩、諸村の復興指導で多忙な日々を送っていた。相馬藩士の富田高慶が入門をやっと許可されたのもこの頃である。この記事の後に、下野国桜町領の旗本宇津半之介の名もあるので、その関係者からの話を記録したのであろうか、それとも既にこのような文書が小田原では流布していて、それをメモしたのであろうか。

それにしても、慊堂の心に共鳴するものがあったからであろう、『慊堂日暦』の中では異例の長文なのである。慊堂は偏見にとらわれることの少ない人物であった。

（二十四）　椛斎の三角縁神獣鏡

『慊堂日暦』に関連して、ぜひ紹介したいことがある。それは椛斎の持っていた三角縁神獣鏡のことである。

私は永年、考古学の研究にどっぷり浸かっているが、その中でも三角縁神獣鏡の研究は主戦場のひとつである。三角縁神獣鏡を、卑弥呼に下賜された魏鏡とする説

と、中国での出土例がないことから国産とする説が対峙し膠着状態になっている中、私は鉛同位体比の解析という異色の手法によって魏鏡説を否定した。その帰趨によっては、邪馬台国論争ばかりでなく、日本の古代国家像も大きく変わってしまう可能性のある論争について、いわば当事者になってしまった訳である。したがって、三角縁神獣鏡については、どんな些細なことでも関心を持っている。

三角縁神獣鏡は、古墳時代前期の大型古墳を中心にして、既に五百面以上出土しているが、その中にはいわゆる「同笵鏡」が百二十種ほどある。その同笵鏡の分有関係から京大の小林行雄は壮大な大和王権説を描いたが、三角縁神獣鏡が卑弥呼の鏡でなくなると、部族連合的な国家を経て大和王権が成立したことになり、統一国家成立時期が大きく変わってしまう。

三角縁神獣鏡の魏鏡説、国産説については、議論が進めば進むほど、定説として君臨していた魏鏡説に、情緒的な証拠しかないことが判ってきた。その情緒的な証拠の最たるものが銘文である。その頃の日本で、漢字を使って立派な銘文を書けるはずがないとの意見である。

確かに、三角縁神獣鏡には、一定の四言句、六言句、七言句などを入れた長文の銘文を持つものが約五十種もある。それらが古墳時代の初期に日本人によって書かれたとは思えないとの意見に同感できる。ところが、三角縁神獣鏡が流行したのは日本だけである。流行ブランド品にイミテーションが作られるのは世の習い。よく見れば、定形句のほとんどが、漢代に流行した鏡から直接、あるいは変形して採っている。

しかも、定形句の寄せ集めや変形を主とした銘文の集合でありながら、中国音韻学の森博達は銘文自体が押韻を無視し平仄の合わないものばかりで、魏が下賜鏡として、こんな稚劣な鏡を作るわけが無いと云う。

実は、『慊堂日暦』には、椒斎の所有していた七、八面の鏡のことが繰返し出てくるが、その内の二面が銘文を持つ三角縁神獣鏡なのである。

江戸の巷間に伝わった話であるが、椒斎は自ら六漢老人と称していた。漢鏡、漢銭、王莽の威斗（一振りで数万の軍勢を追い払うことができる軍配のようなもの）、中平の雙魚洗、三耳壺を愛蔵していたからであるが、それでは五漢ではないかと言われると、自分は漢学を修めているからと答えるのがオチであった。慊堂も椒斎が六漢老人と称していたことを伝えている。

『慊堂日暦』における漢鏡記事の初出は文政九年（一八二六）の十月である。慊堂は椒斎宅で、前漢三、後漢四、六朝一、唐一の古鏡を観て墨拓を刷り、前漢の仙人不老鑑、仙人無双鑑、後漢の尚方鑑の銘文を記録している。その記事の前に、椒斎が王莽の斗を得たことも書いているので、椒斎の所有と見て間違いないであろう。

ところが、四年後の文政十三年九月の記事に「正斎の鏡。近藤正斎が事を起す前、古鏡を持って椒斎宅に赴く。その後に事おこり、その鏡はゆくところを知らず。家人はこのことを以て余に嘱し、八日に訪問せり」とあり、近藤正斎すなわち近藤重蔵の所有物であった疑いも生ずるのである。その翌年の天保二年九月にも「近藤正斎の小妻来り、古鏡のことを説く。椒斎に与うる書を作りこれに付す」とあるし、続いて同年十一月にも「近藤正斎の内人はその次児熊蔵とともに来り、正斎が蔵せる大小升（古鏡）を売らんと欲す」とある。どうやら近藤正斎の鏡を巡って、問題があったようなのである。

近藤正斎が「事を起こした」と云うのは、文政九年（一八二六）五月に長男の近藤富蔵が隣地争いで町民を殺害して八丈島に流罪となり、連座した正斎が天保十二年六月に獄死した事件である。すなわち、事件後ほどなくして椒斎が漢鏡を慊堂らに見せていること、正斎が獄死して間もなくその家人が慊堂を訪れていることなど、気になる一致があるのである。

しかし、近藤正斎と椒斎の関係については、既に述べたように、正斎が椒斎から借用した『皇清経解』を売り払ってしまったが、それを見つけた椒斎がそっと買い戻しておいたところ、もう一度借用を申し込んできたという巷説があるほどで、書誌学者の川瀬一馬も椒斎が正斎の遺族に対して手厚くしていたと述べている。

おそらく実情は、正斎が持っていた漢鏡を椒斎が既に買い受けていたのではなかろうか。それは、椒斎が亡くなって一年半経った天保七年（一八三六）末から再び『慊堂日暦』に、椒斎の漢鏡の売買交渉が出てくるからである。

その頃、椒斎没後の津軽屋は、津軽藩への巨額の債権を放棄して苦しみ、蔵書などを処分していた。それを手伝っていたのが、慊堂や伊澤蘭軒・柏軒の父子、そしてこの頃柏軒と結婚したばかりの椒斎の娘たか女である。しかし思うように換金できず、漢器鏡も加えることを考えた。「求古（椒斎）の後人（懐之）は、（中平の）双魚洗、三耳壺、（王莽の）威斗、漢鏡（六、七面）を三百両で」売ろうと考えたようである。

その後、実際の買い手としては、浜松侯水野忠邦が現れたようであり、代理人として儒者の小田切藤軒（要介）が事を進めた。藤軒は慊堂の弟子で、交渉は翌年の三月初から始まり、五月になってまとまった。その間の、関係者のやり取りを慊堂が断片的なメモでこまめに伝えている。とにかく、鏡が水野忠邦の手に帰したらしいことまで判ったが、その後の鏡の行方はわからない。

そんなことを調べている内に、蕃社の獄で罪に落とされた渡辺崋山の書簡の中に、「小田海松」の奔走に感涙に耐えないとあるのに出合った。小田は小田切藤軒、海は掛川藩の儒者で慊堂の弟子でもある海野豫介、松は松

崎慊堂のことである。後に慊堂が老中水野忠邦に上書して全文三千字におよぶ宰山無罪論を訴え、忠邦を動かしたのも実は小田切藤軒を通じてであった。

しかも渡辺崋山の日記によれば、獄の直前に小田切藤軒を訪れた際に、その蔵する古物を見たと書いている。その古物が鏡であったとするなら、水野忠邦が求めた鏡を小田切藤軒が預かっていたことになる。

随分、横道に逸れて、漢鏡の去就を追いかけてしまった。しかしその事よりも、幸いだったことは、慊堂は求古楼（梅斎）の古鏡の九面の明細についてサイズと銘文を記録していたことである。だからその中に三角縁神獣鏡を二面確認できるのである。研究論文を書いているのではないから、面倒な手続きは省略して先に進もう。

まず仙人不老鑑が七寸二分で二十一・七センチ、三角縁神獣鏡の最も多い寸法であり銘文が次のようになっている。句読点は他の銘文を参考にして七言句で示す。

吾作明鏡甚大好、上有東王父西王母、仙人王喬赤松子、渇飲玉泉飢食棗、千秋万歳不老、由天下兮由四海兮

この銘文は、（伝）奈良県山辺郡都祁村出土および京都府の椿井大塚山古墳から出土した同型鏡の三角縁銘帯五神四獣鏡の

吾作明鏡甚大好、上有東王父西王母、仙人王喬赤松子、渇飲玉泉飢食棗、千秋万歳不知老兮

と最後の句が異なるだけであり、最後の部分については（伝）奈良市大和田町富雄丸山古墳と出土地不明の同型鏡である三角縁環状乳四神四獣鏡の

吾作明鏡甚大好、上有仙人不知老、渇飲玉泉飢食棗、由天下至四海、（以下略）

と似ている。いずれにせよ、新から後漢に流行した方格規矩四神鏡で最も多く使われた定型句である。

また仙人無双鑑は六寸五分で二十センチであり、これも三角縁神獣鏡の範疇にあり

吾作明鏡甚大工、上有王子喬赤松子、天鹿其麟龍、天下其万世無双

と云う銘文を持つ。これは福岡県南原石塚山古墳、広島県中小田一号墳、大阪府三矢万年山古墳および京都府椿井大塚山古墳から出ている同型鏡の三角縁銘帯四神四獣鏡の

吾作明鏡甚大工、上有王喬以赤松師子、天鹿其義龍、天下名好世無双

の銘文と良く似ている。ついでながら、「其義」は梅斎や慊堂が読んだ如く、麒麟の方が正しい。しかも、麒麟の句を含む鏡は中国に全く見出せないので私が注目している銘文なのである。

いずれにしても三角縁神獣鏡には知られていなかった組み合せの銘文が現れたのである。現在知られる三角縁神獣鏡の同范鏡は百二十種類ほどで、もはや新型はほとんど出ないだろうと言われていた。最近、新たに発見された三角縁神獣鏡のほとんどが既に同范鏡を持っていたからである。そこに梅斎の二面が加わるわけである。

学問的には大きな発見であるが、今までにそのことを発表した研究者はいない。ただ、私が平成十二年に金属系の情報誌『バウンダリー』に紹介したことがあるが、それは歴史・考古学系の専門誌ではない。

いずれにしても、梅斎が鏡を入手したのは、文政九年（一八二六）よりも前のことであり、あるいは青柳種信が井原鑓溝で銅鏡三十五面の記録を作成した文政六年よりも早かったかも知れないのである。そうであれば、梅斎が最初の銅鏡の調査者であったと言えるのであるが、もうこの辺で止める。

（二十五）梅斎の三角縁神獣鏡の後日談

ちょうど、ここまで書き終えた頃、梅斎の三角縁神獣鏡の銘文について、畏友、漢詩人の鯨游海氏が主催する会で紹介したことがある。森博達の指摘について、漢詩の平仄や「二四不同」の規則を学びながら、再確認しようとの心積もりであった。

ところが、そのことが契機となり、一般の銅鏡の銘文についても、データベースを作ってみようと思い立った。いつものことであるが、データを収集しておくと、思わぬことで役立つ。銘文を詩文として本格的に研究した考古学者はいないからでもある。

ところが、そのことがまたしても、梅斎の三角縁神獣鏡との貴重な出会いの契機になった。それは、今では日本における銅鏡研究者の第一人者として知られる森下章司氏が平成十六年に書いた論文「古鏡の拓本資料」の中にあった。

森下氏とは三角縁神獣鏡の研究を通じて旧知の仲であるが、彼が京大に保存されている梅斎蔵印の「尚方鑑」の拓本について紹介をしていたのである。もっとも私もその拓本の存在については耳にしていた。しかし、「尚方鑑」は三角縁神獣鏡ではなく、いつしか忘れてしまっていた。ところが、森下氏の論文で、その詳細が判明したのである。良く見ると、天保八年三月汝圭所贈とある。

天保八年三月は梅斎の鏡の売却交渉が始まったころである。森下氏は気付かなかったが、汝圭は三好汝圭（横田汝圭）のことであり、天保十八年に七十八才で亡くなった江戸後期の画家である。尚歯会のメンバーであったから、梅斎、慊堂、崋山などとも当然交際があった。

そんなことに気付いただけでも嬉しかったが、森下氏は梅斎の三角縁神獣鏡にも気付いて、論文の末尾に追加して紹介していた。それは、拓本の論文を作成している際に、考古学史研究の立場からモノ集めをしている内田好昭と云う方から『慊堂日暦』に梅斎の鏡のことが出て

いると教示を受けたことによる。内容的には私の掴んでいた情報を越えるものではないが、嬉しさもあって、早速、森下氏に電子メールを送った。

森下氏も私が狩谷棭斎に拘っていることにびっくりしたと云うが、そこで更なる貴重な論文を紹介された。宮内庁書陵部の徳田誠志氏が平成十九年に『関西大学博物館紀要』に書いた「描かれた三角縁神獣鏡―『千とせのためし』所収狩谷棭斎旧所蔵品について―」である。

徳田氏がこの論文を書いたのも全くの偶然であった。氏の勤務する宮内庁書陵部の堀を挟んだ向いに国立公文書館があり、昼休みに折からの展示会に立ち寄った時に、ケースの中に、図譜に描かれた三角縁神獣鏡を見つけたのである。こんな所で専門分野の史料を発見するとは、まさに青天の霹靂だったと云う。

『千とせのためし』は古筆、古画、古器物を掲載した考古図録で、この図録を編集したのは水野忠央である。忠央は紀州藩の家老であったが、禄高は和歌山県新宮の三万五千石で大名格。井伊直弼と組んで、第十四代将軍に紀州藩主の慶福を送り込むのに成功した人物である。

私が日本金属工業に勤めていた頃、何かと目をかけて下さった常務の水野誠氏は新宮水野家の直系で水野忠央の曾孫に当たる。そんな縁にもびっくりするが、図録は銘文から見て棭斎所有だったものに間違いない。

水野忠央は古典籍の蒐集家であり、水野忠邦から入手した可能性もある。彼は同族の水野忠邦に刺激されて中央政界に出た人物であるから、忠邦が大老の頃、接触があった可能性は高い。あるいはこの図録は三好汝圭の筆になるものかも知れない。ただし、私は近藤正斎が紅葉山文庫の時代に書かせておいた図録が、紅葉山文庫経由で忠央に伝わった可能性も捨てきれない。

いずれにせよ、今回の徳田誠志氏の発見により、棭斎の三角縁神獣鏡に図柄がほぼ一致する同型鏡が奈良県の佐味田宝塚古墳から出土していたことが判明した。この佐味田宝塚鏡は破片であり、完全な銘文を知りえないが文様は五神四獣鏡に属し「同笵鏡」と見なせるほど良く一致している。ただ、奇妙なことに、銘文の書き出し位置が両者でちょうど百八十度ずれている。良く見ると鈕孔の位置も異なる。これが三角縁神獣鏡の特徴だというのが、三角縁神獣鏡を国産とする立場なのであるが、それにしても奇妙である。

しかも現在の様式推移の研究から言えば、三角縁神獣鏡の様式としては最古に属する。三角縁神獣鏡について魏鏡説を採る立場から言えば、まさに卑弥呼に下賜された鏡である。

棭斎はそれをお見通しだったのであろうか。

森下章司氏は、棭斎や懐堂の動きに、大正期の富岡謙蔵に先立つ「古鏡年代推定法の萌芽」があったかも知れないと述べている。これも嬉しい。

化粧のルーツを訪ねて（八）

第五話　古代インドの化粧文化

鈴木守

はじめに

わが国では古くから、本朝（日本）、震旦（中国）、天竺（インド）の三つの文明圏を考えていた。既に第三話と第四話で、本朝と震旦の化粧史を述べたので、天竺の出番となった。ところが、古代インドの化粧に関する書籍に接することは少なかった。幸い、コーソン著の『メークアップの歴史』に、古代インドの化粧が散見できたので、この書を中心にまとめることにする。

最初に、古代インド史の概要を述べる。

歴史書では、前二五〇〇年頃に興ったインダス文明から始まり、この文明はアーリア人の侵入により前一五〇〇年頃に滅亡。その後、アーリア人はカースト制度を設けて北部インドを支配。前三一一年頃にマウルヤ朝が起こり、前三二六年のアレキサンダー東征の混乱に乗じて統一国家を形成したが、前一八七年に滅亡。紀元後には、クシャン朝（四五?～二五〇?）が勢力を得、次いで、グプタ朝（三二〇?～五二〇?）が台頭。後、混乱の時代を経て七世紀前半にバルダナ朝が勢力を得た。

この間の文化史をみると、バラモン教に続いて、前六、五世紀頃に仏教、ジャイナ教が創宗。クシャン朝時に大乗仏教が生じ、当時、ガンダーラ美術が興隆。五～七世紀のアジャンタや四～一二世紀のエローラ石窟院には宗教美術が残されている。ヒンズー教はグプタ朝期に成立した。

第1節　古代インドの化粧資料

一、グプタ朝前後の化粧

この時代の女性は、唇をラック染料で赤く染め、ステイックでアイラインを引き、顔や体に香膏を塗って赤、白、黒で模様を描き、さらに足の裏をラック染料、足の甲をサフランで赤く彩った。花嫁は結婚の当日、入浴後、軟膏を体に塗り、薫煙を焚いて髪を乾し、アイラインを引き、顔に紋様を描いた。最後に、第二話で述べた呪ないの印を母親に施して貰った。

上流階級の若者たちは、髪をカールさせて房状に整え、白い花の冠を被り、額に赤いヒ素（鶏冠石）を塗り、アイラインを引いてキンマで唇を赤く染めた。顔、胸、腕には模様を描いた。

現在でもヒンズー教徒にとって、ガンジス川における沐浴は聖なる行事である。沐浴の風習はグプタ朝期には重要な儀式となっていた。例えば、王の朝の行事は、香り水を満たした浴槽に入り、侍女に特別な練り物を髪に塗らせ、サフランや白檀の香り水を頭に注ぐことで始まった。浴後は体に麝香やサフランの練り香を塗り、食後にキンマの葉を噛んで口臭を消した。

美術全集に目を通すと、六世紀頃のアジャンタ壁画にある男女の図はいずれも、上半身は裸で首飾りや腕輪を装着し、アイライン様に目の周りをくっきりと描いてあった。また、六〇〇年頃の菩薩図は両眉を繋げ、当時の眉化粧を暗示していた。

二、クシャン朝前後の化粧

この時代には、中東から輸入した香料や軟膏、彩色化粧料、浴用パウダー、清涼剤などが販売され、「健康と体力維持には、化粧料を使って体のケアをすることが必要であり、目薬は目を美しくみせ、目の痛みや痒みを止め、視力を増す」と信じられていた。

男性たちは起床すると、蜂蜜や香辛料で作った練歯磨で磨き、クシラの樹皮を浸したミルクで目や口を洗った。次いで、目薬をさしアンチモンで目の化粧をし、最後にキンマの葉を噛んで呼気に香りをつけた。また、浴前に油を髪に擦り込み、体に油を塗ってマッサージして内湯、浴槽、井戸あるいは川で水浴し、浴後、香膏や香粉をデオドラントとして塗った。

婦人たちは、歯を白く保つか、蓮の花のような赤に染め、ラック染料で顔や肩に模様を描き、唇を染めた。匂いづけする香樹香草の種類は季節ごとに異なった。既婚女性は「夫の長寿を願って装身具を飾り、髪を魅力的に整え、サフランやウコン、鉛丹、点眼剤を日常的に使うことが義務」とされていた。

美術全集に化粧中の婦人図、鹿野園の釈迦説法図および涅槃図のレリーフがあった。婦人図は二世紀のアフガニスタン・ベグラームの出土品である。婦人は左手に鏡を持ち、右手で口紅を塗っていた。別の女性には頬に日輪様の紋様が刻まれていた。後二者は、二～四世紀頃のガンダーラ美術品で説法図の仏弟子や涅槃図の比丘は髪を剃っていた。

三、マウルヤ朝前後の化粧

前四世紀頃の王は沐浴の時、床屋に毛抜きやカール鏝で整髪させたが、一般的には、蒸し風呂もあったが、水槽や井戸、川で水浴し、鰐の歯や布に浴用剤あるいは賦香した籾殻粉や粘土を付けて体を洗っていた。

当時は、白檀などの香りをつけた黒、赤、黄色の顔料をスティックにつけてアイラインや頬の模様を描いた。また、顔にクリームや粉をつけ体を彩り、指頭や足の裏をラック染料で染めることもあった。

男性は顎鬚を整え胸と陰部を剃毛し、腹部は模様状に剪毛した。女性は髪を長く伸ばし、蜜蝋や香油を塗って櫛や指で梳き、鏡がなければ水を満たしたボウルを用いた。また、爪を伸ばす風習もあった。

この時代は無仏像の時代であり、前一世紀のシュンガ朝時のストゥパに半裸の男女が浮き彫りされていたが、化粧を示す絵画彫刻はみられなかった。

四、インダス文明の遺品

モヘンジョダロの公衆浴場から磨き砂ややすり、青銅鏡、剃刀が発見され、この遺跡出土の遺品を挙げると、内側が黒くなった化粧壺を始め、顔料が付着した小皿やスティックも発掘され、顔料は方鉛鉱、ランプの煤、緑土、赭土、鉛白であった。美術全集には、腕輪、胸飾り、腰帯をつけた女性裸像と口髭、顎鬚を整えた男性像などが掲載されていた。宗教的なものでは、護符らしい印章や性器崇拝を思わせる像も出土していた。

第2節　古代インド化粧の印象

古代インドの旅はインダス文明の時代まで遡ることができたが、道すがら東アジアとは異なった雰囲気を味わった。ところで、本書の主題は『化粧のルーツ探索』である。しかし、インド化粧の証拠は、日本や中国のように旧石器時代まで辿ることができなかったので、東アジア、特に中国との相違に焦点を当て、化粧文化成立を考える糧としたい。

中印の文明は、それぞれ独自に発展したことを多くの人たちが認めている。このような相違を生む要因として、いみじくも玄奘は『大唐西域記』に「天竺は三方海に囲まれ、北は山が多くパミールもあり、気候は暑く湿度が高い」と著していた。かような地勢や気象条件が別個の文化を確立させたのであろう。このことを念頭において、

松山氏の論文も引用しながら中印両文化の様子を比較したいのだが、資料が十分揃っているわけではないので、感ずるままの印象を記すことにする。

中国の化粧風習との相違を特に感じたのは、ボディ化粧と沐浴風習であり、この両者の相違は温帯と亜熱帯という温度環境に基づいている。両化粧風習を化粧文化として捉えると、前者は装飾文化、後者は衛生文明にまで発展させて考察したくなるが、その論考に先立って、中印における化粧様式の相違について整理しておこう。

一、中印における化粧文化の相違

ボディ化粧と沐浴とは別に、中国とは異なった化粧に、アイライン、頬の模様化粧、カール鏝による整髪、香樹香草による香り化粧があった。

① **眉目化粧**。中国では眉化粧が際立っていたが、インドでは目の周りにアイラインを引く化粧が目につき、この化粧はインダスの頃からマウルヤ朝以降も続けられていた。インドにおけるアイラインの成立には、第二話で述べた第三眼のように目に対する思い入れか目を強調させ、それが美の演出に進化したように思える。今一つ、プロ野球の選手がデイゲームの際、目の下を隈取るのと同じように、日照の強いインドでは目を保護する目的でアイラインを施したのではなかろうか。

② **頬の化粧**。中国では、ほゞ円形に赤く頬紅を施すのが専らだが、インドでは頬に模様を描く化粧法を採用していた。例えば、ベグラーム出土のレリーフには日輪様の模様が頬に刻まれていた。この化粧について、松山氏は「頬の模様化粧を頬粧ティラカと呼び、紀元前に図案化した暗緑色で葉形の頬粧が始められ、紀元後には鶏頭を象った深紅の模様、新月状の黒い紋様などがあり、それ以外に、白、赤、紫、橙、黄色で彩色した模様もあった」と述べている。模様化粧は頬だけでなく、体にも施していたので、別項で再度、取り上げるであろう。

③ **髪化粧**。頭髪の形状は人種によって異なる。黄色人種は直毛、白人は波状毛、黒人は縮毛の傾向にある。インド人は波状毛が多いようであるが、大仏像は縮毛の姿が多い。ゴータマ・シッダルタの髪がどうか知る由もないが、釈迦説法図や涅槃図などの僧侶や比丘が剃髪していたので、僧侶の剃髪は仏教創始期から始まっていたのであろう。

整髪文化の面をみると、直毛の美を強調しているのが平安美人たちであり、直毛人の文化圏では、櫛で梳く文化が成立していたが、波状毛のインド社会では、マウルヤ朝の王やグプタ朝の若者にみられるように、鏝でカールさせる文化が育くまれた。

④ **香り化粧**。古代インド人の化粧風習では、匂いづけが欠かせなかった。香油、香粉、匂い水のほかにも、香樹香草で口臭を消すなど香料をふんだんに使っていた。かように香り化粧が盛んになった背景に、香樹香草を得やすいという植生上の条件があった。

さらに、多くの香料には殺菌効果があるので、衛生的な目的で使用したことも考慮すべきである。ともかく、この地はバクテリア繁殖に至適な高温多湿の気象環境にあるから、香料を使って衛生的な生活を送ることが大切だったと思う。特に、古代インド人にとって香料配合の知識が教養の一つとされていたといわれているので殊更である。また、香料の衛生的な効果は宗教的な浄化の思想を育くみ、焚香や焼香の風習を導いたと考えられる。

二、装飾文化と彩色文化

インド人の彩色化粧は、黒いアイラインと赤い口紅に加えて顔や肢体に多彩な色で多様な形の紋様を描き、さらに指頭や足底まで赤く彩っていた。それに対して、中国では、顔を白く塗って眉の黒と頬や唇の赤を際立たせることを基本とする顔面中心の彩色化粧であった。

このような両文化圏における化粧様式の相違が何故生じたのであろうか？　この点について、身体装飾と彩色化粧の関係について考察する。

身体装飾の文化は、美的感覚を土台にして、衣装、化粧、装身具によって培われる。両文明圏の装身文化を比較すると、中国は温帯圏にあるので、衣服着用による衣装文化が主流をなし、化粧と装身具が従属する。一方、裸身で過ごす亜熱帯のインドでは、化粧と装身具による装身文化が主役で衣装は脇役となる。したがって、両文化圏における装身文化の違いが彩色化粧の様相に波及したと考えられる。

とはいえ、両文化圏においては、気象環境、民族的な皮膚色や美的感覚が異なるうえ、化粧面積の大小もあるので、これらの諸要素が相互に絡み合って、両文明圏固有の化粧様式を形成してきたのであろう。

三、沐浴風習と保健衛生

中国の資料には沐浴に関する記録は少なかったが、インドでは、各時代ごとに沐浴とそれに伴う化粧習慣などが記載されていた。この違いは気象環境の相違に基づくものであり、インドでは涼を求め、かつ汗を流すために水浴は欠かせない風習であったはずである。そのことはともかく、沐浴は清浄化粧の基本であり、清浄化は保健衛生の概念を培うものである。したがって、水浴風習は清浄料を始め、スキンケアを目的とした基礎化粧品や薬用化粧品を生み出したに違いない。

古代インドにおける水浴風習をみると、インダス文明の時代に公共の浴場が設置され、そこでは磨き砂を使って垢落としをしていたので、この時代には、単に汗を流すだけの水浴から清浄を目的とした水浴が行われていた。

マウルヤ朝以降になると、沐浴に際し、香油、香粉、

匂い水を盛んに用いるようになり、歯磨や目薬を使い、油を塗って体をマッサージするようになった。香料や歯磨の使用は衛生面の強化であり、目薬やマッサージは健康維持を目的とした行為であるから、基礎化粧品や薬用化粧品の萌芽を思わせる。

また、保健衛生目的の化粧とは別に、芳香と同様、洗浄から浄化の思想が分化し、ヒンズー教が創始されたグプタ朝時には、王が斎戒沐浴するようになり、浄化の沐浴が宗教的儀式に取り入れられ始めた。やがて、これが大衆にも伝播し、現在もなお、ヒンズー教徒は聖なる川・ガンジスで沐浴を行っている。

四、むすび

第四話までは、"文化は遺伝する"との考えを強調したが、中印の化粧文化比較論を考察するに及んで、隔絶された文明圏の間では、気象環境の相違によって異なった文化が成長し、化粧文化もそれぞれ独立的に発展することを痛感した。

気象環境は、気温や日照、人種的な形質、生理に影響を及ぼすとともに、動植物、バクテリアの分布にも関係する。こうした自然現象とは別に、人文的領域では、衣食住を始め、美的情操、保健衛生、宗教・思想などに関与して、それぞれの生活環境に順応した、独自の諸文化を構築するようになった。化粧文化についても、この大枠の中で、個別的な独特の様相を形成することを、中印の化粧様式をみて知ることができた。

今後、ルーツ探索の旅を続けるに当って、文化は遺伝するという立場と文化は環境によって支配されるという二面を考慮することが要求されるであろう。

五、補遺

① ティラカ。第二話でティラカは額飾と同義語のように扱ったが、頬の紋様もティラカと称していたので調べると、ティラカには額飾と頬粧のほかにも多様な意味に使われ、原義は「ゴマ粒のようなもの」であった。

② インドの臙脂。中国の臙脂は紅花起源の染料だったが、インドの臙脂は漢方の生臙脂でラック介殻虫由来の染料であった。

③ キンマの口紅。前出「クシャン朝の頃、唇をキンマで染めた」ことに触れる。キンマは赤い色素を含んでいないので、第一話の檳榔子咀嚼を思い出して欲しい。檳榔子をキンマで包んで噛んでいると、檳榔子のタンニンが赤色々素になる。また、バリ島ではキンマをバセといい、檳榔子咀嚼もバセと呼んでいるので、唇をキンマで染めるというのは、檳榔子咀嚼に由来するものであろう。したがって、インドにも檳榔子咀嚼風習が波及していたことを思わせる。

参考文献

R・コーソン著。石山彰監、メークアップの歴史、ポーラ文化研究所、一九八二

世界美術全集2、古代初期、平凡社、一九五六

同全集11、インド・東南アジア、一九五七

松山俊太郎、古代インド人のよそおい三～十一、化粧文化、五～十三号、一九八一～八五

鈴木守、まんじ、一〇八～一〇九号、二〇〇八

（次回は古代ヨーロッパの化粧文化）

社告(内規)

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同士の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二

加入者名　まんじ

化粧のルーツを訪ねて（九）

第六話　古代ヨーロッパの化粧文化

鈴木守

はじめに

古代四大文明発祥の地として、ヨーロッパは入っていないが、現代の化粧は欧風を基盤にしているので、古代ヨーロッパの化粧文化について、一通り目を通しておきたい。

ヨーロッパが歴史に登場したのは、前三〇世紀頃、エーゲ文明が胎動し始めた時からである。エーゲ文明はクレタ文明（前二〇～前一六世紀）とミケーネ文明（前一五～前一〇世紀）に分けられる。ギリシャ本土に前一〇世紀頃からポリスが成立し始め、前六世紀から前四世紀頃に古代ギリシャの最盛期を迎えた。前四世紀後半にマケドニアが台頭。アレキサンダー（前三三六～前三二三在位）が大帝国を出現させたが、前三世紀初期にヘレニズム諸国に分裂した。

一方、イタリア半島では、前八世紀頃、ローマ人が都市国家を造ったが、エトルリア人の支配下に入り、前六世紀に独立し共和制国家を確立。前一世紀には地中海地域を制圧し、帝政国家に移行した。最盛期のローマ帝国は、東はメソポタミア、西はヒスパニア、南はエジプト、北はブリタニアに至る間を抑え、ほぼ二世紀の間、繁栄を誇っていたが、三九五年に東西に分裂し、衰退の道を辿った。

第一節　古代ローマの化粧文化

古代ローマの化粧風習は、オビディウス（紀元前後）の『化粧品』やプリニウス（二三?～七九）の『博物誌』など多くの書に記録されている。当時、ローマの人たちは化粧を二つに分けて、美を維持するアルス・オルナトリクス（コスメティック）と醜いところを隠すアルス・フカトリクス（コモティック）としていた。

1　庶民たちの化粧

ローマ盛期には、市民階級の人たちも化粧していた。彼らのスキンケア対策の基本は入浴であった。水道が完備されたローマでは、古くから公衆浴場が設置され、浴場跡に遺された化粧用具には、化粧瓶、手鏡、カール鏝（こて）、毛抜、水盤などがあり、市民たちは入浴時に肌掻きで垢を落とし、顔や体にオイルやペーストあるいはパウダーを塗り、パックを施し、軽石で歯を磨いていた。カラカラ浴場（二〇〇頃設立）には二三〇〇人の浴客を収容できたという。

クリームや乳液に関する記載に接していないが、肌の艶と滑らかさ、色白、シミ、ソバカス、皺、吹出物、ニキビ、日焼け、ヒビなどのケアに使った美肌料の処方が数多く書き残されていた。

アイメーク用の化粧品に眉墨、マスカラ、アイライナーがあり、黒色顔料として方鉛鉱、スティビウム（アンチモン）、媒を用い、付け睫毛や付け眉毛もあった。顔のメーク用に白粉、口紅、頬紅があり、白粉には白亜または鉛白、紅類にはリトマス苔などの色素を使用したが、後には辰砂や黄土も登場した。

髪の化粧は洗髪から始まり、鏝でカールさせ、ポマードで整髪した。仮髪や脱毛剤、毛抜を使うこともあった。香料の普及は前一世紀頃からで、地中海貿易を独占するとともに、オリエントからの輸入が容易になったため、香粉や香油の使用が盛んになった。

2　貴婦人たちの化粧

ローマ全盛時の貴婦人たちは、糠風呂かミルク風呂で湯浴みした。ミルク風呂はネロ（三七～六八）の妃ポッペアの発案でロバの乳を使い、彼女が旅行する時は、雌ロバを連れて行ったという。

貴婦人たちは、前出のスキンケアや彩色化粧は当然のこととして、歯茎の色を保つために薬を使い、抜歯して象牙の入歯で飾り、手足の爪はヘンナ（指甲花）で染めた。中には、静脈に沿って青くなどり白く見せるような化粧をし、黒髪の婦人たちは、髪をブリーチして金髪やブロンドに染めた。ローマの頃は、まだスプレーや蒸留アルコールがない時代だったから、市民たちは香油や香粉で香り付けしたが、貴婦人たちはメードに香料を口に含ませ、スプレー替わりに噴霧させて匂いを付けた。

当時の飾り板や版画に貴婦人が大勢のメードに囲まれて化粧している姿が描かれており、文書にもその様子が詳しく記述されている。婦人を囲むメードは化粧係で、

彼女たちはマッサージ、爪の化粧、髪結い、メーク、入れ歯、香りの噴霧などを分担し、ほかに手鏡を捧げ持つ係、団扇で煽ぐ係もいた。中には二十数人のメードに化粧させた貴婦人もいたそうである。

3　初期ローマ時代とエトルリア人の化粧

古代ローマ人の化粧は前三世紀頃、南イタリアに住んでいたギリシャ人の化粧を見習って始まったといわれており、前二世紀頃から染毛剤、つけ髪、香料、白粉、紅、その他の美肌料を使い始めた。

だが、それ以前にエトルリアの文化（前六～前三世紀頃）があり、タルキニア出土の墓室壁画に描かれた婦人像を始め、出土した壁画、彫像、化粧箱などからエトルリア人の化粧を窺うと、眉を描いてアイラインを引き、頬紅と口紅を塗り、顔全体に白粉を施していた。髪を編み、髷（たぼ）を揚げたヘアスタイルも見られた。

第二節　古代ギリシャの化粧文化

前節で述べたように、ローマ人は前三世紀頃、ギリシャ人の化粧を見習って化粧を始めたといわれているので、古代ギリシャの化粧について資料を集めた。

1　ヘレニズム時代以降の化粧

紀元後二世紀には、ギリシャの医師・ガレノスが「美白剤に昇汞を塗っている女性は、水銀が体に貯留し、若いのに皺だらけになり、足元がふらつき身震いしている。ソマリンは顔の黒子やシミを消してくれるが、水銀より毒性が強く、皮膚がカサカサして萎縮する」と水銀製剤の毒性を警告していた。ソマリンは水銀化合物と記されている。なお、ガレノスはコールドクリームを創始したといわれている。また、一世紀頃のディオスコリデスの書には、ソバカスやニキビを除く処方が記載されていた。

紀元前、ヘレニズム時代には文化の中心がオリエントへ移ったためか、化粧に関する資料は少ない。『ミロのビーナス（ヘレニズム晩期）』をみても結髪の様子を窺えるだけである。しかし、この時代には東西の文化交流が高まり、東方から香料が盛んに輸入されたので、ギリシャでも香油や化粧品の需要が増えてきた。当時使用された香料には、シナモン、カシア、ナルド、乳香、サフラン、水仙、ミルラ等々があった。

2　ギリシャ盛期の化粧

男尊女卑のギリシャ社会では、女性の化粧、特に彩色化粧は風紀を乱すものとして否定的であった。そのため、ギリシャの化粧は専ら、遊女たちの風習だったといわれている。彼女たちは頬全体と唇に茶がかった紅を塗り、眉や睫毛を黒く染めるスティックには、コールやランプ

の煤を用い、付け眉毛も使われていた。

しかし、一般市民が化粧しなかった訳ではない。例えば、前五三〇年頃の少女像の化粧は、眉が黒く、目尻上部に赤茶色、下部に翡翠色のアイシャドーが塗られ、上瞼が緑色のアイライン、唇と頬が赤く彩られている。また、前五世紀頃の評論に「夏外出すると汗で頬から首にかけて赤い皺を作り、髪が頬に触れ白粉で毛が白くなる」と書かれているので、紅白粉を施していたことは確実である。上流階級の婦人たちの中には、頬や手あるいは爪は勿論、乳首や尻を彩ることもあったそうである。白粉には鉛白、殻粉、白墨が使われ、前三世紀頃の墓から鉛白の塊が発見されている。しかし、鉛白の毒性を知っている女性は、普段の化粧には殻粉を使っていた。頬紅や口紅はクリーム状で、海藻や桑の実、苔類、紫貝の色素が使用され、後には辰砂や鉛丹も使われた。

目や毛髪の化粧については、「目は美や知性を現す」と信じられていたので、上下の睫毛を黒く染め、卵白と樹脂で固めて目を強調した。現在のマスカラである。髪は香油で整え、白髪染や染毛剤を使い、鉛とヒ素を混ぜた香膏で脱毛した。

古代ギリシャ人は、保健衛生を目的とした化粧には寛大であり、例えば、質実剛健を旨としていたスパルタでさえも、女性は就寝時にビューティマスクと称して殻粉でパックし、起床するとミルクで洗顔したという。一般的には、最初に歯を磨き、洗い粉や油を使って入浴し、マッサージ後に香油を塗っていた。歯磨きには、軽石やタルク、金剛砂、珊瑚などで作った歯磨粉を使った。

香油はギリシャの化粧史にしばしば登場する。前六〇〇年前後の頃のアテネでは、既に香料フィーバーが起こり、時の政治家ソロンが香油の市販を禁止したという。香油に使う油は胡麻、アーモンド、椰子の実などから採り、良質のオリーブ油は未熟な実を砕き重石を乗せて圧出させた。油の保存には塩または蜂蜜、酢、茴香（ウイキョウ）を加えた。前出プリニウスの『博物誌』には、羊毛脂ラノリンの製法が記されていた。

3　ギリシャ神話とエーゲ文明

ギリシャ神話では「アフロディテが化粧を発見し、ヘレンが普及させた」と語り、昔話では「ギリシャ最初の化粧料は東方から運ばれたバラ水だ」という。神話や昔話とはいえ、古代ギリシャ創成期に化粧風習がなければ成立しない物語である。

さらに古くエーゲ文明の時代に至ると、後期のミケーネ文明期には、編んだ髪を腰付近まで垂らしたチリンス出土の宮女図があり、前期のクレタ文明時代の壁画や石棺の装飾画にも化粧の跡が見られる。内、クノッソス宮殿の壁に描かれた女性像・通称『パリジェンヌ（前一五〇〇頃）』には、黒くくっきりと引かれた眉とアイライ

ン、紅を指した唇ならびに結髪が認められる。

第三節　まとめ

1　ヨーロッパ化粧の発祥

古代ギリシャ文明は、エーゲ文明を継承しているといわれているので、ギリシャの神話や昔話はエーゲ時代の物語を伝承しているに相違ない。ギリシャ人たちは、クノッソスやチリンスの美女たちの俤をアフロディテやヘレンに託して化粧を創始させたのであろう。こんな空想はさておいて、ヨーロッパ最古の化粧の証拠はクノッソス宮殿壁画『パリジェンヌ（前一五〇〇頃）』であった。彼女は眉とアイラインを黒くくっきり描き、唇に紅を指し、髪を結っていた。

初期ギリシャの伝承では「最初の化粧料はバラ水」としている。バラ水の正体を確定できないが、この伝承はギリシャ人たちの香り化粧の始まりを示唆している。また、イタリア半島では、エトルリア人が前六世紀頃、ローマ人が前三世紀頃から化粧を始めたとされている。かようにして、ヨーロッパにおける化粧文化の歴史が開かれたのである。以下、古代ヨーロッパの化粧史を、それぞれの化粧ごとに振り返ることにする。

2　彩色化粧

クレタ文明期に始まった口紅は、ギリシャ・ローマ時代も廃れることなく続けられ、頬紅と白粉はギリシャで始まり、前二世紀頃にはローマに普及した。最初の頃には、紅に桑の実や苔類の色素が使われていたが、後には辰砂（硫化水銀）などを使うようになった。辰砂の使用は恐らく、ローマがヒスパニアを支配した前二世紀以降のことであろう。スペインは有数な水銀産出国である。白粉の素材は鉛白、殻粉、白亜であった。

眉とアイラインの化粧はエーゲ文明期から始まり、ギリシャやローマの女性たちに引き継がれた。黒色顔料は煤やコールなどであった。ギリシャ人は緑色のアイライナー、赤茶色や翡翠色のアイシャドーも施した。ほかに、マスカラや付け眉毛、付け睫毛はギリシャで始まった。

上流階級の婦人たちの化粧では、ギリシャの婦人は手、爪、乳頭、臀部に色を与え、ローマでは、静脈上を青く彩ったり、抜歯して入歯で飾る婦人もいた。

3　毛髪の化粧

結髪はエーゲ時代に始まり、その後の絵画・彫刻にみられる女性も髪を結っており、ローマの浴場跡にはカール鏝や毛抜きが遺されていた。

ギリシャ・ローマの人たちは洗髪し、鏝でカールさせ、香油やポマードで整髪した。白髪染めやヘアカラー、脱

毛剤、仮髪も使われ、金髪やブロンズが好まれた。

また、ギリシャ・ローマの男性彫像には、整えられた頭髪や鬚髯（ひげ）が刻まれていた。

4　清浄化粧と基礎化粧

公衆浴場が設営されていたローマでは、市民階級の人々も盛んに入浴したが、ギリシャ以来、古代の人たちは入浴に際して、歯磨粉で磨き、肌掻きで垢を擦り落とし、顔や体にオイルやペースト、パウダーを塗って皮膚の健康を保った。スパルタではミルクで洗顔したといわれており、ローマの貴婦人らは糠風呂かミルク風呂で湯浴みをした。

基礎化粧に関する資料は少なく、スパルタとローマにおけるパックが目に止まったが、クリームや乳液、化粧水を使用したという記録はなかった。しかし、ギリシャの紅類はクリーム状とされ、二世紀にはコールドクリームが創始されているので、クリームを基礎化粧に使っていたのではなかろうか。

パックとクリームとは別に、薬用化粧品に類する処方が数多く認められた。例えば、ギリシャでは、乳香を溶かした油を汗止めに使い、ローマでは、美白料や肌の艶や滑らかさを保つための美肌料のほかに、皺、吹出物、日焼けなどを防ぐ処方もあった。

5　香料と香油

大航海時代のパイオニアたちは、香料を求めて生死を賭けた冒険に旅立っており、ヨーロッパの化粧史は香料抜きには成立しない。香料使用の歴史は初期ギリシャのローズ水が端緒となり、前六〇〇年頃には、香油が発禁になるほどの香料フィーバーが起こったという。ヘレニズム期には東西交流が盛んになり、ローマ時代には地中海貿易を独占して香料入手が容易になったため、香油の消費が増大した。

未だ、エタノールの蒸留法を知らなかった古代の人たちは、香料を香油や香膏、香粉の形で消費した。これらの賦香料は匂い付けだけでなく、ヘアオイル、ポマード、スキンオイル、ボディパウダーなどとして、整髪やスキンケアを目的に利用された。香油や香膏に使う油脂は、オリーブ、胡麻、アーモンド、椰子、羊毛などから採取し、保存料として塩または蜂蜜などを加えた。

ローマ盛期に至ると、有閑マダムたちは香油や香粉による香り付けに飽き足らず、スプレー替わりに口から噴霧させて匂いを付けていた。

6　化粧品の安全性

古代ヨーロッパでは、鉛や水銀を使用していたが、それらの安全性について認識していた。例えば、ギリシャの女性は、白亜や殻粉よりも化粧ノリがよい鉛白粉を使

っていたが、知識階級の婦人たちは、普段は殻粉の白粉を使い、余所行きの化粧に鉛白粉を施した。また、二世紀には美白剤・水銀の毒性が指摘され、ローマ盛期の婦人たちは、染毛剤・サポによるかぶれを経験していた。鉛と水銀による障害は慢性中毒であり、サポによるカブレは光過敏性の皮膚炎と想定される。

あとがき

ヨーロッパの化粧はエーゲ時代から始まり、ローマの頃までには、現代人が行っている化粧の殆どを完成させていたが、ローマ帝国が滅亡すると、化粧の中心は東方のビザンチンに移ってヨーロッパでは衰退の道を辿り、中世の暗黒時代となった。その後、ルネッサンスにより化粧文化も復興し、近代から現代にかけて、ヒューマニズムや技術革新の波に乗って、現代の化粧は品質の強化を果たしつつ、市井の人たちも化粧を享受できる体制を構築してきた。結論的にいえば、現代化粧文化の最大の進歩は『化粧の大衆化』であろう。

参考文献

J・パンセ、I・デランドル著、青山典子訳、美容の歴史、白水社、一九六一

春山行夫、おしゃれの文化史、平凡社、一九七六

春山行夫、西洋の化粧文化史、化粧品のすべて、国際商業出版、一九七八

R・コーソン著、石山彰監修、メークアップの歴史、ポーラ文化研究所、一九八六

鈴木守、コスメトロジー入門、幸書房、一九九三

（次回は古代中近東の化粧史）

還暦からの考古学（十八）

三角縁神獣鏡（さんかくぶちしんじゅうきょう）に対する考え方の変化（その十二）

中山喬央（たかひろ）

まえおき

最近は毎年、四月に開催される岡山大学での考古学研究会総会に出席しています。そこで気が付いた事は吉備の国が関東・東海・畿内から見た場合、出雲・周防長門・四国・九州への玄関口になっているという事でした。ということは逆に考えれば吉備の国は、九州・四国・周防長門・出雲から畿内・東海・関東への交易の重要な中継点になり得る。更にその背後には朝鮮半島と中国大陸の存在があり、日本列島に金属器文化が入って来た弥生時代中期（二四〇〇年前～二〇〇〇年前）にも、要となるような立地条件を有していた事に気が付きました。そして総会の前後には事前調査の上、該地の訪問先を予定して探訪するのが愉しみになっております。

今年は倉敷考古館を訪問しました。

先ず圧倒されましたのが岡山市金蔵山古墳出土の豊富な鉄製品と、備前市丸山古墳出土の長さ17.8cmの碧玉製超大型管玉でした。そこで思い出したのは、一九九九年三月に岡山市教育委員会が報告書を刊行した『宗形神社古墳』出土の長さ26.4cm幅7.7cmの超大型で碧玉製といわれている管玉のことでした。

次いで滋賀県守山市新庄出土の高さ43.2cmの流水文銅鐸と、同じく高さ28.4cmの倉敷市種松山出土の銅鐸及び銅戈・銅剣・銅鏃・筒形銅器・三角縁獣文帯三神三獣鏡・馬形帯鉤等の青銅製品が目をひきました。

そこでこれら青銅製品の鉛同位体比を検討し、どこの鉱山の鉱石が使用されているのか検討してみようと思い立ちました。

青銅製品鉛同位体比分析

1、銅鐸―伝滋賀県守山市新庄出土

この銅鐸は先ず梅原末治「銅鐸研究の一新資料」『考古学雑誌』23―4により紹介された。その概要は次の通りである。

「さて大坪正義氏の銅鐸の出土地を究め得る據所となったのは、摂津灘の名家として知られた吉田家に所蔵する聆涛閣集古帖に載せた拓本である。～うちに一枚の銅鐸の乾拓本が収められている。私は友人の岩橋小弥太氏からこの事を聞いて、且つその説明に「寛政十一年二月日江州野洲郡新庄村掘得于土中寶鐸其数四也為全備者此一器而已　同二月廿七日　中井蔵書記（印）」とあることから、失われていた近江に於ける古い銅鐸出土の事実を知り得る点に先ず興味を覚えたが、後其の拓影の写真を手にするに及んで、鐸が流水紋の式に属し、而も身の上辺に絵画帯があり、それが大坪氏の鐸とすべての点で符節を合わせる様に一致し同じ遺品の乾拓たることを認め得て、更にその感を深くした。～かくて大坪氏の鐸は寛政十一年（1799A.D）に近江国野洲郡で出た四個の鐸中の完全な一個の伝世品であったことが分明する。その出土地たる野洲郡の新庄村がいまの孰れの地に当るかはなほ確かめ得ないが、同じ野洲郡の小篠原からは明治十四年に大小十四口の銅鐸の発見があり、また相近い蒲生郡鏡山村からも明治二十三年二個の鐸が出ているので、この事実はそれ等と相まって、同地における鐸の濃厚な分布を示すものであり、更に同じ鐸の遠く離れた伯耆と近江とに於ける存在が考古学上新たに注意を与えることになる。～（昭和八年三月十日稿）」

次いで三木文雄「第2章、流水文銅鐸研究略史」『流水文銅鐸の研究』9頁には、次のように掲載されている。

「昭和八年鳥取県泊から銅舌を伴った流水文銅鐸が出土し、さきの大坪・吉川両氏旧蔵銅鐸と同様、舞およびび身の横帯に絵画のあることが明らかになり、三者あわせて同范の事実が梅原博士によって確かめられ、さきの恩智、神戸の同范流水文銅鐸について流水文銅鐸に別の同范一群が明らかにせられ、同范についての関心を流水文銅鐸がさらったかの観がないではなかった。かかる流水文銅鐸同范のことと共に流水文銅鐸のもつ絵画についての関心がつながれて、森本六爾、藤森栄一などによって、それらの絵画が弥生時代農耕の問題とふれあうことへの追求ともなった」

更に同論考265頁「同范（A）2」には

「兵庫県桜ヶ丘出土1号、鳥取県泊村出土、滋賀県新庄出土（大原氏蔵）、辰馬氏蔵の2個の銅鐸（旧収品は吉川氏旧蔵、新収品は尼崎氏旧蔵）等の銅鐸。五個の銅鐸がさきにふれた絵巻物風の原始絵画が描かれている中横帯で仕切られた上区に両面ともd型流水文をおき、一面の横帯下にはc型流水文を四重ねし、他の面には二重

ねのc型流水文と、その下にd型流水文を置くという諸性質に合わせ、法量の近いことの上、その施文に細部の一致があって同范とみてあやまりない」

と記している。

その上「図版」『流水文銅鐸の研究』には図版5滋賀県新庄出土銅鐸、図版6滋賀県新庄出土銅鐸拓本、図版7鳥取県泊出土銅鐸、図版8鳥取県泊出土銅鐸拓本がそれぞれ表示され（9～15頁）、その考え方の正当性を主張している。

一方、佐原真著『銅鐸の考古学』でも、図版6流水紋（ママ）の銅鐸として掲載され、9頁「滋賀県の銅鐸」のなかで「守山市新庄の銅鐸は、神戸市桜ヶ丘1号鐸ほか合計4個の兄弟をもち、流水紋様の間に、狩り・脱穀・トンボ・カニ・シカ・トカゲ・スッポンなど多くの生物が描かれていて面白い」と紹介されているのである。

ところが梅原は、『考古学雑誌』23―4で、泊と新庄の銅鐸について次の様にも述べているのである。

「第一図はそれを如実に示す為に作成した両者の拓影の比較図である。向かって右の大坪氏の鐸に比して、左の今度の泊の鐸は通じて流水紋等の線が鮮明であり、肩部の双孔の位置の違った点を併せて、一見両者の与える感じは同じくないが、然も仔細に比較していくと、両者の図文がすべての点で同一で、且つ処々にある甲張りの線までも合致している。～

此の両者の合致からする同じ笵から出たとする見解に対して、鐸身の肩部にある双孔の位置なり大小の相違が一つの疑点となるように見えるし、また図示しなかった他の面では、大坪氏の鐸に比して泊の方の複合鋸歯紋帯から下縁までの間のやや短い事が同じ見地から考慮される。さりながら前者については、同部の双孔が本来鋳造の際、中型を雌型に持たせかけ、その間隔の均整を保つに役立たせた所謂型持（かたもち）と認むべきものであって、あまり表面には出ていないが同じ装置は支那の漢以前の鐘にも既に存している。従って此の種型持は同じ溶笵を使用しても鋳造の度毎に違うことは考えられるわけであり、更にいま奈良の玉井半次郎氏の許にある一銅鐸の示すところ、笵の幅規を共に鋳出して此の部分に銅滓の重積したものがあり、かかる場合では中型は当然一個毎に破壊して取り除かれたと見るべく、また下方の銅滓部は切断してはじめて完形をなすものである。されば型持の位置の違いは一層自然なことになり、なほ身下方の少許の相違の疑問も解けるのである。」

この新庄銅鐸の鉛同位体比指数は206/204・18.933、207/206・0.8308、208/206・2.0859である。（以下206/204、207/206、208/206を省略）

異なった場所、異なった時期に造り出す能力を有していた事の証明を高めるものになるのではないかと考えることができる。

更に泊銅鐸の鉱石供給地を考えると、すでに「日本列島にも青銅器時代はあった」『まんじ』110号431頁で述べたように、72長崎県対馬・対州鉱山と、426朝鮮半島慶尚北道・将軍鉱山の双方の指数に関連があり、共伴した舌2点がそれぞれ次に説明するように一つは朝鮮半島、今一つは日本列島の鉱石を使用していることが明らかなことから双方の鉱石が混合された可能性も高いと考えている。

それでは舌についての鉛同位体比の検討結果を述べる。

D—40LT鳥取泊舌（大）19.303・0.8182・2.0643

これは414慶尚北道・第一蓮花鉱山の19.324・0.8172・2.0271と206/204・207/206が符合し、418慶尚北道・第一蓮花鉱山の18.981・0.8295・2.0627とは208/206が符合するので、朝鮮半島の鉱石を使用していることは間違いないと思われる。

D—40ST鳥取泊舌（小）18.457・0.8459・2.1078

これは42石川県・倉谷鉱山の18.456・0.8464・2.1069と三指数共一致し、この鉱山の鉱石が使用されたことは確実である。

更に付言すれば、銅鐸とそれに共伴して出土した舌の

これは418慶尚北道・第一蓮花鉱山の18.981、0.8295、2.0627と43石川県・尾小屋鉱山の18.772、0.8356、2.0921を等分に混合した18.876、0.8325、2.0774が符合し、日本列島と朝鮮半島双方の鉱山の鉱石が使用されている。

これに対し、同笵銅鐸とされている鳥取県・泊銅鐸の鉛同位体比については三回の測定が行われ、その分析値の正当性が立証されている。すなわち『考古学雑誌』68—1、44～48頁に先ずD—40Aとして18.558・0.8433・2.1045、更にAとは別の錆を大きな本体からとったD—40Bの18.567・0.8430・2.1052と、小さい破片から採取したものによるD—40C 18.564・0.8434・2.1052が、三者共完全に一致しているものである。

しかしこの泊銅鐸の指数と先に述べた新庄銅鐸の指数とは明らかに異なっており従来言われてきたような、同じ坩堝の溶液で、同じ鋳型で同時に作成されたものでないことは明らかである。

この結果は先に『まんじ110号』431～432頁でも述べたように、同笵銅鐸といわれてきた三重県・神戸銅鐸、大阪府・恩智銅鐸と兵庫県・倭文銅鐸の鉛同位体比指数が一致しなかったことと合わせ、従来同笵といわれてきた青銅製品が相次いで鉛同位体比指数が異なる結果を示している事になる。之は同じ坩堝から同じ鋳型で青銅製品を大量生産していたという従来の考え方が否定される事と共に、当時の青銅工人の技術が、全く同様のものを

鉛同位体比指数がそれぞれ違ったという分析結果から、銅鐸の様に高度の作成技術を必要とする青銅製品と、舌とか簡単な青銅工具などとは、製作者とか製作現場が異なっていた可能性が生じたと考えている。このことについては、更に類例の増加をまって再検討することといたしたい。

歴史にIFは禁物であるが、若し鉛同位体比指数のこのような結果を知っていたら梅原末治はどのような結論をだしたのであろうか。おそらく同笵説は提唱しなかったのではないかと考える。

ここで誤解があるといけないので銅製錬について簡単に述べる。先に『まんじ111号』126～128頁「銅製錬」で説明したように、通常鉱石を採掘した山元で、焙焼した後、荒吹を繰り返し、コンパクトな荒銅としたものを、北九州・安永田遺跡、畿内・東奈良遺跡のようなところに運んで、真吹きして精銅としたものを使用していたと考えている。

2、銅鐸—倉敷市・種松山出土

17.749・0.8756・2.1636

これは201遼寧省・青城子鉱山の17.836・0.8745・2.1384と407京畿道・富平鉱山の17.299・0.8992・2.2237及び427慶尚北道・将軍鉱山の18.415・0.8513・2.1108

を等分に混合した17.850・0.8750・2.1606が符合し、遼寧省から朝鮮半島にかけての鉱山の鉱石が使用されていたことになる。

3、銅戈—倉敷市・広江・浜出土

18.793・0.8374・2.0988

これは43石川県・尾小屋鉱山の18.772・0.8356・2.0921と符合する

4、銅戈—岡山県笠岡市・生江浜出土

17.884・0.8707・2.1570

これは2、銅鐸と鉛同位体比の指数が近接し、同様に201・407・427の鉱山の鉱石を等分に混合した17.850・0.8750・2.1606と指数が符合するので、遼寧省から朝鮮半島にかけての鉱山の鉱石が使用されていたことになる。

5、平形銅剣—出土地不詳

18.006・0.8654・2.1456

これは53神岡・茂住鉱山の18.012・0.8656・2.1430と指数が一致し、神岡鉱山グループの鉱石が使用されていたことは明らかである。

6、銅鏃A—岡山市竹原佐古山古墳出土

18.066・0.8647・2.1391

これは5、平形銅剣と指数が近く、同様53の18.012・0.8656・2.1430と符合するので、神岡鉱山グループの鉱石が使用されていたものと考えることができる。

7、銅鏃B—岡山市竹原佐古山古墳出土

17.869・0.8711・2.1510

これは4、岡山県笠岡市生江浜出土の銅戈と同様に、遼寧省から朝鮮半島にかけての鉱石を使用している。201・407・427の平均値17.850・0.8750・2.1606が符合するからである。

8、銅鏃C—岡山市竹原佐古山古墳出土

17.873・0.8718・2.1590

これも7、銅鏃Bと三つの指数がほぼ一致しており、遼寧省から朝鮮半島にかけての鉱石が使用されている。

9、筒形銅器（大）—岡山市沢田金蔵山古墳出土

18.227・0.8583・2.1204

これは45神岡・栃洞鉱山の18.185・0.8570・2.1184と符合し、神岡鉱山グループの鉱石が使用されている。

10、筒形銅器（小）—岡山市沢田金蔵山古墳出土

17.733・0.8754・2.1639

18.174・0.8604・2.1237

この指数は11三角縁三神三獣鏡の数値と符合し、同様神岡鉱山グループの鉱石を使用したものである。

今度は『MUSEUM』370より岡山県下出土の青銅製品六点を分析した結果を述べます。

M—33方格規矩鏡—岡山県山陽町・吉原六号墳出土

206/204・18.205、207/204・15.640、208/204・38.646、207/206・0.8591、208/206・2.1228（以下206/204、207/204、208/204、207/206、208/206を省略）

これは52神岡・円山鉱山の18.102・15.571・38.508・0.8602・2.1273と61兵庫県・生野鉱山の18.370・15.613・38.711・0.8499・2.1073を等分に混合した18.236・15.592・38.609・0.8550・2.1173と符合する。日本列島産の鉱石使用である。

M—34六乳仙人獣帯鏡—岡山県山陽町・吉原六号墳出土

18.083・15.586・38.528・0.8619・2.1306

これは54神岡・茂住鉱山の18.082・15.572・38.544・0.8612・2.1316と一致し、当該鉱山の鉱石が使用された確率が極めて高い。

M—35四乳鳥獣画像鏡—岡山県山陽町・用木一号墳出土

これは2、岡山県倉敷市種松山出土の銅鐸と指数がほぼ一致しており、遼寧地方から朝鮮半島にかけての鉱石が混合使用されていたこととなる。

11、三角縁三神三獣鏡—出土地不詳

18.176・0.8616・2.1265

これは49神岡・栃洞鉱山の18.177・0.8568・2.1180と52神岡・円山鉱山の18.102・0.8602・2.1273の平均値18.139・0.8585・2.1226と符合し、神岡鉱山グループの鉱石が使用されていたことになる。

12、馬形帯鉤A—出土地不詳

18.217・0.8583・2.1216

これは9岡山市沢田金蔵山古墳出土の筒形銅器（大）と三つの指数が近接し、同様45神岡・栃洞鉱山の18.185・0.8570・2.1184と符合するので、神岡鉱山グループの鉱石使用ということになる。

13、馬形帯鉤B—出土地不詳

18.212・0.8593・2.1207

三つの指数は12馬形帯鉤Aと一致しており、同様神岡鉱山グループの鉱石使用である。

14、馬形帯鉤C—出土地不詳

18.214・15.699・38.783・0.8619・2.1293

これは42石川県・倉谷鉱山の18.456・15.621・38.885・0.8464・2.1069と53神岡・茂住鉱山の18.012・15.591・38.600・0.8656・2.1430の平均値18.234・15.606・38.742・0.8560・2.1249と符合する。

M—36弥生式小形仿製鏡—岡山県山陽町・用木二号墳出土

17.781・15.560・38.459・0.8751・2.1629

これに最も近い指数は201遼寧省・青城子鉱山の17.836・15.598・38.141・0.8745・2.1384であるが、208/204と208/206が異なっている。しかし朝鮮半島には208/204が38.8台を示したり、208/206が2.16台の鉱山が存在するので、遼寧省の鉱山と朝鮮半島未測定鉱山の鉱石が使用された可能性が高い。

M—37弥生式小形仿製鏡—岡山県山陽町・便木山八号土坑墓附近出土

17.795・15.574・38.507・0.8752・2.1639

この指数は前出のM—36と極めて近く、従って同様遼寧省と朝鮮半島双方の鉱山の鉱石が使用されているものと思われる。

M—41三角縁仏獣鏡—岡山県一宮町・天神山一号墳出土

18.119・15.639・38.661・0.8631・2.1337
これは58神岡・持壁鉱山の18.099・15.600・38.611・0.8619・2.1333と一致する。従って神岡鉱山の鉱石使用ということになる。

青銅製品の時代考証

1、滋賀県守山市新庄出土銅鐸

佐原眞『銅鐸の考古学』22～23頁によるⅡ外縁付鈕式Ⅰに該当し弥生時代中期前葉である。

2、倉敷市種松山出土銅鐸

佐原眞『銅鐸の考古学』22～23頁によるⅢ扁平鈕式銅鐸である。これも1、と比べやや新しいが、同じく弥生時代中期で中葉に入る。

3、倉敷市広江・浜出土銅戈

銅戈は弥生時代銅製利器の一つであるが、当該遺物は残存部分長2.4cmの細形銅戈である。

尚銅戈については『日本考古学用語辞典』311頁に「弥生時代銅製利器の一。両刃を持つ剣状の身部があるが、茎は、身とほぼ直角に近く斜行する広い関に、短く取り付けられている。～中国の古代利器である戈と同じ用法で長い柄をつけた勾兵の利器である。形式の上から狭鋒（細形）、中鋒（中広）、広鋒（広形）各銅戈にわけられている。」とある。

ここで銅戈鋳型出土遺蹟及び多数の銅戈を出土した遺跡を紹介する。

『日本古代遺跡事典』707頁

「大南遺跡」

「弥生時代中期～後期の集落跡で、小銅鐸の出土した遺跡。春日市大字小倉に所在。春日丘陵のほぼ中央にあり、標高12mの三叉状に広がる平坦な丘陵上に位置する。～小銅鐸は一次調査でV字溝から出土し～このほか銅鋤先、鉄製品、広形銅戈鋳型、石器、玉類がある。～」

「小倉新池遺跡」

「弥生時代後期の青銅器一括埋納遺跡。春日市大字小倉1582―1番地に所在。～1967年に開発中に銅戈25が発見され、後に2本が回収され、実数27である。これらの出土状態は不明であるが、数量や刃部の一方の遺存状態から、ほかの埋納遺跡と同様と考えられる。中細形式1のほかは中広形式のもので、後者はよく似た形態で同一の鋳型になるもので、茎に文様が鋳出されたものがある。～」

これらのことを踏まえれば、当該銅戈の年代は、弥生時代中期～後期ということになる。

4、生江浜銅戈

類例の少ない鉄戈形銅戈。法量・形態は全長（鋒先より内先）34.6cm、関幅13.4cm、鋒幅約3.4cm、厚さ0.4cm、内（茎）長1.3cm、同幅1.6cm、ほぼ全面青緑色の錆。笠岡湾干拓地の旧海底を農地にするために暗渠工事の溝を掘っていて発見。時期については前者同様、弥生時代中期～後期というところが無難と考える。

5、出土地不詳・平形銅剣

法量・形態　残存長34.8cm、突起部幅残8.1cm、鋒幅（中央）4.4cm、厚さ（関周辺）1.5～2mm前後、重量257gのものである。

銅剣については『まんじ』111号128頁下段で中細形のものについて所見を述べたが、平形については触れなかった。

『古代出雲文化展』42頁挿図23に平形Ⅰ式として、香川県・瓦谷遺跡出土のものを、弥生中期中葉Ⅲ期としていることと、愛媛県・垣添遺跡出土のものを、平形Ⅱ式、弥生時代中期後半Ⅳ期としていることを参考として、弥生中期中葉から中期後葉と考えたい。

6・7・8、岡山市竹原の佐古山古墳出土A・B・C銅鏃

『考古学辞典』719頁には銅鏃につき次のように記載している。

「青銅の鏃である。～銅鏃を身の断面形によって分類すると①菱形を呈し鎬のあるもの、②中央に背または袋を持つもの（有翼鏃）、③扁六角形の中央部がくぼんだもの（無茎鏃にかぎる）、④三角形を呈するもの（三角鏃）があり、まれに⑤円形（素焼式鏃）、⑥長方形（鑿頭式鏃）なども見られる。

銅鏃としては、②有翼鏃が古く出現した型式で、殷代にも例がある。④三角鏃は戦国・漢代に発達したもので長沙出土と伝えられる銅鏃には鏃身と矢筈との間を細い銅棒で連続させたものもある。③は日本の弥生式時代の銅鏃の特色をなし、古墳時代にも少数の例をみる。①は日本では弥生式時代から古墳時代にかけて顕著にみられる。⑤⑥は古墳時代の銅鏃として特殊なものである。」

出土地は岡山市竹原佐古山古墳竪穴石室内である。資料6（銅鏃A）は、逆刺を持ち、関部分に段を有する、いわゆる篦被の形である。前述①の篦被形である。資料7・8（銅鏃B・C）は逆刺からすぐ茎に続く形で、資料6よりも先の断面がやや薄い。前に説明した①菱形を呈し鎬のあるものである。

共に時代は古墳時代前期と判断される。

9、10、金蔵山古墳筒形（つつがた）銅器2点

『日本考古学用語辞典』296頁には筒形銅器につき次の様に記されている。

「前期古墳から発見される円管状の銅器をいう。長さ12～15cm、径2～3cm位の中空の筒形をした鋳造品で、中央に節があり、また二段に各々四つの長方形の透かし文もあり、一端はやや開いている。剣柄とか、槍の石突とか装飾的な器物の柄などの説もある。なお筒形の石製品もあり、碧玉岩などで作られている。」

また福永伸哉の『三角縁神獣鏡の研究』では、258頁表24に岡山県金蔵山古墳を始めとして四十箇所の日本出土筒形銅器一覧を掲載し、まとめとして261頁で

「筒形銅器出土古墳の被葬者像としては、政権内の旧勢力からも新興勢力からも連携工作を受ける首長、新興勢力の肩入れによって各地に誕生しつつあった新興首長、さらにはそうした政治変動期において新興勢力の軍事力の一端を担った有力層たちといった、多様ではあるが政権内新興勢力との連携という共通項を持つ人物が浮かび上がるのである。」と述べている。

出土状況は全長約165mの前方後円墳の後円部上の中央と南よりに平行した二つの竪穴式石室のうち、中央石室の副室の小竪穴石室内にあった四個の埴製盒子内に筒形銅器（大）が、盗掘の激しかった中央石室内で筒形銅器（小）が発見されている。同古墳は鉄器と埴輪列を明らかにした前半期古墳であり、当該遺物は双方共、古墳時代前期のものと判断される。

尚筒形銅器（大）は、『三角縁神獣鏡の研究』259頁、図46山田良三氏による筒形銅器の分類では第一類亜式に、筒形銅器（小）は、第二類亜式となる。

11、三角縁獣文帯三神三獣鏡

奈良県・新山古墳と群馬県柴崎古墳で同笵鏡といわれている鏡が出土した、出土地不明の三角縁神獣鏡である。

なお獣帯三神三獣鏡につき樋口隆康は、『三角縁神獣鏡 新鑑』171頁で第四類として中国製舶載鏡最後のものとし、福永伸哉は『三角縁神獣鏡の研究』101頁で、内区に右向きの獣形を持つ波文帯、獣文帯三神三獣鏡と、左向きの獣形となる獣文帯三神三獣鏡の間に、舶載鏡と仿製鏡の境界を置くのが妥当であると考えていると述べている。

その一方で樋口隆康は、『三角縁神獣鏡 新鑑』159頁で、仿製の三角縁神獣鏡の鏡式は獣帯三神三獣鏡が大半を占め、それ以外では唐草文帯三神二獣鏡、唐草文帯二神二獣鏡、銘帯三神三獣鏡が少数あるとし、三角縁獣帯三神三獣鏡の中国製と仿製鏡との相違点について、「獣帯が中国製鏡では、銘の入った四個ないし六個の方格を圏帯内に等間隔に配し、その間に禽獣文や魚文を入れ、各像の間に小乳を置いている。この禽獣文の数は、十二、八、六個の三種である。ところが仿製鏡においては、十個の乳の間に十個の獣形を置いているのが一般的である。数の違う事と、乳の形が目立って大きいこと、あるいは銘の入った方格のないことなどが中国鏡との相違点である」と述べている。

ここで新山古墳と柴崎古墳出土鏡について考えてみる。

新山古墳出土鏡は、樋口隆康の『三角縁神獣鏡 新鑑』図版五六上、鏡式111三角縁獣帯三神三獣鏡、奈良県・新山古墳（11号鏡）22.0cmが該当する。

更に『三角縁神獣鏡 新鑑』151頁において、―鏡式111では、前出の新山古墳出土十一号鏡と共に群馬県高崎市蟹沢古墳出土鏡を挙げているが、この蟹沢古墳は高崎市柴崎に存在して、正始元年鏡が出土した柴崎古墳と名前は違うが同一古墳である。―鏡式111～113について、樋口は「いずれも獣帯に十個の乳があり、走獣、飛鳥、双魚、象、蟾蜍などの図文の間におかれている。これらの鏡式は仿製鏡との区別がつけにくいグループである。」と結んでいる。

新山古墳は古墳時代前期の前方後方墳であり、蟹沢（柴崎）古墳の方は、柴崎蟹沢古墳として『日本古代遺跡事典』161～162頁で、「径12m前後の小型円墳だったらしい～。副葬品に舶載の正始元年銘三角縁神獣鏡、仿製三角縁神獣鏡と仿製内行花文鏡2の計四面の鏡があり～」と記載され、こちらでは舶載鏡ではなく、仿製鏡とされている。

このように三角縁神獣鏡には舶載鏡と仿製鏡の双方があるという考え方を有する学者・研究者の、舶載鏡と仿製鏡の区分についての論点は大変あいまいなものであるが、それはそれとして、これらのことを総合的に判断すれば、この鏡の年代は、古墳時代の前期後半とするのが穏当なところだと思う。

12～14、馬形帯鉤3点（出土地不明）

帯鉤は戦国時代より漢代にかけて盛行した帯金具。青銅製のものが一般的であるが、～朝鮮慶尚北道氷川琴湖面からは虎形帯鉤一、馬形帯鉤一が出土し、我国でも岡山県吉備郡新庄下・榊山古墳から同種の馬形帯鉤六個が出土していると『考古学辞典』605～606頁にあり、『日本考古学用語辞典』265頁では、「帯具の一。おびがねであり留金具である。帯先の輪などにかけて、帯をとめる鉤のある部分。馬形のつくものは馬形帯鉤という」と記載している。

ここで『日本古墳大辞典』249頁に記載されている榊山古墳について紹介する。

「岡山市新庄下の江田山の北麓に近い台地上、造山古墳の前面にある径35mの円墳。～主体部は高野槇製の木棺が使用されていたことは明らかであるが詳細は不明である。遺物は主体部から馬形帯鉤六の他、神獣鏡一・銅製龍文金具二、鈴、砥石が、墳丘から須恵器、陶質土器が出土しているが、千足古墳出土品と混在した為、確実

を期しがたい。五世紀前半の築造と推定される。」とある。

よって馬形帯鉤の時期は何れも古墳時代中期のものと考えたい。

今度は『MUSEUM』370の岡山県資料について時期を検討する。

M33～M37　岡山県山陽町出土資料

M37便木山8号土壙墓附近出土、弥生式小形仿製鏡について『山陽町史』58頁には「弥生時代の終りごろにつくられた便木山土壙墓群では、墓壙内に枕石を用い、鏡や玉・鉄器などが副葬されたものがあり、墓の作り方や副葬品に格差がみられるようになる。」とあり、M37は弥生時代終末期の時期と判断される。

次いでM36用木2号墳出土弥生式小形仿製鏡について考える。

『山陽町史』88～89頁には、「三世紀の後半から四世紀初頭にかけて地域的政治集団の首長の墓として、それまでの弥生時代の墓とは隔絶した位置・規模・形態・内容を備えた墓制として古墳があらわれる。～山陽町域の初現的古墳として用木古墳群・十二号墳が出現する。～次いで不定形な高塚である用木2・4号墳があらわれる。～2号墳は長方形墓壙内木棺直葬、方格規矩鏡一の副葬である。」と述べている。

また『山陽町史』103頁には「～方格規矩鏡は、用木2号墳、第一主体部、平底木棺の被葬者、頭近くからも出土している。これらの鏡はすべて漢式鏡で、中国から日本列島にもたらされたのち、古墳に納められたものである。」と書かれている。これは弥生式小形仿製鏡という前述の考えとは明確に異なるものであり、用木2号墳よりの出土鏡が一面しかないことを考えれば、ここでまた研究者間で舶載鏡と仿製鏡につき意見の相違が見られたということになる。

この鏡の年代は弥生時代終末期と考えられる。

M―35、用木1号墳出土、四乳鳥獣画像鏡

『山陽町史』88～89頁に次の様に掲載されている。

「～世代を追うように引き継ぐ3号墳、及び1号墳になってはじめて墳形、埋葬主体、副葬品とも定形化された古墳として形式を整えてくる。～1号墳は、径31m、盛土の高さ2.7mで、割竹形木棺を内部主体としている。尚方作獣帯鏡一、刀一、鉄斧二、鈍一、銅鏃三七の副葬である。このように用木古墳群は、四世紀の初現的古墳から五世紀の定形化した古墳へと世代を継ぐように築かれている。～四世紀代において山陽町域のこの地に在地首長の確立が見られるのである。」

また『山陽町史』99～100頁では「用木1号墳からは、尚方作画像鏡が割竹形木棺の被葬者頭部から出土している。面径は16.3cmを測り、銘帯は「尚方作竟真大巧上有仙人不知老　渇飲玉泉飢食棗兮」とある。この鏡が漢の尚方とよばれる官営工房で非常に大きく巧みに製作されたものであるとし、理想の生活、すなわち神仙思想を描写している。内区に青龍・白虎等の獣を描いた銅質鋳造共に良好な鏡である。」と述べている。

この鏡の時期は古墳時代前期のものと思われる。

M―33方格規矩鏡、M―34六乳仙人獣帯鏡、共に吉原6号墳出土

『山陽町史』89頁には、「～四世紀代において山陽町域のこの地に在地首長の確立が見られるのである。この時期の古墳として～北西部の西山地域には、吉原古墳群があり、吉原六号墳は、全長45mの前方後円墳で、二面の鏡を出土している。」

『山陽町史』103頁には「吉原6号墳からは上方作鳥獣鏡、方格規矩鏡の二面が出土している。～これらの鏡はすべて漢式鏡で、中国から日本列島にもたらされたのち、古墳に納められたものである。」と掲載されている。二面の鏡の時期は何れも古墳時代前期が該当する。

最後にM41天神山1号墳出土の三角縁仏獣鏡について考える。

この鏡は樋口隆康の『三角縁神獣鏡　新鑑』図版六下段に掲載されている鏡式10三角縁獣帯三神三騎獣鏡、径23.0cmである。

これは樋口隆康が中国製の舶載鏡としているものであるが、時期は古墳時代前期中葉となる。

まとめ

青銅製品の鉛同位体比測定数一十点を時期毎に区分すると、弥生時代は中期から始まり終末期まで七点を数えました。そのうち遼寧省・朝鮮半島の鉱石を使用したもの四点、朝鮮半島・日本列島の鉱石を使用しもの一点、日本列島の鉱石使用のものが二点と、遼寧半島を含む朝鮮半島からの鉱石使用に顕著な動きを感じました。理由は楽浪郡との交易で、見返りは錫鉱石、布、塩等ではなかったかと考えます。これが古墳時代に入りますと、十三点中、遼寧省・朝鮮半島の鉱石を使用したものは三点に留まり、日本列島の鉱石を使用したものが十点と圧倒的に優位を示すようになります。

ここで特に述べておきたいことは、『山陽町史』102～103頁で「尚方作画像鏡を含む、これらの鏡はすべて漢式鏡で、中国から日本列島にもたらされたのち、古墳に納められたものである。」といわれている鏡四面の鉛同位体比指数が、用木2号墳出土の弥生式小形仿製鏡（方

格規矩鏡）を除く他の三面は何れも中国の鉱山の指数と符合しなかった事です。すなわち210・211甘粛省・鄧家山鉱山のそれは、A式図関連の指数は近いが、B式図関係の指数が合わず、逆にB式図関係の指数が近い、218浙江省・五部鉱山のそれはA式図関連の指数が合わず、両者共に208/206の数値が下回っているので合金しても指数が符合することはありません。また208/206の数値を含むA式図関連の指数が最も近い215河南省・桐柏鉱山のそれは、B式図関連の数値が大きく離れているのです。

このことは、前述の弥生時代中期前葉の、同笵といわれてきた伝守山市新庄出土銅鐸と、鳥取県泊銅鐸の鉛同位体比が全く違った指数を示したことからも明らかなように、弥生時代中期前葉の日本列島における青銅工人の技術水準が、学者が同笵と判断するような全く同じ文様を持つ青銅製品を製作する能力を有していた事の裏付けとなるものであり、その技術が日本列島内で伝承されていて、古墳時代に漢式鏡の製作が日本列島内で行われていた事の証明になると考えます。

この結果、吉備の国は弥生時代中期以降、古墳時代中期にかけて、楽浪郡を通じての朝鮮半島・大陸東北地方との交易関係を保ちながら、次第にその交渉相手のウエイトを日本列島内各地に移しつゝ、日本列島金属文化の普及発展に寄与する度合いを高めていったということが考えられるのであります。

参考文献

梅原末治「銅鐸研究の一新資料」『考古学雑誌』23―4日本考古学会、一九三三年。

佐原真『銅鐸の考古学』東京大学出版会、二〇〇二年。

樋口隆康『三角縁神獣鏡新鑑』学生社、二〇〇〇年。

福永伸哉『三角縁神獣鏡の研究』大阪大学出版会、二〇〇五年。

間壁忠彦・間壁葭子「鉛同位体比測定青銅器の資料解説」『倉敷考古館研究集報』19、一九八六年。

馬淵久夫・平尾良光「鉛同位体比法による漢式鏡の研究」『MUSEUM』370東京国立博物館美術誌、一九八二年一月号。

馬淵久夫・平尾良光「鉛同位体比からみた銅鐸の原料」『考古学雑誌』68―1日本考古学会、一九八二年六月。

馬淵久夫・平尾良光「倉敷考古館提供の資料による青銅器の原料産地推定」『倉敷考古館研究集報』19、一九八六年。

馬淵久夫・平尾良光「東アジア鉛鉱石の鉛同位体比」『考古学雑誌』73―2、日本考古学会、一九八七年。

三木文雄『流水文銅鐸の研究』吉川弘文館、一九七四年。

『古代出雲文化展』島根県教育委員会、一九九七年。

『山陽町史』山陽町史編纂委員会、一九八六年。

鏡（その10）

中山喬央（たかひろ）

ガラス

まえおき

ガラスは漆喰、粘土の焼物、合金の次に人類が火を使って利用・考案した素材です。地球上には天然のガラスである黒曜石があり、輝きと黒色の透明感ある道具や装身具の材料、あるいは鋭利な刃物とか鏃として、石器時代には世界中で貴重な交易品でした。

しかしながらガラスの起源は明確ではありません。ただし『まんじ』112号119頁上段で記述したヴェスヴィオ火山爆発の際、科学的調査を試みて有毒ガス死したプリニウス（二三～七九年）の『博物誌』のなかに、ガラスの起源として「昔フェニキヤの行商が、地中海の東海岸シリヤ・ベリウス（イスラエルのベールス）河口に近い海岸で炊事をしようとしてそのあたりを見回したところ、海岸は白い砂浜で石一つ見当たらず仕方なく持っていたソーダの塊をもって窯を作って炊事をしたところ、その火力のため硝石が溶けて砂と溶け合って、はからずもガラスができた。これがガラスのできた初めてのことである」と記載してあります。

けれども炊事をする程度の火力ではガラスの生成は不可能であると考えられ、この説は架空のものとして永年考えられてきました。ところが一九二六年に、W.L.Monroはこの事実を確かめるために、砂とソーダを混合して、この上に薪をのせ点火し、二時間にわたって燃焼させた後、灰を取り除いたところ、砂はソーダとよく化合してガラスが出来ていました。この時火中にパイロメーターを挿入して温度を測定したら最高2,210°F（摂氏1,210度）を示し、十分にガラスが出来る温度でした。同じ実験を硝石を用いて行いましたが同様にガラスができましたのでMonroはフェニキヤ人の故実は架空のものではないとしました。

ガラスとは

現在最も一般的なガラスはソーダガラスです。その主成分は珪酸（SiO2）十ソーダ（炭酸ナトリウムNa2CO3）十石灰（炭酸カルシウムCaCO3）です。珪酸は石英など白くて堅い石や砂、アルカリとしてのソーダは草木灰や天然ソーダなどがあり、石灰はどこにでもある白い石で、火力としては一〇〇〇度以上の高温が必要です。

また鉛ガラスもありますが、これは中国で作られ、現在ではクリスタルガラスとして使われています。

話をもとに戻しますが粘土で作った容器を風通しの良い所で乾燥させますと、丈夫な入物になります。これを木材で焼成しますと耐水性を持つようになります。この土器を屋内で使用していて偶然火事に遭いますと、木質の灰のアルカリと石英質の砂が溶け合って光沢のある釉ができることがあります。このようにして素焼の土器に木質の灰をかけて燃やすとガラス質の釉が出来る事が判り、そこからガラスを作ることが考えだされたと思われます。

釉　薬

ガラスより先に登場した釉薬は、ガラスと同じ成分の皮膜でした。古くはB.C.4,000年頃の施釉凍石製ビーズがエジプトにあります。凍石やガラスと同じ成分で、土器のような粒子状の焼物であるファイアンスはガラスと馴染みやすいものでした。新王国時代、第18～20王朝（B.C.1,550～B.C.1,070年頃のコホル（アイシャドー）容器は、見事な青色のファイアンス製で、葦（あし）の束の形をしていますが、パン神（牧羊神）の笛をかたちどったものだともいわれています。

一方Flinderはエジプトで発見されたB.C.12,000年頃の施釉の石、B.C.7,000年頃の最初のガラス製品である青色の護符、B.C.5,000年頃の第一王朝時代の緑色の象眼ガラス、B.C.3,800年頃の第11王朝時代の黒と白の模様入りガラス護符などは、小アジアから来たものだといっています。

しかし土器に釉薬を掛ける場合は、粘土とガラスという収縮率の違う別素材の融合ということになりますので、それが実現したのはB.C.15世紀頃で、この時期に釉薬陶器が現れるようになります。B.C.1000年紀前半になりますと、釉薬レンガがイランやメソポタミアの建築に使われ盛行します。

釉薬にもアルカリガラス系と鉛ガラス系がありますが、釉薬陶器が普及するようになるのは、ローマ、パルティア（B.C.238年頃～A.D.226年）時代になってからです。

素材ガラス

ガラス単体の資料としては、イラクのB.C.23世紀頃の遺跡テル・アスマル、B.C.21世紀頃のエリドゥ遺跡から出土したガラス塊があります。素材ガラスとしてはB.C.15世紀頃の円盤状の青色の鋳造ガラスが、シリアのテル・ブラク遺跡や、トルコ沖の難破船から出土しています。

このような素材ガラスは、ガラスよりも低い温度で加工することが出来ましたので、ガラス技術のあるミタンニ王国（古代西アジアの王国、北メソポタミア・シリア地方にあり、前16～15世紀に最盛期を迎える。ヒッタイト・アッシリアに圧迫されて前13世紀後半滅亡）などが製作して、商品として流通させていたものと考えられます。

コアガラス

B.C.15世紀頃、芯（コア）を粘土や獣糞で作り、芯に本体となる色ガラスを巻きつけ加熱して均した上に別の色の細いガラス紐を巻きつけて容器等を作る、コアガラス技術が発生します。紐巻き装飾に加え後で表面を引っ掻くという技術がどうして誕生したのかは不明ですが、これがコアガラス特有の文様となります。酒杯として又香油入れとして使われています。

ミタンニ王国のヌジとテル・ブラクで出土したコアガラスの平均的な成分の構成比率は相似性が高く、管理された材料、製作法、装飾で、ガラス加工技術が確立されていたことを偲ばせます。

エジプトの第18王朝のガラス誕生には、ミタンニのガラス職人が参画したといわれており、B.C.13世紀半ば、イランのエラム王国のチョガ・ザンビルからは、長さ25.5cm、径1.7cmの白と濃紫色のガラスを交互に巻きつけた、コア技法によるガラス棒が出土しています。

モザイクガラス

ミタンニ王国のテル・リマー遺跡や、カスピ海沿岸のマルリク（何れもB.C.15世紀頃の初期ガラス遺跡）出土遺物のような文様パターンの場合と、ミタンニ王国東端のハサンル遺跡出土品のような、後世（B.C.1～A.D.1世紀・東地中海沿岸）の千華文（ミルフィオリ）坏の製作法ではないかと思われるような精巧な絵柄を表しているものがあります。このモザイクガラス技法は現代のガラス作家でも再現するのが難しい、高水準の技術を必要とするものです

鋳造ガラス

金属の鋳造に関連して始められたと思われる鋳造ガラスは、技法による制約もあって碗を主体とし、細首壺は少ししかありません。このように小型の特別な香油入れ

や酒坏から利用がはじまったガラスですが、徐々に日常容器へと大型化していきました。しかし紀元前後頃に吹きガラスが登場するまでは、製作に手間がかかり値段も高い王侯貴族の為のものであり、宝石のようなものでした。

ガラス工芸

エジプトにおいて長い歴史を持っていましたが、プトレマイオス時代（B.C.332～B.C.30年）特に盛んとなります。テブティニス出土の木製パネルには、右側に立つ王の後ろには、多彩な羽根模様の衣を身につけた王妃がおり、王はホルスの子供であるハルポクラテスとその母イシス女神に供物を捧げている場面が、ガラス象眼細工により表されています。

ガラスの成長

フェニキヤ人はB.C.700年頃と思われるアッシリア文字で書いたガラス製造法の記録を残していますが、このなかにガラスの着色法は書かれていますが、透明ガラスについては言及されておりません。無色透明ガラスは、B.C.200年頃になって漸く現れるようになりました。

Kisa（ドイツ人、1908年『古代ガラス』刊行）によりますと、B.C.300～20年の間に、吹棹の発明がフェニキアのガラス工によって行われたとあり、それは小アジアのシドンで発見された、B.C.30年頃のガラス用の吹棹によって裏付けされます。これは偶然にも現在使われている長さ1,200～1,500mm、太さ15～30mmの鉄パイプの一端にコブが有り、もう一方の端に吹口があるものと、ほとんど同じ形、同じ寸法だったようです。

その後、原料の精選にも次第に留意するようになり、ガラスは一層透明なものになり、A.D.8年前後には、殆ど透明に近いものが出来るようになりました。

ガラスという言葉は、英独語の発音が転訛（てんか）したもので、昔英人が何かの場合、身体に塗った青緑色の一種の塗料Glassからきたものだといわれていますが、我国の「硝子」という字は、ガラスの音を漢字に当てはめたものです。一方無色のガラスはクリスタル・ガラスと昔からいわれていますが、これは水晶のような、天然の結晶から由来したものです。

ローマのガラス

Alexander Serves帝（A.D.222～235）は、ローマのガラス製造業に課税をし、工場を特定の場所に限定しました。しかしConstantin帝（A.D.306～337）は、税金を免除し、ガラス工業を保護しましたので一段とガラス工業は栄え、この時代に贅沢品から家庭の必需品となったものが数多くみられるようになりました。

贅沢品としてはAlxander Serves帝の墳墓から出土し、

大英博物館にあるPortland Baseというガラス製の壺が有名ですが、美麗な色肌の各種ガラスを溶かし合わせて磨いたもので、金や銀の壺よりも高価なものでした。

その一方で、ガラスの透明さを生かして窓に利用しようする動きが始まります。LactantiusはA.D.290年「我々はガラスをはめた窓を通して物を眺めるのが理想だ」と書き残し、Jerome（A.D.331）は、大きな平板の上にガラスを流して、板ガラスを作ることを述べています。

ヨーロッパでは住居の明かり取りは、入口に最初に設けられたようです。しかし寒い時は内部で火を燃やしますので、煙り出し兼用で高いところに窓を開けるようになります。しかし雨や風の日は締めなければなりません。この窓に光線を通す工夫として、最初は雲母や麻布を嵌めていましたが、より明るさを求めた結果、ガラス瓶の底を切り取って壁に嵌めこむようになりました。

ポンペイはA.D.63年の地震で一部埋没し、その後75年のベスビアス大爆発で埋没した街ですが、一部に窓ガラスが使用されていたと報告されています。

ベニスのガラスとその前後

四世紀末にローマ帝国が滅び、東ローマと西ローマに分裂しますとローマのガラス工業は急速に衰退します。

東ローマ帝国はビザンチウム（コンスタンチノープル・イスタンブール）を首都として四世紀の終わりに発足しますが、ローマのガラス工芸はこちらに移り、以後五百年間続きます。

Justinian帝の六世紀に、ビザンチウムの寺院にスティンド・ガラスが入り、A.D.450年のSt・Sophia寺院では、透明な板ガラスを窓にはめ込みます。

この結果窓ガラスの使用は徐々に各国に広がり、スティンド・ガラスも次第に各地の寺院の窓に使われるようになり中世の終りごろになりますと、寺院の荘厳さを保つ上で必要不可欠なものとなります。

ガラスの製法はサラセン人によっても継承されますが、東ローマ帝国の衰退、十字軍の数度の編成と聖地への交通は、地中海貿易の促進と、それに関与したイタリア都市経済の勃興をもたらしました。それがベニスでのガラス工業の発生に繋がります。東ローマ帝国内のガラス技術者は西欧各地に移住しますが、特にベニスを選んだ人達が多かったからです。

この間Byernの Kroitel Teegelseeには、A.D.999年に僧院学生のためのスティンド・ガラスの加工工場を設けたとの記録があり、またドイツ人Mebitz Teophilusは1090年、彼の著書の中で、現在の窓ガラス製造方法に結びつく、円筒吹の技術につき記述しています。

その後ベニスのガラス工業は急速に発展し、その中心地となり、少なくとも四〇〇年間その地位を保ちます。

1279年ベニス・ガラス同業組合が結成され、1291年には、ベニス共和国の繁栄を維持するため、ガラス技術の漏洩を阻止しようとして、ガラス工場と技術者集団が全員ムラノ島に強制移動させられます。この結果、職工達は特別待遇を受けるとともに、移住は勿論、ガラス屑の持ち出しさえも死刑になるという厳しい監督下で生活する事となりました。

ガラス工場には数千人の職工が働いており、板ガラス、ガラス玉、びんやその他の芸術的ガラス器具を作っていました。磨板ガラスが作り出されるようになったのは1317年ですが、鏡も他所では見ることの出来ないものを作っていました。

そして16世紀には、無色透明なクリスタル・ガラスの完成とか、極薄の素地で様々な形を作り出す事に成功し、ガラス器具の技術は頂点に達します。

しかしその秘密保持もいつかは破れる時が参ります。鏡に銀引を行う技術は、1508年Dal Gallo兄弟によって発明されて以来ベニスが独占していましたが、フランスのルイ14世（1638～1715）の蔵相コルベールは、駐伊大使に密書を送りその技術を盗み出す事を命じます「これはルイ14世の意向を汲んでのことと思われます」。大使は夜陰に乗じて、熟練工を海路、本国に連れ帰り、フランスに銀引法が伝わります。これによってヴェルサイユ宮殿の一室に鏡の間（マンサール「1646～1708」の設計）が完成します。

その技術はドイツそして他のヨーロッパ各国に移ります。このようにして17世紀末葉から18世紀に入りますとガラス工業界におけるベニス・ムラノの勢力は急速に衰え始めます。ガラス工業がドイツ南部や、ボヘミアで発展していったのは、燃料としての木材が豊富で、その灰からのアルカリ源も求めることが出来たからです。この結果ボヘミアは透明ガラスの製造でベニスに対抗できるようになりました。

また坩堝で溶解したガラスを金属の盤に流して、大きな平板として鋳造板ガラスを作ったのはフランスのLucus Nehuで、1688年Cherburgの近傍で始めて成功し、これを磨いて磨板ガラスが出来上がりました。この方法は今日まで続いております。一方イギリスでは16世紀の末に、鉛クリスタルガラスが発明され、これを溶かす為の猫塲が開発されています。

あとがき

このように中近東からヨーロッパにひろがったガラス工芸品は金銀をもしのぐ、最高の品物として広がり、それに繋がるガラス製の鏡についても発展をとげるのです

が、東洋においては、古代から現代にいたるまで中国民族の美意識は玉を頂点として展開し、ガラスは玉の代用品としてのみ用いられ、その透過性や可塑性などを生かした独自の展開を遂げる事はありませんでした。

一方日本列島においては弥生時代に北九州及び丹後半島を中心に、ガラス璧・ガラス勾玉・ガラス管玉・ガラス小玉等が多数出土するようになりますが、これらは中国大陸から交易品としてもたらされたものだといわれています。

日本列島内でガラス製造が行われるようになったのは古墳時代からと考えられていますが、仏教が伝来した飛鳥奈良時代になりますと、装飾品としての首飾り用の玉だけではなく、ガラスは仏像や箱などの飾りにも応用されるようになります。一方正倉院御物の中には、ガラス器具製品が6点ありますが、これは中国を伝わって西域から輸入されたものであると考えられています。この時代には日本列島特産品の黄金・漆・水銀・翡翠等が、交易見返り品として登場したと思考いたします。

日本列島のガラス製造は奈良時代、朝廷で典鋳司に所属する雑工部が担当し盛行しますが、平安時代に入り、承平・天慶の乱（936～941年）を経て朝廷の勢威が衰えた為、朝廷に所属したガラス製造業は廃絶されます。

この結果ガラスの製造技術は忘れ去られてしまいますが、1549年（天文18年）フランシスコ・ザビェルが鹿児島に来てキリスト教布教の許可を得たとき、時計、鉄砲とともに、ガラス鏡と遠眼鏡を藩主に贈っています。

留意すべき事は、九州のキリシタン大名であった大友、有馬、大村などの諸侯が、ローマに送った少年使節が、1587年頃、ベニス・ムラノ島のガラス製造所を見学して、鏡四面と、ガラス器二箱の土産をもらっていることです。

またガラスの製法も1570年（元亀元年）に輸入され、元和年間（1615～1624年）には長崎で製造され、ついで大阪を経て天保年間（1830～1844年）には江戸まで伝わっています。鹿児島では島津齊彬が嘉永五年（1852年）集成館にガラス製造所を併設、これが薩摩切子に繋がります。

参考文献

石田惠子他『シルクロードのガラス』山川出版社、二〇〇七年。
上田清・宮崎雄一郎『新訂硝子』産業図書株式会社版、一九五八年。
近藤二郎『トリノ・エジプト展』朝日新聞社、二〇〇九年。

文化勲章に輝く

赤堀四郎博士の一生（十四）

松下魏三

戦争が終り、日本全国が荒廃している中から立ち直った赤堀博士と弟子たちは以前から手掛けていたタカジアスターゼの研究を再開し、その成分の酵素であるタカアミラーゼAの結晶化に成功した。また、生体の酵素の運搬や酸化反応に関係するミオグロビンやすい臓のなかから分泌されるホルモンであるインシュリンの結晶化について研究を進めた。

これらの結晶化の成功は日本の生化学の画期的な業績として高く評価された。

これらの研究成果により、大阪大学蛋白質研究所(註)において世界の学界から注目されていたX線構造解析が完成することになった。

二十二、酵素研究の進展

高峰譲吉博士は明治二十七年（一八四七年）小麦の黄麹をはやした培養液から高いアミラーゼ活性を発見し、消化剤としてタカジアスターゼと名づけた。

昭和十年欧州留学から帰国し、大阪帝大の助教授となった赤堀博士は、このタカジアスターゼの酵素成分に着目し研究を進めたが、研究は思うように進まず、戦争は年ごとに激しくなり中断しなければならなかった。

昭和十四年（一九三九年）には大阪帝大の教授に昇進した赤堀博士は太平洋戦争が始まるとともに戦時の研究に協力しなければならなくなり、毒ガスを防御するために青酸の吸収剤について研究をしていた。

（註）大阪大学蛋白質研究所

昭和三十三年四月一日、大阪大学に全国の研究者の共同利用研究施設としてタンパク質の研究所が発足し、赤堀博士は理学部長兼任のまま初代の所長に就任した。

二十三、生物科学の総合化と東京大学教授（併任）

赤堀博士は昭和二十二年（一九四七年）に大阪大学理学部長に就任して以来、手掛けてきたことは生物科学の総合化であった。これは身体の中に入った栄養物質がどのような中間物質に変り、どんな酵素によって次々に変化していくかということを研究する動的(註)生化学が戦後の先進国では爆発的に進んでいった。

このような時代に多くの学生に生化学について興味をもたせるためには、大阪大学に生物学科を設置する必要があると考えたのが博士の持論であった。そして生物学科の設置については医学部も賛成し、昭和二十四年（一九四九年）新制大学の発足とともに創設された。

この時赤堀博士が招いた奥貫一男教授によって植物の光合成の研究などが植物生理学の優れた業績として注目された。

当時はペニシリンやストレプトマイシンなどの抗生物質が次々と微生物から発見され、わが国の伝統的な酒や味噌・醤油などの醸造や発酵工業の高度な技術を背景にして、たちまち世界の先端をゆくようになった。

そして昭和二十八年（一九五三年）には、東京大学に創設された応用微生物研究所（以下「応微研」という）の酵素化学部門の教授を併任し、微生物の酵素による生合成の機構について研究指導をした。

この頃、赤堀博士は東大の応微研のほか併任として東大理学部化学科の教授でもあり、千葉大学薬学部の教授でもあった。

それから約五年間、毎月大阪の郊外にある芦屋の自宅から新幹線のない時代であったから国鉄（現在のJR）で八～十時間かけて上京し、東大の近くの宿に泊り、理学部化学科の学生の教育指導と研究に数日・応微研において数日研究に専念し、さらに時間を工夫して、味の素の会社の顧問として味の素の研究所に出向き、数日を過すという驚くべき多忙な毎日を送っていたのである。

これは博士が東北帝大の学生時代から大学院生の時代に味の素の会社を創設した二人の恩人にお世話になりこの暖かい援助に対するご恩返しだと言って、“自分はどんなに忙しくても味の素の研究所に行って、そこの研究の話を聞いて、それを助けることをしている。”と語っている。

したがって、応微研で赤堀博士の薫陶をうけた助教授や助手の方々は博士の奥深い指導力と常に報恩感謝の心を忘れない素晴しい人格に心服し、今でも尊敬と感謝の

気持ちで当時のことが思い出される。と言っている。

（つづく）

（註）動的生化学

生命を化学の見地から研究するにはまず生体を構成している物質の化学的組成や構造を明らかにし、ついで生体内に起こる化学変化を詳しくしらべなくてはならぬ。第一の生化学の部分を静的生化学・第二の生化学の部分を動的生化学という。（「生化学概論」による）

（参考資料）

赤堀四郎博士の大学教授歴（大阪大学以外）

一、東京大学応用微生物研究所
　併任教授（昭和28年～昭和33年）赤堀四郎
　助教授　丸尾文治（後に東大教授）
　助　手　野村眞康（現カリフォルニア大学教授）
　　三井宏美（後に新潟大学教授）

二、東京大学理学部化学科
　併任教授（昭和28年～昭和38年）赤堀四郎
　助教授　佐竹一夫（後に東京都立大学教授）
　助　手　田宮信雄（後に東北大学教授）

三、千葉大学薬学部
　併任教授（昭和29年～　）赤堀四郎

青の漂流（九）

宅見勝弘

九　与那国島（よなぐにじま）・百年目の真相（続き）

蒼の百歳の誕生日に、高山家の親族が集まった。その中に与那国島から来た、左京の従兄弟の孫にあたる高山信也が居た。

与那国島には左京の祖父が住んでいたということで、その子孫が代を継いでいたのである。

「実は、左京さんのお墓が与那国島に有るのです」

信也は蒼に高山左京の墓の秘密を明かした。左京が米比（アメリカ＝フィリピン）戦争で死んでから既に六十八年が経過していた。

「左京さんの遺言で、与那国島に住んでいた祖父に墓を依頼していました。祖父は左京さんとは従兄弟の関係にあります。遺言で墓を依頼された祖父も父も既に他界しており、私が引き継いでいました」

信也は、蒼にとって舅（しゅうと）にあたる左京の墓を伝えること

【前号までのあらすじ】

一八六九年（明治二年）、蝦夷地（北海道）白老の仙台藩元陣屋の近くのアイヌ集落で、アイヌ人夫婦と仙台藩士が斬殺された。その翌日、択捉島から帰還した支倉兵衛が現場に居合わせ、生き残ったアイヌの碧眼の幼女を保護した。幼女の手には犯人の物と思われる赤い花弁が残されていた。支倉は仙台に戻り、幼女を蒼と名付けて、育てた。成長した蒼は、両親の斬殺方法が生麦事件の殺害と同じ特異な剣術と気付いた。その後、蒼は結婚し、大津へ移った。大津で、ロシア帝国ニコライ皇太子が襲われる姿を目撃した。ニコライの碧眼が鮮血で覆われる姿に、蒼は白老の惨劇を連想した。ニコライ襲撃の犯人が西南戦争の官軍であったことから、白老の犯人が戊辰戦争の官軍ではないか、と連想した。その後、舅の高山左京が米比戦争の中、フィリピンで死亡した。蒼は長崎へ移り、安奈という女性と知り合った。安奈はロマノフ王朝の血を引き継いでいた。鹿児島へ移った蒼は、白老の花弁がハイビスカスとも呼ばれ、琉球の花・ハワイの花であることを知った。また、殺害の剣術が、野太刀自顕流の抜即斬であることを知ったのであった。その後、蒼は息子夫婦とともに沖縄に住むことになった。蒼と安奈は、一九四五年の沖縄戦に巻き込まれるが、奇跡的に助かった。戦後、二十二年が経過し、一九六七年（昭和四十二年）、蒼は百歳の誕生日を祝った。

の方が、七十年近く前の秘密を守ることより良いと判断したようであった。蒼の夫・京輔は左京の養子の中でも最も年長であったので、形式的に高山家の家督を継いでいた。

蒼にとっても、左京がなぜ墓の場所を教えないように遺言したのか、理解できなかった。

「実は、左京さんの手記が何冊か残されています。祖父も父も私も眼を通していません。左京さんの家督を継いだのが京輔さんなので、お返しすべきではないかと考えています」

「なぜ、私達にお墓や手記の存在を隠したのか理由は分かりません。しかし、私が生きている間に墓参りはしたいと思っています」

蒼は与那国島に左京の墓参りに訪れることに決めた。この機会を逃すと、年齢からも一生できないと考えたからである。

「私が島に帰る時に、ご案内しましょう」

信也が島に戻る時に同行して、蒼は与那国島に渡ることにした。

沖縄本島からは飛行機で与那国空港へ渡った。与那国空港は一九五七年（昭和三十二年）に民間の飛行機が利用できるようになっていた。

信也によると、それまでは船で沖縄本島との間を往来していたということであった。

与那国島は日本最西端の島である。

空港から信也の車で彼の自宅まで送られた。その後、荷物だけを置いて、車で墓地に向った。

蒼は歩けたが、年齢を気遣われて車椅子を用意されていた。

「今日は晴れているので、台湾が見えますよ」

信也が案内をしながら、説明した。

この島は台湾からは僅か百キロ程度の距離で、肉眼でも確認できる時がある。

それに対して、沖縄本島からは約六百キロ離れている。六百キロは、沖縄と鹿児島との間に等しい。なお、東京・大阪間が約四百キロである。

与那国島からの直線距離でみれば、フィリピン領の北の諸島も沖縄本島とあまり変わらない。

もともと与那国島は、十六世紀に琉球王朝に支配されるまで、女首長による独立国だったという話であった。

蒼は墓参りに行く途中で小中学校を見かけた。

島の人口は二千人程であったが、台湾が日本領であった時は、貿易の中継点で人口も二万人いたこともあったという。

信也が岬の方角を二人に指差した。

「あそこが西崎（いりざき）です。日本最西端の場所になります」

蒼は最西端の場所へ来て、深い感慨に耽っていた。

日本最西端であるが、『日本国最西端之地』の碑は、

この後の一九八〇年（昭和五十五年）に建てられるのである。少し離れた場所に灯台が建っていた。

最北の択捉島から来た支倉が自分を救ったことと、最西端の与那国島に居ることも全て運命のように感じた。

随分と小さいお墓であると、蒼は率直に思った。

左京の墓は、与那国島の中でも西崎の近くにあった。事業家として財をなした者の墓としては貧弱な印象を受けた。左京自身の意志で、小さい墓にしたようであった。

蒼は霊前に供える花を用意していた。しかし、既に墓に着いてみると、墓はハイビスカスの花に囲まれていた。

蒼は運命に操られているように感じていた。

「与那国島には、高山左京さんの従兄妹の子孫が代々住んでいまして、私もその一人です。その人達の墓もこちらにあります」

蒼と安奈は墓参りを終えると、信也の家に泊めてもらった。そこで左京の手記を見せて貰った。

左京はフィリピンに渡る前に、財産を整理していたが、同時に自らの手記を与那国島の親戚に託していたのである。

「手記は二種類あります。一部は左京さん個人に関する手記で、もう一部は左京さんの父親からその祖先について記述されています」

手記は二十冊ほどで、古いものは百年以上も前に書かれたものであり、破れたり汚れたりしていた。

漢文調の文語体であり、しかも草書の様な崩した字体だったので、簡単には読めなかった。

大量の手記を読むのは時間がかかりそうであったが、蒼は心に引っ掛った。

「この手記は全部頂いてよろしいですか」

「もちろん結構ですよ。前に言った通り、もともと本来は京輔さんの方でお持ちになるものでしょうから」

蒼は時間がかかっても、左京の手記を読もうと思った。

蒼と安奈は信也の家に一泊して、翌日に飛行機で沖縄市の自宅に戻った。

自分も知らない秘密が手記に書かれていると感じた。

年齢相応に視力も衰えてきたので、蒼は安奈の助けを借りて、読み進めていた。

フィリピンで左京が戦死したことも、永年の疑問であった。

左京個人の手記については、フィリピンに渡航する直前の記述で終わっていた。

左京はアメリカ＝フィリピン戦争で戦死したので、フィリピン渡航後にも記録を付けていても、それは失われていた。

判読できる部分から読み進めて、左京の生涯が少しずつ分かってきた。

左京がフィリピン渡航前の経緯についても、その手記に記述されていた。

フィリピンと関係を持ったのは、一八八八年（明治二十一年）二月で、『フィリピン独立の父』ホセ＝リサールが東京に亡命した時であった。蒼が左京と会った年の前年である。

鹿鳴館で伊達（陸奥）正春が海江田信義との言い争いに左京が割って入ったことを蒼は思い出した。

ホセ＝リサールが在日一ヶ月でヨーロッパへ亡命したので、フィリピンとの関係は深まらなかった。

その十年後に、横浜に駐在していたフィリピン駐日大使のポンセが日本に独立の協力を求めた。左京は犬養毅・孫文たちと共にフィリピン独立を支援しようとした。

三井物産から船を雇って、フィリピンに兵器を送る画策をしたが、船は台風で上海沖にて沈没した。

左京はフィリピンに渡り、アメリカ＝フィリピン米比戦争に巻き込まれてマニラで死亡したのである。

「なぜ左京さんがフィリピンに命を掛けたのか、左京さんの真意を知りたい」

蒼は彼の手記を読み進めた。

左京は、鹿児島の下加治屋町の下級武士の高山文蔵の長男として生まれ育った。下加治屋町では西郷隆盛・大久保利通たちの下で薩摩独特の郷中という教育機関で学んだ。

野太刀自顕流の道場で、同い年の海江田信義や奈良原喜左衛門たちと技を競い、剣術はかなり上達していたようであった。

生麦事件の時は大名行列の一員として松方正義たちと一緒に居て、イギリス人への危害には加わろうとした。

薩英戦争では、西瓜売り決死隊として、大山巌らと行動を共にした。

その戦争でイギリス軍の砲弾が鹿児島の市街地まで撃ちこまれ、妻と一人息子を失った。

「ここに碧眼と書いている」

蒼が手記を素早く捲っていると、『碧眼』という字を見付けた。自分が碧眼だったから、気付いたのである。

明治二十二年（一八八九年）二月の部分であった。

「この字は鹿鳴館かしら」

蒼はその少し前の部分に『鹿鳴館』という文字が読み取れた。これも蒼が七十八年前の明治二十二年に高山左京と初めて会ったので、見付けることが出来た。

一八八九年に鹿鳴館で陸奥（伊達）正春が海江田信義に対して騒ぎを起こそうとして、高山左京たちに止められたのであった。

この事件の後に、左京の養子である京輔と蒼が結婚したのであった。

手記の鹿鳴館での記述で蒼のことを書いた部分で『白老』の文字が出てきた。

「鹿鳴館ではお義父様が、私を白老の出身と知る筈が無いのに」

白老の文字を見付けて、蒼は不思議な思いがした。

数日後の記述で、白老で蒼が救われた話を、蒼の養父の支倉兵衛から直接に左京が聞いたとあった。しかし、鹿鳴館で会った時に白老が出る筈が無かった。

「明治二年の手記は有るかしら」

蒼は明治二年の手記を探した。安奈が見付けて、蒼に差し渡した。

蒼は左京の手記を読み進めていたが、『碧眼の女児』という文字が飛び込んできた。

日付を見ると、白老で蒼の両親が斬殺された時である。手記の前の記述を見ると『五稜郭』『白老』の文字が現れた。

「『碧眼の女児』は私のことだわ」

自分自身を指すことをと蒼は確信した。

手記は『賊軍ヲ追走』など簡単に記されていたが、左京の行動が読み取れた。

蒼は手記の前の部分を読んで、左京の足跡を辿ってみた。明治維新前後の高山左京の行動が分かってきた。

黒田清隆が陸軍参謀として総指揮をとっていた朝廷軍の一員として、左京は箱館の五稜郭の戦いに従軍した。

幕府軍の榎本武揚が降伏する直前に、二百名程の幕府側の兵が逃亡していた。

逃亡兵が新政権の禍根とならないようにと思い、左京は数名を引き連れて、蝦夷地の奥地まで逃亡兵を追っていった。

翌日に落ち合う場所を決めて、左京は仲間と別れて、左京は一人で追跡をした。左京は、逃亡先として仙台藩が陣屋を設けていた白老を疑い、向ったのである。

白老元陣屋には誰も居なかったので、アイヌ集落に行ったところ幕府軍の残兵を見つけた。

相手は仙台藩士の三好慎吾と名乗ったが、先の五稜郭の戦いの敗残兵ではなかった。

三好は、蝦夷共和国が出来る前の最初に朝廷軍が幕府軍から五稜郭を奪った時に、五稜郭から来た幕府軍の武士であった。

三好は択捉島の警備を終えた後、白老を経て、五稜郭に勤めていたという。

五稜郭は元々が江戸幕府の機関であるものを、鳥羽・伏見の戦いが勃発すると同時に、朝廷軍が占拠した。

その後、江戸城にいた榎本武揚たちが蝦夷地に渡り、五稜郭を取り戻した。その後、五稜郭の戦いで黒田清隆が率いる朝廷軍が幕府軍から再び奪い返したのである。

朝廷軍が五稜郭を占拠した後、白老の仙台藩元陣屋へ向けて四百名の兵で攻めようとしていた。白老には百二十名しか兵が居ないので、三好は五稜郭から白老元陣屋へ朝廷軍の攻撃を告げ、また自ら戦おうとしたのであった。

三好は白老元陣屋まで着いたところで、朝廷軍に襲われ深い傷を負った。その後、近くに住むアイヌの若い夫婦に助けられて、養生していたという。

左京は、戊辰戦争で朝廷軍が幕府軍を破り、江戸幕府が崩壊したと説明した。

もともと蝦夷地に隠れて新政府への反乱をするようであれば、残党狩りとして取り締まるつもりであった。左京としては、三好が新政府に恭順を示せば、危害を加えるつもりもなかった。

しかし、三好は幕府軍が降伏したことに納得しなかった。そして、三好は自分に重傷を負わせた朝廷軍の兵士に左京の姿を重ねたようで、左京に憎悪の感情を抱いた。突然、三好が左京に向かって、斬りかかって来た。

左京は自ら刀を抜かずに、三好の攻撃から避けていた。追いつめられた左京は、止むを得ず野太刀自顕流の『抜即斬』で応戦して、三好を殺害した。

その時、左京の左肩に矢が突き刺さった。矢が飛んでいた方向を見ると、アイヌが弓を構えていた。

二人が争う様子を見ていたアイヌが、三好に加勢したようであった。

矢には矢毒が塗られていたようで、意識が混濁してきた。

矢を抜いて、傷口を刀で抉ったが、そのまま三好の上に倒れこんだ。

左京は矢の攻撃から逃れようとして、近くの小屋を目指して這うようにして向った。その際に、三好の刀を奪って、杖代わりにした。

その小屋は、矢を射ったアイヌの家のようだった。小屋の中で、赤ん坊を見つけた。

その赤ん坊の碧眼を見た瞬間から、正常な意識が失われてしまった。

我に返った時は、アイヌの斧を持って大きく振りかぶって、赤ん坊を斬り殺そうとしていたところであった。

赤ん坊の碧眼は鮮血で覆われて、真っ赤になっていた。鮮血は、自分を矢で射ったアイヌの男の首筋から噴出していた。

アイヌの男の遺体には深く斬り付けたために抜けなくなった刀も、左京の眼に入った。

記憶には無かったが、傷口から抜即斬で斬った跡で有ることから、自らが犯した殺人であることは明らかであった。

凶器は、三好から奪った日本刀であることにも気付いた。正気の戻った左京は、その刀が柾目肌の名刀であることも分かった。

もう一人のアイヌの女性にも抜即斬による傷口が残っていた。これも無意識の内に自分が斬殺したことに間違いなかった。

最初に自らの刀で三好を殺害した後、アイヌの矢に射

られて、自分の刀を落したのであった。無意識の内に三好の刀を奪ったのであった。

その三好の刀で碧眼の幼児を殺そうとした。幼児を守ろうとしたアイヌの母親を抜即斬で殺した。その後にアイヌの父親を殺したと理解した。

左京は自分の行為が恐ろしくなり、その場を逃げるように立ち去った。

その時に、常に肌身に話さないで持ち続けていたハイビスカスの花弁の押花を落としてしまった。

左京は自分で残虐な行為をした意識はなかったし、自分の行為が理解できなかった。

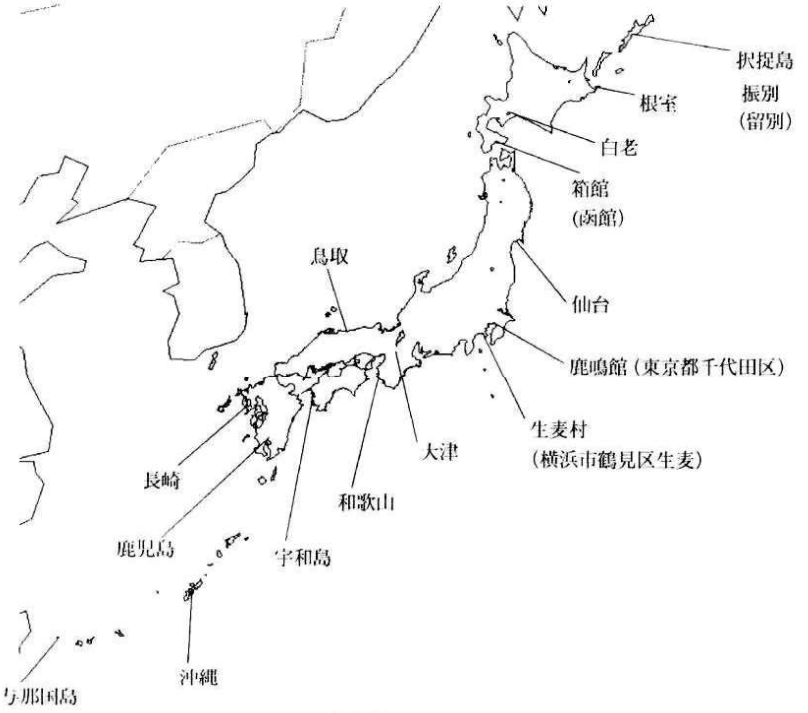
肩に刺さった矢の毒が、神経に影響を与えていたようであった。

自分が異常な殺意を抱き、錯乱していたのは、赤ん坊の碧眼を見てから、その碧眼が血で覆われるまでであった。

以降の左京の手記には、悔悟や懺悔の言葉が綴られていた。

「白老の犯人は、お義父様だった」

実の両親を殺した犯人は、夫の父親である高山左京であることに蒼は気付いたのであった。白老の事件から百年近い年月が経過していた。



れんししゅう(恋詩集)しさくのかなしみより その八

松下壽男

電話

私は議論は嫌いです
紙の上でやるだけです
—あなたの口調は議論のようね
わたし何だか恐ろしい—

もっと現実を考えて
あなた自身のしあわせを
—ですからわたしできません
あなたはとても強引ね—

もしも電話でなかったら
あなたはきこえぬふりをして
私は窓を見るふりをして

硝子に映る二人の姿に
現実が息をひそめるひとときを
みつめることもできただろう

悲しいアメリカ —プラグマティズムの研究を通して—その三

松下壽男

私たちは、日々考えながら生きています。その意味で私たちは、日常的な哲学者です。では私たちの日常の常識の哲学とは、どのようなものなのでしょうか。

私は、世間一般の現代日本人の常識の背後にある哲学を、プラグマティズムだと考え、その哲学と正対することを試みています。

そしてプラグマティズムとの正対を通して、現代の常識と、私自身が受け継いでいる日本人の伝統的な哲学との関わりについても考えてみたいと思うのです。

1898〜二つの流れとプラグマティズム

パースは経験論の常識を受け継いでいました。それは積み重ねられた経験が示す原理は、人には証明できないがゆえに真理だと考える常識です。

それは、実験によって人は積極的に真理を証明できるという実証主義の考え方とは、一線を画しています。

しかしジェームズが思想運動として広めたプラグマティズムは、実用主義であり、真理を実際の効果によって判定しようと考えます。人の行動に効果をもたらすものが真理と判定されるのです。ジェームズのプラグマティズムは、経験論の常識よりも実証主義の確信に立つものでした。

もはやプラグマティズムにとっては、人の行動に効果をもたらすものが真理です。効果をもたらすものならば、いかなる方法も技術も真理です。そこには、真理というものを方法や技術と同列に扱う真理観がありますが、その真理観は、意識の対象はすべて物であり、科学技術の

扱う問題であり、科学技術の方法に照らして実証されたものは真理であるというデカルトの物心二元論が用意していたのです。

イギリスの経験論の流れを汲んでいたプラグマティズムは、その実証主義を推し進めるうちに、現象をデカルト的に考えるようになっていました。

経験論と実証主義の間の狭くて深い溝を、プラグマティズムは、平気で乗り越えてしまったようです。

しかも、明晰判明な真理観に立つことなく、有用性の観点から真理を考えました。

その真理観は、神の存在証明も反省も必要としない、現代の大衆社会の常識に沿った真理観でした。

それは、もはやフロンティアを天の恵みとはとらえられず、人の技術力の実験場としてしかとらえることのできない人々の真理観でした。

プラグマティズムを背景に持つ大衆社会の常識は、デカルトの物心二元論の大衆化とも言えそうです。それは物心二元論といいながら実は物質主義なのです。

そして人の行動に効果をもたらす技術力が、人々の物質生活を豊かにし、画一化し大衆化していくのです。

1931～1935プラグマティズム流の常識と哲学

プラグマティズムの創始者パースの哲学は難解です。無尽蔵の世界から未知の真理を探り当てるアブダクションという技術を明らかにする理路はきわめて困難なものなのでした。

後にジェームズの弟子のデューイは、仮説演繹法という、演繹法と帰納法のそれぞれのよさを生かしたような探求法を編み出しましたが、それと比べれば、パースのアブダクションは、帰納によらずに仮説を探り当てる途方もない技術と言えるでしょう。そのことを考えると、その哲学が難解なのも当然でしょう。またパースは、プラグマティズムの真理が科学的真理として通用するのかという問題についても研究を深めました。科学哲学です。パースの後も、プラグマティズムは、科学や哲学の命題について分析的な哲学を必要としました。それもまた難解な哲学でした。

一方、大衆の一員となった主体「我」は、行動の判断基準に難解さを求めようとはしませんでした。大衆社会は、常識の背後に物心二元論の物質主義に偏ったプラグマティズムの哲学をもち、その常識の正しさや善さを探求する本来の哲学を、哲学者や宗教家という代理人に任せたのです。

1893プラグマティズムとテクノロジー

意識の対象は、すべて物質的な現象で、科学技術の扱う問題であるという考え方は、デカルトの遺産です。その物心二元論の考え方の正しさは、テクノロジー（工業技術）による近代文明の発達が実証していると、プラグマティズム流の常識は考えます。

大衆が代理人に任せたのは、哲学ばかりではありません。物に関わる科学や技術は、発達すればするほど常識から掛け離れていきます。例えば自動車のエンジンが動く原理の熱力学や、自動車工学の技術は、常識の域を超えています。科学や技術のことは、代理人に任せているのです。しかも、だからこそ、自動車の運転が、だれでもできる常識になっているのです。

意識の対象は、すべて現象で、科学技術者の扱う問題であり、その真理性や道徳性は哲学者や宗教家の扱う問題であり、彼ら代理人の仕事を道具のように扱うことによって目的を達成するものだという常識は、物心二元論の大衆化だといえるでしょう。

テクノロジーの対象が、人の心に関わるものにまで及んでいることは、エジソンの発明品を見てもわかります。映画や蓄音機は人の心を動かす技術です。しかも工業によって大量生産され、大衆の心を動かします。

映画を鑑賞している時、人の見ているのは映像に過ぎません。しかし映画の世界を現実のように感じて一喜一憂します。現実の世界でも我々の目玉に映る映像は映画と変わりがないのではないか、ならば私たちが世界を知るということは、映画を映すのと同じことではないだろうかという思いが、哲学者でもない私たち大衆に生まれてきます。

実際、ルネサンス以来、カメラの技術は、人間が物を見るということを説明してきました。それで十分だと考えられてきました。確かに人間を機械と見れば納得です。それが大衆化された物心二元論です。

しかし、代理人である哲学者はそこから先を考えていきます。人間の目がカメラと同じというなら、そこに映る映像を見るのは何者だろう。それは心だろうか。でも物ではない心がどのようにして物の世界とつながりを持ち、物を見ることが出来るのだろう：それはやはり神の恵みでしょうか。

しかし人間主義の学問である科学は神を持ち出すことはしません。物と心の関係をあの手この手で探っていきます。心理学の発達です。

そしてプラグマティズムの心理学が登場します。

1919プラグマティズムと行動主義心理学

プラグマティズムは、行動主義という心理学を生みました。

それがどのような結果をもたらすかによって知識を定義しようというプラグマティズムは、心理学の領域では、刺激に対してどのような反応を示すかによって、心を理解しようとします。物→（心）→物の、入り口と出口の研究を通して、心を研究するのです。要するに心を物で

考察するのです。

しかもたくさんの実験を積み重ねて、実証科学として結論を出すのです。

したがって、大衆の行動の傾向から個人の心理を探るという図式が成立しており、その図式は、個人の心理は大衆の行動を反映するものだという先入観に説得力を与えるのに十分でしょう。

実験から明らかになった法則は世の中で応用されていきました。産業心理学、教育心理学、臨床心理学から、交通心理学、犯罪心理学といったものまで様々な領域は、現代人の生活全般を網羅しているといっても過言ではないでしょう。

日常生活に心理学が応用されることによって、人は人に対して（どんな刺激を与えればどんな反応を示すだろう）というような見方で接するようになりました。対人関係の規範が、慣習ではなく心理学にとってかわられるようになりました。そして、人の心は操作できる、操作されるべきだという考えが常識になりました。

心を、行動主義でとらえたり操作したりできる範囲に限って考えるようになった大衆は、行動主義の扱う欲求や欲望を中心に、心をとらえるようになりました。

行動主義の心理学が普及することによって、心を欲求や欲望を中心にとらえ、物のように操作できるものと考えるようになってきたのです。

欲求や欲望を心としてとらえても、その心は物心二元論の物の世界なのです。しかも自然や他者との関係を、単純に刺激と反応でとらえるのです。複雑な関係を含む社会全体の構成員という立場でとらえなければならない権利や義務といった事柄も、刺激と反応という単純な事柄としてとらえるようになってきたのです。

1936プラグマティズムと経済学

道徳哲学者アダム・スミスは、道徳哲学として「国富論」を書きました。それは、ほぼその一世紀前にニュートンが万有引力の理論書プリンキピアを自然哲学として書いたのと同様に、経験論の国イギリスの、とりわけスコットランドの流儀でした。そして国富論に書かれた経済学は、まさしく経世済民の学問でした。

アダム・スミスは、国富論で、労働の対価としての価格が、人為的ではあっても作為的ではない市場の原理によって適正に価値付けられることによって、品物と富が必要な人々に必要なだけ、過不足なく配分される原理を解き明かしました。

やがて経済学は、市場の原理だけでなく資本の原理に支配されることによって、富が適正に分配されない状況を明らかにしました。そしてマルクスは、市場の原理や資本の原理を打ち破る新しい制度を模索しました。

とはいえ、アメリカの経済は、フロンティアの存在や、

奴隷制度、豊富な資源、工業技術、四方に開かれた貿易相手国、そしてヨーロッパの戦争などに支えられて、破綻の危機を乗り越えながら、大きな成長を遂げていました。

特にアメリカの経済は、若々しい産業資本だけでなく、市民の株式投機に支えられていました。そして実業の世界では、労働価値よりも、希少価値や、効用価値が重んじられる傾向がありました。実業家は儲け話を探ることで忙しく、ビジネスマンという言葉がぴったりでした。

大衆化の時代の到来は、アメリカの経済活動の大衆化をもたらしました。大衆は、資本家や高利貸から搾取されるだけの存在ではなく、株式投機をしたり、クレジットやローンを組んだりして、経済活動の担い手にもなりました。こうしてアメリカンドリームの国の大衆の関心事は、どうすれば儲かるかという功利主義になりました。

大きな破綻もなく発展し、恐慌という局面を迎えたアメリカの経済は、新しい経済学を生み出しました。その経済学は、もはや市場や資本の原理を解明しようとはしません。むしろ、どのような要素にどのような働きかけをすれば、どのような効果がもたらされるかという、プラグマティズムの思考実験です。

1908プラグマティズムと道徳

そして本当に手の届かない理想へと、心の道徳は遠のいたのでした。その遠のいた道徳が大衆の道徳でした。大衆化とは身近な道徳性の忘却の道でした。

しかも大衆化した物心二元論は、科学も工学も道徳哲学も代理人に任せてしまい、人は、常識をもっていればいいと考えるのです。人任せにできるのは、経済や社会の機構が確立しているからですし、必要な情報はマスコミやジャーナリズムが与えてくれるからです。そして常識は、人任せの大衆社会を信用するものだと言うのです。

大衆社会は、実は、巨大な管理社会ではないかという疑念も起こります。大衆の心を操作する者がいるのではないかと。しかし三権分立に代表される民主政治の仕組みが正常に機能している限り、特定の人物が大衆を操作する事態はありません。さらに自由な経済活動と、ジャーナリズムが管理を阻んでいます。

そして、プラグマティズムが、政治家にも、役人にも、財閥にも、学者にも、農民にも、労働者にも共通したアメリカの常識の背景でした。

アメリカの歴史と風土の中で、豊かな生活を送る大衆は、アメリカン・ドリームの体現者と言えるでしょう。しかしそれは、夢を見続ける存在としてなのです。なぜなら、夢から覚めてしまえば、彼らの常識を支えているものが他人任せの科学や技術や道徳哲学だと気付くからです。

しかし、肝心なところを人任せにして自由な夢を見る

ことを主体的といえるでしょうか。

私は、プラグマティズムを背景とした大衆社会の一人一人を、個人や核家族という同じ大きさの殻の中に夢と共に閉じこもり、人任せにころころ転がるガシャポンのカプセルのように感じてならないのです。

1920～プラグマティズムと消費文化

経済が効用価値説を唱えるようになったとき、消費者である大衆はプラグマティストです。そして効用価値説を信じて疑わないビジネスマンもまた筋金入りのプラグマティストに違いありません。

プラグマティズムと消費文化とは、同義語なのかも知れません。

そして、消費文化と大衆文化はプラグマティカルに同義語なのです。

編集後記

九月十五日新聞各紙は「山中教授にラスカー賞」という記事を掲載した。これと相前後して伊治さんから日本人で最初にラスカー賞を受賞した花房秀三郎氏との交友関係を綴った一文が届けられた。文中には彼が亡くなる一週間前に偶然彼の自宅を訪問したことが述べられている。花房氏が伊治さんに対する最後の交友の礼を言いたくて、それが伊治さんを彼の枕もとに招いたのだと考えた。

話は変るが静岡県西部、かっては磐田郡光明村といったところが本田技研創業者・本田宗一郎の出生地である。彼は高等小学校を卒業して東京にでて自動車の修理工になるのだが、その時父親から三つの説教をくらう。

① なにをやろうと勝手だが、人に迷惑だけはかけるな。

② 大人になってもバクチだけはするな。あれは癖になる。麻薬と同じだ。

③ 時間を大切にせよ。時間を有効に使うかムダにするかで人生は決まる。人間は生まれながらにして、いろいろな格差を背負っている。家が貧しくて学校にいけない。食べ盛りにろくな物も食えない。金持ちの子でも病弱だというような、数多の相違点がある。そんななかで唯一、平等なのが時間である。おまえには学歴も金もないが、健康な体と時間があるのではないか。これをおおいに活用しろ。という内容で、これは三戸岡さんの「黒いバス」と見事に繋がっていると愚考した。

113号から島津さんの「天智・天武両帝に愛された額田王」太田さんの「誠忠の茶園」が、114号から堀内さんの「家康と凧狂いの右近」が始りました。何れも今後の展開が楽しみな作品揃いです。

(T・N)

まんじ第114号

平成21年11月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　中　山　喬　央（なかやま　たかひろ）
事務局長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）

（事務局）　〒223-0056　横浜市港北区新吉田東五丁目76-35　太田善朗方
TEL・FAX 045（544）5947
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
（印刷製本）　日東印刷株式会社
〒142-0054　東京都品川区西中延2-15-16

表紙の絵について
「反芻してこそ知恵になる」　　田寺怜葦（たでられい）画